テンプレ勇者100人召喚

人春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テンプレ勇者１００人召喚

【Ｎコード】
Ｎ１３８０Ｔ

【作者名】
人春

【あらすじ】
テンプレ勇者多数異世界召喚モノです。主人公はＶＲゲームのキャラボディでＴＳ。男↓女のＴＳ主人公が徐々に内面まで女の子になって、男に惹かれていく過程が書きたくて書きました。※ＴＳ女×男性の生温い関係が苦手な方はブラウザバック推奨。尚、前半にテンプレ主人公達をフルボッコにします

時村さま　画　挿し絵まとめ（ＮＥＷ）

時村　さま
に描いて頂いた挿し絵のまとめです

本編のネタバレを含みます。ご注意ください

砂糖を吐く、萌え狂う可能性があります

覚悟してください

スタートです

時村　さま画

＞i25572—3254＜

主人公、レティーシアです
この絵を見てから、作者のレティーシアいじめが生温くなりました

おのれ孔明…

初登場プロローグ２

＞ｉ２５５７３―３２５４＜

＞ｉ２６２２８―３２５４＜

俺のヒロイン（ぇ）大路　光さんです

ちなみに作者は鎧のデザインとかさっぱり考えてなかったす

顔の傷は子供のころお姉さんに殺られた、という裏設定があります

基本、年上の女性に苦手意識をもつろりこ…なんでもないです。

初登場「プロローグ終」

＞ｉ２５３８８―３２５４＜

星　伸一（オカマ。右）

阿部　孝治（少年。左）

です

星ちゃん映像化キッツイなっ！？

阿部が美少年で笑いました。あぼん

ハートマークに腹筋崩壊。ほんまに凶器やで

６、魔法練習中　内

＞ｉ２５１８０―３２５４＜

レティ、疑似告白シーンより

鼻血吹くよな？

細かい仕事に脱帽です

初登場　９、ギルドより

＞ｉ２７９２８―３２５４＜

リーデスさん

色が付いたよリーデスさん！

勝ったな！これは勝ったよ！

なろう内でＮＯ，１美熟女イラストを名乗っても許されるはずだよ

時村さん！

１６、道中にて　内

＞ｉ２５５３８―３２５４＜

もやもやレティ、＆のそのそおっさん

困るんだよ…本編よりにやにやさせられる絵をかかれるとさぁ…

おっさんの傷を忘れたそうですが、俺も忘れてたぜ（ぇ

初登場→プロローグ３

＞ｉ２５７５４―３２５４＜

笹田　次郎

何故書いたし

…何故書いたしっ！？

鬼畜眼鏡な笹田さん

…ちょっと好みのおっさんじゃないか！

殺したくなくなるじゃないか！

２２、媚薬服用後　より

＞ｉ２５８４９―３２５４＜

なんつーもんを…

なんつーもんを書いてくれてありがとう！

うん、鼻血足らそうぜ？
いんじゃね？たまには

２４、依存　より

＞ｉ２６０９７―３２５４＜

…っ、ぁ、
持ってかれた…っ！！
全てのインパクトを持ってかれた…っ！！
ま、負けないからな！負けないからな！

初登場　２２、媚薬服用後　より

＞ｉ２６３３６―３２５４＜

ラグナエイト

触手！触手！
触手！触手！
まぁたやってくれたな時村さん！
以下時村さんのセリフ
「いくらエイトたんが可愛いからって裸に剥こうとか考えるんじないぞ！
剥いた途端に巨大蛸との触手プレイが待ってるからな！」
その通りだけど…

ねっぷりたっぷり死ぬ寸前まで離して貰えないヤンデレなところを忘れてるぜ…

初登場　閑話　アレクサンドロ　より

＞ｉ２６３３９―３２５４＜

娼婦　ミリム

何故書いたし！？
何故書いたし！？
分からない！時村さまが分からない！

あ、でも可愛い…（ポッ）

く、（心を）持ってかれた…っ！！
この恋泥棒さんめっ！

初登場　２７、武力行使　ｓｉｄｅ：Ｏ
（閑話　その頃彼らは―Ａ）

＞ｉ２６４６６―３２５４＜

左：キング・オブ・リトマス

右：レームシルク

…やられたわー
心をやられたわー
ニヤニヤしながら何度も見に行っちゃうわ…
人春の脳ミソから引っ張りだして美化率２０００％増しって感じです

杖のデザイン半端ないです

…出番増やしてぇえぇあああぁあああああ…

３０、――触れた　より

＞ｉ２６６６７―３２５４＜

やってくれたぜヒィーハァーッ！！
なんて言ったら言いのか分からないリビドーがディストラクション！
負けられない！負けられない戦いが始まっている！

…甘さ増量するか

３３、Ｍｒ、ヒーロー　より

＞ｉ２６９４９―３２５４＜

さっすが時村さまやでぇ…
感想板での爆弾を期待されている仲、こんな渋いイラストを送ってきてくださるとは…
…惚れる！
それはともかくさりげなく後ろにアレクさんがｗｗｗ
…なんか芸の細かさ競いあってなイカ？

初登場　閑話　魔界四天王

＞ｉ２７０３５―３２５４＜

バーティナ
愛が…！
愛が溢れておる…！
浴衣に超気合い入ってる！まだたった一話しか登場していないのに…！！
これは…リオナアハトに食われた人気を奪い返すフラグ！
ちなみに男の娘デスヨ？（爆）

以上ですぅー

時村さまはたびたびやらかしてくれます

時に誰かが吐血ります

ありがとうございました！

７月２４日

ｂｙ　人春

時村さま　画　挿し絵まとめ（ＮＥＷ）（後書き）

挿し絵を頂く度に折りを見て更新しまする

檸檬紅茶　さま　画　挿し絵まとめ（ＮＥＷ）

檸檬紅茶（みてみんネーム：国産レモン・ティー）　さまに描いて頂いた挿し絵まとめです

本編のネタバレを含みます

ご注意ください

尚、萌心の耐久度が低い方はご遠慮ください。心臓が垂れるよ

では、スタートです

レティーシア・ブログ　内

＞ｉ２５０７９―３２５９＜

いちゃいちゃすんなごるぁ！

なつきはじめるレティ。テンプレならおっさん視点で物語を語るべきだって？

だが断る

初登場、８、ヴァンフォーレより

＞ｉ２５４４３―３２５９＜

屋台のおっちゃんことガンギルさん。

何故書いたしｗｗｗ

台詞もあまりないキャラです。でも好きだ！ナイスハゲ！ナイス筋肉！

８、ヴァンフォーレ内

＞ｉ２５４３８―３２５９＜

またまたイチャイチャしてる２人。この２人はどこまで行く？

でもまだ砂糖入れるよ。入れまくるよ

１１、魔女の屋敷　内

＞ｉ２５１７１―３２５９＜

因果応報

イチャイチャし過ぎて死にたくなったおっさん

もっと頑張れよ…

応援したくなるのは俺だけ？

初登場↓２２、媚薬服用後
＞ｉ２５８６３―３２５９＜

ミーラグリーズ。ラグナエイト

エイトたん！
わざわざ手も足もすっぽり服に隠れるように書き直して貰ったんだぜ！
爪とか歯は触手じゃ再現できないから絶対に見せないエイトたんですよ！
実は色々エログロい設定詰め込んである変なしゃべり方の娘ですよ！

ありがとう！ありがとう！檸檬紅茶さま！

＞ｉ２５９８７―３２５９＜

更にロリィになったよ！
…そこまで難しいかな、エイトたんの口調（´・ω・、）

２６、花街　より

＞ｉ２６２０３―３２５９＜

一気に女の子させすぎたかなぁと反省
おっさんを攻めるあたりはまだ男っぽいのになぁ…

初登場　２９、同時刻―丘の上

＞ｉ２６６７７―３２５９＜

ケルドゥ・ガナル
ヤンデレ木人魔族のあの子ですよ！
一人称「わし」なのにまだ１０代な罠。魔族チーム基本的に若いのだ！
わざわざ塗ってもらっちゃいました！
やっぱり木人はこの色ですよ！
ありがとうございましたっ！

初登場　３２、再開と初対面より

＞ｉ２６８４１―３２５９＜

ナルクトール！
クマが目立たないのが残念過ぎる！
残念美少女。どこが残念って全体的に残念
多分極まってくると「フヒヒャハ…」とか笑い出すはず…ｗｗｗ

本当に！本当にありがとうございます！

人春の幸せ指数が未だかつてない上昇を見せております

ありがとうございました！

７月０６日

人春

わた　さま　挿し絵まとめ

わた　さま　画の挿し絵まとめですよー

アレクさんフィーバーだから真面目に腹筋注意

いやお前甘くみるなよ?
腹筋ヤバイからな?

では、行きます。言い忘れた。ネタバレ注意

１０、魔女の晩餐　内

＞ｉ２５７７７―３３６５＜

うん、エロ親父（笑）
そして酔いが醒めると↑の檸檬紅茶さまの鬱親父に繋がる罠ｗｗｗ

…イチャイチャすんなごるらぁ！
やんなら最後まで行かんかい！

２２、媚薬服用後　内

＞ｉ２６１１６―３３６５＜

触手でびたーん
何故ここだしｗｗｗ
…人春も濃いけど読者も濃いよな？な？

初登場　閑話　アレクサンドロ

＞ｉ２６２６２―３３６５＜

何　故　書　い　た　し　っ！！（爆）
その勇気に乾杯ｗｗｗ
やばいなぁアレクサン好きかもしれん…
映画版クレヨン○んちゃんの悪役みたいなキャラデザなのにｗｗｗ

２７、武力行使　ｓｉｄｅ，Ｏ

＞ｉ２６４８７―３３６５＜

あっはっはっはっ
あっはっはっはっはっ
あっはっはっはっ
…もしや俺は、リアクションを楽しみにされているっ！？

何を言えとっ！？
何が言えるとっ！？

言えるとしたらこれだけだ！
腹筋崩壊してくれてよくもありがとうっ！！

３０、同時刻，エロイカ西より

＞ｉ２６６９４―３３６５＜

ＨＥＮＴＡＩ　ＶＳ　ライダー

いいか？まだだぞ？まだだぞ？

まだまともだからな？

同、話内

＞ｉ２６７０７―３３６５＜

腹筋ブレイカーにも程が！！ｗｗｗｗ

イイ笑顔ｗｗｗｗ

めっちゃイイ笑顔ｗｗｗｗ

わたさんはもう「アレクサンドロの嫁」でｗｗｗｗ

本編より濃いってこれ絶対ｗｗｗｗ

閑話　ナルクトールより

＞ｉ２６８９９―３３６５＜

愛の差がｗｗｗ

激しすぎるｗｗｗ

アレクサンドロさんしっかりハート眼鏡になってるのにクロイワェ…
うーん、仕方ない。クロイワはそういうキャラで固定されてもうたし（笑）
芸細かいよわたさま！
さすがアレクさんの嫁！（笑）

初登場　２８、同時刻、丘の上

＞ｉ２６９０５―３３６５＜

フーリム

妖精さんまじ妖精さん！
無邪気で子猫サイズで弾が大好きな娘さんです
でも、弾よりよっぽど年上
この作品全体的に年寄りばっか。最年少…アルファ・スティグマ（８）かな？
１０代より２０歳以上のキャラのが多い件
…ま、いいか。どうせカオスやし（爆）
可愛いよ！この少女臭可愛いよ！

＞ｉ３３１４９―３３６５＜

アレクさんの遺影です

イェーイ！じゃありません遺影です

葬儀だけはしめやかに行いましょう。

こらそこの死体、脱ぐな

わたさまの勇気が腹筋＆ストマックブレイカー

君の胃は、腹筋は大丈夫だったかね！？

わたさま、本当にありがとうございました！

１１月１１日

人春

挿し絵　まとめ（ＮＥＷ）

七式　さま（ＮＥＷ）

Ｎｅｋｏ２ｔｒｓ　さま

吉岡　眞吾　さま

須和光輝　さま

ＡＫＩＸ　さま

黄昏　さま

に描いて頂いた挿し絵まとめです

本編内のネタバレを含みます

ご注意ください

尚、鼻血噴出ゲージに問題を抱える方はご遠慮ください

萌え転がったり腹筋崩壊したりする可能性があります

では、スタートです

七式　さま画

8、ヴァンフォーレ内

＞ｉ２５５６９―３３３８＜

レティｗｉｔｈトラ（おっさん）

ほのぼの和む…柔らかい印象が素敵。多分おっさんはレティが落っこちないかヒヤヒヤしてるんだぜ？（笑）

２１、顛末　より

＞ｉ２５９６４―３３３８＜

何故？何故こんな場面を書いたし？ｗｗｗ

あれですか虎おっさんお気に入りですか（笑）

４３、王竜より

＞ｉ３０５０５―３３３８＜

イチャイチャしてんじゃねぇ！リア充爆発しろー！

芸が…細かくなってる…！？

ぼろぼろですレティ。強制セクハラ作者でなんかごめん

Ｎｅｋｏ２ｔｒｓ　さま　画

初登場→プロローグ３

＞ｉ２５８１７―３２５０＜

笹田次郎
若いｗｗｗ
若いｗｗｗ
きっと１０数年前の笹田さんだ
なんという鬼畜眼鏡ｗｗｗ
ってかこの人なら充分主人公になれる。うん。そんな顔だ
…悔しいでもびくんびくん！

吉岡　眞吾　さま　画

＞ｉ２５８６８―３１４７＜

いやもう、ほんとに…
ありがとう、としか言いよう無いデス
芸がすげー細かいんですよ
弓が氷属性なアレだったり…

わりとテキトーに作った「虎飛竜」シリーズとかちゃんと描いてくれたりね？

ほんとありがとうございました！

初登場　閑話その頃彼らは－Ｂ

＞ｉ２６５９６―３１４７＜

アルファ・スティグマ

アルたんキターッ！！
しかもこれ、細かいデザイン設定されてるんだぜ！
詳しくはみてみんの吉岡さんのページへＧＯ！
こんな可愛い娘が虐★殺しない訳がないっ！！
胸が熱くなるぜ…
っちゅうかアルたんのデザインはほぼ吉岡さんに丸投げた件。ごめんなさい

初登場　１７、スライム（？）　より

＞ｉ２８３９１―３１４７＜

マノメ・ユージロー

何故かいたしｗｗｗ
合ってるけど！イメージ合ってるけど！ｗｗｗ

誰得？ｗｗｗいいのよこの子は虐げられ属性なんだから書かなくてｗｗｗ

初登場　その頃彼らは－Ａ

＞ｉ２８３９７―３１４７＜

クイーン・オブ・ファルガナ

正直に言っていいか？
人春は吉岡　眞吾さんを舐めてた
ファルガナさんはほとんど指定してません。伝〇伝の剣士さんみたいな形でぇ～って言っただけ
そしたらなんじゃあ→こりゃあ→
そりゃ人気回復するわと！
そりゃ人気回復するわと！
こんな美人さんが嫌われキャラなはずがない！

―――

＞ｉ２８３９０―３１４７＜

ラグナエイト・ピンナップ
５０００ゲイル。
財布に入れとくと触手系美少女に遭遇したとき可愛がってもらえる。
ただし腹上死を覚悟せよ

モンスターのピンナップは多々ある（らしい）が、ラグナエイトピンナップのレア度は高い（らしい）
あと吉岡さんの愛で作られてる

須和光輝　さま画

＞ｉ２６８９８―３４７８＜

何故に笹田さんだしｗｗｗ
こんな美麗イラストなのに笹田さんとかｗｗｗ
さっすが須和さん！シビアコっす！
俺にはできないことを平然とやってのける！（爆）

３４、想い、届けて　より

＞ｉ２７０８６―３４７８＜

――これは…悶える…！
レティが大人になりはじめたってことですね分かります
…実は手にちゅーとかは予定になかった件
なんか勝手にレティがちゅーしやがったＹＯ！

なし

＞ｉ２７２７２―３４７８＜

★ちゃんとアベーですよ！
★ちゃんになって尚カマ言葉…。この顔を見るとマジで残念。なんでカマにしたし自分
最近ちょっとプロローグ改訂したい自分がいてショック

ＡＫＩＸ　さま

＞ｉ２７８５６―３２５０＜

レティーシア

…イラスト描ける方が切実に羨ましい…！
シャーペン画なんで…なんてＡＫＩＸさまは仰ってましたが、十分凄いよ！
…イラストの勉強したほうが良かったのかしらん？

黄昏さま

＞ｉ２８９５９―３２５０＜

レティーシア＆大路光
光さん若いよ！
しかしこの身長差だとまんま親子な件ｗｗｗ
やーい光さんのロリコーンｗｗｗ

３４、想い、届けて　より

＞ｉ２８９５８―３２５０＜

…やはりこのシーン、人気である
物語の転機だもんなー。人気だよなー
この話からようやくレティーシアが１人で歩く覚悟を決めたもんなぁ…
っつかうじうじしすぎよレティちゃん

萌え殺して手のひらでごろんごろん転がす気なんだ！

助けて皆！本当にありがとうございましたっ！！

８月９日
人春

投稿板（前書き）

＞ｉ２６６４０―３３６８＜

レティーシア（以下、レ）：この板のコメントは俺たち作中キャラクターが担当します！エルフでちっこい緑色なレティーシアです！

大路　光（以下、お）：別に作者の手抜きじゃねーぞ。そっぽ向いてる鎧の獣人の大路だ

星　伸一（以下、☆）：スパンコール入りの衣装って高いのよ？右端のオカマ、ホシちゃんでぇーす

阿部　孝治（以下、ア）：ネタバレだけど幽霊の阿倍　孝治だ！伸一に肩つかまれてるやつでな？足がねぇーんだ

リーデス（以下、リ）：ハゲ親父に抱きついてる魔女、リーデスよ。ちなみに５７歳、ハゲ親父は旦那のガンギル、反対側は娘のカリオラよ

ラグナエイト（以下、エ）：あた

ユージロー（以下、ユ）：無駄に長台詞やから禁止なー？中身触手な白い女の子がラグナエイトで、それにびたーんされとるんが俺ことユージローいいます。よろしゅうな！

笹田　次郎（以下、サ）：…ふ、ふふ…二重の意味で故人の笹田次郎、右上です

アレクサンドロ（以下、H）：左端の虹色アフロ、HENTAI筆頭アレクサンドロだゼ。よロシくな

レ：ちらほら知らない人がいるんだけど？

お：アレクサンドロに抱き着いてるのが娼婦のミルム、上で飛んでるライダーが一文字　弾、ちっこい虫が妖精のフーリム。黒いガキが魔族王、リトマス。で、赤いガキがその恋人のレームシルクだな

レ：斧の娘は？

お：さぁ…

アルファ・スティグマ：わたし、アルファ。
…ぼーそーしたひとを、ころすのが、このいたでのおしごとです
よろしくおねがい、します

エイフライ　さま　画

＞ｉ２６１６２―３４０６＜

リ：あら可愛い

レ：たんまたんま俺こんな風に見えてんの！？嘘んっ！？

リ：あら、獣人くんにあわせて、ってことじゃないの？

エ：長文禁止された件どうするあたし。どうでもいいのなすんまそん。猫耳エルフとか属性多すぎどこの層狙うのですかなそこのあなた

レ：お、俺のせいじゃねーし！

＞ｉ２６４６０―３３７９＜

レ：シリーズ化してるぅーっ！？

サ：全くですねぇ。実はこう見えて猫好きでして

レ：何故お前らがここに…

サ：ら、ですか？私以外に誰かい…る…？

H：ＯＨ～…食べちゃイタいくらい可愛いゼェ

サ：失礼、大事な商談が

H：逃がサねぇ。やらないか

サ：やりませんっ！やりませんよ私はっ！来るな！近寄るな！

レ：…本編で酷いことするからそういう目にあうんだよ…

サ：ごめんなさい！反省します！だから助けっ！！

＞ｉ２６８２４―３３７９＜

エ：…

ユ：え、エイトが黙っとる…やと…！？

ア：こわっ！？なんかこわっ！？

エ：んにゃんにゃ大したことじゃないわけですがあたし頭の中に人間サイズの眼球ない件どうする。片目ウィンクするには脳味噌辺りに触手通すがこれグロ注意ですかどうでしょう。イラスト再現のためにも身体を張るかタコボディな触手系美少女の偉大なる挑戦とか応援しますな？

ユ：恐いわ！はみ出とる！はみ出とる！耳から触手はみ出とる！

＞ｉ２６８２２―３３７９＜

レ：ギャー！また来…ってあれ？普通？

お：ギャーはねぇだろギャーは…

レ：え、だっ、だって…えぇっ！？俺が悪い流れ！？

七式　さま　画

？

＞ｉ２６１６１―３３６８＜

ユ：＜●＞＜●＞

お：な、なんだよその目は…

☆：というか目、あったのねぇ…？

ア：…うらやましね。憎しみで人が殺せたら…

ユ：腐れリア充が…。やってもらっとってこの顔はなんやねん…

ア：耳モゲロ

ユ：チ○コモゲロ

☆：あらあら、じゃあお仲間なっちゃう？楽しいわよぉ？

お：：勘弁してくれ

＞ｉ２６１６０―３３６８＜

ア：当ててるんですね分かります

ユ：気持ちええんかっ！？ああっ！？レティたんのちっぱい気持ちええんかああっ！？

お：知るかボケッ！

エ：気持ちよかった。思わず口数減るほどに。もっかいやったら駄目ですか駄目ですねサーセン

複数：え

＞ｉ２６５２７―３３６８＜

レ：お、おっさ…

お：いや大丈夫だから！確かに恐いけどな！？

エ：泣かした泣かした残念ですよなトラーさん残念ですよな。男として女の子泣かしていいわベッドの中だけ痛い痛い痛くないけど空

気よんで痛いと言うのなアイアンクロー

お‥下ネタはやめろ…！！

エ‥サーセン。頭押されると目玉出るからやめてほしいのですが無理ですかぶちゅるりはみ出るぞトラーさん。目玉出すとお腹減る。犯したくなる

お‥こぇえよ…

＞ｉ２７０１２―３３６８＜

複数‥…

レ、お‥な、なんだよ…

複数‥…ごちそうさまです

レ、お‥な、なんだよー！？

レ‥いいじゃん！両想いになったんだし！ちょっとくらいいいじゃん！

お‥頼むから黙ってくれマジで！

＞ｉ２７０１３―３３６８＜

レ：…むぅ、携帯だと見れないぃ～…

お：パソコン推奨ってことだな。ネカフェ行くぞネカフェ

エ：そしてエロ画像集めるのですよなわかります。男の欲望分かります

レ：あ、大丈夫。俺、理解あるし

お：やめてくんない！？事実無根の罪でからかうのやめてくんない！？

投稿板（後書き）

投稿板２に続く

投稿板２（ＮＥＷ）（前書き）

続きですー

腹筋崩壊注意ね？

投稿板２（ＮＥＷ）

わた　さま

＞ｉ２６２６１―３３６５＜

レ：意外と隠れないんだよね、耳

リ：女性なら身嗜みには気を使いなさい

レ：元男なのにぃ…

リ：『元』でしょう？おいでなさい。やってあげるわ

レ：い、いいよ！恥ずかしいよ！

わた　さま画

＞ｉ２６４８６―３３６５＜

レ：え、なに？これなに？どゆこと？

お：…

レ：え、なんで黙んの？

ユ：もうやめたってぇ…。トＬＯＶＥルさんが不憫すぎるねん…

レ：え、なに？コスプレ？

お：ちげぇよ！

わた　さま　画

＞ｉ２６４８８―３３６５＜

複数：ギャーッ！？

エ：これはナイスポーズと言わざるを得ないセクシーさ。脛毛がじょりじょりですないいですな。男のみりきは脛毛に宿るよというあたしはショタコンでロリコンですが犯罪でしたかごめーんね

Ｈ：動揺ネェか…。残念ダゼ…

レ：あんたら何の勝負してんだよ…

＞ｉ２６５８６―３３６５＜

レ：リーデスさんが無表情で石化したーっ！！

☆：し、しっかりして孝治くん！良く見てよ！可愛いじゃない！可愛いわよ！？

お：眼科行ってこい！雄二郎！？そっちは！？

ユ：大丈夫や！エイトには見れへんようにした！

H：…そこマデ酷いカ？可愛くネ？可愛クね？

サ：ソウデスネ、カワイイデスネ。ステキデスヨ

レ：ササダがこの板限定でかわいそうなことに！？

＞ｉ２７０２７―３４７７＜

複数：…

サ：…なん、ですか？

エ：サーセン。記憶ないです

サ：私も、記憶にございません

レ：…無かった方向で

複数：無かった方向で！

レ：この板でならお前許せる

サ：事実無根です！妄想です！冤罪です

＞ｉ２７３６７―３４７７＜

？：これについては、おおくはかたりません。だまってクリックしなさい

☆：命令系はやめなさいっ!?…にしてもいいわねぇ。ほのぼの。本編でもこのくらい…

Ｈ：無理ジャね?魔王倒すマデ無理じゃネ?

☆：そうなのよねぇ…

？：…とても、こゆいふたりがならんでしまいました。ツッコミいれるべき…?

タケブ　さま　画

＞ｉ２６７７３―３４７７＜

レ：濃いな

お：濃いな

リ：濃いわね

エ：…っ、っ、このカッコよさは思わず手のないお手てで拍手しなきゃいけないレベル！鍛え上げた男の太股をあえて装甲でチラリズムエロティカルダメージですよなこの絶妙なだ

？：つっこみ、はいりまーす

レ：ああ…ラグナエイトが潰れた蛸みたいに…

投稿板2（ＮＥＷ）（後書き）

まさかの投稿板分裂か

胸熱だけどどうする俺ェ…

プロローグ　1（前書き）

まずは主人公達をフルボッコ

辛い過去→ポッなどはありませんが、苦手な方はプロローグを飛ばす事をおすすめします

プロローグ　1

「ただいまー」

誰もいない家に俺の声が響き、何とも言えない寂しさとか悲しさが胸の内から溢れてくる。

それに溜め息を吐きながら電気を点け、買ってきたコンビニ弁当をレンジに入れた

温めている間にパソコンのスイッチを入れ、嵌まっているＶＲＲＰＧの攻略サイトをチェック。…お。あのボス復活したんだ。んじゃお呼びがかかるだろう

温まったコンビニ弁当を胃袋に押し込み、風呂に入る。お楽しみは心配事全部片付けてからやりたい。最早日課と化した作業を終えてから、俺は今日も電脳世界の住人となる

ヘルメットみたいなコントローラーを頭に被せる。キャラ選択画面で選ぶのは、もう一人の俺

とはいっても、女の子なんだけどな

金色の綺麗な髪を肩口で切り揃えた、赤い眼をしたちょっと垂れ目の美少女

ホットパンツから伸びる細い足を革のブーツに納め、あさぎ色の振り袖みたいな服の上から金属製の胸当てを付けている。体つきは全体的に華奢で、胸もそれほど大きくはない。そして、特徴的な尖っ

た耳と、背中に背負った近代的な意匠の弓が目立つ

ステータスにこう書かれている

【レティーシア】

性別：♀

種族：エルフ（グルタク枝族）

年齢：１６

レベル：９８

ジョブ：プリーストＬＶ１０

サブジョブ：シューターＬＶ１０　マギカＬＶ５

…まぁ、自慢ではないが。俺はこのゲームではかなりの古参だ

しかもサポートジョブで高レベルプレイヤーというのは珍しい方で、ゲームの中では大人気だ

と、いうのもこのＶＲゲーム…『ガナスタ・クエスタ』。サポート職は本当にサポートしか出来ないのだ。特に俺が選んだプリーストは回復系呪文や味方のステータス上昇系の術が唯一使える職業である代わりに、防御力は紙、筋力や体力を上げるのに通常の二倍のスキルポイントが必要という面倒な職業だ。更に呪文を自力で記憶して一語一句間違え無しに唱えられようにならないといけないという

面倒くささ。代わりに、魔力と器用さに補正がかかる

他にもシューターなら弓や魔法銃といった遠距離武器を装備出来るが、身軽にならなきゃならないため装備品に制限がかかる。更にこいつには筋力と運に制限。代わりに速さと器用さが上がるがな

マギカは魔法使い職だ。やっぱり防御力は紙。その代わりに広範囲殲滅が可能な属性魔法が使える。呪文詠唱を全部覚えなきゃならないのが不人気だが。こいつはプリーストと同じく筋力と体力に制限がかかる。代わりに魔力と器用さが上がりやすくなる

だったら最初からウォーリアーやナイトを選んだ方が楽しいし、楽なのだ。何よりせっかくのＶＲなんだから自分で剣を振りたい、という人間が多い

ちなみにスキルポイントはその名前の通りスキルを取得するために必要なポイントで、レベルアップでしか手に入らない

筋力が低いと防御力が高い防具は装備出来ないし、勿論強い武器も装備出来ない。だからソロではまずレベルアップが出来ないという問題がある

そこで俺は最初姫プレイに徹した

姫プレイとは高レベルプレイヤーにレベル上げを手伝ってもらったり、強い武器防具を貰ったり、といった所謂寄生プレイのことだ

ヘタレと言うなかれ

ちゃんと仕事はした。誰だってむさいオッサンより可愛い女の子に

回復してもらったほうが嬉しいはずだ

実際喜ばれたし、俺の女の子演技はかなり上昇した

…まぁ、ＶＲゲームということで色々犠牲は多かったがな。胸揉まれたりスカート（初期装備はスカートだったのだ）捲られたり

そしてレベル１０に達し、サブジョブでシューターを取得してからは早かった

紙装甲なら近づかなきゃいいのだ

ひたすら遠距離でちくちくと。ちくちくちくちくと。足の遅い敵を狙ってちくちくと。地道にレベルアップを重ねていった

そうして時に仲間と、時にソロで狩りを続けて約１年

中距離で弓を使って援護しつつ、前衛にブーストを飛ばし、サブジョブ【マギカ】で得た高速詠唱で傷付いた仲間を癒し、弓術のラストスキル（超必殺技みたいなモノだ）で敵を殲滅する人気アイドルプレイヤー、レティーシアはレベルカンスト目前です

…ちなみに、中の人が男だとバレたことは無かったり

…軽く鬱だ

それはともかく。やっぱり例のボス討伐の召集が掛かっていた。しかもラッキーなことに、強い前衛のいるチームから。レティーシアの装甲は昔から紙同然だから、前衛が弱いと意外とあっさり死ぬ。そして死ぬと所持金半分。経験値半分、結構痛い

「これは行かざるを得ない！」

妙なハイテンションでいつも通りにログインして

「…へ？」

まったく知らない場所に出た

埃っぽいどこかの広間だろうか？城系ダンジョンの地下室みたいな雰囲気。けれど壁には火の点いた蝋燭があって、足下には見たこともないデザインの魔方陣が描かれている

「…ぇ？なに？どこここ？」

慌ててステータス表示。…うん。問題ない。次、マップ表示。…ｎｏｔ　ｆｏｕｎｄ？データに無いってこと？隠しダンジョン…ってか隠しイベント？

「…スキル・索敵」

シューターのスキルで周囲を探る。…どうやら結構な人数がいるらしい。生体反応がおよそ１００。敵性はなし。けど味方でもない、か。やっぱりマップも出ない

…ふむ

武器を構えてみる。背中の弓は【氷弓・ウズメ】。空気中の水分を

集めてほぼ無限に氷の矢を作れる、レア度ＳＳの装備だ。それが問題なく構えられるということは、街とかではないらしい

「…なんだこれ」

思わず素でリアクションしながら弓を背中に戻し、壁の蝋燭を取るために手を伸ばす。外が暗いとも限らない。松明に火を移さないと

「インベントリ、松明」

意識下から空間を開き、松明を取りだ――あつっ！？

「いっっ～っ！！！」

蝋燭から手を離し、バッと飛びすさる。…な、なんで熱いの！？背景でダメージを受けるな、ん…て…？

さぁ…と頭から血が下がる音を聞いた

「まさかっ！」

頭の中でログアウトボタンを連打する。…出来ない！　？

慌ててホットパンツの中に手を入れる。【入れられた】。ゲームのグラフィックスでしかない以上、触ったり、暖かさを感じることが出来たとしても、その下の下着は勿論、『その奥』を触ることだって出来ない。『ガナスタ・クエスタ』は全年齢ＶＲだし、他のＶＲだって１８禁規制に抵触するような行為はプロテクトがかかっているけれど、僕の手は何の問題もなくその部分に触れられた

「…これって、やっぱり」

かつて、ＶＲゲームの誕生以前に散々危惧された問題。色々な話が書籍化されたり、ネット小説になったりもした

「…デス・ゲーム…？」

…まさか自分にそんな奇妙なイベントがふりかかるだなんて…

はぁ、と大きな溜め息を吐きながら…俺は薄く笑った

俺の本体…というか身体がどうなっているか知らないが、正直リアルの俺は極々普通の一般人だった

けれど、『レティーシア』は違う

弓と回復の魔法が得意で、人間から見れば圧倒的な美少女で、色んな人から頼りにされる

毎日仕事と家の往復ばかりのつまらないリアルと、皆が俺に好意的に接してくれるレティーシア。どちらを選ぶのかと聞かれたら、そりゃレティーシアだろう

…まぁ、女の子になる。というのはかなり…いや、凄く抵抗はある。女の子になるということは、男性と…その、あれだ。そういう関係になりかねないのだから

「…いや、待てよ？確かガナスタ・クエスタではエルフには同性愛者が多いって設定だったし…行ける！」

そう思えば人生薔薇色じゃないか！

俺はあっさりリアルを捨てる覚悟を決める。さっき試して解ったが、基本的にＶＲのころと仕様は変わらないんだ。あとは徐々に慣れて行けばいいだろう。

そう考え、俺は意気揚々と蝋燭から直接松明に火を移す。そして、古ぼったい木の扉を開け、部屋を出て

「ひっ！？」

ぐりんっ、と

一斉にこっちを見た１００人近い男性の視線に耐えきれず、尻餅を付いた

「こ、今度は一体なんなのよ！？」

混乱しつつもきちんとレティーシアの口調で喋る自分が、軽く鬱だった

プロローグ　1（後書き）

読まなくても問題なし

ガナスタ・クエスタの設定は本編にあんまり関係ありません

『ガナスタ・クエスタ』

ステータス

名前：レティーシア

性別：♀

種族：エルフ（グルタク枝族）

年齢：１６

レベル：９８

ジョブ：プリーストＬＶ１０

サブジョブ：シューターＬＶ１０　マギカＬＶ５

ＨＰ：４３８（ＭＡＸ９９９＋スキル補正）

ＭＰ：９９９（ＭＡＸ９９９）

筋力：３８（ＭＡＸ９９）

体力：３１（ＭＡＸ９９）
魔力：９９（ＭＡＸ９９）
器用：９９（ＭＡＸ９９）
速さ：８６（ＭＡＸ９９）
運　：１１（ＭＡＸ９９）

スキル

回復呪文ＬＶＭＡＸ（全回復呪文解放）
強化呪文ＬＶＭＡＸ（全強化呪文解放）

弓術ＬＶＭＡＸ（弓攻撃ダメージに＋１００％）
索敵ＬＶ７（７０％の可能性で範囲内の敵味方判定）
銃術ＬＶ８（銃攻撃ダメージに＋８０％）
挑発ＬＶ５（敵の注意を５０％の確率で自分に向ける）
薬品調合ＬＶＭＡＸ（毒薬、あるいは薬品の調合を１００％成功させる）

ＭＰ自然回復＋ＬＶＭＡＸ（通常の二倍の速度でＭＰ回復）
魔法耐性ＬＶＭＡＸ（無属性以外の魔法のダメージを半減）
高速詠唱ＬＶ９（詠唱時間９割減）

弓術ラストスキル
範囲内の敵に無属性超威力攻撃

回復ラストスキル
範囲内の味方の状態異常、戦闘不能、ＨＰを全回復

強化呪文ラストスキル

範囲内の味方の全ステータスを5段階上昇

装備

メイン武器：氷弓　ウズメ（レア度ＳＳ。弓。氷属性。弾数無限。
※使用不能フィールド有り。重量１５）

サブ武器：魔弾　ミストラル（レア度ＳＳＳ。魔銃。無属性。ＭＰ
消費で弾丸精製。重量７）

防具：

頭：ミスリルリボン（魔法耐性。重量３）

胴：虎飛竜の胸当て（回避率上昇。重量１０）

腕：虎飛竜の革籠手（回避率上昇。重量５）

腰：魔銃ホルスター（サブ武器に魔銃を装備可能。重量２）

脚：閃光のブーツ（移動速度上昇。重量６）

アクセサリ１：虎飛竜のマント（回避率上昇。重量６）

アクセサリ２：賢狼の衣（魔法耐性。重量８）

攻撃系スキルは一切なし。ソロ時はちくちく削るか強化して耐えつつ弓術ラストスキルの発動条件を揃えるまで粘る

ちなみにガナスタ・クエスタのトッププレイヤーの平均ＨＰは１５００オーバーなため、本当に紙装甲

サブジョブの【マギカ】は高速詠唱と魔法耐性のために取ったジョブなため、攻撃魔法すら覚えていない

好きな武器は弓だが、その実所持してる武器の中で一番強い武器は銃。レベルがカンストしてから最強クラスの弓を探しに行くつもりだった

尚、インベントリ内にはさまざまな武器防具が入っているものの、筋力が低いためにインベントリ内から引きずり出せない物も多々ある

注：インベントリ
プレイヤーに支給される意識下の倉庫。取り出しの際は専用のポーチに手を突っ込み、頑張って引きずり出す。無機物しか入らない

注：エルフ
魔力と器用さに生まれつきステータス補正がかかる
枝族によって補正がやや異なる
グルタク枝族の場合は魔力と器用さの他に、僅かながら速さが上がる

他にも人間、ゴーブリ、ドワーフ、セイレーン、ドラゴノイド等多数の種族があった

注
あくまで【筋力】や【体力】の制限に引っ掛かるのは装備品
消耗品などはインベントリ内に多数収納できる

ただしレティーシアは道具消費が激しいので、どこまでどんなアイテムが入っているかは分からない

注
レティーシアの中の人はスキルポイントは直ぐに割り振るタイプだったの既に残っていない
ちなみに1レベル上がるごとに3スキルポイントが手に入る
更に種族補正によりスキルポイントとは別にステータス上昇

注
筋力↓総装備重量に影響。近接武器の攻撃力に補正
体力↓総装備重量に影響。ＨＰ、物理防御力に補正
魔力↓ＭＰ補正。魔法攻撃力、魔法防御力に補正
器用↓遠距離武器攻撃力。一部近距離攻撃スキルに補正
速さ↓移動速度、攻撃速度に補正
運↓クリティカル補正。宝箱への遭遇率も変化

総装備重量↓体力＋筋力

注
氷弓　ウズメはクエスト報酬。魔弾　ミストラルは貰い物
運　　１１は伊達じゃない

中の人は何故ここまでレア武器が出ないのか首を捻ってた
攻略サイトにも乗っていない製作者サイドの悪戯

プロローグ2（前書き）

オリジナル作品は何気に初めてかも

プロローグは主人公をひたすら精神的に追い詰める話です。

プロローグ2

俺に突き刺さる視線視線視線。頭の天辺から足の指先まで舐めるような視線に背中がぞくぞくっと冷たくなる。小さく聞こえる「エルフ…？マジで異世界か…っ！？」とか「美少女キタ！間違いないってこれ異世界トリップだ！」とか「ロリ気味エルフとか…ギャルゲでもねーぞこんな設定…」とか、そんな声に更に嫌な予感が走る

見回してみれば、少し広い…学校の体育館とかそんな感じの広間になっていて、ちょっと遠くにステージがあり、周りの壁には大量の扉がある。恐らく、俺と同じように皆部屋の中で目覚めたんだろう

慌てて立ち上がり、いつでも弓を構えられるように立つ。こっちの警戒を悟ったのか、無遠慮に俺を観察していた視線が弱まった。それでも時折チラチラと向けられる視線がうっとおしい

背後をとられないように、弓を手に持ったまま背中を壁に付ける。ゲームでは囲まれたら終わりだ。今は敵対マーカーは付いてないが、こいつらがいつ俺を襲わないとも限らない。…まぁ、話を聞いた限りこいつらもトリップオリ主っぽいから、いきなり襲われることはないかもしれんが…周りが全員「人間」な中で、俺だけ「エルフ」ていうのは絶対に危険だ。嫌な予感がする。

…それを言ったら、周りが全員男の中、「レティーシア」が女であることも不安だがな

やけにどくん、どくん。と落ち着きなく跳ねる心臓に辟易していると、丁度俺の出てきた部屋の隣の扉が開かれた

のそり、と出てきたのは――っ！？

「ワータイガーっ！？何でこんなところにっ！？」

『ガナスタ』でも厄介なAランクモンスター。「ワータイガー」。人間よりも二回りもでかい、人型の虎。

素早い動きに高い攻撃力。防御力はそこまで高くないが、人間並のサイズしかないので矢が当たらず、倒しにくい。俺の天敵だ

慌てて弓を引いて氷の矢を作る。周りがざわついたが、それを無視してワータイガーの足を狙い、放つ！

「ギャアっ！？ってめ、いきなりなにす…ゆみぃ！？」

「…へ？」

からくもジャンプして叫ぶワータイガーだが、呆気に取られる。…喋った？モンスターが？…そ、そういえば敵性反応は無かったんだっけ？

「最近のガキは物騒だなこらっ…ってなんだこれ…氷の矢…？おいおいファンタジーじゃねーんだからやめてくれよ…」

呆れたように言うワータイガー。そうして腰の辺りを手でまさぐり…「あん？」と首を傾げた。

「…ぁ？…なんだこれ…全身毛だらけってレベルじゃねーぞおい…。俺の煙草は？スーツはどこにいったよ…？」

急にぶつぶついいながら身体をまさぐり出すワータイガー。…と、とりあえず敵じゃねーんだよな？違うんだよな？

「…ぁ、ぇ、と。すまん。敵かと思ったんだ」

とりあえず近付いてみるが、やっぱり敵性マーカーは出ない

「いやすまねーがちょっと放っておいてくんないマジで。うわよく見たらこのガキもファンタジーじゃんはっはーん。夢見てんじゃねーよ俺」

…こわっ

正直関わりたくない。すすす、と然り気無く距離を取り、逃げだ――ぐぇっ！？

マントを掴まれて首が絞まる。なんだこのワータイガーやっぱバトルのかよチクショウ！とか思いながら振り向きつつ弓を構え、氷の矢を生成――してみれば

「うぉ！？ちょっ、落ち着いて！」

とか言いながら慌てる肥満体型の少年がいた。

「…なんだお前。俺になんか用か？」

「お、俺っ娘…？見た目にそぐわないが、まぁ良し。いや、あんたこの世界のエルフだろ？説明してくれよ」

「はぁ？」

おいおい何勘違いしてくれちゃってんだコイツ。俺が呆れた視線を向けていたら、肥満体型の少年は眼鏡を押し上げ妙な笑みを浮かべた

「いやいやまぁ何となくは理解してるんですよ。あんたが俺たち呼び出したんだろ?何?世界を救うとか?魔王を倒すとか?俺たち…いや、俺に何して欲しいんだ?」

にやっ、と笑う少年にぞくっ、と背筋が凍る。…なんだコイツきもちわる!どんだけ自分に都合の良い妄想してやがんだ!?

いやまぁ、理屈は分かるぞ?周りが明らかに人間ばかりの中、唯一のエルフだ。それを言ったらさっきのワータイガーも怪しいが、そいつは壁に向かって頭を押し付けながらぶつぶつ考え事している。だから俺に話しかけてきたんだろうが…

「生憎だが、俺が知りたいくらいだ。あといい加減マントを放せ。撃つぞ」

「まぁったまたぁ。そういうのはいらないって。あ、名前教えてよ。僕、ドイ・ヨシヒロ。いや、ファンタジーならヨシヒロ・ドイかな?」

…うぜぇ。氷の矢をつがえ、そして放つ。ピッ、と少年…ドイの頬を切って石壁に突き刺さる矢

「ひっ…ひぃいいいいっ!?お、おま、お前…何するんだ!?なんてことするんだ!?訴えてやる!こ、こんなこと許されないんだからな!僕はこの…っ!お前が暴力を振るったことを忘れないからな!」

「うるさい」

こっちだって混乱してんだ。絡んでくるんじゃねぇ。壁際まで後退り、ピーチクパーチクわめいているドイを無視する。…しまった。さっき以上に視線が集まっている。目立ち過ぎたか

と、その時。

『やぁやぁ皆さん集まってくれてありがとう。丁度１００人、問題なく現状を現実だと理解したようだね』

先刻まで誰もいなかったステージ上に、美女が立っていた。…のだが、分からない。

美女だというのは理解出来る。だが、詳しい造形が分からない。髪色も肌の色も、何一つ分からない。理解出来ない。あまりの気持ち悪さに総毛立つ。更に恐怖を増長するのが、その美女に『味方』を示す水色のマーカーが付いていることだ

ざわざわとざわめく男たち、あと俺。それに満足そうに頷くと、美女は口を開く

『まず第一に。君たちが想像しているとおり、これは異世界トリップだ。ただし、君たちは死んでいない。が、生きてもいない。君たちの本体は普通に生活している。君たちは本体の魂をコピーし、相応の肉体を与えたコピーだ。故に、帰るところはない。それを覚えておいてほしい』

…なんだそれ

いや、確かに帰るつもりとか、こう…運命に反抗してやる！みたいな意思は無かったけど…

さすがにインパクトが大きかったらしく、呆然とする俺たち。それに構わず、美女は続ける

『次に、この世界の名はない。一応、エロゲーが原作の世界だったんだが…僕とは違う神様がチートオリ主を突っ込んだら訳の分からない世界になってしまってね。チートオリ主が侵入してくる前まで時間を巻き戻してやり直してるんだ。勿論チートオリ主の介入が無いように因果率を操作して、ね。そしたらその反動で【魔王】が産まれてしまったんだ。単刀直入に言うと、この【魔王】を倒してくれ』

…ん？なんだ？

さっきまでは何か妙な雰囲気だったのに…今は、明らかに喜んでいる？喜べるような状況じゃないだろ…？何でそんな気楽なんだ…？

『勿論ただの人間だった君たちに、チートオリ主レベルで強化された【魔王】を倒せるとは思えない。だから、この世界にはレベルアップシステムを設置、君たちの身体は深層心理で望む肉体に変えてある』

わっ、と群衆が沸く。…成る程な。俺がレティーシアになったのは、俺の理想がレティーシアだったから、という訳か

だが、待ったがかかった。さっきの肥満少年…ドイ少年だ

「ちょっと待て！僕の身体は全然変わってないぞ！銀髪赤目でイケメンなチートボディじゃない！」

『うん？そうなのかい？…ふむ。他に身体が変化していないのは何人いる？』

…ドイ少年、中二病か。生暖かい視線でドイを見ていたら、他にも手を上げる人間がチラホラ。…３０人くらいか？

『ああ、成る程。能力だけ付与、みたいな感じでの希望者がいただけだよ。…ふむ。完全に能力も肉体変化もなし、というのは数人だけだね。おいで』

美女が手を振る。ステージ上にいきなり出現する男たち。その中には、ドイ少年もいた

『…んー。まずは君か。…成る程。潜在能力が低すぎて、大きすぎる望みに身体が適合しないわけだ。女の子に囲まれてハーレム。勿論身体能力や魔力は最強クラス。で、不老不死か。オッケー』

オッケーなのかよ！？でもさりげに酷いこと言ってやがる！？と驚愕しながら美女を見る。

瞬間、目をキラキラと輝かせていたドイが

醜悪な、豚の化け物になった

…ぇ？

…は？

いや、何の…何の冗談だよ…？

ステージ上のドイ少年…だった化け物も、呆然と変わり果てた自分の手を見つめる

『無理矢理女の子を浚って孕ませることで有名な【オーク】。更にその最上位種で身体能力、魔力もけた外れに高い【キングオーク・エクステンド】。不死はともかく、不老だよ。君が望んだ姿だ。良かったね。レベルアップしてもクズにしかなれないだろう君が、いきなりトップクラスの勇者候補だ』

な…っ！？

余りにも酷すぎる物言いに、ドイ少年も頭に来たのだろう。「ぶぎぃぃいいいっ！！」と見た目相応の怒鳴り声を発しながら美女に掴みかかる。だが、美女が無造作に手を振る。すると…ドイ少年が…化け物が、消える

『暴れられても困るから、消えてもらった。次は君だね』

次々と、

ステージ上に呼び出された男たちが醜悪な化け物に姿を変えられていく

悲鳴を上げながら逃げ出した者も

なんの能力もいらないと泣いてすがった者も

お願いだから許してと助けを求めた者も

皆、変えられて、消された

胃から酸っぱいモノが込み上げてくる。もしかしたら…もしかしたら、俺も、レティーシアもあんな化け物に変えられてしまっていたかもしれないのか？

ぐらぐら揺れる頭。思考。そんなの関係ないとばかりに響く、美女の言葉

『よし、これで平等だ。これは前払いの報酬だ。自分が真に望む肉体。最高だろう？更に成功報酬としてどんな願いも叶えてくれる【奇跡】の使用権を3つ。つまりどんな願いでも三回だけ叶えられる権利だ。拒否権はない。頑張ってくれるね？』

「ふざけるな！」

怒鳴りながら、壇上に駆け上がる赤い外套に鋼色の髪を持つ青年

「俺にこの身体を与えたのは失敗だったな！邪神め！俺が退治してやるっ！投影・開（とれーす・お）…」

ぷしゃ、と

青年の身体から剣が生えた

ざぐざぐざぐざぐっ！と内側から次々生える剣に、驚愕し、絶望しながら…死んでいく青年。マーカーが、黒く染まる。死んだ。間違いなくあの青年が死んだ。目の前で起きた死に、リアルな人間の死

に…思考が停止した

『おいおい。君が望んだのはエミヤシロウの身体だろ？魔術使うのは毎回命懸け。リスクを消したなんて言ってないんだから、注意してくれ。勿論君たちもだ。せっかく用意した１００人、いや、残り９９人か。が自分の望んだ力によるリスクで死んでいくのは困る』

当然のことのように言いながら…美女は、手の一振りで青年の死体を消し去った

『まぁ、逃げてもいいよ。誰かが魔王を倒してくれればいい。それから、この城は君たちのために用意した修行場だ。地下には低レベルモンスターが無限に出てくるダンジョンがあるし、このステージの下の階には平均レベルの武器や食糧が大量に入ってる。勿論ダンジョンで死んだらやり直しなんか効かないし、大体1ヶ月でこの城はなくなっちゃうけど…チートボディはあげたんだ。しっかり修行して魔王を倒してくれ。あと聞きたいことがあったら…そうだな。そこの人。うんそいつ。そこの茶髪がアンサートーカー持ってるからそいつに聞いて。最初の部屋はプレゼントだ。君たちにもプライベートは必要だろうしね』

…やっと、気付いた

これは…異世界トリップなんかじゃない

『じゃ、頑張って。僕も観察してるからさ』

美女は、手を振りながら消えていく

これは…デス・ゲームなんかより趣味が悪い、

神様の、遊びだ

プロローグ2（後書き）

邪神さまバンザーイ

リスク含んでこその能力付与だよねぇ普通

現在出てきたテンプレ

↓かませ犬オリ主

↓ＶＲゲームキャラ憑依オリ主

↓ＥＭＩＹＡ

↓異世界召喚テンプレＴＳ

他にも代表的なテンプレってありますかねぇ？

ＥＸ１　身体の違い（前書き）

ＥＸと題名に付いている話は、この作品の目標

ＴＳ主人公について詳しく描写する、という話です

苦手な方は本気で苦手な話。

ＴＳ主人公についてライトな認識で居たい方はブラウザバック推奨です

ＥＸ１　身体の違い

９９人…いや、化け物に変えられた者を除けばもっと少なくなった人間たちが部屋に戻るまで、そう時間はかからなかった

俺も、何も考えたくなくて、すぐ部屋に入る。最初部屋から出たときは魔法陣と燭台しかない殺風景な部屋だったはずなのに、もう一度戻れば普通の、ベッドや机、絨毯の引かれた…『ガナスタ』の宿屋みたいな部屋だった

そのままベッドに倒れ込む。埃っぽい匂いと、どうしようないやるせなさに胸が締め付けられる

実質、俺たちはあの【美女】に従う以外に無いのだ

俺たちに力を与えたのがあの美女なら、俺たちを殺すことなんか容易いはず。そして、平凡な人生を歩んできた俺は…死にたくない

だから、魔王を倒し…あわよくば、【奇跡】とやらで美女からの解放を願うしかない。…そして…そうだなぁ、可愛い女の子ときゃっきゃっうふふと暮らせるよう頑張るしかないんだ

「…ははっ。そうだよ。頑張るしかないじゃん…」

…なんだ。俺、笑えんじゃん。大丈夫だ。幸い「レティーシア」は結構強いはず。というか、さっき広間に集まってたのは基本的に日本人だった。言語も日本語だったことを考えれば、チラホラいた人外染みた美形とかはあの美女のせいで身体が変化した日本人のはず。普通の暮らしをしていた日本人に、ＶＲとはいえ戦闘経験がある俺

が負ける可能性は低い

…やるしかない。とりあえず、身体に慣れることからだ。今も違和感は殆んど無いが、戦闘中に違和感なんか感じたら洒落にならないそこそこ広い部屋なので、軽く身体を動かしてみる。うん、ＶＲのころとかわらな…いたぁっ！？

「っぅ～っ！！」

か、髪が…髪が弓に引っ掛かった！超痛い！ＶＲには無かったから仕方ないかもしれないが…切るか？…いや。慣れだな。一応、纏めとけばどうにかなるだろ

鉢巻きのように巻いていたミスリルリボンで、ポニーテールに纏める。軽く弓を振って髪が絡まないのを確認しながら、一時間ほど動き続ける

…背中にじっとりとした汗。これもＶＲにはなかった。弓が滑るし、なんか妙に臭く感じる。嗅覚に優れたエルフ族だからなのか、それともレティーシアだからか…。おかしいなぁ、女の子の汗の匂いってわりと好きだったんだが…

とか考えながら弓を振り、矢を構える。という動作を繰り返していたら、つくん、とお腹の奥に軽い痛み

「…おしっこ」

…ＶＲにはなかったこと、その２だな。老廃物や排泄があるのを忘れて――っ！？

「うそっ！？うそうそうそうそっ！！」

じんわりと股間に広がる生暖かさ。慌ててトイレに走ろうとしたが、どんどんと水っぽい暖かさ広がり――ホットパンツから溢れて足を伝う

「～～～～～～っっっ！！！？？？」

必死で筋肉を動かし、どうにかそれが止まったのは――ほとんど小水を出し終えてからだった

呆然と、徐々に冷たくなるホットパンツと、足下の水溜まりを見ながら硬直する。まだ残っている尿を排泄させろと膀胱が訴えるが、俺は頭がぐちゃぐちゃでそれどころじゃなかった

そりゃ――そりゃ、男女で筋肉の使い方は違うだろうよ。女と男じゃ排泄器官の作りが違うんだ。おしっこの我慢の仕方だって違うのかもしれない

ぴちゃ、と水溜まりの中に水滴が落ちた

「ぅ…ぇ…」

止まらなかった

ボロボロ溢れ落ちる涙が、止まらなかった

甘く見てた

深く考えていなかった

男から、女になるということの辛さ

肉体が変わる、という恐怖

肉体の差異

全然、違うのだ

「ぅぁ…ぁぁ…ぁあああああああん…うぇえええええええん…っ！！」

子供のように、幼児のように、声を出して泣く。声も、涙も、止まらない。止められない。それが余計に辛くて、悲しくて、悔しくて、泣いた

泣いて、泣いて、泣いて――

気が付いた時には、眠っていた

「…ぅぁ」

床でそのまま眠ってしまったせいか、身体がぎしぎしいって痛い。おしっこの始末もしていなかったし、お風呂にも入ってない。全身に染みたおしっこと汗のせいで、酷い匂いだった

「…部屋に、シャワーがあって良かった」

のろのろと身体を起こし、汚れた服やマント、装備品ごとシャワールームに入る

「うわぁ…」

鏡を見た瞬間、悲鳴をあげたくなった

涙と鼻水と涎、さらにおしっこでぐちゃぐちゃになった顔。目元は真っ赤で腫れぼったい。全体的にむくんでいる。これが美少女と言われても信じられん

「ははっ…。おぉ、やっぱり笑えんじゃん、俺」

自嘲気味に笑う。幸い、現代日本と変わらないシャワールームだった。樹の浴槽と、触ったことのない妙に軽いシャワーノズル。水道もちゃんとなってるっぽい

服を脱ぎ、適当にシャワーで洗っていく。洗濯機は無かったから、手揉み洗いしか無いんだろう。自分の裸よりも、装備品のおしっこの匂いの方が気になった

あらかた水で洗って、弓と銃だけは慎重に洗っていく。革のホルスターもだ。変に擦って使えなくなったら堪らない。外側だけ塗らした布で慎重に拭いていく

そうして、洗った装備品をとりあえずインベントリに収納。熱いシャワーを頭から被った

白い肌を水滴が滑り落ちていく。瑞々しい肌は水滴を弾き、滑らかな肌はよりいっそう輝いた

…けど、意外となんも感じないもんだな

劣情は一切無かった。肉付きの薄い、ほんのり膨らんだ胸をおそるおそる揉んでみるが…うーん。くすぐったいだけだな。男の時と変わらん

つきん、と下腹部で痛み。…いや、尿意か。今度はしっかり我慢出来た。それに安堵しながら、手早く身体を洗う。石鹸とかはないから、お湯で流すだけだが。シャワーを終える

身体を用意してあった布（手拭いみたいなモノ。多分、タオルはないんだろう）で拭き、全裸のままトイレへ。…女の子は座ってするんだよな？

とりあえず、洋式のトイレに座る

…このまま出していいのか？飛び散らんのか？恐々しながらも用を足す。…きもちわるい。男の時はホースがあるからそのまま出せば良かったのに…

ぶるり、と震えながら用を足したが…ど、どうすりゃいいんだ？男なら振ればいいけど…あ、だから拭くのか。なるほどな

とりあえず先ほど身体を拭いた布で拭き取る。…ってかトイレ近すぎないか？いや、漏らした時に残った分かも…って

「…漏らした」

凹んだ。

凄い凹んだ。

とりあえず、インベントリ内からさっきの装備品を取り出す…と、何故か既に乾いていた。…もしかして一度インベントリ内にしまえばデフォルトの状態に戻るのか？正直助かった

やたらちっちゃいぴちっと締め付けてくるようなパンツにうんざりしながら、再び装備品を身に付けていく。…一応、ポニーのままにしておくか

「後は顔だが…」

再び鏡を見る。…さっきよかマシだが、やっぱり酷いな。…回復魔法でどうにかなるか？

「【癒し手よ。ヒール】」

本当はこれの１０倍くらい長いんだが、ようやくここまで短い詠唱で発動出来るようになった。…カンストしとれば無詠唱&銃術ラストスキルも使えたのに、と思うと悲しくなる

…あ、でも顔治った。むくみと腫れにも効くのか。凄いな回復魔法

「…はぁ」

ようやく一心地ついた

正直、まだ混乱は直ってないし、どうすりゃいいのか分かんないけど…この歳でお漏らし、なんつーもんを経験しちまうと、色々どうでも良くなるな

とりあえず、女の身体に慣れること。それから、あの美女からの解放だな。それだけが俺の望みっす。マジで。助けて神様

「あー、でもあの美女が神様っぽいんだよなぁ…」

頭を抱える。どうしようもねぇ。結局正攻法で行くしかねーじゃん

「となると自分の戦闘能力の確認だな」

地下にダンジョンあるらしいし。インベントリ内を確認。…んー。それなりに充実してるし、どうにかなるだろ。あの美女も修行用の低レベルモンスターばかりって言ってたし

うし！頑張るか！

と、気合いを入れたとき

コンコン、と扉をノックする音。嫌な予感が背筋を這い上がる

「…スキル：索敵」

成功。扉の前にいる存在のマーカー…赤。つまり、敵対マーカー

こんこん、と再びのノックの音。ごくり、と喉が鳴る。弓はインベントリにしまい、身体に隠すように魔銃を構える

「…ああ。今開ける。少し待て」

そう、口にした瞬間、

「ぷぎぃいいいいいっ！！」

雄叫びと共に破られる扉。――ドイ、か！？巨大な斧槍を右手一本で構えたドイ…だった豚の化け物が、扉をぶち破って無理矢理部屋に侵入してくる

彼は、泣いていた

ボロボロと涙を溢しながら――俺に、【八つ当たり】しに来たんだ

目に宿るのは獣欲と性欲。不満、不安、狂暴性。ちょっと中二病だったけど、普通の少年だったはずのドイ少年があっさりと少女…「レティーシア」に八つ当たりする、という選択肢を選んだことに、ショックを受けた

そして同時に、俺はドイ少年から見れば簡単に襲える獲物だと認識されたことが、ショックだった

男だった、俺が

男に――化け物に、獣欲の対象にされる

ショックを受けながらも、身体は動いた。ＭＰ変換。銃弾作成。デザート・イーグルに余計な装飾を付けたような魔銃――魔弾　ミストラルを両手で構え、照準をドイの足に合わせる。

撃った

音もなく放たれた魔力の弾丸は、あっさりとドイの膝を撃ち抜いた

「!?。!?!?」

膝の痛みにか、俺の反撃にか

驚愕しながら倒れこむドイ少年

その目は、怯え、驚愕、不安、負の感情をドロドロに煮詰めたような、濁った色をしていた

――恐い

ミストラルを構える。ドイ少年が慌てたように鼻を鳴らすが、それは言葉にならない。言葉の喋れない、元人間

必死に言い訳しているんだろう。武器すら手放し、「ふごふご」言いながら身振り手振りで俺じゃない、俺は悪くない。と言ったそぶりを見せるドイ少年。…既に膝の傷は治っている。それでも逃げ出さずに、ドイ少年は必死に言い訳を繰り返す

――その姿に、醜悪な化け物が――あの肥満体型の、普通の少年の

姿が、だぶる

ここで殺したら殺人なのか？

平和な日本に生まれ育った俺が、見た目が化け物に変わってしまったからって、普通の少年を殺すのか？

――無理、だ

ミストラルを下ろす。ドイ少年の目が、期待にキラキラ輝いた。…恐い

「…もういいよ、行け。次は殺すぞ」

嘘だけど。無理、だけど

ドイ少年は感極まったように、けれどあわてて部屋を出ていく

――俺は、殺す覚悟なんかない

そんなもん持つくらいなら、だったら、殺さない覚悟を持ちたい

殺さないで逃がして――また、襲われる覚悟を決めた方が、ずっとマシだ

凄く、恐いけど

気が付いたら、手が、銃が、かたかたと震えていた

EX1　身体の違い（後書き）

排泄器官の違いにいきなり適応出来る人間はあんまりいないよね

いきなりファンタジー世界に来て、見た目が化け物でも人間だった生き物殺せる人もいないよね

いきなりファンタジー世界に来て、見た目が化け物に変わったら自暴自棄にもなるよね

という話

ちなみにドイくんはレティーシアを探すために、

片っ端からドアをノック↓返答を確認↓男の声なら逃げる

という地道な作業を繰り返した可愛い子

今回のテンプレ

↓殺す覚悟（笑）

プロローグ3（前書き）

レティーシアの『中の人』は普通の人だから存外何も考えないで流されてます

冷静さは魔獣と戦い続けて最強クラスまで行った「レティーシア」からの影響

更に無意識の内に男→女になったことで、価値観が変化してます

例えば、平和で平穏な生活を送っていたはずの『中の人』が、ドイ少年（人間）相手に普通に威嚇射撃する辺り

女の子って覚悟決めると思い切りがいいよね

姉との喧嘩で階段から突き落とされた人春さんが通りますよ、と

プロローグ3

震える手をどうにか押さえつけ、大きく深呼吸する。大丈夫だ。俺は、レティーシアは大丈夫。

ミストラルをホルスターにしまい、弓を背負って部屋を出る。…多分、もうこの部屋には帰らない。扉が簡単に破れることが分かってしまった以上、危険だ。

先刻の襲撃でようやく理解した。

「男」の中に「女」がたった一人で取り残される危険性。

アレだけ派手に扉を破壊してドイ少年が入ってきたのに、誰も助けに来なかった

他の人間に余裕がないのもあるだろう。自分以外の面倒を見れないというの察せる

だが、「俺」が犯されるのを容認された、というのは…良い気分じゃなかった

破壊された扉を跨ぎながら外に出れば、数人いた男達に驚いたような顔をされた。それをじろりと睨めば、男達は慌てたように駆け寄ってきた

「だ、大丈夫だった？」

…心配してくれたのかもしれない。けれど、そのあまりにも「普通」な態度に、イラッとした

「…あのくらいの敵なら、殺さなくても撃退出来る」

「そ、そうなんだ…。良かった」

心底安堵したように、ニコッ、と微笑む男――っ！？

「【呪いよ去れ！ディスペル！】」

自分に【解呪】呪文を使いながら、拳を男の顔に叩き付ける。驚愕し、鼻を押さえながら尻餅をつく男

「な、なにを…！？」

だらだらと鼻血を溢しながら、焦ったように俺を見上げる男。その顔面を、靴底で蹴り抜いた

「こっちの台詞だ！いきなり【魅惑／チャーム】なんか使いやがって…もう少し遅かったら…」

ぞくっ、と背筋が凍る。ＶＲで状態異常、【魅惑】は相手に心酔し、味方を攻撃してしまうバッドステータスだった。…だが、今、この場で。大量の男と、たった１人の女／俺しかいない状況で、【魅惑】されたら…

考えれば考えるほど、吐き気がするほど気持ち悪い。それを指摘してみれば、男は意味が解らない、という顔をした

「ちゃ、ちゃーむ?何を言ってるんだ!?僕が何をしたって言うんだ!」

抗議の声をあげる男。その後ろから現れた茶髪の男が、その男の肩を軽く叩いた

「…お前、【ニコぽ】もちだからじゃねぇの?」

「…ぁ」

…にこぽ?なんかのスラングか?…あ、いや。聞いたことがあるな。確か微笑するだけで女の子を惚れさせるスキルだったか?…こわっ!

「…ふんっ」

鼻を鳴らし、男から離れる。ニコポだ?そんな能力持ちの近くにいてみろ。そいつが笑う度にディスペルとか洒落にならんぞ

「あ、ちょ、待てよ!勝手な行動すんな!」

だが、がし、と肩を捕まれ止められる。うろんげに振り向くと、茶髪の男が面倒くさそうに壇上を指差す

「あそこで保有スキルの確認と【称号】のチェックやってんだよ。ちゃんとヤれよな」

「…なに?」

称号?保有スキル?何を言ってるんだ?

「…ああ、そういやアンタはいなかったか。なんか下のダンジョン見に行った奴がいてさ、【冒険者カード】ってのを作らなきゃ入れないようになってんだよ。で、冒険者カードを作れば保有スキルと称号が分かる。保有スキルってのは身体が変わったお陰で手に入れた超能力みたいなもんで、称号ってのはステータスとかスキルに影響を与える…まぁやってみたほうが早いからやってみろよ」

…意外と世話好きなのか？馴れ馴れしく肩を抱いてくるのは気に入らないが、案内してくれるのは有りがたい。従っておくか

壇上に上がり、奇妙な台座の前に立つ。「この上で名前言えばカード出来るから」との説明に従い、名前を…

…どっちだ？本体か？レティーシアか？

いや、俺はレティーシアとして生きると決めたわけだし、レティーシアが正しいか

「…レティーシア」

呟くような声でも台座はキチンと反応し、目前に光が集まり――1枚のカードに変化する

『レティーシア』

称号：分析者

ＬＶ：１

保有スキル

弓術　銃術　回復魔法　強化魔法　インベントリ　錬金術

…錬金術？…いや、それよりＬＶ１？…でもステータスは変わってないし…？『ガナスタ』とこの世界のレベルは関係ないのか？

俺が首を捻っていると、茶髪の男が驚いたように声を上げ、俺の手からカードを奪う

「回復魔法っ！？」

ざわっ…と僅かに動揺が広がった。ちらほらいた男達がぞろぞろ集まってきて、俺のことを妙な目で見つめる

「笹田さん！笹田さーん！新しい称号とスキル！しかも汎用性高いっぽい！」

「っ！返せ！」

カードを取り返し、茶髪から距離を取る。弓をいつでも構えられるようにしながら睨み付けると、呆れたように肩を竦める茶髪

「んな警戒すんなよ…。ってか君もしかして日本人じゃなかったりする？」

…本当のことを、言うべきか？

…いや。やめとおく。正直…信用出来ない。さっきから俺を囲むみたいに動こうとする男たちも、俺を舐めるように見つめる茶髪の事も

「…ガナスタ、って世界から来た。この世界が異世界だってのは、

理解してる」

嘘ではない。レティーシアは『ガナスタ・クエスタ』の世界の住人だしな

「へぇ…」と面白いものを見るみたいに茶髪は俺を見て、違う茶髪ロン毛と、黒髪眼鏡を呼び出した

茶髪ロン毛はしばらく目を閉じると、

「…称号：分析者。冷静に物事を判断出来る者に与える称号。３０秒間対象を見つめることでステータスを確認できる。回復魔法。死亡以外の身体の損傷を治癒可能。この世界に回復魔法は存在しない。強化魔法。身体能力を向上。インベントリ。認識外空間内に広がる無限倉庫。錬金術。材料からあらゆるアイテムを作り出せる」

ぶつぶつ何か言い出した。…いや、俺のスキルの確認？…というか錬金術って薬品調合のことか？

すると、黒髪眼鏡は破顔しながら手を差し出した

「素晴らしい！貴女のような人がまだ地上にいたことを幸せに思います」

ニコニコと胡散臭い笑みを浮かべる黒髪眼鏡。…無言で弓を構えてみれば、慌てたように手をぶんぶん振った

「お待ちください！私は皆が幸せになれるように行動しているんです！貴女に危害をくわえるつもりはありません！どうか武器をお納めください」

ひたすら下手に出る黒髪眼鏡に、更に疑念が沸く。っつうか、怪しすぎる。恐すぎる

「私は笹田と申します。とりあえず、我ら勇者候補の中でも戦闘能力を持たない者たちのリーダーをさせていただいています」

ぺこり、と頭を下げる笹田。「こちら新妻」茶髪。「で、こっちが荒木」茶髪のロン毛

「今朝、目覚めてからすぐ全員のステータスをチェックしたのですが…、戦闘能力持ちはステータスをチェックするなり、武器や食料を準備して地下のダンジョンに潜り始めてしまいまして…」

…成る程な。だからさっきの索敵でもマーカーがほとんど出なかったのか

「それなのに我々が持つスキルは【ニコポ】や【ナデポ】。私なんかは【交渉上手】。あとは【アンサートーカー】や【鋼の錬金術師式錬金術】や、【ＤＱの魔法】、【ＦＦの魔法】などでして…。あの女性に貰った能力の中でも、まったく戦闘能力が無いスキルで、しかも、身体能力の向上などが一切無かったため、戦闘能力は一般人以下、そのせいで地下のダンジョンにも挑めない、というのが現状です」

…ん？いやいや待て待て。おかしいだろ

「…魔法？攻撃魔法を使えるなら、十分戦闘能力あるだろ」

「…魔力が無いのです。魔法は使えるようになっているようですが、

最初から【ＭＰ０】ではどうしようもなくて…」

…成る程な。抗議しても、あの美女は、「魔法は使える。君の願った通りにね。でも、君は魔力が欲しいとは願わなかっただろ？」と笑うのだろう。…くそっ、マジあの邪神最悪だ…っ！

大体数は１０人ちょっとか。これだけの数が、最初の特典を無駄にした。…憐れだ、といえば憐れだが…俺にはどうしようもない

「それが、俺にどんな関係がある」

こちとらドイ少年に襲われて気が立ってるんだ。この上で「だから可哀想な私たちの慰みモノになってください」とか言われたら逃げるぞ。俺は。全力で。手とか足とか撃ち抜きながら

「我々のレベル上げを、手伝って頂けませんか？」

「…？」

…意外と、まともな意見なのか？

「回復魔法があれば、怪我を恐れずにダンジョンに挑むことが出来ます。だから、お願いしますっ！手伝ってください！」

と、土下座する笹田。…ぅ、ぅぅ…ここまで頼まれると、手伝ってやらなきゃいけない気がす――ぅ？

＜分析完了＞

笹田　次郎

称号：交渉人

ＬＶ：１

保有スキル：洗脳　催眠術　淫夢　資金源

――せん、のう？

ざわっ…と肌が粟立った

俺を取り囲むように立つ男たち視線を向ける。――皆、ニマニマと、どこか期待したように口元を歪め――好色そうな目をしている

まるで、ドイ少年のように

俺を――獲物として見ている

「――嫌だ！！」

大声で怒鳴り付け、弓を引く。氷の矢を笹田に向ければ、面白いくらいに笹田も、周りの男たちも慌て出した

「な、なんですかっ！？ぼ、暴力反対で――」

「どけっ！！お前らみたいな奴らの仲間になんかならない！どけないと撃つ！脅しじゃないぞ！」

「も、もしかして人間嫌いだったりしますか？え、エルフですものね、ですが安心ください。最上級の扱いを約束しま」

「黙れ！どけっ！」

威嚇代わりに、笹田の頭頂部をかするように矢を放つ。狙い通りに薄くなりつつある笹田の髪を削り取った矢は、そのまま石の壁に突き刺さる

「し、仕方ありませんね。つ、続きはまた次回に…」

「次回なんか無い！」

逃げるように包囲から脱出する

こんな…こんな奴らばっかりなのか！？おかしいだろ！平和大国日本はどこにいったんだよ！？皆…皆、そういうことしか考えてないのか！？

「ぐすっ…」

溢れ出てきた涙を拭いながら、俺は広間を出て、地下のダンジョン

を目指した

プロローグ3（後書き）

主人公いじめ楽しいなぁ

でも早くプロローグ終わらせたい

というかおっさん出したいよおっさん

今回のテンプレ

↓腹黒い悪役（新妻）

↓洗脳系オリ主（笹田）

↓知力チート（荒木）

↓ニコポ

↓ナデポ

プロローグ４（前書き）

１００人の男を集めた時

５５人は善良な一般人で

２５人は素行が悪く

１０人は犯罪者

５人は同性愛者で

４人は下種で

１人は人殺し

→な感じで書いてます

プロローグ4

息を切らして走る。ガチャガチャと背中で暴れる弓に予想以上に体力を削られながら、広間の下の階――武器庫と食糧庫に駆け込む。幸い人がいなかったから、壁に手をついて休むことが出来た

「はぁ…はぁ…ぅっ…くぅぅ…」

ポロポロ溢れる涙が鬱陶しい。泣くな。泣くんじゃない。慣れろ。俺だって男だったころは道行く綺麗な女の子についついそういう視線向けてただろ?たまたま、俺しか女の子がいないから俺に集中してるだけで――なんて、割り切れない。悔しくて、悲しくて、切なくて、ボロボロ涙が溢れた

「うぅ…くそ…皆、死んじまえ…」

悪態を付きながら、涙は出るに任せて食糧庫から適当な食糧と水をインベントリに詰め込んでいく。『ガナスタ』はVR内で食事出来ないようになっていたから、消耗品に食糧は無いのだ。片っ端から入れていくのに、無くならない食糧品。主に乾物やチーズといった保存食で、飲み水は水かワインみたいだ。他にも折り畳み式の調理器具やナイフ、寝袋やテントまである。しかも取った分は自動で補充されてるっぽい

「…便利だな」

意外と、あの邪神も良心的…なわけないか。ため息を吐きながら大体を詰め終わる。絶対に1人では食いきれない量の干し肉や干し魚、チーズや乾パン。ワインに水。…チートだな、インベントリ。もし

かしたら俺が一番上手くあの邪神のシステムを使えてるんじゃないか？

「後は…」

武器庫を見てみる。大量の剣、斧、槍、斧槍、刀、弓、矢、木の杖…。防具も軽装鎧から全身甲冑までである。…細剣もあれば大剣もあるように、色んな種類があるが、やっぱそこまでいい武器は無い。だが、大量に矢があったのは助かる。【氷弓　ウズメ】は火山や砂漠地帯では水分が足りなくて使えないからな。片っ端からインベントリに入れていく。これもやっぱり自動で補充されるようだ

「…後は、と」

せっかくゲームシステムから解放されたんだ。一応、近接武器も装備しておくか。と、並べられていた大量の武器からレイピアを選び、手にと【装備できません】…る？

「…は？」

頭の中に鳴り響くブザー。…ゲームシステム引き継ぎかよっ！？じゃあ近接武器は装備出来ませんってかっ！？

「…マジか…」

正直、凹む。…ん？いや、待てよ？

「インベントリ：トゥルーフレイピア」

インベントリから出したレア度Ｂのレイピア。普通に握れば…【装

備を変更しますか?】と頭にメッセージが浮かぶ

…つまり、消耗品の矢とか食糧はともかく、装備品は『ガナスタ』の物じゃないと装備出来ないってことか…

…アレ?ヤバくね?大抵この手のラスボスって倒すためには専用の武器が必要な場合多いじゃん。詰んでね?

…いや、待て待て。ドイ少年――【キングオーク・エクステンド】だったか?アレには普通に攻撃が効いたんだ。まるっきり相手にならないとは限らない

トゥルーフレイピアをインベントリにしまう。リアルな話、スキルも無ければＶＲでも使ったことのない近接武器なんか脅し以外で使えるわけないだろうと思っていたけど…ちょっと凹む

涙を拭い、マントで乱暴に顔を拭く。更に回復魔法をかけて顔を見れるレベルに治してから、武器庫を出てさらに階段を下っていく

壁に【ダンジョン←】という注意書きがあって、何だか毒気を抜かれた

やがて、階段の最下層に降り立つ。目の前には、大きな扉。その脇にカードリーダーがあって、【冒険者カードを挿入してください】と書いてある。

「すぅ…はぁ…」

深く深呼吸し、カードを差し込む。【認証しました】と頭に声が響き、ゆっくりと扉が開いていく

…に、しても科学力…ってか技術力か？ほとんど現代日本レベルだな。あの武器群を見る限り、中世レベルだと思ってたんだが…。銃とか無かったし

そして、一歩踏み出して

「ぅぐ…っ！？」

むせかえる程の濃密な生臭さに、思わず口元を押さえる。なんだ！？この臭い…っ！？生臭さと鉄臭さに、肉が腐ったような悪臭に、汗や公衆便所の臭いを足したような…とにかく、吐き気を催す臭い

「い、一体何なんだ…！？」

マントで鼻を押さえて壁伝いに歩いていく。どうやらゲームによくあるようなダンジョンで、小さな部屋とそれを繋ぐ石壁で出来た細い通路で構成されているらしい。松明はいらないくらい明るい。どうやら天井そのものが光っているようだ。臭いは、奥から続いている

正直、部屋に引き返したい衝動に駆られながらも、索敵。…成功。大量に出る中立マーカー。そして無数に現れる黒い点――死亡マーカー

「…死体、残るのか」

ダンジョンっていうくらいだから、消えると思ってたんだがな…。ガナスタではモンスターを倒しても黒い煙になって消えるから、死臭がこんなに臭いとは想像すらしていなかった

ゆっくりと、マーカーに注意しながら通路を進んでいく。既に戦場だ。弓には既に矢を生成し、つがえてある。いつ奇襲が来ても対応出来るよう、神経を研ぎ澄ませる。大丈夫、ＶＲのころから狩りは何度もやっている。冷静になれ

じっとりと汗が滲む手で、弓を構え直す。かつてないほど緊張しながら通路を進んでいく。…どうやら、最初の小部屋に着いたらしい

「…ぅわっ…うぐ…」

地獄絵図、だった

小型の狼っぽいモンスターや、一般的なイメージに近い【ゴブリン】や【コボルト】。他にも白い兎のようなモンスターが、内臓や脳髄、血や中身をぶちまけて大量に転がっていた

込み上げてくる吐き気を堪える。…どうやら、生きてるモンスターはいないらしい。それに安堵しながら、小部屋の出口へ向かう。

がちゃ、と何か踏んだ

「ひぃっ！？」

視線を下に落とした瞬間、悲鳴を上げながら飛び退いていた

人間、だ

刀を持った人間が、頭をかち割られて死んでいた。すぐそばに血の付いた棍棒を持ったゴブリンの上半身があるから、こいつと引き分けになったのかもしれない。彼は、驚愕に目を見開き、まるで「何

故自分がこんなところで死ぬのか分からない。」そんな表情で絶命していた

…ごくり、と喉がなる

再び見るリアルな人間の死に、頭がくらくらした

「…っ…」

とりあえず、目を見開いたまま死んでいる青年の瞼に手をやり、目を閉じさせる。既に冷たくなった身体に、乾きかけても手にくっつくぬちゃりとした血液に、嫌悪感が沸いた。

でも、ありがとう

死にたくないんだ。俺は

元とはいえ、人間だった。だからドイ少年は見逃した

けど、襲ってくるモンスターを…『化け物』を殺さなかったら、死ぬ。それが、リアルに…現実として、肌で理解出来た

人間以外は、殺す。元人間以外は、殺す。どんなに恐くても、殺す。人間じゃないから殺してもいい、なんて言い訳はしない。けど、人間じゃないなら殺しても『恨まれない』。だから殺しても『大丈夫』

そう、自分に言い聞かせる。大丈夫。大丈夫。

俺は、『レティーシア』だから、大丈夫

『レティーシア』だから、殺せる

『人間』は『レティーシア』も殺したことないから難しいけど、モンスターなら『レティーシア』は殺せる

そう、殺せる

すぅ…、と妙な強張っていた全身がリラックスする。そうだ、レティーシアは自然体じゃないと。冷静に仲間のピンチを見定めて、弓で援護する。それが『レティーシア』だ

「…ありがとう。本当に」

死んだ刀使いに手を合わせて黙祷する。ありがとうございました。…本当に

本当なら埋葬とかしてやるべきなんだろうが、地面も石で出来たダンジョン内に埋葬するのは難しいし、わざわざ外に運び出すのは俺の…レティーシアの腕力じゃ不可能だ。だからすまん。何も出来ない

弓を構え直し、意識から死臭を外して通路へと進む。マーカーをチェックしても、敵対マーカーが全くない。どういうことだ？

と、その時

「うわぁあああああああっ！？助けてくれぇーっ！！」

「悲鳴…っ！？」

慌てて駆け出す。切羽詰まった渾身の悲鳴だった。間違いなく命が

危ない。心臓が止まってても意識さえ残っていれば回復魔法で治せるはず。助けられるなら助けなきゃいけない。レティーシアは回復職なのだから

直感を頼りに焦って走る。血の臭いがどんどん濃くなる。それに顔をしかめながら小部屋に飛び込んで――

「…ぇ？」

目に入った光景が信じられなくて、呆けた

人間が、人間を殺していた

「ヒャハハ！！やっぱモンスターよりぜェんぜん経験値になるじゃァないンですかァこれ！？」

笑いながら少年――少年、だろう。白い髪に赤い瞳の少年が、剣や斧を持った青年たちに手を触れる。悲鳴を上げながら全身から血を吹き出し、死んでいく青年

「ヒャハハッ！すっげ！マジすっげェ！『一方通行』様々だぜェ！！かーなァーりィ！レベル上がってンじゃねっ！？！最ッ高ォ！」

…俺は、それを呆然と見ていた

楽しそうに、ガタガタと震える青年たちを虐殺していく。全身から血を吹き出して死んでいく青年たち。即死だ。回復魔法なんか使う暇なんて無い

「ァン？…ヒャハッ！さっすが俺様！メインヒロイン登場ですかァ

？どうよ！すげェだろ！」

にやっ、と笑いながら、人間モンスター関係無しに築いた死体の山を誇らしげに俺に見せてくる少年

「お前は俺が守ってやンよ！ヒャハッ！俺は、最強だ！学園都市最強のレベル5だぜ！たかがモンスターごときにゃ負けねェッつの！ヒャハハっ！」

嬉しそうに、楽しそうに笑いながら近付いてくる少年。背中に背負った死体の山が、酷く非現実的で――俺には信じられなかった

「…ぁ…ぅ…」

血塗れの少年が近付いてくる。――殺される？俺も？経験値のために？そんな理由で人を殺せるのか？眼前に広がる死体の山の中にある人間の死体は、両手で数えても足りないくらいの数がある。それだけの人間を、あっさり殺したのか？

「ち、近付くな…！来るな…来ないで…っ！！」

カタカタ震える手のせいで狙いが付けられない。プルプル震える矢に、余計に焦りが募る。少年はそれを見て弾けたように笑った

「ギャハハハハッ！！ヤッベェ超可愛いでやンの！恐いンですかァ！？でも安心していいぜェ？俺超優しいからッ！」

＜分析完了＞

名前：吉井　健太

ＬＶ：１０

保有スキル：『一方通行』　虐殺者

ステータス異常：毒　瀕死

…ぇ？

ぽかん、と分析したステータスを見る。あの元気に笑っている少年が…毒？

はっとして自分のステータスをチェック。…やっぱ毒っ！？しかもＨＰの減りが速い！？

「おい！お前！ここ毒の部屋だ！早く逃げないと死ぬぞ！」

よくよく注意してみれば、血臭と死臭に紛れて分からないが、毒霧特有のツン、と鼻の奥を刺激する匂い。――初心者用のダンジョンで【毒】の罠を仕掛けるとかあの邪神なに考えてやがるんだ！？

「【呪いよ去れ！ディスペル！】」

慌てて自分の毒を解除。ＨＰは半分になったが、まだ大丈夫だ。そして次に目の前の少年に【解呪】を飛ばそうとして…手が止まる

助けて、いいのか？

「はァ？毒とか効かないンですけどォ？反射は完璧でェすゥ～」

げらげら楽しそうに笑う少年。そう言ってる間にも、少年のＨＰはドンドン減っていく

…くそっ！

「今回だけだからなちきしょう！【呪いよ去れ！ディスペル！】」

何で俺が人殺しを助けなきゃならないんだ！？

でも目の前で人が死ぬのは嫌だった

だから【解呪】を飛ばした

――なのに

「…ぇ？」

少年の毒は、なおらなかった

「な、なんで？【癒し手よ！ヒール！】」

確かに少年に向けて回復呪文を飛ばしているのに、回復するのは俺のＨＰ。意味が分からない。なんだよこれっ！？

「【呪いよ去れ！ディスペル！】【ディスペル！】【癒し手よ！ヒール！】【ヒールッ！】【ディスペル！】なんで！？なんで治らないんだよっ！？」

「…もしかして電波サンですかァ？ちょッと恐いンですけどォ」

そうしている間にも、少年のＨＰは減っていき――

「…あれ？なんか眠く…能力使い過ぎですかァ…？」

少年は、倒れた

マーカーが、黒く染まり

死んだ

プロローグ４（後書き）

自棄に主人公厳しめなプロローグだと思ったアナタ

ぶっちゃけ、一行二行で

「辛いことがあったけど、俺は、レティーシアとして頑張る」

みたいなこと言われても感情移入出来ないと思いません？

キンクリで飛ばされることが多い【辛いこと】をちゃんと書いてるだけだもん！

俺、悪くないもん！

ちなみに。予想される質問

1，吉井くんが【毒】に気付かなかった理由

ＲＰＧの主人公が状態異常・毒でも変わらず動けるのと同じように、ＨＰが尽きるまで【毒】は効果を発揮しないから

更に

2，【一方通行】な吉井くんが【毒】になった理由

呼吸時の【反射】が中途半端で、酸素も毒霧も普通に吸収してたから

3，【解呪】や【回復】が効かなかった理由

【反射】は【魔法】も反射する、と吉井くんが無意識に認識していたから

今回のテンプレ

↓オリ主（笑）死亡

↓セロリ

↓チート倉庫

↓オリ主、致命的な失敗

プロローグ5（前書き）

テンプレ乙

「こんなテンプレもあるよ！」

っていう意見があったら感想板にお願いしますっ！

無くても感想書いてくれたら嬉しいです！

プロローグ5

呆然と、目の前で死んだ少年を見下ろす

…なんだ、これ

意味が分からない。アレだけ…あれだけ好き放題に虐殺しまくっていた少年が、あっさりと死んだ。目の前で肉の塊になった。あまりの呆気なさに呆然として…

「…もう、やだ…」

意味、わかんねぇよ…

何なんだよ、これ…

こんな現実…許されていいわけねぇだろ…

ヤケに重い足を引きずるように小部屋から出る。石壁に氷の矢で【↑毒霧の部屋。注意】とだけ書いて、思考を止めたまま歩く

「…もう、いいよ」

死ぬのが恐いとか、殺人はいけないとか…分かんなくなった

命の大切さ?そんなの関係ないじゃん。モンスターも人間もあんな簡単にばったばった死んでるんだぜ?意味、わかんねぇよ…

「…あはは」

何か、笑えてきた。気が付いたらまた涙が溢れ始めていて、押さえきれないくらい笑えてきた。涙脆いなぁレティーシア…じゃなかった、俺。ははは、子供みてぇ

ふらふらと目的地もなしに歩いていく。遠くから悲鳴や獣の鳴き声が聞こえてくる。でも、さっきみたいに助けに行く気力が沸いてこない。なんか、全部どうでもいい

確かに白髪の少年は色んな人を殺してたよ。モンスターも大量に殺してたよ。…でもさぁ、だからってあっさり死んでいいのか？まだ中学生くらいだったじゃん。あんな子供が、あんなに簡単に死んでいいのか？

もう、わかんねぇよ

がつん、と頭に衝撃が走る。手を当ててみると、ぬる…っと熱い感触。…ステータス確認。ＨＰが僅かに減っていた。

「…ぁ？」

狭い通路の真ん中に、１０歳児くらいの大きさの醜悪な子供。出っ張った腹と長い牙、緑色の肌を持つ化け物――ゴブリン。が、三体。俺の行く手を遮るように、縦一列に並んでた

頭に手をあててぽかん、としていたら、腹に衝撃。「かふっ…」肺の中の空気を全部出しながら、少し吹っ飛ばされた

そこまでやられて、ようやく襲われていることに気付いた。赤い敵

対マーカーが3つ、目前にある

「…」

何も考えずに立ち上がりながら弓を構え、放った。先頭の一匹目が棍棒を盾にするように構えるが、氷の矢は木の棍棒をあっさり貫き、一匹目の額から入って後頭部に貫通。二匹目の右目に突き刺さり、脳髄を破壊。そこで止まる。ぽかん、としている三匹目に二射目を放つ。倒した

「…ぁ」

殺しちゃった

殺しちまった

VRのころみたいに、何の罪悪感も思考もなく、流れ作業で殺しちまった

「…ははは っ」

俺、あの白髪の少年と変わらないじゃん

笑いながら泣く。頭からだらだら溢れてきた血と涙が混ざって、地面に吸い込まれていく。ゴブリンの血と脳髄で汚れた地面に吸い込まれていく。

ぷつん、と何かが切れたような気がした

「うあ…ぁ――――――――――――――――――――――――ッッッッ！！！」

声にならない絶叫が喉から迸る。もう嫌だ！誰か！誰でもいいから助けてくれよ！何で！？何で俺がこんな目に合わなきゃいけないんだっ！？

激情のままに石壁を殴り付ける。ぴしっ…と身体の内側で致命的な音がなる。一瞬遅れてやってきた激痛に、膝から腰から崩れ落ちた

細い通路に大の字で寝転がりながら、ただ涙を流す。…もう、いやだ。殺すなら殺せよ…手もいたいし、頭もいたいし、おなかもいたい…生臭いし…痛いし…いやだ…もう全部いやだ…

「ぐぅ…あ、あぁあああ…もうやだぁ…」

誰か、だれでもいいからたすけてくれよ…

全身に力が入らない。煮るなり焼くなり殺すなり犯すなり好きにすればいいじゃねーか。もうやだ。抵抗するのも嫌だ。全部どうでもいい

ぐずぐずと鼻をすすり上げていると、明るかった視界に影が差す。モンスターでも人間でも、もう抵抗しない。するだけ無駄だ。余計辛くなる。なら、抵抗なんかしたくない

そう、思ってたのに

「…おい」

その声は、なんだか妙に優しく聞こえた

「どうしたガキ。迷子か？…って、お前あのときのファンタジー娘じゃねーか。昨日の威勢の良さはどうした」

「…ぅぁ？」

涙でぼやけた視界が、徐々にそれを目に映していく。黄金色の毛皮に、金色の目。ぴんっ、と立ったヒゲと、くねくねと踊る尻尾

「…わー、たいがー…？」

「誰がじゃ」

「いたぁっ！？」

殴られた。

その衝撃で頭部の傷が開き、更に血が溢れる。ワータイガーはそれを見て、慌てたように「うぉすまんケガしてたのかっ！？返り血かと思ってた！？」と大袈裟にわたわたとする

「っぅ…だ、だいじょうぶだ…。【癒し手よ。ヒール】…」

回復呪文を唱えて頭部の傷と、砕けた拳、鈍痛を訴える腹を治す。それを見て、ワータイガーは目を見開いた

「…おー、まさにファンタジーだなおい。魔法らしい魔法は初めて見たぜ」

…普通の、反応

笹田みたいな、以下にも「俺の事を利用する気満々です」みたいなリアクションじゃないことに、ぽろっ、と涙が溢れた

途端、ワータイガーが「げっ」と顔を歪める

「ったく泣いてんじゃねぇっつの。さっきの絶叫もお前だろ？ったく、見ての通り俺ぁ猫だからよ、普通なら聞こえねぇ音まで拾っちまうんだよ」

「…ね、ねこ？」

俺より相当でかい虎を猫とか言うのか？無理だろ、普通に考えたら

「おーよ。猫万歳だろ。馬鹿な上司の尻拭いも無能な部下のケツ蹴って仕事させることも、クレーマーに応対する必要もねーんだぜ？超いいだろ。昼寝して飯食って愛嬌振り撒きゃいい。夢だね夢の生活。…まぁ若干虎っぽいけどよ」

「…どうみてもトラだろ」

思わず突っ込むと、ワータイガーはにやっと猫…じゃねぇや。虎顔で器用に笑った

「ガキが大人に意見するたぁ１００年早ぇ」

びしっ、と鋭い爪の生えた毛むくじゃらの指先が俺の額を弾く。痛みに仰け反れば、ワータイガーはげらげら笑った

俺も、額を押さえながら…笑う。なんだか、凄く久しぶりの自然な笑い

「ってうぉ!?ゴブリンかっ!?…お前がやったんか?」

仰け反った拍子に後ろが見えたんだろう。３つの死体に驚くワータイガー。「うげぇ…」と舌を出し、ヒゲを垂らしながらヤダヤダ、と言わんばかりに首を振る

「ったく、最近のガキはどうなってんだ。好き勝手殺しやがって…いやまあ、ゴキブリ殺すようなもんだと考えると仕方ねぇかもしんねぇが…あーやだやだ」

どくっ、と心臓が高鳴った気がした

慌てて、本当に慌てて、とにかく弁解しなきゃと思って、必死で口を動かす

「ち、ちが…っ!お、おれ、殺したくなんかなくて…!襲われて!体が勝手に…じゃなくて!言い訳じゃなくて!!もう嫌んなってて!わけわかんなかったから!」

自分でも意味不明な言葉が口から出てくる。ワータイガーは困ったように頭を掻くと、もう片方の手で俺の頭をぽんぽん、と軽く叩く

「別に責めるつもりはねーよ。倒さにゃ殺される世界だぞ?弱肉強食は自然の摂理だろ。仕方ねぇよ」

「…ぁ、ぅ」

頭を撫でられる、なんて久しぶりで

慰められるのも、久しぶりで
まともな人間に出会えたのが、久しぶりのような気がして
涙が、止まらなかった。
柔らかい肉球の感触とか、ふさふさした毛の柔らかさとか、飼い猫みたいな柔らかい獣の匂いとか。あんまりにも久しぶりに感じる温かさに、涙が止まらなかった
「ぅ…ぅぅ～…」
「泣くなよ…。ガキが泣くのは苦手なんだよ…」
背中に背負っていたリュックの中から取り出した布で、乱暴に俺の顔を拭うワータイガー。その優しさに、余計に泣けてきた
…でも、もしかしたら…こいつも…こう、ナデポ、とか。洗脳とか。狙い澄ましたようなタイミングで現れたこととか…信用、出来ない要素が、多い
＜分析完了＞
名前：大路　光
称号：獣戦士

保有スキル：狂化　獣化　拳闘術　捕縛術　銃術

…恐いスキルが…無い？

思わずワータイガーの顔を凝視する。ワータイガーは…普通に、むしろ、未だに止まらない俺の涙に鬱陶しいな顔をしていて…

まるで、普通の子供を見るみたいな目で俺を見ていて

俺を「女」として見ていなくて

「ぅ…ぁあ…ぅあああああああああんっ！！」

思わず抱き着いて、泣き付いてしまう。より一層感じられる獣の匂いが、温かさが、びっくりするくらい嬉しくて

「どわっ！？ちょ、何しやがる！？きたねっ！鼻水擦り付けんじゃねぇ！」

そんな、普通の反応が嬉しくて。必死でワータイガーにしがみついて泣き続けた

しばらく泣き続けて、すっきりして…どうにか気分を持ち直す

さっきまでの自分の心境が信じられなかった。鬱って超恐いな。犯すも殺すも自由にしろとかどんだけ自暴自棄だったんだよ、って

「…で、どうしてくれんだ？」

「ご、ごめん、なさい」

俺の涙とか鼻水とか涎で胸元をぐっちゃぐちゃにしたワータイガーがイラついた声音で聞いてくる。素直に申し訳なくて頭を下げたら、はぁ…と大袈裟な溜め息を吐き、「まぁいいやな。気にすんな」と笑った

「あ、いや、でも…あ、ちょ、ちょっと待ってくれ！」

「あん？」

首を傾げるワータイガーを尻目に、インベントリ内を検索。よしっ！これなら大丈夫っ！

「インベントリ：ガーデンガーディアン」

レア度Ｓの胸鎧と肩当てが一体化した防具。ナイトしか装備出来ない重量系の装備だけど、ワータイガーなら装備出来るはずだ。その分スピードが落ちるかもしれないが…。ぐちゃぐちゃになった所を隠すのには丁度いいはず

「こ、これあげるから！効果も色々あってさ！防御力上昇に即死無効化で…」

ああ違う！こんなこと言いたいんじゃなくて…えっとええっと！湯だったような頭を必死に巡らせ、必死で鎧をインベントリから引きずり出しながら、思いっきり頭を下げた

「――お礼です！ありがとうございました！」

…沈黙。その反応が恐くて、恐る恐る顔を上げたら…

「…すっげー。ポーチからこんなでっかい鎧出てきたよファンタジー過ぎんだろおい」

がくっ、と脱力する。…でも、その反応が嬉しかった

「装備の仕方…分かるか？」

「いや、わかんね。貰えるんならありがたく貰うが、どうやって装備すんだ？」

ワータイガーがひょい、と軽々鎧を持ち上げる。…すげ。あれ重量

35だぞ。でも、あの様子ならそれなりに喜んで貰えたかな?と思うと、嬉しくなった

「ああ、この留め具で――」

ワータイガーに鎧を装備させる。今まで上半身裸で、下に革の長ズボンしか履いていなかったからみすぼらしく見えたのに、鎧を装備したらいきなり歴戦の戦士みたいに見えるワータイガー。うん、かっこいいじゃん。ついでに斧とか持たせてみたい

「おお、サンキュな」

「いや…あんたのお陰で助かった。お礼を言いたいのはこっちだ。ありがとう」

もう一回頭を下げる。ぽんぽん、と後頭部に柔らかい感触

…どうしよう。正直1人になりたくない俺がいる。言うか?言うのか?…言うしか、無いだろ

「あ、あのさ…ついていってもいいか?」

「ぁん?…あー、そうだなぁ」

ワータイガーはしばし考え込むように顎を撫でる。どくどく高鳴る心臓。なんでこんなドキドキしてんだよ!?意味わかんねぇ!相手は自称猫だぞっ!?

「――そうだな、俺はいいぞ」

「っ！？ほんとか！？」

良かった！本当に良かった！

安堵の余り、久しく出なかった無意識の笑みが口に浮かぶ。本当に嬉しくて、心が浮き立つようだった

「でも――」

ワータイガーが、更に口を開く

「あいつらが、何て言うかな？」

「――ぇ？」

あいつら、って…一体だれ…？

「おーいオッサン。どこまで行ってんだよー」

「食糧取りに行ったんじゃなかったのかよ？」

ワータイガーの後ろから現れた少年２人に、身体が強張った

プロローグ5（後書き）

早くプロローグ終わらせたいが故のスピード更新

めっちゃ疲れる！

でも日間ランキング7位とかお気に入り件数１００件突破とかあるとついつい調子に乗っちゃうんだ☆

読まなくてもオッケー

胴装備：ガーデンガーディアン

とある庭園を守るゴーレムのドロップ品

レア度はS。防御力上昇、即死無効。状態異常発生確率半減

はいはいテンプレ装備です

今回のテンプレ

↓他作品のチート装備

↓どんでん返し

↓天国から地獄

↓気が付いたら人外で異世界召喚

プロローグ6（前書き）

ミスった！修正修正

正しくは6っすね

っつうかプロローグなげぇ…

プロローグは所謂「邪神の城で一ヶ月間修行して～うんぬんかんぬん」の辺りです

…気付いたか？まだ2日目なんだぜ…？

でもでも1日でお気に入り件数が１００件も増えたり、ランキング5位とかになっちゃうと調子に乗るよね！

毎日更新しないといけない気がしてきた…！？

プロローグ6

少年たちは俺を目にした途端、驚いたような表情をした。そこで涙の跡に気付き、慌ててマントで拭く。すると、少年たちはいきなり怒り出し、眉尻を吊り上げてこっちに向かってきた

内心、逃げ出したい衝動に駆られる。勝手に動き出しそうな身体をどうにか押し留めていたら、少年がワータイガーに掴みかかった

「なぁにやってくれてんですかオッサァァアアンッ!?自称警察官が女の子泣かしてんじゃねーよ!」

「全くだね!そちらのお嬢さん。大丈夫です。この淫獣は今すぐ叩き切りますから」

にこっと笑う人外染みた整った顔立ちの少年。慌てて俺はその少年とワータイガーの間に入る

「ち、違う!ワータイガーはその…俺を助けてくれたんだ!勝手に泣いたのは俺だ!」

「「…はぁ?」」

首を傾げる少年たち。肩を竦めるワータイガー

「ガキ、ワータイガーじゃねぇっつの。オオジだ。オオジ。オオジさんって呼べ」

「お前なんかオッサンで十分だろ」

「年上には敬意払えコノヤロー」

「ギャアアアっ！？まじすんませーん！」

ワータイガー…じゃなくて、オオジさんに頭を鷲掴みにされて悶える、中肉中背、黒髪黒目の平凡な顔立ちの少年

…正直、ホッとした

オオジさんみたいに、俺のことを完全に「子供」として見ているわけじゃないけれど、「性欲の対象」や「便利な回復役」と見ているわけじゃなく、普通に「女の子」として見てくれてる。まともな「男の子」に会ったのが久しぶりな気がして、酷く安心した

話を聞いてみると、白い長髪の人外染みた美少年が「門屋」。平凡な容姿の少年が「黒岩」と言うそうだ。元々現実世界でのクラスメイトで、友達らしい

いきなり（自称）猫になったオオジさんがふて腐れていたら、「獣人ぱねぇ！」と寄ってきて、話してる内に一緒にダンジョンに潜ることになったらしい

「そう、なのか。…クロイワに、カドヤ。俺も、付いていって…いいか？」

おずおずと聞いてみると、彼らは顔を見合わせてから、笑顔で了承してくれた

「もっちろんです！ご安心くださいお嬢さんっ！このアルバ・ジー

クフリートが貴女を守りきってみせます！」

「いきなり盛ってんじゃねぇよ。…ったく、ごめんな？レティーシアちゃん」

「あ、ああ…」

カドヤの行動には驚いたし、ちょっと恐かったが、すぐにそんなカドヤの腹に肘を入れてクロイワが制止してくれた。安堵しながら、オオジさんの隣に立つ

「とりあえず、一緒に行くなら役割考えなきゃな。スキル見せてもらってもいいか？」

どうやらこのパーティのブレインはクロイワらしい。大人しく頷き、冒険者カードを渡す。クロイワは目を見開き、「回復役か…！」と目に見えて喜んだ

「じゃあ僕の番だね。はい、これ僕のカード」

渡されるカドヤのカード。大人しく視線を落とす

＜門屋　修作／アルバ・ジークフリート

ＬＶ：３

称号：かっこいいしゅじんこう

保有スキル：幻想殺し（オフ）　ステータス二倍　狂化　邪眼　魅惑の魔眼（オフ）　魔族化　攻撃魔法　強化魔法　剣術　第六感　戦闘理論

初めて見るスキルがいっぱいだ。それに驚きつつも…名前が気になる

「…アルバ・ジークフリート？」

「僕の肉体の名前さ！僕の書いた傑作小説「混沌の暗黒騎士～鮮血叙事詩～」の主人公で、右手にあらゆる異能を打ち消す奇跡を宿して生まれてきた、魔族とのハーフなんだけど人間のために魔王を倒す事を決意するんだ！魔族としての力を使うと人間だった部分が魔族因子に侵食されていって徐々に人としての心を失ってしまい自分が何のために戦うの分からなくなっていってしまう、けれど無意識に覚えている幼なじみの人間の美少女イリーナを守るために魔族となっても戦い続けて」

「なにひとつ意味がわからない」

いきなり満面の笑顔でぺらぺら喋りだしたカドヤ…いやアルバ？から数歩距離を取る。苦笑いしながら、カドヤと俺の間に割り込むクロイワ

「で、これが俺と、オッサンの」

「あ、ああ。放っておいていいのか？」

「ああなったら止まらないからな。喋らせとけ」

肩を竦めるクロイワに呆れながら、俺は二枚のカードを受けとる

＜黒岩　優人

ＬＶ：４

称号：魔法使い

スキル：攻撃魔法　主人公補正

＜大路　光

ＬＶ：２

称号：獣戦士

スキル：獣化　狂化　拳闘術　捕縛術　銃術　（ＮＥＷ）交渉上手

…オオジさんのスキルが増えてる？いや、それよりも…

「主人公補正？」

「ああ。偶然仲間になってくれる人間に会ったり、今まで喧嘩すらしたことなかったのにあっさりモンスターと戦えるようになったり、ピンチの時に敵の急所に攻撃が当たったり、土壇場でステータスが急上昇したり、ってスキルだな」

「…ふーん」

…ずるい。…俺なんか男に嫌な目で見られて、男に襲われかけて、…必死こいて戦う覚悟決めて、すぐ心折られて…ようやくオオジさんみたいな良い人に会えて、何とか今こうしているのに…

思わずクロイワの平凡な顔を睨み付ける。クロイワは僅かに顔を赤くして、そっぽ向いた

「――で２１７章でついに全身魔族化しちゃうんだけど、って聞いて――優人！なんでお前なんだよ！？」

「お前話長いんだよ…。レティーシアちゃんが呆れてるぞ」

そこで俺の名前を出すな。とクロイワを睨む。するとカドヤは端整な顔を真っ赤に染め上げる

「う、うるさいな！別にいいだろちょっとくらい！」

「アホガキども。そのちょっとの間に厄介なことになったみたいだぞ」

今まで黙って隣にいてくれたオオジさんが、難しい顔で言う。…小さく聞こえる、獣の唸り声。細い通路の先と、後ろ。両方から聞こえてくる

「ゴブリンの血の臭いか、他の勇者候補から逃げてきたんだか…囲まれてんぞ。気合いいれろ」

体勢を低くし、腕を折り畳んで毛を逆立てるオオジさん。さっきまでの空気は一瞬で吹き飛んだ。カドヤも腰から１ｍくらいの直剣を抜き、クロイワは片手に木の杖、もう片手に…アレは、杭、か？を

数本指で挟んで構える

「オッサンは盾。レティーシアちゃんを護って。修作。突っ込め。俺が援護。ＭＰ残ってないから魔法はねぇぞ」

「大丈夫だよ。ウルフとサベージラビットが殆どだ。コボルトの群れよりは全然楽勝」

にや、と獰猛な笑みを浮かべるカドヤとクロイワ。その、当然のように殺す、というスタンスに…背筋が凍る

…いや、殺さなきゃ。殺さなきゃ、殺される。大丈夫。大丈夫。やれる。もうやった後。今さら何を言い訳しても無駄。…殺さなきゃすぅー…と氷を差し込まれたように身体が冷たくなる。まるで現実感は無い。ゲームと同じように策敵。成功。約３０、前方１０、後方２０ってとこか。全部敵対マーカー

「【英雄よ！エンチャント：ＡＴＫ！】」

「うぉ！？」「うわ…凄い」「あん？なんか身体が光ってんぞ？」

三者三様の反応に苦笑いしながら、ミストラルに軽く触れて銃弾生成。

「攻撃強化だ。攻撃力が5分間だけ上昇する。スピードも上がるから、慣れない内は無理はしないでくれ」

説明しながらも、分析した3人のステータスをチェック。それなりに3人ともＨＰが減ってる。仕方ないか

「【恒久たる癒しを。フィジカルヒール】」

自動ＨＰ回復。３人とも驚いたように俺を見ているが、それを無視して背中から弓を取る。二、三回握って確認。さっき砕けた手も問題なく動く。いける

「後ろは俺がやる。回復するのも5分だから気を付けてくれ」

ぽかん、と俺を見つめているカドヤとクロイワ。それに注意しながら、マーカーチェック。動いてない…様子見しているのか？

違うな…。ある程度の数が揃うまで待ってるんだ。マーカーがどんどん集まってきた。他のプレイヤーの中立マーカーがいつの間にか消えている。…上に戻ったのか？

いや、それはいい。問題は、仲間を大量に殺されて人間に盛大な怒りを抱いているだろうモンスターが大量に向かってくることだ

…流石に、狭いし…数的に厳しいか？

「オオジさん、出来るだけ減らすけど…失敗したら頼む」

「――おぅ。任せろ。ガキを守るのはお巡りさんの仕事だ」

にやっ、と口許をつり上げるオオジさん。それを頼もしく思いながら、弓を構える

「レティーシアちゃん！僕の活躍見ててね！」

「とか言ってミスんなよ！飛び道具にゃ限りがあるんだからな！？」

背中からの声に苦笑い。そして感じる嫌悪感を気のせいだと思って自分を誤魔化す。オオジさんを見上げれば、オオジさんは無表情で、でもどこか心配そうに後ろの少年達を見つめている

「――大丈夫だ。俺が死なせない」

あの白髪の少年のように回復魔法が反射される、ということもなかった。なら、大丈夫。俺は、今度は目の前で死ぬのを呆然と見ている、なんてヘマをしない

そして――殺しても、ショックなんか受けてやるものか

「――『レティーシア』らしく、やってやる…！！」

そして、弦を引く。氷の矢が生まれ、曲がり角から顔を出したばかりの狼モンスターの体を貫く。――大丈夫っ！ただのゴキブリ退治と変わらないっ！

後ろでカドヤとクロイワの雄叫び。獣たちの悲鳴。戦いの音。それを聞きながらひたすら撃つ。射る。討つ。ひたすら雑魚モンスターを殺していく。柔らかすぎる肉に氷の矢が突き刺さる。オーバーキルとかいうレベルじゃない。もっとグロテスクだ。ばんっ！と内側から弾けるモンスターも、頭に矢を突き刺したままぴくぴく痙攣するモンスターも、頭を失いながらふらふら歩きながらこちらに向かってくるモンスターも――全部全部グロテスクで、頭が痛い。胸が痛い

「はぁー…はぁー…」

自分の呼吸音が妙に遠くに感じる。恐い。飛びかかってくる狼を空中で撃ち落とす。地面を駆けて迫る白い兎を縫い止める。いつの間にか来ていたゴブリンの喉に矢を放つ。命中、命中、命中。血飛沫。悲鳴。苦痛の唸り声。血と糞尿と死の香りに頭がふらふらする

そんな時、ごづんっ！と頭に軽い衝撃。敵かっ！？と思って振り向けば、何だか怒ったような顔をしたオオジさん

な、なんで怒ってるんだ？が、頑張ったじゃん！ちゃんと俺、頑張って殺してるじゃん！

不満を抱えながらキッ！と睨み付ける。オオジさんは呆れたように肩を竦めながら、「うぇあああああっ！？」ガシガシと俺の頭をかき混ぜる。爪が当たって深刻に痛い

「そんな顔するくらい辛いなら、最初から無理すんな。後は任せて下がってろ」

オオジさんが言うや否や、地面が砕けるほどの踏み込みでモンスターの中に飛び込んでいく。最初に体当たりで大体のモンスターを吹き飛ばし、残ったモンスターの首を鷲掴みにして、他のモンスターに投げ付ける。モンスターでモンスターを殴り付ける。モンスターの悲鳴が、苦鳴が、ステレオで響く

俺は、その背中を呆然と見つめる。

…だって、戦わなくちゃいけないじゃん。殺さなきゃ殺される世界だっつったのはオオジさんじゃん。オオジさんも嫌だって言ってたじゃん

…なのに

「俺なんかのこと、護るなよぉ…っ！！」

モヤモヤした感情を抱えたまま弓を構える。決してオオジさんには当たらないように、オオジさんに攻撃しようとしたモンスターだけを殺していく。オオジさんは驚いたように俺を見て…ビッ！と拳から中指を突き出した。…ふぁっくゆー？…っざけんなっ！

とにかく撃つ。とにかく射る。とにかく討つ。余裕が出てきたからクロイワとカドヤの周りのモンスターも討つ。驚いてる隙だらけの2人を襲うモンスターを撃つ。オオジさんなんかに！護られてなんかやるかっ！

そんなヤケクソ染みたテンションで大体のモンスターを討伐した頃には、通路が通れないくらいの死体が築かれていた

全員に大した怪我が無いのを確認し、誰からともなく一ヶ所に集まる。そして、クロイワが口を開きかけたとき、そいつは現れた

「――例え、モンスターと言えども、命は命」

見上げる程の巨体。俺の倍の太さはありそうな大剣

「何の罪もない命を奪ったこと、後悔するが良い」

まるで自分の台詞に酔っているかのように

「断罪の時間だ」

プロローグ6（後書き）

トラオさん改めオオジさんマジ天使

レティーシアの呼び方がいっぱいで笑った

例：レーたん。レっちぃ。レっちん。レッちゃん。

可愛がられてるなぁレティーシア（笑）

ちなみにどうでもいい設定

レティーシアが不幸なことに、オリ主（悪）とばっかり遭遇するのは、『運』のパラメーターが低いからだったり

それでもオオジさんに会えたのはクロイワの『主人公補正』のお陰

クロイワの『主人公補正』で仲間に入るようになってんだけど、レティーシアの『運』が悪いから、『主人公』に会えない

だからトラオさん通して、間接的に仲間入りしました

これ、最初にクロイワが見つけてたらフラグ立ったのかなぁ…？

今回のテンプレ

↓平凡（笑）なオリ主

↓厨二病オリ主

↓殺す覚悟（笑）2

↓？？？（まだ中途半端）

ＥＸ２　感情発露の違い（前書き）

展開が速い？

仕様です

更新が速い？

がんばってます

お気に入り件数が３００行ったから…更新しなくちゃって…

早くプロローグ終わらせたいよぅ…

ＥＸ２　感情発露の違い

２ｍを超える…いや、３ｍ近い長身。鋼のような筋肉に覆われた身体に、彫りの深い顔立ち。ザンバラに切られた黒い髪。黒ずんだ肌と、巨大なバスタードソード。上半身は裸だが、腰には立派な鎧を付けている

「ば、バーサーカー…っ！？」

クロイワが驚愕の声をあげる。…バーサーカー？狂戦士…？

「貴様らには聞こえぬのか。この場で死した生き物の慟哭の声が。貴様らには分からぬのか。弱き者の嘆きが。分からぬのだろう。ならば、分からせるまで」

芝居がかった言葉、グッ、と体を沈ませ、大剣を構える。ギラリと髪の毛の奥で目が輝き、周囲の空気が揺らめいた

＜分析完了＞

金成　剛

称号：ヘラクレス

ＬＶ：７

ヘラクレスッ!?驚愕に次ぐ驚愕。サブカルチャーに明るくない俺ですら知ってる、ギリシャ神話の英雄。…あんな恐い顔してんのっ!?

「逃げるぞ!」

「あ、ああ!」「分かった!」

クロイワの号令に従い、俺もオオジさんも踵を返す。オオジさんが死体を掻き分けて進む中、俺はカドヤの声が聞こえなかったのが気になった

「…カドヤっ!?」

振り返って見れば、カドヤは微笑を浮かべたまま片手で剣を握っていた。前方でクロイワが盛大に顔をしかめる

「修作!なにやってんだ!?」

怒鳴るクロイワに、カドヤは好戦的な笑みで返す

「バーサーカーだぜ…?あのバーサーカーと僕のアルバが戦えるんだぞ…?やるしかないだろ!?」

チャキッ、と剣を構える。カドヤ。対してヘラクレスは呆れたように溜め息を吐き

「――射殺す百頭／ナインライブス」

「鮮血翔斬っ!／ニーベルンブラストッ!」

…はぁっ！？

狭い通路で、たった一太刀で産み出された９つの斬撃が、血のように赤い剣撃がぶつかり合う

――『ガナスタ』でも飛ぶ斬撃とか無いわ！魔法ならまだしも現実で斬撃飛ばすな！

内心で絶叫しながら振り返る。クロイワが驚いたような顔をしているが、無視してヘラクレスの足に向けて矢を放つ。動きさえ止めれば、殺さなくても逃げられるはず！

「馬鹿！バーサーカーには普通の攻撃は効かないんだよ！」

クロイワの言葉の通りに、硬い石壁にすらあっさりと突き刺さる矢が、鎧でもなんでもない皮膚に弾かれた。…も、もうなんでもアリかよっ！？

「…っ。少し、痛かったぞ。こちらの言葉に耳を貸す気もないとは…やはり、救えないか…」

ぼそり、としたヘラクレスの言葉が耳に届く。…もしかして、話し合う余地があるのか？

そう思っている間にも「やぁあああああっ！」と雄叫びを上げながら切りかかるカドヤ。ヘラクレスは通路が狭くて思うがままに動けないのか、もたつきながら大剣を盾にして剣撃を防ぐ

「ああもう！あの馬鹿…！オッサン！あいつ無理矢理でいいから連

れてきてくれ！」

「ちっ、仕方ねぇなぁ…！」

舌打ちしながらヘラクレスに駆け寄るオオジさん。――なら、ヘラクレスの注意を引く！

「スキル：挑発…『やいこらデクノボーっ！でっかい図体して道につっかえてんじゃねーよバーカッ！！』」

「戯れ言を…」

失敗っ！？やっぱ５０％じゃ無理か！仕方なく、矢をつがえ――狙いは、ヘラクレスの膝。そして、大剣を掴む右手。後は、大剣の腹。３本の矢を同時に放つ。スキルでも何でもないただの技術だが、ヘラクレスは矢を受け、僅かに動きを止める。巨大なバスタードソードもあっさりと氷の矢に貫かれ、カドヤの攻撃を防いだ瞬間砕け散る

「おらっ！逃げんぞ！」

その隙を逃さずオオジさんがカドヤの襟首を掴んで走ろうとするが――カドヤは、その手を振り払って一気にヘラクレスに斬りかかり、

「――かかったな」

ヘラクレスが、にやりと笑う。瞬間、ヘラクレスの剛脚が高く振り上げられ――驚愕するカドヤの身体を、踏み潰した。ビシッ！と床にヒビが走り、それは大きく広がり――俺やクロイワの足下まで広がった途端、ガラッ！と砕ける。

「なっ！？」「しまっ！？」

地下に続いていくタイプのダンジョンだったらしい。すぐ下に空間がある。一瞬の思考の空白。「【無常の癒し手を！キュアヒール！】」反射的に大ダメージを受けただろうカドヤに強回復呪文を飛ばしながら、頭と胸元を手で隠して身体を、丸める。そして、浮遊感。砕けた床が崩れ、階下に瓦礫と共に転がり落ちる

「ぐ…ぅう…」

瓦礫が全身にぶつかってくる。痛い。衝撃に涙が出そうになるのが分かる。すぐ隣で「がっ！？イダッ！？」とかクロイワの声がする…けど、主人公補正を持っているクロイワなら偶然の事故で死ぬことはないと思う。せめて魔法を唱える余裕があったら回復してやれるんだが…うめき声を押さえるのが精一杯で、呪文が唱えられない

「ぐぅっ！？」

そして、背中から地面に叩き付けられる。言葉にならない衝撃に、みっともなくゴロゴロ転がって痛みを紛らわせたい衝動を必死に我慢しながら、カクカクする足で立ち上がる

――1つ下の階に降りたら、空気が全然違かった

死臭がしない。血の臭いがしない。糞尿の臭いがしない。キョロキョロ周りを見回すが、どうやら俺とクロイワしかいないようだ。…オオジさんが、いない。ヘラクレスは勿論、カドヤまでいない

「くっそ…あぁ、全身痛い…」

ずきずきと痛む全身。身体にくっついた破片を払い、瓦礫に埋もれてるクロイワに視線を向ける。…気絶してやがる

若干呆れながら、回復呪文を唱える。見る見る内に痛みは引き、クロイワの傷物治っていく。…ん、ＨＰも満タンになったな

「…1階と2階で随分違うな…」

細い通路と小部屋、というのは変わらないが、まず壁が石じゃない。触ると石のように硬いが、これは木だ。木が壁のようになっている。地面は土で、落ち葉や枯れ葉、雑草が大量に生えている。まるで山の中にいるみたいだ

「…じゃない！オオジさんとカドヤはっ！？」

はっとして、慌てて索敵。――こんな時に失敗かよ！？索敵は一度失敗すると１０分間使用不能になってしまう。こんなことならＬＶＭＡＸまでポイント振っておくんだった！

「起きろクロイワ！分断されたっ！」

後悔しながらもクロイワを叩き起こす。どうせ怪我は全部治っているのだ。遠慮なく頬を平手打ちすれば、ばっ！と飛び起きるクロイワ

「っぅ～！も、もっと優しく起こしてくれても…」

「そんなこと言ってる場合か！オオジさんとカドヤが危ない！」

素手で床を踏み抜くような化け物が相手なのだ。ただ逃げるだけでも厳しいはず。すぐに合流しないと…！

「…そうだな」

しばし考え込み、こくりと頷くクロイワ。だが、その手に持った杖を見て顔を青くした

杖は、真っ二つに折れてしまっている。クロイワはぶつぶつと口の中で何かを呟き――諦めたように首を振った

「まずは地上に戻ろう。杭もないし、魔法も使えない。こんなんじゃ普通のモンスターに襲われただけでアウトだ」

「なっ――!?」

ば、馬鹿じゃないのかっ!?

「そんなことしている間にオオジさんやカドヤが死んじまうかもしれないんだぞっ!?」

「だからこそ、だろ。冷静に、あいつらの分の装備も用意してから来るべきだ。元から俺たちは朝から飲まず食わずで戦って、食料を取りに帰るところだったんだ。腹も減ったし、魔力もない。幸いバーサーカーの武器は破壊したし、すぐに行動起こされることは――」

パンッ!と

甲高い音をたてて、おれはクロイワの頬をたたいていた

…え?

お、俺…こんな、感情的な人間だっけ…？

頭の中では冷静なのに、身体は完全に逆上していた。怒りのままに頬を押さえ、俺を見つめるクロイワに怒鳴り付ける

「人死がかかってんだぞ！？理屈じゃないだろ！もういい！俺は行く！」

「馬鹿！落ち着け！」

踵を返した俺の肩を掴んで止めるクロイワ。それが更に頭に血を昇らせる。頭がかっかっと火照って、でも一部は冷静で、そのままその手を振り払った

そして、ポーチに手を入れる

「インベントリ：食料！スタッフ！」

「マギカ」初期装備の魔法触媒を取り出し、食料と共にクロイワに投げ付ける。クロイワは驚いていたが、そんなの無視してインベントリ内をサーチ。何か、何かないのか！？索敵系のアイテムは！？

「魔法の杖に食料だろ！？くれてやるよ！それにテントにサバイバルキット一式に各種治療薬だ！満足かっ！？お前はそこでしっかり準備とやらをしたらいいさ！俺は行くから！」

いらないアイテムを次々インベントリから投げ付ける。クロイワは呆然としながらも、それを身体で受け止める。妙に冷静なその姿が気に入らなくて、更に激情が膨れ上がる

とにかくもう、クロイワの顔が見ていたくなくて、俺は駆け出す

「待てよ！」

「っなんだよっ！？」

マントの裾を捕まれる。反射的にマントの留め具をはずしそうになるのをぐっと堪え、ボロボロ溢れてきた涙にうんざりしながら振り返る。クロイワは泣いてる俺にギョッとしながら、それでも言葉を繋げる

「お前が心配なんだよ！お前のためなんだ！バーサーカーは危険なんだよ！お前を危険に去らすわけにはいかないんだ！」

「関係ないだろっ！？相手が危険だから助けに行かないなんて理由にならないっ！」

「好きだからっ！」

――思考が止まった

涙も止まる

こいつは、何を言っている？

「一目惚れだ！お前が好きなんだ！だから危険なことなんかしないでくれ！俺の言うことを聞いてくれ！」

真剣な顔で、顔を赤らめて、

本気で、俺に告白しているクロイワに
怒りを通り越した、どす黒い殺意を覚えた
俺に惚れたから、俺に危険なことをしてほしくない？
…だから、オオジさんとカドヤを見捨てるつもりなのか？
俺に惚れたから、ヘラクレスと戦うなって言うのか？
そのために、クラスメイトの友人を見捨ててまで俺を取るのか？
「――は、はは…」
なんか、笑えてきた。クロイワが、真剣な表情で――俺の頬に触れる。だから俺は、
「俺は、お前みたいな奴が大嫌いだ」
その手を、振り払った
愕然としながら目を見開くクロイワ
「…ぇ…なん、…ぇ？…だって、主人公補正…ぇ？…いや、…フラれ…？」
時間を無駄にした
こんな奴に構っている時間なんかなかった。でも、頭を冷やしてくれたのは助かった。アイテム欄から知り合いの居場所を感知出来る

アイテムを取り出し、使用。感知対象にオオジさんを設定し、俺は走り出す。

背中に、やけに冷たくなった視線を感じながら

冷えた頭で、クロイワを捨てた

ＥＸ２　感情発露の違い（後書き）

レティーシアの中の人はネトゲ好きーでゲーム好きーだけど、サブカルにあんま詳しくなかったり

ｆａｔｅは第４次ランサーと第５次バーサーカーが好きだー

個人的な意見だけど、オリ主が「バーサーカー」なのに意識あるのって嫌。それならイレギュラーサーヴァントの方がいい

むっちゃぺらっぺら喋ってるけどね！つよしくん！

男性は激情すると本当に頭が真っ白になる場合が多いですが、女性は頭が真っ白、というのはあまりなく、激情にかられてもそんな自分を客観的に見ている冷静な部分があるそうで

逆、という人もいますが、今回はあえてコレで

今回のテンプレ

↓断罪オリ主

↓原作設定魔改造

↓オリ主はモテモテ

↓ファッション凡人有能オリ主

↓仲間割れ

プロローグ7（前書き）

ネタはあるのに書いてる時間がねーわ

今回ちょいヘタレました。ごめんなさい

プロローグはひたすら主人公追い詰めるシリアスで通したかったのになぁ…

プロローグ7

索敵アイテム――方位磁石のようなそれに従い、全速力で駆ける。
走るのに邪魔な弓はインベントリにしまい、木々に引っ掛かるマントもインベントリにしまい、速度強化をしながら森の中を駆ける。
ごわごわした地面も、通路に張った木の根っこも、不思議と走るのに邪魔にならない。――多分、山道を駆け抜け、モンスターを狩り続けたレティーシアの身体のお陰だろう

けれど――

「くそっ、また行き止まりかよ…っ！！」

方位磁石で指す方向にオオジさんたちがいるのは間違いない。だが、迷路のように入り組んだダンジョン内では――真っ直ぐに方向を示すだけの方位磁石じゃあ、はっきりとしたルートが分からない

こんなことなら火炎系の攻撃魔法を使えるようにしておくべきだった。そうしたら壁を焼き切って進めたかもしれないのに…！

歯痒い思いをしながら引き返す。どんどん離れるオオジさんたちとの距離に焦りを募らせる

それに――

ギャアギャアッ！と喧しい鳴き声。見上げれば、人間サイズの怪鳥が三匹。1階は地を走るモンスターだったが、2階は空を飛ぶモンスターらしい。蝙蝠や怪鳥、巨大な虫が主なモンスターだった

「邪魔っ！」

ミストラルを三連射。頭を撃たれて落ちてくる鳥を殴り飛ばしながらもう一度走る

走り続けて約１０分。倒したモンスターも手足の指だけじゃ数えきれないぐらいになったころ、どうやらようやく正しい道を見つけたらしい。通路の奥から聞こえる炸裂音。重い物を殴り飛ばすような鈍い音に嫌な予感を覚えながら、更に速度を上げて部屋に飛び込んだ

「っぅ――！？」

息を飲む。ヘラクレスが傷１つなしに立っている。それはいい。まだ良い。予想の範囲内だ

そしてその目前に――綺麗な毛皮を真っ赤な血で汚した、オオジさん。

そのオオジさんに庇われるように、うつ伏せに倒れたカドヤの姿

頭が一気に熱くなる。ミストラルを構え、メチャクチャに撃ちながら部屋に突っ込む

「なにっ！？」

驚きながらもヘラクレスは両手で額や胸元、喉といった急所を庇った。ミストラルの弾丸はヘラクレスの皮膚を貫きこそすれ、貫通することなくヘラクレスの腕に沈んでいく。ヘラクレスが苦痛のうめき声をあげた

「ぐぅ…いっ…きさ、まぁっ！！」

動きを止めたヘラクレスに向けて適当にトリガーを引きながら部屋の中を、決してヘラクレスに近付かれぬように縦横無尽に走り回る。怒り心頭といった様子で俺に向かってくるヘラクレスに背中を向けながら、視線は肩で息しながら苦い顔をするオオジさんと、間抜けな気の抜けたカドヤに固定する。

ひたすらトリガーを引き続けていると、簡単に人を殺せる道具を、エアガンか何かのように盛大に使いまくる自分が、何だか人間じゃない生物のように思えてくる

ヘラクレスにミストラルが効かない、なんて確証は無かった

あるいは、ヘラクレスを殺してもいいと思いながら、俺は、トリガーを引いている

――気味が悪い

平然と、人を殺そうとする俺と、

断罪とか言いながら、「殺人」を犯そうとするヘラクレス

本当に――気味が悪い

込み上げてくる酸っぱい汁をごくり、と飲み下し、涙で滲んできた視界をごしごし擦る。幸いヘラクレスは力も耐久力もリーチも圧倒的に俺より高かったが、速度だけは俺もヘラクレスに負けていない。それでも少しずつ距離は詰まる。

まだ準備は出来ていない。もう少し時間を稼ぐ。走り回りながら、ヘラクレスに向けて言葉を投げる

「何でお前はこんなことするんだよ！？」

「弱い生き物を守るためだ！」

間髪入れずに返してくるヘラクレスに、何だかモヤモヤした気持ちを抱く

ミストラルをホルスターにしまう。銃弾生成…全ＭＰ銃弾変換。完了まで２０秒。ヘラクレスの顔に明確な笑みが浮かぶ

「そんなこと、言うくらいなら――インベントリ：風のタクト！」

取り出したのは回復職用のレア度：Ｓのワンド。レティーシアの身長と同じくらいある白い杖。それを思いきり、地面に突き刺す

「人殺しまくってた奴はどうなるっ！？今まさに人を殺そうとしているあんたは何なんだっ！？――【奇跡よ起これ！リンクエイド！】」

俺の言葉に、ヘラクレスの動きがぎしり、と硬くなった。その隙に、念入りに準備したスキルを発動させた

回復ラストスキル。走り回った範囲内の味方のＨＰ、ＭＰ、全状態異常を回復させ、自動回復まで付与するスキル。代わりに、使用したプレイヤーのＨＰ、ＭＰが１になるという弱点があるが、それは味方がいるなら何の問題もならない。光が部屋を満たし、閃光弾を破裂させたみたいな一瞬の強い光。突然の光に目をやられたヘラク

レスが目を押さえてうめき声をあげる中、俺は、鐘の音を聞く。…エフェクト、『ガナスタ』と変わらないのか。光と共に鐘の音が収まり、

「後は…任せます」

完全に息切れした身体を壁にもたれかける

「おぅ。任せろ」

「…ぇ？ぁ…？う、うん？がんばる？」

そして、限界だったはずのオオジさんとカドヤが立ち上がる。目に見えて狼狽するヘラクレス

それを尻目に、オオジさんは革のパンツから煙草を取り出す。毛むくじゃらの手で器用にライターを操り、火を付けた。紫煙が森に吸い込まれていく

妙な緊張感に息を呑む。こっそり回復してきたＭＰで自分のＨＰを回復しながら、妙な雰囲気で向かい合う3人を見つめた

「ガキども。お前ら、いくつだ」

「「…は？」」

カドヤとヘラクレスの声が被った。…ごめん。俺も、「え？」とか言っちゃった

「いくつだ？年だ。年齢」

「…え、僕は１５…」「貴様に言う必要はない…」

「俺は、２８だ。そして、俺には大っ嫌いなモンが３つある」

「「…？」」

首を傾げるカドヤとヘラクレス。…そんな中、俺は、ぞくりとした寒気を感じていた

例えて言うなら、ネタ装備でＳランクモンスターと対峙しているような

例えて言うなら、街中でばったり会ったのが、嫌いな上司だったような…

嫌な、予感。

「１つはなぁ…」

オオジさんの手が、伸びる。がしり、と掴んだのは――カドヤの、頭。「へ？」と間抜けな顔をするカドヤ。

俺は、これから起こることが予想出来て――思わず、両手で顔を覆った

「１つはなぁ！女を泣かせる男ぉ！！」

「「ギャアッ！？」」

ぐちゃっ！！と鈍いのに水っぽい音。

「2つ目ぇ！ごちゃごちゃめんどくせぇ建前で自分を守る女々しい馬鹿ぁっ！！」

「「ギィアッ！？」」

ばぎぃっ！と生木をぶつけたような音。

「3つ目ぇ――っ！！」

轟っ！と風を切る音。髪が、服が、衝撃と発生した風でバタバタとはためいた

「大人の話を聞かねぇ糞餓鬼だぁあああああああッ！！」

ぎゅちゃあっ！としか形容できない凄まじい音。恐る恐る顔から手をどければ…ぅわぁ

恐らく殺してはいないんだろう。仰向けで倒れたヘラクレスの顔面に、髪が黒く染まったカドヤの額がめり込んでいた。両方とも手足がびく…びくっ！と時折思い出したように痙攣していて、凄く恐い

「ったく、逃げるぞっつてんのに逃げねぇわ。意味わかんねぇ屁理屈を押し通して人の話を聞かねぇわ…。親の顔が見てみたいぜ」

ぶつぶつ言いながらパンパン、と枯れ草や埃を払い落とすオオジさん。…なんか、ごめんなさいと言いたくなる。っていうか意外と年いってたんですね

大分身体も回復してきたので、オオジさんに歩み寄る

「…その、殺した…のか？」

無い、とは理解っているが、つい聞いてしまう。オオジさんは鎧に煙草を押し付けて揉み消しながら、俺に視線を向け、

「…おめぇーみたいなの前で人殺しはしねぇーよ」

と言う。言いながら、毛皮が俺の頬を擦る。一瞬遅れて涙の跡を拭われてるんだと気付き、何だか恥ずかしくってその手を振り払う。オオジさんはけらけら笑った

「とにかく、カドヤ起こして逃げんぞ。ああいう自分の正義云々語る奴相手にするのは仕事だけで充分だ」

…どんな仕事してたんだよ。あ、いや。警察官だっけ？…警察官？トラのお巡りさんとか想像したらちょっと和んだ

「よく気絶させられたな…」

「カドヤがまぞく化？とかいうのをすっとメチャクチャ硬くなるんだよ。で、硬くなったカドヤで人中をひたすら殴った。頑丈だから三発やんねぇと気絶しなかったがな」

…この人絶対警察官じゃねぇ

そう思いながらも、オオジさんがヘラクレスを殺していないことに安堵する。ヘラクレスに抱いていたモヤモヤは、いつの間にかなくなっていた

その時、カドヤがふらふらと立ち上がる。すわヘラクレスも起きたかっ！？と警戒するが、どうやらそれはないらしい。安堵に胸を撫で下ろした

カドヤ、逃げるぞ。そんな風に声をかけようとした俺の耳に、カドヤの声が響いた

「――ころす」

…　ぇ？

いや、何言ってるんだよ

殺さずに終われそうなんだぞ？

大円団だ。これで皆で笑っておしまい、だろ？

理解出来ない

景色が、カドヤの行動が、やけにゆっくり見える

「ころしてやるっ！いまじんぶれいかーならごっどはんどもむこうかできる！よくもぼくをこんなめにあわせたな！ころしてやる！」

カドヤが意味の分からないことを叫びながら右手を振り上げる

「くらえ！いまじんぶれいかーっ！」

意味が分からない。何でそんな事をする必要がある

そして、拳がヘラクレスの顔にぶつかり

ぱきぃん、とガラスの砕けるような音がして

「2人」の身体が、粉々に砕け散った

「――ぇ？」「なっ…！？」

カドヤの右手――手首から先だけが、そのまま地面に落ちる。ぱきぃん。地面が砕けた。ぱきぃん。ぱきぃん。ぱきぃん。ぱきぃん。断続的に響く音。致命的な破壊音。小部屋に出来た小さな右手サイズの穴が、ダンジョンの崩壊に繋がっていく

「っ！？捕まれガキッ！」

「オオジさんっ！？」

オオジさんに抱き寄せられる。冷たい鎧の感触と、獣の匂いに血の匂い。僅かに香る煙草の匂い。一瞬呆気に取られつつも、どうにか正気に戻る。

ぴきぱきぴきぱきっ！と次々広がるダンジョンのヒビ。ついさっき経験したばかりの床の崩壊。でも、今回はどこまで落ちるか分からない。何が起こってるのか理解出来ないまま、とにかく手を伸ばしてオオジさんの後頭部をカバーする。レティーシアの小柄な身体は

オオジさんの巨体にすっぽり覆い隠されている。これで俺を守ってオオジさんだけ死んだ、なんて言ったら、死んでも死にきれない

そうして、俺は――俺達は、崩壊に巻き込まれた

――クロイワ、生きてるといいんだけど

プロローグ7（後書き）

超能力だろうが「神様の奇跡」だろうが打ち消す「幻想殺し」っ！

…普通に神様転生パワーも打ち消しちゃうよね

そして神様が作ったダンジョンも破壊しちゃった件

強いなぁイマジンブレイカー

新キャラがどんどん消えてくよー

ちなみに

【ディスペル】について

ディスペルは『ガナスタ』の戦闘不能以外の全状態異常治療呪文です

だから【毒】も【魅了】も治せるよ！

【金成　剛】について

ヘラクレスことバーサーカーな彼

実は苛められっ子でちょっと調子に乗っちゃいました

↓断罪オリ主にしちゃＤＡＮＺＡＩの理由が強引すぎね？

この質問には彼なりの答えがあります

「だって人殺しと戦うなんて恐いじゃん」

俺の中のＤＡＮＺＡＩオリ主ってこんなイメージ

無茶苦茶な理由で自分勝手に「ＤＡＮＺＡＩだっ！」みたいな

今回のテンプレ

↓そげぶっ！

プロローグ8（前書き）

やっとプロローグの終わりが見えてきた…

プロローグは１０で終わりの予定

…ここまで連続更新した自分を誉めたい…！

あと、今回の話はちょっと今までと毛色が違う?と思うかもしれませんが

作者が書きたかったのは、こういう話です

プロローグ8

…どうやら気絶していたらしい

ぼんやりとした意識が、ゆっくりと浮上する。暖かい毛皮の感覚に安心しながら、もっとくっつきたい。とその毛皮に抱き付いた。昔飼ってたゴンベー…セントバーナードのような匂いに、自然と頬が緩む。僅かに湿った毛の感触が、素肌にチクチクとくすぐったい

「…んん…」

「おう、起きたか？」

僅かに揺さぶられる感触。聞こえた声に目を開けば、黄金色の毛皮と、虎の顔。…だれだっけ？

「…おーじさん…？」

「…オジサンみたいに呼ぶんじゃねぇ」

「おーさん…」

「誰があだ名を付けろと」

ごつん、と額を叩かれる。そのショックでようやく意識が覚醒した。…胡座をかいたオオジさんの足に、横抱きにのせられてる？…何で？

「大分下に落ちちまったみたいでな。湖に落ちたんだよ。身体を拭けるもんも燃やすもんもねぇのにお前がガタガタ震えてんだから仕

方ねぇだろ」

…ああー。成る程。雪山で暖を取るには…ってやつか。確かに暖かい。また眠くなってきた目を擦りながら、ふぁああ、と欠伸するオオジさんの顔を見上げる

「…オオジさんは？怪我とかは…」

一体どれくらいの高さから落ちたのか分からないが、瓦礫に巻き込まれたなら怪我をしていてもおかしくない。ＭＰが全回復しているのを確認しながら聞けば、オオジさんは肩を竦める

「頑丈なんだよ、俺ぁな。お前は痛いとこねぇか？ぱっと見怪我はねぇが…」

「ん、だいじょ…ぶ？」

痛いところが無いのを確認しながら手足を動かす。…と、身体にかけられていた湿った布がずれて、白い肌や薄い胸、小さな臍があらわになった

…はだ、か？

「お…おーじさん…？」

早鐘のようになる心臓。まさか、そんな。だって。そんな言葉が頭をぐるぐる回る。この人は、この人だけは、大丈夫だと思ってたのに。武器がないことに絶望しながら見上げる

けれど――

「濡れた服着てたら風邪引くだろうが」

――オオジさんは、俺の裸身を見ても…一切なんの反応もしなかった

まるで幼稚園児の裸でも見たかのような、淡白な反応

余りに動じないオオジさんに、妙な怒りが沸く。…無駄に恐がらせやがって!!こちとら散々男にトラウマ抱えかけてんだぞ!?察しろとは言えねぇが、（見た目）女の子に気を使うとかねぇのかっ!?

「こんの――」

「ぁん？」

首を傾げるオオジさん。その間抜け面に向けて、

「変態がーっ!!」

「ガッ…っ!?」

怒りのままに繰り出したアッパーが、オオジさんの顎を綺麗に打ち抜いた

「スケベ親父」

「10年後ならともかく、今のお前じゃなぁ…」

尻尾引き抜くぞテメェ

ビショビショに濡れた装備品をインベントリにしまい、乾かしてからまた着る。オオジさん…いや、おっさんで充分だな。おっさんの革のズボンとガーデンガーディアン…鎧も乾かしてから渡すが、おっさんはそれよりもズボンのポケットに入れていたタバコが心配らしい。すぐさま取り出して火を付けようとする。…そして、情けない顔をした

「…湿気ってやがる。ライターもイカれてる」

「ざまぁみろ」

殴られた

それはともかく。周りを確認する。鍾乳洞のように天井から岩が垂れ下がっていて、すぐ近くに湖がある。室内とは思えないくらい広い。そして、俺たちのいる場所のすぐ後ろには上りの階段。

カチカチカチカチ。

天井を見上げると、完全に崩れているところがあって、そこから光が差し込んでいた

カチンッ、カチンッ、カチンッ

…でも、下りの階段がない

カチッカチカチカチ

ダンジョン最下層、ってことか？でも、それならボスモンスターとかがいそうなもんだけど…

「くそっ、高かったんだがなぁこのジッポー…。この世界で煙草手に入るか分かんねぇし…。おっ！？お、着きそう、着きそう、…よし、よし頑張れ…よし！ジッポー復活！高いだけあるじゃねぇか！」

「おっさんうっさいわっ！？」

いい年して何はしゃいでやがるっ！？嬉しそうに火の付いたジッポーを見つめるおっさんに石を投げ付ける。あっさり弾かれた

「バッカお前バァーカッ！！喫煙者にとってどんだけ煙草が大切か分かってねぇだろバカ！！やたら強い政府からの風当たりにも世間の白い目にも負けず煙草吸い続けてきたおっさん舐めんなバカッ！お前の肺も真っ黒にしてやろうかっ！？」

「恐いよバカッ！意味わかんねぇよバカッ！どっちにしろタバコなんかビチョ濡れで吸えないだろバァーカバーカッ！」

「…だよなぁ」

いきなりテンション下げて落ち込むおっさん。尻尾も髭も力無く項垂れるその姿に罪悪感がむくむくと広がる。ため息を吐きながらポ

ーチに手を入れ、

「インベントリ：シガレッソウ」

手のひらにギリギリ収まらないサイズの白い木の箱を取り出し、おっさんの顔に投げつける

「ぐぁ…あ、あんだこりゃ…？」

おっさんの顔に当たってから、ぽとりとその手元に落ちる白い箱。おっさんがそれを開けると、葉巻くらいの太さと長さのある紙巻きタバコによく似たそれが、１０本

「シガレッ草だよ。さっきのタバコと多分似たような味。調合で簡単に作れるから、欲しけりゃ言ってくれ」

ＶＲ内でもタバコを吸いたい、という中年プレイヤーのためのアイテムだったんだけどな。…何が役に立つか分からないな。ゲームの時は禁煙中のプレイヤーの心のオアシスだったらしいが。幸いシガレッ草自体も薬品調合クエストのおまけ報酬でいっぱい貰ったから、ＭＡＸまで所有してる。それに、シガレッ草はネタアイテムだから適当な「植物」アイテムから調合できる。多分「錬金術」スキルもあるし、この世界のアイテムからでも作れるはずだ

「お…おぉ…おぉぉぉ…！！」

…なんかおっさんのテンションがおかしなことになってた。それにドン引きしながら離れて見ていたら、おっさんはさっそくシガレッ草を口にくわえ、火を着ける。そして、実に…実に美味そうに、紫煙を吐き出した

「――俺、お前に会えて幸せだわ」

「そりゃどーも」

ふへっ、と乾いた笑いが漏れた

ニッコニコ笑いながら嬉しそうにタバコを吸うでっかい虎が、ちょっと可愛く見えて困る。それに困惑しながらも瓦礫の中からミストラルを発掘。ＳＳランク以上の武器には盗難防止と破壊耐性がデフォルト装備になってるから、意外とあっさり戻ってきた。それに安堵しながら弓やらマントやらをフル装備。

ようやくほっとした。策敵してモンスターがいないのは確認していたが、武器がないと落ち着かない。

「…クロイワみたいなやつもいるしな」

あの非常時に「あなたがーちゅきだからー」。アホかと。そんな呟きが聞こえたのか、おっさんが「そういやクロイワどうした？」と聞いてきたので、「おっさんとカドヤ見捨てて逃げた！」と返す。おっさんは変な顔をして、あちゃー、と言わんばかりに顔に手をやる。

「…なんだよ」

自分でも分かるくらいに不機嫌な声に、おっさんは肩をすくめた

「いやなに。大したことじゃねぇやな。…それより、早く上に戻るぞ。俺ぁ腹が減ってー―」

『やぁ、ようやく動く気になったかい？』

おっさんの言葉を遮って、やたら楽しそうに笑いながら現れた美女に、身体を硬直させた

『まさか初心者用のダンジョンとはいえ3日もしない内に最下層まで来れる人間がいるとは思わなかったよ。最後の扉の前に設置した邪竜をどうやって突破したのか知りた…なるほど！反則気味だが面白い！まさか天井をぶち抜くとは！やはり人間は神の予想を簡単に超えるね！』

嬉しそうに笑う美女。指一本動かせないほどのプレッシャーに、おっさんと2人で硬直する

『やれやれ、ルールはルールだからね。一番最初にこの最下層まで到達した者に、更なる能力を与えよう。さぁ、どんな力が良い？2人でよく相談して決めて構わないよ。レティーシアにヒカルくん』

「ひかる言うな！…ったく、どういうことだ…？」

反射的に返したらしいおっさん。よくこのプレッシャーの中で平然と喋れるなぁ。なんて場違いなことを考えながら、滴り落ちる脂汗を拭う

『ふむ？ルール説明…そういや説明のときは鬱が入ってたから面倒で省略したんだったね。この初心者用のダンジョンを最初にクリアしたら、何でも好きなチート／いんちきを1つだけあげるよ。って話。分かりやすいだろ？』

…確かに、分かりやすい。…けど、正直チートなんて言われても咄嗟に思い付く訳がない。この邪神のことだから「デメリットないよー」みたいなお約束は期待できないし…

「ガキ、俺が貰っていいか？」

「…ぇ、あ。うん。いいけど」

…おっさんが、わざわざ？疑問を持ったのは俺だけじゃなかったらしい。美女が、面白いものを見た。そんな顔で邪悪に笑う

『いいだろう。言ってみな』

「ダンジョンで死んだ人間を生き返らせられる力をくれ」

『ダメ。つまんない』

おっさんの発想に驚愕し、即答で返ってきた美女の反応に愕然とする。だが、おっさんは予想してたんだったんだろう。「やっぱか…」と呟き、頭をボリボリ掻いた

「…なら、人間になる能力をくれ。聞いたぜ、この世界…俺みたいな【人のような獣】は全部魔物で、討伐対象になるんだろ？」

「なっ！？」

なんだそれ…！？無理ゲーとか鬼畜とかいうレベルじゃねーぞっ！？

怒りを込めて美女を睨み付ける。だが、美女は俺の怒りなんか歯牙

にもかけず、くすくすっ、と上品に笑った

『オーケーオーケー。中々頭は良いようだ。楽しいね。スキルに【人化】を追加しておこう』

美女が手を振る。見た目には何も変わらないが、スキルは追加されたんだろう

『ただし、完全に人間になるスキルなんてつまらないだろ？【獣のような人】に変身する能力にしておいた。喜んでくれ。ちゃんと面白い言い訳をきかせてくれ。…うん？なんだいレティちゃん。ああ、安心していい。この世界にもエルフはいるよ。ほとんどが森の中に隠れて住んでて、残りはその美貌から人買いに拐われて、性奴隷になってるけどね。君も拐われないように頑張ってね？』

「…っ」

吐き気を催すような情報に、目の奥がズキズキと痛む。尚も美女は楽しそうに笑った

『そうそう。

現状、トリップ勇者の数が３８人。

人外系が君達２人、
洗脳系１３人。
特撮系３人。
魔獣変化６人。
戦闘系６人。
特殊系８人。

他、死亡。

たった2日で62人も死ぬとは思わなくてさ。追加を用意した。62人の【転生系勇者候補】をこの世界に年代、性別、性格、種族、全てバラバラにばらまいたから、協力するなり利用するなりして頑張って【魔王】を倒してくれ。この情報、上で生き残ってる人達にも教えておいてね?』

にこっ、と笑い――美女は、プレッシャーに動けない俺と、おっさんの頬に口付けした

『ヒカルくんにレティちゃん。君達には期待してるよ…。神様のご加護だ。がんばっておくれ?』

けらけらと笑いながら、美女は消えていく

固まったまま動けなかった俺達は、美女が消えると同時に意識を失った

プロローグ8（後書き）

ダンジョンは一部は壊れたけど残ってますよー

というか修復されつつありますよー

でも戦闘系…というか最低系の大半はこれで死んだ！やっとオリ主（善）とか変態（笑）とか出せる！

あ、それと感想板にキャラクターを書いてくれている皆様

…書いてくれたキャラクターが出てくるかどうかは解りません

そして、仮に出てきてら、酷い目に合っても笑って流してください

準主役級の扱いじゃないと嫌だ！

というのは…ちょっと困ります

今回のテンプレ

↓暴力系ヒロイン（笑）

↓ご都合主義

↓便利アイテム

↓親切（笑）な神様ｗｗｗ

↓転生オリ主

プロローグ9（前書き）

たくさんの感想ありがとうございますっ！

特撮系への食い付きが良すぎて笑ったｗｗｗ

プロローグ9

…湖のほとりで二回目の目覚め。おっさんの姿は無かった。…どこに行ったんだろう。なんとなく、そこまで遠くに行ってはいない感じなんだけど

レティーシアへの憑依、邪神、人殺し…色々あったけど、色々あったからこそ…1周回って落ち着いてきた。いつの間にか口の中に入ってきていた髪の毛をぺっと吐き出し、そのまま湖で顔を洗う

ぐしぐしと顔を拭い、ふぅ…と一息。まだ2日も経っていないのに、水に映る『レティーシア』の顔に違和感を覚えなくなりつつある自分に苦笑する。…人間の順応性って凄いなぁと他人事のように考えた

…なんだろう。あの邪神にほっぺにちゅーされたせいか?妙に頭が冷えてる。冷静になったっつーよりは…冷めた?テンションが凄く下がった気がする。

こんな世界で日本における『まともな』倫理観を振りかざしてギャーギャー騒ぐ滑稽さ加減を頭で理解したような…。…いや、人殺しはしろとは言わねぇよ。むしろ頭が冷えたからこそ、あの白髪の少年やヘラクレスがあっさり殺人を犯せたことが不思議でならない

けど、無理矢理テンションあげて殺したり、変に殺したことや、殺すときに苦悩するのって…変だよな。「俺は今から生き物殺すんだぜ!恐いんだぜ!辛いんだぜ!でもそんな苦悩する俺カッコイー!」みたいな

「…殺すときは殺せ、ってか?かっこいいな、レティーシアは…」

水に映る顔に、にっと笑いかける。独り遊びみたいなもんだけど、なんとなく…なんとなく、『レティーシア』に近付けた気がする

「…よしっ！」

顔をパンパンッ！と叩き、気合いを入れる。じんじん響く熱さにちょっと強く叩きすぎたと後悔しながら、思いっきり右手を真上に突き出す。頑張るぞー！えいえいおー！

「…なにやってんだお前」

「へぇいっ！？」

慌てて声がした方に視線を向けたら――知らない男が立っていた

身長は１８０を越えたくらいか？根本が黒い黄金色の髪は背中に届くくらい長い。前髪をオールバックにまとめ、ざんばらに切られたふさふさした髪を首の後ろで縛っている。…銀色のリボンで。っつうかアレ、俺のミスリルリボンじゃん。肌は浅黒く、剥き出しの上半身は鍛え上げられた鋼の肉体美。右手にガーデンガーディアンをずるずると引き摺りながら、水滴を垂らしてぺたりぺたりと歩いてくる。裸足かよ

「…おっさん…か？」

「おう」

軽い返事。彫りの深い、無精髭の生えたワイルドな顔立ち。右の頬骨から、鼻を通って左の頬骨まで続く一本の氏康傷。切れ長の瞳は

金色で、妙に黒目がデカい。…暗いから、だろうか。改めて猫なんだなぁ…とどこか的外れな感想

まぁ、これだけ見たらただのチンピラヤクザだ。どこにもでっかい虎だったおっさんの面影はない

けど――

ぴくぴくと時々動く三角の耳、くねくねとご機嫌に揺れる虎模様の長い尻尾。正面からは見えにくいが、背中は首から腰まで獣毛に覆われ、爪や唇から覗く犬歯も妙に長く、鋭い。

ぽかーん、と半口開いておっさんを見つめていると、おっさんはやおら口元に手を当て

「言っとくが、ヒゲは剃れねぇぞ」

「ああ、猫のヒゲは切ったりしたら駄目なんだよな…。ってそこじゃねぇよバカッ！」

「誰がバカだクソガキ！」

殴られた。

じんじんする頭を押さえながら、涙目で睨み付ける

「なんでそんなイケメンなんだよっ！？意味わかんねぇ！ああっ！？眼鏡外したらイケメンですってか！？虎から人になったら美少女ですってか！？意味わかんねぇよ！」

「うるせぇ！意味わかんねぇのはテメェだろうが！この顔は地顔だっ！」

…はぁっ！？

…ぇ、いや待てよ。おっさんって警察官だろ？公務員だろ？で性格もかなりの人格者だろ？明らかに鍛えてる肉体美だろ、さっき見た感じ頭も良さそうだろ…？なんだこの勝ち組っ！？意味わかんない！ほんと意味わかんない！

「お、おっさんのバーカッ！バカァーッ！」

「なんで泣くよ…？」

がっくりと肩を落とすおっさん。あまりの戦力差に溢れてきた涙を拭きつつ、頭から水を被って湯だった頭を冷やす。おっさんが可哀想な子を見る目で俺を見てるけど、気にしないでおく

「スキル：人化を試してみたんだがよぉ…。裸足で痛ぇし、鎧はいてぇし…お前、なんか靴とか服とか持ってねぇ？」

「…ぐすっ、あるけどさ」

涙を拭いながらインベントリ内を検索。男性用で、尚且つサイズが合うのっていったら【ナイト】用の装備だよなぁ…。ピンキリだけど、おっさんはそんなの気にしないだろ

「ズボンは？」「あるからいらね」「インナーとか…」「適当でいいわ」「鎧は？」「これだけでよくね？」「駄目。ってかリボン返せよ」「やだ。髪の毛鬱陶しいんだよ。靴くれ靴」「態度でかいな

ぁ…。いやいいけどさ。兜は耳あるから無理だよなぁ…武器はー？」
「…棒とかあるか？警棒みたいな…言ってもわかんねぇか」「…槍とかでいいの？銃術スキルなかったっけ？」「…警察だからってパンパン銃撃てると思ったら大間違いだぞ。そりゃ、一般人よか知識はあるけどよ。…言ってもわかんねぇだろうが」「ふ～ん…。まぁいいや」

ゴチャゴチャやりながらインベントリからアイテムを引きずり出す…引きずり出…重い！

「おっさん！手伝って！重くて持てない」

「はぁ…もやしが」

ぼそっと言ってたけど聞こえたからな！憤慨しながらも腰に付けてたポーチをお腹の方に回し、おっさんに背中側から手を伸ばしてもらう。ちょうど背中から抱き締めるような形で、俺が触れた装備品をおっさんが引きずり出す。あっさり持ち上がった

「…むぅ」

「ぁん？どうした」

「…いや、何でもない」

背中に触れた固い筋肉の感触。僅かに残った獣の匂い。俺の腕を取った手はごつごつしていて、大きくて、固かった。

「女」の身体で感じる「男」の感触に、複雑な感情を抱く。…喪失感、後悔、悲しみ。この辺はまだ分かるけど、なんか…その…妙に、

心臓が早く動く。…ってか、エロい。エロい匂いがした

「…エロ親父」

「お前…。キャラ違くね？なんか子犬みてぇにキラッキラした目で俺見てたガキはどこいったよ」

じと目で睨んだら、なんか呆れた顔された。それにベーッ！と舌を出してから…自分自身に凹む

俺こんな子供っぽかったけっ！？いくらエロ親父って思ったからってそれを口に出すようなキャラじゃなかったじゃんっ！身体に言動とか行動が引きずられてるってか！？なんだよアッカンベーって！？子供かっ！

「…だ、大丈夫か…？頭とか…」

頭を抱えてうんうん唸っていたら、なんか凄い心配された。…頼むから放っておいてくれ

数分悶えていたものの、さっさと立ち直っておっさんの装備を付けさせていく。ズボンも脱いで欲しかったのだが、「マッパになれとかねーわ。お前も女なら男に気を使え」とか言われたのでとりあえず引き下がる。…でもなー、俺は剥かれたんだよなー…。いや、パンツは履いてたけどさぁ…、「いでで。サイズあってなくね？痛いよ？イジメかこら。復讐か？」「ちげーよ！締め付けなきゃズレるだろうが！戦闘中にぶっかぶかの装備は危険なんだよ！」とか喧嘩しながら装備を整えていく

１５分程で装着し終わり、俺は完成したおっさんの装備を満足げに

眺める

黒い身体にフィットするアクセサリ2、「ドラウプネル」。長袖のタートルネックのようなそれの上から、銀色に輝く胸鎧。手首から肘までを覆う銀色の金属製の籠手、「シャープナガード」。割れた腹筋から下がっていき、腰装備は尻尾が邪魔だったので革のベルト。そしてピッチリした革のパンツと、膝まで覆う金属製の「ミスリルシューズ」。魔法耐性と防御力上昇系で固めた装備だが、悪くない。最後に背中にレア度A、「ミスリルランス」を背負わせる。

おっさんがイケメンなお陰で、一流の戦士みたいな雰囲気だ。中々の出来映えにうんうんと頷くが、おっさんは微妙な顔

「…素敵にファンタジーだなおい。おっさんの猫耳とか誰得だっつーの。しかも槍かぁー…槍ねぇ…使ったことねぇっつの…」

「…やっぱ銃にするか？」

「いちお、一個くれ」

あいよー、と答えつつ、少し迷った末にレア度Bの「トゥルーフガン」を取り出す。弾薬と一緒に。レア度Aを超えるとおっさんが嫌がりそうなデザインになってしまうので、銀色の「トカレフ」みたいなデザインのコレになってしまう。…後、壊されてもいいのってこれくらいだし。銃系の武器は俺もあんまり持ってないんだよ…

おっさんは安全装置を確認、マガジンに弾が入ってるのを確認し、初弾を装填。乱暴に腰に突っ込む

「ごめん、ホルスター1つしかなくてさ…」

「気にすんな。どうにでもなる」

ぽんっ、と軽く頭を叩かれる。何故か不器用な慰めに余計に罪悪感を募らせながら、食糧をインベントリから出し、しばしの休憩

「出来るだけ早く上に戻るぞ。既に62人も死んでんだ。これ以上殺し合いは避けたい」

「…ん。分かった」

干し肉をワイルドに噛み千切りながら言うおっさんに頷く。確かに、俺だってこれ以上仲間割れは避けたい。…まぁ、あっちは仲間と思ってるのか知らないがな。俺だって仲間と思えない奴ら一杯いるし。…ってかこの干し肉めちゃくちゃ不味いな…。なんでおっさんは普通に美味そうに食えるんだ?…あ、チーズ美味しい

腹が膨れてきたので、ある程度でやめておく。ちょっと食い足りなかったけど、おっさんが「食い過ぎると動けなくなる」と言うので大人しく聞くことにした

そして階段を昇っていく。…なんか邪神が言ってたような気がするけど…なんだっけ…?

意外と階段は短く、すぐに扉に行き着いた。おっさんが先陣を切り、無造作に扉を開く

『グルルルル…』

閉めた

…でっかい蜥蜴…いや。黒くて、でかくて、目が金色で、凶悪そうな外見のドラゴンと、目が合った

おっさんと顔を見合わせる

「…帰れなくね？」

「…帰れない、よね」

2人で一緒に、頭を抱えた

プロローグ9（後書き）

変態が出せなかった…だと…っ！？

本当ならドラゴンスルーして行く予定だったんですが…

オオジさん人間ｖｅｒの描写が楽しくって文字数限界が…なので方針変更

予想以上に特撮系への食い付きが良かったから、特撮系の性格に上方修正加えたんだぜ！

本当は

仮面ライダーカブト↓だが「天道さん」じゃないから変身出来ないとかそういう系統ばっかだったんだけどね！

今回のテンプレ

↓初期からチート装備

おまけ

『ガナスタ・クエスタ』風オオジさんステータス

名前：ヒカル＝オオジ

性別：♂

種族：ワータイガー

年齢：２８

レベル：４

ジョブ：ウォーリアー

ＨＰ：１４８０
ＭＰ：０（ＭＡＸ９９９）

筋力：９９（ＭＡＸ９９）
体力：９９（ＭＡＸ９９）
魔力：０７（ＭＡＸ９９）
器用：５１（ＭＡＸ９９）
速さ：７９（ＭＡＸ９９）
運　：４９（ＭＡＸ９９）

スキル

銃術ＬＶ２（銃攻撃ダメージに＋２０％）
拳闘術ＬＶＭＡＸ（素手のダメージ＋１００％）
捕縛術ＬＶ５（５０％の確率で対象を無力化）

狂化（理性を失いステータス5段階上昇。敵味方判定不可）
獣化（獣の姿と化しステータス3段階上昇。武器使用不可）

人化（外装を人に変化。器用さ2段階上昇。筋力、体力、速さが2段階下降）

装備
メイン武器：ミスリルランス（レア度A。突撃槍。突属性。魔法耐性。ポールランス）
サブ武器：トゥルーフガン（レア度B。魔銃。装弾数24発。替えマガジン有り）
防具：
頭：ミスリルリボン（魔法耐性。）
胴：ガーデンガーディアン（即死無効。状態異常発生確率半減。防御力上昇）
腕：シャープナガード（回避率上昇。防御力上昇）
腰：革のベルト（速さ上昇）
脚：ミスリルシューズ（魔法耐性。防御力上昇）
アクセサリ1：ディティクトグラス・黒（敵ステータス解析。黒いサングラス）

アクセサリ2：ドラウプネル（魔法耐性。防御力上昇。）

プロローグ終（前書き）

結局キンクリしちゃったい

でも動きが無いから仕方無いよねぇ…

プロローグ終

カリリ、と岩に印を刻み込む。１、２、３…やっと３０日目か

ドラゴンのせいで帰ることも出来ず、湖しかないから進むことも出来ない。俺たちは完全に行き詰まり、この場で生活するしかなくなっていた

１つだけ幸いだったのはこのダンジョンは１ヶ月ほどで消える、と邪神が言ってたことだ。インベントリ内に食糧はあったし、湖があるから水には困らない。一人だったら孤独感でどうにかなっていたかもしれないが、おっさんもいたしな

それに――レベル上げにもなったし。

地下一階でアレだけモンスターを倒しても俺のレベルは１、おっさんのレベルは２だった

けど、この湖から時々這い上がってくる、魚人のようなモンスター「インスマウス」や、時々物影からいきなり飛び出してくる「フロウエン」という影で出来た狼みたいなモンスター。インスマウスは鉄の固さを持つ鱗と巧みな槍さばき、そして魚顔のくせに口から火を吹くというメチャクチャ振り。フロウエンはそもそも物理的にダメージを与えられないというチート／いんちきっぷりだ。不定期に襲ってくるそいつらを苦労して倒したお陰か、俺達のレベルはそれなりに上がっていた

具体的には、俺がレベル７。おっさんがレベル１０だ。これが高い方なのか低い方なのかは分からないが、多分…うん、多分悪くない、

はず。

「おっさん、今日でさんじゅ…」

振り向きながら、まだイビキをかいていたおっさんに声をかければ――そこにおっさんの姿はなく、おっさんが腹にかけていたタオルケットだけがあった

「…おっさん？」

とりあえずテントやタオルケット、水筒や置きっぱなしのミスリルランスをインベントリにしまい、周りを見渡す。…いない？また水浴びか？

首を傾げた瞬間、ぐいっ！と襟元を捕まれ、無理矢理引き上げられるような息苦しさ。思わず「かふっ…！」と息を詰まらせた瞬間、目前に広がっていた湖が急速に遠くなる。どぷん、と水に飛び込んだような音と共に、俺は真っ黒い空間に投げ出される

「うわっ！？うわっ！？うわわわ…っ？」

「おーし落ち着けガキ。危険はねーよ」

ぼふ、と頭に置かれる大きな手のひら。最近慣れ親しんだそれに安心しつつ、無重力空間みたいな真っ黒い空間の中でどうにか体勢を立て直す

「ここは…」

「さぁなぁ…。嫌な予感しかしねぇわ」

火の着いたタバコをくわえながら苦い顔をするおっさん。…タバコ、吸えるんだ…。と暢気な感想を抱く自分に苦笑いしつつ、キョロキョロ周りを見回し――

「ぶっ！？」

「あん？どうし――ぶっ！？」

吹き出した。

俺の視線の先には――その、何て言うんだろう。変態がいた

下着が見えそうなミニのワンピースから覗く逞しい太もも。剥き出しの上腕は血管が浮き、大胆にカットされた胸元を盛り上げる分厚い胸筋。唇にはルージュが引かれ、撫で付けた髪には色とりどりのリボン。大きな足を納める赤いハイヒール

そして――その容姿は

＞ｉ２５３８８―３２５４＜

「ラ、ラ○ボー…？お、俺の憧れが…俺の勇者が…ロ○キーが…！？」

「ぇ、ぇ、ぇ～…。おっさんがかつてないくらい落ち込んでる…」

とっても有名な俳優にそっくりだったのだ

アレか？彼…彼？の理想があの俳優だったってことか…？お、怒ら

れるぞお前っ！げ、原作ファンとかに！

背中に背負ったマシンガンっぽいのとランチャーっぽいのをガチャガチャ鳴らしながら、げっそりとやつれた黒髪、黒目の少年をズリズリ引き摺りながら現れた変態（仮）は、俺達を目視するなり目を輝かせた

「アラやだイケメンっ！」

びくっ！？とおっさんが跳び跳ねる。それを良いことに、おっさんの後ろに隠れる俺。おっさんが涙目で俺を見下ろす。目を逸らす俺

「それにかんぁいらしぃん美少女まで！」

「ひゅいっ！？」

変な声が口から漏れた。泣きながらおっさんを見上げる俺。にやりと笑いながら俺を盾にするおっさん

変態（仮）はそんな俺達の態度に臆することなくズルズルと少年を引き摺りながらこちらに近付いてくる。アップになればなるほど逞しい筋肉がピクピクと自己主張して、俺はあわあわと声にならない声を漏らす。恐い怖いドラゴンより恐い！？

「あたし星　伸一！生粋のオカマよん。勿論日本にいたときからね！ホシちゃんかシンちゃんって呼んでちょうだいっ☆。こっちは阿部孝治くん。人見知りさんだけど仲良くしてあげてねん。可愛らしいお嬢ちゃんと…」

ギラリ、と獲物を狙うような目でおっさんを見つめる変た…ホシ、

ちゃん…

「カッコいいお兄さんのお名前わん?」

ぞくぞくぞくっ!と悪寒がせり上がり、気が付いた時には口が動く

「れ…れ、れてぃーしあ…です…お、おっさんは…ひ、ひかる…です…」

凄い震えた声が出た

「あんで下の名前教えちゃうの!?馬鹿なのお前!?ホント馬鹿なの!?」

「だってこえーんだよーっ!!」

オカマ初遭遇なんだよー!こんな濃いオカマなんてフィクションだけだと思ってたんだよー!

しかし、ホシちゃん…うん、ホシ、ちゃん。は、俺らの失礼な態度にけらけらと笑い

「アラやだ安心してもいいわよぉ。あたしはノンケに興味ないもの。ただイケメンとは個・人・的・に!仲良くなりたいってだぁけ!可愛い女の子だって大好きよん?」

さわさわと俺の頬を優しく撫でるホシちゃんの手。最初こそびくっ!と身体が跳ねたが、その優しい手付きに警戒心が溶け出すように消えていく

…ほぅ、と我知らず安堵の溜め息が漏れた。「んふっ☆」と優しく笑いながらバチコーン☆と星が飛び散るようなウィンクをするホシちゃん。「ぎゃあああっ!?」とおっさんが目を押さえながら悲鳴を上げた

ちょっとムカッときた

「おっさん、初対面の相手にその態度はないんじゃねーの?」

「なんだその手のひらの返しよう!?そんなにそのオカマさんが好きならオカマさんの家の子になればいいだろうが!」

「はぁっ!?意味わかんねーよ!ちょっと頭撫でられてみろよっ!ホシちゃんの優しさが伝わってくるから!」

「解りたくねーっ!!」

ギャーっ!と叫びながらゴロンゴロン転がるおっさん。ったく、いつもの人格者っぷりはどうしたんだよ

「…うふっ、仲が良いのね。羨ましいわ。あたしたちももっと仲良くなりたいわねぇ…」

ホシちゃんが引き摺ってた少年に目線を落とす。少年は目線を向けられた途端にビクッ!と痙攣し、そのままうんうん魘され出した

「…そっちの子は?」

「孝治くん?あたしのか・れ・しっ☆」

「断固ちげぇっ！？」

ガバッ！と立ち上がって憤慨する少年。鎧らしい鎧は全身を守るタイプの革鎧だけで、後はマント。とてもじゃないが、３０日間生き残れたキャラには見えない。…ぉ？

＜分析完了＞

名前：星　伸一

称号：だぶるぶれいど（笑）

ＬＶ：１７

保有スキル：生存本能　兵器術　銃器術　格闘術　主人公補正　戦闘理論　バトルマスター　交渉上手　コミュ力

名前：阿部　孝治

称号：マイスター　だぶるぶれいど（笑）

ＬＶ：５

保有スキル：兵器作成　銃器作成　錬金術　魅惑耐性

…ん？つまり…どういうことだ？

俺が首を捻っている間に、ホシちゃんは目に涙を浮かべてしなっと乙女座りで座り込み

「酷いわ…。あたしのこと地下三階で荒々しく押し倒したのを忘れたの…？孝治くんがようやくデレたと喜んだのに…」

「アレは魅惑の罠のせいだーっ！！俺はホモじゃねぇーっ！なんもなかった！なんもなかったーっ！？」

…？、？？？

首を傾げ続けていたら、おっさんがぽん、と俺の肩を叩く。そして悲しい目をして、「そっとしといてやれ…」と首を振る。とりあえず頷き、そっと距離を取る

おっさんに2人のスキルについて話す。おっさんにはもう俺のステータスやスキル、「分析者」の能力も説明済みだ。おっさんはしばらく考え、

「あのガキは武器が作れるけど使えない、あのオカマは武器が使えるけど作れない、だからコンビを組んだんだろ。でも、それがガキにとっての悲劇を生んだ訳だ…」

悲しい目で絡み合うホシちゃんとアベを見つめるおっさん。なるほどなーとその光景を見ていたら、いつの間にか暑苦しい男がその間に割って入ってた

「喧嘩はそこまでだ！それ以上争うと言うのなら、この俺を殴れ！

お前の怒り！俺が受け止めよう！」

「誰なんだよぉおおおおもぉおおあああああっ！！！」

…うん、放っておこう

「俺か！？俺は太陽の子！仮面ライダーＢＬＡＣＫ　ＲＸになりたい人だ！まだまだあの方の足下にも及ばんがな！」「放っておいてくれよおおおおっ！どうしてこうなった！？どうしてこうなったっ！？さっき美少女いたのに！」「あら？いつの間にかイケメン増えてるじゃない。ん～好みじゃないけど、あたしの味方？嬉しいわぁ」「はっはっはっ、お嬢さん、恋人に嫉妬されますよ？」「あらそうねぇ」「誰が恋人かっ！」

…放っておいて大丈夫…だよな？

おっさんに視線で問い掛けたら、そっと視線を逸らされた

とりあえず早足でギャーギャー騒いでる３人から離れる。…と

「ぁ…」「っ…」

…クロイワ、だ。思わずどちらからともなく視線を外す。クロイワは何も言わず、他にも入ってきた男たちの元に向かう

…なんか、今更モヤモヤ感。冷静になればなるほど、あの時のクロイワが間違ってないのが分かったからだ。…まぁ、間違ってないだけで、正しいとは思えないけどな

他にもドイ…だと思う。キングオークはサイクロキングといった、

化け物に変えられた元人間たちを連れて現れた…笹田たちが１５人くらい。笹田は俺を見つけた瞬間、うさんくさい笑みを浮かべて近寄ってきた。すぐ逃げた。俺達が

ある程度距離を取ったら諦めたのか、仲間内で何事か相談し始める笹田たち。その姿に、おっさんが眉を潜めた

「…あの化け物になっちまった奴ら、どうしたんだ？」

「？。何か変なのか？」

「ああ。…ちょっとステータス見てみろ」

うん、と頷き、サイクロキングを凝視する。巨大なハゲ頭の１つ目の青鬼、といった風情のサイクロキング。…何が変なんだ？

＜分析完了＞

名前：伊東　誠

称号：サイクロキング

ＬＶ：２７

状態異常：魅了　洗脳　混乱隷属

「――っ！？」

絶句する俺に、俺の反応から察したらしいおっさんが「やっぱりな」とか言いながら笹田たちから更に距離を取る。――あいつらやっぱり最悪過ぎる！

よくよく見てみればレベルが高いの化け物化した奴らだけで、笹田たちはレベル１とか２くらいだ。…でも、あまりにも非道い。見た目が化け物だからって洗脳するだなんて…

笹田たちに吐き気を覚えながら、次々黒い空間に入ってくる男たちを眺める。明るい顔したやつも、そうでない奴もたくさんいた

そうして――ようやく、あいつが現れた

『さぁ残り２８人となった勇者候補たちよ！しっかりレベルは上がったかな？約束の１ヶ月が経過した…つまり！旅立ちの時さ！』

にこやかに。唐突に。楽しそうに

美女は笑いながら、手を広げた

『さぁさぁ喜べ楽しめ悲しみたまえ！【魔王】退治に出発だ！死ぬか生きるか堕ちるか折れるか！僕たちはいつでも君たちを見守っている！望もう惨劇を！招こう悲劇を！笑おう喜劇を！僕たちを楽しませてくれ！【勇者候補】たちよ！さすれば【奇跡】は君たちの手に収まるだろう！』

と、そこで一息吐き。美女は邪悪に笑う

『――劇の始まりには口上が「憑き者」だ。楽しみにしているよ。がんばりたまえ』

その声と共に

随分久しぶりに見る、太陽の下に放り出された

この世界――『ファルガナ』に

冒険が――始まってしまったのだ

プロローグ終（後書き）

ようやく変態が出たよ！

キンクリした部分はその内番外編で乗っけますか…

しっかしやりたい放題だったなぁプロローグ…

とりあえず更新速度は減速↑減速↑

本編始まるからほのぼの増えるよ！

今回のテンプレ

↓特撮オリ主（仮）

↓変態

↓懐かしい仲間（笑）たちとの再会…っ！

↓変態（笑）

↓洗脳オリ主

おまけ　レティーシア・ブログ（前書き）

檸檬紅茶さまの挿絵を追加！

みてみんでは
国産レモン・ティー
さまとして活動されているようです

おまけ　レティーシア・ブログ

レティーシア・ブログ

ブログ機能生きてるみたいだし、暇だから書いてみることにした。
でも書くことないし、おっさんの観察日記を付ける

3日目

湖生活初日。テント張れなくて困ってたら、おっさんが全部やってくれた。紳士だ

代わりに俺はご飯係らしい。しかもずっと。割に合わない

4日目

おっさんが特撮っぽい歌を歌いながら水浴びしてた。暇だから眺めてたら水をかけられる。「スケベ娘が！自重しろ！」とか怒られた。
…そういや俺、女だった

5日目

朝起きたら目の前に魚の顔。インスマウスっていうらしい。おっさんが羽交い締めにしたあと口の中に矢を叩き込んだ。レベル上がった！スキルポイント増えてなかった…。やっぱ『ガナスタ』とは関係ないっぽい

朝御飯が魚の姿焼きになった。インスマウス…見た目がグロいけど、白身魚みたいな味。美味しい。捌いたのはおっさん。俺には無理

7日目

おっさんに魚の捌き方を仕込まれる。グロいグロいグロい生臭い。泣いた。殴られた。超泣いた。慰められた。なにこのツンデレ

8日目

…料理、意外と楽しくね？おっさんも美味しいって言ってくれた

9日目

新発見！干し肉をワインで煮て塩と薬草で味整えて、乾パンを浸して食べると美味しい！…でもやっぱこの干し肉不味い。おっさんは「うめぇ！」って言ってくれたけど…肉、不味い。

10日目

ログ読み直して気付いた。おっさんの観察日記はどうした。干し魚をあぶって塩を振って食べる。おいしぃ…。でもご飯が恋しくなる。ホームシックでちょっと泣いた。おっさんが慰めてくれた。悔しい

11日目

インスマウスの襲撃。おっさんと2人で頑張る。今回は三匹。しばらく魚に困らない！
おっさんは水浴びのとき、よく背中を掻いてる。…痒いのかな？意外と身体が硬いらしく、かけないみたいだ

12日目

ご飯日記になってる！？…まぁいいや。悪くないよね？

おっさんが呼んでるからなんだろう？と思って近寄っていったら、いきなり殴られた。理不尽

「なにすんだよっ！？」って怒ったら、「お前、いきなりの事態に弱すぎ。ちょっとだけ度胸付けんぞ」とか言われて、殴られて、投げられて、絞め落とされかけた…

おっさんなんか嫌いだ

13日目

…ご飯なんか作ってやんねーもん

いきなり呼び出して、いきなり殴る方が悪い。おっさんが謝るまでタバコも作ってやんない

おっさんが呆れたような、困ったような顔で俺を見ている。…知ら

ん。知らねーよバーカ

１４日目

謝った。俺が。おっさんの心配り無下にしてごめんって

近接格闘の訓練が始まる。といってもおっさんが言うには、おっさんが出来る格闘なんて実戦向きじゃないらしい。殴られそうになっても対処出来るように、っていう度胸を付けることが目的なんだそうだ。

…でも、いくら治せるからって全力で殴るってなくねっ！？

痛いの恐いのはしょうがないじゃん！

おっさんを殴れって言われても、殴ったこっちの手が痛くなるんだって！

１５日目

おっさんの水浴び中に乱入してみた

殴られる。避けた！蹴られた。結論、殴られた方がマシ。

ちゃんと服着てるっつーの

おっさんの背中を流す。…よく見たらノミがいるーっ！？そりゃお

っさん毎日水浴びするわけだわ！

おっさんを肩まで水に沈めたままノミ取りに集中すること2時間。

頑張った！

おっさんも褒めてくれた

＞i２５０７８―３２５９＜

子供の頃、親父と一緒に風呂に入ったときのこと思い出した。

…親父と同じくらい、おっさんの背中は広かった

…帰りたい。会いたいなぁ、親父…

１６日目

朝起きたら、枕元におっさんが座ってた。何事か！？

起き抜けにびっくり、軽く叩かれてびっくり。え、なに？なに！？

なんか1日おっさんが優しかった。恐い。でも訓練では普通に殴られた。酷くね？

水浴びしてたら、物陰からモンスター。全裸だったんで慌ててインベントリがミストラルを取りだし、射撃。あっさり倒した。何だったんだ？とりあえず、レベルが４になった！

悲鳴を聞き付けたおっさんが乱入。また全裸見られた。恥ずかしがらない俺に、おっさんが呆れる。…いや、前は恐がらせたから怒っただけで、別におっさんに裸見られてもなぁ…

それを言ったら、頭をこずかれた

「お前は男にもっと警戒しろぃ…」

とやたら疲れたように言うおっさん。失礼な。おっさん以外にはちゃんと警戒するわい。…っつか普通にトラウマだしな

17日目

インスマウス襲撃。おっさん無双じゃん。おっさんに言われて近接戦挑んでみる。…意外と避けるのは簡単だよなー。VRと変わんないし。でも攻撃するとき…まだちょっと迷う。美味しく食べるから勘弁してくれ

インスマウスは内臓は不味い。けど腕とか足は普通に美味しい。だからって丸焼きにして食い付くとカニバリズムにしか見えないからやめてよおっさん…

インスマウス食べてたらまたあの謎モンスターが物陰から襲ってきた

おっさんが槍を一振り。それで終わると思ったら、影がぶれただけでダメージなし。慌てて氷の矢を撃つも、やっぱり効果なし。

おっさんが食い付かれたところをミストラルで撃ってようやく退治。

…すごく、恐かった。

泣きながらおっさんの傷を治す。ごめんなさい。あいつにはミストラルが効くこと知ってたのに、行動遅れてごめんなさい。

おっさんは黙って頭を撫でてくれた

…2人ともレベル上がった。おっさんが8、俺が5

18日目

今日もおっさんに殴られる～ってことはなかった。ひたすらおっさんの攻撃を避ける。おっさんが虎男モードになってもひたすら避ける。見える！見えるぞぉ！ははは

レベル上がったお陰かと思ったら、違かった。よく考えたらVRのころは普通にワータイガーの攻撃をノーダメで避けきるとかやってたもん。今までヘタレてたせいで身体が動かなかっただけだわ

おっさんが虎男になった時、色々装備が壊れたし破れた。キツく叱る。おっさんも黙って正座で聞いてた。ちょっと良い気分♪

19日目

良い気分♪←ってなんだよ俺ェ…

死にたい

凹んでたらおっさんがご飯作ってくれた。優しさが痛い。死にたい

訓練訓練。思い出す「ガナスタ」での生活。日本での生活

…懐かしすぎて涙が出る

水浴びしながら泣いた。おっさんにこれ以上迷惑かけらんないし

２０日目

インスマウスと謎のモンスターの襲撃。謎モンスターの名前が判明！「フロウエン」っていうらしい

俺がフロウエン、おっさんがインスマウスを担当。

レベルが上がった！俺が７！おっさんは変化なし。

後、スピードだけなら俺、おっさんに勝てるわ

体力無いから長距離は駄目だけど、短距離ならおっさんより早い

２１日目

…意外とドラゴン倒せるんじゃね？

そんな訳でドラゴン戦。部屋に入ると同時にミストラル乱射。狙いは正確。目に一直線

かきききーん

逃げた

あの竜のステータスやばい。うろ覚えだけどこんな感じだったか？

「名前：ジャバウォック
称号：邪竜
ＬＶ：９９
保有スキル：魔法無効　物理耐性　神性　再生　補食　」

…勝てる奴いんの？

疲れたからもう寝る。おっさんもすぐ寝てた

２２日目

２３日目

…昨日、朝起きたらおっさんの腕枕で寝てた

…気まずい…

おっさんは気にしてないみたいだけど、すげぇ気まずい…

あとようやく気付いた

俺…ってかレティーシアが肉嫌いなんだわ。エルフだからなのか、レティーシアだからなのかわからないけど…とにかく肉は駄目だ。全部おっさんの皿に移す。おっさんが喜んでくれた。…なんとなく気まずいの解消。不幸中の幸い？

２４日目

…おっさんの尻尾にもふもふしたい。猫耳触りたい

じぃーっと見てたらおっさんに小突かれた。抗議したら、「目が覚えたての中学生みたいだったぞ」とのこと

…俺、ヤバくないか？

２５日目

平和過ぎて緊張感が続かない

おっさんと訓練。体力付けなきゃなぁ…。攻撃は当たらないけど、

すぐバテる。走り込み？水泳？どっちのが良いかな？

２６日目

新事実発覚。俺、泳げない

おっさんも泳げないらしい

今日は２人で水泳。日本にいたころは普通に泳げたし、俺はあっさり泳げるようになった

１日かかってもおっさんは泳げなかった。猫だし、無理じゃね？

とりあえず、おっさんの好きな料理にしよう。…食事の時、おっさんが無言で泣いてた

なんかごめん。謝ったら、ふて寝。子供か

２７日目

おっさんが泳ぐのあきらめた。その分近接格闘の訓練が増える。鬼か

昼食の時、おっさんがいきなり服を脱ぎ出した。虎男モードで走り出す。ＩＮ湖

水の上を走りやがった

でも１０秒で沈む。すげぇ…１０秒もったよ…

慌てて救助。ふて寝するおっさん。仕方ないので武器の手入れ。ピカピカだ！…一応、おっさんの鎧とか武器も磨いとくか

２８日目

おっさんふて寝中

…暇だし、射撃訓練でもするか？…でもすでに１００発１００中…とまではいかなくても、１００発撃ったら９０発は中るし…

新しい料理の研究して…シガレッ草調合して…あ、そうだ。おっさんにサングラス作ろう。あの金色の目、目立つ。悪人面だし似合うだろ

２９日目

…ログ読み直して思ったんだけどさ

俺ら、親子じゃね…？

いやいや、まさかまさか。気のせいだろ。普通だって。考えすぎ。微妙に思考が乙女っぽい気がするのも気のせいだろ。うん

明日で３０日かぁ…

そう思うと、今日のインスマウスの襲撃も感慨深い

…もしかしたらもう食えないかもしれないし、ある程度インスマウスの肉は保存しておこう

…こうして見るとインスマウスの腕とかってさー、普通に人間の腕だよなぁ…青いけど…。気持ち悪いしカニバリズムっぽいから切り身にしてインベントリにしまっとこう

おっさんがレベル１０になってた。俺はまだ7。俺のレベルが上がり辛いのか？

…まぁいいや。油欲しいなぁ…焼く、煮る、蒸すだけじゃなくていい加減揚げるとか炒める、とかした食べ物が食べたいよ…

まぁおっさんは猫舌なんだけどな！だから揚げ物なんて食べたら面白いことに…

…邪な事を考えてたのがバレておっさんにめっちゃ怒られた。ごめんなさいしても許してもらえない。…と思ったら、そういうお仕置きだった。拗ね親父め

殴られた。

おまけ　レティーシア・ブログ（後書き）

徐々に日記って伸びてくよね…

レティーシアが急速におっさんになついていく過程が…（笑）

今回のテンプレ

↓料理乙女

↓簡単バトル

↓そもそもキンクリ

↓泳げない猫

↓肉嫌いエルフ

1、旅の始まり（前書き）

不定期更新よろー、です

質問の返答は後書きにて

1、旅の始まり

視界に広がる草原。地平線の先まで見える、ただただ青い芝の広がる草原のど真ん中。久方ぶりの太陽は暖かく、眩しく、目を細める。それでも瞼を透過する光に、なんだか叫び出したいほどの感動。土の匂い、草の香り。僅かに香る獣の匂い。コンクリートのビルも排気ガスの匂いも無い大自然に、ぼんやりとする。意識が追い付かない、が正しいかもしれない。長かった薄暗い湖での生活とは、全然違う。のびのびとした暖かさがあった

「ぎゃあああああああっ！！」

突然の悲鳴。驚きつつも振り返れば、全身から蒸気を吹きつつゴロゴロと地面を転がる青年。あれは――洗脳パーティーの1人か？

泡を食った他のパーティーメンバーが、慌てて青年に着ていた服をかけて行く。同時に小さくなっていく悲鳴。…何だったんだ？

「ああ、吸血鬼よん」

「どぅわぁ！？」

いつの間にか近くにいたホシちゃんが、俺に抱き着きながら言う。おっさんがびっくりして悲鳴を上げるが、俺は違うところに驚いていた

ホシちゃんの匂いが、おっさんと違う。硬い筋肉や、男特有の大きい手は変わらないのに、花の香りのような甘い匂いが上品にふわり

と香る

それにドキドキしながら見上げる。ホシちゃんは「あら？驚かないの？」と首を傾げるが、それより俺は匂いの方が気になる。…香水かな？

「良い匂いがする…。香水？」

素直に口に出すと、ホシちゃんはきょとん、と目を丸くしてから破顔した

「嬉しいこと言ってくれるじゃない！いつ孝治くんに求められてもいいように気を使ってるのよん」

「求めねーよっ！」

「朝からは…ねっ？」

「夜もねーからっ！あ、俺は阿部孝治！よろしくね！君は？」

アベは無視してホシちゃんの胸に顔を埋める。胸毛がちょっとくすぐったい。花の匂いに隠れた男の匂いに胸がドキドキした。…ってヤベェ！

ベリッ！とホシちゃんから離れる。何男の匂いにドキドキしてんの！？俺は今なにしてたの！？ちくしょう正気に戻れ俺！

「あらあら照れちゃって」

「いや、どう見ても正気に戻った離れ方だったろ…」

落ち着けー俺ー。落ち着けー俺ー。花の匂いにほんわりするのはまだ良い。男の…しかもオカマの匂いにドキドキするってどうなんだおい。忘れたか？いや忘れてたけど、俺の夢は可愛い女の子と一緒に仲良く暮らすことなんだぜ？

…ん？

…んん？

…なんかニュアンスが違う…？ってか…女の子のこと考えてもムラムラ…っつかドキドキしない…！？え、ええ！？「ガナスタ」のエルフは同性愛者なんじゃなかったのか！？

「あんまウチのガキで遊ばねーでやってくれな？で、吸血鬼ってのぁなんだ？」

俺が混乱している間に、さりげなく俺を挟んでホシちゃんに声をかけるおっさん。小さくホシちゃんの舌打ちの音が聞こえた気がするけど、気のせいだろ

「あの子、称号：吸血鬼なのよ。称号の効果はステータス二倍、吸血、だったかしら？他にも色々スキル持ってるらしいけどね。代わりに日光や聖水、十字架に弱くなるってわけ」

へー…。エルフ、獣人、ドラゴンがいるんだから吸血鬼がいてもおかしくないけど…不便だなぁ。日中動けないじゃん

「笹田たちが足止め食らってる間に逃げるわよ。あいつらに関わると皆おかしくなっちゃうんだから」

嫌そうな顔で言うホシちゃん。俺達は一瞬目配せする。1ヶ月も一緒にいたんだ。おっさんの考えてることくらいなんとなく分かる

（付いてく。大丈夫か？）

（大丈夫。ホシちゃんは良い人。おっさんこそ大丈夫？）

（…我慢だ）

くすっ、と吹き出す。殴られた

「ちょぉっとぉ、こんな可愛い子殴るなんて何考えてるのよう」

「躾だよ。それより早く行くぞ。おれ、そこの中坊も早く来い」

「オレに命令すんな！そ、それよりさ！君は？いい加減名前くらい…」

「…ホシちゃんのこと泣かせるなよ？ホシちゃんは良い人だ」

「オレそういう認識されてるっ！？いやぁーっ！！」

頭を抱えてごろんごろん転がるアベ。その頭をホシちゃんが一撃。一発で気絶したアベを肩に担ぎ、早歩きでササダたちから距離を取るホシちゃん。背中から、

「サラバだ友よー！また会う日までー！」「うるっせぇぞ太陽！暑苦しいのも大概にしろ！」とか聞こえたけど、おっさんも苦笑いしかしてなかったからリアクションは取らないでおく。…多分「仮面

ライダーなんちゃらになりたい人」、なんだろうなぁ、と苦笑い

こそこそと早歩きで他の勇者候補から離れていく。ホシちゃんがコンパスと地図を見ながら何の迷いもなく歩いていく姿がなんとも頼もしい。…ん？なんか違和感

ザッザッと草を踏む音と共にササダたちが遠ざかっていく。他の勇者候補も、複数人、あるいは1人でそれぞれの向かう方向に足を進める。未だに足を止めているのは吸血鬼を抱えているから下手に動けないササダチームくらいだ。クロイワもどっか行った

…けど、やっぱ違和感。ザッザッと規則正しい足音。おっさんもホシちゃんも気付いてないみたいだけど…なんか、変だ。後ろを振り返る。誰もいない。けど、やっぱり変。どこがどう変なのか分からないのに、分からないからイライラが募る

「…どうしたガキ。キョロキョロしやがって」

おっさんの問いにも答えようがない。何かが絶対に変なのに、どこが変なのか分からない

「…分かんない。けど、なんか変なのに、変なところが分かんない。おっさんも変だと思わないか？」

「とりあえず変態が前にいることしかわかんねぇ」

「しっつれぇーねぇ。変態じゃなくてオカマよぉ？」

さわさわと肩に担いだアベの尻を撫でながら振り返るホシちゃん。おっさんは無言でアベに合掌する。俺は気絶したアベを憐れむ。…

もしかしたらアベとは仲良くなれ…ないな、うん

…んー。分かんない。絶対に何かは変なんだ。でもそれが証明出来ない。もやもやした感情を持て余しながら、前を歩くホシちゃんに問い掛ける

「どこに行くんだ？」

「あら、説明してなかったかしら？『始まりの街』よ」

「「始まりの街？」」

おっさんと2人、首をかしげた俺達にホシちゃんは苦笑し、胸元から一冊の本を取り出す。嫌そうな顔をするおっさんの代わりに、文庫本サイズの汗で湿った本を受けとり、中を開く。――歴史書、かな？

「地下2階の宝箱に入ってたわ。旅を楽にするためのアイテム、ってところかしら？」

捕捉してくれるホシちゃんに頭を下げつつ、おっさんと一緒に歩きながら見る。俺が開いているのをおっさんが覗き見る形だが、身長差もあるし、そこまで苦じゃないだろう

この世界――『ファルガナ』は、5人の神様と1人の邪神によって管理される世界

火の女神　フルカノ
水の女神　ウルティア
土の女神　ノーミス
風の女神　ルガスタ

そして

光の王神　ファルガナ

闇の邪神　リトマス

の男神が、２人。

光は火と混じり　太陽を生み
光は水と混じり　生物を生み
光は土と混じり　植物を生み
光は風と混じり　魔力を生み出し

闇は火と混じり　破壊を生み
闇は水と混じり　魔獣を生み
闇は土と混じり　金属を生み
闇は風と混じり　邪気を生んだ

光と闇の神が、それぞれの女神と共に産んだモノを集めた、人間のための世界。『ファルガナ』

しかしてその裏側には、魔族のために産まれた世界。『リトマス』が存在し――

「ちょっと飛ばせ」

「あっ！こ、こういうのは順を追って読むからおもしろ…あーあーっ！」

パラパラとページが捲られていく。思わず抗議するが、知ったこっちゃないとばかりに本ごと持っていかれる。なんつー自分勝手な！ホシちゃんがくすくすと口に手を当てて上品に笑う

「まぁ、簡単に説明しちゃうと、光と闇の神様が喧嘩。それぞれ2人ずつ女神さまを浚って自分の世界に引きこもっちゃうの。で、自分の子供――人間と魔族に命じて相手の世界から女神をさらってこい！って言うのよ。だから人間は魔族を、魔族は人間を敵視する。ついでに言うなら、魔獣は魔法を使うことを除けば普通の獣と変わり無いから、人間、魔族の区別なく襲い掛かるそうよ。神様の女の奪い合いの道具にされるなんて、理不尽な話よねぇ…」

「随分人間くさい神様だな…。まぁ、神話なんかそんなもんかもしんないけどさ」

呆れてモノも言えないとはこの事だろうか。…でもそんな人間くさい『邪神』があの美女の関係者とは思えないなぁ…

「まぁ、実際に神様がどうとかはどうでも良いのよ。重要なのは、人類が一番最初に作った『始まりの街』へ向かってる、ってことよ」

「なるほどー…」

いかにも冒険始まります、って感じの名前だな…。なんかワクワクしてきた。笑っていられる状況じゃないのは変わらないけど、こう、

冒険が始まったぜー！みたいな興奮がある

と、そうなるとちゃんと色々調べとかないと不味いかもしれない。ただでさえ俺はエルフなんだ。致命的な失敗して性奴隷に堕ちる、なんて最悪だからな

「おっさん！本貸して！」

「ちょっと待て。今大事なとこだ」

…むぅ。自分勝手だな。仕方ない、ホシちゃんに聞こう

「始まりの街に行くとなんかあんの？あと、やっちゃいけないこととかある？」

「んー、単純に一番大きな都市なのよ。この世界、というかこの大陸って歪な十字型なんだけど、丁度そのど真ん中で、一番治安が良くて、一番人が集まる街なの。『始まりの街』…正しくは、王都・スタトル。人間の王様が住んでる街でね？情報を集めるには人がいるところに行くのが一番じゃない。あと、やっちゃいけないこと、なんて曖昧だとちょっと分かんないわね。常識の範囲内なら大丈夫じゃない？」

「なるほどなー…。ありがと」

確かに、俺達はこの世界のことを何も知らないんだ。まずは情報収集、というのは正しいんだろう。よく考えたらホシちゃんも同じ立場なんだ。知らなくても無理は無いわ

「それにね！ファルガナ騎士団っていう王様に仕える騎士たちがい

てね！なんかイケメン揃いらしいのよ見に行かなきゃ嘘じゃない！」

「そ、そこなの！？こう、武器が欲しいから…とか…」

「銃より強い武器なんかこの世界にはあんま無いわ。それこそ達人とか言われる人が持たない限り、刀も剣もただの鉄の棒と変わり無いもの」

「それはホシちゃんだから言えるんだと思うぜ…？」

分厚い筋肉の鎧とガチャガチャ頼もしく金属音を鳴らす銃器。ただ歩いているだけなのに放たれる王者の雰囲気。…さすがだ

「まぁ、大体この方角に5日も歩けばスタトルに付くわ。そこまでは一緒に行きましょ。その後の事はその時考える、ってことで」

「ああ、よろしく」

にこっ、と笑うホシちゃんに笑顔で頷く。5日も歩かなきゃならない、というのは憂鬱だけど、出だしとして快調…な、方だと思う

「あ、安心していいわよ？人間を襲うような魔獣は森に入らない限り出てこないわ。見晴らしのいい草原や、街道なんかで警戒しなきゃならないのは――」

「伏せろぉ！」

おっさんの声に反射的に身体が足を折り畳む。一瞬遅れてホシちゃんが大きな身体を折り畳んだ瞬間、頭の上を空気を切り裂きながら通過する突撃槍。「グギャアアアアッ！？」と甲高い悲鳴

ぶしゅっ！と生温い血が降ってきて、全身を塗らす。そのまま地面に身体を投げ出し、背中を地面に着けたまま矢を放つ。逆光でよく見えない大きな影に、ひたすら矢を叩き込む

「ピギュアアアアッ！？」

悲鳴をあげ、全身に矢を突き刺しながらバサバサと喧しく音を立てて飛んでいくでっかい影。――翼の生えた蛇？のようなモンスターだった。どうやら仕留めきれなかったらしい

「――ああいう飛行タイプのモンスターが厄介ね。いきなり音もなしに襲ってくるんだもの」

「…みたいだなー」

予想以上に死と隣り合わせな世界に一気に憂鬱な気分になるのは隠せなかった

1、旅の始まり（後書き）

質問まとめ

↓ＬＶアップの恩恵は？

スタトル・ギルド編をお待ちください

↓スキルには熟練度とかあるの？

あります

使えば使うほど洗練されていきますが、どれくらい熟練度が上がったかは一部スキルを除いて表示されません

↓称号、スキルのクラスアップはあるの？

スキルは名称的な変化はなし。

称号は増えていくのみです。

ただし、同系統の称号は効果が重複する、ということはなく、より強い効果を発揮するモノのみが残ります

例：剣士　剣聖の称号持ち

効果

剣士→剣攻撃力３０％ＵＰ
剣聖→剣攻撃力６０％ＵＰ

なら、剣士の称号の効果は剣聖の称号の効果に打ち消されます
実質上書きと変わり無いです

その内、称号、スキルの効果まとめ作ります

↓ホシちゃんって本当にノンケに興味ないの？
ありません

ただし、ノンケを無理矢理こっちの道に引きずり込みます

強姦はＮＧですが、それ以外はＯＫ

相手が正気じゃなくても、一回既成事実さえ作っちゃえば何の問題もなし、という考え

称号：だぶるぶれいど（笑）は感染していくんだぜ…

ちなみに効果は

持久力ＵＰ（性的な意味で）

今回のテンプレ

↓真祖の吸血鬼（笑）

↓???（謎のフラグ）

↓良い日旅立ち

2、初めての夜（前書き）

前話でほのぼのした人たちへ

今話の冒頭でほのぼのした人たちへ

後書きに、お兄さんとの大切な約束が…！

2、初めての夜

丸一日歩き続け、夜。パチパチと音を立てる焚き火を囲んで、４人で座る。火を挟んで俺の対面にアベ、右隣にホシちゃん。左におっさん。…ホシちゃんの隣は嫌だとおっさんがごねて、アベの隣は嫌だと俺が断言したからだ。その時のアベの落ち込んだような顔が忘れられない

大分大きくなった焚き火に、ホシちゃんが掌サイズの緑色の玉を投げ入れる。何でも、「魔物避け」の香らしい。大体一個で５時間くらいは保つらしいから、夜明け迄に一回入れ直さなきゃ駄目だな

「にしても女の子が料理する姿って良いわね～」

「そう、かな？ホシちゃんも料理上手じゃん」

目を細めて嬉しそうに言うホシちゃんにはにかんで見せる。ホシちゃんもくすくす笑って、大振りのグルガナイフでぶつ切りにしたインスマウスの肉を鍋の中に入れる。塩と薬草を適当に中に入れ、味を見る。…んー…ちっとしょっぱい？でもあんまり調味料使うのもなぁ…

「チーズいれましょチーズ。大抵の味はチーズの臭いで誤魔化されちゃうから。カレー粉でもあれば良かったんでしょうけど」

「カレー…」

食いたいなぁ…。熱々のルーをご飯にかけて、大きめの具に苦しみ

ながら辛さを噛み締める…良いなぁ。と遠い目をしていたら、「ああ、分かんないかしら。その内、香辛料が揃ったらご馳走してあげる」とウィンクするホシちゃん。あはは、と笑って誤魔化し、木製のお玉で海鮮チーズ鍋をかき混ぜる。…ん、おいしい

「おっさん。もうちょっとで出来るよ」

「ん？おぅ…」

本を読みながら生返事を返すおっさん。それに呆れてため息を吐きながら、くるくると鍋をかき混ぜれば、熱々のチーズが伸びてお玉に絡む。…パスタにかけて食べたい

「俺には声かけてくんないのね、レティちゃん…」

「お前には、ホシちゃんがいるだろ？」

「だからそういうんじゃねーからっ！」

ギャーッ！と頭を抱えるアベに内心で舌を出しつつ、インベントリから人数分のパンを取り出す

「ありがと、ごめんなさいね？食料も貴重でしょうに」

「気にしないでくれ。街に連れていって貰えるお礼みたいなもんだし」

「そういうことなら」

くすっ、と笑うホシちゃん。まだぶつぶつ言っているアベは放置し、

お皿に鍋をよそっていく。…インスマウスの肉だって教えてないけど、いいよな?ちゃんと食べれるし

終始和やかに食事を終える。テントを2つ張り、片方に俺とおっさん、もう片方にアベとホシちゃん。最後までアベは抵抗していたが、結局引きずり込まれた。南無。まぁ、俺とおっさんは焚き火見てなきゃいけないからテントからは離れてるし、好きなだけイチャイチャしてくれ

「で、おっさん。そろそろ本見せてよ」

「んー…まぁいいか。大体頭に入ったしな」

本を受け取り、焚き火の明かりを頼りに目を通す。神話の概要はホシちゃんが言ってた通りだったから飛ばす

この世界――ファルガナには多数の種族がいるが、その頂点に立つのは人間のようだ

だが、勿論他の種族がいないわけではない

精霊、竜人、獣人、エルフ、ドワーフ、ホビット

「精霊」は魔力で身体を編んだ自然の象徴ともいえる高位精霊が４柱。高位精霊の手足となって働く中位精霊がそれぞれ１００柱ずつ。そして自我を持たない下位精霊が無数に存在する。人間が使える魔法は、自我を持たない下位精霊に干渉して発動する物のようだ

「竜人」は身体に竜の因子を取り込んだ元人間のこと。生殖によっ

て増えるのではなく、上位の竜を生け捕りにし、その心臓を生きたまま食らうことで存在を格上げした者だ。生殖能力を失い、身体に竜の鱗や食らった竜の特性が現れる。高い身体能力と魔力を持ち、基本的に不老。心臓を破壊しなければ殺せない

「獣人」…おっさんみたいな者だな。過去に魔族と血を混ぜたせいで、身体に獣の部位が現れる。魔族の血を引いているからファルガナでは嫌悪されているが、高い身体能力と五感から、冒険者として頼りにされる者も多い。ただし、魔族の血が混じっているため精霊に嫌われ、魔法を使えない

「エルフ」…俺か。森の中に隠れ住む、精霊との混血。高い精霊との親和性を誇り、人間の数倍の魔力を身に宿している。そのため老化が遅く、人間より長い寿命を持つ。その美しい容姿から、男女問わずその身を狙われる。尚、その破瓜の血は長寿の秘薬とされる。水と風の魔法が得意。独自に薬草を研究、調合した「エルフの秘薬」は千切れた腕さえくっつけると言われる

…色々気になるけど、まぁ良い。後回しで

「ドワーフ」。エルフと同じく精霊との混血。竜人や精霊を除けば、亜人の中で唯一の親人間派。手先が器用で身体能力に優れ、素晴らしい武器や防具、工芸品を作り出せる。身長は低く、成人しても人間の１０歳児程の大きさしかない。特に鍛えなくても筋肉質になるが、全体的に気性が荒く、酒好きで喧嘩っ早い。成人女性でも子供のような外見なため、それを好む好事家は少なくない

「ホビット」ドワーフの突然変異。身体能力は低いが、豊富な魔力を持つ。手先も器用で、おおらかな…悪く言えば大雑把なドワーフとは反対に、几帳面な性格の者が多い。成人しても子供のような外

見、というのドワーフと同じだが、華奢で筋肉が付きにくい体質のようだ。人間よりも頭の回転が早いためか、人間を見下す傾向がある。主に火と土の魔法と相性が良い（これはドワーフも同じと言われているが、ドワーフは魔法を使うくらいなら殴り合いを好むため、確認はとれていない）

…これが、ファルガナに住む大体の種族な訳だが

種族的に人間より優れている種族はたくさんいる。だが、人間と比べれば個体数があまりにも少ない。当然人間に追われるようなことになれば、数の暴力であっという間に…

人間至上主義、とでも言うのだろうか。だとしたら…余りにも、俺とおっさんには厳しすぎる

「…まさかとは思うが、警戒しとけよ。あのオカマ、俺達を奴隷商人に売って金にするかもしれん。オカマがしなくても、中坊がしないとも限らんぞ」

「…ん」

考えたくはない。考えたくはないが…あり得ない可能性ではないのだ。俺達は今、この世界の通貨を一切持っていない。そんな状況で金が必要になったら――まして、確実に高価な値で買い取って貰えるなら――他人を売る、という考えも…「なし」ではないのだ

…あり得ない、と言い切れないのが悲しくて、目に涙が浮かぶ。どうにもちょっとした感情の揺れで泣いたり笑ったりと忙しい。おっさんはタバコを噛み潰しながら苦笑いし、俺の頭をポンポン、と叩

いた

「まぁ、アイツは善人だ。多分大丈夫だろうよ。それより街に行くなら俺もお前も耳とかどうにかしなくちゃなぁ…」

うーん…と頭を抱えるおっさん。…まぁ、俺は髪の毛と帽子でどうにかなる。耳だけだしな

でもおっさんはなぁ…尻尾は無意識に動いてるし、ちょっと動いただけで背中の毛が見えるし、耳は隠すと痛くなるらしいし…

「諦めるしかないんじゃないか？冒険者として実績上げればいいじゃん。そうすれば理不尽なイジメとかはないだろうし」

まぁ、その冒険者って職もどうなのかと思うけどな

この世界にはたくさんの【遺跡】がある。光の王神の方の【ファルガナ】が、手勢である人間を育てるために作り上げたダンジョンだ

神様の奇跡とやらで閉じ込めた凶悪な魔物が中で繁殖を繰り返し、徐々に大きくなっていった魔窟もあれば、試練を乗り越えた者に褒美を与える～みたいなノリで作られた試練のためのダンジョン、単純に野生の魔物が知恵を持ち、洞窟を改造して広げていった末に産まれたダンジョン…数えきれないほどのダンジョンが、広大な大陸のそこかしこに散らばっている

そこを探索し、時に神の褒美を受け取り、時に魔物が溜め込んだ宝を奪い、時に魔物自体を金に変える。それが冒険者という職の内容である

…と、言うような事が書いてある。俺の意訳だが。

とはいっても手軽なダンジョンなんかもう探索されているだろうし、宝物云々は期待できない。…あるいはそこで果てた冒険者の遺品なら手に入るかもしれないけどな

「…ま、そうだよなぁ。でもお前は絶対にエルフだってバレるわけにゃあいかねぇなぁ…」

「だよね…」

邪神の言ってた性奴隷云々、エルフの秘薬云々に長寿の秘薬がどうとか。どんだけ厳しいんだよ。ハードモード超えてマニアックだろ

とりあえず…

「インベントリ：プイスカーフ」

取り出したのは緑色のスカーフ。魔法耐性はミスリルリボンより弱いが、移動速度上昇がある。それを、耳を隠すように頭に巻く。バンダナか三角布のように、頭頂部を耳ごと完全に覆い隠すスカーフに満足。触られたり、スカーフを取られない限りは見られない…はず。

「こんなんでどう？」

「んー…まぁ、良し。帽子よりは安心だ」

「髪の毛もあるし、よっぽどじゃないなら大丈夫だと思うけどな」

くるくると毛先を指先で弄んでみる。エルフだからなのか知らないが、まともな手入れもしていないのにサラサラと指先を滑る髪。…ん？なんだ？

ぽかん、とした表情で俺を見るおっさん。珍しい顔だ。ここ1ヶ月で初めて見る表情

「おっさん、今、なんかした？」

「…ん？いや？」

一瞬遅れて返事したおっさん。ちょっとした違和感を覚えたが、とりあえず触れないでおく

「これ、レベルとか称号については書いてないんだ。…って、今更だけど普通に見たこともない字が読める自分にびっくり」

「俺もだわ。ミミズがのたくったような字なのに不思議と読めるのに驚いた」

くすっ、と2人で笑い合う。バチバチと生木の弾ける音と、魔物避けの香の不思議な匂い。それに混じるタバコと、僅かな酒臭。なんかハードボイルド風味で、笑える

「なんだ、どうした」

「いや、笑えるような状況じゃないんだけどさ…。なんか、楽しくて…あははっ」

空を見上げれば、見たこともないくらいの満天の星空。電灯もネオ

ンの光すらもない闇の中、月と星だけが黒い空で輝いている。

「凄い、綺麗だ」

「…お前さんもファンタジーだから見慣れてると思ったんだがな」

「…俺が見たことある夜空は、全部作り物だっからさ。…あんま深く聞かないでくれると助かる」

ガナスタはよく出来ていた。よく出来ていたけど…リアルは無かった。

今、俺の目の前に広がるのは現実なんだ。命の危険と隣り合わせな、安全なんか欠片もない現実

狂おしいほどの現実。
厳しすぎる現実。
挫けそうになる現実。

だけど、作り物なんかじゃ味わえない――星空への、感動

傷つけられる痛みも、戦いの中で死んだモノの臭いも、噛み締めた口の中に広がる血の味も、自分の手で命を奪った相手の死に顔も、断末魔の叫びも、現実

間近に感じたおっさんやホシちゃんの暖かさも、日本にはない大自然の香りも、初めて食べる食材の味も、目の前に広がる星空への感動も、時々聞こえる虫の鳴き声も、現実

それが――なんとも言えず、複雑に、心地よく、憎らしい

「…そう、か」

「うん」

無言。

無言のまま、時が過ぎる。

おっさんが無造作に伸ばした手が、俺の頭を撫でる。おっさんの手に心地好さを感じながら、俺は空を見上げる

時々、パチパチと焚き火が鳴いた

2、初めての夜（後書き）

ホシちゃんの容姿が

ラ〇ボー、あるいはロ〇キー

が、

パンツが見えそうな紫色の超ミニのワンピースドレスを着たオカマ

だと忘れないで欲しい

ちなみにホシちゃんのパンツは女物

筋肉オカマと戯れる美少女…俺得

今回のテンプレ

↓亜人の迫害

↓ほのぼのぼのぼの

↓???（前回から継続中）

おまけ←

一方そのころテントの中では

「いやだぁあああああああっ！！俺は！俺はレティちゃんにフラグを立てるんだぁあああああ！」

「野暮なことは言いっ子なしよん？あの２人の雰囲気見てれば分かるでしょ？それにそんなに性欲持て余すならあたしが相手になってあげるってば」

「だ・が！断る！俺はノーマ…」

「だが断るのを封じたわ…！」

「…なん…だと…！？いつの間に、いつの間に俺は両手足を封じられた…！？いや、それよりも…っ！

俺のズボンはどこだっ！？」

「既にパンツもあたしの手の中よ」

「…オワタ」

「だいじょーぶ、見張りの交代まで４時間はあるわ！」

「レティちゃん、俺、君に惚れたかったかよ…」

「掘られたかった？仕方ないわねぇ…」

「誰か助けてぇえええええええええええええええあああああああああああああああああっァッ」

3、初めての街（前書き）

質問に答えるぜ！

簡単プロフィール

レティーシア
外見年齢１３～１４歳
レティーシアの中の人
１９歳。高卒の会社員
身長１４０ｃｍ　体重３９ｋｇ

おっさん（大路　光）
外見年齢　３０前半
身長１８６ｃｍ　獣化時　２０３ｃｍ
体重８６ｋｇ　獣化時　１０５ｋｇ

ホシちゃん（星　伸一）

シル○スタ・スタローン（笑）

アベー

は、いいや（笑）

3、初めての街

5日間、歩き続けた。それだけ聞くと辛いかもしれないが、見渡す限りの大自然を満喫しながら歩く、というのは、意外と…うん。悪くなかった。

時々襲ってくる魔物を倒し、ホシちゃんに「せっかく可愛いんだからもっと女の子らしくなさい！」とか怒られ、おっさんを盾にして逃げつつ、絡んでくるアベにホシちゃんをぶつける

『何故か』朝起きたら歩けなくなってたアベをホシちゃんが背負ったり、ホシちゃんがアベをお姫様抱っこで抱き上げたり、イチャイチャする2人を冷やかしたり。それでアベが泣き出したり

おっさんが不意討ちで殴ろうとしてくるのをかわしたり、避けたり。たまに殴られて、怒ったホシちゃんがおっさんに詰め寄ったり。おっさんが嫌そうな顔で怒るホシちゃんを宥めたり

なんだかんだで親睦を深めたと思う。アベがなんとなくホシちゃん相手にデレ始めるほどの長い距離を歩き続け、ついに見えた『スタトル』の街。途中から街道に沿って歩いていたとはいえ、正直迷ってないか不安だったのだ

どれくらいの距離があるかイマイチ分からないが、ここから見る限りかなり大きそうだ。一番真ん中に白い大きなお城があって、大きな城壁がぐるりと街を囲んでいる。まだ距離があるのにはっきり見えるお城の大きさが、スタトルにおける王様の権力の高さを証明しているようだ

「さて、街も近付いてきたし…アナタたち、これを着けなさい」

「ぁん？」「ぅえ？」

と、ホシちゃんから渡されたのは――首輪

2日前に倒した蛇竜の革と、同じく蛇竜の骨を使ったと思われる留め具。やたら大きめで、一番小さい穴に通しても俺の細い首には大きいだろう。艶々とした光沢を放つ黒い首輪。プレートが嵌め込まれていて、そこには2本の薔薇が絡み合う精巧なレリーフが彫られている。なんだか高そうな首輪を片手に、ひたすら困惑する

「こう言っちゃなんだけど…ギブアンドテイクで行きましょ？アナタたちには、あたしたちの奴隷になってほしいの」

「どういうこった？」

おっさんが警戒しながら前に出たので、弓を構えられるようにしながら数歩下がる。ホシちゃんは困ったように笑い、指を振りながら話し始める

「スタトルに着いたら、アナタたちはあたしたちの奴隷、という身分でいてほしいの。そうすれば、アナタたちは…そうね、仮に高貴な身分の方々に目を付けられても、無茶苦茶な理論で絡まれることはないわ。誰かに所有権のある奴隷だったらね。奴隷が粗相したらその主人に抗議し、主人が罰せられる決まりだからよ。あたしたちにあるメリットは、あたしたちが奴隷を持てる程の裕福層だと相手に誤解をさせられること…これは、交渉面でかなりの有利になるわ。そしてその首輪は、奴隷は主人の紋章を型どった首輪を付ける習わ

しなのよ。本来なら魔法的な束縛があるらしいけど、勿論それには無いわ。どうかしら?悪い提案じゃないと思うのだけど」

…駄目だ。よく分からん。とりあえずこの首輪を付けてホシちゃんの奴隷の振りをすれば良いのか?おっさんの顔を見上げれば、おっさんは眉間に皺を寄せてしばし考えた後、

「…奴隷が自発的に冒険者になる、ってのは一般的なのか?正直金稼げないとどうしようもない。お前らの奴隷ごっこに付き合ってたせいで金が稼げませんでした、じゃ洒落にならんぞ」

「それなら心配しなくていいわ。最初、ギルドに行くときに着いてきてもらったら後は自由にしてくれて構わないわ。奴隷に命じてダンジョンに潜らせて、日銭を稼ぐ貴族のお坊っちゃんとかいるみたいだし、安心なさい。ただ、あたしの責任になっちゃうから問題行動だけは起こさないでね」

ぱちんっ、とウィンクするホシちゃん。それに「うっ…」とか気圧とされながらも、おっさんは頭を振ってホシちゃんを睨む

「…滞在期間は?」

「3日。その後アナタたちがどうしようと構わないわ。アナタたちがまだスタトルに残るにしても、奴隷から解放されたとでも言えば問題ないはずよ。あたしたちにはあたしたちの魔王討伐プランがあるからね」

「…なら、乗ってやる」

おっさんが手早く首輪を首に巻くのを見て、慌てて首輪を嵌める。

どうでもいいがよ、これ作ったの絶対アベだろ。俺を見る目がキラキラ輝いてるし、鼻息が荒い。あまりにも気持ち悪かったのでおっさんの影に隠れる

「交渉成立ね？じゃあ、悪いけどアナタたちはあたしの後ろから離れないで。奴隷が先導するなんてナンセンスよ」

…とりあえず頷く。前を歩くホシちゃんの三歩後ろに黙って付いていく。時々チラチラと振り返るアベがウザい

どうでもいいけど、街に着いたってことはお風呂に入れるよな？１ヶ月以上も暖かいお風呂に入ってないんだ。湖生活中は水浴び出来たけど、冒険開始からはテントの中で濡らした布で身体を拭くくらいしか出来てない。それだってアベの視線が怖くて適当にしか出来てないんだ。いい加減髪の毛くらい洗いたい。背中にかかるくらいの長さとはいえ、男の時より圧倒的に長いんだ。埃っぽくなりつつある髪を指先で摘み、げんなりする。ああ、心からお風呂に入りたい

「おお…」「ぅわあ…っ！すごい…っ！」

そうこうする間にスタトルの城壁が目前に来ていた。５ｍはありそうな堅牢な、継ぎ目１つないツルツルした岩の城壁。普通に作ったらこんなの無理だろうし、魔法で作ったんだろう。その前に１０ｍくらいの深さの堀があって、中には水が流れている。ホシちゃんがどんどん先に行ってしまうので、慌てて追いかけた

木製の大きな橋を中程まで渡ると、こっちを見てギョッとしたように目を見開き、慌てて槍を構えながらこちらに近づいてくる全身甲冑の騎士（？）が２人。どうしたんだろうか

「ば、化け物…？いや、人間か…？魔族…じゃないよな？とにかくそこで止まれ！いいなっ！それ以上こっちに来るなよ！」

えらく怯えながら槍を突き出す鎧の人物。その視線の先にあるのは…ホシちゃん？なんでホシちゃんが化け物？

「いやいやいやいや、ガキ、常識が狂ってない？あれがあんな濃ゆいオカマ見たときの普通の反応だと思うよ、俺は」

「ホシちゃんをバカにすんな！」

「なんでお前そんなにあのオカマへの好感度高いの！？おじさんついていけないから！」

ホシちゃん絡みだとおっさんキャラ違くないか？なんかオカマに悪い思い出でもあんのかな

おっさんとじゃれている間にホシちゃんが鎧の人物に冒険者カードを見せている。鎧の人が必要以上にホシちゃんに近付かないのが印象的だ

「…そっちの獣人と子供は？」

「あたしの奴隷よ。２人とも、冒険者カードを見せなさい」

頷き、ポケットから出した冒険者カードをもう1人の鎧の人に渡す。おっさんのカードはちらりと一瞥しただけで投げ捨てるようにおっさんに返され、俺のカードはじっくりと見られた。…なんだろ？

「…ホシ、とか言ったか？」

ぽつり、と鎧の人が言葉を発する。後ろで見ていたホシちゃんが、面白くもなさそうに返事した

「何かしら?」

「この女奴隷、一晩いくらだ?」

「っ!?」

息を呑む。鎧の隙間からぶつけられる、濁った気味の悪い視線に悪寒が走る。おっさんとホシちゃんが顔をしかめ、俺は無意識におっさんの後ろに隠れた

「…悪いけど、その娘はそういう奴隷じゃないのよ。なんだったらあたしが相手に…」

「よし!通行許可!とっとと入れ!」

慌てた様子で詰め所へ駆け込んでいく鎧の人。…それでも背中に走る悪寒が止まらなくて、凄く気分が悪い

「…ったく。んなに心配すんな。俺が面倒みてやるから」

ぽふっ、と頭に乗せられる手。それに安心しながらおっさんを見上げる。おっさんはにやっと笑いながらタバコを取りだし、火を着け

――

「はいストップ。奴隷が煙草なんて嗜好品吸えるわけないでしょ。人前では禁止よ」

「……マジか…」

心底落ち込んだ様子で肩を落とすおっさん。おっさんの間抜けな姿に笑う俺。…ん、大丈夫。なんとかなりそうだな

気を取り直して俺達は、初めて見る異世界の街に足を踏み入れて――

「「はえおう（訳、帰ろう）」」

「はーい、奴隷が勝手なことしなぁーい」

ぐわしっ！と回れ右した俺とおっさんの頭を鷲掴みにする手。俺とおっさんは鼻を押さえて絶叫する

「「ふぁっへふはい！（訳、だって臭い！）」」

臭かった。

そりゃもうべらぼうに臭かった

排泄物を下水に流す、とかそういう習慣が無いんだろう。いや、あるのかもしれないが、道の両端に側溝があって、その中を並々と糞尿が流れ…流れ…？いやむしろ詰まっている。発酵した糞尿の臭いが、嗅覚に優れたおっさんや俺の鼻に大ダメージを与える

「もうだめだ…。帰りたいよう…ボスモンスター倒しに行くんだ…もうすぐカンストなんだよ…」

「まじすんませんっした部長…俺が悪かったから助けてくれ…もう

加害者ぶん殴ったり無許可で捜査したりなんかしねぇから…」

「はいはい。トリップしてても良いからご主人さまに迷惑かけないでちょうだい」

ホシちゃんにずるずると引き摺られながら、おっさんと2人、心を折られてぶつぶつと呟き続ける。踵が石畳と擦れてガリガリ言う

…まぁ、側溝やその中身を見なければ、綺麗な街だった

城壁と同じようにつるつるした材質で出来た家、糞尿の臭いはともかく、どこからか漂ってくる食欲を誘ういい香り。人々の顔には活気が溢れていて、馬（っぽい形の、全身鱗に包まれた変な形の生き物）が引く馬車には荷物が一杯で、屈強な体つきの青年たちが次々それを下ろして、店に運び込んでいく

周りを見渡せばほとんどは木綿っぽい簡素な服を着た人ばかりだけど、ちらほら革鎧を着た青年や、全身甲冑で兜だけ外したおじさん、華美な装飾を付けた実用性に乏しそうな鎧を着た美女や、それを囲むイケメンたち。その中には獣人もいる。

空を見上げれば、うっすらと薄い膜越しに、綺麗な青空を飛ぶ大きな翼の生えた蛇。露店に並ぶ商品は見たことのないものばかりで、豚の首（みたいなモノ）がごろっと布の上に置いてあったり、ナイフや杖みたいな武器がずらっと並んでいたり…

ああ…異世界なんだなぁ…

と、実感した

「ほら、正気に戻ったならギルドにいくわよ。付いてらっしゃい」

「「はぁ～い」」

ホシちゃんの手から解放され、歩き出す

…早くお店見て回りたい。ああでもお金どうしよう。なんか適当な装備売ればいいかな？武器の買い取りとかどこでやってるんだろう。美味しいご飯食べたいな。おっさんが好きそうな肉料理がいいのかな？

わくわくと高鳴る胸を押さえながら、おっさんの手を引いてホシちゃんを追った

「あ、あれ…俺…セリフなくね…？」

俺から無視され続けたアベが、寂しそうに呟いた

3、初めての街（後書き）

アベはオチ要因だなー…

っつか、キャラが薄いからネタに出来ない

ちなみに前回出てきた【プイスカーフ】

【プイの木】と呼ばれる木の樹液に浸して作られたスカーフです

効果は【魔法耐性、中】と【移動速度上昇、弱】

どうでもいいね、うん

今回のテンプレ

↓モブがゲス

4、商業ギルド（前書き）

※中世っぽい世界です

あくまで「っぽい」世界です

所々は「中世」なのに

何故「っぽい」になるのか…

4、商業ギルド

ギルドはいくつかあるらしい

前にも言ったようにダンジョンへ潜ることや、日常の雑用、モンスター討伐を主な仕事とする【冒険者ギルド】

『魔法の真理を探求する』こと主な目的とし、冒険者ギルドと協力して未知なるモンスターの研究や新しい魔法の開発を行う【魔術師ギルド】

冒険者ギルドから素材を買い取り、加工して魔術師ギルドや商業ギルド、各都市のお店に薬を卸す【薬師ギルド】

全世界に点在し、商業を統べる【商業ギルド】

主なギルドはこれくらいで、野盗の討伐や街中でのいさかいを治めるのは専ら国に仕える【騎士】の仕事だそうだ。まぁ、地方の村では騎士の派遣が遅いため、冒険者ギルドに報酬を支払って討伐してもらうことも多いそうだが

…に、しても

「なんかめんどくさいな。全部まとめて総合ギルド仲良し屋！みたいな感じにすればいいのに」

「…お前なぁ、そう簡単な話ならどこも荒れたりしねーだろうに」

おっさんと2人、【商業ギルド】の入り口でぼんやりと待機する

奴隷は商業ギルド内に立ち入り禁止なのだ。誰かの所有物である奴隷を間違えて売りにかけないようにするための処置らしい。…ってことは商業ギルドって奴隷も売ってるのか…それは…なんか、凄く嫌だな

何でもホシちゃんとアベはまず【商業ギルド】にコネを作り、アベの『錬金術』スキルで資金を作り、ある程度のこの世界で確固とした地位を築いてから本格的に【魔王】討伐に乗り出すプランらしいのだ。そのための第一歩として、商業ギルド、薬師ギルドといった危険度の低いギルド内で自身たちで作った商品を売る、と。…俺も真似しよっかな。俺も『錬金術』スキルはあるし…。問題は俺の『錬金術』スキルで作れるモノは『ガナスタ』内の登場アイテムだけなんだよなぁ…

「そこの奴隷っ！邪魔だ！どいてろ！」

「ご、ごめんなさい！」

謝りながら端に寄る。ドタバタと大きな音を立てながら大きな木箱をギルド内に運び込んでいく男たち。彼らが動く度に汗の臭いがそこら中に広がって、既に馬鹿になっている鼻が悲鳴をあげる。おっさをなんか「ぱかっ」と口を開けて唸っている。…猫って臭いに弱いんだっけ？

ちなみにギルドは西部劇の酒場のような観音開きの扉、中に入ると市役所みたいに小分けされたブロックに5人の受付嬢が座っている。ギルド内の壁には大量の紙が貼ってあって、それが全部依頼書らしい。…でも、商業ギルドからの依頼ってなんだ？

「冒険者ギルドじゃなく、直接商業ギルドに魔物の素材とかを持ってきてもらうんだろ？そうすりゃ商業ギルドは冒険者ギルドからわざわざ素材…原料を買い取らなくて済むから、利益が出る、と？それに冒険者ギルドは薬師ギルドにも商品下ろしてるはずだからな。緊急の注文があったら在庫があるかどうかなんか分かったもんじゃねぇんだろ」

「…なるほどー」

「分かってねぇだろ」

「失礼なっ！？３割は分かった！」

殴られた

頭を抑えて痛がっていると、くすくす、と小さな笑い声が聞こえてきた

「いやいや、兄さんたちえっらいかわいらしな。奴隷やのにそないに明るいやなんて、よっぽどええご主人さまに買われたんやねぇ」

声に振り向いてみれば、眼鏡をかけた褐色肌の１０代前半に見える少女。…鼻がもう馬鹿になってるからいまいち分からないが、この子はあまり臭くない…と思う。彼女は白っぽい灰色の髪を掻き上げ、けらけら笑った

「ウチは奴隷商人のフェティッサ。テッサでかまへんよ。兄さんたちの名前は？ああ、ご主人さまからもろた名前やなくて、本当の名前やで？」

奴隷商人…。こんな優しそうな娘が？軽い衝撃を受けつつ、「俺はレティーシア。こっちはおっさ…」「大路だ。お前何ナチュラルに人の名前間違えてくれてんの？」とコントを繰り広げる。テッサはまたけらけら笑った

「仲ええなぁ。うんうん、ええことや。奴隷は辛いからなぁ…。せめて奴隷同士は仲良くせなあかんよ」

「「はぁ…」」

めっ、と言わんばかりに指を突き付けてくるテッサに生返事を返す。テッサの方が俺より２０ｃｍくらい身長が高いから、なんだか母親か姉に怒られてるみたいだ

「まぁ、ウチはこの辺りには顔が効くから、困ったことがあったら言うんやで？基本この商業ギルドにおるから。ウチは例え誰かの奴隷やったとしても、奴隷の味方やから」

ぽんっ、と俺の肩に手を置くテッサ。…あ、なら頼んでもいいのかな？

「あ、あの…じゃあ、武器の買い取りとかやって貰えますか？」

「武器？…ご主人さまから貰ったもん勝手に売ると怒られるで？」

ちょっと恐い顔をするテッサ。慌てて首を振り、

「し、私物です！モンスター退治で手に入れたモノです！」

「あ、そうなん？んー、うん。かまへんよ。ただ、ウチは武器の専

門家やないからどんな上物でも定価買い取りやで？相場しか知らんもん。…まぁ、他の商人やと奴隷やからって足下見られるかもしれへんから、おじょーちゃんの考えは正しいかもしれへんけど」

「…あ、あはは」

…そっか。奴隷だと足下見られるのか…。てっきり商人だったらどこでどんなアイテム売ろうと定価で買い取って貰えると思ってたぞ…？まぁ、現実なんだからその商品の専門家がいるのは当然か…

「ほな持ってきぃ。そこまで数あるんやったら見に行ってもえぇけど…」

「あ、大丈夫です。ホシちゃ…ご主人さま？待ってますし、今持ってまむぐっ！？」

突然おっさんに口を塞がれる。驚いて目を白黒させていたら、耳元で声

「あんま手の内晒すな。物陰行ってさも今持ってきたみたいな態度で出てこい。で、売るならインスマウスの槍にしな。お前の世界の武器は駄目だ」

…そっか。だよな。インベントリなんかこの世界には無いんだ。警戒して当たり前か。おっさんの言葉にこくこくと頷き、「仲良くてえぇなぁ…。ウチも旦那に会いたいわぁ…」とか呟いてるテッサに向き直る

「…って結婚してんの！？」

「せやでー。これでも２４やもん。子供も7人おるし、結婚しとらんとおかしぃわ。ちなみに旦那は商業ギルドのギルマスやでー」

マジで!?ってか7人っ!?単純計算で7…いや８年前に結婚したとして…１６歳っ!?

「ほのぼのすんのはいいからお前はとっとと持ってこい」

「え、あ、うん。わ、わかった」

頷き、ギルドと隣家の隙間の路地裏へ入る。…どれくらい待てばいいんだろ?５分でいいかな。…おっさんとテッサはなんかぼそぼそ話しているみたいだが、さすがに遠くて聞こえない。…どうでもいいけど路地裏はゴミいっぱいで余計に臭い!

「インベントリ：謎の槍×４」

俺は装備できない謎の槍。金属っぽい骨?みたいなので出来た三叉の槍で、軽いのに凄く固い。べったりとインスマウスの血で汚れているが、大丈夫かな?

臭いに耐えきれなくてガチャガチャ音を鳴らしながら路地裏から走り出る。にこやかに会話するテッサとおっさんに急いで走りよると、どうやらのろけ話をしているらしい

「ほんでな、奴隷やったウチを買い取って、普通の生活させてくれただけやなく、「君の人生を俺に買わせて欲しい。まだ俺には君を幸せに出来るほどの金は無い。だから金の代わりに、俺の人生を貰ってくれ。俺の人生全てで、君を幸せにしてみせる」…なぁんて言ってくれてなぁ。これはもう尽くすしかないやん?惚れるしかない

やん？ほんまウチの旦那は最高の男やねんてぇ～」

「おー、男だな、旦那。しかもそれで大成しちまうんだからすげぇなぁ…。ぉ、戻ってきたか」

顔を赤く染めながらぴっこぴこと一房だけ跳ねた髪を動かすテッサと、腕を組んで感心したように笑うおっさん。…なんかすごい仲良くなってる？

「お、それが売りもん？見せてー」

「あ、うん。それなりに重いっすから、気を付けてください」

ガチャガチャと槍を並べていく。勿論道行く人の邪魔にならないよう、道の隅…有り体に言えば、糞尿の詰まった側溝のすぐ側で。…うぅ、臭いよう

「おはー……随分ええもんやなぁ。んー…1本5万、かな。血汚れとるのと魚臭いのがなぁ…中古武器としてはええもんやと思うし、普通の武器屋に売ったらどうなん？多分、足下見られなきゃ7万くらいで買い取って貰えるんちゃう？普通に買ったら15万はするで、このレベルの武器やと」

…やばい。相場が分からない。5万でどれくらいの価値があるのか分からないし…

「えっと…この辺の宿屋で一泊したらいくらくらいですか？」

「ん？んー…食事付、二人部屋で5000ゲイルくらいやない？なして？」

…ってことは5万が4本で20万、単純計算で40日はなんとかなるのか。どうせタダで手に入ったもんだし、何よりテッサのこと気に入ったし…テッサに買い取ってもらいたい。決してまともな武器屋を探して持っていくのが面倒なわけじゃない

「…いえ、テッサさんに買い取って欲しいです。おっさんもそれでいいかな?」

「ああ、いいぞ」

「そうけ?ほな毎度あり。なんやごめんなぁ、もうちょい高く買い取ってあげたかったんやけど…」

申し訳なさそうに言いながら、荷物を運んでいた男の人たちを呼ぶテッサ。男たちはテッサが黙ったまま槍を指差すと、当然のように中に持っていく。テッサはガサゴソと懐を探り――え?

「ん?どないしたん?」

「あ、いえ…」

普通に紙幣だった

中世っぽい雰囲気だから金貨10枚~みたいなのを期待していたのに、変な髭の生えたお爺さんが書いてある紙幣を20枚。…なんだろう、このチグハグ感

「ん?大陸公用紙幣やないほうが良かった?なんやったら金板でもええけど…」

再び懐を探り、金で出来てるっぽい板を4枚取り出すテッサ。…つまり、5枚…5万ゲイル?で金板を1枚ってこと?

「あ、いえ。こっちのお金見たことなかったんで…」

「ああ、田舎から来たんやね。このゲイル紙幣やったら大陸の主要都市ならどこでも使えんで?…でも一応、田舎行ってもええように一枚金板にしたろうか」

紙幣…多分1万円札みたいなもんなんだろう。を5枚抜き取り、金板を1枚渡してくれるテッサ。「ありがとうございます」と頭を下げ、インベントリ――ポーチにお金をしまう

「ええよ。元同類やもん。スタトルの商業ギルドは奴隷の味方やから、ほんまにちょっと困ったら連絡してくれてかまへんよ」

ほな、兄さんらにファルガナ神のご加護を~と笑いながら去っていくテッサ。その後ろ姿に手を振りつつ、ほっと胸を撫で下ろす

「良かった…。お金稼げた…」

「…けど、どれくらいの価値があるのかわかんねーな。ったく、手探りで進めなきゃなんねーってのがこんなに面倒だとはなぁ…」

はぁ、と溜め息を吐く。…まぁ、でも充分だ。テッサは良い人だったし、ちょっとしたコネも出来た。…出来たよな?多分

と、そのときちょうど良いタイミングでホシちゃんたちがギルドから出てきた。アベもどことなく満足げだ

「お待たせ。無事商業ギルド認定の職人見習いになれたわ。後は薬師ギルドに付き合ってくれる？」

「レティちゃんにも見せたかったよ！俺の錬金術のすさまじさを！」

胸を張るアベに愛想笑いを返す。こういうガキっぽい奴はやっぱ苦手だ

「ん、大丈夫だよ」

「その前に腹ごしらえしねーか？当然奢ってくれるんだよな、ご主人さま」

「もっと言って大路ちゃん！あたしをご主人さまって言ってぇえええええっ！！」

絶句するおっさんにくすくす笑いながら、俺達は薬師ギルドに向かう

4、商業ギルド（後書き）

…転生オリ主ＮＡＩＳＥＩはあるよね、という話

ＮＡＩＳＥＩあったら、微妙に文化レベルがちぐはぐになるよね

ちなみにホシちゃん&アベーは目の前で指定された材料を指定された商品に「錬金」してみせることで商業ギルドに認められました

頑張れアベー！

負けるなアベー！

描写されてないけどお前の頑張りは重要だっぜ！

ホシちゃんとの甘い生活のために！

レティたちには関係ないけどな！

今回のテンプレ

↓各職業ごとに乱立するギルド

↓序盤の街の重要イベント

↓偶然お偉いさん（の関係者）に出会う。しかも仲良くなる

↓しかも美少女

おまけ

１ゲイル↓１円

ゲイル紙幣は

１００００ゲイル札、爺（王様）
５０００ゲイル札、婆（王妃様）
１０００ゲイル札、青年（王子様）

の三種類のみ

硬貨は←の通り。

１００ゲイル↓銅貨１枚

５００ゲイル↓銅板１枚

１０００ゲイル↓銀貨１枚

５０００ゲイル↓銀板１枚

１００００ゲイル→金貨１枚

５００００ゲイル→金板１枚

基本的にこんな感じ。

円＝ゲイルで、あんま考えなくてもオッケ。本編には対して関わりないでござる！

EX3　性別の違い（前書き）

ずっと書きたかったイベントだよ！

ちなみに人春は男性なのであくまで想像＋取材結果からです

そこ！　キモいとか言うな！

EX3　性別の違い

ホシちゃん達が薬師ギルドへの売り込みを終え、食事に向かう。…向かったはいいが…

「…ここで食べるの？」

「「「…」」」

無言で首を振る3人。食堂らしき場所を見つけたのはいいものの…中を覗いてみたところ…。とんでもない

床にはネズミやネズミとほぼサイズの巨大Gがカサコソと走り回り、スプーンやフォークがないのかスープはパンにつけるか直接皿から啜るか、食べこぼしもぼろぼろ溢れていて、食事すればするほど床やお客さんの服が汚れていくような有り様だ

「…材料買って自分で作りましょ。食欲が失せるわ」

こくっ、と誰からともなく頷き、商店に向かう。生の食品を買うのはちょっと迷う。肉とか魚の色が赤くないのだ。スーパーでパック詰めされている肉並のクオリティを求めている訳ではないが、流石に灰色の肉を買う勇気や、虫食いで穴だらけになった野菜を食べる勇気は無い

と、なると、見た目があまり関係ない干し肉や干し魚、チーズ等の最早見慣れた食材になってしまう

「…商業ギルドで聞いた話だと、新鮮かつ綺麗な食材しか買い取ってくれない国もあるらしいから…。その、国によって文化レベルはバラバラなんでしょうね…」

「ま、今の俺達にゃどうしようもねぇがな」

どことなく暗い雰囲気で買い物を終える。次に向かうのは――宿屋、か。他の店の状況を見る限り、あまり期待出来そうにないな

そして到着した宿屋は、案の定酷いレベルだった

テッサから聞いた一泊の相場が５０００ゲイル。その宿屋は１００００ゲイルと実に二倍の値段の宿屋だったのに、ベッドのシーツは黄ばみやシミだらけ、いつ変えたか分からないようなモノで、Ｇやネズミがいるのは当たり前。部屋に蜘蛛の巣まである。部屋の隅に悪臭を放つ木の桶があり、それがトイレ代わりらしいのだ。ぼそっとおっさんが「刑務所よりひでぇ…」と呟いているくらいだから、余程だろう

部屋割りは、主人と奴隷で分けた。俺とおっさん、ホシちゃんとアベだ。ホシちゃんの部屋はまだマシだったらしいから、恐らく主人と奴隷で格差があるんだろう。宿屋の店主は、奴隷をベッドのある部屋に泊める、とホシちゃんが言った辺りで驚くくらいだったから、本当は奴隷用のタコ部屋があるのかもしれない

「うぷ…酷い臭い…」

「コレで寝れるか…？野宿の方がマシかもしれねぇな…」

布団はぺらっぺらでごわごわする。虫食いから覗く中身は枯れ草？

みたいなモノだった。とりあえずシーツも布団も一度インベントリに入れ、デフォルト――綺麗な状態に戻す。それでもごわごわし、妙な臭いがこびりついている気がした

「あー…でもあれだ。十分マシだ。サンキューな」

「ううん…。あとごめん、流石にインベントリ内にアレを入れるのは恐い」

と、トイレ代わりの木桶を指差す。おっさんは苦笑いで「仕方ねぇやな」と笑った

他のアイテムに臭いが移る、なんてことは無いだろうが、インベントリに繋がるポーチに糞尿の臭いがついたら…おぅ。想像しただけでぞくっと来た…

自分の部屋をある程度マシにしてから、ホシちゃん達の部屋に向かう。ホシちゃん達はキッチンを借りて食事を作っているはずだから、その間にテキパキ部屋を掃除する。俺達の部屋より僅かにマシ、といった程度だが、布団はマシらしい。一度デフォルトに戻すだけで、随分綺麗になった気がする

「あ、レティちゃん。もうすぐ飯出来るってアイツが言ってたよ」

部屋が綺麗になったのに満足していたら、アベが戻ってきた。それに頷き、床に置きっぱなしだった雑巾代わりの布をインベントリに戻す

「あ、うん。わかっ…解りましたご主人さま。すぐ行きます」

「…」

普通に返事しただけなのに、ぴしりと固まるアベ。その顔が、徐々に…にやけていく。無言でドン引きする俺

「ふ、ふふ…ふへへ…れ、レティちゃ…レティ！すぐ来いよ！すぐだぞ！ヒャハー！」

いきなりテンションＭＡＸで走り出したアベをぽかん…と見送る。

…な、なんだったんだ？

「…ん？」

づきっ…と下腹部に鈍痛が走る。一瞬の痛みの後はそれほど痛まないが、僅かに残る痛みの余韻。偏頭痛みたいな曖昧な痛みに顔をしかめる

…なんだろ？お腹壊した？変なものは食べてないと思うんだけど…

ツキツキと断続的に痛みを訴える下腹部に首を傾げながらおっさんを呼びに行く。ノックして外から声を掛ければ、顔をしかめながら出てくるおっさん

「…どうかした？」

「ムラムラする」

「…アンタ何言ってんだ？」

「ドン引きすんなよ…。冗談だじょーだん」

はぁ、とため息を吐きながらのそのそ出てくるおっさん。廊下を歩きながら、右手をお腹に当てて様子を見る。…なんだろ?段々痛みがひどくなってるような…

「ん?どうした?お前も月に当てられたか?」

「月?」

首を傾げておっさんを見上げれば、おっさんは廊下の窓から外を指差す。いつの間にかうっすらと暗くなり始めた空と、真っ赤な三日月が山の向こうから顔を出したところだった

「…うっわ…月が真っ赤…」

「あの月見てるとムラムラしねぇ?」

「それはねぇわ」

ばっさり切り落とす。「そうかなー…」と首を傾げるおっさん。「…タバコ吸えなくて変になってんじゃね?」と言うと、「そう、か?んー…分からん…」と頭を捻る。かわいくないぞおっさん

食堂に一度向かったのだが、そこもネズミやGがちらほら走り回っていたので、料理を持ってホシちゃんの部屋に移動。料理していただけなのに、ホシちゃんはげっそり疲れきっていた

「…もー、ダメね。1匹2匹ならともかくあんなに大量の悪魔が出てくると毛穴開いちゃうわ」

ほらほら見て見て。と鳥肌のびっしり浮いた腕を見せてくるホシちゃんに苦笑い。…正直初見の人にはGよりホシちゃんの方がショックでかいと思うよ?宿屋の主人さんもホシちゃん見た瞬間ぽかん…としてたし。…よく商業ギルドとかはホシちゃんの見た目受け入れられたよなぁ…

食事を終えて、道具を纏めてインベントリに収納。わざわざ水を使って洗うより、デフォルト状態に戻した方が楽だし、綺麗になる。それを宿のキッチンに返してから、部屋に戻る

…ヤバいな。お腹痛い。ふらふらと力の入らない膝を叱咤し、部屋に戻る。…まだおっさんは戻っていないらしい。ベッドに倒れ込み、お腹をおさえて踞る

「…ぅ…ぁぅぅ…」

身体が熱っぽくて、ダルい。全身に重りを付けているみたいな倦怠感。…眠い。なんでこんな急に…

目覚めの気分は、最悪だった

まだ空が明るみ始めた程度の時間に目覚めたせいか、頭に血が回っていない。ふらふらと揺れる視界。ベッドに倒れ込んだ時とは体勢が違うし、多分またおっさんに世話をかけちまったんだな…と自己嫌悪。

「くそ…ぁぅ…」

倦怠感に襲われながらも苦労して身体を起こす――ニチュ…と粘っこい感触。ただでさえ回っていなかった頭から、さぁ…と血が下がる

この年でお漏らし（しかも二回目）…。死にたい

泣きたい気持ちでうっすいボロ布みたいなシーツをめぐり――絶句した

「――――ぇ、え?…え?」

真っ赤に染まった布団、股間、シーツ。ホットパンツは勿論、下半身のほぼ全部が深紅に染まっている。何度も嗅いだ鉄錆の臭い。乾きかけたどす黒い跡と異臭が、それを血液だと告げる

――ストン、と胸にある言葉が入り込んできた

「…はぁ～…」

膝を抱えて額を膝に押し付ける。ズキズキと痛むお腹と、シーツを真っ赤に染めて尚、身体から少しずつ溢れ落ちていく液体の感触。

…予想より遥かに多いなぁ

いつかこんな日が来ると覚悟はしていた。けど、レティーシアが余りにも幼い容姿をしているから、先月は来なかったから…まだ来ていない、あるいはエルフには無いのだと思い込んでいた

――生理、あるいは月経

こんなに辛いとは思わなかった

尻の穴から火掻き棒を突っ込まれて内臓を削り取られる感覚、とでも言うのだろうか

キリキリと痛む下腹部にしばし呆然とする。なにもやりたくない。というか何もできない。…でも血塗れのままいるわけにいかないしなぁ…。のろのろと服を脱ぎ、インベントリに詰め込んでいく。インベントリから取り出した適当な布を水で塗らして血を拭き取り、新しい清潔な布でおしめのように覆った

「…【恒久たる癒し手を。フィジガルヒール】」

自動ＨＰ回復呪文。…気分の悪さと体調の悪さは拭えないが、多少は楽になった。かろうじて動けない事もない

…覚悟だけはしといて助かった。もしいきなり生理が来た…なんて言ったら、動揺したまま首を吊ってたかもしれない。ここまで辛いだなんて欠片も考えてなかったがな！

血塗れのシーツもインベントリに収納して綺麗にした後、服を着ようとして…困る。布で何重にも巻くことで出血を押さえている以上、当然膨れるわけだ。こんなんじゃホットパンツなんて履けない

…仕方ない、か。いつもの冒険者スタイルは不可能だ。インベントリから「マギカ」の初期装備…頭から、足先まですっぽり覆う分厚いフード付の黒いローブを取り出す。それに魔女っ娘みたいなとんがり帽子。…一応バンダナは付けたままにしておこうか

「…ってか、俺…妙に冷静でやんの」

アレか？血が下に下がってるお陰かな？と妙に笑える

なんだか胸も張っているような気がするし、お腹の痛さは止まらないし、頭がくらくらする

…ってか、本当にキツい…。全世界の女の子を尊敬するぞ畜生…

着替えとベッドの処理が一段落してから、隣のベッドに向き直る。大口開けて間抜け面で眠るおっさんに苦笑い

「…おっさん、起きて…おっさーん…」

重たい身体に苦労しながらおっさんのベッドに歩み寄る。…考えてみればおっさんが寝てる真横で下の処理してたのか…。なんか情けない

「んぐ…ぐるるる…んがぉ…」

「寝言恐いよ…。起きてー…おっさん起きてー…」

なんか猛獣みたいな唸り声をあげるおっさんを揺り起こす。５分ほども揺さぶり続けると、ようやくおっさんは目を開けた

「…んだぁ？…んぉ？おぅ…？…魔女の宅〇便…？かわいいじゃん…」

「…いや、そんなボケいいから」

首を振りつつ、ふぁああ…と大きな欠伸をしながら背伸びするおっさんに…ちょっと躊躇しながら、言う

「ごめん。俺、今日動けないってホシちゃんに伝えて？」

「ぁん？そりゃなんで…ん？…成る程な。生理か」

すんすんと鼻を鳴らしたおっさんが、納得顔で頷いた。なんだか妙に気恥ずかしくて、その頬を引っ張る

「…口に出すなよ。恥ずかしいだろ」

「いふぇふぇ、はらへっへ。…ってて。仕方ねーだろ。血の臭いがすんだよ。まぁアレだ、オカマにはよろしく言っといてやるから休んどけ。あのオカマなら大丈夫だろ」

欠伸を噛み殺すおっさんにインベントリから布を取り出して渡し、ついでに飲み水を入れてる水筒を渡せば、寝ぼけながらも受け取って喉を潤す。…いや、顔拭けよ。水で濡らして顔拭くと思ったんだがなぁ…

「ん…。じゃあごめん。あとよろしく…」

ふらふらしながらベッドに歩み寄り、布を腰元に当ててベッドに寝

転ぶ。…確か妹がこんな感じにやってたような…駄目だ。頭が回らない

ぼふっと変な臭いのするベッドに倒れ込み、倦怠感を引き摺ったままだらりと四肢から力を抜く

「…なんか食いたいモノあるか？」

「…リンゴ食べたい」

「ぐっ…分かった。探してみる」

そんな会話をしておっさんが出ていく

…頭の中をぐるぐる回る喪失感。ああ、俺、男じゃないんだなぁ…という実感を下腹部を襲う鈍痛が訴える。…身体を襲うダルさが、妙に熱っぽい身体が、股間から伝う血の感触が、全部が全部、どうにも億劫で…

…すべて投げ出してしまいたい衝動にかられながら、首を振る

がんばれ、俺。がんばれ、レティーシア

…でも

「…これで、泣くのは最後。最後。絶対…もう、泣かない」

だから、今だけ泣くのを許してください

ぽろぽろと溢れる涙が、止まらないんだ

EX3　性別の違い（後書き）

レティは女の子初めてなので生理の兆候に気付きませんでしたが、本来の生理はこんなにいきなり来るもんじゃないそうです

2～3日前から乳房が張り、弱い腹痛が断続的に続き、身体が火照り始め、

実際に始まっても出血、始まる数日前から続く腹痛のん十倍の腹痛、微熱、寒気や悪寒、風邪に似たような症状などが2～3日続くそうです

その痛みは作中レティが触れているように、尻の穴から云々レベルの方もいれば、スルッと抜けていってしまう方もいるそうで

更に付け加えるなら、初潮の場合は半年ほど前からフェロモンバランスの変化により髪に癖が出てきたり、何かと身体が不安定になるから何となく「あ、これは近い内に来るな」というのが分かるそうです

男には想像出来ん世界です。男が子供生んだらショック死する、というのもあながち嘘じゃないんでしょうね。女の子には月に一回苦行が…うーむ…。全世界の女の子に対する見方が変わりました。…もっと優しくしてあげよう

恥を忍んで取材した人春を労るためにもＴＳ小説よもっと増えてくれ！

しっかり生理にも触れてくれ！

ちなみに作者は女友達に取材した時にビンタされたぜ！

長々と書きましたが、一言

今回の話書くのスゲェ大変でした

いつもなら平均2～3時間で1話書けるんですが、コレは2日ほどかかった…

うん、やけに後書き長いと思いましたよね？

作　者　も　恥　ず　か　し　い　ん　だ　よ　っ　！

ちくしょー！書いてやる！もっと書いてやるー！

閑話　おっさん（前書き）

前話の反響良すぎてワロタ

でも俺を勇者とか言うなー！

なんか『変態主人公のＳＳ作家』を通り越して『変態作家がＳＳ書いてる』にジョブチェンジしつつある人春でした！

閑話　おっさん

相方に生理が来ていた

それは、少なからず大路にショックを与えていた

人形のような、という表現が似合う、小さな女の子。姪っ子と同じくらいの年頃の娘が血生臭いダンジョンで泣き濡れる姿が見るに耐えず、親切心で声をかけたのが切っ掛けだった

可愛らしい容姿と男のような言動に驚きつつも、耳が長い――明らかに異種族である彼女にそれを言及するのもどうか、と思い黙っていた

会話すればするほど、その少女からは危ういモノを感じた。まるで世界にたった1人取り残されたみたいな絶望が、悲哀が、その目に、声に染み付いていた

目が、語るのだ

置いていかないで、と

声が、すがるのだ

恐い。全部恐いものばっかりだ。と

行動が、示すのだ

俺に置いていかれたら、私はもう立ち直れない、と

だから柄にもなく――連れてきてしまった

なつかれてしまった

子供の面倒を見るのは苦手だ。女の機嫌をとるのも駄目だ。全然俺のキャラじゃない。つい、手が出る。つい、拳を振るう

それでも、相方は…楽しそうに笑ったのだ

1ヶ月。

長い時間だ。

他人から知り合いへ

知り合いから友人に

友人から親友に

親友から…家族、になるにはちと足りないが

相方が、自分にとって大切な人間になるまでには十分過ぎる時間だ。

笑って、泣いて、茶化して、遊んで、じゃれて、殴って、殴られて…

そんな関係が、なんとも心地よかった

だと、いうのに――

「…俺ってやつぁ」

ずーんと重苦しいオーラを背負って落ち込む。「どうしたんだい兄さん？」と心配してくる商店の女性に首を振って誤魔化しつつ、リンゴによく似た果実を包んでもらう

――いまも、そうなのだ

欲情している

成人した獣人は、３ヶ月に一度昇る「赤い月」の魔力の関係で発情期に入る

新月から満月までの１週間、男性の獣人なら女性を、女性の獣人なら男性との性行為をしたくてたまらなくなるのだ

昨日昇っていたのが三日月だったから、まだまだ先は長い。思えばこの街に向かう途中…火の番をしている時、相方が髪をかき揚げた時の匂い――ふわりと香る、甘い少女の匂いが、致命的だったのかもしれない

ムラムラして、ヤバい

色街に行きたいな～。とは思うのだが、この街の衛生状況を見るに変な病気が移されそうで恐い

そのてん相方ならだいじょ

「うらあああああああっ！！」

「ひぃっ!?」

思いっきり額を槍にぶつける

「オーケーオーケー正気に戻れよ俺。あいつは子供、あいつは子供。オーケー?オーケー!」

HAHAHA!と額からダラダラ血を流しながら笑う。周りの人間がドン引きしてるが気にしない

とにかく、額を布で押さえながら果実が5つも入った麻袋を手に取る。麻袋は私物だ。この世界にはレジ袋なんぞないし、大路はインベントリなどという便利なモノは持っていない

「はぁ…」

どうにかしなくては

まだ我慢出来るが、満月の夜は一番性的衝動が激しいらしい。万が一理性が切れて相方を襲っちまったら――あいつのことだからマジで自殺しかねん。全部未遂で終わったらしいが、レイプ犯に襲われた被害者女性みたいな顔してたからなぁ…

…どっかで自家発電、とか?でもどこでよ?　…屋外でとか冗談じゃねーぞ

頭を抱えてウンウン唸る。…駄目だった。何も思い付かない

とにかく、こんな脳味噌ピンク状態で相方のとこ帰ったら何するか

分からん。ちっと冷却期間置くか…と結論付け、向かった先は――
冒険者ギルド

「…ぉー」

観音開きの扉を開けた瞬間突き刺さる視線視線視線。どいつもこいつもガタイが良くて、悪どい顔をしている。ヤクザの溜まり場と言われた方が納得でき…ないか。鎧着けたりでっかい剣を背負ったりしているヤクザはいない

中にはチラホラ水着みたいな鎧を着た若い娘や、逆にまったく肌の露出がない、辛うじて女性?と声で分かるような人物もいるが、ほとんどが北〇の拳に出てくるモヒカンみてーな体型の悪人面ばっかりだった

いくつも並んだテーブルと、その上に乗った料理から察するに食事処もやってるらしい。…例によってこんな所で飯食う気は全く湧かないが。とにかく、テーブルの隙間や、時折差し出される足を器用に避けて受付に向かう

２０前半くらいの女性がにっこりと笑ってマニュアル通りっぽいセリフを吐く

「いらっしゃいませ。冒険者ギルド、スタトル本店です。受付は私、マリージョアが担当させていただきます。この度のご用件は何でしょうか?」

…と、言われてもなぁ。と頭を掻く大路。少し迷ってから、

「ここでなにが出来るか教えてくれ」

マリージョアの笑顔が一瞬固まる。…アレか、めんどくさい客だと思ったわけだな?当たりだよ畜生

「畏まりました。

まずは「冒険者カードの発行」。冒険者カードが無ければ基本的に武器の携帯は認められていません。また、発行後は自動的に冒険者ギルドに登録されます。冒険者ギルドに登録されるということは、街中での犯罪行為等をした場合、自動的に称号が「盗賊」に変更され、冒険者ギルドに登録している全冒険者を敵に回すことを意味します。よく考えて行動してください。また、称号：盗賊は街に入ることが出来なくなり、モンスターとして扱われるので死にたくなければ真っ当に生きてくださいね?

次は「依頼」、これはクエストの発注ですね。報酬、依頼金をギルドに納め、相応の冒険者を派遣してもらうための手続きを行います。すぐに冒険者が捕まるとも限りませんので、ご依頼はお早めに。

次に、「受注」。壁に張ってあるクエストから好きなものを選び、受付に提出して頂ければ、依頼者への紹介状を書かせて頂きます。その後、速やかに依頼者の元を訪ね、依頼を達成してください。

そして「鑑定」、別名で「買い取り」討伐した魔物や魔獣、魔族の死体や死体の一部を提出していただければ、その土地における適正価格での買い取りを行います。同じ品物でも需要にあわせて高値で買い取られる地域もあります。商店と基本的に変わりませんね

最後に、「レベルＵＰ」です。…武器を携行していることから考えて、すでに冒険者カードは発注済みですね?」

「ああ、作ってある」

と、懐からカードを取り出す。マリージョアはそれを一瞥し、

「結構です。そこに書いてあるＬＶという文字、その後ろに書いてある数字の回数だけ、あちらの祭壇で神から加護を受けることが出来ます」

と、受付嬢が指差すのは壁際の隅にある申し訳程度の出来の神棚。

それが、６つ

「光の王神に祈れば運が、

火の女神に祈れば烈火のごとき爆発力を誇る腕力が、

水の女神に祈れば流れる水の如き軽やかな回避力が、

土の女神に祈れば生命力に溢れた大地のような防御力が、

風の女神に祈れば吹き荒ぶ嵐のような素早い脚力が、

祈った回数だけ、強化されます」

「…成る程な」

ちょっと昔のゲームと変わらんな。ただ、ステータスＵＰは決められた場所で決められた回数しか行えない、ってわけだ

…ん？でも変だぞ？

「祭壇は６つあるが？」

「ああ、邪神に祈るためのモノです。魔力が上がります。ですが、獣人のオージさんには関係ないでしょう？」

「…俺、名乗ったっけ？」

「冒険者カードを拝見させていただいた際に。ああ、それからクエストは受注するのは構いません。昨日今日冒険者になったばかりの人間がＡランク迷宮に挑むのも構いませんし、Ａランクモンスターの討伐依頼を受注するのも構いません。が、死亡、怪我、精神的ダメージを負った場合も冒険者ギルドは一切の責任を持ちません。『貴様らの命は使い捨て。冒険者になる者はゾンビとなるものと思え。』これが冒険者ギルド設立当時の決まりです」

「…」

思わず黙り込む大路。…とにかく今は、他にやることがあるだろう。具体的には相方に果物を運んでやらなければ。ギルドへの本格的な参加は相方の生理が終わってから、ゆっくりと相談して決めよう。…まぁ、ギルドに参加するくらいしか生活の術がない以上、やらざるを得ないが。…いや、普通にモンスター退治してその武器とか売れば…いや無理か。素直に冒険者やるのが一番楽なんだろうな…

「それで、本日はどう言ったご用件で？」

ニコッ、と笑うマリージョア。オージはしばし考えて…

「ＬＶＵＰだけさせてもらうわ。…後、この変で地図の売ってる店

を教えてくれ。…それから魔法について学ぶならどこに行けばいい？相方が魔法使い志望でね」

マリージョアは少しだけ考え、くすくす、と小さく笑った

「本当は仕事範囲外だからその質問に答える義理はないんだけど…オージは美形だから教えてあげる。三軒隣のプアテスの雑貨屋が一番かしら。それから魔法を学びたいなら、プアテスの雑貨屋で『習いの水晶』を買うと良いわ。基本的な魔法を学ぶにはそれが一番よ。専門知識を学びたいなら、ここからずぅ～っと北に行って…馬で１週間、竜車で４日くらいのところに魔法都市ヴァンフォーレがあるわ」

「おう、わざわざすまねぇな」

「いいわよ。…ところでオージ、貴方今、発情期よね？」

ピタリ、と大路の動きが止まる。それにクスクスと笑い、マリージョアは指を三本立てた

「三万ゲイルでどうかしら？」

…しばしの思考。丁度２０万ゲイルで売れたから、１０万ゲイルずつ分けたのだ。金は、ある。そしてムラムラは…収まってない

ここら辺で発散していけば、相方にも笑顔で接することができるだろうし、何の問題も…

――ふと、

心底辛そうに、泣きそうな顔でベッドに横たわる相方の顔が浮かぶ

だから…首を、横に振った

「わりぃな、遠慮しとくわ」

「あら、イケズね」

「いやいや…」

胸元を漁る。今は吸えない嗜好品。ヤニの感触に口が淋しい

が、ガキの前で煙草っちゃー…ねぇわな

そんなことを考える自分に苦笑する

「ツレが身体壊して寝てるんだわ。あんま放置も出来ねぇ」

「あらあら。じゃあ、明日でも待ってるわよ？」

「ははっ、ありがとさん。多分来ねぇけど」

…だってマリージョア、くせぇんだもん

言葉には出さず、笑って誤魔化しながら祭壇に向かう

獣人の鼻にゃ、この街は辛すぎる

苦笑いしながら、ステータスＵＰと買い物を終え、相方の待つ宿屋に帰る

まだまだ日が高いのに、夜が憂鬱だわ

閑話　おっさん（後書き）

前話の後、おっさんの行動。

そしてこの世界のＬＶ概念の掲示

ちなみに称号は行動によって勝手に増えます

それとギルドがよくある「Ｃランクの冒険者はＡランクの依頼は出来ません～」とかやらない理由

「自分の実力も把握できない冒険者は、どうせ死ぬから勝手に死ね。変わりはいくらでもいる。身のほどを知って死ね。むしろ冒険者なんかやりたがるガキは皆死ね」

というスタンスだから

今回のテンプレ

↓誘惑受付嬢（笑）

5、進展（前書き）

なんか読者の皆さんが好意的でテンションが有頂天の人春です

おっさん萌え広めようぜ？

5、進展

生理…2日目

寝てた

生理、3日目

ようやく腹痛が収まり始める

生理。4日目

なんとか復活。3日間ほぼ付きっきりで看病してくれたおっさんに頭が上がらない。あと血が足りなくて身体が動かない。回復魔法は生理痛や貧血、病気の治療には役に立たないことが判明。死にたいで、どうにか動けるようになったその日、

「ホシちゃん達と別れる…？」

と、おっさんに聞かされた

場所は宿屋の食堂。正直歩くのも億劫だったんだが、部屋はおっさん曰く「女の臭いがする」そうで、おっさんが辛そうにしてたから移動した。…多分俺の匂いなんだろうなぁ、と思うと顔が熱くなる。…し、しかたないじゃん！？生理でダルくて風呂は勿論、体を拭くことも出来なかったんだから！…まぁ、そんなわけで心持ちおっさんから距離を取る。…自分ではそんなに臭くないと思うんだけどなぁ…

臭いの話は置いておいて、しゃりしゃりとおっさんがカットしてくれたバナナみたいな見た目のリンゴみたいな味と触感を持つ果実を食べる。バナナと同じように黄色い分厚い皮を剥くと、中からしゃりしゃりする甘酸っぱい果肉が出てくるのだ。最初は見た目がリンゴな果実を買ってきてくれたんだが、見た目と触感はリンゴなのに、味はレモンだった。酸っぱいのが苦手な俺は泣きそうになった。泣かなかったけどな！もう泣かないって決めたし！

いやそれもどうでも良くて、だ

こくり、と果実を飲み下し、おっさんに問う

「なんで？」

「端的に言うと、あいつらが旅に出る。結構な長い期間になりそうでな、それならこっちはこっちで違う方向に動こう」

聞けば、ホシちゃんたちは商業ギルドの依頼で、ここからずっと南にある王都に向かい、そこで王様…じゃなかった。女王さまに特別な商品を届けなくちゃならないらしい。本来は冒険者ギルドに依頼して、護衛を付けるらしいのだが、ホシちゃんたちはたった2人でBランクモンスターの群れを討伐出来るほどの腕前があるから、護衛兼商人として出来る限りの速度で王都に向かい、商品を届けるそうだ

…でも、だったら余計に俺のインベントリが役に立つんじゃないか？Bランクモンスターの群れっていつの間に？商人ギルドってそんな無責任でいいのか？ってか女王さまってなに？

と矢継ぎ早に質問をぶつける。おっさんはうんざりした顔をしながらも、指折り答えてくれた

「Bランクモンスターはお前が生理休暇貰ってる時に、あいつらが討伐依頼を受けたんだよ。Bランクモンスター「ドラグベアー」。竜のような爪と鱗を持つ熊みたいなモンスターでな。その手は「りゅうのつめ」と呼ばれ、珍味として美食家に好まれる。けどあんま美味くなかったな。本来なら一匹で良かったんだが、運悪く群れに遭遇したらしくてな。マシンガン掃射であまり時間はかからなかったそうだが。商人ギルドは実績主義だ。手柄さえ立てれば、新米でも重要な案件を任される。女王ってのは簡単。この世界…光の国、ファルガナの頂点に立つのは女の王様ってだけだ。で、あー…お前が必要ない理由ってのはだな…」

言いにくそうにボリボリと頭を掻き、それでも意を決したようにおっさんは吐き捨てた

「…奴隷、なんだよ。運ぶ商品がな」

「ぇ…」

思わず言葉をなくす。奴隷、って…そんな…ホシちゃんたちが…

「落ち着け。あいつらだってやりたくてやるわけじゃねぇ。それに奴隷の奴等は、皆自分が奴隷になったことに納得してる。いいか？奴隷が皆かわいそう、とか、奴隷の皆を助けなきゃ、とか考えるなよ？この世界で犯罪者は奴隷になるのが決まりなんだ。お前1人がどうにかできるもんでもないし、どうにか出来るなんて思い上がるな。いいな？奴隷は、ほとんど皆、奴隷であることに納得している。いいな？」

「…ん。分かった。でも、ごめん…。まだ、割り切れない…」

力無く首を振る。おっさんは溜め息を吐きながらも、ぽんぽん、と軽く俺の頭を叩いた

「まぁ、確かに借金の方に売られた娘とか、人拐いに浚われて無理矢理奴隷にされたような奴がいないわけじゃない。だから、どうしても助けたいと思ったらお前が買ってやれ。奴隷は首の誓約の首輪さえ破壊すりゃ自由だからな。絶対無理矢理とか、暴力で解決、とかはするなよ？冒険者になって犯罪行為を行ったら大変なことになる」

「…ん」

頷く。とりあえず話の続きを促す

「この国…ファルガナは悪魔の世界、リトマスと戦争状態にある。今はまだ界峡…世界と世界の狭間らしい。その辺りの村や国での小競り合いレベルだがよ、本格的な開戦も近いと思う。で、その奴隷は戦力と…まぁ、慰安婦だな。戦場では男ばっかりだろうしよ」

「…」

無言。テーブルに並べられた果物をなんとなく手に取り、手の中で弄ぶ。手触りは妙に固いバナナなのに、味はリンゴ。匂いもリンゴ。頭がおかしくなりそうだ。…現実逃避してる場合じゃない、よな

「つまり、お前が不特定多数の他人と長期間行動を共にしなくちゃいけない。もしエルフだとバレてみろ。その後の行く先は王城だ。

考えてみろ、商人が所有してる奴隷が、エルフ。自分すら持っていない、エルフ。そんなことになってみろ、金持ちのお偉いさんはどう思う?当然、欲しがる。相手は商人だ。オカマがいくら商品じゃない、と言っても、商人は権力と大金にゃ逆らえねぇ。そうしたら…」

ぞくっと悪寒が走る。ただでさえ足りない血が、余計に足りなくなったような寒気。おっさんは、「…わりぃ、脅かし過ぎたな」と俺の頭を軽く撫でる。無言で首を振り、顔を上げる

「分かった。でも、それならそれでこの後どうするんだ?正直ほとんど寝てたから、何すればいいのかさっぱりでさ…」

「それなんだが…」

おっさんはごそごそと麻袋を漁り、大きな地図と小さな掌サイズの水晶を取り出す。なんだ?これ…

「十中八九俺は【魔王】はリトマス…悪魔の国に住んでると思う。だったら戦争に参加するのが一番だが…俺たちのレベルはまだ１０と7、この世界の冒険者的には、駆け出しってとこだ。戦争に参加した所で、鉄砲玉が良いところなわけだ。だから、まずは地力を付ける」

「なるほど…。でも、どのくらい?」

「この世界の冒険者のレベルは、
１~１０。駆け出し
１１~２０。三流
２１~４０。二流

４１～５０。一流
５１～７０。超一流
７１～９０。英雄、勇者
９１～　神話クラス
ってとこらしい。だからせめて、４０レベル以上にはなりたい所だな。一流クラスの冒険者を使い捨てにするようなことはねぇだろうし…。後は、魔法を覚える。そのためのコレと…」

水晶を手に取り、もう片手でう…ヴァ…ヴァンフォーレ…？とか言う街を指差す

「この街だ。これは習いの水晶っつって、簡単な魔法の使い方を教えてくれる。で、この街には魔法学校があって、超短期コースなら一ヶ月で基礎の魔法なら仕込んでくれるらしい。…１人１５万の入学金が必要だがな」

「へー…」

殴られた

なんでいきなり殴った!?キッ!と涙目で睨めば、逆にじと目で見られる。な、なんだよぅ…

「ちぁんと理解してっか?入学すんのはお前なんだぞ?」

「…へ?…え!?なんで!?」

殴られた。さっきより強く

頭を押さえてテーブルに突っ伏す。い、いたい…目から星が出るよ

うな衝撃だったぞ…？

「お前ねぇ、獣人は魔法使えないんだよ。一応俺も習いの水晶を使ってみたが、出来るようになったのはこれだけだ」

と、おっさんが人差し指を俺の鼻先に近付ける。意味が分からなくて首を傾げたら、ぼんやりとその指先が光っているのに気が付いた

「…光ってる…」

「…まぁ、名前はねーんだが、魔力を光に変換する魔法だ。懐中電灯いらず…と言いたい所だが、俺みてーなまったく魔力のねーやつじゃ、ぼんやり光らせるのが限界だな」

いってる内に魔力が切れたのか、切れかけの蛍光灯みたいに明滅した後、あっさり消える魔法の光…

うわぁ…な、なんかドキドキしてきた！ゲームみたいに呪文唱えれば後はシステムが自動処理する『魔法』じゃなく、本物の【魔法】…！使えるなら、使いたい！

「わかった！俺、頑張るよ！」

「おう、がんばれ」

にぃ、と笑うおっさん。それに笑みで返しつつ、水晶を握り締める

「っと、待て待て。まだ話は終わってねーって。とりあえずここから北西に少し行ったところにダンジョンがある。駆け出し冒険者には丁度いいレベルのダンジョンらしいから、ここに潜ってレベルを

15くらいまで上げるぞ。金も稼ぎたいし、素材は全回収でな」

「ん、分かった。いつ出るの？」

「そうさなぁ…2、3日後ってとこか。まだ血が足りてねーだろ。顔色青いぞ」

「んに…」

右手を伸ばして俺の頬をむにむにと引っ張るおっさん。なんだか子供扱いされてるようで気に入らない。…いや、心配してくれてるのは分かってるんだけど、さ

「…どっかに顔を変えられる魔法のアイテムとかあればいいんだがなぁ…」

「んにゅぅい…まひめははらひふんあらはらへおー…」

「すまん、なんか気持ち良くてな…」

ムニムニと頬を揉まれる。いや、分かるけどさ。分かるよ？女の子のほっぺとか触りたくなる気持ち。でもさー…なんかちょっと気持ちいいし…

奇妙な会話の空白。ただ時折おっさんがむにっと動かす指の感触。俺が痛がったりしないよう、最低限の力でつまむようにムニムニとおっさんの指が俺の頬を弄る

「…？…っ！？んっだらしゃあああああああああっ！！！」

「ひぃっ！？」

ぼんやりとした目でムニムニしていたおっさんが、急に何かに気付いたみたいに尻尾を立て、間髪いれずに顔面をテーブルに叩きつけた。ぐしゃあ！と二重の意味で致命的な音が鳴る

「あぶねー！超あぶねー！そういや今日が満月じゃんヤベェな満月っ！？お前も嫌がれや！」

だらだら鼻から血を流すおっさん。人前だから回復魔法は使えないし、仕方ないから布を渡す

「えっーと…？おっさんならアレくらいいいよ？」

俺も小さい頃、よく妹のほっぺで遊んだし。…中学に上がってからはろくに話もしてくれなくなったけどな…ははっ…

「だっ…バッ…！このアホッ！間抜けっ！少しは人の苦労を知れっ！」

「だっ！？ちょ、やめ…痛いっ！？なんでいきなりキレてるのー！？」

俺、なんも悪いことしてないじゃん！なんでデコピンすんのっ！？苦労を知れって言われても今まで生理で…！？痛い痛い！

――くすくす…

――――ぷっ…なんだありゃ…

――仲良いのねぇ…ふふっ…

「お、おっさん！笑われてる！笑われてるからー！」

聞こえてくる声に羞恥心を駆り立てられて叫べば、おっさんははっとしたように周りを見渡し、ちぃ…っと舌打ちする。お、俺は悪くないじゃん！？

「くっ、この…っ！はぁ…いや、すまんな…。八つ当たりだわ…」

「…えーっと、部屋に戻る？」

「やめろ…優しくすんな…死にたくなる…」

…凹んでるし

おっさん…ってか獣人にも生理みたいなのがあるのか？こう、情緒不安定になるみたいな…。こんなことならホシちゃんが貸してくれたあの本、もっとちゃんと読んでおくんだった。説明書を見ない癖がこんなところで仇になるとは…

「…とりあえず冒険者ギルド行くぞ。これから行くダンジョンに依頼があったらついでにこなしちまおう。…あとお前のステータス上げなきゃな。ちなみに俺は魔力と運に全部振った。魔力に振ったのを後悔してる」

「あ、あはは…」

ドンマイ、と背中を叩き、席を立つ。果物の皮をインベントリにしまう。またおっさんのタバコ作らなきゃなー

とりあえず体力と…速さ？…一応運も上げとくかぁー

にしてもダンジョンか…邪神仕様じゃないダンジョン、楽しみだな…

わくわくと高鳴る胸を押さえ、凹んでるおっさんを励ましながら、

俺達は冒険者ギルドに向かった

5、進展（後書き）

本当は生理中の臭いやら貧血やらを詳しく描写しようと思ったけど、スルーします

…だって、ねぇ？

それとホシちゃん&アベェ退場回。

主人公補正持ちがパーティから外れたから、レティたちの運はより悪くなるでしょう

オカマなのに素でカッケーホシちゃん

確実にレティたちより主人公してました

今回のテンプレ

↓魔法！

閲覧注意（前書き）

危険　危険　危険

世界観をぶっこわす危険性を孕みます

危険　危険　危険

閲覧注意

覚悟してお読みください

閲覧注意

閲覧注意

「神様連盟主催！チキチキ☆主人公レース！」

「現状最もトリップ主人公チームでリードしているのはゼウス神が一点賭けしている『平凡系鈍感ハーレム主人公』こと黒岩くん！修行ダンジョン～邪神様の言う通り★～の地下四階にて隠しアイテムの『精霊の杖』をＧＥＴ！無事、杖に宿る樹木の精霊、ユルエルにも認められ、実体化に成功！女性精霊ハーレムも作れそうなくらい精霊との相性がいいぞー！」

「更にチームを組んでた雑魚神の贔屓にしていた『主人公』どもがＡランクモンスター『クピート』に惨殺されるもたった１人生き残り、いざ殺されるぅー！というところで偶然ＬＶ６３の女騎士、シャルロッテに救出されました！」

「そしてそのまま居候＆弟子入り志願！剣術スキルの開眼は近いかっ！？」

「いいですねぇいいですねぇ。無事に主人公ハーレムを築きあげてますねぇ。さっすが『全知全能』なだけありますねぇ！」

「ではではゼウスさま！ただいまのお気持ちは？」

――アレは他の能力のレベルを下げてでも『主人公補正』を強化している。そう簡単にはやられんよ。…まぁ、混沌の贔屓を気にしてしまっているのがネックだがな。これが後半にどう影響するか…

「ありがたいお言葉ありがとうございました！」

「では次！誰にも知られず悟られず！『隠蔽特化隠密裏方主人公』こと神城くん！まだまだ誰にも気づかれてません！ってかアバターさまが本気出しすぎて私たちすらどこでなにやってんだか分からんぷー！！」

「…あ、あ！今うっすら見えた！ストーカーしてますストーカー！やっぱりどうせ気付かれないなら美少女のストーカーやるつもり満々みたいですね！さっすが思春期！」

「「少年は思春期！」」

「ではではアバターさまー？今のご気持ちは…あらら、また眠っちゃってました！」

「残念無念！」

「次々！インドラさまのお気に入り！笹田ちゃん率いる洗脳グループ！魔獣化した主人公たちを操って近くの村を襲う！助ける！のマッチポンプでめきめき信頼されてましゅ！」

「いま噛んだね！」

「噛んじゃった！？冒険者ギルドに登録！仲間にいた『魔物使い』の能力を活かして魔獣はぜぇんぶ召喚門の向こうに押し込みゆっくり時間をかけて洗脳中！実際こいつら一番つぇえ！暴力は数だよ！」

「主なモンスターは最強クラスのキングオーク・エクステンドやらサイクロキング！ぶっちゃけ魔獣化主人公！でもでもコボルトゴブリンみたいなモンスターも揃えてるよ？」

「スライムモンスターでイロエロ楽しんだりもしてるね！」

「羨ましいねスライム娘！スライム娘に男性の体液はご褒美です！普通に女の子冒険者も洗脳してるけどね！このチームも混沌の贔屓を狙ってるぅ！」

「やっぱ回復魔法チートだしね！」

「インドラさまの今のお気持ちは？」

――力有する者、常に孤独

孤独癒したくば、人形を並べよ…

…そしたらぼっちでも寂しくない…ぐすっ

「「私たちが付いてるよー！！」」

――ありがと

「かーわーいーいーっ！」

「次！アグニさまのお気に入り！」

「…私、あれ苦手なんだけど…」

「…私も」

「…オカマの☆ちゃん？」

「商業ギルドに借り作っちゃったのがね。アベちゃんもね」

「対当ではなく、雇って頂戴？おねがいおねがぃ～んっ！てスタンスで交渉したのは失敗だろうね」

「正直先行き怪しい☆ちゃんチーム！露骨に先行き暗くなり始めたから混沌さまがアップを始めました！」

「むしろアグニさまのチームと一緒だと混沌さまのお気に入りが順風満帆に進むからね。混沌さまがわざと引き離した可能性も…」

――おい、まさかなぁ？

――やだなぁ、僕がそんなことするわけないだろ？僕は下っ端メッセンジャーだぜ？

――まぁいい。俺はあいつを信じるぜ。オカマではあるが、奴には火の心が宿ってる。…あいつを怒らせたら…恐いぜ？

「さっすがアグニさま！」

「そこに痺れて燃え尽きる！間違っちゃ！萌え尽きる！」

「また噛んだね！」

「噛んでまーせーんー！！…次！混沌さまのお気に入り！」

「不幸ルートまっしぐら！適当に混沌さまがサイコロで決めたレテ

ィーシアちゃんの中の人！うじうじうだうだ情けない！」

「と！メデューサさまのお気に入り！質実剛健を地でいくおっさんことトラちゃん！…ちなみにメデューサさまは神族の方で来ていただきました！だからこっち見んなポセイドン」

「こっち見んな」

――こっち見んな

――おまーら酷くね？オレ、偉い神よ？

「だーまーれ女の敵！レイプ魔！そんなんだからアンタの贔屓にしてる転生者が８歳でレイプされたんですよ！」

「魔王発生前に自殺しちゃったんですよ！まぁ一番悪いのはアーテネー様な気もするけど私たち女子は男子に罪を着せるぜ！」

――神聞きの悪いこと言わないでよ！破廉恥なことするほうが悪いの！わーるーいーのーっ！

――ちぇー。はいはい。俺がわるぅございました、と

「では続行します！ぶっちゃけこのチーム不幸ばっかりだろうね！」

「混沌さまのお気に入りだもん！」

――ご安心を。わたくしが守ります

――それじゃつまらないじゃないか

――いくら元男とはいえ、レイプなんかさせませんよ…？

――なら君のお気に入りなトラちゃんにレイプさせてみようか…？

――…ふふふ×２

「「こぇえええーっ！！」」

「き、気を取り直して！」

「こ、ここからは転生者チーム！」

「トリップ主人公が１００人中既に８３人死亡という今！１７人のトリップ主人公。そして、中世レベルの文明で抵抗力の弱い幼少期、流行り病や魔物の襲撃にも負けずに生き残った１９名の転生主人公が頼りといっても過言じゃありますん！」

「まぁた噛んだー！」

「噛んでないもん噛んでないもんうきゃーっ！！脳味噌引きずり出すよこの！この！」

「痛い痛い眼球潰れちゃう！」

「気を取り直して転生主人公の番！…の、前に！」

「最も期待できない転生主人公ベスト５の発表です！」

「第５位！　享楽の神エロスの加護付転生者！アレクサンドロ！
女体に溺れて溺死しろ！
第４位！　恋愛の神アフロディーテの加護付転生者！ケイニー・フレッツェル！
愛されギアスもいいけど魔王倒せ！逆ハーしてんな醜女のくせに！
第３位！　太陽の化身天照大神の加護付転生者！グウルル！ちなみに命名わたし！
せめて産まれた巣から一歩くらい出てよ！引きこもんな！最強種だろドラゴーン！？
第２位！　商売の神、関帝聖君の加護付転生者！　フェティッサ＝ゲイオルル！
お前転生したの忘れてるだロー！幸せな家庭築いてんじゃねー！！
そして第１位！
愉快神ロキの加護付き、憑依転生者！　【魔王】！！
自殺しろとか元エロゲオタ駄目ニートにどんな高いハードルだよー！！
ロキさまのキクチー！でも好き！」

「また噛んだ？」

「噛んでますん！」

――あっはっはっ。どっちだよ

「はぁう！？ろ、ロキさまが…ロキさまが神界の向こうから私を見ている！？はぁあああん！みなぎってきた！」

「もちつけシスター。涎で可愛い顔がヤバイぜ。顔文字で表現するなら（＾ｑ＾）みたいな顔になってるぜ」

「いまどんな発音した！？スゴッ！発音で頭に顔文字がっ！？」

「（＾ｑ＾）」

「分かんなーい！」

「とにかくこの５名は期待できないから実質トリップ、転生合わせて３１人の「主人公」！」

「誰が生き残るやらやら！」

「誰が魔王を倒せるのやらやら！」

「転生者の人気主人公の発表です！」

「第５位！学問の神、菅原道真公の加護を受け！」

「失われた上位古代語魔法を日本語とアルファベットの組み合わせで復活させたファルガナ魔法大学の学園長！

リーデス・ヴァルトハイヘルン・オズ・パラケルスス！」

「強いよ！賢いよ！ただし現時点で５７歳！この世界の平均寿命は５０歳だよ！」

「続いて第４位！神様の加護は無いけど産まれた種族はスライム！即効死ぬと思ってたのに成り上がってデス・スライムまで上り詰めた毒性軟体モンスター！ユージロ・マノメ！」

「鉄すら溶かす強酸性の身体とちっちゃい湖くらいなら満たせるくらいの巨大な質量！冒険者ギルドも手を出せないＳＳＳランクモンスター！」

「雑魚神は大抵こいつに乗り換えた！最近は体の一部を人型に整えてファルガナ内を遊び回ってるぜ！人気転生者ランキング第７位の全身触手のクトゥルフモンスター、エイトと合流！２人ともホームシック＆ボディシックになってるけど大丈夫かー！？」

「第３位！触れるな危険！鬼神母神さまの加護は試練ばかり！最近

は闇魔大王さまもそれに乗っかり出した！壊れた殺戮マスィーン！アルファ・スティグマ！」

「殺した相手のスキルをコピー出来るぞ！でも子供のころに受けた拷問のせいで頭がパー！動くものは殺すリトマスの狂戦士！そのくせ戦い方は理性的でＴＵＥＥＥＥ！」

「誰か彼女を幸せにしてあげて！」

「そして第１位！同率です！第１位は二人います！」

「１人目！あらゆる軍神武神の加護を受け！あらゆる神器に変化する聖剣「アルテマ」を振るう最強の剣士！クイーン・オブ・ファルガナ！身体能力もサイヤ人並だ！」

「２人目！ハ・デス様を始め邪神や文神知識の神の加護を受け！アカシックレコードへの接続権限を持つ魔族の王！キング・オブ・リトマス！」

――――ざわ…

ざわ…

ざわ…

「そのとーり！勘違いしていた神様がたごめんなさーい！」

「【魔王】はリトマスの王様じゃありませーん！」

「【魔王】は自分が【魔王】だってのにも気付かず普通に生活してるし、キング・オブ・リトマスもクイーン・オブ・ファルガナもお互いが相手を【魔王】だって勘違いしてるけど」

「「違います！」」

「ではでは！重要事項が明かされた辺りで途中経過を終わります！」

「司会進行はこの世界の神様にして超！下っ端女神！フルカノと！」

「噛み噛みまくりでごめんなさい！同じく下っ端女神ノーミスがお送り致しました！」

「次回は水の女神ウルティアと風の女神ルガスタ、ファルガナの妻組の司会進行で番組を提供します！」

「以上！リトマスの妻組でした！」

「「では、また会う日まで！」」

「「…これでいーい？」」

「…（グッ！）」

「喋れよ旦那ー！」

「口あるでしょ夫ー！」

「…（照れ照れ）」

「「かーわーいーいー！」」

閲覧注意（後書き）

乗せるか迷った末に載せてみた

不評なら消します

今回のテンプレ

↓暇を持て余した

神々の

遊び

6、魔法練習中（前書き）

時村さまの素晴らしい画像が張ってあるぜ！

皆！みてみんで時村さまのページをチェックしようぜ！

6、魔法練習中

習いの水晶

簡単に言ってしまえば、初心者用の魔法の教科書だ。これを握り、魔法を使いたいと念じるだけで、頭の中に魔法の使い方が刻み込まれる。当然ちゃんと使えるようになるには練習が必要だが、本や口伝よりも確実に理解できるので、魔法使いを志す者は必ず使うらしい。使い捨てで、お値段３９８００ゲイル。…高いのか安いのか、微妙なラインだな

とにかく、頭に刻み込まれた魔法の使い方を反復する

?、体の中から魔力を練り上げる

ヘソの下辺りからドロドロした熱い液体がせりあがってくるようなイメージ。熱さがお腹、胸を伝って指先に伝ってくるような錯覚

?、呪文を唱え、精霊に呼び掛ける

「…イル・アール・ウル・ティアー」

今回使うのは水の魔法。魔力で熱くなった指先が、冷たい水に浸けたように急速に冷やされていく。…水の精霊が、魔力を食べている証明だ

?、イメージを精霊に伝えることで、魔法を完成させる

目の前に置かれた鍋の中に、真水を溜める。虚空から水の玉が生ま

れ、それが鍋の中に溜まっていく。そんなイメージをしながら、口を開く

「水よ！満ちろ！」

…ちょろっ

と、イメージしたのは鍋から溢れるくらいの水の塊だったのに、コップ一杯分くらいの水が鍋の中に降ってきた

「…はぁ」

と小さく溜め息。魔法というのは、存外難しい。こちらがどんなに明確にイメージしても、それが精霊に伝わらなければ意味がない。つまり、精霊が理解しやすいイメージをしなければならないのだ。しかし「精霊の理解しやすいイメージ」なんてモノは、この世界の人間じゃない俺にはいまいち分からない。…結局、試行錯誤しなくてはならない、ってことだ

実際、一番相性がいい「水」でさえこれなのだ。他にも「風」とは相性がいいが、「火」と「土」は壊滅的。風は呪文を唱えれば微風を吹かせることくらいは可能だが、火はマッチ同然の炎が指先に灯るだけ、土は小指の先程の大きさの小石がぽろっと落ちただけ、という体たらく。…先行きが暗い

発動時間と効果が全く噛み合ってない。これは練習しないとなぁ…。こんなんじゃ戦闘中に使うなんて出来るわけがない

ああでも、この世界の魔法にも「高速詠唱」の効果があるのは驚きだった。だから、ちゃんとした魔法を使えるようになったら一言で

魔法を使う、というのも夢ではない。今はちゃんと詠唱したほうがイメージしやすいので詠唱せざるを得ないが、いずれは…！

と内心で気炎を上げる。…いっそ無理して戦闘中に使ってみるか？その方が集中出来るかも…いや、そんなことに命賭けてらんないか

「…ぉ？まだやってたのか？」

思考に耽っていたら、おっさんの声。起こしちゃったかな？

「あ、ごめん。うるさかった？」

時刻は午前1時。この世界の時計は高価だから買ってないけど、俺はステータス画面を表示すれば時刻も分かる。申し訳なさに頭を下げれば、「いや、眠れなくてな」と首を振るおっさん。そのままむくりと起き上がり、俺の隣に座る

「眠れない、って…明日はダンジョンだよ？大丈夫か？」

「多分な。交代にはまだちっと早いが、お前も寝とけ」

「や、まだいいよ…」

妙な雰囲気。どちらも黙ってパチパチと音を鳴らす焚き火を見つめる

別に無言なのが気まずいとか、嫌な訳じゃない。けど黙ってるのも嫌で、なんか話しかけたいんだけど、何言えばいいのか分からない。それなのに喋らなくてもいいかな？なんて考えてる自分がいて…そんなもやもや感に困る

こんなことなら馬車を頼むんだった。お金の節約と、魔法の練習時間確保、レベル上げ、モンスターの素材回収など４つの理由から却下された

お陰でスタトルを出てから俺のレベルは８になったし、それなりにレベルも上がった。新しい発見もあった

インベントリは俺が思っていたよりずっと便利なモノで、倒したモンスターの死体を入れると自動的にアイテムとして処理してくれるのだ

例えば、蛇竜を倒して、その死体をインベントリ内に収納する、するとインベントリには

【蛇竜の羽・傷】
【蛇竜の鱗革】
【蛇竜の毒牙】
【魔物肉】

と保存されるわけだ。わざわざ捌いたり、血抜きしたり解体したりしている冒険者の人たちにはなんか申し訳ないが、これはかなり助かる。本来冒険者の人は、高値で売れる部分だけを切り取って、荷物を最小限にしなきゃならないのに、俺たちは全回収できるわけだ。ありがたい

そんなわけで、俺達はダンジョン――『獣欲の森』に向かうまでの２日間で、蛇竜４匹、狼１２匹、ウサギ７匹、デカイ鳥２匹、の素材を丸々回収出来ている。相場がまだ分からないが、どれくらいの値段になるのか今から楽しみだ

「…恐いか？」

「え？」

いきなり何さ？と首を傾げたら、おっさんは妙に真剣な顔で、俺をじっと見つめていた

「本物のダンジョンは初めてだ。あの女が作ったような奴じゃねーし…緊張してんじゃねーかと思ったんだが…その様子だと、違うみてぇだな」

苦笑いしながら頭を掻くおっさん。…恐い、か…そういや恐くはないんだよな…

「…うん、確かに恐くないかな。よっぽど邪神仕様のダンジョンのが恐かった」

「邪神て」

「そこ突っ込むなよぉ…。だって逃げ場ないんだぜ？周りは男ばっか。そいつら皆変な目で俺を見たり、実際に襲ってきたり…。ダンジョンは臭いし血生臭いし死体ばっかりだし狭いし臭いし臭いしっ！！」

「あの臭いは辛かったなー…」

お互いに反芻するように遠くを見つめる。…実際に俺達が体験したのって地下1階層くらいだったけど、それだけで心が折れそうになった。特におっさんとか俺みたいな嗅覚に優れた人間にはキツいもんがあった

どちらからともなく「ははは…」と乾いた笑いをあげる

「でも、今度は危なくなったら逃げれば大丈夫だし…襲ってくるような男もいないし…邪神が何かイベントしかけてんじゃ…？みたいな感じで恐々する必要ないし、気は楽だよ」

…それに、おっさんもいるし。

頼りになる仲間がいるのといないのとじゃ、心の持ち様が全然違う。なんというか…安心して戦える。おっさんが守ってくれるから大丈夫。でも、おっさんに怪我させないように限界まで頑張る。安心と程よい緊張感のお陰で、ここに至るまで回復魔法の出番は全くなかった。少し寂しいような気もするけど、怪我なんかしないほうが良いに決まってる

おっさんを見ながら思わず頬を緩ませる。おっさんはなんか怪しい物でも見てるみたいな顔で、

「どうしたニヤニヤしやがって。なんかの病気か？」

「…おっさんって女にモテなさそうだな…」

普通そう言うこと言うかぁ？なんかギャルゲの主人公みたいだ。きっと無意識にフラグばきばき折ってきたんだろうなぁ。はぁ…と溜め息吐きながら言ってみる。ギョッとした顔であたふたしながらおっさんは腕を振り上げる。避けた

「何故に殴るし！？」

「うるせー！繊細なおっさんのデリケートな部分を刺激すんな！…刺激…すんなよ…」

ずぅーん…と影を背負って凹むおっさん。逆に慌てたのはこっちだ

「いや！いやいやいや冗談だって！おっさんイケメンだし、すげぇいい人だし、優しいし、気遣い出来るし、強いし、凛々しいし、渋いじゃん！絶対モテモテだったって！多分おっさんが完璧超人過ぎて女の子が気後れしちゃったんだよ！影ではモテモテだったんだって！」

「いいんだ…。フォローありがとよ…。どうせねーちゃんにも「あんた一生結婚出来ないよね。いい意味と悪い意味で」とか言われたしよぉ…。いいんだよ、俺ぁ仕事に生きるから…」

凹んだままタバコを口にくわえ、火をつけ…ない？途中でジッポーをしまい、火を着けないで端をがじがじと噛むおっさん。た、タバコ吸う気にもならないくらい凹んでんの！？

「お、俺はおっさんのこと好きだぜ！？」

＞ｉ２５１８０―３２５４＜

…？

…え、あ、いや…

……何言ってんだ俺ぇえええええええええええええっっっ！？

いやいやいやいやねーよ！ねーわ！確かに女の子に興奮するのが無くなったけど、男に好きとかねーわマシで！いやおっさんのことは好きだよ！？好きだけどそりゃ…！？ああ！？おっさんがポカン顔

で俺を見てる!?口からタバコ落ちたのにも気付いてない!?いやだから違くて…!!あああもう!ちが、違うんだよっ!?

「――父親的な意味で!そうそうあくまでも父親的な意味で!包容力あるし殺る時殺るしかっこいいし情が深いしな!おっさん絶対子供出来たら溺愛しそうだよなぁあははー!でもって娘とか出来たら超ファザコンになりそうつまり女の子からはモッテモテだぜやったなおっさん!」

一息で言い切る。酸欠でぜぇぜぇと荒い息を吐きながら、キスしそうなぐらいおっさんと顔が近――顔が近いんだよ俺キメェ!何がキスだホモかてめぇ!ホシちゃんとメイクラブしてこいやボケェー!

ばっ!と離れて頭を押さえてうずくまる。なにやってんの!?俺は一体何がやりたいの!?

そのまま恥ずかしさにぷるぷる震えていたら、「…くっ…ははっ…」と押し殺したような笑い声。一瞬で頭と顔がかっと熱くなり、ばっと立ち上がっておっさんを睨む

「ナニ笑ってんだちくしょー!」

「…いや…くふっ…だっておま…顔真っ赤…慌てすぎ…かはっ!あっはっはっはっ!ば、ばっかじゃねーの!?ぶはっ!ブハハハハハ!ん、んな恥ずかしいなら最初からやらなきゃ良かっ…カハハ…ッ!つ、ツボに…」

腹を押さえてヒィーヒィー言うおっさんに余計に顔が熱くなる

「おっ…おっさんのバァーカバァーカ!もう良い寝る!おっさんは

朝まで見張りな！」

「ちょっ！？流石にほぼ徹夜っつーのは…」

「うっさい！察しろバカ！恥ずかしいんじゃボケェー！」

言い捨ててとっととテントに飛び込む。放置されてた寝袋に頭から突っ込み、とにかく恥ずかしさを堪える。ちくしょう…！おっさんの癖に…おっさんの癖に…っ！

…？

…！

「うなぁあああああああっ！！もう！ちくしょー！なんなんだよー！」

寝袋からおっさんの匂いがすんだろーが！！なんなのっ！？なんなんだよっ！？ただでさえ恥ずかしいのに余計に恥ずかしいじゃん！全部全部おっさんが悪い！

「ど、どうした…？」

「なんでもねーよ！ねーもん！放っといてくれよ！…放っといてくれよぅ…」

もはや半分べそかきながら、テントの入り口から様子をうかがってきたおっさんに怒鳴り返す

「あー…、分かった。その、風邪引くなよー…」

ポリポリと頬を掻きながら、そっと去っていくおっさん

…その気遣いが…優しさが憎い…！

恥ずかしさに火照る頬を押さえながら、自分の分の寝袋をインベントリから取り出す。…で、おっさんの寝袋は仕舞う。…ああもうなんでこんないつもの行動が妙に気恥ずかしいんだよ！？

自分の心が信じられなくなりつつも、寝袋に潜り込む

…寝れる自信は、まったくないけどな

翌日、

結局俺もおっさんも、ほとんど眠ることも出来ずにダンジョンを目指すことになってしまう

6、魔法練習中（後書き）

今回のテンプレ

↓朴念人ヒーロー

↓理不尽ヒロイン

↓あっさり使える魔法

あとなんか

「大路光（２８）。末っ子。猫耳&尻尾付き。夢は猫になること」を愛でる会なるものが生まれたようです（笑）

会長かつ顧問は俺、人春！副会長はわたさん！

参加資格はおっさんに萌えたことだぜ！

皆でおっさん萌え広めようぜ？

7、ダンジョンで（前書き）

こんな展開で大丈夫か？

7、ダンジョンで

酸っぱいような、生臭いような、そん臭い。一歩足を踏み出せば死骸。見渡す限りの、死骸。風に吹かれて揺れる真っ赤に染まった草木。臭いと砂埃を吹き払った風が、頬を撫でる

「おっさん…」

「何も言うな。…言っちゃなんねぇ」

虐殺。したのだ。俺達が

…モンスターの死骸の山。おっさんが集めてくるソレを、片っ端からインベントリに収納していく

「獣欲の森」は駆け出しの冒険者の登竜門みたいなダンジョンで、モンスターランクはD～C…冒険者レベルで言うなら、１０～２０レベルのモンスターがほとんどで、ボスモンスターもそれほど強くはないらしい

ちなみにボスモンスターってのは、生物ではなく、そのダンジョンで殺されたモンスター達の怨念が、ダンジョンの魔力で肉体を持ったモノらしい。だから冒険者が来てモンスターを殺しまくる度に発生するし、モンスターを殺せば殺すほどボスモンスターは強くなる。酷い話だと、初心者用のダンジョンのボスモンスターがBランクまで育っちゃって、ギルドが気付くまで初心者の冒険者が殺されまくった、とかいう話もあるようだ

ついでにモンスターランクも説明しておく

Dランク　ＬＶ０１～２０
武器を持たない成人男性が倒せる程度のモンスター
例：スライム系　おおこうもりなど

Cランク　ＬＶ１０～３０
訓練を積んだ人間なら倒せる程度のモンスター
例：ウルフ系　ゴブリン系　コボルト系など

Bランク　ＬＶ３０～５０
訓練を積んだ人間が複数人いれば倒せるレベル
例：ベアー系　リトルドラゴン系　亜人系

Aランク　４０～８０
ＬＶ５０以上の人間なら倒せるかもしれないレベル
例：ドラゴン系　邪精霊系　幻獣系

Sランク　８０～
挑むな危険
例：神話の化け物。

とまぁ、そんな感じだ。多少モンスターの方がレベルが高い、くらいの差がレベル上げには適しているので、未だに一桁代の俺と、そんな俺と余り差のないおっさんなら、いい勝負になるはずだった

獣欲の森はダンジョンというよりは普通に大きな森、というような形のダンジョンで、一般人でも生きて帰れる「浅層」、冒険者のレベル上げに適した「中層」、そしてボスモンスターややや強くなったモンスターの住む「深層」の三階層に別れたダンジョンだった

俺達はセオリー通り中層でモンスターを見つけたら、遠距離から俺が倒す、不意討ちされたらおっさんが叩き潰す、という形で確実にモンスターを倒していった

このままなら大丈夫そうだな、と安心しかけた時…「イベント」が発生した

なんてことはない。偶然たどり着いた湖。丁度いいから休憩していこう、とおっさんと笑いあった、刹那

モンスターの群れが、一斉に襲ってきた

今まで倒してきたモンスター…狼型のモンスターや、大きな鳥、角の生えた兎に、人間の頭くらいのサイズがある虫。全部Cクラスの魔物だっだが…それでも数の暴力は、脅威だった。脅威になるはずだった

俺と、おっさんは、根本的な意味でこの世界の【エルフ】や【獣人】とは違う

おっさんは同レベルの獣人の2~3倍の筋力、体力を誇る。…恐らくだが、邪神が、ドイ少年を化け物にする前に言ってた台詞…潜在能力がどうこう言っていたアレだ。おっさんは潜在能力が高かったから、高い能力を持つ獣人になった

エルフについてはまだ分からないが…。この世界のエルフはあまり身体能力は優れていないはず。高い身体能力を持つ獣人…その中でも取り分け優れているはずのおっさんより速く走れる、というのは…ないはずだ

つまり俺達は、レベルこそ低いが…実質的な能力値は、中堅…あるいは一流クラスの能力値があるはず

そこに「ガナスタ」産とはいえ、高価で高レベルの装備品

「…弱いものイジメしてるみたいだ」

「だから言うなって…」

重苦しい雰囲気。血の臭い。凄く、嫌な気分だ。ＤＱで城の周りをぐるぐる回ってスライム相手にレベル上げしたりしたけど…現実でやるとこんなに気持ち悪いのか…

山と積まれた死骸を全部インベントリにしまい終える頃には、真上にあった太陽は大分傾いていた

「ガキ、水浴びでもしてこい。飯は作っといてやるから」

「…ん、ありがと」

おっさんの気遣いに感謝しつつ、湖に向かう。俺も、おっさんも、肉体的には傷付いてない。ただの作業のようにモンスターを殺しまくった。肉体的な疲労もあんまりない

けど…精神は、違う。重苦しい気分に息が詰まる。戦闘を終えた充足感や満足感なんて最初だけで、後半はもう…ただただ辛いだけだった

弓をインベントリにいれ、湖の畔でマントを外し、ブーツや籠手も

脱ぐ。胸当ての留め具を外し、ガンホルダーも…「ん？」

がさっ、と、木々の向こうから音が鳴った気がした。…念のためにミストラルを構えながら、装備品はインベントリにしまっておく。弓は取り回しが効きにくいし、今は片手で使えるミストラルの方がいい

「…？」

茂みに2、3発撃ち込んでみたが、反応がない。…逃げられた？普通の獣だったのかな？

何となく腑に落ちない思いをしながらも、ミストラルをガンホルダーに戻す。…一応、一応、な。服を脱ぎ、細い裸身を晒しながらもガンホルダーだけは付けておく。ミストラルは魔力を弾丸として撃ち出しているだけだから、水で濡れても問題ないし、連射こそ出来ないが、反動もないのに威力は高い。高すぎる。この辺りのモンスターに使うと、一発でミンチになるレベルだ。…ホント、チートだよなぁ…

溜め息を吐きながら下着も脱ぎ、冷たい水に足先を付ける。…冷たい。結局スタトルでは暖かいお風呂に入れなかったし、いい加減お湯にゆっくり浸かってほのぼのと和みたい…。ふるふる震える身体に苦笑い。用意していた布で、脇の下とか顔を水の中で擦る。直接返り血を浴びた訳でもないのに、何だか全身に血の臭いが染み付いている気がする

…なんというか…邪神のダンジョンがどれだけ鬼畜仕様だったのかが分かった。邪神のダンジョンのモンスターと比べ、普通のダンジョンのモンスターは脆すぎる。あるいは邪神仕様のモンスターが強

かったのか…多分、両方なのかなぁ…

匂いに敏感な獣人のおっさんと一緒に行動している以上、体臭は一際気にしなくちゃいけないファクターだ。ってか、俺が男だったときの経験的に、女の子が臭いとか嫌。シャンプーやボディソープで洗えないのは仕方ないが、せめてマメに汗は流しておきたい

「…ぁ、枝毛」

ホシちゃんに枝毛には気を付けなきゃねー髪の毛は女の子の命よーかわいいんだから可愛さを維持する努力は忘れちゃダメー！って感じで色々仕込まれたけど、こればっかりはなぁ…

頭に浮かぶ【装備を変更しますか？】という問い掛けを放置したまま、面白くもない気分でインベントリからトゥルーフナイフを取り出す。枝毛の別れた部分だけ切り落と――！？

しゅるる、と足に巻き付く「ナニか」の感触。慌ててミストラルに手を伸ばすも、凄まじい力で水中に引きずり込まれる！？

「がぼっ…！？ごぼぼぼっ！？」

――くる、しぃ…！？夕方の、赤くなりつつある日の光に染められたオレンジ色の水中。その奥に続く足に巻き付く…！？なんだこれ！？黒くて、太い、ロープみたいな何か。分厚い肉の詰まったソレが、ギチギチと足を締め付ける

「ぐぼっ…！がっ…！」

やばっ…息、続かなか…！？

どうにか手放さなかったトゥルーフナイフで、思いっきり足に巻き付くナニかを突き刺す。紫色の液体が中から吹き出し、激痛が走る…やば、い。自分の足も刺しちゃった…！？

痛みに耐えながら、緩んだ拘束から脱出。オレンジの水中に赤が混じる。痛い、痛い…！でも死ぬよりマシ！後で治せる！

「ぶはっ！お、おっさ…がぶっ…！？」

どうにか水面に顔を出したと思ったら、今度は逆足に巻き付くナニか。この…！いい加減怒ったぞ！

ミストラルを抜き、水中に引きずり込もうとするロープに向かってドンドン引き金を引く。外れても構わない。無我夢中で撃ち続けた魔力弾が、ようやくロープを捉える。バヅン！と勢いよく弾けたロープ。それを尻目に、どうにか畔に向かって泳ぐ。また来たロープが足に絡み付く前にミストラルを滅茶苦茶に撃ちまくる。息がやばいっつーの！

もう少しで畔…！という所で、腕を捕まれる。暖かい手のひらの感触に安心しながら、水面に顔を出す

「おい！大丈夫かっ！？」

「げぼっ…ごほっ、げほっ…だい、…じょぶ、れより、くる！」

「っ…よし、捕まれ！」

おっさんに返事しながらインベントリにナイフをしまい、ミストラ

ルを構える。オレンジ色の水面に浮かぶ巨大な黒い影。足の痛みに耐えながら、おっさんに抱かれて湖から脱出。丁度水面から離れた瞬間、おびただしい量の水を振り撒きながらそいつは顔を出した

――巨大な蛸、だろうか

大型トレーラー並のサイズがある頭部に、1つだけ浮かぶ大きな金色の目。一本一本がおっさんの腕くらいの太さがある触腕が、8本。全体的に色は緑色で、触腕にはびっしりとトゲのような吸盤が並んでいる

「…ボス、か？随分でけぇな…」

「けほっ…、たぶん、おれたちがころしまくったから…」

くそ、喉が痛くて呪文が唱えらんない…！水を大分飲んだせいか、お腹も痛いし、気持ち悪い…頭まで痛い…典型的な酸欠だ…

「…ちっ。仕方ねぇ。俺がどうにかする。お前は服着て隠れてろ」

苦虫を噛み潰したような表情で言うおっさん。俺が何か言うより速く、タコが伸ばした触腕が迫る。おっさんが俺を抱き締めて、ひとっ飛びに距離を取り、ぶっとい触腕をかわした

「いいなっ！？隠れてろよ！？」

おっさんは怒鳴るように言い捨て、鎧の留め具を外す。がしゃん、と落ちた留め具に頓着せず、おっさんは駆け出す。その姿が、徐々に肥大化し、四つん這いになり、速く、強大になる

――人化を解いて、獣化して、更に狂化したんだ。と気付く。それと同時におっさんは、迫る触手に逆に食らい付き、首を、身体を振ってタコを陸上に引きずり出す。圧倒的にサイズに勝るタコが、精々普通車くらいのサイズしかない大虎に力負けしている。…なんだか冗談みたいな光景だ

「ぐるぉおおおおおおおおぉっ！！！」

雄叫びを上げながら大虎は飛び上がる。畔近くまで引き摺られてきたタコが蠢き、８本の触手が大虎を襲う――が、余りにも遅い。あっという間にタコの身体を駆け上がった大虎が、その爪牙でタコの巨大な単眼を引きちぎる！

「ピギィイイイイイイッッ！？」

耳障りな悲鳴を上げる巨大なタコ。その隙を逃さず、大虎は空っぽになった眼窩から中に潜り込み――一際巨大な絶叫。グチャクチャと生理的嫌悪感を催す音。――やがて絶叫が止まり、巨大タコの身体が脱力する。…中から、のそり、のそりと大虎が、這い出てきた

「…【呪いよ去れ。ディスペル】」

おっさんの【狂化】を解く。「ぐるるるる…」と獰猛な唸り声を発していた大虎の目に理性が戻る。…そして、バツの悪そうな様子で、全身紫色に染まった大虎が、戻ってきた

「…オレ、イカくせぇ…」

「ぷふっ…」

命を賭けた戦いだったのに、何だか間抜けな感想を吐くおっさんに、笑いが漏れた

「しょうがないなぁ、洗ってやるよ」

「テメェは服着ロ」

大虎の姿のまま、不自由な発音で常識的なことを言うおっさん

なんか、スゲェ変

「あ、あははっ！おっさん、なんか間抜けーって痛い！？痛いおっさん！足舐めないで！傷舐めないで！痛い痛いざらざらする！」

「ナら笑うんジャネー！」

いや、無理だよ

だって、なんか…すげぇ、安心するんだもん

7、ダンジョンで（後書き）

ちなみにこの後、タコ（イカ）を食べたせいで腰を抜かしたおっさんの身体をレティが洗う…！というイベント考えたけど、妙にエロくなったからカットした

おっさんもレティも相手に真っ裸見られたくらいじゃ動揺しないのね…

…ってか感想板で言われたんだが…作者のキャラが立ってる…だと！？

…いやいや、お爺さん嫌ですよぉ、あたしゃそこらへんにいるモブですわい。ひょっほっほっ

意味もなく婆さん化。おばあちゃんキャラを出したい人春でした

今回のテンプレ

↓触手モンスター

↓主人公、雑魚相手に無双

↓これなんてエロゲ？

…この異世界がエロゲ原作だって覚えてる人、どれくらいいるかな

ぁ…

あ、あと宣伝忘れてた

「星　伸一（３４）。オカマ。筋肉＆血管つき。夢はアベと幸せになること」に燃える会が出来たようです

会長＆隊長はタケブさん！顧問は俺！

勇者よ来たれ！

他にも「愛でる会」内部に派閥が出来ているようです

「レティを意識してドキマギしてるおっさんを生暖かく愛で隊」とか

…ホント、この作品はどこに向かってんだか（笑）

8、ヴァンフォーレ（前書き）

檸檬紅茶（国産レモン・ティーさま）から頂いた挿し絵の追加です！

ナイスハゲ！ナイスハゲ！

（、・ω´・）ｂ

さらに七式さまからおっさんｗｉｔｈレティも頂きました！

おっさん普通にトラやん！（笑）

このページだけで挿し絵三枚…なに？俺、死ぬの？

8、ヴァンフォーレ

「見えた！おっさんおっさん見えた！次の街だ！」

「うるセーよ。オレにも見えてルヨ」

グルルル…と喉を鳴らすおっさんの頭をペシペシ叩く。今までだったら絶対出来なかったことだし、やろうとも思わなかったことだ

ダンジョンを出て3日。今まで徒歩しか移動手段が無かった俺達が、たった2日で次の街…魔法都市ヴァンフォーレまでやってこれた。本来徒歩なら10日はかかる道のりなのだ。大幅な時間の削減には、当然理由がある

今までの旅は、ぶっちゃけおっさんが俺のペースに合わせていたから遅かったのだ。いくら並の人間よりは体力あるといっても、俺の歩幅、歩く速度はその辺の女の子と変わりない。その気になれば丸一日ぶっ続けで走れるおっさんには、もの凄くダルい旅だっただろうと、そこに天啓が降りた

忘れもしない2日前。巨大タコの紫汁でベッタベタになったおっさんの身体を洗っていた際に、

大虎の姿のまま、湖に半身浸けて気持ち良さそうに目を細めるおっさんを微笑ましく思いつつ、その背中に跨がって水をかけていた時

『…これ、乗れんじゃね？』

『…冗談だよナ？』

引き吊った虎の笑顔。普通は見れないそれを深く心に刻みつつ、俺は言った

『やってみなくちゃ分からないじゃん！』

『マジでカ…』

泣きそうな声でくるる…と悲しそうに鳴くでっかい虎

…ちょっとかわいかった

で、リアルもの〇け姫って訳だ

インベントリに入ってたアイテムで適当に首輪をでっち上げ、それに両手でしがみつき、おっさんの背中にへばりつく。初日こそキツかったが、２日目以降はおっさんが俺に負担をあまりかけない走り方をマスターしたのか、格段に楽になった

そうして大虎に乗るエルフ少女、という奇妙な…ってか奇抜な組み合わせで、俺達は「ヴァンフォーレ」に到着した

＞ｉ２５５６９―３３３８＜

とりあえず見張りに見つからないよう、近くの茂みに隠れておっさんに人化してもらう

一応捕捉しておくが、おっさんは獣耳尻尾装備の『獣人』、顔面＆全身虎な人型の『人獣』、そして巨大な虎そのものな『獣』、そっ

から狂化した『狂獣』の４段階変身だ。勿論、この世界の獣人は『人獣』は勿論『獣』にもなれない。多分おっさんの願い…『猫になりたい』ってのが関係してるんだと思う

「はい、服と鎧」

「ガキの前で生着替えとか…なんかすげぇ複雑な気分だよちくしょう…」

全裸のおっさんの生着替え。あんまり見てて楽しいもんでもないが、おっさんみたいな筋肉質な身体は憧れる。まぁ、今の俺は女の子だから筋肉質になったらダメ、ってことくらいは分かるけどな

「まじまじ見てんじゃねーよ！」

「わぷっ！？」

びしっ、と鼻を叩くおっさんの尻尾。…別にいーじゃん。見られて減るもんでもないし…

鼻を押さえてそっぽ向く。ってかさー、俺も結構真っ裸見られてるし、別にいいじゃんかなー？

「お前は誰と会話してんだよ…」

「なんか視線感じるんだよね。だからこう…精霊的ななんかがいるんじゃないかなーって」

虚空に向かって手を振る。んー？視線が外れた？気のせいかな？

「自意識過剰ってやつか？」

「ヒゲ引っこ抜くぞおっさんちくしょう」

手を伸ばしてみるが、あっさり避けられた。逆に額をこつんと叩かれてたたら踏む。…なんか最近おっさんが冷たい…っていうか痛い…

「むぅ～」

「あにムクレてんだよ。ほれ、行くぞ」

「おっさんなんかイカ食ってろ」

「おいヤメロ。腰抜けるだろうが」

無理矢理手を引かれて歩き出す。意味もなく腕をぶんぶん振ってみるが、しっかり繋がれた手は離れない

「ばーかばーかおっさんのばーか」

「バカでいいからちゃんと歩けよ…」

呆れたように言われたので、流石にちゃんと歩く。っていうか手ぇ離してほしい…。ドンドン近付いてくる門。見張りの兵士が2人、こっちを見て、目を見合せ…なんか生暖かい視線を向けてくる。ああ…やっぱこうなった…

「お、おっさんのバカ…」

「あん？」

本気で気付いてないのかこのおっさん!?多分こんな感じでフラグ立てつつバキバキ折ってきたんだろうなぁ、と考えるとやるせない気分になる。いい加減手を離せよぅ…

恥ずかしくて顔が熱い。火照る顔を隠すためにも俯きながら門の前に立つ。すぐに兵士が近付いてきて、にこりと微笑んだ

「ヴァンフォーレへようこそ。冒険者カード、あるいはギルドカードの提示をお願いします」

「は、はい！」「おう」

カードを見せれば、兵士はそれを一瞥し、再び笑った

「魔法都市ヴァンフォーレへようこそ。この街の中ではいかなる理由があろうと武器を振るうことを禁止しています。尚、この都市内で他人を害しようとすると自動的に結界に攻撃されるので、注意してください。この都市には獣人への差別もありません。あらゆる種族が協力し、世界の真理を見つめ直す都市です。どうかごゆるりと滞在中の平穏をお楽しみください」

紳士的にペコリと頭を下げる兵士の青年に面食らう。…正直、スタトルみたいに臭くて色々危険な感じが普通だと思っていただけに、この対応は想定の範囲外だった

青年に礼を言いながら、門を潜り――「わぁ…！」と歓声を上げた

「おっさん…！」

「ああ…！」

2人してテンションを上げつつハイタッチ。この街は…ヴァンフォーレは…！

「臭くない！」「臭くねぇ！」

スタトルみたいな空前絶後の臭さに、ダンジョンの血生臭さ、そしてお風呂入っていない人間特有の臭さ。それらが！一切ない！それだけでもヴァンフォーレに来た甲斐がある！

家やお店はスタトルと同じ――恐らく魔法で作ったのだろう、白い岩みたいな素材で出来た四角い建物。空にもやはり膜状の結界。だが、側溝の中に溜まった糞尿の臭いがない！すごいすごい！

更に道が広く作られてて、両脇に露天や屋台が並んでいる。これぞファンタジーな異世界！と言わんばかりの光景だ。…あれ？スタトルと似たような感じなのに…臭いと雰囲気でここまで変わるのか！？凄い！

「おっさんおっさん！アレ見てアレ！美味しそう！」

「よし！食うか！？」

2人ではしゃぎながら屋台に駆け込む。焼き鳥みたいな、皮付きのブロック肉を串で突き刺し、タレで味付けしたものらしい。香ばしい香りにギュルル…とお腹が鳴る

「らっしゃい！家のはここらで一番美味いよ！」

にこやかに笑うねじり鉢巻に、ハゲ頭。顔に鱗のある、筋肉質な身体のおじさん。パタパタと団扇を振りながら、次々網で焼いた串焼きをひっくり返している

＞ｉ２５４４３―３２５９＜

「おじさん！二本ちょうだい！大きいの！」

「はいよ！お嬢ちゃん可愛いからおまけしちゃおう！２本で７００ゲイルだ！ジュースも持ってきな！」

「おじさん太っ腹ー！」

「誰がデブだってぃっ！？」

言ってねぇよ！と笑いながら受けとり、代金と引き換えに串焼きを貰う。そのままおっさん。それを横目で見ながら、串焼きにかぶり付く。想像していたような、焼き鳥っぽい味じゃない。多分、ウスターソースかな？独特の野菜っぽい風味と塩っ気の濃いタレの味と、熱い肉汁が口の中に広がり、油が頬を伝う。肉は柔らかく、噛まなくて簡単に口の中で解れていく。肉汁はジューシーなのに、お肉は柔らかくて癖がなくて…とにかくんまいっ！

＞ｉ２５４３８―３２５９＜

「おいしぃー！旅ばっかだったから塩単品とか、ワインで無理矢理味変えたのしか食べてなかったから、すっごく美味い！」

「嬉しいこと言ってくれるねぃ！こいつぁディラクドラゴンっつー

Aランクモンスターの肉で――」「あんった何やってんだあああああああああああああああっっ！！！」

屋台のおっさんが、いきなり現れた金髪の美人さんにドロップキック食らって吹っ飛んだ

とりあえず反射的に宙を舞う串焼きをキャッチ！指の間に挟み、口でキャッチし――あ、ダメだ。二本びちゃっと道に落ちた。勿体ない…。おっさんが拾ってくれたら良かったのに…

「はふっ…あちち…あち…うめ…あつっ…うめぇなこれ…あぢぃっ！？」

なんか肉と格闘中だった。はふはふと苦しみながら嬉しそうに肉を頬張っている

「あ、猫舌だっけ！？飲む！？」

「…サンキュ」

屋台のおじさんに貰ったピンク色のジュースをおっさんに渡す。「栄誉あるギルドマスターでAランク冒険者のくせになんで屋台なんかやってんですかぁあああああっ！？」チュルチュルとストローからジュースを啜るおっさん。その顔が、だらしなく緩む。

「美味しい？」

「おう。おめぇも飲むか？」

「飲む！」

ジュースを受けとり、ストローから啜る。…美味しい！なにこれ！？桃みたいに甘いのに、後味はすっきり爽やかで、鼻から抜けてく清涼感が半端じゃない！「うるせー！美味いもん皆で食った方がいいだろうがー！儂が狩ったもん儂がどうしようと儂の勝手じゃい！」「だからってAランクモンスターの高級食材をリーズナブルに販売しないでくださいよー！商売ギルドに怒られるの私なんですよー！？」っとと、ジュースは一本しかないんだからちゃんと半分ずつにしないとな。特におっさんは熱いの苦手なんだし

「っていうかよくこの状況スルーしてイチャイチャ出来ますね貴方たち！？年の差カップルですか当て付けですかこのやろーっ！？」

「わっ」

ギャオー！と背中に恐いオーラ背負って迫ってくる金髪の美人さん。２０前半くらいかな？この人も顔…目の下辺りに、綺麗な赤い鱗がある。…っつかイチャイチャなんかしてねーよ

「あ、すいません。痴話喧嘩の邪魔しませんから。…おじさーん、これ貰っていい？売り物にならないでしょ？」

さっきキャッチした串焼きをぷらぷら振って見せたら、おじさんは笑顔でサムズアップ。やった！

「おめぇも空気読めや…。なんかすいませんね」

「あ、いえいえ。これはご丁寧に…。じゃなくて何が痴話喧嘩ですかっ！？」

ペコペコ頭を下げあうおっさんと美人さん。…空気読んでるから空気読まないのに…。関わっちゃ駄目な雰囲気でしょ？コレ。おっさんは本当にダメだなぁ

殴られた

「痛いよ！？」

「今失礼なこと考えてただろ…」

「事実だもん」

殴られた

「…痛いぃ…」

頭を押さえて踞る。最近おっさん本当に手加減ないよぅ…。生理のときはあんなに優しかったのに…

「…とに、かく！うちのギルドマスターがご迷惑お掛けしました。今後このような事態を起こさせないよう尽力致します。尚、この街で有事の際はギルドリーダー：カリオラにご連絡ください。私に繋がりますので」

「あ、はい。こりゃご丁寧に…」

「あ、儂はギルドマスターのガンギルだ。基本的に週一で屋台出すか遊んどるから、暇だったら構ってくれ」

「なに恥ずかしい自己紹介してるんですか！書類が待ってますよハ

リーハリー！」

「２００年も生きてない小娘が儂を捕まえられるかよ！」

言うなりバサッ！と翼（！？）を広げて空を舞うおじさ…ガンギルさん。それを見て愕然とするカリオラさん

「ま…待ちやがれこの駄目親父ぃいいいいいいっ！！ママに言いつけてやるー！」

涙目でそれを追うカリオラさんの背中を見送りつつ、串焼きを口に運ぶ。ちょっと冷めてきてるけど、十分おいしぃ

「おっさん、アレが竜人なのかな？」

「だろうな。…ジュースくれ」

「んー。あ、おっさん頬っぺた油と肉付いてる。ちゃんときれいに食べなよー」

「あん？どこだよ。八重歯が邪魔で食いにくいんだよなぁ…」

「取ってやるからしゃがめって。届かないー」

「おめぇこそ頬っぺたテカテカじゃねぇか。おれ、拭いとけ」

「むぐぐ…」

ようやく、異世界の楽しさが分かってきたなぁと、勝手に笑みが浮かぶ口元に戸惑った

しっかし…ヴァンフォーレ楽しいなぁ！

「おっさん次アレ食べよう！」

「太るぞ？」

「…おっさん…」

…ホント、おっさんって残念なイケメンだよね…

8、ヴァンフォーレ（後書き）

今回のテーマは「無自覚バカップル」。あるいは「ラブラブ親娘」

ニヤニヤしたら負け

どんどん女性化…ってか子供化が進むレティ

ちなみにガンギル、カリオラはあんまり本編には関わらないよ？

今回のテンプレ

↓「無自覚バカップル」

↓「ラブラブ親娘」

↓街に入って偉い人

↓魔法で楽々生活な異世界の街

「おっさんを愛でる会」会員ＮＯ，４　「時村」さまが挿し絵を書いてくださいました！

６、魔法練習中内に追加しましたので、チェックしていってください！

正直今回の話がラブラブなのはこの絵のせいだぜ！

9、ギルド（前書き）

…いかんな

レティいじめが物足りん

甘いだけじゃ胃もたれするよな？　なっ！？

9、ギルド

一通り屋台を巡り、パンに分厚くて甘辛いタレで味付けした、油で揚げた肉を挟んだモノや、シチューみたいに白いのに、味付けはスパイシーなクラムチャウダーみたいな冷たいスープ、甘酸っぱい果汁のジュースでお腹をいっぱいにしてから、ようやく冒険者ギルドに向かう

「この街楽しぃねぇおっさん！」

「はしゃぐなっつーに…おら、転ぶぞ」

っとと、ちょっとテンション上がりすぎてたかな？走り出したくてうずうずする体を無理矢理普通の速度で歩くよう抑える。苦笑いするおっさんの腹に拳を打ち込む

「って、なにすんだよ」

「なんか笑い顔ムカついた！ってか普通に殴れるじゃん。さっき殴られたし」

結界がどうとか言ってなかったっけ？と首を傾げたら、おっさんも首を傾げ、

「…武器を使わなかったから、か？あるいは互いに害する意志がなけりゃ結界とやらは機能しない、とか？」

「武器縛りだったら意味ないなぁ。おっさんとか素手でも武器使っ

てもあんま変わんないじゃん」

まぁな、と笑うおっさん。それに微笑み返し、話を変える

「こんだけ屋台のご飯が美味しいんだから、宿のご飯も期待出来るね！」

「だな。さっきチラッと店覗いたが、ネズミもゴキもいなかったし」

よし！なんかスタトルと比べると可哀想だけど、俺の中ヴァンフォーレ株がグングン上がってる！住んでる人もいい感じだし、変な臭いもしない！いいなぁこの街！この街なら1ヶ月の滞在も余裕だね！

「おい、どこまで行くんだ？ギルド通り過ぎてんぞ」

「え？あ、ごめんごめん」

気恥ずかしさに頭を掻きながらギルドに入る。…おー、ネズミがいない。寛いでいる人や食事している人たちも、ちょっと薄汚れてたり赤黒い染みのある服を着てたりするけど、全然許容範囲内だ

おっさんの影に隠れるようにしながらギルドのカウンターに向かう。…受付が男の人だ。スタトルは女の子ばっかりだったのに…

「ようこそいらっしゃいませ。冒険者ギルド、ヴァンフォーレ本店です。受付は僕、スクアートが担当させていただきます」

にこりと笑う茶髪のイケメン。…こっちはおっさんに任せて、先にレブルアップに行っておこうかな…

「俺、ステータス振ってくる」

「ん？分かった。早くな」

うん。と頷き、見慣れた祭壇の前に立つ。えーっと、俺の今のレベルが…１４、か。なら６回？運に３、体力に３かな？速さもあげたいけど…なんかこの世界に来てから露骨に運が悪いしなぁ…

手を合わせ、目を閉じて祈る。とは言っても、祈りかたなんか分からないから適当に、「ファルガナ様ノーミス様たすけてくださーい」と頭の中で話し掛ける。お腹の奥…胃の辺りに熱が産まれ、それが全身に回っていくような感覚。ステータスアップおしまい、と。熱が少しずつ引いていく。火照る顔を押さえておっさんの所に戻ると、丁度終わった所らしい。おっさんもこっちに来た

「話は終わったの？」

「おう。隣の倉庫に運び込めってさ。全部運び終わってから査定出してくれるとよ」

「分かった。早く行こう」

あんまり気にしないようにしてはいるけど、それでもチラチラと向けられる妙な視線が嫌だ。露骨にニヤニヤしながらガン見してくる小汚ないオヤジもいるし…

「ステータス振らせろよ…」

呆れたように肩をすくめるおっさん。…その影に隠れながら、おっさんが祈り終わるのを待つ。…魔力に振るのはやめさせた。おっさ

んは腕力体力は十分過ぎるくらいだから、速さと運に振るように言っておいた。やっぱ極振りのがいいよな。…ゲームなら、だけど

「…っふぅ…」と熱い息を吐くおっさん。…正直ステータスアップって気持ちいいよねー。と生暖かい目で見てたら、じと目で見下ろされた

「…なんだよ」

「顔赤いよ？」

――ぐわし、と頭を握られる。そして激痛。「――――～～～～ッッッ！」言葉も出ない程の激痛に必死でタップする。洒落にならない！このアイアンクローは洒落にならない！？持ち上げ！足が浮いてるから！

「ごごごごめんなさっ、さいたいたたたたあっあっあっアーッ！ごめんなさぁーい！ちょーしこきました！浮かれてましたー！はんせーしました！ごめんなさいっ！」

「よーし二度とやるなよ？」

パッと離される手。ふにゃ…と膝から力が抜け、その場にへたりこむ。自然に浮かんできた涙を拭い、恨みを込めておっさんを見上げる。が、おっさんは「はんっ」とそんな視線を鼻で笑い、とっとと歩き出してしまった。慌てて立ち上がってそれを追う

「もー、なんなんだよおっさん。ちょっと変じゃない？」

「うっせーよ。…ったく、お前こそ変だろ？なんか口調が丸くなっ

てんぞ?前はまんま男みたいな口調だったっつーのに…」

「へ?」

…口調?変わった…かな?そんなことないよなぁ…?普通に喋ってるし…

「気のせいじゃん?」

「そう、か?…まぁいい。ほれ、さっさと行くぞ」

「んー」

おっさんの後ろにカルガモよろしく付いていき、ギルドと同じくらい大きい建物に入る。…中にはいくつもの木箱と、広い空間。そして地面一杯に描かれたたくさんの魔法陣

「…誰かに解説して欲しい感じだね」

「後からでいいだろ。ほれ、どんどん出せ。俺が並べてやるから」

うん、と頷き、インベントリから次々モンスターの毛皮や羽、翼、甲殻に牙や肉。…そしてなんと言っても、触手…あと一際でっかい目。どんどん取り出していけば、おっさんが整理して重ねていく。…んだが、やっぱタコの素材が異様な存在感を発している

「こんなもんかな?」

「随分集めたなぁ…」

毛皮は数十匹分が4、5種類。虫や鳥の翼も相当数あるし、甲殻も大量だ。これだけあったらかなりの値段になるはず…と胸を高鳴らせる

「じゃあ、職員を呼んでくる」

「あ、うん」

おっさんが出ていく。…また待ち、か。暇だなぁ…

チラッ、と木箱に視線を向ける。たくさんあるけど…何が入ってるんだろう?ちょっとくらいなら見ても…いやいや、迂闊にフラグ立てると厄介なことになるかもしれないし…

木箱を前にうずうずと体を揺らす。…大きさは両手で抱えられるくらいだから、あまり大きな物じゃないよな?やっぱ素材なのかなー?

「開けたらいけませんよ?盗難防止の魔法陣が発動してしまいますから」

「ひぇっ!?あ、す、すいません!」

後ろから聞こえた声に跳び跳ねながら木箱から離れる。振り向いて見れば、ニコニコと笑うスクアート…さん。その後ろではおっさんが呆れ顔で頭を押さえていた

「この倉庫には盗難防止の魔法陣と、自動鑑定の魔法陣が敷き詰められているんです。ギルド職員以外が木箱を開けようとすると、魔法陣が作動して死なない程度のレベルで雷精霊が暴れるんです。精霊は悪戯好きですから、手加減なんかしてもらえませんよ?」

「…あ、あはは」

…魔法、こわっ

でも、ヴァンフォーレが綺麗な理由がなんとなく分かったな。現代のセキリティとか、上下水道を魔法…ってか魔法陣で再現してるんだ…。スタトルは魔法よりも拳で語るぜヒャッハー！って感じだったもんなぁ…

とか考えている間にスクアートは山と積まれた素材を興味深げに眺める

「たった2人でこんなにも狩ったんですか…？凄まじいですね。しかも運び込むのにこんな短時間で…まさか我々の知らない魔法とか…」

キラリ、と目を輝かせるスクアート。…やば、いか？いや、大丈夫だとは思うけど…

「そんなんじゃねーよ。早いとこ買い取ってくれ」

強引に話を進めるおっさん。スクアートはおっさん…違うな、俺だ。俺をじろじろと観察するように眺めてから、おっさんに視線を向ける。…おっさんは獣人だから魔法は使えないし、完全にターゲットにされてんなぁ…。実際、俺のスキルだしなぁ…魔法じゃないけど…

ちょっとドキドキしながら待っていると、査定が終わったらしい。手に持ったクリップボードみたいな板に何事か書き込んでいたスクアートが、うん、と頷き、それをおっさんに見せる

…ぴくっ、とおっさんの眉が跳ねた。どうしたんだろ？

「…こんだけ、か？」

「はい。レベルの低いモンスターの素材ばかりのようですし、ここまで数を買い取るとどうしても値崩れしてしまいます。ナイトオクトの眼球と触手は珍しいサイズなので少しだけ割高で買い取らせて頂きますが、他のは１００～５００ゲイルほどの買い取りになってしまいます。それから、魔物肉ですが…ここまで大量に持ってこられるとウチだけでは買い取れません。薬師ギルドに持っていかれたら如何でしょうか？」

にこやかに笑うスクアート。…木の板を受けとり、俺も目を通す。ずらずら～っと商品の名前が並び、最後に――うぇ！？

１７２００ゲイル…？こんなにあるのに！？宿屋に３日も泊まったら終わりじゃん！

「…ま、仕方ねぇか」

「…そう、だね」

ショックはショックだけど、ギルドはちゃんと定価で買い取るらしいし…いっそ【錬金術】スキルで何か装備品とかに加工して売った方が高値で売れたのかな…？インスマウスの槍はかなりの値段で売れたし…

「はい、では商談成立ですね。その板をギルドに提出して頂ければ

代金を引き換えます。お疲れ様でした。貴方たちには期待していますよ」

スクアートの言葉に頷き、若干の落胆を滲ませながら倉庫を後にする。…むぅ、こんなことなら無駄に買い食いなんかするんじゃなかったなぁ…

「おい、不味いことになった。金が足らん」

「え？」

苦虫を噛み潰したような顔で言うおっさん。金が足らんって…んーと、まだ１０万ゲイルは残ってるけど…

おっさんと一緒にギルドに入り、木の板と引き換えにお金を受けとる。とりあえずそれはおっさんに持って貰い、ギルドを出た。なんかあそこ空気悪い。あんま長居したくない感じだ

「お前ね…、魔法学校に通うには足らんだろ？」

「あっ！」

忘れてた！ヴァンフォーレに来たのってそれが目的じゃん！？

えっと今の所持金が、売った金合わせて…１１７６００ゲイル。入学に１５００００ゲイルかかって、その上１ヶ月の宿代が…１日５０００ゲイルとして、１５００００ゲイル…合わせて３００００００ゲイルっ！？全然足らないっ！？

「どうする？俺の世界の装備品売る？」

「…そいつぁ最終手段だ。どうにか金を稼がなきゃなぁ…」

はぁ、と大きなため息を吐くおっさん

にしてもお金かぁ…

ファンタジー世界なのに、凄い現実的な問題が来ちゃったなぁ…

思わず苦笑いが顔に浮かぶ。…まぁいざとなったら高レベルのダンジョンに挑めば…また虐殺かぁ…とちょっと憂鬱な気分

「まぁ、安心しとけ。金のことはどうにかする。だからお前は今の内にもっと魔法の練習しとけ」

「うん…」

ぽんぽん、と俺の頭を軽く叩きながら、にかっ、と邪気のない笑いを浮かべるおっさん。…なんだかすごく申し訳ない気分になる。…魔法、諦めようかなぁ…？

等と、考えていた矢先だった

すぅ…と空気が代わる音が聞こえた

「ん…？」「…なんだ？」

おっさんにも分かったらしい。周りを見渡しても普通にたくさんの人がいる。皆にこやかに、それぞれの目的を果たそうと道を歩いている

――そんな中、たった1人。

足を止めて、俺達を見つめる者がいた

元は鮮やかな赤毛だったろう、白髪の混じる髪。目は青く、顔には皺が刻まれ、口元はにこやかに笑っている。だというのにギラギラした目で俺を――俺達を見つめている

30後半…40前半くらいの女性だ。格好は首から指先まですっぽり覆う灰色のローブ。頭にはオーソドックスなトンガリ帽子。手には古い樹木の杖。見た目だけで分かる、【魔女】

その口元が、動いた

「エルフ見っけ♪」

ひゅっ、と

息を飲む音が、妙に大きく聞こえた

9、ギルド（後書き）

もう、ね。もう…ね？

時村さまの絵を1日に数回チェックして２８２８してる俺は負け組

妄想が広がり過ぎる

嬉々として苛めてたレティが可愛く見えてきて困る

まぁ苛めるんですが（爆）

今回のテンプレ

↓低レベル素材は安い

↓いつの間にかギルドの期待の新人

↓急展開からの引き

もう皆、挿し絵みて萌えるといいよ！

おっさん可愛いよおっさん！

１０、魔女の晩餐（前書き）

わたさんの挿し絵追加！

おっさんご機嫌ですｗｗｗ本編全話通してここまでご機嫌なのは…

久々のタバコを吸ったときくらい？（笑）

１０、魔女の晩餐

絶句した

目の前にはひたすら料理。豪快に豚っぽいのの丸焼きから、シンプルな野菜スティック。色んな野菜や肉を使った凝った料理まで。大人が１０人は座れそうな大きなテーブルに、ところ狭しと並んだ料理。視界を埋め尽くすひたすらの料理

「さぁ、食べてご覧なさいエルフちゃん。勿論全部よ。まるごとよ。お腹一杯になっても食べなさい」

にっこりとほほえみながら、魔女――そして料理人であるらしい彼女は笑う。まるで、このテーブルの上が空っぽになるのが当たり前、と言わんばかりの輝かく笑顔である

「…、おっさん…なにこれ…？」

「知らん。意味わからん。助けてくれ」

涙目で見上げるも、おっさんは諦めたように首を振る。哀愁を纏ったおっさんの前には、でん、と置かれた一升瓶。中にはまるっこい果実がぷかぷかと浮き、薄いアルコールの匂いが漂ってくる

「どうしたの？冷めてしまうわ。早く食べてちょうだい」

ニコニコ笑顔の魔女は、木の板に張り付けた紙に何かを書き込みながら、胡散臭い笑みを浮かべて俺たちを観察している。時折キラリと光るセルフレームの眼鏡が、なんとも怪しい雰囲気を放つ

…なんで、こうなった…？

「エルフ見っけ♪」

思い返すは数時間前。極々普通の道で、おっさんと普通の会話をしている最中に、突然現れた魔女は、俺をじっとり見つめながらそう言った

思考の空白。突然過ぎる状況への狼狽。動きも思考も完全に止めた俺の耳に飛び込んでくるおっさんの声

「逃げるぞ！」

ぐぃ、と首が絞められる感触。驚愕しながらも、俺の襟首を掴んで走るおっさんに並走する。この街では相手を害せないはず。だったら逃げることくらいは可能――今までに無いほど高速で回転した頭がその答えを弾き出し、おっさんに一瞬遅れる形で走りだし

「【ｕｒｕ影ｗａ並走ｓｉ失踪→禁止ｒｅｑｕｆｅｓｔｒｅ捕縛】」

そんな奇妙な呪文と共に、一瞬で真横に立つ魔女に驚愕。俺達が必死で、全力で走っているのに――魔女は当然のことのように、足を動かすことすらなく、直立したまま地面を滑るように、俺達の真横に並走し続けるのだ。悲鳴を上げなかった自分を褒めてやりたい

魔女はにこっ、と再び思考を止める俺達に笑い、

「悪いようにはしないから、安心なさい？【睡眠ｓｌｅｙｐ休眠ｎｏ風】」

がつん、と頭に衝撃。くらくらする頭と途切れそうになる意識を必死で繋ぎ止めるも、隣で走っていたおっさんの身体が弛緩し、前のめりに倒れる。おっさんの巨体を俺が支えきれる訳もなく、倒れたおっさんに巻き込まれるような形で倒れ込む。がりっ！と石畳で額を削り、熱さと痛みに苦痛の呻きが口から漏れかける

「誰か！たすけ――」

周りに視線飛ばす。――が、今の今まで普通に生活してた人たちが、まるで人形のように動きを止めている。今まさに走り出そうと片足を上げた青年も、談笑していた婦人も、その場で停止している。気味の悪い光景に絶句するしかない俺の耳に、感心したような魔女の声が届く

「疑似時間停止にも強制睡眠にも耐える、かー。凄く魔法耐性高いのねぇエルフって。そっちの獣人くんも時間停止には耐えたし…。いや、それはエルフちゃんとくっついてたお陰かな？まぁでもちょーっとの間眠ってて頂戴ね？あんまり余計な時間使いたくないのよ」

流れるような動作で鼻先に突き付けられる杖の先端。そこから、バチィ！と凄まじい音と共に紫電が走り――意識を刈り取られた

で、気が付いたら目の前には料理。ひたすらに料理。椅子に座らされてるだけで、特に拘束はされていない。だが、「作れるだけ作りました！」と言わんばかりの圧倒的料理に気圧される

「あ、あの…」

「質問は全部食べてからね」

かちゃ、と眼鏡を押し上げながら答える魔女に背筋が凍る。魔女は俺をじぃっと見つめながらも、決して杖から手を放さない

「…くそ、拒否権はねぇのか？っつかなんでお前は攻撃できんだよ。結界はどうした結界は？」

「質問はその酒を飲んでから…と言いたいとこだけど、エルフちゃんも不安を与えすぎたら健康状態に異常がでかねないわよね。いいわ。ただし、質問は交互に。あと食事をしながらお願い。毒なんか入ってないわ」

言いながら、部屋の隅っこにいた魔女は席を立ち、料理をスプーンですくって食べて見せる。「ん、美味しい♪」と顔を綻ばせ、他の皿にも手を伸ばす

「…ちっ」

舌打ちしたおっさんが料理に手を伸ばす。「あいつか俺が食ったヤツ以外は食うなよ」と俺に忠告し、パンにかぶり付いた。魔女は、「貴方が食べる必要はないんだけど…ま、いっか」と笑い、

「回答1。この街では武器、及び素手で他人に害意を持って攻撃した場合、竜人でも失神するレベルの電流が流れる結界が街に張り巡らせてるわ。けど、結界の起動条件に【魔法による攻撃】は含まれてない。言ってしまえばこれだけよ。あたしの場合は念には念をいれて、一定空間内の時間の流れを極限まで遅くする魔法も使ったけどね」

…それって、魔法使い相手にしたら、この街の中だと一方的になぶられるってことじゃないか?…やばいじゃん!?驚愕する俺に、魔女はにこりと微笑んだ

「じゃあたしからの質問。エルフちゃん、この料理食べた感想よろしく」

にこっ、と微笑みながら差し出される紫色のスープ。…変な匂いと見た目だが、目の前で魔女はそれをスプーンで掬い、食べて見せた。…食べなきゃ、ダメかな?

おっさんに視線を向ける。眉間に皺を寄せ、嫌そうにしながらも…頷くおっさん。恐々と木のスプーンを手に取り、妙に酸っぱい匂いのするスープを口に運…ぶっ!?

「〜〜〜っ!」

「ふむふむ、人間が食べてうんこ不味いと感じるモノは普通にうんこ不味いと感じるようね。やっぱ基本的な肉体は人間と代わりない

のかしら？」

口の中で酸っぱいのと苦いのが辛いのでコーティングされて暴れまわるっていうかなにこれ口の中に入れたら酸っぱいっていうか臭いのに吐けない勝手に喉の奥まで入ってきてあああああ胃の中がすっぱくさい！？

「だ、大丈夫かっ！？おい！水くらい寄越しやがれ！」

「別にいいわよー？」

おっさんから手渡された水差しいっぱいの水を一気に流し込む。これ――こんなん食って平然としてたのか！？やっぱ魔女か！

「なんの目的でこんなことしやがるっ！？俺らぁなんも悪いことしてねぇぞ！？」

「回答その2。そ、悪いことしてないみたいだったから【保護】しに来たのよ。今やってるのはおまけね。あたしだってエルフの生態は気になるしぃ」

「あぅ…？」

意味が分からなくて首を傾げたら、けらけら笑いながら魔女は俺の頭を優しく撫でる

「あたしの名前はリーデス。【魔女の頂点／ウィッチクラフト】リーデス・ヴァルトハイヘルン・オズ・パラケルスス。人間の中で最も真理に近付いた魔女よ。歴史に載るから、覚えておきなさい？エルフちゃん」

パチン、と軽やかにウィンクする魔女――リーデスさん。彼女は真っ赤なマニキュアが塗られた指を振り、

「貴女、魔法初心者でしょぉ？中途半端に魔力制御してるせいで、余計に目立ってるわよ？普通の人間の１０～３０倍近くの膨大な魔力を垂れ流しにしてるんだもん。二流の魔法使いならともかく、一流魔法使いには気になって仕方ないのよ。で、【解析】魔法使ってみたらまさかの純血エルフ！純血のエルフが最後に確認されたのは５０年も前だもの。あたしたち魔法使いにとっちゃ格好の研究材料よ？良かったわねぇ、最初に接触したのがあたしで。わる～い魔法使いが先に接触してたら実験体か性奴隷よ？」

めっ、と言いながら俺の額を突っつく。茶目っ気溢れた仕草が、妙に似合う

「…」

思わず黙り込んだ。…もしかして危ない橋わたってたのか？俺…

足下から沸き上がるようなぞくりとした寒気にぶるりと身体が震える。おっさんも先程までより敵意が和らいだ。が、まだ鋭い視線で睨み付けている

「…仮に、だ。仮にお前が俺達を…このガキを助けてくれたんだとして、お前にどんな得がある？」

「質問は交互に、って言ったでしょ？その質問に答えてほしかったら、獣人くんは目の前のお酒呑んで、感想を言って貰おうかしら？」

くすくす、と笑うリーデスさん。ちっ、と舌打ちしたおっさんが、目の前の一升瓶からそのまま酒を飲み――瓶を口にくわえたまま、後ろにぶっ倒れた

「おっさん！？」

慌てて席を立ち、床で丸まるおっさんの背中を揺する。――まさか、毒！？ならディスペルを…！と慌てる俺の耳に

「…ゴロゴロゴロゴロ」

と、なんか前に聞いたことのあるような声が届く。思わず「へ？」と間抜けな声を漏らし、顔を真っ赤にして気持ち良さそうに喉を鳴らすおっさんを見下ろす

…え、えー…？

「うなぁご…」

「ちょ、おっさ…！？」

床に膝立ちしていた俺の膝に、おっさんが無理矢理頭を乗っける。膝枕のような体勢で、「なぁごなぁご」と鳴きながら、すげぇ楽しそうに軽く握った拳で撫でるように俺の髪にじゃれつくおっさん。

…セクハラじゃね？

＞ｉ２５７７７―３３６５＜

「猫系の獣人にマタタビは効く、と。協力してくれる獣人がいないのよねー」

「…そりゃ、こうなるのが予想出来ればなぁ…」

ちゃかちゃか手で髪を揺らすおっさん。腕も足も子供が駄々を捏ねているみたいに折り畳まれ、たのしそーにへらへら笑っている。…いや、いくら美形のおっさんでも１００年の恋も冷める光景だなおい…。

…ちょっと可愛いけどさ

なんか毒気を抜かれてしまった。悪人じゃないんだな、リーデスさんは。変人なんだ。しかも天然気味の

「で、回答その3。あたしのメリットはコレね。純血エルフの生態観察及び獣人の生態実験。世界の真理を見つけるために魔法使いやってんのよ、あたしは。既存の生命体の生態くらいはしっかり把握しときたいじゃない。奴隷で売られてるエルフはハーフエルフだし、獣人は【差別をしない】って売りで商売してるヴァンフォーレに汚名が付くの。だから自主的に、自分から、どんな実験にも協力してくれるエルフと獣人が必要なのよ」

「脅迫じゃんかっ！？」

「交渉よ？あたしはマッドじゃないもの。別に今すぐヴァンフォーレを出て、襲われても真っ当に反撃できる場所に逃げても構わないわよ？その場合は純血エルフと獣人の研究はマーキングだけしといて、奴隷商人に捕まって売られた貴女を買い取ればいいし、獣人の研究はヴァンフォーレ以外の所でやればいいわ。あたし金持ちだからどうとでもなるもの」

「なっ…なっ…！？」

あ、頭おかしいんじゃないのか！？そんなこと言われて普通に言うこと聞く人間がいるわけないだろ！？

「――あ、でも」

まるで今思い出した、と言わんばかりの笑顔で、リーデスさんはへらっと笑った

「あたしうっかりさんだから純血エルフ見つけたよって情報漏らしちゃうかも♪」

「やっぱ脅迫じゃんかーっ！？」「にゃあっ！」「痛いっ！？お、おっさんやめて！静かにするから髪の毛引っ張らないで！」

こ、これどうすりゃいいんだ！？頼みのおっさんはべろべろだし、おっさんが膝に頭を乗っけてるから動くに動けないし！？

「ああ、身体に悪い薬を飲ませたり、処女膜破ったり、怪我をさせたりはしないわ。精々たまにうんこ不味い料理食べさせたり、週１回、１５０ｍｌの献血と、丸１日朝から晩までトイレも含めて観察させて貰えるなら…そうね。あたしが魔法を教えてあげるわ。滞在中の食費等もあたしが全部負担してあげる。ついでにそれなりの謝礼を約束するわ」

「えっ！？」

…ここに来て、かなり良い方に話が進んでるんじゃないか？

下手な手を打つよりは、リーデスさんと組んだ方が安全？少なくとも危害は加えない、って言ってたし、お金が無い今、魔法を教えてくれるならありがたいし…

「…わ、わかった。俺は、いいよ。おっさんは分かんないけど」

「商談成立。もう逃げられないわよ？ところで」

にこっ、と邪気のない笑顔を浮かべるリーデスさん

「次の生理はいつ？経血なら高値で買い取らせて貰うわ」

早まった、かな？

１０、魔女の晩餐（後書き）

リーデス・ヴァルトハイヘルン・オズ・パラケルスス

↓転生主人公期待ランキング５位の人

性別♀　年齢：５７（外見４０前後）

魔法使い。変人。夫と子供有り。ただし子供と血縁関係はなし。詳しくは本編で

赤毛に白髪のナイス熟女

彼女の真の目的は次回以降

作者も彼女が何を考えてるんだか分からん。最も思考トレースしにくい人

おっさんに続いて熟女ですぜ旦那

この作品、ただでさえ女性率が低いのに、更に平均年齢が半端ないよ

今回のテンプレ

↓交渉（笑）

書いてて思った

レティってバカだなぁ

PS

6、魔法練習中の挿し絵を張り替えました

ほんともう、俺は、どこまで萌えたらいいのか…

11、魔女の屋敷（前書き）

檸檬紅茶さまの挿し絵追加！

たくさんの方に萌パワーを補給させてもらっております…ｗｗｗ

11、魔女の屋敷

結局並べられた料理の1割も食べられず、おっさんと一緒に宛がわれた部屋に案内される。おっさんは相変わらず酔っ払ってたけど、リーデスさんが杖を振るだけでふわふわ浮いて付いてきた。【浮遊】魔法らしい

赤い絨毯が引かれた廊下と、いくつもある扉。とんでもない豪邸だ。広すぎる

「その魔力を押さえられるようになるまではこの家から出たら駄目よ。家の中にいたら結界張ってあるから大丈夫だけど、今も貴女を誘拐しようと監視してるのが数人いるわ」

んなこと言われて安心出来ると思ってんのか!?つうか恐いこと言ってんのに顔は笑顔のまんまなんだが!?

「こっちから迎え撃つ、とか…」

「暴力は嫌いなのよ。やりたきゃ攻撃魔法覚えて自分でやりなさい」

ばっさり切られた。事実上の拉致監禁じゃないか?これ…

「そうよ?ついでに暴行罪にセクシャルハラスメント…淫行罪に魔法の不正使用、貴重なサンプルの独占に…うん、あたしじゃなかったら首が飛ぶわね」

「自覚ありかよっ!?…っつか、俺、いま声に出してたか…?」

「思考を読んだわ。エルフちゃんは馬鹿可愛いわねぇ。思わず笑っちゃうわ」

「勝手に読むなよ！しかも馬鹿ってなんだ！？笑うな！」

「おーっほっほっほっ！」

「本当に笑うな！ってか話聞けよ！」

しかも悪役笑いだしっ！？なんだこの人！？さっぱり人の話聞かねぇ！？

腰に手を当て、手の甲を頬に当てるように高笑い。しかし表情は先ほどまでと変わらないにこやかな笑み。…表情固定されてんのか？こわっ！

「さ、ここが貴女の部屋よ。獣人くんは隣に放り込んどくから。あと、この家の中は私の領域よ。どこかに隠れようとか逃げようとかしてもすぐ分かるから、馬鹿な考えはやめてね」

…結構普通にド外道なセリフなのに、嫌味がない…というか悪意がないから調子が狂う。なに考えてんだろ、この人…

「ああそれから、別に獣人くんとセックスしたくなったらしても構わないけど、破瓜の血は採取しておいて、１０００万ゲイルで買い取るわ」

「するかっ！」

何で俺がおっさんとんなことしなくちゃならねーんだよ！？しかも

処女って決めつけんな！いや処女だけどさ！？

「魔力の波長を見れば処女かどうか、童貞かどうかなんかすぐ分かるわよ。いい？エルフの血はとんでもない魔力を秘めた霊薬という伝承が残ってるのよ。経血でも、破瓜の血でも、勿論普通の血液でも、ちゃんとした代金は払うから絶対に捨てたりしたら駄目よ。もし捨てたら尻の穴に拳を突っ込むわ」

「…」

思わず片手でおしりを押さえる。恐い…！この人メチャクチャ恐い…！目がマジなんだよ…！？俺、絶対選択間違った！

「それじゃあ、おやすみ。ずっと気絶してたから気付いてないかもしれないけど、もう夜よ。この家には窓はないけど、ちゃんと規則正しい生活をなさい。貴女の体調は常にフラットで維持して。じゃないと実験結果に差が出ちゃうわ。部屋の中にある物は好きに使って構わないから」

「…はい」

不承不承、返事をする。そしてにこやかに去っていくリーデスさんを見送り、宛がわれた部屋に入る。高級そうな絨毯に、真っ白いシーツを敷かれたベッド。後はテーブルと、部屋の隅にある扉。明かりは無いのに、部屋の壁自体がぼんやりと光っている。…こんなんで寝られるかな？と思った瞬間、明かりが消えた。と思ったら明るくなる。…もしかして頭で考えるだけで明かりを点けたり消したり出来んのか…？凄いな魔法

部屋の隅の扉を開ける。――お風呂だ！

ツルツルした壁とバスタブ、そしてシャワー。ユニットバスと同じトイレとの一体型だけど、お風呂がある！

内心ガッツポーズを取りながらさっさと服を脱いでいく。蛇口を捻れば、あっという間に室内に湯気が立ち込めた。お湯で身体が洗えるなんて…！と人知れずテンションを上げ

『言い忘れてたけど』

「わぁっ！？」

頭の中に急に響いた声に悲鳴を上げる。な、なんだ！？どっからっ！？

『今日は普通にお風呂に入っても構わないけど、明日からは汗や皮脂、その他老廃物も採取したいからお風呂前にあたしのところに来なさい。今日も採取したかったけど、長旅で埃やモンスターの血が染み込んでる可能性があるものね。壁の中に【収納】の魔法陣がひいてあるから、壁を叩けば専用の身体を洗う洗料が出てくるから、それを使って頭の天辺から足の指先までピカピカに磨いときなさい』

「ちょ、待っ！これなに！？頭の中に声が！？」

『【念話】よ。あたしも眠いからあんまりギシアンしないでね。年寄りは寝るの早いのよ』

ぶつっ…と聞こえてきた時と同様、唐突に聞こえなくなる頭の中の声。…なんかスゲー疲れた気分で入浴する。言われなくたって洗うっつの…１０日も風呂に入れなかったんだからな…。っつか老廃物

の採取、ねぇ…。ちょっと気持ちわる…いや、深く考えんな。俺が気にしなければ魔法を教えて貰えるし、その間の滞在費も浮く訳だし…。リーデスさんも悪人ではなさそうだし…

物思いに耽りながらも入浴を終える。…おぉ、なんか身体が輝いてる。肌がつるん、としてるし、髪の毛もしっとりした光沢がある。ちゃんと洗うだけでここまで違うのか…

髪を柔らかい布で拭き、水気を取る。無駄に長いから大変だよな…。着替え…別にいつもの格好でいいか、と1度インベントリにしまって綺麗にした下着と服を身に付ける

「ふぁ…」

なんか、お風呂入ったら急に眠くなってきた

ちゃんと髪が完全に乾いたのを確認し、髪紐でゆるく結んで纏める。これだけで朝の寝癖が大分違うんだ。そして、ベッドに潜り込み――

「おぅぁ…」

すっげ…ふっかふか…

宿屋や野宿じゃまず味わえないふっかふかのベッドに更なる眠気を覚え、俺はあっさりと意識を手放した

「おい、起きろ…。おい…」

ゆさゆさと身体を揺さぶる振動。そして耳に届く低い声。それがなんとも言えずきもちいい

「ん…」

暖かくも硬い掌の感触。僅かに届く酒と獣、そして男の匂い…。ぼんやりとした意識が、緩やかに浮上する

「…おっひゃん…？」

「おう、おはよう。で、ロープとかないか？頑丈なヤツ」

「んー…？」

寝惚けた頭で考えて…のろのろとインベントリポーチを引き寄せ、中からロープを取り出す。おっさんは「サンキュな」、と小さく笑う

「…俺さ、お前に会えて良かったよ」

「ぁぅ…？」

妙に優しい目で俺を見つめるおっさん。その手が、俺の頭に乗せられる。優しく髪を解かされる度に、耐えようのない眠気が身体を襲う

「結構タフだと思ってたのによぉ、これがそうでもねぇんだ。案外簡単に潰れちまいそうになっててな。最初は黒岩達を守ることで…守ったつもりになってどうにか正気を保ってるつもりでいた。なし崩しでお前に会って、お前を守ることで俺は「俺」を守ってんだ。…でもよ、途中から…途中から、お前が、「俺」を守ってくれてたんだ。お前が馬鹿なことやって、俺が止めて、お前をからかって、俺は笑って…凄く、楽で…楽しかった」

「…」

ねむい。にどね…ふかふか…なでられるのきもちいぃ…

「…だから、ありがとよ。そして、さよならだ…」

すぅ…と手が離れていく。それを寂しく思いながら、その背中を見つめる。パタリ、と閉じられる扉。室内に流れる静寂

…ん？

「いやいやいやいやいやいやっ!?」

待て待て待て待てさよならってなんださよならってっ!?二度寝してる場合じゃねぇだろ!?

慌てて跳ね起き、ブーツも履かずに扉を蹴り開ける。おっさんどこ行った!?

と、その時。ガタッ！と不吉な音が右隣の部屋から聞こえてきた。
慌てて部屋に飛び込む俺
おっさんが首吊ってた
「わーっ！？ちょ、なにやってんだおっさーんっ！？」
慌ててインベントリからナイフを取り出し、ベッドに結ばれたロープを切り落とす。天井の梁を通してぶら下がっていたおっさんの身体が、どすんっ！と音を立てて床に落ちた。そのまま大の字で動かないおっさんに走り寄る
「な、なんで自殺！？なんでこのタイミングで自殺！？」
「死なせてくれ…死なせてくれよ…俺には生きてる価値がねぇ…」
はらはらと涙を流し、天井を見つめるおっさん。慌てたのは俺である。なんでおっさん自殺なんか！？
「な、悩みとかあるなら聞くよ！？何でも言ってくれ！おっさんのためなら頑張るから！」
「…やっぱ殺してくれ…俺は、俺は…発情期でもねぇのに…しかもちょっと気持ち良かったし…殺してくれ…」
なんでこんな落ち込んでんだよ！？正気に戻ってくれよ！
はらはら泣くおっさん。わたわた慌てる俺。そんな意味不明な空間をぶっ壊すように、彼女は普通に部屋に入ってきた

「朝食が出来たわ。エルフちゃん、口内の菌の採取をしたいからあたしの部屋にいらっしゃい」

「え〝…そんなんまで調べるの…？」

「エルフと人間の体内でどれくらい菌の種類が違うのか調べたいのよ」

平然と答えるリーデスさん。…なんか変態くせぇ…と顔を歪めてたら、がしぃっ！と力強く肩を捕まれた

「…おーし落ち着けガキ。何の話だ？何でちょっと仲良くなってんだ？おじさんにちょっと詳しく説明しなさい」

「おっさん！自殺しないんだな！？よか」「今はそんなんどうでもいいから早く話せ！」「はいっ！？」

凄まじい剣幕で怒鳴るおっさんの迫力に押されて、洗いざらい昨日の会話をぶちまける。とは言っても、簡単に纏めれば色々身体を調べさせる代わりに、魔法を教えてもらい、かつその間家に泊まらせてもらう、ってだけだけど

それを話したら、おっさんは盛大に頭を抱えて唸り始めた。…俺としては「まだ終わらないの？」と言わんばかりにうずうずしてるリーデスさんが気になるんだけど…

「…馬鹿なの？お前馬鹿なの？馬鹿だろ？それお前アレだよ？軽い気持ちで援交して妊娠したとか取り返しの付かないことになったのと同じよ？解ってる？ねぇお前分かってる！？」

「で、でも危害は加えないし、しょ…その…膜も破らないって言って…」

「そんなん男が「先っちょだけだから！先っちょだけだから！大丈夫！」って言うのと同じですー！馬鹿この馬鹿！ホント馬鹿！お前ってホントバカ！」

「そ、そんな馬鹿馬鹿言わなくても…！お、おっさんも、肝心の時に酔っ払ってたくせに…」

「死のう」

「それはやめて！」

再びロープの端をベッドに結ぶおっさんを必死に止める。ぶつぶつと「なんであの時…！いや油断したのが悪かったけど…！でもどんどんこのガキ考え無しになってく…！？俺か！？俺が甘やかすのがいけないのか…！？」とか苦悩しているおっさん

…いや、確かに人体実験、っつったら聞こえが悪いけどさ、健康診断みたいな感じなんじゃねーの？それに俺自身、エルフの身体に詳しくないし…調べてくれるなら丁度いいと思ったんだけどなぁ…

「そんなに心配なら、実験の際は常に立ち会ってもらっても構わないわ。だから早く採取をさせて。朝食も冷めてしまうわ。あと獣人くんはあたしの実験に協力しないなら出ていってもらうわよ」

「えっ！？」「なっ！？」

冷たい言葉に驚く俺たち。だが、リーデスさんは平然と

「嫌なら実験に協力なさい。…まぁ、エルフちゃんは協力してもらうことを【契約】したからここに残るけど」

「んぐ…っ!?だぁ!クソが!こんなバカ娘1人に出来るか!煮るなり焼くなり好きにしやがれ!」

開き直った…というよりは自棄になったように腕を広げるおっさん。そんなおっさんに、リーデスは微笑みながら、うん、と頷き。

軽く握った拳で招き猫のようなポーズを取り、

「なぁごなぁご。俺様は年下の女の子の膝枕が大好きだにゃあ」

「死んでやらぁあああああああっ!!」

「早まんなぁーっ!?」

ロープを引っ張り首を絞めるおっさんを必死で止める!リーデスさんも見てないでなんかしろよ!?

「うん、実験と関係ないけど楽しい」

「「楽しんでんじゃねーっ!!」」

俺とおっさんの悲鳴が、屋敷中に響き渡った

11、魔女の屋敷（後書き）

＞ｉ２５１７１―３２５９＜

作者にも謎なレティアホの娘化現象の理由分かった

最初にイジメ過ぎて耐性が出来ちゃったんだ…

だからイジメても天然な反応しかしないんや…

この娘もう殺人イベントくらいでしか泣かせらんねぇ…

いや困った困った

そしておっさんイジメが楽しくて困った

あと、マタタビ酒のリアクションは実家の猫に実際に飲ませてみた結果です

マタタビの粉末を少量のお湯で溶かして、適温まで冷ましてからスポイトでちゅーっと

あんなんなった。超萌えた

うちの猫がマタタビに弱かっただけかしら？

今回のテンプレ

…あったかな？

あと早くも魔女リーデスさんの後援会…

「リーデスさんを初めとする熟女に萌えて燃える会」

通称、熟女会が出来ました（爆）

会長は吉岡　眞吾さん。顧問わたくし、人春にございます

まさかリーデスさんに人気後援会が出来るとは…予想ＧＵＹですわ！

１２、魔女の講義（前書き）

説明回

おっさんとレティの空気っぷりが異常

ってかリーデスさんキャラ濃すぎ

もう絵が着いちゃうレベルですよ？

＞ｉ２５０３４―３２５４＜

時村さまの作品です

うっわー魔女ーやー…

…俺より時村さまのが仕事早くね？ヤバくね！？（￣～￣；）

12、魔女の講義

どうにかおっさんを落ち着かせて朝食。当然のようにピンセットみたいので口の中をガリガリ削られてちょっと口の中が痛い

朝食はポトフみたいな野菜とウィンナーの浮いたスープと、黒っぽいパン。そしてゆで卵とサラダ。パンに塗るっぽい黒いジャム？みたいのが置かれている

「獣人くんは好きに食べていいわ。エルフちゃんはニェンフ…スープから食べて。というか、肉から食べて」

「はぁ…」

と頷きながら席に座る。対面席で頬杖ついてじっと見てくるリーデスさん。なんか居心地わるい…。極力気にせずフォークで肉を突き刺し――一応匂いチェック。…美味しそうな匂い

またうん…もとい、滅茶苦茶不味かったら凹むなぁ。と思いつつ、口に入れ――む…！？

「…んぐ…ぐぐ…」

なんかやっぱ気持ち悪い…。おかしいなぁ、ガンギルさんの売ってた串焼きとか、ハンバーガーみたいなのは普通に美味しく食べられたんだけどなぁ…？

分厚いゴムみたいな味と感触のする肉をどうにか噛んで、飲み下す。

リーデスさんを見れば、なんだか変化のない笑顔なのに、嬉しそうな気がする

「検証完了。エルフ族は獣肉を食べられないって伝承は、どうやら本当みたいね。一番眉唾だったけど…うん、面白い。ハーフエルフは普通に食べれるのに…。つまりあの学説は正しい可能性が…」

「…？。どういう事ですか？」

獣肉を食べられない？普通に食えたじゃん。俺が…レティーシアがダメなだけなんじゃねーの？

「ふむ…。いいわ。説明してあげる。食事しながらでいいから聞きなさい」

パンッ、とリーデスさんが手を叩くと、床からホワイトボードみたいな板が競り上がってくる。なんだろ、授業受けてるみたいな気分になってくる

「感謝なさい。本来あたしの授業を受けられるのは魔法学校の特待生だけよ。では、本日の講義は魔法の属性、及び「属性」による種族相性よ」

…なんか本当に授業だったし。パンに真っ黒いジャムを塗りながら大人しく聞く

「まずこの世界を構成している属性、火、水、土、風。光と闇は別だからまた後で。火は水を、水は土を、土は風を、風は火を、それぞれ苦手とするわ。分かりやすく言うならば、

火→風→土→水→火の順に勝てる、と思いなさい

火は風を吸い膨れ上がり、
風は土を彼方に吹き飛ばし、
土は水を吸収し、
水は火を飲み込んで消し去る

魔物や人間、あらゆる生物に属性はあるわ。例えばあたしは火属性。人間の場合は髪の色に属性が出やすいわ。光なら金髪、闇なら黒髪、とか、火なら赤、風なら緑、土なら茶、水なら青。そんな感じよ。とはいえ、魔力を持たない人間は黒髪になるようね」

…なんか凄いな。ノート取らなくちゃいけない気分になる。ってかノリノリで説明してるなぁ…。あ、このジャム程好く酸っぱくて美味しい

「けど、それとは別にエルフ、ドワーフ、ホビットなどの精霊と人間の混血、とされてる種族には「根元属性」というものがあるのよ。ドワーフなら土の精霊との混血とされ、根元属性に「土」を持つわ。ホビットなら「土」から派生した「樹木」の属性。そしてエルフの根元属性は、「水」とされているわ。根拠としてはエルフの最大の特徴である長い耳、精霊の中で長い耳を持つ存在は「水」の精霊だけなのよ」

「…それがなんか関係あるのか？」

首を傾げるおっさんに、「慌てないでよ獣人くん。膝枕でもしてもらってまったり聞きなさい？」と返すリーデスさん。無言で机に突っ伏して痙攣しはじめるおっさん。その背中を撫でて慰める俺

「まぁ、当然精霊と人間の子だろうと親の特徴は出やすいのよ。だからエルフの祖は水の精霊の「耳」と魔力、人間と同じ「肉体」を得た存在だと推測される。…で、ここからが本題よ」

と、板書をやめ、こちらににやっと笑いかけるリーデスさん

「獣…特に食用にされている「狼」、「豚」、「牛」は、「土」属性を持つわ。ここまで言えば、分かるかしら?」

「…水は土に弱いから、土の属性を持つ獣の肉は、「水」属性のエルフは食えないってこと?」

「そういうことよ。この街で主食にされているのは「火」の属性を持つ竜肉だから問題なかったかもしれないけど、外の街に出たら大変でしょうね…。お肉食べられないわよ?鶏肉は大丈夫だとは思うけど」

くすくすと笑うリーデスさん。…そっか、そんな理由があったわけか…。てっきり干し肉だから不味いだけだと思ってたわ

「そんな簡単に竜とか取れんのかよ」

「養殖してるもの。竜の肉は、魔力回復率の良い食べ物だからね。しょっちゅう魔力切れで倒れるバカ学生を囲ってるヴァンフォーレ的には、普段からそういう食べ物を食べさせて、魔力に余裕を持たせたいのよ。それに天然モノの竜肉にしたって、この街のトップ３なら余裕で狩れるのよ。冒険者ギルドのギルマスは７００年を生きるＬＶ９３の竜人。その弟子もたった１５０年でＬＶ８５まで登り詰めた天才の竜人よ?さらに【魔女の頂点】たるＬＶ８０のあたしがいるもの。ぶっちゃけ、この街、Ｓランクモンスターに襲われて

も余裕で撃退出来るわ。だからこそ、未熟者ばっかの【魔法学校】なんてものが作れるのよ」

呆れたように言うリーデスさん。…ギルマス…っつーとガンギルさん?あの人レベル９３なんだ…。なんか想像出来ない世界だな…

「ま、それは置いといて…。というわけでエルフちゃん。貴女が死ぬまでこの街に残ってみない?いつでも美味しいお肉が食べれるわよ?」

「あ、あはは…遠慮します」

「そ、残念。でも１ヶ月…いえ、３ヶ月は観察を続けさせて貰うわよ。昨日期間を決めるの忘れてたしね」

「えっ!?さ、さすがに長くない!?」

「その代わり、上位魔法が使えるレベルまで鍛え上げてあげるわ。…怪我を負ったときの治癒力も見てみたいしね」

にたり、と笑うリーデスさんに身体を抱き締めて震える俺。こわい…!この人こわい…!おっさんも「なんつーヤクザな契約だよ…」と顔を青くしている

「で、魔法の属性についての講義後半戦――の、前に。アナタたちっていつ頃転生したの?」

「「…へ?」」

転生…?え。え?つまり…どういうこと?と首を傾げる俺達に、肩

を竦めるリーデスさん

「あたしも転生主人公なのよ。獣人くんの方は倫理観が２０００年代の日本人のそれに近いみたいね。この世界はエルフちゃんくらいの年齢なら、結婚して子供がいてもおかしくないわ。それに【援助交際】だったかしら？そんな言葉が奴隷を買えばいい世界に存在すると思う？エルフちゃんもそれを理解してるみたいだったし、【健康診断】って言葉を知ってたり、自然とシャンプー、リンス、ボディソープの使い方を理解してたし…。すこし迂闊ね、子供の頃苛められたりしなかったの？」

…え、あ、つまり…リーデスさんも【主人公】…ってことか？そういや【転生主人公】を何人か送り込んだー的なことを邪神が言ってたし…

俺が頭の中で邪神のことを思い出した途端、リーデスさんが初めて明確に表情を変えた。苦虫を噛み潰したような表情で、

「トリップか…。ただでさえ原作解離が激しいのに…。一応クイーンに話しておかないとダメそうね…」

と呟く。原作？…ってかまた思考読まれた？いやそれよりクイーンって？

次々生まれる疑問。リーデスさんは一度被り振ると

「一応説明しておくけど、あたしも読みたくて読んでるわけじゃないわ。ここはあたしの家、あたしの領域。あたしの領域内で隠し事は許されない。だからそこに踏み入れた人間の表層意識が勝手にあたしの頭に流れ込んでくるし、隠したい本心がぽろっと口から漏れ

たりするのよ」

「へぇ…」

なんか凄いな。ポーカーとかやったら凄い勝てそう。いや、負けるの俺たちだから絶対やらないけど

「…原作ってなんだ？」

「エロゲーよ」

…ドヤ顔で言うリーデスさんに、ちょっと時が止まった

リーデスさんはちょっと顔を赤くして、こほん、と咳払い

「…ファイナルクエストっていう微妙にパクり臭い名前の凌辱ゲーの世界なのよ、ここは。

ファイナルクエストは…そうね。魔族に拉致られた人間の女性が生んだ、人間と魔族のハーフが主人公。魔物…といっても触手限定で、触手モンスターを支配する能力持ちよ

鬼畜ルートでは人間も魔族にも排斥され、誰も信じられなくて、登場するヒロインをひたすら強姦凌辱調教。の性奴隷ハーレム

逆に被虐ルートだと誰も信じられなかった主人公が、ヒロインに依存。ヒロインになぶられながらも彼女と一緒にいられるだけで幸せ。なドMルート

そんな感じね。断じて【魔王】なんて物騒な者はいないわ。魔法はあっても攻撃魔法なんかなし。精々【性感強化】とかの魔法しか使

われてないわ」

…うわぁ

なんていうか…本当にうわぁ…だな。ちらっ、と隣を見てみれば、おっさんもうわぁ…って顔をしている。なんかなぁ…なんかなぁ…！

「大方、最初の「オリ主」さまは主人公に凌辱されるヒロインを助けたかったんでしょうねぇ…。ちなみに原作解離の主な部分は、主人公も「ヒロイン」も殆ど生まれる前に親が死んだり、転生貴族のハーレムに無理矢理くわえられたりしちゃったからなのよね…」

はぁ…と小さく溜め息を吐くリーデスさん。…なんつぅか…まぁ、アレだ。【原作】に強い敵キャラみたいなのがいないだけマシ…と思えばいいのかなぁ…？思うしか無いよなぁ…

と、気を取り直したように俺達を見るリーデスさん

「まぁ、それはともかく。アナタたちは魔王退治…【奇跡】を狙ってるの？あたしは狙ってるわ。クイーンと…まぁ、他にも1人協力者がいるわ。悪いけど、アナタたちに【奇跡】を渡すつもりはないわよ」

と真剣な目で見つめてくる。…【奇跡】、ねぇ

「…俺は、いらないかな。邪神の監視がどうとか、正直もうどうでもいいよ。とりあえず魔王は倒す。じゃないと邪神が恐いから。けど、奇跡はいらない。普通に…うん。せめて衣食住と、お風呂に困らない生活が出来るなら…いらない」

ぽろっ、と口から溢れた台詞に自分で驚く。これが俺の本音なのか？…ってか俺、邪神を恐がってのか…。それに男に戻る、とかは考えてなかったんだな…

「…発情期を消してほしい…けど、ねぇな。奇跡なんぞに頼らんでも、自分でどうにか出来る。我慢くれぇ慣れたもんだぜ」

「それがおっさんの本音？」

「…みてぇだな」

苦笑いしながら頬を掻くおっさん。それに俺も苦笑いする。ったく、本当におっさんって完璧超人だよなぁ…。俺なんか完全に小市民なのに…

「…ふぅ～ん」

リーデスさんはなんだかちょっと上機嫌に口許を歪めて笑う

「よろしい。あたしとしても魔王…リトマス・キングを倒すための戦力があって困ることはないわ。獣人くんもついでに鍛えてあげる。師匠を連れてきてあげるから、指導してもらいなさい」

「いぃっ！？い、いやいらん！アンタに借りを作るのは恐いし、俺ぁ人からなんか教えて貰えるような」

「安心しなさい。最高レベルの師匠を連れてくるわ。エルフちゃんは貴女の部屋に初心者用の魔法の教科書を置いとくから読んどいて。獣人やエルフ…いえ、【主人公】の成長速度…興味深いわ」

「話を聞けぇえええええッッ！！」

おっさんの絶叫にも耳を貸さず、とっとと杖を片手に部屋を出ていってしまうリーデスさん。ほんと…自由な人だ

「…だあああああっ！これだから年上の女ぁ嫌いなんだよ！皆ねーちゃんと一緒だ！人の話なんかさっぱり聞かねぇ！」

うがぁあああああっ！と苛立たしげに頭を振るおっさん。…俺、姉はいなかったからよく分かんないなぁ

「ま、まぁまぁ。ほら、おっさんお茶。ちゃんと冷ましてあるから大丈夫だよ？」

「…気ぃ効かせてんじゃねぇえええっ！ギャップでコロッと行くだろうがぁあああああっ！」

「なにがっ！？」

なんだか情緒不安定なおっさんだった

12、魔女の講義（後書き）

と、いうわけで「レティが肉を食える理由」の説明に見せかけたこの世界の「エルフ」の設定掘り下げ

ちなみに「獣人」は「獣魔族」と「人間」のハーフで、根元属性は「闇」から派生した「混沌」。何でもオッケー。ただし得意な属性はないし、魔法も使えない種族

この世界の知的生命体は基本、「人間」＋「〇〇」で生まれます

「人間」＋「水精霊」→エルフ族
「人間」＋「火精霊」→オーガ族（魔族）
「人間」＋「土精霊」→ドワーフ族
「人間」＋「風精霊」→セイレン族（魔族）

みたいな。ここからさらに派生してきますが

設定多すぎてキモいな…

クドくなったら修正します。正直物語にあんま関係ない設定も多いですし

ぶっちゃけクロイワみたいなハーレム主人公のために練った設定だから、基本マンツーマンでラヴィしてるおっさん&レティには関わってこないんすよね…

今回のテンプレ

↓無駄に多い設定

13、魔女の修行（前書き）

檸檬紅茶さまから挿絵を頂きました！

おまけ　レティーシア・ブログ

内に追加したので見てってください！

いやぁ…相変わらずイチャイチャしてんなぁ！（爆）

13、魔女の修行

自室へと戻り、教科書を読み初めて３０分。これは…予想以上に先行きが不安だ

…むぅ。と口から悩ましげな溜め息が漏れた。この世界の魔法…思っていた以上に難しい

習いの水晶で学んだ使い方は本当に基本だけで、攻撃魔法は更に使うのが難しい。というか、俺と相性の良い属性に、強力な魔法がない

魔力を練り上げ、指先に集める。そして空中に向かって語りかける。

…やっぱり分からん。精霊の存在を感じとる？無理だろ…

「魔力を練るとこまでは出来てる、と思う。後は精霊を感じ取れれば…」

だが、教科書には「精霊を感じ取り～」みたいなことしか書いてない。だからどうやって感じ取るんだと問い詰めたい所だ。

今の俺は魔力量にモノを言わせて無理矢理でき損ないの魔法を【魔法】にしているだけっぽい。１０の力で2か3くらいの結果しか出ないのだ。初めて習いの水晶を使ってからずっと練習してるのに、さっぱり向上の気配が無い

「…むぅ。頑張らないとなぁ」

腕を組んで悩んでたら、扉をノックする音。「はいほーい？」と返事しながら出てみれば、おっさんが苦い顔で立ってた

「うん？どしたの？」

「…あの女が呼んでる。地下の練習場だとよ」

あー、帰ってきたんだ。にしてもおっさん本当にリーデスさん苦手なんだなぁ、と苦笑い。とっとと歩き出したおっさんの背中を追う。いつもはぴんっと立ってる耳も垂れ気味だし、尻尾なんかだらん、としながら悩ましげに揺れてる…。そんなに嫌かな？

地下へ降りてみれば、予想外な広い空間。板張りの道場みたいな作りで、隅っこには畳まで置かれてる。例によって天井とかが光ってるから暗くはないけど、太陽の光が全く入ってこない家って言うのも珍しいな

「やっときたか。遅いよ」

変わらない笑顔のリーデスさんと、その隣に立つ金髪女性…ん？あれ、確か…

「カリオラ…さん、だっけ？」

「え？…どこかでお会いしましたか？」

首を傾げるカリオラさん。金色のさらさらしたストレートの髪がさらりと流れる。おおぅ、改めて見ると美人だなぁ

「えっと…ガンギルさんの屋台で…」

「ああ！その節は本当にご迷惑を…。それで、これはなんの集まり

なんですか？ママ…じゃなかった。リーデスさんが教えてくれないので」

薄く笑い、カリオラさんは頭を下げる。豊かな胸元がたゆん、と揺れた。おっさんがそっと視線を外す

「あんた、弟子とったことなかったでしょ？そっちの獣人くんに戦いの基礎を叩き込みなさい。エルフちゃんはあたしが魔法教えるから」

「え？あ、はぁ！？いきなり何を…いやちょっと待ったエルフッ！？エルフって何ですか！？」

目の色を変えてリーデスさんに詰め寄るカリオラさん。リーデスさんはそれを鬱陶しそうに見て、

「いいからやんなさい。あと、余計な詮索はいらないよ」

「いやいやいやそういう問題じゃないからねママ！？え、ちょっ…あ、あなたエルフなんですか！？本当に！？」

「え、あ、まぁ…」

言いながら耳に触ってみる。カリオラさんは「うわっ、うわっ、うわっ…」とか言いながらそって手を伸ばし…俺の耳に触れる

「んぁ…」

ぴりっ、とした快感に声が漏れる。カリオラさんは「あったかい…本物…」と驚いたように呟き、ふにふにと耳を揉む。その度にぴり、

ぴりっと敏感に走る電流。「んくっ…ふぃ…」と漏れる声

「なに遊んでんのよ」

「あいたぁっ!?ちょっ、殴ること無いじゃない!」

ぼかっ!と音がしてカリオラさんの手が離れる。ほっと胸を押さえて火照る身体を冷ます。あー、びっくりしたぁ…まさか他人に耳触られるのがあんなに気持ち良いとは…カリオラさんも美人だったし、役得?

リーデスさんが呆れ顔で、

「いいから鍛えておやり。どうせ暇でしょ」

「暇な訳ないでしょーが!あの馬鹿親父に仕事させようと日夜駆けずり回るわたしの苦労を」

「その行動、いい加減無駄だと理解しなさい。ほら、獣人くんも前屈みになってないで早く行く」

「なってねーよっ!」

なるところがねぇだろ、今のは。憤慨するおっさんの背中をぽんぽんっ、と叩く。カリオラさんはちょっと落ち込みつつも、

「後で説明してもらうからね!?あと馬鹿親父捕まえるの手伝って貰うからね!?逃げないでよ!」とリーデスさんに涙目で怒鳴ってから、「こほん。…では、そこの獣人の貴方。短い時間になると思いますが、わたしの指導は厳しいですよ!」となんかノリノリで叫

び、おっさんの手を引いて奥の広い所に向かう。おっさんも嫌そうな顔をしながらも、大人しく従ってた

「…あの」

「あの娘、もう１５０歳なのに弟子の１人もいないのよ。だからちょっと人に教えることも覚えて貰おうと思ってね。あの娘自身、色んな弟子にガンギルが「師匠」って呼ばれてるのを羨ましそうに見てたし、満更でもないはずよ」

「いや、そこじゃなくて…ママって…」

「あたしは今代の【竜人の嫁】だからね。つまりガンギルの妻なのよ。で、あの娘はガンギルが６００歳くらいの頃に、疫病で全滅した村で唯一生き残ってた強い生命力を持つ娘でね。鍛えたら面白そうだと思ったガンギルが引き取って自分の娘として育て、生け捕りにした竜の心臓を食べさせて１５０年。研鑽を積み続け、技量だけならガンギル以上になった天才よ。でも、ファザコンなのよ。マザコンでもあるけど。…そして、数少ない【原作ヒロイン】の１人よ」

「へぇ…」

なんか設定がゴチャゴチャし過ぎててよく分かんないな…。そも竜人の嫁ってなにさ？

「この街はガンギルの作った街なのよ。そして竜人は子供こそ作れないけど、性欲はあるの。この街を守る代わりに若い娘を生け贄に捧げてるのよ」

「…ぇ、っと、それって」

…なんか、凄い悲しい…っていうか、切ない？んじゃないか？好きでもない男に抱かれるなんて…

「まぁ、あたしの場合は普通に恋愛結婚だけど」

「マジで！？リーデスさんが！？」

信じらんない！この人がガンギルさんに惚れる場面とか想像出来ないんですが！？

「えぇ、もちろん。嫌いな相手に股を開くなんてごめんよ。それにあたし、情は深いのよ。あたしが死んだら絶対に精霊になって、ガンギルが死ぬまで側にいるって決めてんのよ。知ってる？真理に至った人間は精霊になれるのよ。だからあたしは魔王を倒して精霊になるの。ガンギルと一緒にいるためにね」

「ぉ、おー…」

思わず拍手してしまう。かっこいー…。こんなに愛されてるガンギルさん、羨ましいなぁ。ん？でも待てよ？

「なら竜人になればよくね？竜人も不老なんでしょ？」

「嫌よ。どうせなら一番綺麗な姿で一緒にいたいじゃない。精霊にエネルギー体だから外見年齢の操作が出来るのよ。こんなお婆ちゃんの姿じゃガンギルが可哀想でしょ」

「おおぅ…」

かっこいいなこの人本当に。一途な愛っていうのか？ここまで1人の人間愛せるって凄いな…。イマイチ分かんないや

と、その時

「竜牙掌！」

「がっ…？！」

という声と共に、地面と平行に飛んだおっさんが、俺の隣を吹っ飛んでいき、壁にめり込んだ

「がっ…は…」

口から血をぼたぼた溢しながら踞るおっさん。一瞬思考停止しながらも慌てて駆け寄る

「おっさん！おっさん！？大丈夫っ！？今治すから！」

「ちょ…待…」

おっさんが何か言おうとしたが、無視してヒールを唱える。すぐ後ろで「なにやってんだい。手加減しないと…」「じ、実戦に勝る修行はないんですよ！？」とか言ってる声に、少しだけ沸く怒り。おっさんを治癒しながら、きっ！とカリオラさんを睨む

「うっ…！？ち、違います！わざとじゃないです！？た、ただ私がギルドマスターに鍛えられた際はひたすら実戦でして…」

「竜人は限定的な不死だから出来たのよ、それ。ほら、どきなさいエルフちゃん。時間逆行で治せば…あら？」

「うぇっ!?じゃ、しゃあヒカル死んじゃう!?ま、ママ!早く治してあげて!?」とあわあわ慌ててるカリオラさんを押し退け、近付いてくるリーデスさん。が、ほとんど怪我が治ってるおっさんに気付き、「へぇ…」と興味深そうに笑う。「馬鹿が…」と小さく呟くおっさん

「…成る程。回復魔法…面白いわね」

「面白いとかじゃねーだろ!今おっさん結構やばかったぞ!?」

口から血吐くってことは内臓が傷付いたってことなんだ!打撃で血を吐く＝内臓破裂とは言い切らないけど、ほとんどが致命傷で…!

「ちょ!ママ!?は、早く治してあげないと…じゃなくて!え、ええっとヒカルに…え、エルフさん?すいませんでした!次からはちゃんと手加減して…」

「いいえ、全力でやりなさい!」

「えぇっ!?」「リーデスさんっ!?」「糞マッド女が…!」

三者三様に驚きながら、リーデスさんに視線を向ける。カリオラさんは動揺、俺は抗議、おっさんは責めるような視線だったが、リーデスさんはそんな視線屁とも思わないようで

「エルフも気になるけれど、回復魔法…興味深いわ。久々にこんなに知的好奇心が刺激されてるの。別に構わないでしょ。ただの訓練より実戦のほうが獣人くんの実力は上がるだろうし、あたしは回復魔法を何度も見れる。素晴らしいわ」

「っざけんな！俺はてめぇの玩具じゃねぇぞ！」

「そうだよ！それになんでわざわざおっさんが傷付かないといけないんだよ！？」

回復魔法を見せるくらいなら別に構わねぇよ。どうせさっき見せちゃったし、この屋敷の中じゃ隠せない、みたいな話してたから、バレてるもんだと思ってたし…！でも、見るだけだったらそれこそナイフで小さく切るとか…！

「わざわざ新しい傷を付けるなんて、合理的じゃないわね。…でも、そうね。別に獣人くんだけである必要はないものね。…エルフちゃん、死ななきゃ治せるんだったかしら？」

…ぞくっ、と嫌な予感が背中を駆け抜ける

「カリオラ、全力で獣人くんをいたぶりなさい。あたしは、エルフちゃんをいたぶるから」

カリオラさんは少しだけ迷い、俺達に申し訳なさそうに頭を下げる

「ご、ごめんなさい…。でも、ママが言っているので…恨まないでくださいね？やり過ぎてもママが治してくれるので、ご安心を」

すぅ、と構えを取るカリオラさん。その目は、ようやくふらふらと立ち上がったばかりのおっさんを捉えている。おっさんも顔色が青い。俺も、足ががくがくと震える

リーデスさんも、カリオラさんも…とてもじゃないが、俺達の勝て

る相手じゃない

そんな相手が…殺意を持たずに、ただいたぶるためだけに襲ってくる

それが、こんなに恐いとは…思わなかった

「本当は優しく座学から教えることも出来たけど」

こつ、とリーデスさんが床を杖の先端で叩く。青い炎が床から吹き出し、まるで意思を持った大蛇のように、リーデスさんの身体に巻き付く

「身体で精霊の力を感じとりなさい？」

「ごめんなさい！竜顎蹴！」

カリオラさんの姿が消え、ごぎゃっ！と鈍い音。すぐ隣で、おっさんの身体が斜めに倒れる。悲鳴をあげそうになるのを必死に耐えながら、回復魔法を唱えようとして、

「【蒼ｆｉｒｅｆｕｌｌ炎→ｋａｎａｎ金ｎｏ樹】」

蒼い炎が全身を焼く激痛に、呆気なく意識を手放した

13、魔女の修行（後書き）

ガンギル・ウェーバー
７１３歳。３２歳の時、風邪龍バーレンの心臓を食って竜人化
風のような自由さと奔放さを持つ男
空を飛び、風を操り、自由気ままにヴァンフォーレを守護する竜人。
メイン武器はバーレンの死体から作った槍と剣

ヴァンフォーレに生きる人間全ての【父】
１００年に１人のペースで嫁を貰う。娘と思っている女性だって嫁にもらう
当時１３歳のリーデスに一目惚れ。３年間の猛アタックの末にデレたリーデスを嫁にもらう
リーデスが６人目の嫁だが、奥さんが生きている内は一途。その女性以外には興奮すらしない、と豪語する猛者
恐らく、竜がつがい以外と子供を作らない、という習性を受け継いでいるものだと思われる

カリオラ・スタグネット
１４３歳。１４歳の時、村に疫病が流行り、カリオラを残して全滅。
死人を確認するために訪れたガンギルに発見され、保護される

強い生命力を持つ反面、メンタル面は弱い。そのため、ガンギルに無意識の強い依存心をもつ。

リーデスを慕っているものの、心の奥では【父を奪った女】に無意識に嫉妬している。それに気付かないように一層リーデスになついている。

ガンギルの弟子。徒手空拳による戦法が得意。名も無き炎龍の心臓を食らい、１９歳の時、竜人化。一途に父を慕っているため、つがいはなし。密かにヴァンフォーレ内でファンクラブが築かれているギルドリーダー

口では文句を言うが、ガンギルのフォローをするのが楽しくて仕方ない。基本的にガンギルを追って街の中を1日中走り回っている数少ない【原作ヒロイン】

【原作】では主人公にガンギルの身体に毒を盛られ、良いようにされる。ちなみにその時実は既にガンギルは毒で死んでいる

今回のテンプレ

↓修行編

１４、魔女と訓練（前書き）

６、魔法練習中

の時村さまの絵に色が付きました！

俺は燃えて萌えた！

人春が命じる…全力で萌えろ！

更に

１１、魔女の屋敷

に檸檬紅茶さまの挿し絵を追加！

…おっさんェ…

思わず慰めたくなるＺＥ…

１４、魔女と訓練

訓練が開始されて約１ヶ月。

リーデスさんは身体で精霊の力を感じとれ、と言っていたが…成る程。言い得て妙である

炎の精霊が楽しそうに肉を焼く感覚が痛みとして。氷の精霊が冷静に指先から熱を奪う感覚が苦痛として。土の精霊が鈍器となって腹を打つ鈍痛が、彼らの存在を俺に伝える

俺がリーデスさんに殺されかけるとき、彼等は確かにそこにいるなら、そんな彼等に魔力を与えれば――俺も、魔法が使える

通常、初期魔法から攻撃魔法へのステップアップには半年はかかるらしい。それをたった１ヶ月まで縮められたのだから…何度も死にかけた甲斐は、あったのかもしれない

それでも何度も死にたいとは思わないけどな！

「【緋ｇｅｒｙ雷↓ｇｔｐｊ雨ｉａａｇ雲】」

「くっ…！インベントリ：レイピア！」

この呪文は前にも見たことがある。ポーチからレイピアを取りだし床に突き刺す。そして思いっきり後退。リーデスさんの杖から迸る赤い雷撃がレイピアを一瞬で焼け焦げさせ、焦げ臭い香りが場に満ちる。鋼で出来たレイピアが、たった一撃で焼け焦げ、ドロリとと

ろける。僅かに届いた雷の余波でピリピリと痺れる身体に活を入れ、魔力を練り上げ指先に溜める。本来であれば杖や専用の魔法触媒に魔力を溜めるのが良いそうだが、俺は弓や銃のが得意だ。手は出来るだけ空けておきたい

「イル・ウール・ティア！水掌流打！」

指先から魔力が消費されていく。水の精霊がその場にたゆたい、床から生えた手が拳になってリーデスさんに向かう！

「選択をミスったわね。【氷ｉａｃｅ撃ｃｏｆｉｎ】」

「んぇっ！？」

ピシッ…と地面から生えた手も、周りの床も壁も全部凍る。ぞっとするほど冷たい目で俺を見つめるリーデスさん。――魔法を魔法で迎撃するとか、格下相手なんだから少しくらい手を抜いてもよくないですか！？

「詠唱が遅いわね。最初の避雷針での回避は良かったわよ【闇ｔａｔｕｎ石↓蛇ｇａｐｅ牙】」

「ガスタ・ルル・ルガスタ！風壁！ルー・ウー・ルティアー！水壁！」

竜巻のように俺を中心に発生する風の壁。その内側にも水の壁を張る――が、真っ黒い蛇のような石の塊は、あっさりと俺の足下から生まれ――俺の足に絡み付く。「ひっ…！？」と口から漏れる悲鳴ごぎんっ！と音を立てて砕ける右足。悲鳴すら上げられない程の激

痛。けどここで気絶したら余計ヤバい…！回復は後回し。とにかく脱出――「ぎゃっ！？」。折れた右足とは別に、左足に激痛。鋭利な刃物で切り裂かれたような痛みに顔を歪めながら見下ろせば、黒い蛇は大きな顎を開いて、俺の左足に食い付いていた。――持続タイプの魔法とかありかよっ！？

「1分17秒。上出来よ。今日は感電しましょうね。【黒kade m雷↓崩tjmed落】」

…ホント、詠唱の速度と威力が比例してない。この上時間加速に疑似時間停止、限定時間逆行まで使えるんだから…チートってズルい…

段々慣れてきた致命傷の痛みに、今日も意識を失った

っ…痛みに意識が浮上する。じっと注がれる視線を感じるモノの、雷撃で焼かれた目は乾いて何も見えない。…いつも通り、上手く焼いてくれたらしい。目や手足はヤバイが、喉は痛いだけで普通に使えそうだ…

「くっ、ぐっ…【不屈の魂よ…！キュアヒール…！】」

急速に修復されていく肉体。ピシピシと全身から不吉な音がする。成長痛のような鈍い痛みと、とてつもない飢餓感。今まで気づいてなかったけど、回復にはカロリーが必要なんだ。だから、大規模な回復をするともの凄くお腹が減る…

「火傷は治るのね。血は再生成されないのに、眼球の水分は戻ってる…どういう基準で修復してるのかしら…。次は…細胞を壊死させてみましょうか」

回復した聴覚に届く非道な台詞。それに呆れながら、どうにか身体を起こす。焼け焦げた肉の匂いが鼻を突き、顔をしかめる。キラキラ…や、ギラギラした目で俺を見つめるリーデスさんと目があった

「…おなか、減りました…」

「ああ、カロリーが足りてないのね。直ぐに用意するわ。午後の訓練は2時から行うから、そっちで死にかけてるのを治したらおいでなさい」

見なくていいのかな…とぼやけた頭で考えかけるが、よく考えたらここにいる限りはリーデスさんに見えないものは無いんだった。治りこそしたが、まだまだ痺れの残る手足で四つん這いでおっさんに近付く

「…いま、治すから…」

大の字で気を失ってるおっさん。全身ぼこぼこに腫れ上がってて、真っ赤になってたり紫色になってたり…。…ってか、鎧が完全に砕けてる…素手で鎧砕くとか何者だよ…ああ、竜人か…

「【…不屈の魂よ…キュアヒール…】」

座っているのも辛くて、倒れたおっさんの隣、俺も横になりながら呪文を唱える。緑色の光がおっさんを包み、ピシピシと小さな音と

共に傷が修復されていく

「…ぁー…ゆっくりで、いい。無茶すんな…。っつか、いたい…」

「…あー…ごめん…もーむり…」

「いてぇ…あいつとの組手よかマシだが、超いてぇ…」

ぼやくおっさんに苦笑いしながら回復具合を見る。大体治った…かな？まだＨＰはＭＡＸになってないみたいだけど、回復は止まった…っというより、カロリーが足らなくて回復出来ないんだ

「動ける？」

「…どうにかな」

仏頂面でどうにか立ち上がるおっさん。砕けた鎧を外し、俺に渡してくる。それをインベントリにしまいながら、ふらふらする足を引きずりおっさんを追う

「おせーぞ。おれ」

「…？」

目の前に差し出される手。意味が分からなくて首を傾げてたら、はぁ、と大きな溜め息を吐いて、頭をがしがし掻き――

「うぇっ！？」

「おっ…軽っ…ちゃんと飯食ってんのか？」

首を捕まれて持ち上げられ、まるで荷物かなんかみたいに肩に担がれる。正直…メチャクチャ恥ずかしい。どうにかこうにか、という感じで、壁に手を付きながらふらふらと階段を登るおっさん。…自分もふらふらなくせに…なんで俺のフォローの優先なんかするかな…。少し…いや、かなり申し訳なく感じながら、せめて抵抗して余計な面倒かけさせないように、大人しくされるがままにされる。正直、お腹が減りすぎて目眩がするくらいなのだ。多分おっさんもそんなもんだと思うが

「…ちょっと痩せた。筋肉付かないんだよね…」

「女はちっとくれぇポチャポチャしてたほうが良いと思うんだがな…」

「それ、女の子の前で言ったらぶん殴られるよ」

女の子に太れ、って言ってるようなもんじゃん。ないわー。…あれ？俺、自然に女の子の考え理解出来てる…？…まぁいっか

「…女の子、ねぇ」

「？。なんだよー」

「別にぃ？」

意味ありげにへらっと笑うおっさん。疲れきった表情で、髪型も完全に崩れている。どころか、べっとりとした血の跡が額から顎まで続いている

「…ごめん、な?イル・アール・ウル・ティアー。水よ、この手に」

インベントリから布を取りだし、塗らしてその血痕を拭き取る。「あん?」と首を傾げるおっさん。煩わしそうにぴくぴくと動く耳。耳の中にまで血の塊が…布で優しく削り取る。耳は敏感だもんなぁ…

「迂闊だったわ…。回復魔法見せたのもそうだけど、あっさりリーデスさんの誘いに乗ったのも…ごめん」

まさかこんなことになるとは思ってなかった。毎日毎日いたぶられて、検査されて…欲しいものを言えば買って貰えるし、食べたい物を言えば作って貰えるけど…篭の鳥がこんなに辛いとは…思ってなかった。

「…ま、気にすんな。とは言わねぇがよ。同じ失敗すんなよ?それだけで十分だ」

「…ん」

軽く笑いながら俺の髪の毛をくしゃくしゃとかき混ぜるおっさん。

「んに…」と気持ち良さに声が漏れる。なんかこの間からリーデスさんとかおっさんに良く撫でられるから、慣れちゃった。この世界に来る前は、誰かに頭を撫でて貰える、なんて無かったもんなぁ…

「イチャついてないで早く来てくれない?料理が出来たわよ」

「「わぁっ!?」」

頭上からの声に驚き、バランスを崩すおっさん。落ちる!?と頭からさぁっと血の気が引いたが、リーデスさんが手を振るだけで背後

から風が吹き、逆に前につんのめる。…無詠唱、かぁ。まさかこんな隠し玉まであるとは…リーデスさん、どんだけ引き出し多いんだろ？

一度ステータスを見ようとじっと見つめ続けたことがあったんだが、何でも「ステータスブロック」とかいうスキルを持ってるらしくて、名前とレベルしか見れなかったんだ。自分のステータスの解析を防ぐスキルらしくて、格上や同格のモンスターと戦うには必須の能力らしい。それでも1ヶ月近くひたすらいたぶられてれば、いくつかのスキルは推測できる

まず、明らかに俺が使える【攻撃魔法】と威力も詠唱も違う【古代魔法】。よく聞き取れない、意味のわからない呪文詠唱が特徴だな。俺が使ってる精霊魔法と違い、得意属性とか苦手属性とかを選ばないのが凄い

俺なんか実戦で使えそうなのは相性が良い水と風の魔法くらいが限界で、派生の氷と雷は練習中。他は相性悪くて無理、というのが現状なのに…

それに、詠唱なしで使われる【時間魔法】。指定した空間の中の時間の流れを遅くする、早くする、巻き戻す。この3つが可能だ。消費する魔力が桁違いだけど、極限まで時間の流れを遅くすれば【ザ・ワールド！】だ。出来れば教えて貰いたい

他にも魔法で肉体を強化して肉弾戦も出来るし、その気になればヴァンフォーレくらいの街なら一発で落とせる大規模魔法、なんてのもあるようだ。凄すぎる…このリーデスさんより強いガンギルさんって何者なんだろう…たまにしかこの屋敷には来ないけどさ

「…あら？まだ傷、治してなかったの？」

首を傾げながら聞いてくるリーデスさん

「へ？全部治しましたよ？」

担がれたまま手足を振って見せる。まだまだ完調とは言わないけど、もう歩ける程度には回復してるんだけど…。リーデスさんは僅かに眉を寄せ、

「でも、出血…成る程。獣人くん。早く運んでちょうだい」

何かに気付いたようににこりと笑う。…うぁ、なんかヤバそう。楽しいことを見つけた時の目だ…。キラキラと子供のように目を輝かせたリーデスさんが、嬉しそうに手招きする

おっさんも嫌そうに顔を歪め、それでも拒否る訳にもいかないので足を進め…ん？

「あら、気付いた？」

「…はい」

恥ずかしさに顔が火照る。…そういやもう1ヶ月だもんな。うん、仕方ない、仕方ないんだけど…あ、自覚したらお腹痛くなってきた…。ただでさえ血が足りなくてふらふらしてたのに、気づいちゃったら頭痛までしてきた…

「お、おっさん。おっさん…頼む。おろして…」

おっさんの胸をとんとんと叩く。頼む、おっさん頼むから揺らさないで…！垂れる、垂れるから…いやもう手遅れっぽいけど…っ

「あん？いや、だってお前ふらふらして…」

「いいから下ろしてあげなさい。レディの頼みは黙って聞いておけばいいのよ」

「…はぁ、まぁ、いいっすけど…」

納得いかない。そんな表情で俺をゆっくりと下ろすおっさん。妙に優しい仕草で、一度を俺を抱き直してから下ろす。…どうやら抱き直した時に気付いたっぽい。「…あ～…」と小さく声が聞こえた。…うわ！？足に伝ってる！？

「後はあたしに任せなさい。エルフちゃんの分の食事は持ってきてあげるから、まずはあたしの部屋で採取ね。獣人くんは食堂に置いておいたから好きに食べなさい」

…もはや俺のアレの血にしか興味がないらしい。一刻も早く採取したくて仕方ないようだ

でも、この1ヶ月ほとんど毎日言っていることは、一応言っておこうと思う

「「いい加減名前で呼んでください（くれよ）…」」

「嫌よ、めんどくさい」

けろっとした顔で答えるリーデスさんが、何とも憎らしかった

１４、魔女と訓練（後書き）

キングクリムゾンが続きます

ひたすら拷問やねん…

次回は訓練後半戦

べ、別にタイトルに困ってるからキングクリムゾンするわけじゃないんだからね！

今回のテンプレ

↓キングクリムゾン

閑話　その頃彼らは－A（前書き）

番組の途中ですが

キンクリばっかもアレなので閑話

大体レティ&大路の修行生活始まって2ヶ月くらいのころ

需要ないとかいうなー

閑話　その頃彼らは－A

「俺のターンドロー！俺はブラッドルーカスを攻撃表示で召か」

パンッ！と軽い銃声。脳髄をぶちまけてゆっくりと後ろに倒れる魔族。硝煙を燻らせるＭ４０Ａ３――狙撃銃を肩に担ぎ、彼――彼女？は肩を竦めた

「…また同じ顔。何人いるのかしら？」

脳髄をぶち撒け、倒れた死体。けれどその姿は煙のように塵となって消えていく。…「増殖」、あるいは「モノマネ幻想師」だろうか

「さぁなぁ…。とりあえず召喚符…っつか、カードを作れる奴がいる間は無限に出てくるんじゃね？」

肩を竦めて答える孝治。彼もこの数ヶ月で身体を鍛えてはいるのだが、隣で「こう戦闘ばっかりだとお肌が荒れちゃうわ…」とか悩ましげに頬に手を当てるオカマ…伸一には敵わない。Ｍｋ．５…低反動機関銃でどうにか弾をバラ撒けるレベルだ。伸一のように絵に書いたような見事なヘッドショットなんか決められない

孝治は、はぁ、と大きく溜め息を吐き、空を見上げる。夜でもないのに真っ黒く染まった空と、灰色の雲。…魔界の空には太陽が無い

魔界。そう、魔界だ

界境の更に向こう側。ファルガナの空じゃなく、リトマスの空

…商人として奴隷を運ぶだけのはずだったんだがなぁ…と苦笑いする孝治。何の因果か国の宰相殿に気に入られてしまった彼らは、単身魔界に乗り込み、たった1人で戦い続けているファルガナの女王――クイーン・オブ・ファルガナの救出任務を任されてしまったのだ

恐らくは、王国騎士団に銃を売り込もうとデモンストレーションでやってみせた、孝治&伸一コンビVSファルガナ王立騎士団一個大隊の戦いで快勝してしまったのが原因だろう

そう、既に伸一と孝治の2人は、距離を取って戦えるなら数十人相手にしても一切の怪我なく勝利することが出来る。レベルこそそこまで上がってはいないが、銃を扱う技術と筋力さえあれば、レベルなど必要ないのだ。ただ、銃口を敵の額に向け、引き金を引く。フルメタルジャケットの弾丸は鋼の鎧や生半可な魔法障壁なんぞ苦にもせず、敵の脳髄を破裂させる。とてもCOOLだ

自身の強さを噛み締める。当然それが銃器に頼ったものだというのは理解している。理解しているが――それでも、そんな素晴らしい銃器や兵器を土塊から無限に産み出せる。素晴らしい能力だ。と孝治は己の力に身震いした

「人間だとっ!?よし!デュエルだっ!」

思考に耽っていれば、目の前に現れる魔族。青紫の皮膚。白っぽい髪や紫色の髪。目は通常、眼球の白い部分が黒く、黒目の部分が金だったり白かったり…。僅かに個性があるものの、ほとんどが額や側頭部から黒いヤギの角を生やした、テンプレートな【悪魔】なのが少し笑える

そんな【悪魔】が、左手に付けた召喚円盤…まぁ、有名なアレによく似たソレを構えるのは、もはやゲームかなにかのようにしか思えない。肩掛けストラップで腰まで下げた機関銃の安全装置を外し、しっかり両手で構えて引き金を――

「僕のターン！ドロー！機関車ロイドを守備表示で召か」

引く。

どうやら魔族側には【遊戯王】によく似た、魔物や特殊な魔法が封じられたカードを作れる転生者がいるらしい。人間よりも繁殖力に劣り、絶対数にかける彼らはこれを使って足りない戦力を補っている。中には【聖なるバリア】みたいなカードもあるから、カードを使うような魔族と戦う時は伏せ札を作られる前に仕留めなきゃならない

現れた機関車ロボが魔族を守る。だが、あっという間に蜂の巣へと姿を変えた機関車ロボが消え、ポカン、とした顔の魔族が残される。マガジンを交換しながら接近し、絶対に外さない位置からマガジン一杯の弾を吐き出す。ダラララララッ。慣れ親しんだ重低音。火薬が炸裂し肉片が飛び散る。信じられない。そんな表情で、穴の空いた腹を見下ろす魔族の頭に、思いっきりハチェット――手斧を叩き込む

ぐきゃっと骨を砕く手応え。柔らかい脳の感触が手に伝わり、びゅるっと飛び出た薄いピンクの液体が頬に掛かる。一瞬遅れて潰れた頭から血が溢れ、ぐちょぐちゃになった脳味噌と一緒にこぼれ落ちてきた。衝撃で眼窩から飛び出た目玉が、ぶらぶらと揺れる

「うしっ、5匹目だ。そろそろレベルあがんじゃね？」

斧を振って血と脳髄を落とす。使えなくなったら作り直すけど、やっぱある程度握りはずっと使ってないと手に馴染まない。このハチェットは孝治のお気に入りだった

「…孝治くん」

どこか悲しそうな目で自分を見下ろす伸一…友人の姿に首を傾げ、消え行く魔族の死体を踏みつけ進む

「…合流地点が近いわ。大丈夫かしら？」

「まぁ、な。お前は？残弾チェックしてるのか？」

「…えぇ、もちろん」

でかい身体を小さく丸め、なんだか憔悴した様子の相棒。…自分はホモではない。ホモではないが…ここまで自分が生き残り、強くなれたのはこの相棒のお陰なのだ。少しくらい、フォローしてやってもバチは当たらない

「…あー、気にすんなよ。どうせモンスターみたいなもんだぜ？」

ハチェットをくるくる回す。くっついていた肉片が、骨片が、いつのまにか消えている。これをリアルだと思えなんて言われても、実感が湧かない

「…同じ言葉を話して、似たような価値観を持つモンスター…ね…」

悲しそうに言う伸一の姿に、イライラが募る。何を小難しいこと考えてやがんだよ…！？

「おい、どうせ俺たちゃ盗賊だって殺してんだぜ？今更何言ってんだよ。人殺しよりモンスター殺しのがよっぽど気楽じゃねぇか！」

「っ…！」

目を見開き、何事か怒鳴ろうとして…結局、「ごめんなさい…」と口を閉ざす伸一。リトマスに来る前は毎日毎日冗談混じりに、時々本気で、楽しそうに自分に（性的な意味で）襲いかかってきた友人の憔悴っぷりに、孝治も動揺を隠せない

「…くそっ」

唾を吐き捨て、乾いた地面を蹴る。草木一本生えてない、乾き、ひび割れた大地。時折地面から顔を出す蜥蜴やワーム、空から襲ってくる魔族くらいしか、生命を感じられない

…伸一がおかしいのも、空気が悪いのも、居心地が良くないのも…全部魔界の空気のせいだ。きっと、ファルガナに戻れば…いつもの、騒がしい相棒に戻る。そう信じて、さっさと女王を助け出さんと足を進める孝治

けれど、彼は

そんな彼を見つめながら、伸一が

「…今は、あたしたちが盗賊なのよ…？無慈悲に殺しに攻め入ってるのは、あたしたちなのよ…？」

と、苦しそうに声を漏らした事に、気付いていなかった

そしてその同時刻

たった2人、向かい合っている男女がいた

ひたすらに続く赤黒い荒野に、睨み合い、向かい合う2人

片や20代前半の女性。

金髪を肩口で切り揃え、土埃に汚れて尚キラキラと光輝く白銀の鎧を纏った長身の女性。スタイルは抜群によく、切れ長の目と深い蒼の瞳が対峙する者を射抜く。一切の隙なく構えられた、平均的な長さの両刃の西洋剣。腰には華やかで有りながらも実用的な鞘。ボロボロになっているというのに、それでも尚美しい刺繍が施されたマントが風にたゆたう

片や１０代半ばに見える少年

肌は赤銅色。背中まで届く髪は漆黒。目は通常白目の部分は黒く、虹彩は銀。細く、華奢な肉体を漆黒の革鎧に包み、上から下まで黒で覆っている。手には禍々しい杖と、異様な雰囲気を発する一冊の本。片目にかけたモノクルを押し上げ、牙が伸びる口元を酷薄に歪めた

「実にお見事でございます。我が１万の軍団を１人で突破なされるとは…知っていても驚かされる光景でございました。ファルガナの女王は化け物ですね」

と軽い拍手と共に送られた賛辞の言葉に、美女もまた口元に冷酷な笑みを浮かべる

「当然。この私様にたったアレだけしか戦力を向けないなんて…。私様を倒したかったらリトマス中の戦力を持ってくることね！」

「お前から攻め込んで来たくせにそんな事仰られますか…。我はびっくり仰天でございます。貴女の顔が急に憎たらしく見えて参りました。ちょっと目玉抉ってよろしいですか？」

「いいわよ。どうせ２つもあるしね。ただし対価はこの世界の全てよ。私様の眼球をリトマスなんつーしみったれた世界１つで手に入れられんだから安い買い物でしょ？」

「ふむふむ。では遠慮しておきましょう。脳味噌が腐って蕩け落ちたＢＢＡの眼球なんか馬の糞程の価値もございません。買い取ってほしかったら命もついでに置いていってくださいませ。適当にその辺の腐れ脳味噌に食わせます故」

「…ぁ？いまなんつった？」

「ＢＢＡ…ババアと言われたのがそんなに癪に来ましたかババア若作りみっともないですねババア今年で何歳でしたっけババア怒ると化粧が禿げますよババア目尻の皺も目立つしババア怒るなよババア冗談じゃんババア怒るなって。８４９年４ヶ月飛んで１７日歳のババアババア若作りババア」

「――【レーヴァテイン】ッッ！！」

轟っ！と雲を焦がす炎の柱が空へ昇る。その中心で、灼熱に燃える剣――アルテマを構えながら、ファルガナは叫ぶ

「身体は――１９歳だぁあああああああっ！？」

「あ、そうなんですかサーセン。ちなみに我は身体も中身も…前世含めなけりゃ１２歳です」

「だっからなんじゃあああああああっ！！」

炎の柱から降る火の粉が辺りを火の海に変える。燃えるものがないはずの荒野に炎の花が咲き乱れる。見渡す限りの焼け野原に、けれど少年…リトマスは薄く笑った

「まぁ、こうやって挑発すればそういう風に激昂するのも――【知ってる】のでございますよ。フィールド魔法。伝説の都～アトラスティア～」

「っ！？しまっ――」

ごぽっ…と唐突に地面から涌き出る海水。水は炎を飲み込み鎮火させ、地割れのように開いた地面から出てくる巨大な宮殿

「さらにモンスターを召か…」

「やらせるわけないでしょ！？【トライデント】！」

ファルガナが手にした剣を振るう。それは一瞬で三叉に別れた槍へと変じ、海を統べる海神の槍は水を操り宮殿を押し流す。リトマスは「それも【知っております】」と薄く笑い、

「【緋ｇｅｒｙ雷↓ｇｔｐｊ雨ｉａａｇ雲】」

「なっ！？それリーデスの…！？っ、【ヴァジュラ】！」

驚愕しつつも槍を振るう。再び姿を変じた槍は釈鉾へと変わり、リトマスの杖から迸った赤い雷はそれに吸い込まれていく

「我がチート／いんちきは【アカシックレコードへの接続権限】。流石に他の転生者の情報閲覧には制限がかかりますが…。『我』の行動には閲覧制限がかかりません。貴女がどんな行動を取るのかが分からなくても、我がどんな『対策』を取ったのか知っていれば…十全に対処出来るわけですね」

手に持った本を誇らしげに掲げるリトマス。正反対に、ファルガナの表情は苦い。…それはつまり、対策の取れないほど圧倒的に倒せなければ、奴を倒すことは出来ない、ということだ。しかし…ファルガナが全力を出せば…文字通り、この惑星が壊れてしまう。『サイヤ人並の身体能力』はそれを可能にしてしまう

「…あーらご親切にどーも。なら魔法は?あれは私様の親友の開発した魔法なんだけどねぇ」

調子に乗って1人で乗り込むんじゃ無かった。せめてリーデスがいれば…!と唇を噛むファルガナ。苦し紛れの質問にも、リトマスは笑顔で本を開く

「…ふむ、【答えてあげた】ようでございますね。簡単です、アカシックレコードに【古代上位魔法】を復活させた奴がいる、と記されたのです。ならば、その習得方法を調べて学べば良い。言ってしまえばこれだけ――と、不味いですね。あと13秒で撤退しなくちゃアカシックレコードが狂ってしまいます。【ナニカ】が来るようですし」

てへっ、と笑う

「今回は顔見せだけです。…貴女の未来は分かりませんが…生き残れなかったら、ざまぁ、にございます」

ぺこっ、と頭を下げるリトマス。「待てっ!」と声を荒げるファルガナの目前で、リトマスの身体が転移する。逃げられた…!と悔しがるファルガナ。その耳に

「えり、えり、れま、さばくたに…」

小さな、女の子の声が届く

振り向いた瞬間

彼女は、自分の首が刈り取られる姿を幻視した

閑話　その頃彼らは－A（後書き）

前後編です

次回はまたホシちゃんパーティーの視点に戻ります

ホシちゃんお疲れ気味

ちなみに未だに服装は気合いのスリップドレス。ただし魔法障壁を発生させるブレスレットとか買いました

今回のテンプレ

→チート

閑話　その頃彼らは－B（前書き）

彼との出会いはダンジョンで

「いてぇーっ!?何これっ!?こんな反動でかいの!?やっぱいきなりデザートイーグルは無理があった…!肩が…肩が外れた…!」

初めての発砲でもんどり打つ彼に苦笑いしながら近付いたのが、切っ掛けだった

この身体になってから、この身体の原型となった俳優が演じた「キャラクター」の技能が己の身体に宿っているのは悟っていた。だからこそ、触ったこともない銃器の扱いを彼に指南出来たのだ

その頃はまだ、自分が「普通」の服を着てたから、というのもなくはないかもしれないが…と苦笑する

「うわっ!?マジか!?なんであの人が…!?さ、サイン…!」

「悪いけど、本人じゃないの。諦めて?」

「ぇ、あ、そーなんすか…」

と、残念そうに笑う彼が、妙に可愛くて

銃器を産み出せる彼と、銃器を扱える自分が一緒に行動するのは自然の流れで…

カミングアウトしても、嫌そうな顔はしたけど…離れていくことは

なかった

「…お前と一緒じゃなきゃ俺みてーなもやしっ子は即死だって分かってんだよチクショー！…いや、まじ、ほんと、お願いだからアッー！だけは勘弁して…俺ノーマルだから…」

なんて言いながらも、半ば無理矢理、何度か肌を合わせて…

だから…ずっと、ずっと一緒にいられると思ってた…

閑話　その頃彼らは－B

轟っ！と音を立てて空へと昇る巨大な火柱。それを目指して駆ける伸一と孝治

小高い丘の上から彼らが見た光景は、異様なモノだった

体育座りで座り込んで、目の前の女性を見上げる少女。年は2桁にも達していないだろう。華奢な手足を灰色と茶色でまだらに汚した包帯で一切の隙間なく覆っている。口許には薄い笑みが浮かんでいるが、ぼろぼろの包帯は目元も、そして頭にも適当に巻かれている。身体には几帳面に巻かれている包帯が、頭だけは適当で…なんともそれが、言い様のない嫌悪感を発する。しばらく風呂にも入っていないだろう薄汚れた、地面に引きずるほど伸びた薄水色の髪はぴょんぴょんと跳ね上がり、少女がけらけらと笑う度にゆらゆらと不規則に揺れる

「えり、えり、れま、さばくたに。
きりえ、えれーそん。
きりえ、えれーそん。
あなたはカミサマをしんじますか？」

へらぁっ、と邪気のない笑みが口許に浮かぶ。なんとも愛らしい笑顔のはずなのに、少女の発する妙な雰囲気に、少女が見せる場違いな行動に、戸惑いを隠せない伸一、孝治

「…生憎と神様は信じてないのよ。何故なら私様は、神より美しく神より強く神より優れているから！神なんぞ崇める暇があったら私様を讃えなさい！」

ドヤァッ！と言わんばかりの表情で胸を張る女性。だというのに片手で構えた剣は常に少女から外れない。その辺りは流石と言うべきだろうか

「…孝治くん」

「任せろ」

頷き、孝治は地面に手を置く。2ヶ月程前、たった1週間弱とはいえ仲間だったレティーシア。彼女が使える「錬金術」スキルと、孝治が持つ錬金術スキルはまったく別物だった

彼女はインベントリという特殊な倉庫に材料となるアイテムを入れ、選択肢を選べば錬金後のアイテムがインベントリ内に追加される。応用性こそないが、失敗することのない堅実なスキルだ

だが、孝治はどんなものからでもあらゆる兵器、武器を作れる代わりに、明確に構造までイメージ出来なければ使い物にならない。この世界に来る前、ガンマニアでメカオタだった彼で無ければ、単純な構造の剣すらなまくらしか作れなくなってしまう、残念なスキルでもある

彼はとある兵器の構造を脳裏に描きながら地面に触れる。ずるり、と地面そのものが蠢くような悪寒と共に、手の中に収まる硬質な感覚。…グレネード。それを抜き出せば、ぼこりと土がえぐれる。そのまま他にも大きくて強力な火器や、フラッシュグレネードやスモークグレネード。いくつもの兵器を土から作りだした

産み出した武器の数に比例して深くなった穴の中に2人で身を寄せ

る。あまり深くはないし防御力も心許ないが、即席の塹壕としては充分だ。あまり広くない塹壕に寝そべりながら、狙撃銃を構える伸一

何が起こってもおかしくない。そんな雰囲気に警戒する2人。…恐らく、女性の方が件の女王だろう、という推測は出来る。だが、今あの場に顔を出したら…絶対に良くない未来が待っている。2人は直感でそれを理解していた

「…そう、じゃあ…あなたはカミサマよりすごいんですね」

ほとんど理解していないだろう少女が、ぱんぱんっ、とお尻を叩きながら立ち上がる。警戒をあらわにした女性が両手で剣を構えた

「…なら、なんでたすけてくれなかったんですかぁ…？あんなにオネガイしたのに…あんなにオイノリしたのに…もう、もう…わたし、ナニもみえないよ…」

悲しそうに目元を押さえる少女。彼女の過去に何があったのかは解らないが――本能が危険信号を発する。流石の女性――ファルガナの頬にも、冷たい汗が伝う

「…あなたは、わたしをイジメますか？」

目元を抑え、恐々と、俯きながら問うてくる少女。まだ、話が通じている。それに安堵しながら、ファルガナは首を振る。少女に見えているとは思わなかったが

「いいえ。私様も暇じゃないのよ。ドM奴隷募集なら2か月前には締め切ったわね」

「…そっか、よかったぁ…」

嬉しそうに、少女は笑い

ファルガナの鼻先を、巨大な戦斧が掠めて地面を砕き割った

「「「――っ！？」」」

その動きにかろうじて対応出来たのはファルガナだけ。遠くから見ているはずの孝治と伸一は、彼女が斧を取り出し、接近し、斧を振り下ろす。そのたったの3動作を目で捕らえることすら不可能だったり

「じゃあ…あなたはいじめっこじゃなくていじめられっこね？いじめられるまえに、ころしてあげる」

にこぉ、と優しさすら感じる笑みを浮かべる少女。

「…やりにくい！」

余りに邪気のない笑顔と、それに不釣り合いな巨大な…刃部分だけで1mはありそうなぼろぼろの大斧。あまりにも噛み合わないその仕草に、「正義の味方」としての自信と自負を持つファルガナの心が揺さぶられる

本気で、少女は自分を救うために斧を振るっているつもりなのだ

その姿が余りにも哀れで、悲しくて…ファルガナは思考を切り換える。自分に出来ることはそう多くない

斬るか、殴るか、ぶっとばすか…殺すか、だ

女王、などと言われているが、彼女は政治のことなど何1つ理解出来ない。国を豊かにしたのは、彼女以外の重鎮の内政によるものだ

彼女はただ、剣を振るう

眼前の敵を、打ち砕く

だから、今日も「見方」を変える

――襲ってくるなら敵は敵。事情はボコってから聞き出す！

「…【ヴァジュ――】」

とりあえず痺れさせて動きを止める！そんな思考と共に雷の属性を持つ神器を呼び出そうとして…

「――【アイテムなんぞぉ】」

がしっ、と。尋常ではない力で腕を捕まれる。アルテマの変化が止まる。全身の筋肉が硬直し、強制的に少女の繰り出す斧の光に叩き込まれる

「【つかってんじゃねー】」

酷く気の抜ける声。だというのにその威力は絶大。サイヤ人と同レベルの耐久力を持つ肉体がぎしっ…と軋む。よっぽど『魔王』より強い！と驚愕しながらファルガナは腕を振り、光の中から脱出。…少女が、アレ？と首を傾げた

「…まだ、いきてる…。ごめんね、つぎはちゃんとコロすから、しんぱいしないでね」

「…お生憎さま！私様を殺せる人間なんかいないのよ？…まぁちょびーっとアンタとは相性が悪いけど…」

にやっ、と笑いながら腰の鞘を叩くファルガナ。きょとん、と首を傾げる少女に自慢するように、胸を張ってファルガナは言う

「この【聖剣の鞘】が有る限り、私様の勝利と栄光は約束されてるのよ。なんせ自動回復に疑似不老不死！運に極大＋補正！これで私様に勝とうと思ったら――」

「――【じぇのさいど】」

あ、やばい。自慢話をやめて全力で回避に回るファルガナ。巨大で強大な魔力の塊が、斧に集まりキュインキュインと危険な音を発する。遠くから見ているだけのはずの孝治と伸一が息を飲むほどの圧倒的な暴力の気配

「【ぶれいばー】」

「っつかさっきから英雄的に考えて私様がまともに戦えなさそうなキャラの技っていうかキャーッ！？」

悲鳴を上げながら極大の魔力の奔流から逃げ惑う。【アルテマ】は神器に変化するとは言うが、あくまで武器にカテゴライズされるものだけであり、よくある【イージスの盾】や【ヤタノカガミ】といった防御用の神器には変化しない。そのため防御や回避は身体能力任せの泥臭いモノになってしまう。まぁ、その気になれば音より早

く動けるが…それをやってしまうと空気の壁を破った衝撃で真っ裸になってしまうので出来ない。彼女はこれで『乙女』なのだ

この辺の土地まで巻き込む覚悟で高威力の神器で相殺してもいいのだが…ここを救援部隊との合流地点に決めた以上、下手に破壊しつくした焼け野原で一人ぼっちに寂しく待ちぼうけは避けたい。そんなわけで、普通よりは遥かに早い、けど敵の攻撃よりは遅い速度で逃げ回るしかない

「ぶれいばー、ぶれいばー、ぶれいばー…たのしくなってまいりました。ぶれいばー！」

「ちょっ!?それ単発…!?キャーッ!?そこまで痛くないだろうけど真っ裸になるぅー!?」

わりと死活問題だった

キャーキャー言いながら逃げ惑うファルガナと、口元を笑みに変えながら魔力の奔流を連続で放つ少女。危険なのに緊張感のないその姿に苦笑いする2人

「…見てらんないわね。孝治くん、麻痺弾を…」

「いや、殺せ」

相棒の容赦のない言葉に目を見開く伸一

「…あんな、小さい娘を?」

「幼女でも女でも敵だろ。…殺れよ。お前が殺らないなら俺が殺る」

先程産み出した兵器の中から狙撃銃を引っ張り出し、構える孝治。
彼にスナイパーの才能はない。けれど…その仕草は、妙な自信に溢れていた

（殺れる…！俺なら、殺れる…！どんな魔族も銃弾には敵わない…！）

そんな、妙な…根拠のない自信。「ま、待って…！」と伸一が言うのも構わず、ドットサイトの中心に捕らえた少女に向けて引き金を引く

ターンッ！と音を置き去りにして放たれた弾丸は、真っ直ぐに突き進み――僅かに少女の体を掠める。楽しそうにファルガナの姿を追っていた少女の動きが、ぴたりと止まる

「…いた、い？」

銃弾が掠めた脇腹に走る痛み。少女は――アルファ・スティグマと呼ばれる狂戦士は、標的を変える

「…いじめる人は殺すよ
いじめられたくないもの
いじめない人もコロスよ
いじめられたくないでしょ？
逃げる人も殺すよ
後から苛めるに決まってるもの
隠れてる人は潰すよ
今、苛められたもの」

そう言って、駆けるアルファ。ファルガナが表情を歪める。…この私様を無視するとか…流石にちょろっと調子に乗ってんじゃない？と。走り出したアルファを追い越すつもりで走る。だが、アルファの速さも尋常ではない。鎧を壊さないように、と無意識に力をセーブするファルガナの足では僅かに間に合わない

ターンッ！と再びの音。追撃の狙撃は、けれどガギンッ！と重低音しか鳴らさなかった。盾のように構えられた大斧の肉厚の刃は、例え特別製の弾丸でも貫けない

孝治は驚愕する。確かに1発で仕留める自信は無かった。とはいえ…一瞬でこちらの位置を把握し、反撃に出てくるとは思っていなかったのだ。焦りで震える銃口を必死で定めるも――間に合わない。隣で焦った表情の伸一が機関銃に手を伸ばす。弾幕を張って逃げれば、あるいは――

けれど、時既に遅し。

ざっ、と、汚れた包帯が巻かれた足が…目の前に置かれる

悲鳴を上げる暇こそあれ、逃げ出す暇は無く、

「つぶれちゃえ」

無慈悲に、巨大な戦斧は振り下ろされた

ぐちゃっ、と阿部孝治の身体を真っ二つに割る巨大な斧。真っ赤な花が咲き、右の肩口から左の脇腹まで真っ二つに潰し切られる相棒の姿を、「信じられない」。そんな表情で見つめる伸一

「あなたも…つぶれちゃえ」

再度、振り上げられる斧。血を吸ってテラテラと輝く刃。無造作に振り下ろされる刃を、呆然と見つめることしか出来ない伸一

――だが、「主人公補正」を持つ彼が、あっさりと殺されることは…「世界」が許さない

「――っ、間に合った！」

伸一と斧の間に割り入るファルガナ。そのままファルガナは手を伸ばし、アルファの胸ぐらを掴む。そして彼女の『全力』を持って――彼方へと、ぶん投げる！

「えっ」

倒すのも心苦しく、けれど相手から逃げられないなら…無理矢理、戦闘を終わらせる。ぽかん、とした表情のアルファが彼方へと飛んでいく姿を満足そうに見て、ファルガナは足下で呆然と死体を見つめる、珍妙な格好のオカマに嫌そうな顔をした

「あなたが救援かしら？格上の戦いに首を突っ込んだら駄目じゃない。あと、その格好なに？ギャグのつもりかしら？」

苛立たしげに伸一を見下ろすファルガナ。けれど伸一はふらふらと立ち上がると、未だ生暖かい血を吐き出す孝治の死体へと手を伸ばす

「こう、じくん？」

「…仲間が死体になるのは初めて？慣れた方がいいわよ。童貞卒業

オメデトーキャハッ」

無慈悲な現実が、伸一の心に突き刺さる

愛した男の死体は、切ないほどに…暖かかった

大量の兵器と嫌な女の前で…伸一は、この世界に来てから初めて涙を流した

閑話　その頃彼らは－B（後書き）

主人公補正のテンプレ

↓大事な人の死

孝治くん退場です

同時に

☆ちゃんが★ちゃん化フラグ

それとすいません。諸事情により感想の返信が遅れます

今週一杯は5時起きで仕事なの…

早く寝なきゃ…

15、魔女との別れ（前書き）

怒濤のホシちゃん&アベーコールに驚きの人春

鬼畜ルートを進むホシちゃんに幸あれ

そして妙にほのぼのなおっさん&レティ組

15、魔女との別れ

ピピピ、ピピピピ。と終了を告げるアラームが鳴った

目の前でバチバチと放電していた雷の精霊。リーデスさんの放ったソレを、俺が魔力障壁で受け止めた瞬間だった。ちらりと背中合わせに立っていたおっさんに視線を向ければ、鼻先数ミリの位置に突き出された拳を睨みながら、驚きに目を見開くカリオラさんの側頭部に爪先を当てている。相手の攻撃に合わせたカウンター…果たしてアラームが鳴らなければ、どちらが先に当たったのだろうか。既にそれを知る術はない

アラームに設定された時間は、5分。だというのに、1時間は戦い続けたような気がする。人間を遥かに越えるエルフの馬鹿魔力で構成された堅護な魔力障壁の上でバチバチと遊び出す雷精霊に内心で苦笑いしながら、酷く不機嫌そうなリーデスさんに問う

「…5分、でしたよね」

「…そうだったかしら？年を取ると物忘れが激しくってねぇ」

ホホホ、と笑うリーデスさん。…呪文を唱えて風の精霊を呼ぶ。記憶しておいて貰った空気の振動を解放する

『そうね、あたしとカリオラから5分逃げ切ったらこの実験も終わりにしてあげるわ。まぁ、1対1でようやく3分逃げ切れるようになったエルフちゃんじゃまず無理でしょうから、獣人くんも一緒でいいわよ』

「…」

リーデスさんのいつもの笑顔が引き吊る。…ふっふっふっ、伊達に3ヶ月…いや、正確に言うなら4ヶ月。リーデスさんの悪趣味な実験と性格に付き合わされた訳ではない。口約束がアテにならないことくらい、学習済みだ

『…意外としぶといのね。カリオラ、手を貸しなさい』

『えぇ!?ちょ、ママ流石にソレは…』

『…ガンギルのパンツが何枚か足りな』

『行きます!殺って殺りましょヤイサホー!竜翼脚!』

…ついでに脅しに乗って襲ってきたカリオラの恥部も再生する。流石に自己嫌悪に陥ったらしく、「ぅ、あ、あ、あ、」と頭を抱えて座り込むカリオラ。眉間に皺を寄せてムスッ、とした表情をするリーデスさんににこっ、と微笑む

「実験は、終わり。ですよね?最初は1ヶ月のつもりでした。まぁこれは自分の甘さが招いたことなので仕方がない、とおっさんに迷惑かけながら3ヶ月。で、何故か今は、4ヶ月目。自分は魔力制御は勿論中級~上位魔法も使えるようになりましたし、それこそ俺の身体でリーデスさんの知らない場所なんかない、ってくらい全身調べられましたし…。実験終わり。自分たちは旅に出る、ってことでいいですよね?」

「…まだエルフのエーテル体を調べてないわ…。確かに身体は調べ終わったけど、魂や霊体は…」

拗ねたようにそっぽ向くリーデスさん。その姿をちょっと可愛いかも、なんて思いつつ、その考えを振り払う

「…でも、契約期間は終わってます」

「仕方ないじゃない。エルフという生命体をしっかり研究出来る機会なんてないかもしれないんだから。それに貴女たちの関係を見ていると、伝承であるようにエルフと獣人間での確執が本当であるかわからないし、ぶっちゃけアレよあたしはエルフと獣人間で子供が出来るのかが興味深いだけなのかもしれないわね。それに貴重なサンプルである貴女たちが不慮の事故によって失われるようなことがあればそれは学術的に大きな損失となるわけであり、そうするとあたしは世界の真理に辿り着くのが遅くなるのよ。エルフちゃんと獣人くんが心配とかでもないし」

「…今のママの台詞を翻訳すると、わざわざ危険な真似しないでもこの屋敷で子供でも作って平和に暮らしたらいいじゃない。ってことになります」

「ならないわよ」

うん、俺もそう思う。さすがにリーデスさんにそこまでの人間味は求めてない

…まあ、結構前から大分優しくしてもらえてるなー、って気付いてはいるんだけど、さ

「…2ヶ月程前、初めてクイーンが『魔王』…キング・オブ・リトマスと接触したのよ。奴はとてもじゃないけど正攻法で勝てるよう

な敵じゃ無かったそうよ。『あの』プライドが高いクイーンが、自分の失態を語ってまで警告するくらいだもの。相当よ？そんな敵を相手に、貴女たちが何を出来るっていうの？大人しくあたしに研究されるのが、間接的に魔王を倒す最良だと思うけどね」

ふんっ、と鼻を鳴らすリーデスさんに苦笑い

「…それでも、戦いたいです。リーデスさんに教えてもらうだけじゃ、リーデスさんを超えられませんもん。…俺、強くなってリーデスさんも守ってみせますよ」

「…ま、迷惑かけられた比率のが圧倒的にでかいがよ、あんたにゃ世話になったしな。弾除けくらいにゃなれるよう、地力を上げてぇ訳だわな。となるとレベル上げがステータスＵＰの一番の近道ってわけだ」

リーデスさんはともかく、４ヶ月だ。４ヶ月も一緒にいれば、当然情が沸く。俺も、おっさんも、リーデスさんのことを憎からず思っている訳だ。年の離れた姉か、厳しい先生か、不器用なお母さんか…あるいは全部か。そんな人が戦う時に、自分は全くの戦力外…というのは、余りにも切ない

守る、というのもおこがましいけど、せめてリーデスさんが戦うときに、そのサポートくらいは出来るように強くなりたい。まだ魔王との本格的な戦闘は見送られてるらしいし、レベル上げをする時間は僅かながらあるはずだ

…まぁ、単純に流石にもう実験が嫌になった。っていうのもあるんだけどな

リーデスさんはしばし目を閉じて考え込み…やがて、大きな溜め息を吐いた

「仕方ないわね。最初に3ヶ月っていう契約を破ったのはあたしだものね。…いいわ、解放してあげる。夜までに報酬は用意しておくから、荷物は纏めておきなさい。物資も買って倉庫に放り込んでおくから、それを持って明日の早朝、認識阻害結界使って朝靄にと隠れながら、そのままヴァンフォーレを出るの。いいわね？あとエルフちゃんは出発の準備が出来たらあたしの部屋に来ること。じゃあね」

言いたいことだけさっさと言って、そのまま足早に訓練場を出ていってしまうリーデスさん。…どうしよう、怒らせちゃったかな？と心配になる

だが、カリオラはにこにこと微笑んで、俺の頭に手を伸ばす。避ける。…気まずそうにぐっぱぐっぱと手を開閉するカリオラ

「あー…心配しないで。ママ、アレで寂しがってるだけですから。4ヶ月も全くの他人と共同生活したの初めてなんですよ。だから、別れるのが辛いんでしょう」

「「…ぇ～」」

とてもそうは思えない。おっさんと一緒に不満げな表情を作ると、カリオラはけらけら綺麗に笑った

「ママ、不器用ですから。あんな性格だし、友達ってクイーン様くらいしかいなかったんですよ。でも、あなたたちは事情があったとはいえ、4ヶ月逃げ出しすらしませんでしたからね。可愛いペット

くらいには認識されてると思いますよ?本当は心配で家から出したくないんじゃないですかね?」

…あんま笑えないなぁ。実験動物から愛玩動物への出世かぁ、と苦笑い。「じゃあ、私はママを慰めてきます。また会いましょう」と笑顔で去っていくカリオラを見送り、おっさんに向き直る

「冒険再開、かな?」

「だな。…次はどこに行くか…。オカマに会いにでも行ってみるか?…でもスタトルはなぁ…」

「風の結界で臭いはシャットアウト出来るって」

「マジか!?よしっ!行ける!」

と、話しながら部屋に戻る。4ヶ月前は殺風景だった部屋も、それなりに生活臭が染み付いている。カリオラが持ってくる大量のぬいぐるみの山。カリオラが買ってくる可愛らしい服の山。カリオラが買ってくる可愛らしいアクセサリー…。ほとんどカリオラから貰ったものだ。何でも妹が欲しかったらしい。…最も、俺はこの世界の服やアクセサリーは身に付けられないから、ほとんど観賞用なんだけどな

色んなアイテムをインベントリに突っ込む。カリオラには悪いが、いずれどこかの街で売ってしまおう。少女趣味過ぎて着る勇気なんかまったく沸いてこないしな

ある程度まとめ終わってから、リーデスさんの部屋に向かう。やたら広い屋敷も、今日で終わりかと思うと感慨深い。長い長い廊下を

抜けて、リーデスさんの部屋の前に。ノック

「いいわよ」

「はい。何の用ですか？」

部屋の中に入れば、ベットと座椅子、クローゼットしかない質素過ぎる部屋。リーデスさん的には寝に帰るだけの部屋らしいから問題ないそうだが、もうちょっと何かないのだろうか

「いやなに、まずはこの辺りでヴァンフォーレ産の生理用品売ってる場所を教えておこうと思ったのよ」

「…心遣い、ありがとうございます」

顔が熱くなる。なんでこの人こんなストレートなんだろ…。まぁ、おっさんに聞かせないように呼び出してくれたのは嬉しいけどさ

地図を広げて、いくつかの街に印を付ける。ヴァンフォーレの技術は科学が魔法に変わってこそいるが、現代日本とそれほど差はない。スタトルでは布を巻くしか出来なかったが、ヴァンフォーレには「生理用品」らしい生理用品があり…まぁ、使い方もリーデスさんに教えてもらった。鎮痛剤まであったのには驚いたたが

「あと、貴女にお願いがあるのよ」

「お願い、ですか？」

命令でも契約でもなくて？と首を傾げたら、「ええ。場合によっては命が危ないから、無理なら無理で構わないのよ」と、前置きする

リーデスさん。…すさまじく嫌な予感がする

「B～Aランクのモンスターが出現するダンジョン、『エルフの森』。ここに純血のエルフがいないか、調査して欲しいの。人間が相手なら警戒して出てこないエルフも、同じエルフである貴女がいれば違うかもしれない。エルフがいたら、あたしに知らせて。保護するわ」

「…いいですけど、保護したエルフで実験、とか…」

「しないわよ。この世界のエルフならあなたみたいな中身空っぽと違って色々な人間が持たない知識を持ってるはずだもの。平和で平穏に交渉するわよ」

「…そっすか」

…ちぇーっ、なんだよ。人をパチモンみたいに…。散々人の身体メチャクチャに弄っといて、結局ポイとか…酷い話だな

ちょっとふて腐れる。リーデスさんは急にいじけ始めた俺が理解できないらしく、首を傾げてる。

「話は終わりですか？エルフの森の調査、でしたっけ？おっさんに相談してから決めます。もう行っていいですか？」

「ああ、待ちなさい。最後に質問があるのよ」

「質問？」

…リーデスさんが、俺に？こんなの始めてだ。ちょっぴりわくわく

しながらリーデスさんの言葉を待つ。

ちょっと迷うに頬に手をあて、考え込むリーデスさん。とはいっても、すでに聞くつもりは満々のようだが。やがて、リーデスさんが口を開く

「貴方、いつ中身が男だと獣人くんにカミングアウトするの？」

「――へ？」

…え、いや。ちょっと…待てよ？いや、今のなんつった？

「情報を集めれば分かるわよ。身体の変質があなた達に与えられたチートなんでしょ？獣人くんが人から獣人になったと言っていた以上、あなたも姿を変えた可能性が高いのよ。で、その上で男のような言葉使いと、あまりにも女性の身体を知らなさすぎる貴女のリアクション…推測だったけど、正解みたいね」

「…はぁ」

もはや呆然とし過ぎて声が出ない。思考が追い付かない。だというのに、リーデスさんはとんでもない爆弾を落とす

「早く男としての認識捨てた方がいいわよ。貴女、獣人くんを男として意識してるもの」

…え？

いや、いやいやいや

それはねーよ

だっておっさんは、おっさんは父親みたいなもんで…？

……

……ないよ？

…おれ、ホモじゃないもん

……なんか、顔が熱いの…気のせい、だよな？

止まった思考で、ぱくぱくと口を動かす。リーデスさんは、そんな俺の姿にくすっ、と初めて見る優しい笑みを浮かべた

「顔、真っ赤よ？彼と手を繋ぎたい、彼に触れたい、彼の傍にいたい。そう思ったら、それは恋よ。覚えておきなさい」

女の恋は、情熱的よ？

得意気に笑うリーデスさんの言葉が、

なんだか、妙な熱を持って、胸に…響いた

15、魔女との別れ（後書き）

と、いうわけで次の行き先はエルフの森

あの転生者を出したい

クロイワルートの描写もいるかな?典型的なハーレム主人公ものだけど

おっさん視点は2人の関係が明確に変化してからいれます

…さて

熟女かわいいよ熟女

今回のテンプレ

↓恋のステップＡＢＣ

…皆さんお休みなさいノシ

16、道中にて（前書き）

…いや、もう、なんか、さ

時村さまがやってくれやがりましたよ

悶えて死ぬわ

16、道中にて

空がゆっくりとオレンジ色に染まっていく。ヴァンフォーレを出て、もう3日。エルフの森に向かう前にレベル上げをしよう、と相談し、ヴァンフォーレが程近いダンジョン…「夜の帳」に向かっている最中だ

どうせなら向かうまでの道中でもレベル上げしたいし、あえておっさんに乗って移動、という時間短縮は却下。モンスターの出る森を突っ切り、ややゆっくりとしたペースでダンジョンへ向かって歩いていく

目の前を歩くおっさんの背中を見つめる。ゆらゆらと機嫌良さそうに揺れる尻尾を鷲掴みにしたい衝動に刈られる――けど、別におっさんに触れたい、なんて思わない

振り返ったおっさんが、首を傾げながら「どうした?」と聞いてくる。それに「なんでもないよー」と笑顔で返す

おっさんは妙な顔で、「…まぁ、言いたくなったら言えよ」と困ったように言い、俺の頬を擦る。「んに…」と自然と声が漏れた

「泥ついてるぞ」

と苦笑いするおっさん。おっさんの指先が触れた頬。…今までは何とも思わなかったのに、妙に気恥ずかしい

…一緒にいたい、とは思う。でも…恋とか、そういうんじゃない…はず。だって、おっさんは男で…俺も、男、だったから

「ありがと」

「おう。…ん？妙に熱いな。熱でもあんのか？」

ふにふにと俺の頬を揉むおっさん。…おっさんは俺のことどう思ってるんだ？手のかかるガキ？それともただの子供？女として意識しているのか？

「んにゃ、恥ずかしいだけ」

――仮に、仮に、だ

おっさんが俺を「女」としてみているなら…俺は、どうする？

「あん？…あー、わりぃ」

ポリポリと頬を掻きながら、気まずそうに手を離すおっさん。…少しの沈黙。

「…この辺にテント張っか？もうすぐ日が沈むしな」

「そう、だね。夜の方がモンスター強いし、小さいモンスター見えなくなるもんね」

この世界の月にはなんか特別な力があるらしく、昼間なら簡単に倒せるモンスターも、月の光で強化されて手強くなる、なんてザラだ。それに強力なモンスターは夜行性が多いから、日が沈んだら無謀な進軍はしない、というのが鉄則である

…3回目、か。なんつーか…このモヤモヤした感じでおっさんと一緒に寝るの

ヴァンフォーレで魔法を学ぶ前は、交代に仮眠をとりながらどちらかが起きて魔物避けの香を焚き火にくべなきゃいけなかったから、1つのテントに2人で寝る、なんてことはなかった。けど、今はもう俺が魔法で朝まで保つ結界を張れるのだ。わざわざ割高な魔物避けを買う必要もない、と思ったのだが…

夜、2人だけになったテント内。手を伸ばせば届く位置におっさんがいて、遠くからは獣や虫の声が、すぐ近くからはおっさんの寝息が…それだけしか聞こえない暗い空間。なんだかモヤモヤとした気分のせいで、眠れない。ついついおっさんの寝顔を眺めている自分に気付いて、自己嫌悪しながらもふて寝。翌日、俺より早く起きたおっさんに起こされ、昨日、寝顔を眺めていたのがバレてないかヒヤヒヤする…そんな妙な緊張を孕んだ時間を、今日も味会わなきゃいけないのだ

＞i25538―3254＜

思わず憂鬱でため息を吐いたら、「大丈夫か…？」と訝しげな表情で俺の顔を覗き込むおっさん。

それにドキリとしつつ、あはは、と誤魔化し笑いを浮かべ、「燃やすもん探してくるよ」と森の中に入ってく。後ろから視線を感じたけど、無視した

…リーデスさんが変なこと言うから、妙に意識してしまって困る

…仮に、あくまで仮に、だ。もしも、の状況だが…おっさんが、そ

の…俺に、性的な意味で襲いかかってきたら、俺は、どうする？

…拒む。嫌だって言う。俺は、男で、おっさんも男だ。男同士は、恋愛対象にならない。…ホシちゃんみたいなのは別にしても、俺は中身は普通に男なんだ

だったら俺は、女を恋愛対象に選ぶのか？と聞かれると…返答に困る

リーデスさんの屋敷にいたころ、やたらと俺を構い倒したカリオラ。最初の方こそその柔らかい身体の感触に、不思議と気分が高揚したものだが…興奮は、最初から無かった。それどころか、一緒にお風呂に入っても全く性的な興奮がない。…カリオラは凄く綺麗な女性だ。胸は大きいのに腰は細く、お尻は柔らかそうな曲線を描いている。肌は驚くほど白いし、身体の各所にある深紅の鱗も、まるでアクセサリーのようで…芸術品のような美しさがあった。…だが、そんな魅力溢れる肢体を前にしても、男の時のような興奮はまったく無かった。そう、あえて例えるなら…鍛えに鍛え上げたアスリートの身体を見たような、妙な感動しか出てこなかったのだ

…多分、身体が女である以上、いくら精神的に高揚しても興奮物質が出ないんだろう。必然的に、俺は、女性を恋愛対象に…性の対象に見ることが出来ない

…男でも、女でも無いどっちつかず。

それが、今の俺だ

男性意識を捨てろ、とリーデスさんは言っていた。そりゃあ、そうだろう。身体を精神に合わせて作り替えるよりは、精神を身体に合わせて作り替えた方が余程楽な筈だ

でも、出来ない。…男と、そういう関係になるなんて…我慢出来ない

最初のダンジョンを思い出す。性欲に濁った瞳。無遠慮な、足先から脳天までを舐めるように這い回る視線。実際に襲いかかってきた馬鹿な少年。…自意識過剰、と言ってしまえばそうかもしれない。だが、それでも…恐かったのだ。視線が、笑みが、…あ。

俺…、今まで気付いてなかった。無意識だったけど…

「…「男」が、恐いんだ…」

俺が、自分でも分かるくらいに心を許せたのは、最初はそもそも「人間」ですらなかったおっさん。男を全く感じさせないオカマのホシちゃん。リーデスさんにカリオラ。…そしてやや微妙だが、ガンギルさん。…これだけだ。俺に好意的に接してくれたアベすらも、俺は恐かった

自分が今まで男だったから、余計に男が恐い。そして、自分が男であることを捨ててしまったら…「男」に、身体を開かなければならない気がして…凄く、嫌だ。恐い

「…ぅ、うぅ～…」

じんわりと浮かんできた涙を押さえる。もう泣かないって決めたんだ。想像だけで泣いてしまうなんて笑えもしない

必死で涙を堪えながら枯れ枝を拾っていく。考え事しながらも身体は動いていたらしく、片手じゃ抱えきれない量の枯れ枝が手に収まっていた

「よっ、と…」

両手で枯れ枝を抱えて来た道を戻る。藪を抜けてみれば、呆れ顔のおっさんが、タバコをくわえながら手近な石に座り込んでいた。おっさんは俺の姿を確認すると、タバコの火を消し、パタパタと煙を散らす

「え、と？どうしたんだ？」

「…どっかの誰かさんがテントも道具も置かずに行っちまったんでな。目印に残ってた」

「…ぁ」

道具はほとんどインベントリにしまってあるのだ。そりゃあおっさんも手持ちぶさたになるか…。しっかしボーッとしすぎだな、俺。ちょっとどうにかしないとなぁ…

内心で溜め息を吐きながら謝り、枯れ枝を置いてテントやサバイバル用品を取り出していく。おっさんはテントを受けとると、それを組み立てながら…チラッ、と俺を見た

「…なぁ、なんか悩み事でもあんのか？」

ドキリ、と心臓が高鳴る。思わず手に持っていたフライパンを落とし、ガシャンッ！と嫌な音を立ててしまう。おっさんは「図星か…」と呟き、

「…これでもよぉ、俺ぁお前のこと相方だと思ってんだ。それにお

前よか長く生きてる。1人で悩むより、相談してみたらどうだ？ん？」

にぃっ、と気持ちのいい笑みを浮かべて聞いてくるおっさん。…相談、相談。か…

「…あの、さ」

なんて聞けば良いのだろう。寝不足の頭を必死で回転させる。遠回りに聞けばいいんだ。…でも、何を聞けばいいんだ？

A。「…俺がホモでおっさんのこと意識してるらしいんだがどうしよう？」

いやいやいや違うだろう。却下。そもそも身体は女なんだからおっさんが「はぁっ？」ってなる

B。「男が恐いです」

だからなんだと。

それにおっさんも男なんだ。おっさんが変な気を回して「男が恐いなら俺も恐いか。んじゃ別れよう」みたいなこと言われるのは嫌だ

C、「リーデスさんにおっさんのことを意識してるって言われたら、本当に意識してて困る」

…遠回りに、告白すんな

回転の鈍い頭をプルプル振って意識を戻す。…ああ、そうだ。ぶっちゃけ、これ聞けば一発じゃん。湯だった思考が結論を出す

「おっさん、俺のことどう思ってる？」

「…は？」

少なくとも嫌われてはいないと思う。だったら、どんな感情を抱かれているか、だ。もし親が子にむけるような感情なら俺が…そう、とち狂っておっさんに恋してても、おっさんは拒むだろう。友情だったとしたら、それでいい。そのまま現状維持だ

…でも、もし…

もし、おっさんが俺に…その、恋人へ向けるような恋愛感情を抱いてたら…

俺…、どうしたいんだろう？

自分の思考が分からない。これじゃまるで、俺は、おっさんに恋愛感情を向けてほしいみたいじゃないか

おっさんなんか、乱暴だし、すぐ手が出るし、口煩いし、妙なところ子供だし、酔っ払うと甘えん坊だし、実はおっぱい星人だし、だらしないし、部屋汚いし、身だしなみ整えないし、センス無い。

おおよそ男が…男である「俺」が、おっさんに恋する要素なんか皆無なのに…

なんで、こんなに…おっさんの返事が、聞きたいのに、聞きたくないんだろう

顔が妙に熱い。「んー…」と顎を撫で擦って考え込むおっさん。ドキドキと鼓動する心臓。はやく、はやく返事をしてくれ…！と思うのに、聞きたくない、言わないで…！とも思う。本当に、自分の心が信じられない

「そうだなぁ…」

「…っ」

中空をさ迷っていた視線が、俺に戻る。きっ！と睨み付けてやれば、そっと視線を外し、そっぽ向いたままのおっさんの口が…動く

「…ペット、か？」

……はぁ～…

なんか、一気に冷静になった

「こう、ちっこいし、撫でくり回したりいじめたくなる感じだな。嫌いじゃねーぞ？なんだ？俺に嫌われたとでも思ったのか？」

へらへら笑いながら言うおっさん。…なんか、凄い疲れた。あと、おっさんがモテない理由がわかった。うん、こんなの意識してるとかねーな。普通におっさんは仲間だ仲間。男同士の友情でいーじゃん

「…まぁ、そんな感じ。まぁ、嫌われてなくて良かったよ。前にも言ったけど俺は、おっさんのこと好きだぜ。例えどんなに残念でも」

「…なんか照れるな。っつか、残念ってどういうことだ？」

「べーつーにーっ！なんでもねぇよ！それより早くテント張る！直ぐ飯作るから！」

怒鳴り付けおっさんに背を向けて道具と材料を取り出す。あーもー全部リーデスさんの策略な気がしてきた。アレだ、リーデスさんがエルフと獣人のハーフの子供が出来るのか知りたくて俺たちくっ付けようとしてる、っていわれたら納得出来るぞ

なんてことを、プリプリ怒りながら考えていた俺は、

おっさんが、ほっ…と安堵したように溜め息を吐きながら、額の冷や汗を拭っている、なんて気が付かないでいた

16、道中にて（後書き）

おまけ
レティ&おっさん、出発後

「…作りすぎた」

3人分の料理を、困ったように見詰めるリーデスさんの姿があったとか

「ママー、あ、やっぱり作りすぎてた。ほら、親父、愛しのママの手作りご飯よ」

「おぅ！なんか最近リーちゃんが忙しくて久々だなぁ！家追い出されるしよぉ！」

「…ロリコンのガンギルが悪いのよ。あたしは悪くないわ」

「時々離れた方が倦怠期にならねぇって聞くしな！うん、美味い！」

「あ、バカ親父！それ私のオカズっ！」

「…ありがとうね、2人とも」

4ヶ月振りの家族の団欒だったとかなんとか…

ニヤニヤ要素もイチャイチャ要素も飽和状態…

やってくれたな時村さん…っ！

17、スライム（？）

不定形モンスターや夜行性の獣、巨大な蝙蝠や、邪神ダンジョンで見たような「ゴブリン」や「コボルト」などが出現するダンジョン、「夜の帳」

ボスモンスターは月の魔力で身体を強化することが出来るBランクの狼型モンスター「ルナティックウルフ」。動きこそ早いが噛み付く、引っ掻く、体当たりしかできない獣を、魔法障壁で受け止め、おっさんが組み付いて首の骨を砕くことで撃破

終始あっさりと攻略完了。モンスターは全部おっさんより身体能力に劣り、魔法耐性の無いものばかりで、俺は後方から魔法撃ったり矢を撃ったりしているだけであっさりと終わる。例え後ろから奇襲をかけようとするモンスターがいても、「索敵」スキルを持つ俺にはそれが見えてるし、いざとなれば広域攻撃魔法を撃てば囲まれても普通に生き残れる。難点を言えば、魔法の威力にたいしてモンスターの身体が脆すぎて、録な素材が回収できないことくらいだったな

他にもダンジョン内に巨大な河が通っていて、それを自然の木が勝手に橋のように渡り、飛島のように足場が点在する「水森」にも行った

魚系のモンスターや、水場を好んで生息する獣型モンスターが多く存在するダンジョンで、ボスモンスターは１０ｍはある巨大な鮭…

「キングサーモン」

おっさんが牽制して距離を取り、雷の魔法で焼き続ける戦法でクリア。水の中に引き込まれたらアウトだったろうけど、そも殆ど近付

けさせなかったから問題ない。美味しかった。卵が俺の顔くらいあってびっくり。流石にそれを食べる気にはならなかったので、いくつか売却用に確保して川に流した。多分、美味しく頂かれてると思う

少しずつレベルを上げながら、エルフの森を目指す。徒歩で移動し続けもう１０日。街に寄らないので世情がどうなっているのか分からないのがちょっと心配だった

と、いうわけで、いまいち信憑性がない手書きっぽい地図と、あまり馬車が通っていないらしい、荒れかけた街道を頼りに最寄りの村へ向かう

名前はディグルドの村。農業や畜産が盛んで、特産品は特になし。商人や傭兵のの補給用の村って感じらしい。まぁ、世情を知るために寄るだけだし、そこまで期待することはないか

「ちょっと待てよ…。んな急ぐなって…」

ふぁああ、と欠伸しながらめんどくさそうに頭を掻くおっさん。その姿にはぁ、と大きな溜め息を吐いてみせ、皮肉げに笑いながら、自分の首を叩いてみせる

「ペットより先に飼い主がバテてどうするんですかー？」

「…だぁっ！悪かったって何度も言ってんだろ！大体あれは言葉のあやだっつの！」

うがーっ！と噴火するおっさんにくすくす笑う。首に嵌まったアベ謹製の革の首輪。１ヶ月前におっさんに「ペット」呼ばわりされてから、すぐに付け始めたものだ

別にそこまで怒ってるわけじゃないけど、「ペット」呼ばわりはさすがにかちんときた。どっちかっつーと獣っぽいおっさんの方がペットだと思うんだ

だからちょっとからかってやろうと思って、奴隷のフリしてたころに使ってた首輪して、寝起きのおっさんに「おはようにゃん」とか言ってみたら、面白いくらいに動揺するおっさんに爆笑しかけた。だから「俺はまだ不機嫌だぞー」というのをアピールするためにも、首輪を付けっぱなしにしているわけだ

「なんでしたら敬語で話しましょうか？わたくし、おっさんのペットですものーホホホ」

「…お前そんなに性格悪かったか…？ったく、誰に似たんだか」

「おっさんが躾したんじゃねーの？だってペットだもの」

「女ってめんどくせぇーっ！」

頭を抱えて叫ぶおっさんにけらけら笑う。身体は女だもーん、ちょっとくらい可愛いもんじゃん。…あれ？俺、開き直ってる？…ま、いいか。無駄に考えこむとどんどんドツボにハマるし。特に恋愛ごとと俺の精神状態は考えれば考えるほど時間の無駄になる気がする

「…ところでよ」

「ん？」

首を傾げながら振り返る。頭を抱えていたおっさんが、地面にしゃ

がみこみながらじっと俺の方を見つめるおっさん

「…その足下のはなんか新しい魔法か？」

「へ？」

言われて下を見てみれば、プルプルと震える黄色い水の塊。…なんだこれ？サイズは手のひら大で、真ん中に丸い小さなピンクの玉が浮いている

「…スライムに似てる、かな？」

夜の帳で襲ってきたモンスターはもっと質量があったし、スライムのくせに目とか牙とかがあって気持ち悪かった。想像してほしい。プルプルと震える、ローションのようにどろどろした液体の中に二つ、人間のそれと変わらない血走った眼球がぷかぷかと浮かび、不揃いの牙がその中を不規則に動き回っている姿を。しかもこっちに気付いた途端、眼球がぐりんぐりんと元気よく動きだし、牙がびしっ！と円形に並ぶのだ。そのままにゅるにゅると蠢きながら、牙をぐるぐる回転させて迫ってくるのだ。…凄くキモいぞ！？マジで！

だが、これは違う。プルプルと震えるボディ。中のピンクの玉は慌てたように忙しなく動き回り、逃げ出そうかどうか迷っているようだ。…な、なんだろ…突っつきたい。サイズ小さいし、大丈夫じゃないかな…？でも多分モンスターだし…。うぁあ…なんかすっごいうずうずする！

「な、なんだろコレ…。ちょっとかわいい…」

「待て待て。危険かもしんねーんだから迂闊に触んな」

手を伸ばしかけるも、おっさんに止められる。「えー…」と不満をあらわにおっさんを見上げ『…チッ』…ちょっと待て

「…」「…」

無言で顔を見合わせる。やはり無言でその場から数歩離れる俺。黄色いスライム（？）はプルプルと震えながら少しだけ俺に近寄ってくる。さっきまでならかわいいと思ったかもしれないが…うん

「…ルーカス・ウルガス・ティアレスカ。雷掌」

魔力を電撃に変換。バチバチと放電する右手をそっとスライムに伸ばす。慌てたようにプルプルと震えながら距離を取るスライム

…うん、黒

「…一気に焼く。おっさんは離れて」

「おう」

『わーっ！待ったってーなほんまに！ボ、ボク悪いスライムとちゃうよ！ちょっとオチャメなだけやってん！ひっさびさに可愛い女の子見てふらふら～っと近づいてしもただけやねんて！』

プルプルと震えていたスライムの質量が一気に増える。人間の子供くらいのサイズの人型。心臓にあたる部分にピンクの玉がくるくると回っている。かろうじて人型、と分かる程度の目も鼻も口もない

…デッサン人形のような形だったが、正直キモい

「悪いスライムも糞も…モンスターだろうが…」

「人の言葉を理解するモンスター…いるんだね。じゃあ、焼くわ」

雷掌に魔力を注ぎ込んで強大な電撃を作る。触れただけで大型動物も黒こげになるような高圧電流。それを見た（？）スライムがずざざっ！と距離を取った

『おおお！？可愛い顔してデンジャラスっ！？ちくしょー！ロリコンのおっさんがおるなぁなんて親近感で近付いたんがあかんかったんかー！？』

器用に頭を抱えてごろんごろん草地を転がるスライム（人）。あーあーあー…千切れた草や泥や土でどんどん濁って……ない？…草も土も溶けてる！？馬鹿みたいだけど凶悪モンスターじゃねぇか！触んなくて良かった！

「だ、だれがロリコンだこらっ！？ぶん殴るぞテメェ！」

『へっへーんやれるもんならやってみい！こないな可愛い娘をペット…ペットやてぇ！？うらやまけしからん！ベッドん中で可愛がるんか！！夜はやらしく泣かせるんか！？羨ましいわアホゥ！ボクも混ぜてください！ほんまにお願いしますぅっ！』

と、土下座を通り越してベチャリと地面に瞑れて見せるスライム。じゅうっ…と一瞬だけ地面が焼ける音がした

うわぁ、と思いつつ口と鼻に手を当てる。異臭が凄い。おっさんは大丈夫なのかな？と思って視線を向ければ…うわぁ…

「…ガキ、こいつ殺せ。で、二度とあのネタやんな…。こういう馬鹿が寄ってくる…」

怒髪天、とはちょっと違うか。ぴんっ、と真っ直ぐに立った尻尾の毛が、全部逆立ってる。爪も長く伸びてて、完全に怒ってる。牙を剥き出しにしたおっさんの形相に、流石に恐いらしいスライムがまた人型になる

『…や、ややなぁおにぃさん。ちょっとした冗談やないですかぁ、そないに怒らんていてよもぉーこのっこのっ。お二人のラッビュラッビュライフは邪魔しませんから、どうにか見逃してくださいよぉ？』

語尾を上げてどうにかご機嫌取りしようとするスライム。だが、おっさんは止まらない牙と爪を長く伸ばしながら、酷く緩慢な動作でスライムに近付いていく

『くぅ…スピードがたらんて逃げられへん自分の身体がうらめしい…！けどここでこの身体を破壊されるわけにはいかんねん…！あいつを助けたらなあかんねや…！ってわけで後生やから見逃してつかーさい！ほんま急いどるんです！』

「急いでる奴がわざわざ俺をおちょくってく訳ねぇだろうがぁー！」

『あーんごもっともー！？』

襲いかかるおっさん。ろくに逃げもせずその攻撃を受けようとするスライム。…っつか、いつものおっさんなら普通気付くよなー？とか首を傾げながら、おっさんの尻尾を鷲掴みにした

「はヴんっ！？」

襲いかかった勢いで尻尾を引き延ばされたおっさん。びぐんっ！と一瞬痙攣して、尻尾の付け根を押さえながらへたりこむ。…そして、涙目で見上げてきた

「し、し、しっぽは…しっぽは…だめだろ…っ！！おまえ…しっぽは…だめだろ…っ！？」

「わ、悪かったって…でも、落ち着いてよく見てみろって。触ってたら大変なことになってたよ？」

と指差す先は、スライム（人型）の股関の辺りから広がる黄色い体液…ではなく、それによって溶けてる地面。『ち、ちびってもうた…』とか言っているスライム。いや、ちびるとかいうレベルじゃないよな、それ。ちょっとした水溜まりになってんじゃん。そしてちょっと体積減ったなスライム

「…サンキューな。だがよ…つぎから、言葉でとめてくれ…。いや、マジで。切実に」

「…ごめん。気を付ける」

大の大人がマジ泣き寸前だった。よくマジ泣きする俺が言うことじゃねーけど

『た、助かった…。ありがとぉ美少女っ！お礼に総シースルー素材で出来た水の衣（黄色ｖｅｒ）をプレゼントっ！ってかボクを着てくださ…あかんあかん。ほんまにアイツ助けにいかなあかんねんやった』

「「…アイツ？」」

なんか訳有りっぽかった。ちょっと嫌な予感。本当ならこんなの無視して村に向かうか、とっとと退治しちゃうのがいいんだろうけど…。なんか、妙にこいつ人間臭いんだよなぁ…関西弁だし。…ってか、お土産に持ってたらリーデスさんが喜びそう。「…喋る、スライムですって？…興味深いわね」みたいな感じで

『せや！俺の親友やねん！…なぁ！？いきなり不躾でごめんやねんけど、ボクを運んでくれへんか！？この先にある村に行きたいねん！』

この先に…ってぇとディグルドの村？なんでスライムがわざわざ？親友ってのもスライムなのかなぁ…？にしても親友を助けるためわざわざに水場がない所に向かうスライム、ねぇ。本来スライムは体の９９％が水で、常に水分を補給しないとあっという間に干からびてしまうそうだ。そんな欠点を乗り越えてまで向かおうとするとは…凄い根性だな

どうする？

と目で問い掛ければ、おっさんはボリボリと頭を掻き、「…見捨てたら寝覚めが悪い、か」と呟く。…どうも助けるっぽい

「…仕方なく、だ。勘違いすんなよ。どうせディグルドの村に行く途中だ。…おれ、入れや。あと、事情くらいは確認させろ」

『おおきに！この借りは親友が返すわ！』

おっさんが差し出したからの水袋に喜びながら入るスライム。じゅっと溶ける水袋

「溶かすなよ！」

『しゃあないやん。テンション上がると溶かしてまうねん』

「見捨てるか。行くぞガキ」

『あぁんイケず！イケメンは死ね！じゃなくてごめんなさいっ！噛みました！噛んだだけやから許してってへっ』

「よーし喧嘩だ」

…仲いいな、お前ら

漫才するおっさんとスライムに、突っ込みを入れるためにも

…ちょっと多目に魔力練っとくか

17、スライム（？）（後書き）

どんどん乙女化るレティ。どうしてこうなった？

そしてついに念願の人外転生キャラを出せたぜ！

ちなみに彼はフクトカスライムではありませぬ（笑）

今回のテンプレ

↓人外転生

↓過激突っ込み

↓無駄にハイテンションなオリ主

8、ヴァンフォーレに檸檬紅茶さまと七式さまの挿し絵追加！

ハゲ！トラ！バカップル！コンボメダルか！（ぺっ！）

皆もハゲトラバコンボにやられるといいよ！

PS

本格的感想板のユーモアクオリティに危機感を覚え始めた私

PS2

作者のアバラはヒビが入ったくらいで結構無事です

ご心配おかけしました

18、再会（前書き）

アバラにヒビが入ったんですがね？

ご飯食べても痛い

歩くだけでも痛い

ふて寝しても痛い

鎮痛剤飲むと眠い

…ＴＨＥ・八方塞がり！

泣くぞコラッ！ちきしょう！

18、再会

たぷん、たぷん、と氷で作った器に入れられた黄色いスライム…ユージローが揺れる。口が無いのにどうやって喋ってるのか気になって聞いてみたら、全身を揺らして空気を揺らしてるそうだ。無駄に器用な…

『これでも苦労してんねんで？相棒と一緒にちゃんと喋れるようなるまでン十年…お互いにマンツーマンでプルプルクネクネ…何回喧嘩になったか分からんわ…、おんどりゃキモいんじゃー！あぁんたに言われたく無いわぁー！みたいなな？まぁそれもえぇ思い出やねんけどな、かっこわらいかっことじ。知ってるで。こういうんが流行りやねんやろ？』

楽しそうに身体を揺らすユージローに俺もおっさんも呆れ顔だ。親友の話はどこにいったんだよ…

どうも彼もリーデスさんと同じ「転生主人公」の1人らしいのだ。１００年ほど前にただのスライムとして生まれた彼がここまで生き残るにはかなりの苦労があったらしい。親友というのもユージローと同じくモンスターに転生してしまった人で、同じ境遇ということもあり仲良くしていたそうだ

「…でも、それがなんで「助ける」なんて言葉に繋がるんだよ？なんか妙に物騒だぞ？」

両手で抱えた氷の器。その中のユージローに視線を落とせば、彼はしばらく考え込むように静かに身体を震わせ、

『…簡単に纏めるとやなぁ、そいつがもう…種族的にも人間的にも大の女好きやねん。いや、俺も女の子大好きやから人のこと言えへんけどな？女の子の色香にころっとやられて捕まってもうてんよ。あいつは種族的にレアなモンスターやから、このまま放っといたら悪魔のような研究者に切り刻まれるか、はたまた毒で弱らされて死ぬまで見せ物んなるかや…。親友がそないな目に合うなんて、我慢でけへん』

真剣な声音でプルプル震えるユージロー。…いいとこあんじゃん。ただの馬鹿じゃないんだな

と感心させらたのも束の間、

『あとでっかい理由として自分だけ女の子にちやほやされるなんて許せへん！あんの腐れマーラがぁ…！！なんで誘ってくれへんかったん！？いつか女の子の身体に2人で巻き付いてムッハーしよて約束したやないかー！！』

ガーッ！と憤慨するスライム。ピンクの核から振動が出ているのか、内側から外に向けて波が伝わっていく。あまり見れない光景だけに、ちょっと興味深い。…とはいえ、

「おっさん、捨てて良い？」

「許可」

変態を抱えていたくない、というのもまた事実なわけで

『じょじょじょ冗談やって！？冗談冗談！真剣な空気に耐えきれへんかっただけ！決して建前→本音の順でしゃべったわけやないねん

信じてちっぱい！じゃなかったレティたん！』

「どっせーい」

氷の器ごとぶん投げた。『あーんご無体なぁーん！』とか楽しそうに叫びながら飛んでいくユージロー。はぁ…調子狂うなぁ…っつか、疲れる

とりあえずぶん投げたユージローを回収。落ちたときにべちゃっと潰れたせいかまた体積の減ったユージローに水をかけながら、少しずつ見えてきた村へと視線を向ける

「…で、その親友があの村にいる、と。それは確かなの？」

『…あ、ああ。そら間違いない。あいつが連れてかれる寸前に俺の身体の一部をくっつけてん。文字通り自分の身体やからね、どんなに離れてても分かるわ。けどいかんせん、１ｍｌも体積ないからなかぁ…なんもでけへんの。喋ることも出来んし、周りも見えへん。本当に発信機以外の役には立たんね、水でもかけてくれたら違うねんけど…』

「成る程、な…。ま、まずはどんな奴らがその親友とやらを連れていったか調べることから、だな」

そんな会話をしている内に、木の柵で囲まれた小さな村が見えてくる。見張り台に座っていた青年が手を振ってくるので、こちらも大きく振り返した

「…て…た…っ！」

青年が何か叫んでいるが、いかんせんまだ距離があって聞こえない

「…なんて言ってんのかな?」

「…よけて、うった?…うった?…わかんねぇな…。避けて、撃った、か?微妙にしか聞こえねぇ…」

とかおっさんと会話した直後、上から聞こえる風切り音

「わっ」「おっ?」

真上から降ってきた矢の束。俺に刺さりそうだった矢は常時展開している魔力障壁に阻まれ、おっさんは幅広のランスの影に隠れる事で防ぐ。まぁ、いくつかかすって服に血を滲ませたものの、致命傷は1つもない。この辺は対飛び道具の戦いも仕込んでくれたカリオラに感謝だな。でも、手に持っていたユージロー入りの器は落としてしまった。

『あああん!なんか蔑ろにされるんが気持ちよぉなってきた…』

とか言いながら中身をぶちまけ、更に体積を減らすユージロー。…うーん、素直に謝る気にならないのはなんでだ?

「ご、ごめん、大丈夫?」

『無問題や。やから…おねがい、罵ってくれへん?』

「こいつキメェ…」

『おっさんの方やないねん!ちっぱ…レティたんに罵って欲しいの!さぁ!さぁさぁハリーハリー!』

「いいから器に戻れよ…」

『あぁん放置プレイ…』ふざけながらもうぞうぞうしながら器に戻るユージロー。なんかなぁ…いくら前世が関西人って言っても、もうちょっとなんかあると思うんだが

『…え?俺、前世関西人ちゃうよ?生まれも育ちも岩手や』

「ならなんで関西弁っ!?」

『キャラ作りやね!』

…もっと真面目にやれ。いや、やってくれ…頼むから。マジで。おっさんに氷の器を押し付ける。ユージローが俺を呼ぶ声が聞こえたけど、無視!

「…ま、とりあえずとっとと行くか。事情も聞かなきゃなんねぇし」

おっさんの声に頷き、なんだか慌てた様子で見張り台から身ぶり手振りでこっちに指示をしてくる青年に手を振る。…回り込んで、違う入り口から入れ、ってことかな?

指示に従って他の入り口を探す。柵を頼りに数分も歩けば、弓を持った青年や中年男性が複数人待っていた。…この人たちが俺等を撃った人たちか?中にはおっさん…いや、おっさんの耳や尻尾を確認して、明確に嫌そうな…あるいは侮蔑の視線を向けてくる者もいる。…ヴァンフォーレではなかったから、獣人も差別対象だっていうのを忘れてた。おっさんがこういう目で見られるのは…正直辛い。おっさんが気にしてないみたいだから何も言えないけど、さ

「すまないっ！今、魔物の群れが進軍中だと勇者様に聞いていてな…。その斥候かと思ったんだ」

心底申し訳なさそうに頭を下げるおじさん。無精髭に革の鎧を付けた、いかにも歴戦の狩人、といった風情の男性だ。珍しく、獣人に対して悪感情を抱いていないらしい。…一応ステータスチェックしとくか

「魔物の群れに、勇者だ？どういうこった、説明してくれ」

「あ、ああ…」

おっさんが話を進めてる間におじさん…ややこしいな。狩人を見つめる。狩人は俺の方をちらちら見ながらやりにくそうにしていたが、無視

あ、出た

名前：スティング・ランド
称号：一家の大黒柱　ハンター
ＬＶ：２８
スキル：――「おい、話聞いてっか？」

「えっ！？」

やば、ステータスチェックに集中しすぎてまったく聞いてなかった。ごめん、聞いてなかった、と申し訳なく思いながら手を合わせる。

おっさんは仕方ねぇなぁ、とため息を吐きながら、

「すまねぇ、もっかい聞いてもいいか？」

「あ、ああ。構わないよ。…妹さん、じゃないよね？恋人かい？」

ドクン、と胸が高鳴る。思わず「違う！」と怒鳴りそうになったが、それより早く「どっからどう見たらそう見えんだよ…」とうんざりしたようなおっさんの声に冷静になる。…なんだろね、このモヤッとした感じ…

しかし狩人…スティングさんはそんな俺たちの反応に何か思うことがあったのか、くすりと笑い、「若いなぁ…」と髭を撫で付ける。…なんか気恥ずかしくなっておっさんの影に隠れ、視線を避ける

「えぇと、何の話だったか…。そう、魔物の群れか。勇者さまがこの街へ来る途中で襲われたらしい。何とか勇者さまは逃げ切ったそうなんだが、どうもこの村へと向かってるらしいんだ。それで村で自警団を作ってね、もし襲ってきても勇者さまたちが万全の体勢になるまで時間を稼ごうとしてるんだ。時間さえ稼げば、勇者さまたちがどうにかしてくれるそうなんだ」

気弱な笑みを浮かべるスティングさん。…勇者さま、ねぇ…。なんか胡散臭い、と思ってしまうのは俺がスレちまったからかなぁ？この世界、ファンタジーはファンタジーだけど、勇者とかそんなんが介入するようなタイプじゃないと思うんだよなぁ

首を傾げていると、おっさんが俺の意思を汲み取ってくれたらしい

「その勇者ってのは何者なんだ？偉く信用してるみてぇだが…ただ

の勇者を語ったぺてん師、って可能性もあるんだぜ？」

むしろその可能性の方が圧倒的に高いと思う。リーデスさんが言うには、『特殊な能力』を持っている人は、そういう詐欺が得意なんだそうだ。例えば俺みたいに「回復魔法」を使えるなら、神の奇跡で傷を治す～みたいなことを言えば、あっという間に新興宗教の教祖さまだ。それに転生主人公もトリップ主人公も『特殊能力』持ちが多いようだし…。よく言えば、現代知識。悪く言うなら悪徳商法の手口や詐欺の手段に詳しい現代人が、何にも知らない無垢な異世界の人を詐欺にかける、なんて朝飯前だそうだ

だが、スティングさんは朗らかに笑って「それは大丈夫だ」と、悪い考えを否定する

「昔流行った勇者さま詐欺だろ？大丈夫だよ、今回の勇者さまは他の村からの推薦状を持ってたし、何より有名な方だ。聞いたことないかい？【幽弦怪者／ユウゲンガイシャ】っていうパーティーだよ。この辺りの村でも人気のパーティーだ。村を襲うモンスターたちを倒し、有益な防御柵の作り方や、画期的な農耕を教えてくださるそうだ。おおよそ一介の冒険者の仕事とは言えないかもしれないが、彼等の言うことに間違いはないからな」

…なんとなく、なんとなく、なのだが

嫌な予感に、背筋にぞくりとした悪寒が走る。魔力の扱いを覚えてから、妙に勘が鋭くなった。所謂虫の知らせ、という奴だろうか。嫌なことが起こる前触れが、明確に感じ取れるようになった。その中でもこれは最上級の悪寒。例えるなら…時間を止めたリーデスさんが殲滅呪文を唱え終わった瞬間。対応を間違えたら即死、っていう状況が一番近い。足下から沸き上がるような恐怖におっさんの服の

裾を掴む

おっさんも野生の勘でやばそうな案件に首を突っ込んだことに気付いたのか、随分と苦い顔をしている

そんな俺たちを微笑ましいモノを見るような目で見ながら、

「ふふっ、大丈夫だよ。見た目には全然モンスター相手に大立ち回りするような人には見えないからさ。そんなに恐がる必要はない」

「…はぁ」

…なんか勘違いされてんなぁ。と苦笑い。以下にも優しいおじさん、といった笑顔で俺を見つめるスティングさんに、周囲の空気が弛緩する

「…何の騒ぎですか？」

――ぞく、り

声だけで背筋が凍る。「おぉ、勇者さま！」とスティングさんの目が輝く。

けれど、俺はそいつの出現に、今すぐ逃げ出したくなるほどの恐怖を覚える

そいつの視線が、おっさんを――俺を、捕らえる。一瞬呆気に取られたように見開かれる瞳。次いで…浮かべられる、極上の笑顔。人を腐らせる、作り物の、暖かみの一切かけた、ギラギラと怪しく輝く笑み

「お久しぶりです、レティーシア（回復魔法）さん」

――ササダ　ジロウ

洗脳スキルの使い手が、とても友好的に…話し掛けてきた

18、再会（後書き）

前話あとがき参照

8、ヴァンフォーレに

檸檬紅茶（国産レモン・ティー）さま

と

七式　さま

の

挿し絵を追加しました！

あの話だけで挿し絵三枚…俺はどんなリアクションすればいい？

今回のテンプレ

↓予期せぬ再会

↓悪役参上

↓友人救出作戦！

19、笹田　次郎（前書き）

ササダさんのディスられっぷりに全俺が泣いた

あれか、皆さんツンデレですか（違

予言する…

ササダさんを憎らしく思いつつも、苦渋に満ちた表情で「ぐっ…じょぶ…」と苦しそうに声を絞り出す

ササダさんをディスった皆にそんな未来を与えてやる！

19、笹田　次郎

「いやいやお久しぶりですねぇ。何だか前にお会いしたときより可愛らしい。女性の成長は早いと言いますが、正しくその通り。季節の移り変わりと共に美しく咲き誇る花のようだ。私のような中年から見ると、実に羨ましい限りです」

にこやかにお茶を啜るササダ。場所はディグルドの村の酒場。ササダと知り合いだと知られた途端、善意でスティングさんに案内されてしまったのだ。獣人であるおっさんは勿論、エルフの俺が下手に断ったらいらないトラブルの元になる

仕方なく、近付きすぎないよう気を付けながら付いてきたが…。チラチラとこちらに向けられる好奇の視線が鬱陶しい。酒場自体もそれほど綺麗なものじゃないし、目の前のササダから感じる嫌な空気のせいでどうにも気持ち悪い。辛うじて目の前に座ってられてるけど、今にも逃げ出したい気持ちでいっぱいだ

「どうかいたしましたか？ああ、ご安心を。ここの支払いは私が承りましょう。いつの間にか勇者、などと持て囃されてましてね。色々優遇して頂けているのですよ」

「…そいつぁ結構。けどわりぃな。会ったばかりの奴から施しを受けるほどにゃ困ってねぇよ」

言って、店員に定食と酒を注文するおっさん。店員はちらりとササダを見るが、ササダが頷いたのを見てから奥に引っ込んでいく

…やり辛い。既にここはササダのテリトリーだ。ササダに出会ってから一言も喋らないユージローもそうだが、居心地が悪くて仕方ない

ササダはにこやかな笑みを浮かべたまま、杯に注いだ紫色のジュースを飲む。…酒は飲まない、か。徹底してるなぁ。おっさんもマタタビ酒以外じゃ酔わないから問題ないっちゃないけど

「やれやれ、どうやら嫌われてしまったようですねぇ。若い娘さんに嫌われるのは中年の運命なんですかねぇ」

悲しそうに目を閉じるササダ。どうにもその仕草が道化染みているというか…。劇を見ているかのようなオーバーリアクション。こちらの反応をうかがっているかのような、気味の悪い態度

「…しかし、元気そうで良かったですよ。獣人の貴方…大路さん、でしたか？も迫害の対象ですし、何よりレティーシアさんは…」

とんとん、と耳を触って見せるササダ。…エルフだから、とでも言いたいのだろうか。エルフを捕まえたら云々、みたいなことはもう知っているみたいだな

「…おっさん、きもちわるい」

嘘じゃ、ない。ササダの視線が、纏う雰囲気が、そしてササダに無二の信頼を注ぐ村人が…とんでもなく、きもちわるい

おっさんはその言葉で俺の本意を悟ったのか、目で「すまん」と語り、ササダに頭を下げる

「わりぃな、笹田さん。相方がどうにも気分が悪いらしい。せっか

く招待してもらってすまねぇが、宿に行かせて貰うわ」

「…左様ですか。仕方ありませんね。女性の身体は大切に扱ってあげなければなりません」

真意の読み取れない笑顔を浮かべ、ササダは了承する。あっさりと退出を認めるササダにうすら寒いものを感じながら、席を立つ。…その頃になってようやく料理が来た。軽いサンドイッチと瓶入りのお酒だったので、そのまま受けとり、代金を支払うおっさん

「レティーシアさん」

…っ、おっさんが支払いをしている内に、ササダが…話し掛けてくる。ヘラヘラした薄い笑み。普通ならほとんど聞き取れない…けど、聴覚に優れたエルフなら聞き取れる。そんな程度の細い声音で、囁いてくる

「…何か困ったことがあったら、是非に。私たちはいつでも貴女たちの味方をしましょう。【幽弦怪者】は歓迎しますよ?…例え、エルフでも」

「…お気遣い、どーも」

遠回しな脅しなのか、それとも純粋な気遣いなのか…。こいつの行動がイマイチ分からない。ドイ少年やモンスターに変えられた主人公は洗脳してたのに、俺やこの世界の人たちには優しい…というか、凄く紳士的だ

「ガキ!行くぞ!」

「あ、うん！」

呼び掛けに従いおっさんの後を追う――っとやべっ、氷の器に入っているユージローを回収する。…あれ？体積減ってないか？

「それはなんですか？」

「…俺の魔法」

変わらない笑顔――リーデスさんのそれとは違い、張り付けたような薄っぺらい笑みに嫌な気分になりながら、ユージローをこぼさないようにおっさんの後を追う。背中に感じるじっとりとした視線に鳥肌が立つ

「おっさん」

「気付いてるよ。…この村全体が嫌な雰囲気だな…」

ひたすら注がれる好奇、あるいは嫌悪の視線。小さな子供もそれなりの年をいった男性も、ほとんどが俺に好奇、おっさんに嫌悪の視線を向けている。…凄く、やり辛い。少なくとも商品を売ってもらえない、みたいなことはないと思うけど…。この視線が常にそばにある、と思うと迂闊なこと出来そうにない

…仮にササダが俺達を洗脳しようとしても、ササダをボッコボコにして逃げる、なんて出来そうに無い。それくらい村人はササダを信用してるっぽいのだ。やったら捕まって俺は性奴隷、おっさんは剥製ルートが見えている

頭を悩ませながら宿屋に部屋を取る。リーデスさんから結構な報酬

を貰ったし、お金にはかなりの余裕がある。けど、節約して悪いことはないか。２人部屋のそこまで高くない部屋にチェックイン。あんまり使用する人がいないのか、スタトルよりは綺麗だが、代わりに随分と埃っぽい。前と同じようにインベントリを使って備品をきれいにしてから、ようやく一息

『ぷっはー…なんや肩凝るわぁ。肩無いねんけどな！にしてもおおきにな、２人とも。お陰さまでちぃーっとばかり厄介なことになっとるんが分かったわ』

「厄介なこと？」

一息吐いた途端に元気に喋り出すユージローに苦笑い。なんだか張り詰めていた空気が一気に弛緩した気がする。それに内心で感謝しながら問い掛ける

『うん、レティちゃんたちにも無関係やない…。っちゅうかむしろ、レティちゃんたちのが危ないから、聞いといて。…でもその前に程々に汚い水とモンスターの血とか肉とか欲しいねんけど、もらえへんかな？流石に体積減りすぎて不味いわ』

「あ、うん。ちょっと待って」

何度かぶちまけたせいか、随分小さくなったユージロー。器も氷だからどんどん溶けてるのに、ユージローが小さくなるから溢れる気配が無い。大きめの器を作ってユージローを移し変え、インベントリから取り出した魔物肉を入れていく

『あんがとー！…けど不味いなぁ、随分酸度が減ってもうた…。さっきまで王水くらいあったんに今は硫酸レベルや。早いとこ相棒と

合流せな…。じゃなかったわ、えぇと、ヤバイ話、やったな？』

なんだかぶつぶつ言っていたユージロー。無事魔物肉や濁った水で体積を増やし、元のサイズくらいになったからか、元気にプルプル震えている。正直粘性の液体が肉にくっついてじゅうじゅう言わせながら溶かし食ってるのは結構なショッキング映像だったけど、ユージローが元気になったならいっかな？

『まず、あの中年勇者やねんけど…多分、俺の親友を誘拐した奴の1人やと思う。あからさまに怪しいしな。こらフラグビンビンやで！だからさっき話しとる間にこっそり身体半分中性にして奴の靴裏とかにくっ付けといてん』

「へぇ…。やるじゃねぇか」

おっさんの称賛にユージローは『おおきに』とプルプル震え

『それなりの体積と核を向こうに置いてきたからな…。こっちには意識しかないねん。ほんまはレティちゃんたちにはお礼だけ言うてこっちの身体は破棄しよう、と思っての行動やったんやけど…正解やったわ。あの中年勇者、村の出入り禁止しよった。「人間に擬態して村に入ってくるモンスターもいるかもしれません。先刻の2人も怪しいですし、監視を怠らないように」、やて。つまり、逃げ場ないで？なんか知らんけどレティちゃんもトラさんも狙われてるん？』

…無言で頷く俺達。アチャー、と器用に伸ばした水の手でぴちゃっ、と自分の頭（？）を叩くユージロー

『…んー、まー、深くは聞かへん。今はあの中年勇者は村長の家で

パーティーメンバーと話しとるわ。…で、ビンゴや。俺の親友連れていきおったガキがおんねや。でもって、俺の身体も近くにあるのがわかんねん。だから俺の親友は近くにおるのは間違いないねんけど…近くにおるけど、どこにおるか分からん。どっかに隠されてるみたいなんやわ。これじゃどうしようもないねん』

「…袋のネズミってか？笑えねぇ…」

呆れ、というよりは諦め、だろうか。肩を竦めて大きく溜め息を吐くおっさん

「強行突破とか…。魔法を使えば、どうにか」

「ここはあいつのテリトリーだ。どんなに言い訳しても犯罪者になるのは避けられねぇ。忘れたのか？冒険者になったあと犯罪を犯すとどうなるか」

…称号が盗賊になって、全世界に散らばる冒険者ギルドが敵に回る。…あくまで穏便に逃げるしかない、のか

『…どーも逃がす気ないみたいやでぇ？どうやってレティちゃんと、おまけにトラさん捕まえるか相談して…うぇ？ちょ、マジかいな…ヤッベェ…マジキチや…』

「どうしたスライム。1人で悶えてねーで教えてくれ」

おっさんの促しに、ユージローはしばし考え込むように沈黙する。数分も沈黙し、そしてようやく話し出した

『…この村をモンスターに襲わせる気や』

「…っ、なる、ほどな。ガキ、あいつらのスキルは洗脳だったな？」

「え、あ、うん。間違いないよ。こっちもスキルで確認してる」

「そう、か…」と考え込むように沈黙するおっさん。…俺が、狙われてる？恐怖に身体が震えてきた。おっさんが黙ったまま俺の頭を撫でてくれるので、その暖かさに集中して恐怖を誤魔化す。…大丈夫、大丈夫だ

『…あいつらの仲間に『魔物使い』っちゅー風に呼ばれとる奴がおんねんな？どうもそいつが、どっか別の次元にモンスターなり女の子なりを監禁したりできる能力者みたいやの。いままさに、目の前で変な次元の裂け目みたいなんから女の子が数人出てきたわ。…ありゃ正気とちゃうな。まともな服着とらんかったし、何より目が虚ろやわ。ったく、胸糞悪い…』

「…そう、か」

…多分、だけど洗脳を解くだけなら「ディスペル」でどうにかなる。けど、まともに服を着てないってことは…事後、なんだろう。なんだか悲しくて、切なくて…怒りが沸いてくる。その上次のターゲットが俺？半ば予想はしていたけど、それでも胸に黒い感情が沸き上がる

「…ちっ」

おっさんも嫌そうに顔をしかめている

『多分、その向こうに俺の親友がおるんは間違い無いねん。…なぁ、

いきなりで悪いんやけど、組まへんか？』

「…なに？」

ユージローの提案に眉根にシワを寄せるおっさん。ユージローはさっきまでの陽気さが嘘のように、真面目な声音で喋る

『正直言うて、俺1人じゃ親友助けられへん。ギブアンドテイクや。あんたらは俺の親友を助ける、代わりに俺はあんたらを無事に脱出させ、後顧の憂いを断つ。…あいつらはきっとしつこいで？あんたらがあいつを殺すことは出来んでも、モンスターである俺があいつ殺すんは問題ないはずや』

…俺は、何も言えない。あっさりとササダを殺す、と発言するユージロー。頭では理解できる。ササダは危険だ。あっさりと人を洗脳する、という選択肢を選べる男を放置するのは、後々の不安要素になりかねない。でも、いくら今、彼がモンスターだからって、人間を殺すなんて…

「…いいだろう」

「おっさん！？」

咎める声に、おっさんは苦渋を滲ませた表情で答える

「…慣れろ。殺人がどうとか言える段階は、とっくに過ぎてんだよ。お前も――」

と、おっさんが何かを言おうとした瞬間

コンコン、とノックの音。こっちが何か言う前に、スティングさんや青年たちが部屋に雪崩れ込んでくる

「すまない、君達がモンスターだという情報が入った。…悪いが俺には見分けがつかん。勇者様たちに、会ってもらわなければならない」

あまりにも速すぎる事態の急変に、絶句するしかない俺と

「…ちっ、後手に回っちまったか」

『大丈夫や。約束は守る。関西人やからな』

即座に意識を切り替えられるおっさんたち

意識の違いは…あまりにも明白だった

１９、笹田　次郎（後書き）

それはそうと日刊人春止まってすんませんした

お知らせ←←

８、ヴァンフォーレの七式さんの挿し絵を張り替えました

１６、道中にてに時村さまから頂いた画像を張りました

挿し絵が結構溜まってきたので、「挿し絵まとめ」を作りました

以上

今回のテンプレ

↓種族差別

↓善意からトラブル

↓悪役無双

ちなみにササダたちの動きをチェックしてたのに後手に回ったのは、
ササダの指示じゃなく村人が自分たちの意思でおっさん&レティの
捕縛に乗り出したから

詳しくは次回

20、洗脳（前書き）

え、あ、うん。ごめんなさい

作者の書き方が悪くて皆を誤解させたようだ

ササダさんはナチュラルにゲスいよっ！

どんでん返しで実は好い人とか無いよ！

期待させてごめんね！

…でもゲスキャラじゃないと出来ない行動があるのさー…

20、洗脳

ろくな仕込みをする間もなく、スティングさんたちに連れられて街の中を歩く。案内しているスティングさんたちが武装していて、更に俺達に警戒しているからか、周囲から注がれる犯罪者を見るような侮蔑の視線がキツい

隣を歩くおっさんに目配せする。おっさんも苦い顔だ。ユージローを通してササダの動きは解っていたのに、あっさりと先手を取られた…とりあえず、やれることはやっておくか

「おっさん。…インベントリ：王者の指輪。ディスペルウォータ」

おっさんの指のサイズには到底合わない、細い指輪。…俺の指のサイズにアジャストされてるわけか。…でも、ないよりマシだな。指輪と黄緑色の液体が入った小瓶を渡す

「これは？」

周りに聞こえないよう、ぼそぼそと小さな声で返してくるおっさん。周りを囲む青年団は怪訝そうな顔をしているが、特に文句は言われなかった

「状態異常を無効化できる装備品…多分、洗脳は防げる。…男性専用装備だから、俺は使えないけどさ」

対のアイテムに女帝の腕輪ってのがあって、それが女性用のアイテ

ムなんだけど…。無いもんは無いんだから仕方ない

「…お前はどうすんだよ」

「【ディスペル】があるから、不意をつかれなければ即解除出来る…けど、一応さっきの小瓶も渡しとく。【ディスペル】の魔法が封じられてるから、飲ませるか頭にかけるかしてくれれば全状態異常を治癒出来る…と、思う」

「…頼りねぇなぁ」

「仕方ないじゃん…」

呆れ顔のおっさんに唇を尖らせる。俺だって俺なりに出来ること精一杯やってるのに…

「いや、申し訳ありません。別に貴殿方をモンスターだと疑っている訳ではないんですよ。ただ、やはり勇者さまが気になさっているようですし…確認して損はないでしょう？」

朗らかに笑うスティングさんに苦笑いで「大丈夫です…」と返し、どうにもやりにくい空気に辟易する。そこからは無言。ガラスの瓶に入ってもらい、俺の腰にベルトでくくりつけたユージローが時々たぷんたぷん揺れる音が響く

村の端、一番大きな屋敷に付いてようやく、スティングさんの歩みが止まった。「いま、勇者さまを呼んできます」と屋敷に入っていくスティングさん。リーダー格のスティングさんがいなくなったせいか、途端に空気が緩む。…そして見るからにチャラそうな男が話しかけてきた

「君さぁ、なんで獣人なんかと旅してんの？」

語尾を上げた調子の良い声に、イラッとする。思いっきり冷めた視線を向けながら、

「お前みたいなのより頼りになるから」

とぶった切る。僅かに顔をしかめるチャラ男と、そんなチャラ男を笑う他の男たち

「…はっ！獣人なんか頭空っぽで戦うことしか能がねぇや…つ…」

何か戯れ言をほざこうとしたチャラ男の股下を水の槍が掠める。無詠唱で放ったそれは僅かに布地を裂き、どすっ！と地面を抉った

こつんっ、と頭に軽い衝撃。振り向けば、困った顔のおっさん

「一般人に何してんだよ」

「だっておっさんのことバカにするから…」

「へぇへぇ、その気持ちは嬉しいが、すぐに弓だ魔法だで相手を脅すな」

…わかった。と頷く。そこでようやく我に返ったチャラ男が、「ま、魔法使い…！？なんでこんな所に…」と驚愕をあらわにする

基本的にこの世界の魔法使いは研究者だから、冒険者のように旅に出たりはせず、一ヶ所拠点を作って動かない。たまにレアなモンス

ターの素材を狩るためにダンジョンに潜ることはあっても、俺のように「魔法を使える冒険者」というのは滅多にいないそうだ

…けど、しまったなぁ。伏せ札を1枚使っちまった。あまりいないからこそ、ここぞというときに使えばアドバンテージになるのに…。くそ、この頭に血が上りやすい癖、どうにかしなくちゃなぁ…

内心で反省する。昔は何とも思わなかったけど、リーデスさんの教えを受けると切り札を何枚も作っておく重要性が身に染みる。というか、切り札を何枚か作り続けなきゃ死んじゃいかねなかったからなぁ…。まさに人生観が変わったな、うん

とにかく、慌てるチャラ男を放置してそっぽ向く。弓矢や槍を向けられてるけど、ほとんど腰が引けてるし、絶対的強者なリーデスさんや命懸けで襲ってくるモンスターと戦ってきた俺から見れば、恐怖は感じない。…なのに見た目そこまで強そうじゃないササダは恐いんだよなぁ。と現実逃避していると、スティングさんが戻ってきたなんだか申し訳なさそうに頭を下げながら

「す、すいません…。別に勇者さまは貴殿方を呼んだわけではなかったそうなんです。一応注意しておけ、と仰っただけのようで…。でも、わざわざ来ていただいたから謝罪も兼ねて夕食に招いてくださるそうですよ?」

…来やがった…。と顔をしかめる。断る…ことは出来なさそうだな。下手に断ると、「いや羨ましい。勇者さまと食事を共に出来るなんて…」と満面の笑顔で話すスティングさんに、いらん不信感を持たれてしまう。…それに、俺はあんまり賛成できないけど、本当にササダを殺すんだったら、ササダに近寄れるチャンスを逃す手はない

幸い夕食までには時間がある。仕込みをするなり作戦を立てるなりする時間はあるはずだ。案の定、おっさんは短く沈黙する。考え事をしてる時特有の、くねくねと揺れる尻尾がおっさんの内心を語る

「…分かった。なら宿に…」

「村長にも相談したところ、貴殿方も村長宅に滞在して構わないそうですよ？矢を撃ってしまったお詫びもかねているので、ご心配なく。荷物の運び込みや部屋の引き払いは私に任せて、どうぞ村長に頼ってください。では。行くぞぉお前らぁ！」

でかい声を上げて青年団を率いて撤収していく。…時々何人かが俺を恐ろしいモノを見るかのような目でチラチラ見てきたけど、だんだん見られることに慣れてきたから関係ない

スティングさんと入れ代わりで出てきた使用人っぽいおばさんに案内されながら、大きな屋敷に入る。大きな屋敷、といっても他の民家と比べれば格段に大きい、といったくらいのサイズで、リーデスさんの家のようなとんでもない豪邸、というわけではないようだ

「客間にお通しするように言われております。長旅でお疲れでしょうし、夕食までおくつろぎください。後で湯をお持ちしますので」

「あ、はい。ありがとうございます」

おばさんにお礼を言いながら、その後ろに付いていく。どうやら村長さんは不在らしい。夕食の時にお礼しないと駄目だな…

やがて通される部屋。そこまで大きくはないが、狭くもない。丁度

宿の1人部屋くらいのサイズで、久々に見た真っ白いシーツが印象的。…ベッドが1つしかないんだが…嫌がらせか？

「ああ、一応男女で別れてください。その…こう言っては何ですが、村長はそういうのがあまりお好きではありませんので…。若いから辛いかもしれませんが、2、3日の辛抱ですので」

ホホホ、と頬を染めて恥ずかしげに笑うおばさん。何を言ってるのか分からなくて首を傾げてたら、嫌そうな顔をしたおっさんが口を挟む

「こいつとぁそういう関係じゃないんで大丈夫っすよ。まぁ、ちぃっとばかり話あるんで、後でこいつの部屋に押し込みますわ」

「そうでございますか？では、この部屋と右隣の部屋はご自由にお使いください。何か用事がございましたらベルを鳴らして頂ければ誰かしら来ますので」

では、と頭を下げて下がっていくおばさん。その姿にほっと一息。ようやく人の目がなくなったことに安堵する

「おっさん、これからどうし――」

振り向きながらおっさんに話しかけた、その瞬間

ぱくり、とおっさんの背後で空間が割れる。中には虹色の空間が広がってて、妙に気持ち良くて気持ち悪い雰囲気。そこから飛び出したタコの足のような太い何かが、おっさんに向かって放たれ――

「危ない！」

とっさにおっさんの足を刈って横倒しにする。腰元から『おま…何でっ！？』と驚愕したような声が聞こえたが、それどころではない

どうにかおっさんを転ばせたお陰でタコ足がおっさんに巻き付くのは避けられたが、代わりに俺の右腕に巻き付く黒いタコ足。呪文を短縮した風の刃で切断。ぶちぶち、と筋繊維が千切れる嫌な感触が右腕を通して伝わってくる

「――っぅ、すまん、大丈夫かっ！？なにが起こった！？」

慌てて立ち上がったおっさんが、背中から槍を抜かんとする。けど、狭い室内で槍を振り回す訳にもいかず、苦い顔で拳を握った

おっさんと背中合わせに立ちながら周囲を警戒する。迂闊だった。相手のテリトリーだって分かっていながら、相手が目の前にいないってだけで大丈夫だと思い込んでた。『魔物使い』がいるなら、魔物…モンスターが敵に回るのは当たり前だ。どんな魔物がいるのか分からないんだから、警戒し続けなきゃいけないのに

「おっさん、さっきいきなり空間がぱかっと割れて、虹色の変な空間からタコの足が出てきた。…多分、どっからでも攻撃出来るんだと思う」

「…そいつぁ厄介だな。とっとと逃げるか？…いや、笹田をどうにかしねぇとやべぇ訳だ」

舌打ちするおっさん。俺も似たようなモノだ。殺す殺さないは別としても、こうまで相手にやりたい放題されると仕返ししたくなる

『…なぁ、お2人さん』

ぴちゃん、と水音。足下を見下ろせば、瓶から這い出たらしいユージローの姿。眼球なんか存在しないユージローの視線が、じっと俺たちに注がれてる気がした

『お疲れさん、やな』

…へ？と2人で首を傾げる。ユージローがうにょん、と細く体を伸ばし、その先端が床に触れる

途端、床がかぱっと口を開け、その中に虹色の空間と、幾本もの黒い触腕。一瞬の浮遊感。落下する身体

「「なっ…！？」」

驚愕の声が重なる。咄嗟に伸ばす手。おっさんが割れた床の縁に爪を立て、俺に向けて手を伸ばす。けれど、右足首にしゅるりと巻き付く分厚い肉の感触。伸ばした手は空を切り、ぎゅるりと触腕に体を引き寄せられる

思考なんか回らない。足首に感じる肉の感触がどこか非現実的で、そのまま見ているだけで頭が痛くなる虹色の空間の奥に引きずり込まれていく

「おっさ――」

信じられない。そんな表情で俺を見るおっさんの姿が、急速に遠ざかる。右足に、左足に、右腕に、左腕に、そして喉に、吸盤の付いたタコの足が巻き付く。首筋にチクリとした痛み。思わず痛みに顔

をしかめた直後、ズルリ、と身体の内から大切なナニカが抜けていく気配――魔力を吸われてる！？

「こっ…の！――っ！？」

魔力が残ってる内に魔法を使おうとしたのに、使えない。…まさかっ！？恐怖に冷や汗をかきながらステータス確認

状態異常：魔封

…嘘だろっ！？いつの間にっ！？

絶望に、恐怖に頭が真っ白に染まる。指先の感覚が消え、底冷えするような寒さが全身を伝う。カチカチと歯が鳴り、視界がじんわりとボヤける

だってここは、だってここは…凌辱ゲーの世界で…

俺は、女の子で…

どう見ても、俺を拘束しているのは『触手』で…

「誰か…っ！おっさん…っ！！たすけて…だれか、だれか助けてっ！！やだっ！イヤだぁ！！」

必死に身を捩る。けれど分厚い触手は力強くて、かろうじて身を捩ることしか出来ない。武器を手に取ることも、魔法も使えない。全てを封じられた俺が出来ることは…ただ、泣き叫ぶことだけだった

「お願い！誰か！？誰かいないのかっ！？助けて！助けてくれ！！

助けてよぉっ！？」

ずるり、と細い触手が蠢く。「ひっ…！？」口から漏れる小さな悲鳴。触手は酷く緩慢な動作で俺の頬を擦る。流した涙がぴちゃりと音を発し、コリコリと柔らかい吸盤が頬に張り付く。気持ち悪さに悲鳴を上げそうになるのに、恐怖のせいで声が出ない。ひゅっひゅっ、と短い呼吸音が気持ち悪い。全部全部気持ち悪い

お願い、だから。神様、お願いします。今一回だけでいいんです。お願いしますから…

カタカタと震える、もたつく舌が、動く

「たすけ、て…」

ぽつり、と漏らした言葉に

「えぇ、助けてあげましょう」

小さな声と共に、頬に触れた暖かい手に

ドズリ、と脳にナニカが埋め込まれる光景を、幻視した

２０、洗脳（後書き）

笹田さんの『洗脳』スキルの発動条件！

１、対象の名前を知っていること。種族、あるいは個体名。どちらか知っていれば問題なし

２、対象が精神的、あるいは肉体的に深手を負っていること

両方にダメージを与えた際は、洗脳後の依存度が高くなることがあります。注意しましょう

３、対象と肉体的接触をすること

この時点で仮洗脳
対象はスキルユーザーに従順になります
尚、この状態は対象に強い精神的、あるいは肉体的ダメージを与えると正気に戻ることがあります。
スキルユーザーは速やかに４に移行してください

４、対象にスキルユーザーの体液を飲ませる。

※肉体を持たない対象の場合は、魔力を与えましょう
体液はどんなものでも構いませんが、涙や唾液だと量が必要になります

５、スキルユーザーが対象に新たな名を与える

名で縛れば洗脳は完成です。

対象が死ぬまで洗脳が解けることはありません

尚、対象は新しい『名』を知る者全員に忠誠心を抱き、心酔します。普段は『名』で呼ばない方がいいでしょう。あまり『主人』が増えると対象の脳が正常に機能しなくなり、記憶障害や人格障害。稀に脳死状態に陥る可能性があります

やっとササダさんのスキル出せたー

ちなみにササダパーティーは全５人＋洗脳済み魔物いっぱい&洗脳、調教済みの女冒険者１３人です

基本的にパーティーメンバー５人以外は虹空間（笑）の中っす

今回のテンプレ

↓触手×女の子

↓強いのに負ける主人公

↓触手（対女の子戦無敵！）

21、顛末（前書き）

視界が一気に開けた気がした。見方が変われば味方が変わる、とでも言うのだろうか。ギチギチと手足を締め付ける触手を気持ち悪く思うが、抵抗を止める

ササダさんが指示をしているのなら、何の問題もないだろう。そんな確信に、頬を撫でる触手を受け入れる

そんな俺を嬉しそうに見るササダさん。浮かべられた笑顔と共に目尻に皺が寄る。ササダさんってそういえば何歳くらいなんだろう。ちょっと気になる

「気分は如何ですか？」

「えっ、と。普通です」

答えたら、ササダさんは嬉しそうに笑った。俺のガンホルダーに手を伸ばし、ミストラルを抜く。そしてその銃口を俺に向けた

「…？。多分、使えないですよ？魔力を込める必要がありますから。銃が欲しいならインベントリにありますが…」

使えない、と言った所で顔をしかめたササダさんだったけど、他のがあるって言ったらまた嬉しそうな笑みに戻った。ササダさんが笑ってるなら、俺もうれし…ひぅっ！？

「さ、ササダさ…これ…止めて…」

頬を撫でていた触手が、襟元から服の内側に入り込む。肌の上を這い回るゴムのような感触。その先端が…吸盤が…肌に吸い付く。ぞくぞくと奇妙な感覚が体を走り、びくん、と腰が跳ねた。目の前の虹色の空間が、変に脈動する

「残念ですが止める訳にもいかないのですよ。ミーラ、アレを使ってあげなさい。時間が押しています」

しゅるしゅると体の上を這い回る触手。襟元から入り、右肩から左の脇の下、背中を通って右の脇腹まで抜ける触手に、吸盤に、嫌悪感を覚える。でも、我慢しなきゃ…ササダさんがやるんだから、なんか考えがあるはずだし…

「きゃうっ!?」

自分の声とは思えない変な声が出る。ツンツン、と触手の細い先端が、ヘソを突つく。普段誰かに触られるはずもないような場所を、ぬめった触手が這い回る。ぞわぞわと腰から背中に悪寒が走る。乾いていたはずの触手の先端からヌルヌルした何かが出ていて、まるで舌で舐められているみたいな――「ぁ、っぁ…ふぁ…っ!?」にゅるにゅるが、ヘソを、下腹を伝う。服がぐちょぐちょに濡れて、くすぐったさとぞわぞわした何かに、思考が離れそうになる

「ぁ…くっ、ふふ…やめ…くすぐった…あはっ…ひんっ…」

ちゅうちゅうと皮膚を吸う吸盤と、にゅるにゅるとヘソや脇腹を這い回る触手の先端。くすぐったいのに、自然と背筋が伸びるような、ピリピリとした何か

「ミーラ、飲ませてあげなさい」

「は、ぁ…ぁ…？…飲ませ…？」

もう1本、細い触手が目の前に伸びてくる。先端にコブみたいな子供の拳くらいの膨らみになってて、なんだか玩具の蛇みたいだ

その先端が、頬に擦り付けられる。ぬるぬるしたピンク色の液体が頬に渡る。片目を閉じて気持ち悪さに耐えていたら、ようやく離れた。にちゅぅ…とピンクの粘液が触手と頬に橋をかける

「…ササ、ダさ…んっ、これ…なっ…んで…んくっ…」

ぴくん、ぴくん、と背筋が跳ねる。なんだか体が勝手に太股を擦り合わせる。なんか…なんだろう。こうでもしてないと…切ない…

「いいから、飲みなさい。そうすれば、少しは楽になりますから。…ああ、エルフのアレの血は高値で売れるんでしたか？…ふうむ、迷いますね。採取してから注ぐべきか…しかし破った衝撃で正気に返る可能性も考えると…。仕方ないですね、とっておきを使いますか。ミーラ、続けておきなさい」

「あっ、ま、待って…！」

置いていかないで、と言おうとしたのに、それより早く口の中にコブ付きの触手が突き込まれる。「んぐぅ…！？」と喉の奥でぬるぬると蠢く触手に、猛烈な吐き気を覚える。気管と食道に入り込んだぬるぬるした液体のせいで、吐き気がせり上がる

「うぐっ…が、は…げぇ…がほっ！げぽっ！おぇ…」

触手と喉奥に入り込んだ液体を吐き出す。それでも尚喉に粘り付く粘液に咳が止まらない。ぽろぽろと涙が溢れる。きもちわるい…！なんでササダさんはこんなことするんだ…！？

「げほっ！ごほっ…んひぃっ！？」

ぞわり、とした何かがせり上がる。指先ほどの細さしかない触手が、右耳に入り込む。にゃるにゅるした触手が耳を犯す。ひだの間を通り、舌でねぶるかのように、穴の奥へと入り込む

「んぁっ！？あ、や、だめっ！これ、…んぁあああああっ！？きもちわ…ひぁあっ！？」

明確すぎる嫌悪感。そして僅かに感じる快感に、必死で身を捩る。少しでも触手から離れたいのに、ぴったりと耳の中に吸い付くそれに、なす術もなく体を震わせる

「ひぃ…あ、ぅく…あ、ああ、あ…や、だめ…ぅあ…くぅふ…」

数分か、数十分か、弱点を見つけた、とばかりにひたすら耳を刺激する触手に、全身を弛緩させる。体に力が入らない。勝手にぽろぽろと涙は溢れ、指1本動かすのも億劫な程の倦怠感。体力のほとんどを奪われ、半開きでよだれを溢す口を閉じるのも辛い

「…ぁ…ぁぁ…や、やだ…もぉ…ゆるして…」

熱い、体が、喉の奥が。さっき飲まされたピンクの粘液の効果だろうか。喉の奥に生まれた熱さが、じんわりと指先にまで届いていく

「…おやおや。もしかしたらいらなかったかもしれませんねぇ」

ささださんが、そんな俺を見て苦笑いしていた。その手には小瓶。
なんだろうか…と蕩けた思考で考える

「媚薬ですよ。オーガ族ですら色に狂うそうです。まぁ、これは人間用にある程度薄めてありますが…。そのため効果が出るのこそ遅いですが、強力ですよ。レベル４８の美貌の女騎士が、あっという間に淫乱な娼婦に早変わりです。…いや、アレは良かったです。レティーシアはどんな声で鳴いてくれますかね？」

目の前に、蓋を開けた小瓶が差し出される

「…や、です…」

飲みたく、ない。媚薬っていえば、アレだ。エロいことする薬だ。ささださんの命令でも、エロいのは嫌だ…そういうのは、好きな人と…

けど、ささださんはそれが気に入らなかったらしい。笑顔が消えた。さっと蕩けた思考から通常に復帰する。やだ…ささださんに嫌われたくない！？

「の、のみます！のみますから…１人にしないで…」

１人は嫌だ。寂しいし、辛いし、みんな嫌な目で俺を見るんだ…。だから、だから誰かと一緒にいたいんだ。いなくちゃならないんだ

謝ったら、ささださんは許してくれた。にこっと笑顔を浮かべ、小瓶を傾けてくる。ぐすっ…と鼻を啜って、その中身を飲み下す。予想外にサラサラした液体が、喉の奥に、胃に流れ込んでくる

「大体１０分くらいですかね。まぁ、その間はミーラと楽しんでいてくださ」

と、笑ったササダさんが、突然現れた大きなトラに押し倒された

21、顛末

床に爪を立て、体を引き上げる。無言で体を揺らしてこちらを見ているスライムに鋭い視線を飛ばす

「…てめぇ、何のつもりだ」

『なんのつもりも糞もないわなぁ。親友は見っけた。でもどうも洗脳済みみたいやからなぁ…。ちょちょいと仕込みする間、トラさんやレティちゃんには餌になってもらおう思てん。なんかおかしいこと言うたか？』

価値観の、違い。そう言ってしまえばそれだけの違い。けれど、モンスターになった『元』人間の思考は、俺には理解出来なかった

「…ってめ…！！」

怒りに牙が、爪が、長く、鋭く伸びる。けれど強酸性のこいつに手を触れれば、俺の手は焼け焦げる。手が、出せない。それが歯痒くて、憎らしい

『そんなことよりええの？はよせんと…レティちゃん、洗脳されてまうで？約束で無事脱出、とは言うたけど、俺は処女まで無事とは言わへんかったよ？』

「おっ…まえ…っ！！」

初めて、だった

ここまで、『人』をぶん殴りたいと思ったのは、初めてだった。『へへへ…』と薄ら笑いを浮かべる雄二郎を、踏みにじりたい

『モンスターとの約束なんざ、額面通りに信じる方がおかしいんねやで？ほれほれ、レティちゃん助けたかったら俺の言う通りに動いた方がええよ。まずは…庭に井戸があるなぁ、そこに俺を投げ入れてもらおか』

「…いつか、覚えてやがれ…！！」

ドロドロと濁った呪いの声。そんなセリフを自分が発したことに驚きながら、相方のピンチに何も対策が思い付かない自分の無力さに歯噛みする。部屋にあったガラスの器にスライムを放り込み、窓を蹴破って庭に降り立つ。２人の男が自分の登場に驚愕していたから、即座にその喉に足刀を叩き込む。悶絶しながら倒れ、鮮血を吐きながらじたばたと暴れる男たちに若干の申し訳なさを感じる…と思えば、意外にも何とも思わなかった。暴れる男たちの首筋に手刀を落とし、意識を刈り取った

『ん～♪ええ感じやねぇ。この２人も俺と一緒に井戸に放り込んでんか』

「…チィッ！」

舌打ちしながら男たちの体を担ぐ。スライムの指示に従えばどうなるかなんて、容易に想像が突く。ついさっき、相方が肉と水を与えた後、こいつがどうしたのかを思い出せばいいだけだ。それでも…相方を助けるためなら、殺ってやる

見つけた井戸に男たちを投げ入れる。バシャン！と音がして、それ

で目を覚ましたらしい男たちが暴れながら罵詈雑言を吐いてくる

――「一体何のつもりだ!?」

「俺たちは勇者だぞっ!?」

「こんなことしていいと思ってるのかっ!?」――

「…」

怒りに、体が、震える

勇者、だ?人の相方を勝手に誘拐しといて、何が勇者だ?雄二郎の言うことが本当なら、女を無理矢理てめぇの物にしといて何が勇者だ?

僅かに残った戸惑いも消える。ガラスの器の中の雄二郎が、けらけらと笑ってる気がした

『――人間って、醜いわなぁ』

「…ああ、でも、良い奴もいるさ」

『そぉかい』と笑う雄二郎を、井戸に投げ込む。上がる悲鳴に、じゅうじゅうと肉が溶かされる音を耳に、胸に刻み込む。初めての殺人。明確な意思をもって殺したのは、同郷の勇者だった

1分もかからずに悲鳴が止む。そして、井戸がガタガタと震える。何かが産まれる寸前の卵のように震え、脈動する。ごぼごぼと音がなり、地震のように大地が震える

そして…噴火した

黄色い粘性の高い液体が、一気に井戸から溢れて流れ出す。飛沫のように跳ねた液体が、肌を焼く。それに顔をしかめながら見ていると、それは村長の屋敷に向かって侵食し、それを完全に包み込む。そして村全体に流れ出していく。様子を見に来た青年団の奴等が、足を焼かれて転げ回り、そして黄色い粘液に包まれ苦痛の悲鳴をあげる。けどそれも、口まで塞がれるとなくなる。皮膚が溶けて真っ赤になった手が、天に向かって伸ばされ…やがて、赤が白に染まり…何もなくなった。真っ赤に染まっているのに黄色い粘液が、更に村へと伸びていく

「…この村、潰す気か？」

ぼんやりとした問い掛け。分かりきった答えをわざわざ問う自分に、どうしようない違和感

『『『『同罪や』』』』

周りにじっとりと溜まり始めた黄色い液体が複数の声を発する。俺の周りだけぽっかりと開いた空間。それ以外は、次々と逃げ場が消えていく。…なるほどな、無事に帰してくれる意思はあるわけだ。最悪このまま殺される覚悟もしてたんだがな

悲鳴、苦鳴、助けを求める声。子供の泣き声、溶ける家や店、作物。地獄絵図とはこのことだろうか。なのに、何とも言えず心が落ち着いている自分に違和感

…獣人は魔物との混血。人間が苦痛を感じていても、本能的に精神の苦痛を感じない。そんな話を魔女から聞いていたが、嘘だと思っ

ていた

けど、本当だったらしい。…むしろ俺は…ドロドロに溶けながら助けを求める村人たちの姿を…ほんの少しだけ、楽しいと感じている

そんな自分がどうしようもなく…気持ち悪い

『さぁ、魔物使いをめっけたでぇ？はよぅあの虹色空間開かせてんか』

「さっき、自分で開いてたじゃねぇか」

『さっきのは親友…あの触手の身体にくっついてた俺の身体をこっち側に引き寄せたからこじ開けられただけやもん。しっかり開いて貰わんと、俺の鈍さじゃ中ん入れん』

言いながら、黄色い粘液が道を開く。それは真っ直ぐに、村長宅の中へと向かう。全てがお膳立てされているような気持ち悪さに、吐き気を覚える

『ほれ、走らんかい』

「…糞がっ！」

吐き捨てながら走る。すでに屋敷は内壁が溶けかけて、異臭を放つ。鼻と目にズキズキと染みる刺激臭に顔をしかめながら、辛うじて歩いていけば…扉が完全に溶けた部屋の真ん中で、左足を黄色い粘液に食われた青年が、口汚く罵りながら巨大な１つ目の化け物に命令を発しているところだった

「た、たたたた助けろっ！早くだ！痛いんだよ！くそっ！なんで動かないんだ！？早く！早く助けろ！」

じゅう…と肌を焼く音。化け物は戸惑ったように右往左往し、意を決したように粘液に向けて拳を振るう。「バ、バカ！やめろぉ！」と青年が叫ぶが、遅い。ぐちゅっ！と粘液を飛ばして床にめり込む化け物の拳。けれどその瞬間、化け物は黄色い粘液に全身を食われる。苦しそうに身を捩る化け物。ほんの数分で、大きな目玉以外は無くなった

「ち、ちくしょう！あのバカが！つ、つぎ…」

『魔物使い』が手を振るう。相方が『インベントリ』を使う時のような動作。なんとなくそれで感づいた俺は、鎧を脱ぐ間も惜しんで獣へと姿を変える。時間が惜しかった

「で、出てこい！『リーズ・リームリス』ッ！」

空間が割れ、虹色の足場すらない空間が目に映る。中から人影のようなものが出てくるより早く、その影を弾いて中に入る。「はぁっ！？とらっ…ぇ、あ、ま…ギャアアアアアアアっ！？」と背中に聞こえる悲鳴。後ろを振り返れば、見覚えのない女性が黄色い粘液に食われている場面。…だというのに、女性は抵抗しない。…虚ろな瞳で、薄く笑いながらじゅうじゅうと煙を発して溶ける己の身体を見つめている。それが、何とも言えず…哀れだった

魔物使いは死んだのだろう。背中に開いていた空間の裂け目が徐々に閉じる。そして、ぴしりと空間にヒビが入った。急速に、この世界が、空間が、小さくなり、壊れていく。…魔物使いの能力で作った空間だから、魔物使いが死んだらなくなる、という訳か

空間がなくなる前に脱出しないとどうなるか解らない。そんな危機感に突き動かされ、走り出す。小さくなる空間のお陰か、たまたまか…予想以上に早く、巨大なタコのような生物に捕らわれる相方と、その相方に変な薬のようなものを飲ませようとする糞野郎の姿が見える

一切の躊躇なく、糞野郎に飛び掛かる。「信じられない」とばかりに目を見開く糞野郎が口を開くより早く、その右腕に食らい付く

「ひぃっ…ぎ、あああああっ!?み、ミーラ!ミーラ!レティーシア!私を!私を助けなさい!この虎を殺しなさい!」

「ぐるぁあああああっ!!」

＞i２５９６４―３３３８＜

ごぎぎん、と細い腕が砕ける感触が、生臭い血の味が口内に広がる。「ぎぁあああああっ!?」と悲鳴を上げる糞野郎と、背中に感じる風切り音。ギリギリまで引き付けながら糞野郎の上から飛び退けば、太い触手が糞野郎の腹に深々と突き刺さった

「ぇ…ぁ…がふっ…」

呆然と、穴の開いた腹を見下ろす糞野郎。慌てたように触手が腹から引き抜かれる。ずるりと血と黄色い脂肪に汚れた触手と共に、吸盤に吸い付かれた腸がはみ出してくる「あ、あが…びぎ…れ、れてぃ、…か、いひ、かいふく…」うわ言のように相方を呼ぶ糞野郎をぶち殺したい感情を必死に押さえ込む

「さ、ささださん…？ささださん…！？」

どこか虚ろな表情で、そんな糞野郎に四つん這いで近寄る相方――
間に、合わなかった？いや、まだ薬がある…！！

急いで人型に戻る。「待っていま、かいふく…状態異常が…まりょくがない…」とか呟いている相方を無理矢理引き寄せれば、僅かに抵抗された。敵意がこもった視線が、俺に突き刺さる。虚ろな視線が、「邪魔をするな」と語る

――辛い

そんな目で見られたくない。こいつには、笑っていてほしい。こいつは…笑顔が、似合ってる

だから、頼む…効いてくれ…

祈るような気持ちで、『ディスペルウォータ』…相方の渡してきた薬を、無理矢理、顔を固定し、口に流し込む。非力な相方はろくに抵抗も出来ず、ビンをくわえた

「んぐ…っ！？」といやいやするように首を振る相方の口を、手で塞ぐ。そのまま数秒、抱き締めるように相方の動きを封じる。…こくり、と喉が動いた

「…おっさ、ん…？」

――途端に、全身の力を抜いて脱力する相方。…小さく聞こえる、いつもの呼び名。安堵の溜め息が出そうになるのを必死に堪えながら、奇妙にぐちょぐちょに濡れた相方の身体を持ち上げた

「おっさ…！？」

案の定、というのだろうか

すぐ後ろに迫っていた触手と黄色い粘液を飛び跳ねてかわす

腹から血を流し、ピクピクと痙攣しながら、「あいつを、あいつらを…殺せ…ぜんぶ、ぜんぶ、殺せ…ふは、ふひゃはははは…ふひゃはははは…」と笑う糞野郎

そして、『ええもん持っとるやん。飲むだけで洗脳解ける薬、ねぇ。眉唾やと思てたわ。俺にもちょーだいな』と、うぞうぞと蠢きながら迫ってくる黄色い粘液

――逃げ場が、無い。虹色の空間から脱出する術がない。せっかく相方を助け出したのに、どうすれば逃げ出せるのかが分からない。やはり、無力な自分に歯噛みする

「…すまねぇな。ガキ。…守るって言ったはずだったんだがな…」

胸の中のガキの頭をクシャクシャと撫でる。迫る粘液と、ジリジリと距離を詰める触手の塊。…糞野郎は死んだのだろうか。身体を起こし、こちらを睨み付けた体勢のまま…黄色い粘液に飲まれ、じゅうじゅうと嫌な音を発する

…ま、1人で死なないだけマシか？等とネガティブ思考で考え、薄く笑みを浮かべた

「…【呪いよ、され、ディスペル】」

…だというのに、相方は、諦めたりなんかしなかったらしい

相方の指先から出た光が、触手に命中する。途端に、触手はぴたり、と動きを止めた

「…あれ？ここどこ？」

『…え？正気に戻ったん？マジで？今のだけで？…レティちゃんのお陰か？…嘘やん』

空気が、弛緩する。「はぁ…はぁ…」と荒い呼吸をする相方の身体を抱き締める。…黄色い粘液は近付いてこないし、触手も襲ってくる気配はない

…もしかしたら、生き残れる…のだろうか

胸の中の相方の息が、妙に熱い。熱い息が、俺が、生きてるのを実感させてくれた

21、顛末（後書き）

エロスが

足りない

触手もの初めて書いたが、超むっかしい。アレか、触手からも媚薬だしつつ吸い付かなきゃダメか。ノクタ行きじゃないか！

行かんわ！

触手ゲーとかやったことねぇよちくしょう。書き方教えてえろい人～

ちなみにおっさんはほぼ裸でレティ抱き締めてるんだぜ？

しかもレティは服ドロッデロ。映像化したらエロイよ、多分

展開急ぎすぎたとちょっと反省。でも丁度いいところで区切れなくて…

今回のテンプレ

↓ＤＡＮＺＡＩ

↓粛清

↓反撃

っつか、魔物転生系主人公が人間の倫理観持ってたら違和感覚えね？

さぁて次回は発情レティだ！

媚薬飲ませるなんて悪役じゃないと出来ねぇぜ！

22、媚薬服用後　R－15（前書き）

「はぁー…はぁー…」

あつ、い？熱くて、暑い。固い筋肉の感触。肌に伝うおっさんの熱。鼻孔をくすぐる汗の臭いが、獣の匂いが、脳髄を蕩けさせる

熱い、暑い、あつい…お腹が、あつい。腹の中にマグマが流れているみたいな熱さ。さっきまでかろうじて回っていた思考で、触手の「洗脳」を解いたけど、そこが限界だった

あつい、あつい、おっさんの匂いが、身体を溶かす。固い筋肉に触れているだけで、ぴりぴりと肌が悲鳴をあげる。歓喜の悲鳴が身体をかけめぐり、ドロドロに溶けた内臓と熱が、下腹から抜けていくようだ

熱くて、服なんか着ていられない。でも、手足を動かすのも億劫で、でもおっさんの匂いをもっと嗅ぎたくて、鼻先をおっさんの首筋に埋める。ふわりと香る男の汗の匂いに、びくん、と背筋が跳ねた

「…？ガキ？おいガキ？どうした…っ！？何だ！？毒か！？」

ちが、う。そう言いたいのに、声が出ない。顔を覗き込もうと身体を離そうとするおっさん。でも、離れたくない。もっとくっつきたい。――おっさんが、欲しい。おっさんに、触って欲しい。どこを？…全部を

「…ぉっ、さ…さわ、…さわって…おれ…おれ…あつい、あつくて…」

服を脱ぎたいのに、力の入らない指はそれすらも叶わない。血相を変えたおっさんが、「くそっ！アイテムでも何でも良いからどうにかしてくれ！なんか手伝えることあるか！？何でも言え！」と怒鳴る

…なん、でも？

いいの？なんでもいいの？わがままいっていいのか？

「…て…おっさん…てぇ、かして…？」

「あ？お、おぅ…」

おっさんの手を、そっと頬に導く。大きな手に感じる安心感に、ほっとため息が漏れた。この手で全身を撫でてもらったら、どんなにきもちいいだろうか？にちゅると頬から音が鳴る。おっさんが眉根を寄せて、頬に付いたままだったピンクの液体を指先で拭き取る

指…おっさんの、指…汚れた、ピンク色の粘液に汚れた、指…

きれいに、しなきゃ…

「…ちゅる」

舌を、這わせる。指の腹。皺の一本一本を舌先で削る。僅かに感じるおっさんの味に、舌からぴりぴりとした電流が走る。…きもち、いい…なんで？なんでこんなきもちいいんだ？

「なっ！？バカ！止めろ！」

引き抜かれる指。唾液と粘液が混ざった、薄ピンクの橋が掛かる。駄目だ…まだ、綺麗になってない…

「きれいに、しなきゃ…」

「っあ！？ば…っおま、なに考え…！？」

手を、引き寄せて、舌を、這わせる。長く伸びた爪で舌が僅かに切れる。口の中に感じる痛み。それが少しだけ、いとおしい。俺の血をおっさんの手に染み込ませるように、おっさんの手を、舐める。ちょっとしょっぱくて、砂っぽい。人差し指の第一間接まで口に含み、ちゅるちゅると音を立てて吸う…「おま…な、に考えて…」小さく声を漏らすおっさん

「は、ぁ…ぁ、っあ…」

ちゅぷっ…と口から引き抜かれる指先。口の中に残る塩味と、血の味…。もっと、欲しい。俺の血の味じゃない、おっさんの味…

ゆるゆると身体を起こす。はっとしたようにおっさんが身を強張らせる。けど、ふるふると震える手を伸ばせば、おっさんはそれを受け取ってくれる。うれしい、うれしい、些細なことが、凄くうれしい

「おっさん…」

腕を引き寄せる。俺の方が軽くて力が無いから、逆におっさんの方に倒れ込むことになった。それでも、別にいい。やることは、変わらない

「だっ！バッ！やめ…っ！！」

苦しそうな声を漏らすおっさんの肌に、舌を這わせる。浅黒い肌に唾液の線が残り、しょっぱさと匂いが、口に、鼻に広がる。ぞくぞくと背中に走る快感。きもちいい、だから、もっと…

『…あれー？ボクら忘れられてへん？あとちょっとおっきしそう。ちっちゃな赤い舌が肌を這い回る…倒錯的な光景にボクヘヴン状態』

「ナニも無い癖に。っていうかここどこです？えーっとあたしはだぁれあれー？世界に星が落ちてきますか？魔王は既に誕生済みとか？」

背後から聞こえる声。誰のものだか忘れた声。それを無視して、おっさんの胸に舌を這わせる。分厚い胸板は舌先で突ついても固く弾き返す。ちょうど胸の中心、胸筋の間のくぼみに舌を這わせれば、びくんっ！とおっさんの身体が跳ねた

＞ｉ２５８４９―３２５４＜

…うれしさが、胸に広がる。知ってる、おれ…。きもちよかったんだ。おっさんも…。男が、きもちいいところ知ってる…。口元が緩む。混濁した思考が示す。おっさんもきもちよくする。おれがこんなにきもちいくなってるんだから、おっさんもきもちよくしてやらなきゃいけない

「くぁっ！？ば…かやろ…やめ…てめ…まじ、怒る、ぞ…っ！？」

顔を真っ赤にしたおっさんがおれを見下ろす

それに笑みで返す。絶句したおっさんの頬を、ペロリと舐める。血

の味。…美味しくない。何故？おっさんの身体は、美味しいはずなのに…

胸板から鎖骨へと舌を動かす。ぴくん、ぴくんと忙しく跳ねるおっさんの身体。…かわいい。ちゅう…っと少しだけ歯を立てて、鎖骨に唇を落とす。「っ、は…」おっさんの口から漏れる熱い、息。…どんな息？キスしたら、分かる？

身を離せば、浅黒い肌に刻まれた内出血の跡…。薄く、笑う。自分のには、名前を書かなきゃ…。あれ？、おっさんっておれのだっけ？…まぁ、いいや。ドキドキ高鳴る胸をおさえながら、同じくらいドキドキしてるおっさんの胸に頬擦りする…。あったかい、きもちいい

けど、足りない

少しだけ、眉根を寄せて、身を離す。おっさんの体温が離れたことに感じる喪失感…。やっぱくっついてよう。その方があったかいし、きもちいい

くっついてても出来るし

そう思って、もう1度身を寄せて、右手でおっさんの――

「はいさいほー、エロスは程々にな？お腹がくぅくぅ鳴るのですねわかりますか」

触手が、手足を縛る。おっさんの身体が離れてくのが寂しくて、ぽろぽろ涙が溢れた

22、媚薬服用後　R－15

「やぁ…おっさ、おっさん…やだぁ…」

触手に手足を封じられながら、もぞもぞと抵抗しつつ俺に向かって手を伸ばす相方。相方の妙なほどに熱い体温が離れたことに安堵しつつ、ほっと溜め息を吐く。やばかった…っ！！発情期じゃなくて本当に良かった…っ！

『え、ちょ、おま…なんで止めるんっ！？なんで止めるんっ！？こちとらもうおっきしとんねんで！？なんで止めるんよっ！？なぁトラさん！据え膳やで？最後まで行ってまぷきゃん』

びだーん！と触手で殴打されたスライムが飛び散る。やれやれ、と言わんばかりに揺れる触手と、本体の頭だけで３ｍはありそうなでかいタコ

「ん？ああ、この姿じゃ話辛いのよね。１分待つのよ？」

そう言うと、触手がタコ本体に絡み付いていく。容易にぐにゃりと形を変える本体が、あっという間に小さく、コンパクトに締め上げられ、纏められていく。触手で身体を締め付けて、形を整えていく

「うぁーっ！本性出した後にこの姿になると窮屈なのよねぇ…」

と、ぐるぐる『腕』を回して見せる…少女

年は５、６歳くらいだろうか。幼い容姿に、白い滑らかな肌。地面に届く程長い髪はうねうねと蠢く極細の触手で、ラバー生地のよう

な奇妙な光沢を放つ服…のようにも見える触手で、身体を包んでいる。指先は長い袖に隠れ、足も地面に引き摺るほど長いロングスカートで隠されている。閉じられたまぶたと、薄いニヤニヤした笑みで固定された口元が、うぞうぞとざわめいた

「ミーラグリーズのラグナエイトなのよ。呼ぶときはエイトたん、って呼ぶがよいとかね？」

『歳かんがえろや。なぁ、俺より長生きしとるく』

＞ｉ２６１１６―３３６５＜

びだーん！腕…に擬装された触腕が、一気に伸びてスライムを潰す

「放っておくといいのよ！大体の時間は寝てたり寝惚けたりしてただけだからまだあたしは５０歳なのよ！」

『いや、その理屈はおかしい』

「うっさいのよ！」

びだーん！と飛び散るスライム。…溶けないのか、溶かさないのか分からんが…少女…エイト？の髪の毛で縛られた相方に飛沫がかかりかねないからやめてほしい

「あー、うん。うん。思い出したのよな。ったく胸くそ悪いこと山の如しよね。ギアスだかなんだか知らぬんばい、それで洗脳されちゃった訳なのよ。で、それをこの娘が助けてくれた、ということが正解か？」

エイトのスカートの中…足下から伸びた触手が、両手足を拘束された相方を引き寄せる。どこかに飛んでいってしまいそうな緊張感をかき集め、そのエイトの前にたつ。唇を動かさずに喋るエイトが、楽しそうな雰囲気を発しながら喋る

「なにか用事があると見えれば？」

「相方に何する気だ…？返答によっちゃあ…容赦しねぇぞ」

ギチリ、と緊張に筋肉が震える。勝てる見込みなんかまったくない。だが、どうせ本当ならさっき殺されて食われていた身だ。捨て鉢の気分で、相方とエイトの間に立つ

「…くすっ、かっこいいわなぇ。ちょっと羨ましい、のだなっ！」

びだーん！と無意味に弾けるスライム『え、いまなんで俺、殴られたん！？』とプルプル震えるスライム。あっち行け、と言わんばかりに鬱陶しそうに触手が揺れる

「安心すること海より深く？あたしらモンスターにも誇りがあったらなーと思うあたし。１度命を救いてもらった以上、あたしはこの娘の命を１度救わにゃー等価交換の原則に反したりするかも。不公平さに枕を塗らすよ。あなたが」

けらけらと笑うエイト。…スライム野郎と同じな癖に、どこか違う。口調と良い、人型の姿といい、メスなのだろうか。人間の倫理観とはまた違う、奇妙な義理堅さ

「んー。そういえばこの娘メガーネさんに媚薬飲まされてハァハァ…？くんかくんかぺろぺーろ。ちょとうらやらしいのよな」

「はぁっ!?」

媚薬って…あの媚薬かっ!?あんの糞野郎!こんなガキになに考えてやがる!?

…いやいや待て待て。俺ぁ違うよな?ドキドキなんか…してないよな?うん。してないしてない。はっはーん、大丈夫、俺はロリコンじゃねぇぜ!「おっさぁん…」頼むから艶っぽい声で俺を呼ぶな!

恐る恐る振り返れば、手足を拘束されながらも、もじもじと内腿を擦り合わせながら、潤んだ瞳で俺を見つめる相方の姿。少しだけ、開いた唇から真っ赤な小さな舌が覗く。あの舌が、俺の身体を舐め回して――やめろやめろやめろこれ以上考えたらなんか取り返しのつかない間違いを犯しちまいそうだ!?

「若いのだわー」

「ほっと…うぉお気持ちわりぃ!?」

ギョロリ、と小さな血走った眼球が俺を見上げる。エイトの髪の毛の先、無数にある極細の触手の先端に、それぞれ1つずつコブ…いや、眼球があるのだ。肉で覆われているそれが、興味津々、といった様子で俺の身体を舐めるように見つめる。ビジュアル的にも精神的にもすげぇ心臓に悪い光景に飛び上がる

「気持ち悪いって失礼よなぁ!触手美少女の落ち込みっぷりに世界が泣くよ…」

「って口まで触手にくっついてんのかよ!?」

眼球のすぐ下、ぱっくり縦にと割れた触手の中に、小さく並ぶ丸い牙。どうやって喋ってるのか不思議だったんだが、そこから喋っていたらしい。エイトの言葉にぱくぱくと開閉される口（？）がそれを証明する

「実際に喋ってるのは1つずつだわな。ステレオ再生楽しいか？あたしはびみょん！みょんみょん！それよりよかとですか？この娘、結構ピンチパンチ？色狂いまでのカウントダウン！」

――思考が冷静さを取り戻す。「ぅ…んぁ…おっさん…おっさぁん…」とうわ言のように俺の名を呼ぶ相方。…確かに、ヤバイか？

「どうヤバイんだ？教えてくれ。頼む、お願いだ。土下座でも何でもする」

正直腰が引けてたが、それどころじゃない。媚薬っつーのはようするに人体にかなりの無理をかける薬だ。何が起こってもおかしくねぇ。合法の媚薬なんてのもあるが、アレだって過剰に服用すると不味いことになる。下手すりゃ…死ぬ

相方が死んだら、と思うと、じわじわと恐怖がせり上がる。…いつのまにか相方の存在は、俺の中でそこまで大きくなっていたらしい。娘のような、妹のような、年の離れた友人のような…可愛らしい、女の子

まさか、ガキのために化け物相手に土下座するようなことになるとは思わなかった。昔の自分が今の自分を見たら、「…頭、大丈夫か？」と心配するかもしれない

「…そんなことしなくても、あたしはそこの液体生物と違って人間好きだわよな、ちゃんと面倒見ちゃったりしますよ?セクハラ禁止であとお礼。指先くらいなら中に入っても許可?ダメですねサーセン。指ないし」

どこか楽しそうに笑うエイト。反対に雄二郎は不気味なほどの無言。不機嫌なのか、何事か考えてるのかは分からないが…正直、どうでもいい

「んー、だわだわ、貴方たち…」

考え込むように、袖で隠れた手を頬に当てる。本体は触手の長いタコの化け物なのだから、それは所謂ブラフ…いや、考え込んでいる、ということを俺達に示すポーズなのだろう。こんな化け物に頼らざるをえない自分に、歯がゆさしか感じない

「あなたたち、セックスは、性交渉は、らぶらぶあまあまえっちは、どれくらいの頻度でしてる?毎晩か?今日もおまたのお楽しみですか?」

「するかぁっ!!」

相手はガキだっつってんだろーがっ!?なんであの魔女と同じようなこと聞きやがるんだこの化け物はっ!?

「えー、あんなナチュラルに固有結界張りつつの否定?リア充爆発しろと触手系美少女から切願」

「頼むから真面目にやってくれ…」

頭を抱える。「んー？」とわざとらしく口元に手を当て、腰から首を傾ける（自称）触手系美少女。けどこんなやつを頼らないといけない現状にイライラが募る。…俺、こんな駄目な奴だったのか？何も出来てねぇじゃねぇか…

「えっちして失神させるのが一番楽ですが。あなたもあの娘も腰回り充実してあたしはお腹一杯。具体的にはえろ汁飲ませろ腹減りぐーぐー」

「真面目にやってもらえませんかねぇ！？」

流石に怒鳴り付ける。後ろから聞こえる声に涙声混じってるんだよ！もう完全な泣いてるんだよ！「おっさ…ぅぇ…ひっぐ…うぇえ…おっさ…さびし…あついよぉ…おっさぁ…んぅぅ…」とかな！心がいてぇわ！

「膝に乗っけて指とか尻尾とか好きにさせるといいとかなんとか。基本的にあの娘もえちぃのしたくないみたいだから、ギリギリ耐えるよ、あの娘が。だからあなたが一線越えたらおめでたー。あたしもお腹いっぱい。いまからえっちしませんか？しませんねごみんね？体温で安心させておしゃぶりで性感が高まるのを堪えさせるといーのな。あの娘からのアプローチはあなたがナイスブロックなことが必要よ」

「ぇ？…あ、ああ！よく分からんが分かった！」

とにかく相方を膝に乗っけて…ってさっきと同じようなことしろってか！？どんだけやったらいいんだ！？

「心を読むんだ読心術。１人のあなたに独身術。たびゅんびゅん５

時間くらい？お腹が減ったらスケベしようや」

「するかっ！ご、５時間だな！？」

な、長くねぇか？…ええい！あんなガキが何しようと何とも思わんわ！

ひたすら「おっさ…ん…っさぁ……ん…もぉ、やだぁ…やぁ…」とうつむいて泣いてる相方に近寄る。相方は俺に気付いたのか、ゆるゆると顔を上げ…

「…おっさ…ん」

ぱぁ…と、艶やかに…艶っぽく、笑った

…や、やばくないか？

心臓がどくどくと忙しなく動く。相方を拘束していた触手がほどけ、力無くぺたりと座り込む相方。…その仕草が、妙に…エロい

と、とにかく言われた通りに、相方を…うん、後ろから抱き締める。相方は全く抵抗せず、むしろ嬉々として膝に乗り…その、あれだ。男のデリケートな部分に、柔らかい尻を押し付ける…

ふわりと香る子供のような甘い香りに、しっとりと香る女の匂い…。いつまでも嗅いでいたくなるような甘さに、頭を振る

「はぁ…ぁ…おっさ…おっさ…んぅ…」

すりすりと、子猫のように背中を擦り付けてくる相方。さらさらし

た金髪が肌をくすぐり、どこもかしこも柔らかな肢体が、ほぼ剥き出しの俺の身体に密着する

…こいつ、意外と…

「正気なのかお前もか？見た目幼女は攻略対象？触手系美少女は守備範囲ですねそーですね。あなたとあたしもランデブー？ただしローションゆーくんで」

『溶かすで？』

「…」

湯だった思考がちょっと冷めた。ありがとうエイト、ありがとう腐れスライム

「…おらよ、好きにしろ」

「…ぁ…」

相方の鼻先に手を差し出す。相方はほにゃ、と口元を笑みに変え、赤い、小さな舌を伸ばして手のひらを舐める。手首から中指の先に向けて、ゆっくりと、唾液の線が伝う。滑った肉が指先をねぶり、ぞわりと背中が粟立った

…これを、５時間？

長い戦いになりそうだ…。と少しだけ、血が集まってしまった部分から、さりげなく相方をどける

「たまにだけど見てるのもよし。これはこれでよし。ムラッとするのに和むのは何故？ダンセイニちょっと膝に乗れるか」

『ダンセイニやのうてスライムやけどな。そしてお前膝ないやん。…とりま俺、脱出の準備しつつ向こうに意識戻すさかい、レティたん正気に戻ったら呼んで』

「次会うときは賢者タイムか」

『スライムやなかったならそうやねんけどな…なんちゅー美味しいオカズ…。そしてなんちゅーヘタレオブジイヤーやねんトラさん…。いや敢えてトＬＯＶＥるさんて呼ぼか？』

「ほっとけ！」

…ほんと長い戦いに…「ぅぁっ…！？ば、かやろ…吸う、な…っ！」

22、媚薬服用後　R－15（後書き）

あ、ありのままに起こったことを話すぜ！

精一杯、ちょいエロでＴＳ少女が男性的におっさんを攻めて責めまくる描写をしていたと思ったら、いつの間にかヤンデレっぽくなってた！

更に視点をおっさんに戻したら、触手系美少女が全てのインパクトを持っていきやがった！

超スピードとか催眠術なんてちゃちなもんじゃねぇ、

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

これだから人春のサブキャラは！サブキャラは！

主人公よりキャラが濃いから！あっという間に全部食ってきやがる！

エイトたん可愛いよエイトたん

ちなみに

←←←

ミーラグリーズ

↓魔神系触手族モンスター

出没地域：リトマス全域（魔界）

危険度：Ａ　有害度：ＥＸ

「奴に会ったら諦めろ。命だけは助かるはずだ」

触手を含めると体長１００ｍに達する巨大モンスター。
全身に魔法、薬品を無効化する粘液を纏っている。また、再生能力がある。
油断しているところを剣や槍で一撃で仕留めない限り、倒すことは事実上不可能。だが、個体差により弱点が変わるため、ミーラグリーズの討伐例はファルガナ３０００年の歴史上、３回しかない

リトマスの全域を自由に動き回り、極稀にファルガナにも迷い込む人間の体液を好み、人間を発見した場合、殺しこそしないが捕獲し、体液が分泌されなくなるまで性的に陵辱しつくすと言われている

一部の魔族には、稀にミーラグリーズを操るスキルの持ち主が生まれるとされる

…ぶっちゃく、原作主人公（笑）が操る触手の本体っす

なんで転生者な方がこんなに濃いのかは知らん。分からん

しっかし長いな今回！

がんばったよ！

おっさんヘタレ！超ヘタレ！キスくらいしろよ！バーカッ！

明らかに好感度ＭＡＸじゃんアホーッ！

次回は媚薬効果終了後…にするか迷い中。この辺りで黒岩さんの閑話でもいれるか…？

お知らせ！

挿し絵まとめに

Ｎｅｋｏ２ｔｒｓ　さま　と　時村　さま　の笹田絵を追加！

何故書いたしｗｗｗ

何故書いたしっ！？ｗｗｗ

正直笹田の絵を本編に張るのは躊躇ｗｗｗ。ヘタレてごめんなさいｗｗｗ

そして

１０、魔女の晩餐　に

わた　さま　の

酔いどれおっさんを追加！

イチャイチャすんなゴラァーッ！！一線超えさせっぞ！？（待

最近俺、調子に乗ってんなぁ…

と凹み気味の人春でした！

今回の！テンプレ！

↓微エロ

あんまエロくないよね！ごめんね！次があったら頑張るよ…

23、冒険再開（前書き）

仕事早いよみんな！

人春の仕事が間に合わない件！

えーっとえーっと

檸檬紅茶さま画、
ミーラグリーズの「ラグナエイト」です！

＞i25863－3259＜

わざわざ書き直してもらったぜ！
エイトたん、実は外見年齢自由自在！

更に「挿し絵まとめ」に
吉岡　眞吾　さまより頂いた
「レティーシア」を追加！
細かい仕事に脱帽せよ！
作者はびびった！

そして「挿し絵まとめ」と「22、媚薬服用後」に
時村　さま画、
「せうと？」を追加！

すでに犠牲者多数！

吐血、鼻血にご注意だ！

ちなみに俺はあばらが！あばらが！ようやく痛み薄くなってきたところだったのに！

23、冒険再開

…1時間37分。

トロトロに蕩けきった相方が、疲れて眠るまでにかかった時間

「耳を噛まれて首筋にチョップ落としたようにしか見えなかった件。そーいうプレイですかわかりんせん。どうせやるならおしりぺんぺん。赤ちゃんプレイですか幼女プレイですか?スパンキングは大人がやってもらうにはお金がかかるのに子供は無料な不公平。ところであたしの台詞は長イカ?タコなあたしがイカ娘」

…疲れて眠るまでにかかった時間。だっ!

身体を離し、ふやけきった指先に辟易しながら、ゆっくりとその身体を膝の上から退ける。時折ぴくんっ、と痙攣する相方に、肝を冷やす。立ち上がろうとして、足が痺れてるのに気付く。…まぁ、当然っちゃ当然か。なんだかんだで乗せっぱなしだったわけだし

少し身体を動かすだけで、甘い少女の香りが身体から香る。マーキング…ってわけでもないんだろうが、どうにも心臓が五月蝿い。…発情期じゃなくて良かった、と切に思う

「ところでトラーさん、あなたの足を舐めても良いか?良いな、答えは聞くが聞こえない。いただきます」

「あぁっ!?ちょ、まっ、やめ…どぅわぁあああきもちわりぃぃぃいっ!!」

うぞうぞと足を這い回り蠢きちゅるちゅると肌を吸う触手。ネチャネチャしてた足があっという間に乾いていく。けぷっ、と満足そうに腹部を撫でるエイト

「ぺろっ…こいつぁ処女の味だぜ。トラーちゃんのお手てクンカクンカペロペロしてここまでぐっちょぐちょになるたぁとんだ淫乱だわいなぁ。まぁエロ娘が飲んだ媚薬ってあたしの血液に当たる体液なんですけどねすいません元凶でっす」

「…もうどっから突っ込んでいいのかわかんねぇよ…」

てへっ、と言わんばかりに頭を手で叩くエイト。でも表情はアルカイックスマイルで固定され、目も閉じられたままだからなんというか…人形に悪趣味な悪戯をしているかのようだ

「…とりあえず、移動できそうだな。この空間にずっといると頭がおかしくなりそうだ」

右を向いても左を向いてもひたすらに虹色の奇妙な空間。遠近感も変になってるし、地面も見えないのにしっかりと大地を踏み締める感覚のせいで気分が悪い

「あたしはむしろ心地よいけど主観的な意見はやめるべきか?外なる世界がかみまみえる。噛んでませんよ神間見える。魔神モンスター舐め猫ですよ。なんだよ神様こっち見んな。いや見ろ!あたしの美しさを見ろ!そして加護れ!ちなみにエロ娘の身体はまだあたしのえろ汁でビンビンカンカンだから注意しよー。変なとこ触るとフラグがビンビン。トラーさんの股間のサーベルタイガーもビ」

「それ以上言うな」

つい手が出る。拳を振り上げエイトの頭に落とす…が、命中した途端ぐちゅりと頭が潰れる。グロテスクな光景に思考停止。そうしている間に頭が蠢き、綺麗な顔に戻る。…気持ちわりぃ!?

「骨無し野郎に需要はないか?優しく扱うことを推奨すっぞこら。あとあとテント張りましてございますかトラーさん。あたしでよければ相手しますなどうですな?見た目ちみっこ優しく犯してみませんか?じゃないと潰れる物理的」

「やらんわ!」

何考えてんだこいつっ!?いや、化け物の考えてることなんか分かんなくても仕方ねぇけどこいつは意味が分かんな過ぎる!

「腹減りでしゅよ虐待か?触手が絡み合って作る未曾有の快感に男がびっくりびくんびくん止まらなくなるのだわだわ。ベーコンレタス!尻にも太いの突っ込みますか。尻から手ぇ突っ込んで脳味噌あふんあふん言わせようず。お腹もすっきり便秘解消。まぁ手が無いので触手なわけですがですが」

「いらん。マジでいらん。断固いらん」

然り気無く距離を取る。ざわざわと足下から迫ってくる触手にぞわぞわっと生理的嫌悪感。…いや、こいつがじぃーっと見ていてくれたお陰で一線越えずに済んだ、っつー意味では感謝したいんだがよ…。こう、素直に礼とか言えなくなるのはなんでだろうな

てろーっと中から粘液を足らす触手の集合体で出来た穴を眼前に差

し出してくる。それを押し退け、相方の身体を抱き上げた。ってか何を突っ込めってんだ、ナニですね分かりませんって移った!?なんだこの頭ん中が侵食されてく感じ!?

頭を振って妙な口調を脳裏から追い出す。抱き上げた相方が、気絶…じゃなくて眠ってるのに荒い息を吐きながら、「おっ…さ、ん…」と俺を呼ぶ。熱いほどの体温と、ぬるぬると汗で滑る身体。どちらも不快なはずなのに、不思議と気にならない

「心臓高鳴りましたかそうですか。お姫様だっこ美味しいです。ところでパンツを履くこと推奨。破れた隙間から美味しそうなのチラチラチラリズム」

「見んな馬鹿野郎…。はぁ、すまんな、借りんぞ」

気絶…ああもう気絶でいいや。気絶した相方のマントを外し、腰に巻き付ける。ボロボロんなった鎧や服の切れ端は全部相方のポーチに突っ込んだ。これで多分、直るはず…。ここら辺で、俺が普段の生活でどんだけこいつの世話になっていたのか気が付いた

「…ありがとな」

熱い、小さな身体を抱く手に、少しだけ力を込める。…もっと、強くなんねーとな。正直、あの暴力女に鍛えられた辺りで満足してた。でも、これだけじゃ全然足りない。もっと強く、相方を守れるくらいに強くなるには…どうしたらいい?

「2人の世界かうらやらすぃーね。あたしも混ぜてと言ってみる。お喋り大好き女の子。ただしゆーくんは除く。関西弁のくせにユーモアが足りにゃぁよ。ゆーくんが漫才に混ざるは上等な料理にハチ

ミツをぶっかけするがごとき愚行。あれ？ハニートーストディスってますか？」

『…なんでやねん。名前呼ばれた？と思って来てみたらいきなりぼっちになっとるやん…。この1時間半で何があったんや…』

いきなりぽこっ、と地面から沸いて出る黄色いスライムに声を出さないように驚き、数歩後ずさる。揺れが伝わったのか、「ん…ふっ…」と気絶したまま色っぽい声を出す相方

「なんか分かりもうすた？ちなみにあたしはトラーさんがヘタレなことがわかっちゃっちゃ。見れば分かりますねサーセン」

『今日は突っ込んでやらんで。ほんまに心配してんからな？とりあえずこの空間通ればわりとどこにでも行けるわ。トＬＯＶＥルさんどっか行きたいとこある？出来る限りやったら送ってやれるで』

「行きたいとこ、か…」

目的地と言えばエルフの森だ。だが、モンスターが出るダンジョンで、気絶した相方を守りながら戦う術はない。…やっぱ何か手頃な武器の使い方とか覚える必要があるか？…となれば、エルフの森から程近く、安全な場所…

地図も相方に預けてたのは失敗だな、と舌打ちしたい気分を隠し、スライムに問う

「…エルフの森の近くで、かつ安全な場所に行きたい。行けるか？」

『無理やな』

…はぇえよ、答えが

がくっ、と力の抜けるのを感じながら、どうにか気合いを入れ直す。

…っつか、どこなら行けんだよ

『っちゅーか、エルフの森の近辺は強力なモンスター多いから安全とは言えへんねや。まぁ、俺やったら楽に勝てるけどな。適当に適度に安全っぽい街でええねんやったら直ぐにでも連れて行ったれるけど、どないする？っちゅうか親友帰ってきたし俺も気分ええから、ほんのちょっとやったらワガママ聞いてやってもええよ。具体的にはエルフの森のすぐ近くで開放する、とか』

「…もうそれでいいから早くやってくれ…。相方をベッドで寝かしてやりたい」

…それに、ディグルドの村で無ければどこでもいい。相方はメンタルが強いとは言えない。まさか自分が捕まったせいで、間接的にとはいえ俺が村を1つ潰した、なんて言ったら…考えたくもないな。塞ぎ込んでがたがた震える姿が目に浮かぶ。そういう意味じゃあ、あの糞野郎に感謝だな。こんな状態じゃあ、正気に戻ったときに村がどうとか気にする余裕もねぇだろ

『…で、押し倒す訳やな？』

「押し倒されるのだわな。ヘタレックスなトラーさんは受けだわいな。だからあたしの触手を尻から受け入れてみなイカタコイカ？天国なイカしてやるぜ。あたしタコですがイカフューチャーしすぎじゃなイカ？」

「うるせーよ放っとけよ突っ込まねぇぞ疲れたぞちくしょう」

この人外コンビとは会話してるだけで疲れる。『なんや根性ないなー』と笑う雄二郎。その液体の身体が棒状に変わり、先端が空間を貫く。…その先は…森?

『レティたんに伝えてんか?あんたには親友正気に戻してもろた恩がある。1度だけなら力を貸すわ。そして覚えときや【大路　光】、その娘が助かったのは俺のお陰や。お前1人やったらとっくに操奪われて洗脳されとったはずや。…この【貸し】、いつか必ず返して貰うで』

「あたしは2人に借りを作ってしまった件どうする。これは身体で返すしか?身体が無かった触手です。あぼん。どんな願いも可能なことなら聞いたげる。出来れば性的なアレが好き。あたしの体液飲むと初めてでも痛みがにゃぁよ?そのまま朝までナイトフィーバーだけどもども」

化け物2人に見送られ、森へと開いた道を見る。…モンスターの気配はない。確かに安全らしい

「…ああ。肝に命じとく。だが、出来れば二度と会いたくねぇ」

心も身体も「化け物」のスライム。元人間の、雄二郎

「化け物」のくせに妙に義理堅くて、人間が好きだと言うのに人間を襲う「化け物」、ラグナエイト

…こいつらのように破綻してしまえば、「人間」が目の前で死んでも何とも思わなかった自分を受け入れられるかもしれない

だが、もし俺が堕ちたら――相方が、1人ぼっちになっちまう
だから相方が1人立ち出来るようになるまでは、俺は「頼れる大人」でいなくちゃならない

「…おっ、さん」

寝言のように、うわごとのように、ひたすら俺のことを呼ぶ小さな女の子

…俺が、守るんだ。絶対に

決してこいつを傷付けない。「頼れる大人」は、こいつ相手に発情なんざ…しない。ただ慈しみ、育んでやらにゃあいけない

…よし、行くか

「じゃあな、糞野郎。じゃあな、エイト」

『おぅ、糞野郎の片棒担いだクズ。また会いたいな』

「別れの涙を舐めとりたい。スカ趣味ですかそうですか。スライムに棒が無いのにスライムの棒を担ぎましたかエロスですね分かります」

それは違う。と突っ込みたい…が、あえて無視して森に歩みを進める。くしゃ、と芝や枯れ葉、腐葉土が裸足の足の下で潰れる。ようやく地に足着いたことに安堵し…

「よく考えたら相方起きねぇと服がねぇ…」

これじゃ村や街なんか入れない。と頭を抱えた

23、冒険再開（後書き）

結局5時間もたないよ、ていう罠。

感想返信遅くてごめんなさい！

今回のテンプレ！

↓つなぎの中身のない話！

土日は他作品更新するから更新お休みですよ！

感想板の面白さが天元突破。そのユーモアセンスを分けてくれ

２４、依存（前書き）

どうにか仕上げたー

んーっと…

２１、顛末　に　七式　さんの
トラーさん無双
追加、

挿し絵まとめ　に　檸檬紅茶さんの
幼エイト
を追加

…何故書いたし!?何故この場面書いたし七式さァん!?

そしてエイトたん大人気ですねエイトたん

口調が難しいそうですがどうでしょう。あたし的にはイラスト書くのが難しい件。書くじゃなくて描くですよなサーセン。漢字じゃないと分かんないボケはアニメスタッフ苦労しただろうなぁと無駄極まりないシャフトの心配。化物語のファンが濃いか?八九寺Ｐ素敵ですのな八九寺Ｐ。両生類的親近感。雌雄同体的な意味で

無駄に出張るよエイトたん!

作者の脳内まで侵食してますがどうすんだこれ

24、依存

風に吹かれて飛ばされてしまいたい

「…いや、俺ぁ気にしてねぇから服くれよ」

…無言でインベントリの中からおっさんが今までしてた装備と同じ装備を引っ張りだし、木の影から投げ渡す。小さな溜め息が聞こえた

…顔が熱い。駄目だ。俺も着替えよう。まだ完全に薬が抜けた訳じゃないけど、正気を保てる程度には治まってる。魔法で水球を作り出し、頭の上で何度も弾けさせる。冷たい水の感触が、熱い身体を滑り落ちる。服と肌の間を滑る水滴に、「んっ…っ、ふ…」と声が漏れる。死にたい

ぐちゃぐちゃにされてから大分時間が経ったはずなのに、変わらずぬるぬると滑り落ちる粘液に辟易しながら、地面がびちょびちょになるのも構わずひたすら服を着たまま水を被る。いっそこのまま水に溶けて消えてしまいたい

身体と服に染み込んだ粘液の大体が水で流される頃には、俺の足下だけ大雨が降ったみたいにグチャグチャになっていた。これだったら地面掘り起こしやすいなー。埋まってもいいんじゃないか？いや、むしろ埋まるべきかもしれない

「おーい、わりぃんだが靴も…どうした。膝抱えて」

俺が隠れていた茂みの中を覗き込み、きょとん、として頭に疑問符を浮かべるおっさん。…その首筋に、僅かに見えるキスマーク…

…俺が、付けた、キスマーク

カッ、と頭に血が上る。水で冷えてカチカチと音を鳴らしていた歯が、口の中があっという間に乾く。「ぁ、ぅ…ぇぁ…」と意味のなさない言葉を発する。自分でもどうしていいのか分からなくて、でもおっさんのことを見ていたくない――おっさんに見られたくない――そんな思いに胸をもやもやさせる。今すぐ反転して駆け出したい気持ちで…そっとおっさんの首筋に手を伸ばす

「ぁん？どした…？」

「…」――触れる。熱い、肌。冷えた指先にじんしんと伝わる体温。胸の奥がトクン、と高鳴る。ざらついた肌の感触。浅黒い肌に、ほんのりと残る赤い印――「…ガーッ！！」

「ギャアーッ！？って め何すんだコラッ！？」

思いっきりつねり、引っ張り、キスマークを消す。真っ赤になった肌からキスマークが消えたのにほっとした

でも俺が付けたキスマークは覚えてるだけでももっといっぱい…それこそ胸板には両手の指の数以上にあって――馬鹿みたいに熱くなった顔を両手で隠す。だってだってだってうぁーもぉーっっ！！！

「やぁーもぉー！！なんなんだよちくしょう！捕まってごめんなさいおっさん助けてくれてありがとうおっさんバァカバァカ死にたい死んじゃえ俺！俺のバーカバーカッ！！」

「何なのお前どうしたっ!?あと必死に頑張った俺にこの仕打ちは何なんだよ!?」

焦ったように怒鳴るおっさん。なんだか泣きたいような気持ちで―っつかもう半分泣きながら、どうにか言葉を発し続ける。ほんのちょっとでも沈黙してしまったら、その間に耐えられない。そんな確信じみた予想

「うぇーんごめんなさぃぃいいいいいいバカー!バァカァー!なんなんだよーもぉー!!」

もう頭ん中がグチョグチョで、今すぐに逃げ出したいのにずっとおっさんに触っていたい。そんな矛盾した気持ちに頭をやきもきとさせながら、拳でおっさんの腹を叩く。思いっきり殴り付けたらすっきりするかもしんないけど、でもただおっさんに触りたいだけのような気がして、軽く、ポカポカと擬音が鳴りそうな力加減で、八つ当たりする

「でっ、いでっ、だぁーっ!何すんだコラーッ!!」

フカーッ!と尻尾の毛を逆立て、俺の両手を拘束するおっさん。無理矢理引っ張りあげられ、両手を頭の上で封じられながら…顔を、覗き込まれる

金色の、瞳。怒った表情。握られた腕に感じる力強さ

カ〜…っ!と頭に血が昇る。真っ赤になってるのが分かる。ただ顔を見てるだけなのに、何だか頭がぼんやりして、視界が滲んでくる。目が潤んでくる。口の中に唾液が溢れて、ごくり、と生唾を飲み下す音が妙に響く

「――うがっ！」

「コッ！？」

頭突いた

おっさんの顎を、思いっきりジャンプして脳天で打ち抜いた

「「…っ…っ…っ！！」」

俺は脳天、おっさんは顎を押さえて転げ回る。グチャグチャになった地面の上で。あっという間に泥で真っ黒に染まっていく服。でも視界はチカチカして頭はズキズキと痛い。そのまま悶えてたら、さすがに殴られ慣れてるからか、がばっ！とおっさんが立ち上がる

「はひふんはへへーっ！？ひらはんらひゃへぇはっ！？」

「ご、ごめん…そしてごめん…ちょっと何言ってるか分からない」

ガツンッ！と寸分違わず同じ位置に突き刺さる拳骨。視界に星が散り、くらくらと頭が揺れる。き…効いたぁ…っ！！

「～～～～ッッッ」

「ったく…ぐっちゃぐちゃじゃねぇか…。やっぱ一旦街に行きてぇなぁ」

頭を押さえて痛みに耐える俺をいないみたいに扱うおっさんにイラッとしつつも、我がことながら主観的にも客観的にも挙動不審だっ

た俺が悪いか…っとその怒りを納める。というか、怒っていい立場じゃないよなぁ…

「うぅぅ……って、はれ？」

かくん、と腰が落ちる。立とうとはするのだけれど、身体中に広がる倦怠感が、カタカタと小さく震える足が、それを拒否する

「あん？どした？」

いつまで経っても立ち上がろうとしない俺を不思議に思ったんだろう。顔に疑問符を浮かべて俺を見下ろすおっさん

「わ、分かんない…足に力がはいらな…ぅぁ…」

まるで足の震えに感染したかのように、足から腰…腰から背中、両腕や歯。全身が小刻みにカタカタと震える。原因が分からなくて困惑する俺の姿を見下ろしながら、おっさんは仕方ねぇな、と言わんばかりに頭を掻き、

軽く、俺を抱き締めた

「…っぁ」

胸の奥が、トクン、と甘く鼓動する

熱い。冷えていた身体が、急激に熱を持つ

軽々と抱き上げられる。膝の上に乗せられ、赤ん坊のように、お尻の下…ふとももに腕を置かれて、もう片方の手は、肩に回される。

お姫様抱っこ？

＞ｉ２６０９７―３２５４＜

ふわりふわりとした浮遊感。けれど身体はしっかりと抱かれている。浮き足立つ、というか、地に足が付かない、というか…このまま眠ってしまいたいような安心感に、きゅっとおっさんの服を握ってしまう。無意識に、当然のように、俺の手はおっさんの首に、そして背中に回されていた

「…ま、あんな触手に捕まって変な薬飲まされて、変にならないほうがおかしいわな。泣いとけ泣いとけ。少しは楽になるからよ」

にかっ、と笑うおっさんの顔が、驚くほど近い。吐息のかかる距離。僅かに香る、タバコの香り。俺の前では吸わずに、影でこっそり吸ってるのを知っている。俺を気づかって？…なんで？

…俺が、女の子だから？

じわり、と涙が溢れた。喉の奥がじんじんして、鼻がツーンとする。次第にその衝動は止まらなくなって、ポロポロと溢れ落ちる涙を、必死で拭う。見られたくなくて、おっさんの肩口に額を押し付ける

「うっ…くっ…っぅぁ…ぁ、ぅぅぅ…」

「ああ、ああ、恐かったなぁ。もう大丈夫。もう大丈夫だ」

ちが、う

違うんだよ、おっさん

恐かったけど、凄く恐かったけど、違うんだよ

嬉しさと悲しさがぐちゃぐちゃに混ざりあって、ボロボロこぼれる涙が止まらない。おっさんに女の子扱いされとことが悲しくて悔しいのに、嬉しくて泣けてくる。ホモじゃないはずなのに、おっさんに抱き締められて、背中をぽんぽん、と優しく叩かれる度に、甘い痺れのような切なさが胸を過る

――ようやく、理解った

『貴女、獣人くんを男として意識しているもの』

リーデスさんの言葉が頭に反響する。ぎゅうっ、と更に強くおっさんの服を握り締める

――好き、なんだろうか

おっさんのことを…

身体が発情しているから、なんて理由にはならない

例えば、今、ササダに愛の告白をされたとしよう。勢いのままに押し倒されたとしよう。身体は発情している。男だったら誰でもいい、と言うほどじゃないが、それでも…なんだ。「したい」

けど、嫌だ。絶対に嫌だ。ぶん殴ってでも逃げる。断る

それはホシちゃんだろうが、アベだろうと変わりない

けど、

けど、もし

おっさんが…愛の告白じゃなくてもいい。ほんの少し、冗談でも…

俺が、欲しい。なんて言ったら…

…っ、っ、っ、っ！

「…おっさんの、ばかぁ…」

とろりと蕩けた、甘え声。嗚咽混じりの「女」の声に、少しだけ驚く。でも、おっさんはめんどくさそうに「へぇへぇ」と返事すると、溜め息を吐きながら、俺の背を優しく撫でる。ぞわぞわっとした寒気のような快感に、声が漏れそうになったのを必死で抑えた

「はぁ…。はいはい、俺が馬鹿だよ。だから泣け泣け。好きなだけ泣け。お前1人くれーなら背負ってやれるから」

「～～～～～っっ！！」

嬉しい。嬉しい。凄く、嬉しい

まだ、この感情が恋なのかは分からない。ただ、発情してるときに目の前に異性がいるから、意識して――？

い、せい？

浮かれすぎてまともに回っていなかった思考が、戻ってくる。すぅ

…っと身体中の血が冷えるような感覚。先程まで感じていた春のようなぬるくて温かい心地好さが、一気に極寒の雪山に放置されたような寒気に変わる

…異性？

俺は…、今、おっさんに異性、と思ったのか？

当然だ。男が男を意識するなんて、余程特殊な事情や性癖でもない限りないはずだ

それは、まるで「俺」が消えてしまったようで……

……？

「…あっ」

――そもそも、「俺」の名前って何だっけ？

この世界に来て、まだ5ヵ月しか経っていない。…だというのに、まるでそこだけ消されてしまったみたいに…「俺」の名前が、思い出せない

妹の名前も、親の名前も、友達の名前も思い出せる。休日にはよくカラオケに行ったり、ペットの世話をして過ごした。一人暮らしを初めてからはゲームにどっぷりはまりこんでしまったけど、それでも週1で家族に電話をかける程度には、仲の良い家庭だった

――なのに、「俺」の名前は思い出せない

……はは っ

「…なぁ、おっさん」

「…あん?」

首を傾げるおっさん。眉間に寄ったシワ。下から見上げると、髭が結構長いんだな、って気付いた。あと、耳の裏にちっちゃいホクロがある。大したことじゃないのに、なんかおかしい

「おっさんは…俺がどんな人間でも」

…例えば、中身が男でも、エルフでも、…名前すら忘れちまうような人間でも

「受け入れて…背負って…慰めて…くれる…?」

どんよりとした感情。温かい感情なんかまったくない。氷のように冷えた思考が、おっさんを依存の対象に選ぶ。こうして頭の中の冷静な部分にはそれがいけないことだって、やばいことだって分かってるのに…口が、勝手に動く

おっさんは、怪訝そうな顔をしながら、ポリポリと頭を掻いて…

「…ま、てめぇが俺から離れたくなるまでは、面倒みてやんよ」

と、微笑しながら俺の髪を優しく撫でてくれた

「…あはっ」

口元に、笑みが広がる。嬉しい。嬉しい。嬉しすぎて

死にたくなるくらい、悲しかった

２４、依存（後書き）

ツンデレだったりヤンデレだったり忙しい娘だなぁレティ

古きよき時代のツンデレ娘書いてたらヤンデレになってた。不思議

昔のツンデレは暴力あんま振らなかったんだよ！武力行使しても後でごめんなさいしたり「うぁーっ！またやっちゃったー！」ってなってたんだよ！

最近のツンデレはツンデレじゃねぇ…「ツン」だっ！

…それそれでよしっ！！

感想返信が間に合ってませんねごめんなさい

このままでは作品が感想に食われる…っ！

感想と挿し絵で９割人気保ってる作品なのに…っ！？

ユーモアが足りねぇ！

今回の～♪　テンプレッ☆

↓ツンデレ

↓ヤンデレ

…いやいやいやリアルに笑えん火急の事態。感想板でも指摘されてるがどうするおれ？食われますか終わりますか。終わってどうするそれは負けですのな。斬新な発想が必要ですかそうみたい。新展開と新キャラださにゃあレティヤンデレルートなバットエンドですねわかりたくＮＯですＮＯＮＯ！

２５、次の街へ（前書き）

…ふっ

もはや、衝突は避けられぬ…

よろしい！ならば戦争だ！

絵師様ＶＳ人春！

ごめんなさいの全面降伏（；・ω・、）

勝てる未来が見えないから…

だってねぇ…？

さっそくやってくれましたさ！

２４、依存

に　時村　さまの挿し絵を追加！

２２、媚薬服用後

に　わた　さまの挿し絵を追加！

…挿し絵まとめから（ＮＥＷ）が消えないのておかしいな？おかしいな？（´・ω・`）

俺、疲れてんのかなぁ…？

25、次の街へ

いつまでも座っている訳にもいかず、とりあえず移動する。といってもまだ足に力が入らないので、おっさんにおんぶされたままだ。大虎になってもらう、という手もあったけど、今は人型のおっさんに触れていたかったから、おんぶにしてもらった。まぁ、今の身体じゃあおっさんが激しく動いたら振り落とされそう、っていうのもあるんだけど

今までだったらきっと恥ずかしさやモヤモヤで抵抗していただろうし、遠慮してたと思う。俺の服、びしょびしょに濡れてるし、こんな状態で背負われたらおっさんまで濡れてしまう。けど…広い背中に感じる安心感や、とくんとくん、と甘くうずく胸の熱さが妙に心地よくて、ずっとこうしていたくなる。まぁ、2人ともどろっどろだから、服は気にしなくても良かったかもしんないけど

…鎧が邪魔だなぁ。とは思わなくはない。硬い鎧はくっついてると痛いし、冷たい。まぁ、別にいいけどさ

「それで…あのあとどうなったんだ？でもってここはどこ？」

正直しっかり記憶にあるのは笹田がおっさんに弾き飛ばされた辺りまでで、その後はぼんやりと夢見心地でおっさんにセクハラかましてる記憶しかない。ぼんやりと真っ黒い格好した女の子の記憶があるから、あの娘が例の笹田に捕まってた女の子なのかな？

おっさんの首に後ろから手を回し、顎を肩に乗せながら聞く。…大丈夫、だよな？うん、大丈夫なはず。「女の子」が甘えてるだけな

ら、おっさんも嫌な気はしないはずだ

「ん、あー…」

おっさんは俺が馬鹿みたいに甘えるせいか、妙な顔をしながら、少し考え込むように首を捻り、

「あの後、か…。雄二郎…あのスライムな？あいつがどうにかしてくれた。笹田がお前にちょっかいかけることは、もうねぇ」

「…そっ、か」

ってことは、笹田は死んだ…いや、殺された訳か。複雑な感情が胸を過る。別に笹田に対してプラスの感情があったわけじゃないけど、それでも人が死んだ、と聞かされていい気分はしない。…と思う反面、あいつが死んで良かった。と心底安堵している自分がいて、混沌とした感情に胸がぐるぐるする。…めんどくさい奴だよなぁ、俺…

きゅぅ…っと手に力を込める。「ぐぇ…。首絞めんなっての…」と冗談めかして言うおっさんのヒゲを撫でる。じょりじょりと硬い感触を楽しんでいたら、「…分かった分かった、悪かったからやめろって…」と妙な顔をしたおっさんが俺を背負い直す

…そういや猫なんだよなぁ。髭はかなり重要なんだっけ？確か猫…ってか虎系の獣人が髭は剃られると、平行感覚が狂って真っ直ぐ立てなくなるんだとか。ちなみに子供のころは両頬から3本ずつ伸びてて、大人になるに従って普通の人間のように、アゴヒゲや口髭に変化するとかなんとか

どうでもいいことを思い出すのはやめて、とりあえず髭を弄るのを

中止。ぷらぷらと足を揺らす。「暴れんじゃねーよ…」とめんどくさそうにたしなめるおっさん。叱られたのでやめるけど、おんぶなんて十数年ぶりなんだ。なんだかんだいって、ちょっと楽しい。わくわくする、といっても間違いじゃない

意味もなくおっさんの髪を手で弄くる。ツンツン固めなのに、細くて指に絡む。固いのにやわらかい、不思議な感触。猫っ毛、って言うくらいだからもっと指に絡んでくると思ってた

「で、その後は？女の子たちは無事なの？村の人は？」

ぴくり、とふらふら揺れながらお尻を撫でていた尻尾が敏感に反応する

「――俺にも分からん。お前が拐われてすぐ俺と雄二郎もあの妙な空間に飛び込んだからな。洗脳してた笹田から解放されたんだ、女達は好きにやってるだろ」

「…？」

なんだろ。おっさんの身体が一瞬強ばった。表情にも苦いものが混じってる。おっさんは嘘吐くのが苦手だから、すぐに分かる

…ああ、なるほど。多分、だけど、女の子たち…無事じゃなかったんだ

そりゃあ、そうか。あんな触手の化け物飼ってて、モンスターも洗脳しているらしい笹田が、女の子にだけ優しくする訳ないもんな…。多分、立ち直れない娘もいたんだろう。だからなのかな、わざわざ着いたばかりの村から、補給もしないで逃げるみたいに移動したの

って。

…で、おっさんは俺のこと心配して話さない、と…言うことなのだろうか？

…なんか、照れる。恥ずかしい。けど、嬉しい。頬が熱くなる。この熱さがおっさんに伝わればいいのに、と思いながら、冷たい鎧に頬を押し付ける。冷たくて気持ち良い。自分が豆腐メンタルだって自覚はあるし、ボロボロになった女の子見たらショックは受けただろうけど…。そこまで心配しなくてもいいのに

「…んっふふぅー…」

「何だよ、気持ちわりぃ笑い方しやがって」

「んにゃ？なんも？」

こんな些細なことで機嫌を良くする自分に、安い…「女」だなぁ、と苦笑いしつつも、やはり嬉しいものは嬉しい。多分俺におっさんみたいな尻尾があったら、今頃機嫌よくクネクネと動いていたんだろうなぁ、と内心で苦笑いする

いけないいけない。ニヤニヤ笑ってるのに気付かれる前に、話題を変えないと駄目そうだ。えっと、他に聞きたかったことってなんだっけ？

「ああ、そうだ。その雄二郎は？別行動？」

首を傾げながら問う。おっさんに顔を見られるのがいやだから、無駄にキョロキョロしたりするのをやめて、おっさんの後頭部を見つ

める

「親友見つけたから巣に帰る、だってよ」

「あ、見つかったんだ」

結局俺、何もできなかったなぁ。ユージローじゃないスライムっぽいモンスターにも出会わなかったし、ユージローが親友だなんて呼びそうなモンスターにも会わなかった。…もしかして人間だったり…

「お前を捕まえてた触手が例の親友だったらしくてな」

しないか。…しないんだ。残念。ってかあの触手なんだ…。…ま、まぁ、洗脳されてたんだから仕方ないかな？俺もかなり変になってたし…。ユージローの親友、って言うくらいだから悪い奴じゃなさそうだしなぁ…

「お前が洗脳解いたことに礼を言ってたよ。雄二郎も触手の化け物の方も、「なんか困ったことがあったら1回だけ力を貸してやる」だってよ」

「義理堅い奴らだなぁ…。ってか、あの触手見た目にそぐわず良い奴だったんだなぁ」

やっぱりなぁ。この世界って酷い奴はとことん酷いけど、その分優しい人とか、良い人の周りには似たような人ばかりが集まってる気がする。当たり前なのかもしれないけど、それでもやっぱり…ホッとする

「…そう、だな」

なんか急に顔をしかめるおっさん。…もしかしてリーデスさんみたいな性格してたのかな、その触手。おっさん生真面目だからマイペースな人に弱いんだよなぁ

「どうかした？」

「いや、なんでもねぇ。…それより、ここがどこか、なんだが…俺にも分からん。あのスライム野郎が適当に送ってくれたんだ。どうやったのかは俺にもよく分からん。今度あいつに会ったときにでも聞いてくれ」

「…えー」

適当にも程があるだろ…。まぁ、ユージローが送ってくれたってんなら心配することもないのかな？

…ってかそんなことより、もしかして俺たち今、自分がどこにいるかも分からず、どこに向かってるのかも分からず適当に歩いてるってこと？

流石にそれはちょっと…とじと目で後頭部を凝視する。おっさんは「ぬぐっ…」と小さく呻き、

「一応、街には向かってるとは思うんだがな…。エルフの森の近くに送ってくれた筈だし、街か村があるのは間違いねぇ。僅かにだが、この辺に人間の匂いと血の匂いが残ってんだ。多分猟師の狩り場か、ダンジョンの中なはずだ。この森事態がエルフの森っつー可能性もなくはねぇ…かったんだが、どうやらその可能性は消えたらしいな」

「おー…」

森の木々が途切れ、久々に真っ青な空が顔を覗かせる。どうやら丘の上らしくて、なだらかな草原の先に中規模の村が見えた

放牧でもしているのか、丘の中程まで木で出来た柵があり、その中を羊っぽい動物が集団で歩き回っている。モコモコした白い毛玉に、動物の手足をくっつけたような変な動物。ここから見ている限り人に襲い掛かりそうには見えないから、多分家畜なんだろう。村の方からは、白煙が各家の煙突からゆっくりと上がっている。時間はまだ昼過ぎくらいだから、仕事でもしているのかもしれない。でも火を使う仕事ってなんだろう。食器作りとかかな？

「ディグルトの村じゃ結局補給出来なかったし、あそこで補給しなくちゃね」

「だな。後は地理も把握しなきゃな…。歩けるか？多分揺れるぞ」

少し考えて、降りることにする。歩くだけなら問題ないし、もう村から見えるくらいの位置だ。他人におんぶされてるの見られるのは…恥ずかしい

「ん、大丈夫そう」

戦闘はまだちょっと踏ん張りが効かないから厳しいけど、頑張ればどうにかなる。村へと続く丘は結構デコボコしていて、大きな岩や倒れたらしい木がそのままになっている。しっかり気を付けて歩かなきゃ転びそうだ

「そうか、じゃあ行くぞ？」

「うん」

おっさんの背中を追って歩く。時折妙に凹んだ地面に足を取られそうになって、「わっ」とか「っとと」とか声を出してしまったけど、大丈夫…うん？

目の前に差し出される大きな手。意味が分からなくておっさんの顔を見ると、おっさんは照れたように「あー…」とそっぽを向き、

「手、使えや。杖代わりになってやる」

「…ぇ、ぁ、…ぅ、うん…」

おずおずと、手を重ねる

大きな手が、俺の手をそっと包む。「あ…」と声が漏れた

…なんか、これよりずっと凄いことしたはずなのに…ずっと、恥ずかしい。胸が、ドキドキする。…手、汗…ああ、もう！乙女か俺は！

おっさんに手を引かれて歩き出す。相変わらずデコボコした地面に足を取られそうになるけど、その度におっさんが手を引いて、バランスをとってくれる。うー…

「あん？どうした…？」

「別に？…こうやって女の子落として来たのかなぁ、って」

「…お前ね、それ前に似たような話したよな？俺ぁ結婚出来ねぇ男

なんだよちくしょう！」

「ご、ごめんごめん。まぁ、アレだ。その、もしもの時は…いや、なんでもないデス…」

だから俺は乙女か…っ！違うだろ…っ！！早とちりすんな…！まだこの感情が恋とか愛だとか決まったわけじゃないんだろって…っ！！

真っ赤になった顔を片手で押さえながら、フルフルと首を振る。違うんだよ…これは違うんだよぅ…！！

「どうしたよ？」

「…ごめん、そっとしといて…？」

「あ、ああ…」

あーもー…違うだろ俺ぇ…。こんなキャラじゃねーじゃん。でも1回自分が女の子だって実感しちゃうと、一気に意識しちゃうんだよぅ…。って誰に言い訳してんだろ俺…

「お、お前本当に大丈夫か？いきなり真っ赤になったり凹んだり…」

「ん…。大丈夫。それよりも誰かいるよ？」

指差した先には、柵のすぐ側でこっちをじっと見ながら、手を振っている青年。いつの間に近付いてきてたのか分からなかったけど、村の人みたいだ

「とりあえず村の名前を聞いてみるか…」

おっさんに手を引かれ、青年の前に立つ…と、その青年の異様さに気が付いた

とんでもない美青年なのだ

さらさらした緑色の髪に、すっと通った鼻筋。切れ長の鳶色の瞳は物憂げに細められている。着ている服も一般的な農作業用の地味な服なのに、彼が着ていると王子様のようだ

そんな彼が、にこっ…と極上の笑みを浮かべながら、甘い声音で言葉を発する

「ようこそ。ここは肉欲の街、エロイカ。君たちは男が好きかな？女が好きかな？」

「「…え」」

25、次の街へ（後書き）

後書きに書くこと…ないホー（、・ω・、）

というか最近感想板が作者と読者の交流板になってません？いや嬉しいけど。読者粘着型の人春的には正しいんだけど…？

な、なんか間違ってる！？
間違ってますか！？

教えて偉い人！
この作品の感想板のアットホームっぷりは異常だよ！？

今回のテンプレ

↓おんぶしてドキドキ

↓されててもドキドキ

↓手を繋いでドキドキ

↓繋がれてもドキドキ

↓舌が暴走でドキドキ

↓耳が勘違いドキドキ

ここの描写むしろおっさんでやりたかったなぁ…

おっさんの狼狽っぷりがレティ視点だと見えない…

さすが！猫被るのは上手いね！（ドヤァ

26、花街（前書き）

間に合った…かっ！？

また挿し絵もらったホー

七式　さま

と

エイフライ　さま

からです

新しく作る「投稿板」に置いておきますので覗いていってくださいなー

26、花街

…聞き間違い、かな？

いやいやいや、だってそんな…直球でアウトな名前の街…ってか村があるわけないじゃん。だって名前がエロイカだぜ？エロイカ。ねーよ。ははっ、まったくとんだ空耳だぜ

と首を振って乾いた笑いを浮かべてたら、美青年はじぃっ…と熱い眼差しをおっさんに向け…。やたら爽やかな笑みと、甘い声で、言った

「やらないか」

ぴしっ、とおっさんが硬直する。握られた手から、尋常じゃない量の汗をかきながら固まるおっさんに、美青年は言葉を繋げる

「あなただったらお金なんかいらない…。僕と熱い夜を過ごしてみませんか？」

「みませんっ！」

叫びながら俺の後ろに隠れてガタガタと震えるおっさん。…いや、まぁ、気持ちは分かるけど、さ

「そうか…」

と心底残念そうにため息を吐く美青年。そして、その視線が俺を捉える。爪先から頭の天辺まで艶っぽい視線が這い回り、ついつい手

が出そうになるのを自制する

「なぁ…スケベしようや…」

「!?」

え!?俺も!?節操ないなあんたっ!?

慌ててぶんぶんと首を振る。「そうかい…」と悲しそうに呟きながら、「魅力、落ちたかなぁ…?」と首を傾げる美青年。どうやら無理矢理、みたいなのはないらしい。それにちょっとだけほっとしつつ、距離を取る

美青年はそれに気付き、憂いた顔を作る。長い睫毛が瞳を覆い隠し、ドラマか漫画の1シーンみたいだ

「この街…まぁ、街と言うほど大きくないんだがね。エロイカは簡単に言えば色街。身体を売って金を稼ぐのが当たり前の街なんだ。この街には地位も種族も関係ない。大事なのは男と、女。それだけさ」

ふっ、と笑いながら意味の分からないセリフを吐く美青年。…何言ってんだこいつ

「王都の高官も来るんだよ?ああ、立ち話もなんだね。良かったら僕が案内するけど…」

「…そういう目的じゃないんでいーです…。その、旅の途中で偶然立ち寄っただけなので…」

俺もおっさんもぶんぶんと首を横に振る。恐いんだよ。超恐いんだよ。露骨に「やらないか」とか言われて一緒に行動するとか超恐いんだよ

「まぁそう言わずに」

「ならなんで聞いた！？」

にこやかに笑いながら俺の肩に手を回そうとする美青年の手を避ける。美青年は笑顔のまま避けられた手をみつめ、やがて悲しそうに歩き出す

「どうしたんだい？早くおいでよ」

「「…」」

話が通じてない…。この美青年が話を通じないだけならいいけど、まだマシ。街の人たち全員話が通じなかったらどうしよう…

「おっさん…」

「…最悪補給なしで逃げ出すぞ」

表情を引き吊らせているおっさんの言葉に頷きつつ、仕方なくおっさんに手を引かれながら美青年の後を追う。途端に、嬉しそうに顔を綻ばせる美青年

「ああ、言い忘れたね。僕はディートリッド。リッドと呼んでほしいな。君達は？」

ニコニコ楽しそうに笑うリッドに調子を崩されつつ、「俺はレティーシア。こっちは」「大路だ。好きに呼べ」と自己紹介。それだけで、ぱぁっ…と嬉しそうに笑うリッド

なんか子供みたいな奴だな。身長なんか１７０代後半くらいだろうし、身体もすらっとしつつも鍛えられてる感じなのに、やってることが子供っぽい

「この街では売り子でもそうじゃなくても、誘われたら答えなきゃダメだよ？
男が女を誘うなら「なぁ、スケベしようや…」
男が男を誘うなら「やらないか」
女が男を誘うなら「今日は帰りたくないの…」
女が女を誘うなら「あなた、タイが曲がっていてよ？」
って聞いてくるから、ちゃんとイエス、かノー、で返事しなきゃ駄目。沈黙はイエスと取られるから、その場で押し倒されても文句言えないからね」

「なんだこの街!?頭おかしいんじゃないかっ!?」

思わず頭を抱えて叫んでしまう。どう考えてもバカばっかりじゃねぇか！

リッドはぷーっ、と頬を膨らませると、唇を尖らせて俺を睨む

「アレクのこと馬鹿にしたら駄目だよ？確かに問題はまだあるけど、このルールがあるから売り子とお客様間でトラブルが起こるのは減ったんだから」

「…アレク？」

つまりアレか?そのアレクってやつがバカだからそんな訳の分からないルールがまかり通ってると。…ちょっと詳しく話を聞きたいような、関わりたくないような…。複雑だなぁ…

「アレクは僕達みんなのお父さん、かな。モンスターに襲われて壊滅した村とか、色んな理由で虐げられてたり、単純にお金が無くて生活出来ない家から子供を買い取って、娼婦や娼倅として育ててくれたんだ」

嬉しそうに言うリッド。でも、それって…

「…お前、それは…」

おっさんも複雑そうな顔で、リッドを見つめる。リッドは「?」と首を傾げているけれど…それがどんなに悲しいことなのか分かってるのか?

…いや、ここは異世界なんだ。しかも文化圏としては中世のそれに近い。本当に娼婦として働いていたら、もっと酷い目にあっていたかもしれない。少なくともリッドは幸せそうな顔をしているし、生活にも困っていないんだろう。…俺達がどうこう言って良いような問題じゃ、ないのかもしれない

何か言いたそうな顔をしていたおっさんの手を引き、首を振る。苦い顔で口を閉じるおっさん

…ってか、タイミング逃して繋ぎっぱなしだけどおっさん、恥ずかしくないのかな?…やっぱアレかな?俺はあくまでおっさんにとっちゃ女の「子」なのかな…。今までは何とも思わなかったことが、

少しだけ胸に引っ掛かる。…ま、別にいいけどな。子供扱いでも、ずっと一緒にいてくれるなら

長い丘を越えて、ようやく村に入る。…僅かに香る甘い匂い。遠くからは気付かなかったけど、村に入ると分かる。香水と、女性、そして男性の匂いと…「アレ」な匂い。それを無理矢理誤魔化すように焚かれた、甘い香の匂い

人はまばらで、ちらほらと欠伸混じりに道を行く人たちくらいしかいない。その人たちはいずれも美女、美少女、美男子、美少年で、眠そうに目を擦りながら足を引き摺って歩いていく

「まだ営業時間じゃないから活気はないけど、日が沈んだら凄いよ。男も女も目をギラギラさせて好みの子を探すんだ。こないだなんか、売り子じゃない子を抱きたくて５０万も積んだ人がいたくらいだからね」

くすくす笑いながら言うリッド。…よくよく周りを見回して見れば、民家だと思ってた建物は「お店」らしい。柵の中から中が見えるようになってて、いくつも椅子が置いてある。その隣には番台みたいなのがあって、恐らくそこに支配人が座るんだろう。目当ての子を選んで、中で…って訳か。この世界には写真とかないし、実際に見て選べるに越したことはないんだろうな

「…なぁ、お前…」

「うん？なに？オージ」

おっさんの声に振り返るリッド。おっさんは眉間にシワを寄せている。正義感の強いおっさんには、色々思うことがある光景なんだろ

うな…

「…お前、辛くねぇのか?さっきの口振りだと…男も相手してんだろ?悔しくねぇのか?嫌じゃねぇのか?」

…平和な日本で過ごした俺達の、ごく一般的な思考。俺だって、俺だからこそ、そう思う。男が男に襲われる…抱かれるってのは、凄く恐いし、気持ち悪い。アベだって心底嫌そうな顔をしていた。まして、いくらお金を貰えるからって…

そんな俺達の言葉に、けれどリッドは…不思議そうに首を傾げた

「気持ち良いことしてご飯が食べれるんだよ?別に辛いことはないよ」

きょとん、と。当然のことのようにあっけらかんと言葉を発するリッドに、おっさんは絶句する。俺も、何も言えない

なまじ言葉が通じるからこそ、余計に恐い。会話しているのに言葉が通じていないような怖気に身を震わせる

「お、前…っ…」

おっさんが何事か言おうとした、その瞬間

「あらー?リッド、お客さん?ちょっと早いわよー」

背後から聞こえた女性の声に振り返ると…でっ!?

「お、おっさんお座り!」

「ぉ、おうっ!?って俺ぁ犬かっ!?」

猫だけどな!じゃなくてっ!

振り返った先には、美女がいた

…下着姿で

さらさらした黒髪を結い上げ、青紫色の肌を惜しげもなく晒した、スタイル抜群の美女。よくよく見れば耳の上から小さな角が二本。目は金色で、爬虫類のように瞳孔が縦に裂けている。…肌が青紫って…なんていう種族だろ?

ふぁああ、と欠伸しながら、美女は目尻の涙を拭い

「んぁああ…ねむ…リッドぉ、連れてくるのはいいけどさぁ、昨日団体来たばかりなんだから他に行ってもいーじゃぁん…」

攻めるような口調で言いながらも、目は楽しそうに細められている。歩く度にたゆんたゆんと揺れる乳房に気圧されながら、しゃがみこんだおっさんの目を隠す。…あれ?なんで俺、おっさんに「見せたくない」って思ってんだ?

「違うよ、アイラさん。お客さんじゃないって。俺もフラれちゃった」

あはは、と笑うリッドに、「へぇ…リッドがねぇ…」とニマニマ笑う美女…アイラ?

アイラさんはしゃがみこんだおっさんの目を両手で覆う俺にニコッと笑いかけ

「…あなた、タイが曲がっていてよ？」

タイ？してな…と思ったところで、リッドの言葉を思い出す。出会い頭に誘うのはこの街の決まりかなんかなのか？と思いつつ、眉間に力を込めて睨みながら言う

「そっちの気はないです…」

「おっ？」と楽しそうに笑うアイラさん。長い犬歯が笑みとともに露出し、何故だかぞくりと肌が粟立った

「あたし、女の子専門なんだけどにゃぁん？天国送ってあげるわよん？今ならたったの５００ゲイル。男があたしを抱くには１０万ゲイルかかるんだから」

「いらないです…」

…なんか、男って馬鹿だなぁって実感させられる話だ。俺も男だったときって馬鹿だったのかな…？っつうか恐い。性的な視線で見られるのはもう勘弁してほしい。同性…うん、同性にまでそんな目で見られるのは嫌

「ガキ、いい加減に離してくんねぇか？」

＞ｉ２６２０３―３２５９＜

…やだ。ぎゅっと頭を抱き締めるようにして視界を封じれば、おっ

さんが困惑したように身動ぎする。アイラさんは笑い、

「んーふふぅ、青春ねぇ。ムラムラしたらいらっしゃい、貴女なら優しくしてあげる。魔族に偏見がない娘は大好きよんっ」

ばさっ！と背中から翼を生やし、先端が鏃みたいな形を細い糸みたいな尻尾を燻らせながらてくてく歩いていくアイラさん。…何故飛ばない

「アイラさん飛べないんだよ。生まれつき翼が変に折れちゃってるんだって。それで魔界から逃げてきたんだ。あっちは弱いと、それだけで死んじゃうらしいから。でも、魔族がこっちの世界で生きてくのも難しいんだよね」

「…本当に、色んな理由なんだな…」

魔族、か…。あれが、魔族…初めて見た。それにしても、やっぱりこの世界は厳しいんだな…

他にもリッドに案内されながら、村を歩いていく。途中で会ったのは、見た目１０歳くらいにしか見えないホビットの女性。右腕を失った犬系獣人の女の子。片目に眼帯をつけた美少年や、筋肉質な男性。不思議と容姿の整っている人しかいないのが気になって聞いてみたら、「ブス専とか肥満萌えとかみたいなニッチ層の店はもっと奥にあるんだ。外からぱっと見える範囲には綺麗所しか置いてないよ」との事。…本当に商売なんだな、と妙な気分になる

やがて案内されたのは、一際巨大な…ディグルドの村の村長の屋敷とほてんど変わらないくらい大きなお店。中からはガヤガヤと喧騒の音が聞こえてくる

「ここがこの街唯一のそういうサービスやってない宿だよ。一応出張サービスはやってるけど」

「頼まないから大丈夫。わざわざありがとう」

少しだけ微笑んでみせれば、嬉しそうにリッドも笑う

「週1回、えっと次は…明後日かな?明後日には行商人が来るから、欲しいものがあったらその時買うといいよ。分からないことあったら街の人に聞いて。皆客商売だから、愛想いいよ」

「あはは、ありがと」

「うんっ、じゃあ、またね?」

と笑い、去っていくリッド

…なんか、凄い複雑な気分だ

26、花街（後書き）

あえて期待を裏切る、それが人春ですとも

というかさすがに媚薬ご飯はねーよっ！村とか街とかとしてちゃんと機能しなくなるっ！？

ただの街ぐるみの風俗街だよ！

今回のテンプレ

↓人買い

↓魔族

↓いい人なのに…

閑話　アレクサンドロ（前書き）

や、や、やらないか♪や、や、やらないか♪
も～ぅドキドキとめらんないっ！

ニコニコのくそみそネタのクオリティハンパないよね、と

今日もギリギリですまない…

あとこの時間に更新になっちゃうと人春が眠くてユーモアのある感想返信が出来ないことに気付いた

閑話　アレクサンドロ

――同時刻。エロイカ・最高級店

そこに、彼女たちはいた。ふかふかした絨毯を踏み締めながら、ガチャガチャと鎧を鳴らし、彼女は目の前を歩く少女の後を追う

少女は何が楽しいのかニコニコと笑いながら、さらさらした黒髪を揺らして鼻歌など歌いながら、チラチラと後ろを歩く金髪の美女を見る。「…何か？」と彼女が聞けば、少女は「んーん？綺麗な女の子だなぁって」と邪気のない笑みで返される。あまり褒められなれていない彼女は、「…それは、どうも」と頬を染めて引き下がる。予想以上に少女の様子が幸せそう…否、「満たされ」ていて、どうにも調子が狂う

やがて目的の部屋に着いたらしい。一際大きな観音開きの巨大な扉。少女はノックすらせずにその扉を開け、

「おとーさぁん、お客さぁん」

甘ったるい声で室内に呼び掛ける。７、８歳くらいにしか見えない少女。フリフリした可愛らしい服を着た彼女が実は３０過ぎのホビット族だということは、お客様には秘密らしい。売り子には公然の秘密どころか話のタネにすらならないが

「ぉ～ぅ、今行くわい」

のそのそと妙に鈍い動作で、少女と共に現れたのは…巨漢。圧倒的なまでの巨漢

分厚い筋肉に守られたデコボコした身体。２mを超えるフレームにこれでもかとばかりに詰め込んだ筋肉は鋼のようで、少女は思わずうっとりとしたため息を漏らした

髪は七色に染められたファンキー極まりないアフロヘアー。顔にはピンクにラメ入りの星形フレームのサングラス。服装は素肌の上に革のベストとぴちっとしたブーメランパンツ。鼻の下から口の横を通って顎まで伸びる口髭はドピンクだ。あと胸毛スゲェ

全体的に濃い。それが、彼女――シャルロッテが『色欲』のアレクサンドロに抱いた感情だった。思わずキャラ崩壊しかけるようなインパクトに、一瞬思考を停止するシャルロッテ

そんな中、アレクサンドロは甲冑を身に纏ったシャルロッテ爪先からじっくりと見つめ…

「なぁ…スケベしようや…」

「するかぁっ！！」

勢いのままに抜刀しかけるが、どうにか自制する。この街のルール的に、一度断られたら無理に誘うことは出来ない。アレクサンドロも「ＯＨ…。ツレナイぜぃ…」と額に手を当て身を捩る。少女が「じゃあじゃあおとーさぁん！あたしあたし！今日あたしが相手するぅー！」と跳び跳ねてアピールしている

…全女性のためにもこの場で切り捨ててしまいたい。そんな思いと共に頭痛を感じてきたシャルロッテだったが、どうにか任務を思い出す

剣を抜き、ゆっくりと敵意が無いことをアピールしながら、剣尻を相手に向け、左手は胸に。踵をあわせ、ぴったりと太ももを閉じた直立不動。剣尻に掘られた薔薇と美女のレリーフに、アレクサンドロは目を細めた

「女王直属の近衛親衛隊第３大隊副長。シャルロッテ・カーディナルであります。本日はＳ級相当冒険者。アレクサンドロ・フィナッツァ殿に王命を伝えるために馳せ参じました」

…すぅ、とアレクサンドロの空気が変わる。チャラついた濃いおっさんから、歴戦の戦士へと。自分よりも高みにいる戦士が目の前にいる、その実感に、シャルロッテは身震いした

「ミルム、おめぇは帰んな。夜は１０時ダ。間違えんなヨ？」

「えー、うーん…はぁい、後で教えてねぇ？」

不満そうにしながらも、アレクサンドロの言うことを聞き、名残惜しげにチラチラ振り返りながら去っていく少女。正直一般人には聞かせられない話だったので、内心で安堵するシャルロッテ

「…ＯＫ、入りナ。と、言いたいとこダガ…。「お客様」が寝てンデナ。場所変えさせて貰いタイ」

「構いません。此方の方が急な訪問を謝罪します」

頭を下げる。アレクサンドロは１度頷き、部屋に戻る。その際にちらりと見えた室内には…ベッドの上に横たわる、３色の髪。つまり、３人は最低でも同時に相手にしていた訳だ。とシャルロッテは溜め

息を吐きたい気分でアレクサンドロが出てくるのを待つ

――『色欲』のアレクサンドロ。今年で37歳。12歳のころに冒険者として登録し、僅か数ヶ月でAランクダンジョンを攻略するという快挙を成し遂げた男。彼が何をどうやってダンジョンを攻略したのかは謎に包まれ、その一方でその方法が推測出来ている

彼は、性交渉において無敵を誇るのだ

どんなに経験豊富な美女だろうとも、汚れを一切知らない子供だろうとも、はたまたすっかり枯れ果ててしまった老婆であろうとも

勿論、男性にだって負けない

獣相手にすら負けない。…と、言われてたりもする。流石に噂だがつまり彼が…Aランクダンジョン、『淫魔の屋敷』を攻略した際は…恐らく、したのだろう。ボスモンスター…数々の男性を昇天…文字通り昇天させてきたAランクモンスター…『リリム』と

それから彼は、女性と、男性と、モンスターと、亜人と、魔族と…およそあらゆり生物と性交渉をし、彼が抱いた生物は万を余裕で超えるとかなんとか。流石に噂だと言ってくれ

もしかしたらあの凄まじく鍛え上げられた肉体も、性交渉の中で鍛え上げた究極レベルの性交渉用筋肉で…と馬鹿なことを考え始めた頭を振って、思考を入れ換えるシャルロッテ。「流石にアホすぎる。これではユートのようだ…、あいつに移されたか？アホを」と、小さく苦笑いしながら漏らした

「待たせた」

「いぇ、大丈――パンツを履いてください」

「脱がされちまったンダヨ。オレは気にしねェ。あんたも気にスンナ」

そりゃ無茶をおっしゃる。シャルロッテは笑みが引き吊るのを感じながら、ブラブラ揺れるそれを直視しなくて済むよう明後日の方向を見る。…生娘に見せていいものじゃないだろう…。拗ねたような思考。駄目だ、こんな奴絶対頼りにならん。八つ当たりである

ブラブラてくてくと来た道を引き返す。さっきまで先導していたのは可愛らしい少女だったのに、今は目の前にあるのはキュッと引き締まったおっさんの尻。しかも歩く度にブランブラン揺れる黒い物体がペチンペチンと音を鳴らし、かなり間抜け

込み上げてくる笑いを堪えながらどうにか歩いていくと、ＶＩＰルーム――さっきのアレクサンドロの部屋――よりは幾分グレードが落ちるものの、十分高級な品ばかりが並べられた部屋に通される。革張りのソファに弱小貴族じゃ何年経っても買えそうにない高級な家具。ほぅ…と僅かに没落貴族であるシャルロッテの口から、感心したような声が漏れた

「適当に座りナ。騎士ってこタァ飲み物はいらんナ？」

「はい。お心遣い、感謝いたします」

騎士は任務中、支給された食用品しか食べることを許されない。毒殺を未然に防ぐためだ。それを知っている、ということは…アレク

サンドロは、ある程度騎士の戒律を知っているということになる

ソファに座るシャルロッテ。その向かいに、テーブルを挟んで座るアレクサンドロ。ブラブラしていたのが足を組まれたせいで隠れて、ようやく人心地つく。僅かに戻った余裕で、シャルロッテは微笑した

「流石、情報が広いですね」

「アンテナと両腕は広くデカク張っておくに限ルゼ。いい女も情報も、その時逃したら手に入ラネェからな」

へらへら～っと笑いながら、革のベストを開くアレクサンドロ。その内から葉巻を取りだし、マッチを肌で擦って火を着け、葉巻を燃やす。甘く、渋い香りに顔をしかめるシャルロッテ

「で、何の用事ダイ？処女のお前さんが色街に来る、しかも王命なんつーモンをモッテ…。随分物騒じゃネェカ」

煙を吐きながら、口元だけ歪めて笑うアレクサンドロ。サングラスの奥の瞳は鋭く研ぎ澄まされ、もしかしたら性交渉なんかではなく、真っ当な方法でリリムを倒したのかもしれない、と思わせるに相応しいモノだった

ごくり、とシャルロッテは唾を飲み下し、鎧の内側に丁寧に折り畳んでいた、女性の封蝋が押された書簡を取り出す

「アレクサンドロ・フィナッツァ殿。あなたを徴兵させて頂きます。これが王命です」

「…徴、兵。ネェ…」

にたり、とアレクサンドロの口元が酷薄に歪む

シャルロッテは背筋にぞくぞくと寒気が走るのを感じながら騎士の義務として女王からの言葉を伝える

「3ヶ月後。女王は魔界の王を討つために大攻勢に出ることを決定されました。強いては戦力の上昇のために、Sランク冒険者、Sランク相当の冒険者、一部の有名な2つ名持ち、そして隊長各の騎士を集めた少数精鋭部隊を作るおつもりです。その12番隊副隊長として、アレクサンドロ殿を雇います」

シャルロッテとしても、理不尽だという自覚はある。Sランク冒険者でも、戦いを望む人間、望まない人間。当然いるだろう。特にアレクサンドロは――魔族すらも「娘」にしているのだから

しかも…

「…報酬は？」

やはり、来た。と思わざるを得ない。シャルロッテは苦い思いで、首を振った

「…ありません」

「ないィ？おいおい、冗談はよしこちゃんダゼ？命懸けで戦って無報酬なんざ…」

「この街、」

アレクサンドロの言葉を遮るように、シャルロッテは言葉を繋げる

「――魔族が、住んでいる。しかも多数…。そんな噂が、あるのですが…」

「――」

絶句するアレクサンドロに意図的に無理矢理作り上げた笑みを向けるシャルロッテ。内心ではこんなことをしなければいけない自分の不甲斐なさを呪いながら

「もし、そんな者がいたら…処分をしなければならないでしょう、ね…」

表情だけはアレクサンドロを挑発するように、けれど凄まじい感情に胸をグツグツと焦がしながら、シャルロッテは「ああ、報酬、報酬でしたね」。とわざとらしく言い募る

「強いて言うのならば、この街の安全です。昨日の内に我が部隊がこの街の中に入り込んでいます。我々、騎士団は武器商人のキャラバンに偽装し、武器と鎧、人員を運び込ませて頂きました。不自然に思わなかったのですか?昨日の急に来た団体…皆、我々の部下です。当然、貴方が素直に協力してくださるなら、必要ない戦力ですが」

そこで、一旦言葉を切る

そして、強くアレクサンドロを睨む。こうでもしなければ、シャルロッテは自分の言葉に潰れてしまいそうな程の罪悪感に苛まれながら、どうにかその言葉を口にする

「貴方が王命を拒否した場合、私の合図1つでこの街の「人外」全てを捕獲、処刑するように命じられておりますので」

…ポロリ、とアレクサンドロの口元から葉巻が落ちる。ふかふかした絨毯を焦がす葉巻を無感情な目で見下ろし、アレクサンドロはにやり、と笑った

「…えげつないことやるねぇ。道に迷った商人が偶然たどり着く、ってのも無くはなかったんだよ。だから…いや、最近弛んでたのかもしんねぇな。平和過ぎて人間を疑うってのを忘れてたぜ」

ボリボリとアフロをかき混ぜながらぶつぶつ言うアレクサンドロ。早く「ああ、分かった。協力する」。その言葉が聞きたいだけのシャルロッテは、先を促す

「…つまり徴兵についの答えはNO。ということですか?娘の命がかかっていても」

「おぅ」

軽く答えながらアレクサンドロは…ぐしゃっ!と、踵で目の前のテーブルを砕く。…見えなかった。戦慄を隠せないシャルロッテに、アレクサンドロの声が届く

「…っざっけんなゴラァ!いきなり来て前線で命がけで戦えだぁっ!?寝言は寝て言えや犯すぞクソアマ!」

――あまりの迫力に、言葉を失うシャルロッテ。…やはり、女の私が1人で来るべきではなかった…!交渉事も苦手なのに…!と内心

で後悔しながら、席を立つ

「…明日の正午まで時間はあります。よく、よくお考えください」

「…この場でそのセリフ吐くタァ、度胸あんナァおい…」

憤怒に燃える瞳が、シャルロッテを射抜く。シャルロッテは表情は変えず、泣きたい気分で足早にその場を去る

1人残された室内で、アレクサンドロは…ぽつり、と呟いた

「…先手必勝、か」

閑話　アレクサンドロ（後書き）

――同時刻、宿。

「…おっさん、ベッドがダブル1つしかないよ…」

「…ま、いんじゃね？
（平常心平常心。なんも問題ねぇよ。こいつガキだし）」

「え、いいの？俺も別にいいけど
（テントで寝るのとあんま変わんないか）」

「…お、おう。何も問題ないよなぁ？
（いやいやいやあるからね？ありまくるからね？ただでさえ色街だからね？雰囲気酔いとかあるからね？未成年に手を出したりしたら犯罪だよ俺？いや手なんか出さねぇけどっ！）」

「…っぅわ、…ふっかふか…ほら、おっさんも早く来てよ。ふかふかふかふか
（すげぇ綺麗なシーツ…久々に見たなぁ。真っ白じゃん。もしかしてこれ作るためにあの毛玉みたいな家畜飼ってたのかなぁ…？）」

「…おう、とりあえず風呂入ってからな。まだ湿ってんぞお前
（あー、なんか大丈夫な気がしてきた。やっぱガキだガキ）」

皆待ってたアレクサンドロさ…ん…あれ?濃いよ?

…ってかごーめーんーなーさーいーっ!

もう人春眠いです!

必ず感想返信するから今日はもう勘弁っ!!

皆さんお休みなさい!

ちなみに今回の話しはあえて情報小出しです

だから今出てる情報だけだと急展開っ!?ってなりかーもかも

ある程度溜まってから見るといいかもですー

ってこれ後書きで書くことじゃねぇ…

今回のテンプレ

↓脅迫

↓武力公使

27、武力行使　side，L（前書き）

前後編です

まずレティーシアサイドから

そして…やってくれたよ！

わた　さん　画

アレクサンドロ

＞ｉ２６２６２―３３６５＜

…まじパネェっす…

そして挿し絵まとめ、に

時村さま
・おっさんの鎧姿

檸檬紅茶さま
・抱き付きレティ

投稿板　に

わたさま

・身支度中

を追加します

…これからね！

27、武力行使　side，L

宿で一泊して、翌日。

おっさんとは一旦別れて別行動。宿屋の主人に確認を取ったが、一応食料品とかは売ってるらしい。お客さん…この村に立ち寄った人たちは大抵俺たちが部屋を取ってる食事付きの宿屋に泊まるか、「そういう」お店で一晩過ごすらしいので、基本的に食料には困らない…が、それでも嗜好品の類いは売っている

とはいってもそれは正直、旅やダンジョン攻略時に持ち込むには向いてないお菓子とか…惣菜？出来合いの品ばかりで、保存食やロープや調味料などの消耗品は売ってない。そんなもの売るよりも身体を売った方が儲かるからだろう

それなのになんでわざわざ1人で買い物に出てるかと言うと…

まぁ、アレだ。俺も男だった訳で…分からなくもないのだ。男の生理現象ってやつが

こんな街だし、おっさんもちゃんと男だ。そういう気分になってもおかしくないはず

――でも、俺が、嫌だ

知らない女とお店に入るおっさんも、おっさんが知らない女にデレデレする姿を見るのも嫌だ。もし、したいなら…俺の見えない所で、知らない所でやってほしい

嫉妬、嫉妬なんだろう。この感情は。でも、俺はおっさんのことが好きなのかが分からない。嫉妬…、しているかもしれない。けれど、俺には嫉妬する権利なんかないのだ。俺はおっさんにとって、ただの子供で…手のかかる、庇護対象でしかないのだ。だから、俺はおっさんに「他の女なんか見ないで」なんて言えない。

…思考が飛躍している。はぁ、とため息を吐いて頭を振る。「どうかしたニャン？」と聞いてくるお店の店員さんに「何でもないです…」と笑顔で返しながら、代金と引き換えに商品を受け取る。長細い、バナナみたいな形の黄色い木の実を、ピンク色の飴でコーティングしたお菓子。なんでもドワーフやホビット族に対して媚薬に似た効果を表すらしいが、人間には害がないらしい。ならエルフも大丈夫だろう。普通に甘酸っぱい木の実の果汁と、甘い飴のハーモニーに頬が緩む

「…タイが」「いりません。嫌です」「…残念にゃー」不服そうに尻尾を揺らす獣人の女の子に苦笑いしつつ、お店を出る。結構お菓子は買い込んだなぁ…。まだお金はあるからいいけどさ。モンスターの素材もいっぱいあるし。…そういりゃこの街冒険者ギルドないんだよな…

太陽の位置で時間を大雑把に確認する。もう少しでお昼。おっさんには昼過ぎには帰る、って伝えて出てきたから、もしおっさんがそういうこととしてても…多分、そろそろ終わってくれるはず

…なんとなく、気分が盛り下がる。カリカリと表面の飴だけかじって甘さを堪能しつつ、舌先で零れてくる白っぽい果汁を嘗めとる。「なぁ、スケベ」「しません。他を当たってください」「…残念だ。５０万までなら…」「いりません」残念そうな顔をする老紳士にうんざり。武器持ってるの見れば売り子じゃないのくらい分かりそう

なもんだけどな

…あれ？もしかして分かった上で誘ってるのか？…あー、なんか想像したら余計テンション下がる

はぁ…とでかいため息を吐きながら、空を見上げ――

「ぶわっ！？」「うなっ！？」

どすん、と衝撃が走る。飴がポロリと手から落ち、そのまま尻餅つく。――嘘だろ？いま、絶対に目の前に人なんかいなかった。いくら考え事してたからって、真っ正面から歩いてくる人に気付かないなんてありえな――「す、すまん！大丈…ぶ…か？」

声に、顔を上げる。彼の顔を確認した途端、「ぁ…」と小さく口から声が漏れた

「クロイワ…」

「レティーシア…ちゃん…」

半年近く前に別れた、「主人公」。クロイワ　ユウトが、呆然としながら俺を見下ろしていた

「随分雰囲気変わったな。顔を見るまで気がつかなかった」

「そうか？んー、自分じゃ気付かないもんだなぁ。レティーシアちゃんこそ可愛くなってるよ。なんか丸くなった？」

場所を移した俺たちは、とりあえず、ということで村外れまで向かう。あんまり人通りの多いところで「勇者」関係の話をしたくなかったし、クロイワも村の中にいたくなかったらしい。理由を聞いても「それがレティーシアちゃんのためだから」の一点張りで全く教えてくれなかったが…

…とりあえず地面の下まで覆う全方位魔法障壁。流石に無いとは思うけど、不安要素は減らしときたい。まぁ、会話する限りクロイワに怪しいところは無いんだけどな

「丸く、か…。俺が、ねぇ。丸くってより、慣れかな？色々あってさ」

苦笑いして見せれば、「色々ってなんだよ」とクロイワも笑う。…クロイワの方は、随分変わっていた

まず、身長が１０ｃｍ以上伸びている。顔を見て会話してると首が痛くなるくらいだ。体つきも引き締まり、細く、しなやかに鍛え上げられた筋肉はどう見ても普通の少年だったクロイワのイメージに重ならない。背中に背負った大きな木製の杖も、腰に下げた片刃の長剣もそのイメージに拍車をかける

「クロイワの方こそ色々あったみたいだな。体つきが全然違うじゃん。前にあったときはこう…もやしっぽかった」

『――我が君よ、この無礼な小娘をキュッとしてはいかんかえ？』

ゾクッと背筋を走る悪寒。全力で障壁を強化した瞬間、ぴしりっ…と致命的な音が【地面の下】から聞こえる。――あっぶねぇっ！？リーデスさんに足下からの不意討ち何度も食らってたから防げたようなもんだぞ今の…

『ほう、今のを防ぐのかえ』

ぞわわっと未だに納まらない悪寒に表情を歪める俺と、「な、なにやってやがんだよエル！」と慌てるクロイワ

『…フンッ、我が君を馬鹿にするのが悪いんでいるんす。霊族の小娘ごときが、我が主を馬鹿にするなど畏れ多いわ』

なんか俺に罵詈雑言を吐きながら、クロイワが背負っていた大きな杖からふわり、と浮き出るように現れる少女

深緑の髪を首筋で揃えたおかっぱ頭。１０歳くらいかな？透けるように…というか実際に半透明な、真っ白い肌。ぱっちりしたつり目気味の茶色の瞳。着ている服は…なんていうんだろう。映画とか漫画の陰陽師が着てそうな、真っ白い服だ

…ってか、半透明…って

「…幽霊？」

『…ほほぅ、我が君ともやしを馬鹿にしただけに飽き足らず、よもや朕まで馬鹿にするとは見上げた度胸よ。この朕をたかだか怨霊と同レベルに扱うとは…っ!!その度胸に免じて取って置きの死招き草で貴様を咲かせて魅せようかえ…?』

ゴゴゴゴ…ッと凄まじいオーラを背負って俺を睨む女の子。な、なんだこの子!?見た目はともかく凄い強そうな…いや、そうでもないかな?強いは強いけどリーデスさん程じゃない。多分…頑張れば勝てる

魔力を練り上げようとした瞬間、慌てたクロイワが割り込んできた

「待て待て待てって!落ち着け!エルもそこまで怒るなって!レティーシアちゃんにも悪気があったわけじゃないんだから!」

『ぬぅ…我が君がそこまで言うのなら…』

渋々、と言った調子で引き下がる女の子。ふわふわと空中に浮いたまま、ぽふっとクロイワの頭に顎を乗せて抱き付く。そのまま俺をキッ!と睨み、

『しかし覚えておくが良いぞえ小娘…もやしを笑う者はもやしに泣くのでありんす…。もやしは、太陽光の届かぬ絶望的な暗闇の中、それでも必死で身体を伸ばしたがんばり屋さんなんでありんす…。次、もやしを馬鹿にしたら尻の穴にタケノコが刺さる呪いをかけてみせましょうぞ…』

…この世界の住人は尻になんか詰めるのが好きなのか?なんて言っていいのか分からず困ってたら、クロイワが

「あれ？お前俺が馬鹿にされたことよりもやし馬鹿にされたことに怒ってねぇ？っつうか俺＝もやしでもやしが馬鹿にされるってどういうこと？なぁ？」

『細かい事気にすると禿げるぞえ我が君！』

「禿げねぇよ馬鹿！デリケートな男の子に何言ってやがるっ！？」

とかコントを始める。…仲良いなぁ

「あー、ごめんな、レティーシアちゃん。こいつ、樹木…ってか植物の精霊でさ、今は俺の杖に宿ってんだけど、人の話聞かねぇから困ってんだ」

なんか俺、蚊帳の外じゃないか？

んー、なんかやっぱり変だ。クロイワと一緒にいると調子が狂う。会話の主導権が握れないっていうか…。なんつうか、ひたすらクロイワが目立ってる気がする。…違うな、クロイワより前に立ったらダメ、みたいな強迫観念？思考誘導でもされてるのか？

「…なぁ、クロイワ。お前…」

「うん？どうかした？」

まさか魔法使ってないよな、と確認しようとした瞬間、

ドパァンッ！

と、火薬の炸裂する音が響き渡った

「な、なんだっ！？」

動揺しながらも村の中へと視線を向ければ、もくもくと黒い煙が空へと昇っている所だった。――火事！？しかもあの場所は…宿屋に近い！？

「すまんクロイワ！俺行くわ！」

俺が得意な魔法の属性は、水と風。両方とも上手く使えばこれ以上ないほど消火活動の役にたつ

「わっ！ちょっとたんまたんま！まだダメだって！」

「はぁっ！？」

…前もこんなことがあったような気がする。がしっと俺の手を掴んで動きを止めるクロイワに、内心の苛立ちが沸いて出る

「今のは合図なんだよ！女王サマの命令で亜人狩りをはじめたんだ…。エルフのレティーシアちゃんは危険だ！」

「なっ…！？」

クロイワが言っていること。意味も分からなければ、理解も推測も出来ない。どうしてそんなことになったのか、なんてさっぱり分からない。けど、ただ、分かることもある

――亜人…獣人であるおっさんが、危ない

「…クロイワ」

前はここで激昂して、クロイワに酷いことを言ってしまった。だから今回は、冷静に、頭を落ち着け、よく考える

…なんて、考えるまでもなく、やらなきゃいけないことは理解っている

「よく分かんないけど、助けてくれてありがとう」

…僅かに、捕まれた手から力が抜ける。クロイワが目に見えてほっとするのが分かった

「それから、前はごめん。俺、頭に血が昇っててどうかしてた。ごめん」

「あ、いや。別に…」

「【でも】、」

照れて視線を逸らすクロイワ。その顔を覗き込みながら――俺は、クロイワを睨み付けた

「――だったら余計に、行く理由ができた。情報ありがとう」

クロイワの手を振り払い、全力で駆け出す。後ろから名前を呼ぶ声が聞こえたけど、無視した

27、武力行使　side，L（後書き）

ギリギリかっ！？

ちなみに次回はおっさん&アレクさん　サイド！

土日はお休みっ！

次回は月曜日です！

ちなみにクロイワくんはもちょっと出るよ！

今回のテンプレ
↓街中ばったり

27、武力行使　side，O（前書き）

「いや、いや、いや…」

にこにこと、彼は笑った。水晶球に映し出される光景は、彼が知る【アカシックレコード】の情景と寸分違わない

彼の能力――【アカシックレコード】の接続権限。あらゆる未来を、過去を、現在を見通す万能の書物

『転生者』の行動以外は全てを見通す『攻略本』。これに従って、これの通りに行動していけば…自分が敗北する通り等はない

今回の一件――ファルガナ女王の命令による【エロイカ襲撃事件】。これは、後々に彼女の首を締める

女王は別に、エロイカの住人に対して思うことなどない。ただ、彼が流した噂――【魔界四天王の1名が、エロイカの街の売り子に紛れてファルガナ大陸内に潜伏している】。その噂を確かめるだけのつもりだったようだ

ついでに強者を仲間に出来るならよし、と。それくらいの軽い気持ちで、エロイカの街の人外を逮捕拘束する。一時的に拘束し、魔界四天王かどうかを調べる。それくらいなら構わないだろう。と、脳味噌までみっちり筋肉が詰まってる馬鹿な女王陛下は、己の考えを疑いもしなかった

けれどその軽挙により、〇〇…彼も知らない転生者と対立し、深い軋轢を産む

その軋轢はその後も後を引き…人間同士でにらみ合いを始める

我々はそこに全戦力を持って攻め込み、人間同士で戦って消耗した女王陛下を――討ち取った、のかもしれない

その後に自分が当然のようにファルガナ大陸で生活している記述から考えるに、そうとしか考えられない

これは未来の話。

現在ではなく、未来の情景。どうやら自分の周りには転生者が多くいるらしく、その情景は霞がかってよく見えない。だが、太陽の下でのびのびと笑い、時折表情を歪め、それでも安らかに眠る自分が、愛しい国民たちの姿が見える

魔族の大半は血と戦争を愛する戦闘狂だが、当然そうでない者もいる。争いを嫌い、平和を尊び、調和を愛し、弱者を助ける。そんな国民も、たしかにいるのだ

ならばそれを救おう。『未来』の我が救ったように

笑みを浮かべ、平和を胸に、戦いを止めよう

例え、この世の魔族を憎む人間を皆殺しにしてでも

愛する国民に、豊かな土地を、暖かい太陽の光を、美味しい食事を、安らげる寝床を与えよう

それが『王』。アカシックレコードに刻まれた『リトマスの王』

アカシックレコードに刻まれた記述を正確になぞっていけば、幸せになれる。間違いない。間違いないのだ

魔界の土では植物は育たず、魔界の生物は食用には向かず、魔界の住人は弱き者を蔑む。そんな現状を変えうる一手になるのだ

「…だから、すまない、人間よ」

我が理想のために。魔族の安寧の礎となってくれ

「――Ａｉｍｅｎ」

せめて祈ろう。我が神に。聖職者だったころを思い出しながら

「リトさま」

声と共に、背後に生まれる熱。ごぅ…っと空気を焦がしながら突如として燃え上がる空間。やがてそれは収束し――１人の少女へと変わる

「【エロイカ】の街に、爆弾を設置してきました。指示通りの場所に、３箇所」

そう言いながら膝を付く、赤毛の少女

乾いた血のようなどす黒い赤の髪で顔の右半分を覆った、１５、１６歳くらいの年若い少女。肌は白く、額からは捻くれ曲がった枯れ枝のような角が二本。だが、その片方は半ばから折れてしまっている。服装は首筋から指先までを完全に覆う黒いボディースーツ。華

奢でほとんど肉付きのない彼女の身体は、顔以外全て隠されてしまっている

ルビーをそのまま嵌め込んだような赤い単色の瞳が、感情を浮かべずにリト――我を、見つめる

ろくに感情なんか見えないのに、その様子はまるで「褒めて褒めて」と言わんばかりに尻尾を振る子犬のようで、我は思わず苦笑を漏らす。「？」と口をへの字に曲げたまま首を傾げる少女――レームシルク

我が魔界四天王の1柱。そのチート／いんちきは――「炎を統べる程度の能力」

あらゆる炎は彼女の管理下にあり、自身の身体を炎に変えて他の場所に「発生」させることも可能な彼女の能力は、奇襲に向いている

「ええ、ええ。ご苦労様でございます。感謝のしようもございません。それで、仕事のご褒美ですが、魔界蜂の蜂蜜が手に入ったので――」

「頭を撫でて頂きたい。あと優しく愛を込めてレム、とお呼びください。ほっぺにキスとかして頂けるとグッドです」

――……ハァ

性格には、問題ありなのだが

レームシルクのほんのり暖かい、ふわふわした髪を撫でながら、大きな溜め息を漏らす。

…性欲を持て余すぞー？

我も健全な１３歳だぞー？

美少女の頭を撫でる「だけ」とか生殺しだぞー？

じっと我を見つめながら、ほんのりと頬を染め、僅かにはにかむレームシルクは、半端じゃなく可愛いのだ

27、武力行使　side，O

レティに無駄な気を回されてやるせない気分になっていた大路は、何をするでもなく宿の一室でだらん、とくつろいでいた。まるで休日のおっさんの如く

というのも理由はある

まず、彼の相棒であるレティ…レティーシアという――少なくとも身体は――少女には、多数の問題点がある

男性から少女へと変わった彼…彼女（？）は、自分の行動が、自分の言動が、相手にどんな印象を与えるのかあまり理解出来ていない

この世界に来て約半年。内、４ヶ月は魔女の屋敷、１ヶ月半はダンジョンや移動などで、彼女は特定の人間以外とは会話すらしていない

つまり、対人スキルが恐ろしく低い。それは常識や友人付き合いという意味での対人スキルではなく――「女性」としての対人スキルである

例えば、女性なら、不用意に男性の身体に触れない。無駄な勘違いを招きかねないからだ

ならば、男性が無断で女性に触れるのは？アウトだ。逮捕だ。セクハラだ

だが、男性が男性に触れる。触られた相手は気持ち悪いと思うかもしれないが、やった方はそこまで気にしない

更にレティーシアの価値観で言えば、「女の子は男に甘えてもいいだろ」である。それで相手がどんな感情を抱くかを考慮に入れていない。大路に関しては例外とも言えるが、彼女は大路がレティを子供扱いするために、「それはない」と思い込んでいる

あるいはそれは彼女の「男」としての最後の砦なのかもしれないが…。今はそんなこと些細な問題だ

自身を「女の子」として認識しながらも、本人の根底にあるのは「男性的な価値観」なのである

根本的な部分で、レティーシアという少女の中身はアベコベで、ぐちゃぐちゃなのだ

だから彼女は――直球なのだ

普通、女性ならば言わないだろう台詞を…平然と、吐く

今朝、大路とレティが寝ぼけ眼で朝食を取っているときだった

『その…おっさん、溜まってるんじゃない？』

大路は吹いた。口に含んだばかりの水が、朝の気持ちのいい太陽の光に晒されて、キラキラと輝いた

『俺、お昼くらいまで出掛けるから…。え、と…好きにしていいから…。あ、お金置いてくな？…お昼過ぎには帰るから、な？』

顔を赤く染めて、チラチラと咳き込む大路を振り返りながら部屋を

出ていったレティの姿を思い出し、大路は頭を抱えたくなる

（――そんなに…っ!?そんなに溜まってるように見えたのか…っ!?俺が気付かなかっただけで、ヤバい目付きとかしてたのか…っ!?なんかあいつがモジモジしてたのってそれが原因…っ!?全部俺のせい…っ!?）

見た目ではぽけーっとしているだけに見えるが、その尻尾は忙しなくベッドを叩き、内心では行き場のない苦悩が荒ぶっていたりする

（…仮に!仮に俺のせいだったとして…行くのか?行くのか俺?そりゃ…行きたくないわけじゃねぇ。半年だぞ半年。健全な中年なら…28は中年じゃねぇっ!…じゃなくて、健全な男なら…っ!!）

だが、だ

（行ったら絶対に匂いが映る…っ!あいつは俺ほどじゃねーが鼻が効くんだ…。どうも結構な量の香も使ってるみてぇだし…っ!他の女の、そして事後の匂い身体にくっつけたままあいつにどんな顔しろってんだ…っ!?気まずいだろ…っ!無理だろ…っ!!そこまで俺の面の皮は厚くねぇだろ…っ!）

ふと…そんな大路の脳内に、語りかけてくる声

虎の尻尾の代わりに魔族の尻尾を生やした小さな大路は大路（大）の頭上で人の悪い笑みを浮かべる

（オイオイなぁに行っちゃってんですかテメーこのやろー。だったら話は簡単だろ?あいつに抜いて貰えばいーんじゃねーの?あいつが媚薬飲んだ時思い出せよ…。ありゃ据え膳だろ?ん?どした?食

えよ、とびきり甘いご馳走だぜ？）

（黙れどちくしょう。心の中に天使と悪魔とかファンタジーにも程があるだろうが）

この場合、ボケたのも大路（悪）で突っ込んだのも大路（人）なんだから一人漫才になるのだろうか

更に声は聞こえてくる

大路（悪）とは対象的に天使の翼を生やしたミニ大路。どうでもいいがおっさんのビジュアルでソレは痛い

（待て待て俺。駄目だろ、あいつに手を出すとか。普通に犯罪だろ？児ポ法を警察官が破るのは不味い。それにあいつ男嫌いで性的なアレ苦手なんだろ？あいつのトラウマになっちまう）

（っ！だよな、だよなっ！？いやいやそもそも俺、あいつに欲情なんてしてな）

（だから風俗行こうぜ！おっぱいでかい女がいるところ！）

（お前もかっ！）

＞ｉ２６４８６―３３６５＜

大路（善）はポンコツだったらしい。大路は、ぶるぶる頭を振って馬鹿な考えを追い出す。追い出したはいいが…このまま色ボケた頭のままだと来月に迫った発情期にうっかり大路（悪）の甘言に乗りかねない

…となると…

「…へへっ」

自嘲気味に笑いながら、大路は部屋を出る。目指すは商店である。
他の街なら分からないが、多分この街なら売ってるはず

オカズが

自家発電。それが大路の出した結論だった

まさか２８にもなって…と哀愁を背負い、自分自身に失望しながら
大路は、どうにか壁に立て掛けてあった槍を背負い、ふらふらと宿
を出て

ドパァンッ！

とけたたましい音に、毛を逆立てながら臨戦態勢を取る。周りを見
渡せば、街の住人も、そして客も驚き、キョロキョロと周りを見渡
していた

次いでもう一度、ドンッ！ドガァン！と鼓膜が破れそうな程の爆音。
思わず耳を塞ぎながら顔を歪めれば、

「騎士団だ！騎士団が攻めて来やがった！」

と喚き、叫びながらバタバタと逃げ出す魔族の青年――これは、不
味い！大路は焦りながらも、周りに子供や老人がいないか確認。何
故なら、こういう状況で１人がパニックになれば、周りも一気にパ

ニック状態に陥り――

「に、逃げろ逃げろーっ！」「逃げろってどこにっ！？」「お客さ、お金…」「どきなさいっ！」「邪魔だ！」「ま、待て！わしを置いていくな！」「嘘だろ？騎士団はまだ…」「お、落ち着いてください！騎士団ではありません！」「信じられるか！」「亜人狩りってまじかよ…っ？！」

――集団パニックになる。不味い…このままだといらない被害が出る。比較的落ち着いて対処しようとしている街の住人や一部の宿の宿泊客。だが、でっぷり太ったオヤジやその護衛らしき者たちがパニックを煽るせいで全く沈静化の気配がない

（こうなりゃ思いっきり吠えて怯えさせるか？だが…）

大路が『獣化』――普通の獣人には出来ない、異端の能力の使用を本気で考えた瞬間

「あ、静・まれぇエエエエエエエＹＥＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨーーーーッッッ！！！」

キィィイインと耳鳴りを起こす程の音量。腹の底に響く重苦しい声で、なんか最後らへんノリノリの叫びみたいになってた暴力的な音

「な…なんだってんだ…っ！？」

声のした方向――つい先程自分が出てきた、この街で一番でかい宿屋。その屋根の上に、そいつはいた

見事なまでの逆三角形の身体をこれでもかとばかりにアピールした

フロントダブルバイセップス。ピクピクと時折跳ねる胸筋。もっこ…ブーメランもっこ…ブーメランパンツに革のベルト以外は身に付けてない、七色アフロにピンク髭、星形眼鏡の怪人の姿に、大路は硬直した

「俺が来タカらにはもう問題ネェ…。全部任セナ！トウッ！」

と、屋根から飛び降りる怪人。くるくると空中で1回転2回転。びしっ！とグ〇コのポーズで着地した

大路の目の前１０ｃｍの位置に

（…なんで俺ぇえええええええっ！？）

＞ｉ２６４８７―３３６５＜

ちくしょう！こんな役目ばっかりだ！と硬直したまま内心で叫ぶ大路。だが、周りはどんどん盛り上がる

「アレクーっ！！」「こっち向いてーっ！」「抱いてー！」「犯してー！」「メチャクチャにしてぇー！」「でも優しくしてぇー！」とやんややんやの大騒ぎである

件の怪人――アレクはそんな声に笑顔で応えながら、眼鏡をキラリと輝かせて大路の肩をポンッ、と叩き

「　や　ら　な　い　か　」

「やらねぇよ！」

びしぃっ！と腕を払い落とせば「そいツァ残念だぜ」と笑い、顔を近付けてくる怪人。すわ無理矢理かっ！？と身構える大路だったが、予想に反して怪人は真剣な表情で

「お前…ナンかやろうトシてただロ？」

「っ、」

図星を突かれて押し黙る大路に、怪人はにやりん、と笑い、ふんっ、と鼻から男臭い息を吐く

「この街は俺ノダ。コノ街で生まレルとらブルも俺のダ。――横取リすんナヤ」

「ぐふっ！？」

冗談めかした言葉と共に腹に打ち込まれる拳。不意打ちに驚いて声を漏らせば、怪人はゲラゲラと笑った

「おとぉーさぁん！得物！得物わすれてるぅー」

パタパタと可愛らしい足音と共に、通りをかけてくる女の子。その両手には、黒光りするナイフが２本。片方は片刃で刃渡りが２０ｃｍ程の反りがある刀のようなナイフ、もう１本は銀色でギラギラと輝く両刃の、３０ｃｍ程の大振りのナイフだ

…え、てかお父さん？お父さん？これが？七色アフロのピンク髭が？マジで？そんな表情で怪人――アレクを凝視する大路

至近距離で見つめられ、ぽっと頬を染めるアレク

「惚れてマウやろ…」

「勘弁してください！ほんとに！マジで！」

「ソコまで拒否んナヨ…」

どことなく悲しそうに言うアレク。そんなアレクの元に駆け寄った女の子が、アレクにナイフを手渡す

「Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ。お礼にまた可愛がってヤルゼ」

「やんっ、もぉ～、人が見てるぞっ」

マッチョなおっさんが女の子の尻を撫でながらナイフを受けとり、無造作にベルトに刺す。女の子は女の子で満更でもなさそうで、「俺、夢でも見てんのか…？」と自分の眼球が信用出来なくなる大路

「ヘイ、プシーキャット。手伝ってクレんなら手伝ってクレヨ。人手が足りネェ」

「…あん？そいつぁ一体…」

プシーキャット…子猫ちゃん、と言われたことを意図的にスルーしながら、シリアスな空気を保つ大路に、にたり、と笑ってアレクは言う

「パツキン美女にスパンキングしに行くんだヨ」

「わり、相棒が待ってんだ」

じゃっ！と片手を上げて背を向ける大路。その尻を撫でさするアレク。「ぎゃあああああっ！？」悲鳴を上げる大路

アレクは大路の尻を撫でた右手をぺろりと舐めあげ

「…お前家の店で働かね？いや真面目に。日給で５万までなら出すわ」

「働かねぇよ！なんなんだテメ」

ドゥンッ！と地震が起きたような衝撃。足下が沈み込むような感覚に、咄嗟に言葉を飲み込む。先程までの火薬の炸裂音とは違うソレに、アレクは思い切り表情を歪めた

「遊んデル暇ぁねぇナ…。お前、冒険者ダな？１０万で雇う、騎士団の人間を捕縛してクレヤ」

「はぁっ！？いきなり何を…おわっ！？」

ドズンッ！とまた大地が軋む。アレクはその揺れに眉間に皺を寄せながら、

「聞いテタか冒険者共ォ！愛シの泡姫のピンチだぁ！今夜はサービスさせるから１０万で騎士団の捕獲手伝いやがレェぃ！騎士団員１０人捕縛しタら誰でも好キな泡姫抱かセテやんヨォ！」

その言葉に、

呆然としていた男たちが、目をギラギラと輝かせながら宿に飛び込

んでいく。中には露骨に「ローラちゃんローラちゃん」「アイラさんアイラさん」とか女性の名前をぶつぶつと呟いている男までいる

大路はその光景に何とも言えない複雑な感情を抱きつつも、アレクに問い掛ける

「よくわかんねぇが…。協力するのはやぶさかじゃねぇ。けど一体なんだってんだ?」

…その問いに、アレクは表情を歪め、星型フレームのふざけた眼鏡を外し…

「なァに、タダの…」

ぐしゃり、と握りつぶした

「喧嘩だ。戦争並のな」

27、武力行使　ｓｉｄｅ，Ｏ（後書き）

皆の愛でアレクさん押しが飽和状態

どうするよコレ

お知らせ

時村さまと檸檬紅茶さまの挿し絵だけ別板作るホー

なんか一部の携帯だと「挿し絵まとめ」はもう全表示出来ないそうです

なのでいっぱい描いて頂いてる時村さまと檸檬紅茶さまは独立です

…いやー、挿し絵いっぱい描いて頂いて幸せ

幸せ過ぎて死ぬかもしれない

むしろ死ぬから幸せなのかもしれない

更に時村さまの板には

時村さまｖｅｒ　ラグナエイト

と

何故か「閑話　アレクサンドロ」で案内人していた「ミリム」さん
を追加します
…時村さまがミリムさん書くから今回も出てきたじゃないか！（爆）

あとどうでもいい話ですが
肋骨の…添え木？当て木？…とにかくなんか固定されてた板みたい
な紙みたいなのが外れました
時々痛みますがもう大丈夫っ！…大丈夫？（´・ω・、）

今回のテンプレ
↓東〇能力
↓四天王！
↓魔界四天王！
↓天使と悪魔
大事なことだから二回言ってみました（ドヤァ

28、騎士団と（前書き）

エロイカの街より程近い、森の中。谷と谷の間に作られたエロイカの街への唯一の侵入路に複数立てられていたテントが、すべて吹き飛んでいた

「く…ぅ…っ！？何事だ…っ！？」

シャルロッテは爆風に煽られ吹き飛ばされ、節々の痛む身体を引き摺るように立ち上がる。唐突な、前触れのない爆発。騎士団には魔法使いなどいないし、今回は火薬なども持ってきていない

「報告します！」

「っ、よし。話せ」

全身煤けた全身甲冑の騎士が、大隊の副隊長たるシャルロッテの前に跪く。シャルロッテは痛む身体に鞭を打って無理矢理身体を起こし、毅然とした態度を保つ

「はいっ！どうやらエロイカの街より爆薬がテントの間近に運び込まれていた模様！部隊内で戦闘可能な者は約3割です！」

「なんだと…っ！？」

馬鹿な、確かにこちらは脅迫以外の何物でもない交渉の仕方で話を進めようとした。だが、よもやいきなり先制攻撃、しかも警告すらなしに爆薬を使うとは…っ！

「血迷ったか、『色欲』のアレクサンドロ…っ！！」

怒りに燃える瞳でエロイカの街を睨み付けるシャルロッテ

「隊長は！？」

「…いつも通り、逃げました」

あのボンクラ貴族め…っ！！内心で毒を吐きながら、シャルロッテは剣を抜く

爆薬を使った。ならばわたしならどうする？決まっている。敵が混乱している間に一気に殲滅にかかるはずだ

ならば…こちらからうって出る！

エロイカの街の最高戦力は言うまでもなくアレクサンドロ。他は精々そこそこレベルの冒険者や、ろくな戦闘経験もない娼婦や娼倅。コンビネーションに長けた騎士団が、急増の寄せ集めに負けるはずもない

「応戦する！戦えるものは3人1組でチームを作れ！向かってくるものは全て無力化しろ！殺すな！相手に無駄な交渉材料は与えるな！手足を斬り付けて抵抗する気力を奪え！なに、相手は反逆者だ！遠慮はいらん！」

すぐさまその命令を伝えにいく全身甲冑の騎士の背を見送り、そこかしこで立ち上がる騎士たちを率いてシャルロッテは檄を飛ばす

「騎士の力！見せてやれ！」

――ついでに馬鹿弟子のお披露目といくか

シャルロッテは我知らず微笑みながら、剣と盾を手に走り出した

28、騎士団と

ｓｉｄｅ，Ｏ

燃える――街が、燃える

「遊んでる暇ァ無かったゼ…っ！！」

舌打ちしながら怪人――アレクがナイフを振るう。剣を構え、こちらを不審な目で見ていた騎士の首に赤い線が走る。驚愕しながら目を見開く騎士、その首筋から、ごぶり、ごぶりと気泡を漏らしながらどす黒い血が溢れる

――俺は、その光景に…

生唾を、飲んだ

「羨ましい」。そんな感情を抱きながら、剣を向けてきた騎士の鎧ごと、その胸骨を砕く。死なない程度に、けれど痛みで動けない程に

一見すれば命を奪わない分、マシ。そう言えるかもしれない

けれどこの世界、力が無ければ生きていけない世界で、何ヵ月も治療に専念しなければならない傷を負う。それは遠回りな死への片道切符ではないのか？いまここで殺さないことは、むしろ相手を無駄に苦しませるということではないのか？

そんな疑念が、消えない。消せない。頭の中で暗く黒く、でろりと沈殿する

他にもまだいた騎士を俺が相手取っている間に、アレクは両足を斬られて動けない角の生えた少女を抱き上げ、一度道を戻る。騎士たちが逃げるアレクの背に向けて矢を放つ。

だが――当たらない

否、当たってはいる。だが、その度にアレクは「ＯＨ！モーレツゥ～」とかふざけた事を叫びながら飛び上がるだけで、ダメージとして蓄積されない。例え首や頭に矢が刺さろうと、彼が無造作に矢を引っこ抜けば、ピューッと噴水のように血が吹き出て――１０秒もすれば、傷が塞がる

――スキル：ギャグ補正

本人がふざけている限り、ふざけた格好をしている限り、ふざけた言動を、行動をし続ける限り――彼の致命傷は、致命傷とはなりえない

限定的な超回復、超身体能力を得るスキル。

彼は「享楽」の神に生まれた時に身体を改造されたらしく、生まれながらに「享楽の神」の玩具となることを義務付けられたらしい

だから、自分の助けはいらない、と

彼は、ふざけながら笑った

…考えても仕方ない。実際彼は、「楽しいンダから恨んじゃイネぇ。ギャグ補正の他にも、「エロ主補正」も貰ってるシナ。むしろアリ

ガテェぜ！」と笑っていた。だから、自分がとやかく言うような事ではないだろう

だから今は…騎士団を片付けろ

だけど、だけれども

向かってくる。３人の騎士

騎士たちは１人が切り込み役の剣士、１人が壁役の盾持ち、１人がフォロー役の弓使い、という構成をされているらしい

練度が低そうな切り込み役が暴走して俺に向かってくる。――まだ、年若い少年。その後ろには、苦い顔の壁役の中年騎士、少年と同年代に見える、若い女。間違いなく、実戦で興奮した少年がコンビネーションを無視して突撃したのだろう。少年の名前らしいモノを叫びながら、こちら…少年に向けて手を伸ばす若い女の姿が、妙なほどに深く脳裏に刻まれる

…やりにくいっ！

苦い思いで「やぁあああああっ！」と気合いと共に振り下ろされるロングソード。それを１歩後ろに下がって避け、お返しに槍で――槍を下ろし、代わりに蹴りを、放つ。

金属製の軽鎧に守られた胸に放たれた蹴りは、硬い金属を変形させながら少年を弾き飛ばした。地面と平行に飛んだ、気を失った少年の身体が、後方にいた中年にぶつかる。すぐさま弓を構える若い女に接近し、その顎を掠めるように拳を放つ。驚愕の表情で気を失う女を少年に潰されて慌てていた中年の上に投げ捨てる。「ぐぇ！」とカエルを潰したような声に苦笑いしつつ、横たわる中年の足を取

り――ゴギンッ、と、間接を外す。苦鳴を漏らす中年に心の中だけで謝罪

――人を殺すことに抵抗がある。忌避感がある

――あると、信じたい

もし、事故でも、故意でも、この手で人を殺し――罪悪感も、嫌悪感も沸かなければ――俺は…

その時の俺は…人間なのか？

人間を殺して尚、平然としていられるような存在が、果たして「人間」なのか？

確かめるのが恐い。確信がある。予兆がある。恐怖ばかりが溢れる

俺は――人を殺すことへの、抵抗を実感出来ない

頭では殺人が犯罪だと、忌避することしかないと理解している。でも、それでも――実感が沸かない

何故、悪い？

何が、悪い？

闘争だ。純粋なまでの闘争だ。奪い、犯し、殺し、食らう。何が悪い？

敵が、我が前に立ちふさがる敵が、弱いのが悪い

我を殺せず、殺されることしか出来ない弱き種が悪い

頭の中に巡るのはそんな言葉ばかり。アドレナリンが分泌され、身体ばかりが燃え上がる。ひたすらにひたすらに、今にも狩りに出掛けようとする身体を押さえ付ける

モンスターと戦っていても、こんな感情を抱いたことはなかった

暴力女――カリオラに修行を付けられているときも、こんな声は聞こえなかった

原因は――はっきりしている

もう、随分前に起こったことのように感じる、笹田たちとのいさかい

苦しむ人を見て、愉悦を感じたあの瞬間

カチリ、と頭の奥で錆び付いていた狩猟本能に火が着いた

分かる。今までよりも獣に近い自分を感じる

笹田の腕を食い千切った、あの瞬間

どろり、と口の中に広がる――人間の味。肉の味。笹田の腕は――肉は――血は――はっきりと自覚出来るほどに、彼を変えた

人の味を覚えた獣は、もう戻れないという

なるほど、自分も戻れないのかもしれない

と、自嘲気味の笑みが漏れた

目の前に迫る５０人に届かない数の騎士たち。その顔は険しく、怒りに燃えている。士気は、高い。掌に走る鈍い痛みに気が付けば、無意識握った拳から滴り落ちる、鮮血

…落ち着け。落ち着け。俺は、人間だ。きっと昨日の今日で精神がささくれだってるだけだ。しばらく時間を置けば落ち着く。だからここは、落ち着いて戦え。人間に傷を負わせず捕縛する方法だ。散々警察学校で仕込まれただろう？何度も深呼吸を繰り返す

「――来いっ！！」

何人いるのか。何人止められるのか

分からないけれど。分からないなりに

この街の住人を1人でも多く助けられるよう

来い、なんて言ったのに、自分から騎士たちに突っ込んでいく

人間として、「ヒト」を助けるために

ｓｉｄｅ，Ｌ

おっさんを探すのは当たり前のことだけど、今、おっさんがどこにいるのか分からない

宿にいてくれれば良い。けど、どこかのお店に行ってるかもしれない。変に動き回ったらすれ違いになる可能性がある。だったら大人しく待つ？論外だ。おっさんは俺がどこにいるかなんか知らないだろうし――あんな風に、もくもくと黒煙を吐く「事件現場」を放置するような人間じゃない

ならば話は早い。おっさんは絶対に事件現場に向かうか、この火事の原因を探ろうとするはずだ。俺も事件現場に向かえば、おっさんと会えるはず

お世辞にも良いとは言えない頭で考えた結論だが、穴は無い…よな？イレギュラーとしては、おっさんが怪我人を見つけたり、誰かに助けを求められたらそっちに向かいそう、ってことか。でも、見た感じ火事の現場以外の所でなんか危険なことが起こってるようには見えないし、怪我人は出てないだろう。多分

とりあえず、それはいい

でも、だ

「なんで付いてくるんだ？」

「だから！危険なんだって！騎士団なら保護してくれるから大人し

くしてくれって！」

ぴょんっ、と屋根から屋根へと飛び移る。後ろから付いてくるクロイワも、ガダガダと不吉な音を立てながらも、身軽に屋根から屋根へと飛び移っている

こっちは脚力強化してんだけどなぁ、あっさり追い付けんのかぁ…。いや、俺、まだ全力で走ってる訳じゃないからだよな。と無駄な慰め。全力で走ったら１０分でバテちまうし

最初の内は普通に道を走ってたんだが、村の中から逃げ出そうとする人達のせいでまともに動けなくなってしまったのだ。だから屋根の上を走り、黒煙の上がる２ヶ所を目指す

元からそれほど大きくない街だ。直ぐにゴウゴウと燃える民家…いや、お店へと辿り着く。扇情的な格好のお姉さんや、ほぼ全裸のお兄さんが必死になって水をかけているのに、屋根や壁が吹っ飛んだそのお店は燃え続けている

「ウル・イールティア・アレ・ティアー！水龍殴打！」

すぐさま魔力を練り上げ詠唱。クロイワが驚いているようだが、それどころではない。俺の頭上に生まれた１０ｍ程の水球が、その身を巨大な蛇のように細長く変えて燃え盛るお店へと直進。慌てたように逃げ出すお兄さんお姉さんを尻目に、お店にぶつかる寸前で魔法を解く。途端に巨大な水蛇の身体はどろりと蕩け、大量の水が溢れ落ちる

バシャッ！と水がいっぱいに入ったバケツをひっくり返したような音と共に弾けた水が、あっという間に炎を飲み込む

ぽかーんと屋根の上の俺を見つめるお姉さんお兄さん。――おっさんの姿はなし、と。それを確認してからペコリと頭を下げ、次の場所に向かう――ズドンッ！と地面が揺れる。なんだ！？

「砲撃…か？。騎士団は一応この街の魔族や冒険者と一戦構える覚悟で来てたから…。確か用意してたはず…。でも、ロッテさんがそう簡単にあんなもん使うか…？」

後半は自分に問い掛けてるようだったが、前半は聞き逃せない。ギョッとしながら振り返れば、呑気な顔で首を捻るクロイワ

「砲弾…って大砲かよっ！？なんでそんなもん…止めなきゃ！」

さっき音のした方を感覚で探りながら方向転換…いや、その前に火の手をどうにかしなくちゃならないのか？でも火を消してる間に大砲で撃たれたりしたら本末転倒…か？ああもう！どうしろってんだっ！？

「…って、アレなんだよっ！？」

「アレって何が…なっ！？」

目に映る光景が信じられない。俺達がいるお店の丁度反対側、白銀色の鎧を身に纏った集団が、街の人達に向かって剣を振り上げ、次々ロープで捕縛していく光景。そこには人間も魔族も獣人も、全部が全部関係なしに斬り付けられ、ろくな手当てもされないままロープで縛られ、集められている

「ウッソだろ…！？あのロッテさんが…」

呆然として何事か呟くクロイワ。けど、目の前で起こってる光景は現実だ。見ている限り、小さな子供も大人も関係なしに捕縛しているらしい――騎士団って言うくらいだから国属じゃないのか？何でこんなことするんだ？

「ああもう！最近トラブル巻き込まれ過ぎだろ…ってうわぁっ！？」

頭を抱えたせいでバランスを崩して、屋根から落ちそうになる。これも信じられない。さっきまで走ってても何の問題も――っ！？

「危ないレティーシア！」

手が、伸ばされる。俺の手を取る手、に――

トクン、と高鳴る心臓と

ぞわり、と総毛立つ背筋

あまりの気持ち悪さに、咄嗟にその手を払ってしまう

「…ぇっ」

ぽかん、と払われた手を見つめるクロイワ。その姿に心から申し訳ないと思いつつ、空中で体勢を立て直して地面に着地…って、そうじゃない！

「ごめんクロイワっ！こっちは大丈夫っ！とにかく俺は、アソコに行ってみるからお前もどうにかしてくれ！絶対コレなんかおかしい！」

「ぇ…あ、ああ！分かった！レティーシアちゃんも気を付けて！！」

クロイワの言葉に頷き、さっき屋根の上から見た場所を思い出しながら走る

…けど、

なん、だったんだ？

じっと手を見つめる。あの気持ち悪さは、胸の高鳴りは、まるで…ササダとおっさんに同時に触れられたような…

頭を振ってバカな考えを振り払う

とにかく今は、何が起こってんのか調べる！…あれ？もしかしてそれ、クロイワに聞いた方が早かったのか？

あるいはさっき助けたお兄さんお姉さんとか…

…俺、どんどん馬鹿になってないか…？

…おっさん、無事かな…？

28、騎士団と（後書き）

難産でしたー

超難産でしたー

キャラクターが勝手にあっちこっち行こうとするから、どうにかまてめて描写出来るように苦労しました。特にレティーシア！

それはともかく、お知らせ！

まぁた時村さまが一晩でやってくれたよ！

キング・オブ・リトマス

&

レームシルク

追加！

レムちゃん可愛いよリトくんかっこかわいいよ！

投稿板に、エイフライさま画、

れてぃーしにゃ2

を追加！

あとこれから挿し絵まとめ、あと27、武力行使ｓｉｄｅ，Ｏに

わた　さま画、
怒濤のアレクサンドロフィーバー
を追加！

あと投稿板に
わたさま画の
おっさんの天使と悪魔
を追加しますよー

お知らせ長すぎて今回のテンプレ忘れた

↓ギャグ補正

↓伸ばされる手、けれどそれは無情にも…っ！

くらいかな？

28、同時刻ー丘の上（前書き）

「はぁい、皆様こんばんわ！下級神様の方々から質問があったのでお答えしますわ！
え？わたくしですか？
わたくしは水の女神ウルティアですわ！」

「同じく風の女神ルガスタでぇーす。個人的にはアルちゃん、レムちゃん、レティちゃんに頑張ってほしいでーす」

「こらっ！わたくしたちは常に公平でなくてはだめですわよ？
で、質問ですわ！」

『Q、結局「主人公補正」ってどんな補正なんだよ！？』

「いやぁ～、いい質問だねぇ～」

「ですわね！実はこれ、守護している神によって違うのですわ！」

「基本的に表効果は変わらないんだけどね～？」

「表にしてみましょうか？はい、」

スキル：「主人公補正」早見表

黒岩　優人（ゼウス神）ｖｅｒ

表効果

・生存判定時、守護神のダイスロールに＋１Ｄ

・初対面の人物にも警戒されにくい

・トラブルに遭遇しやすくなる

・伝説の武器の使用可能

・アカシックレコードの書き換えが可能

・重要人物と接点を持ちやすくなる

・レース上における露骨な優遇処置

・カリスマ：Ｂ

裏効果

・スキルユーザーを中心に半径３ｍ以内の空間に存在する知的生命体の思考能力を５０％減衰

・スキルユーザーの敵対勢力の全能力値を最大２０％減衰

・スキルユーザーに好意を抱く異性の能力を最大４０％上昇

・スキルユーザーに好意を持った異性はスキルユーザー以外の異性に興味を抱かなくなる

・スキルユーザーと性行を交わした異性はスキルユーザーに【盲信】状態になる

・スキルユーザーと相対した異性はスキルユーザーに好意的になる

※ただし、主人公補正・裏効果は敵対勢力や攻略対象が「トリップ主人公」、あるいは「転生主人公」の場合、逆効果になる場合があります

あくまで「主人公補正」は対・サブキャラ用の能力です

「主人公」を相手取る際には細心の注意を払いましょう

ゼウス神との約束だ！

星　伸一（アグニ神）ｖｅｒ

表効果

・生存判定時、守護神のダイスロールに＋１Ｄ

・初対面の人物にも警戒されにくい

・トラブルに遭遇しやすくなる

・伝説の武器の使用可能

・アカシックレコードの書き換えが可能

・重要人物と接点を持ちやすくなる

・レース上における露骨な優遇処置

・感情の昂りに応じて身体能力強化

裏効果

・スキルユーザーは悲劇に遭遇しやすくなります

・スキルユーザーは感情の昂りが徐々に減衰していきます

・スキルユーザーは生涯に一度だけ成長限界を超えた能力値での戦闘が可能になります

・スキルユーザーと他「主人公」、あるいはサブキャラクター間に何らかの絆が生まれた場合、加護神はダイスロール。判定に失敗した場合、対象となった「主人公」、及び「サブキャラクター」は状態変化：死亡となり、レース終了となります

クイーン・オブ・ファルガナ（多数の武神）ｖｅｒ

表効果

・生存判定時、守護神のダイスロールに＋５Ｄ

・初対面の人物にも警戒されにくい

・トラブルに遭遇しやすくなる

・伝説の武器の使用可能

・アカシックレコードの書き換えが可能

・重要人物と接点を持ちやすくなる

・レース上における露骨な優遇処置

・カリスマ：Ａ＋

・事業成功率２００％

・黄金率：ＥＸ

裏効果

・スキルユーザーのパーティー内に「裏切り」属性持ちが常に存在します

・スキルユーザーの幸運値が３００％強化

・スキルユーザーの行動は、「トリップ主人公」、あるいは「転生主人公」にしか阻害することは出来なくなります
・スキルユーザーの所属する陣営の能力値を５０％強化

「とまぁこんな感じですわね」

「うわぁ、恋愛の神様たちからゼウスさまに非難ごーごーだよぉ…」

「まぁ、黒岩さまの裏効果、笹田さまのに似てますものねぇ…」

「でも、テンプレだよね」

「ですわね」

「以上！緊急企画！ウルティアおねぇさまの教えてア・ゲ・ルでしたー。次の出番まで！」

「しーゆーねくすとルガスタっ♪」

「古いですわねぇ…」

「ほ、ほっといてよ～…！」

28、同時刻ー丘の上

彼は丘の上に1人、惨劇の会場となったエロイカの街を見下ろす
冷たい炎を目の中に映し、彼はぼんやりと立つ

服装は目立つモノではない。麻のシャツに木綿のズボン。髪は植物の蔦のようで、緑色の木の葉がいくつも垂れ下がっている。皮膚はざらついた茶色く硬い木の皮。カードを指に挟む指は3本しかなく、枯れ木のようだ

アリアドネ――別名木人と言われる亜人。元はファルガナ大陸で暮らしていた穏やかな種族だったが、迫害の末に魔界に移住し、魔界の片田舎で暮らす種族

基本的に太陽と水があればいい、という種族だったのだが、今では太陽のない魔界で暮らすが故に徐々に個体数が減少している種族

だが――それすらも、彼にとってはどうでもいいことだ

レンズのような目の奥で、ゆらりと青い炎が揺れる。ゆらゆらと、ゆらゆらと

身体から、４０枚のカード束が生えてくる。何の迷いもなくそれを左手にセットされた召喚円盤に入れ、その内から5枚、ドローする

愛する彼女の主が望むなら

「ドロー。フィールド魔法。バトルコロッセオを発動。半径１ｋｍ

内の空間で、戦闘発生率を２００％上昇」

愛する彼女の笑顔を見たいから

「ドロー。ハイテンションファクターを召喚。対象、エロイカ。エロイカの住人の脳内麻薬の分泌量を上昇」

愛する彼女の夢が近付くなら

「ドロー。ブラックアイズを召喚。このモンスターが召喚された時、召喚者の姿を不視可する」

己の命すらも、愛する彼女のために

「ドロー。魔法カード。強制戦闘―アタックチャンスをエロイカを対象に発動。攻撃表示のモンスターは対象の表示形式に関係なく全員攻撃しなければならない」

全ては愛しきレームシルクのために

「ドロー。寿命を5年コストに、墓地に置かれたカースド・リゾネクターを特殊召喚。怨念領域が発動。これより僕に近づく者に呪いがかかる」

「三体のモンスターを生け贄に、魔神の首ーデプスグリーズを召喚。デプスグリーズの効果を発動。半径５ｋｍ以内の召喚者以外の人間の思考を鈍らせる」

「更に罠カード、我が命は友のために、を発動。危機的状況におけるサポート発生率を３０％上昇」

「魔法カード、アナザー・オブ・リベンジャーをエロイカを対象に発動。味方が破壊されたとき、身体能力を５０％強化して強制戦闘」

「伏せカードを三枚セット」

「ワンダーポイズンを召喚。このモンスターが召喚されて5時間以内に破壊されなかった場合、半径１２ｋｍに致死性の毒を放射する。…皆、死ね。死んでしまえ」

彼女がわしに振り向いてくれない世界なんか、壊れてしまえ

魔界四天王が１人、ケルドゥ・ガナルは暗躍する

今日も、どこかで、ひっそりと

カードを作り、暗躍す――「見つけたぜ！」

――声に、ガナルが振り返る。ひび割れた木の肌で構成された表情が、それでも不機嫌そうに歪められた

「天が割れ！地が裂け！人が呼ぶ！
悪を倒せと俺を呼ぶ！
苦しむ人がいるならば！そこに輝き現れる！
いいいいいいいちもんじぃっ！！ダンッ！！
民の嘆きにただいま参上！」

シャキーンッ！と効果音を背負ってポーズを決める…濃い男

まだ年若い男だ。２０代前半くらいだろうか。身長は１９０ｃｍほ

どだろうか。長い手足で決めるポージングは、見事の一言に限る。
髪型も、髪の長さも、跳ね方すらも。通常ありえないだろうボリュームと量を誇る。そして眉も太く、整ってはいるが彫りが深い顔立ちが際立っている。適度に鍛えられた身体を包むのは、風が吹く度にはためく真紅のマフラーと、この世界にはあり得ない革のジャンパーにジーンズ、ブーツ

その肩には手のひらサイズの、蝶の羽を生やす裸の少女。くすくすと笑いながら、ポーズを決めて「決まった…っ！」とか悦に入っている濃い男…ダンを「だん、だん、まぬけ、まぬけ」と笑っている

「…トリッ…プ、主人公、か。やはり、リトマス…役に、立た…ない。主人、公に…無力…」

ぼそぼそと、木の欠片を落としながら声を発するガナル。だが、ダンは聞いちゃいない。びしぃ！びしぃ！と効果音と共にポーズを変えながら、ガナルを指差す！

「説明しよう！

とある神によって仮面ライダーのパチモンへの変身能力を得た一文字　弾！
平穏な生活と引き換えに憧れのヒーローへの変身能力と「ヒーロー補正」を手に入れた弾は、当初こそ深く考えずに喜んでいた…！

しかしそれは弾の戦いの日々の始まりだった！

ヒーロー補正とは即ち「嘆き悲しむ人々」を救うための手段！
ヒーロー補正を持つ者は、他人のために戦い続けなければその身体が石に変わる呪いを持っていた！

だが！心配は無用！

何故なら「ヒーロー補正」は悲しみ、嘆き、苦しむ人を助けるための「神」が与えし試練なのだ！

西にモンスターに襲われる子供がいれば突如発生したハリケーンに巻き込まれて運ばれ！
東に親を亡くした子供がいれば謎の円盤…いやショッカーに誘拐されてでも東に運ばれる！
北に学友に苛められる子供がいれば河に落ちて流される！
南に罠に捕らわれた子供がいれば、妖精の悪戯で運ばれる！

あらゆる偶然が必然となり悲しみを減らす礎となるのだ！

弾の心に迷いはないっ！

弾はあらゆる時に、例え変な木の実を食わされてお腹ピーピーだろうとも怪人と戦い続けるのだ！

…不思議と子供危機にしかヒーロー補正が発動しないのが不満な訳だが！」

「まぬけ！まぬけ！だん、あほー！」

キャハーッ！と楽しそうに笑いながら、もふもふしたダンの髪を引っ張る小人。

「ちょ、フーリム痛い痛…はぅ…っ！くっ…負け、負けないぞ…ヒーローは腹痛なんかには負けないぞ…っ！！」

「まぬけ？まぬけ？おいし？おいし？まぬけー」

「…漫才、する。なら…帰れ…」

若干呆れ気味にカードをドローし、円盤にセットするガナル。「ドロー、エビルナイトを攻撃表示で召喚。バトル、エビルナイトで攻撃」

真紅の鎧を纏った騎士が、真っ直ぐにダンへと走る。…が、ダンは腹痛に苦しんでいたのが嘘のように、華麗なステップで振り下ろされる剣を避け、逆に長い足をしならせたハイキックをエビルナイトの顔に叩き込む。がしゃんっ！とけたたましい音と共に兜が音を鳴らし――エビルナイトの姿が消える

…ほぅ、と木の欠片をパラパラと落としながら、ガナルは感嘆のため息を漏らす。エビルナイトはそこまで強いモンスターではないが、冒険者ランクで言えばBランク程だが、それでもたった一撃でそれを破壊するダンの実力に、僅かな驚愕

「…侮っ、たか。…デプスグリーズで攻撃」

先程召喚した、「魔神の首」と言われるモンスター、デプスグリーズ

この世界に実在するモンスターでありながら、その強さは他のモンスターとは段違い。外見はまるで巨大な頭蓋骨を住み処にする大蛇だ。――だが、その実、その本体はその巨大な頭蓋骨の部分。蛇のように見える部分はデプスグリーズの「内臓」に当たる。その特性としてはあらゆる物理攻撃の衝撃を、そのまま相手に跳ね返す「柔らかさ」。一見硬そうに見える頭蓋骨も、触れれば簡単指を飲み込

む程に柔らかい

また、他の生命体の脳に直接幻影を投射することが出来、それによって自身は一歩も動かず餌をおびき寄せ、生きたまま溶かし食らう性質を持つ

「ほぅ…」

高レベルモンスターを目前に、ダンの表情が変わる。…どこか、挑戦的なそれに

「見せてやろう…最初のダンジョンではレベルが低かったが故に右足の脛までしか変身出来なかったが…俺の！一文字　弾の真の変身をっ！！」

「だん！だーんっ！」

ダンがその言葉と共に腰に手を当てれば、空気中からにじみ出すように現れる白銀のベルト。それを確認したダンの背後が爆発。キラリと輝く白い歯と、眩しいほどに爽やかな笑顔

「…突っ込み、しない…ぞ…」

どこか疲れたように声を出すガナル。その手が、召喚円盤にカードを差し込む

「行くぜ！変し」「罠カード。異次元トンネル。…戦場に…行って、こい…ヒーロー！…」

パカッ、といっそギャグ漫画のようにダンの足下が開く。「なん…

だと…っ！？」と驚愕を露にするダン

「変身中の待機はお約束だろ～っ！！」

「だーん！アホー！アホー！」

そんな声と共に、目の前から消えるダン。それに少しだけ安堵しながら、ガナルは再びカードを引く

「…やれ、やれ…」

目立ち、たくは…ない

レームシルクに告白する勇気もない

それどころか、焔の塊であるレームシルクに木製の自分が触れれば、燃え尽きてしまう

それでも尚、好きだから

愛しているから

彼女の愛するリトマス王の、手足となって動こう

だからまずは…

レームシルクの大嫌いな、人間を…皆殺しに

己の想いを伝えられない世界をぶち壊してしまおう

にたり…と狂ったような笑みを浮かべながら、ガナルはカードを円盤に叩きつける

「魔法カード、バトルオーラをイチモンジ・ダンに装備…。装備した対象を目視した敵対生物との強制戦闘…。この効果は5時間持続する…」

小うるさい人間も嫌いだ

やかましい魔族も嫌いだ

偉そうな魔族王も嫌いだ

レームシルク以外は、みんな死ねばいい

そうすれば、わしはただ、レームシルクを見ながら暮らせるのに…

歪んだ愛情に突き動かされながら、ガナルは葉を散らしながら笑う

レームシルクに自分の愛が受け入れられることなどないと、知りながら

28、同時刻ー丘の上（後書き）

ごめんなさい

暑くて日和ました

暑いのダメです。本当にダメです。人春は冬が好き

頭が上手く回らなくておっさん&レティは次回にお預け

今回は黒幕のターンです

ちなみにレムさんはガナルのこと嫌いじゃないです。でもうっかりしてると燃やしちゃうから露骨に避けてます

ガナルがレームシルクにメロメロな理由はまた今度

あと、妖精&熱血オリ主のコンビは個人的にツボ

今回のテンプレ

↓仕組まれた戦争

↓黒幕は別にいる！

↓ヒーローは遅れてやってくる…っ！

↓変…身っ！

↓特撮オリ主

↓我が行動、全て一重に愛のために

お知らせ

投稿板、に　七式　さまのイラストを追加しておきます

２９、転機（前書き）

前書き書くのは久々ですねー

お知らせー

投稿板の七式さまの
・集合画６人
を↓　１１人

に張り替えます

コメントも一部変わりますよー

29、転機

「キリがねぇ！」「何人いやがる…ギャアッ！？」「しま…ったすけ…っ！！」「よくもライアンを！」「騎士の誇りを侮辱するな！」「いやぁっ！やめてぇ！」「離せ！くそっ！ふざけるな！」「…駄目元でも、一応言ってみるわ！今夜は帰りたくないの…」「帰れんようにしてやろうか…？」「あーんふられたーっ！！死んじゃえ」「怖いなっ！？リーダー！こいつをどうにガハッ！？」「一旦引け！欲望垂れ流しの冒険者の相手はするな！」「エロイカにいる冒険者は不思議と馬鹿の方が強いぞ！」「背中ががら空きだぜっ！」「そうでもないさっ！」「ば、馬鹿な…っ！？」「なんなんだよ！アンタ達は！」「騎士団を皆殺しにしろ！」「ふざけるなぁ！！」「国相手の喧嘩も…悪くねぇ…っ！」「大口を叩くなぁっ！！」

乱戦。ひたすらに、乱戦

声が、血が、怒りが、怨みが、交差する。剣が鎧を穿つ金属音。こひゅーこひゅーと死を間近に感じる呼吸音。消しても消しても撃ち込まれる大砲に散らされた炎が新しい火種を生む。お店の中にあった香が炎に炙られて、なんとも形容しがたい臭いが複雑に混ざり合う

住人の避難は完了しているのだろうか？無造作に破壊される街並み。狂ったように笑いながらお店だった残骸に斧を叩き込む、どう見ても冒険者にしか見えない青年。そんな彼の背中に、戸惑いも見せずに切りかかる騎士

「死ねぇッ！」

「っ、」

真横から声。いつの間にかすぐそばまで接近していた騎士が、上段から真っ直ぐに剣を振り下ろす。しゃがみ、片膝を付きながら弓の弦で受けて、斜めに力を流す。ひゃりりっ！と涼やか音。ただの鋼の長剣じゃあ、「ガナスタ」でもトップクラスの性能を持つこの弓は破壊できない。一見脆そうな弓にあっさりと攻撃を防がれたことに動揺し、体勢を崩した騎士。その股間を、立ち上がりながら蹴り上げた

「…っ、く…ほ…っ！！」

ごめん、元男としてその痛みはすげー分かる。でも、非力な俺が殺さないように動きを封じるならこれが一番なんだよ…。雷の魔法を使って麻痺らせる、って手もありなんだが、全身甲冑着ている騎士を相手にすると、鎧表面を伝って雷が地面に逃げてしまうのだ。その点、股間は動きやすさを阻害しないよう、鎖を編んだ鎖帷子で覆っているだけなので、打撃だったらほとんど素通りなのだ。うまく前垂れみたいな装甲の隙間からピンポイントで蹴り抜くにはコツがいるけど、その辺はしっかりカリオラに仕込まれている

ほんの半年前、ドイ少年に襲われかけて躊躇なく足を撃ち抜いてた俺が言う台詞じゃないんだろうけど…

この世界は、足を撃たれた、右手を失った。身体の一部が欠損した。そんな理由で、生きていけなくなるくらいシビアな世界だ。ほんの1週間、怪我の治療のために療養したとしよう。…恐らく、よほど優秀でない限りはクビになる

そして職を失った者は一気に転がり落ちていく。冒険者になれるの

ならまだいい。だが、右手や足を失い、武器も振れず、動くこともままならなかったら?…待っているのは犯罪者の烙印だ

だったら金的食らって、物凄く痛いけど、片方だけならなくなっても大丈夫、という状態で戦線離脱したほうがいいはずだ。その後の騎士団内での評判はともかく、生きて帰れるんだから勘弁してほしい

悶絶している騎士の身体を跨いで通り、でっかい槍でどう見ても同じ冒険者である女の子を刺そうとしていたオヤジに後ろから接近。女の子を襲うとか最悪だっ!絵面的に!手加減なしで蹴り上げれば、ピクピクと痙攣しながら倒れる男

「君、逃げて。立てる?」

「…っ、あ、ありがとう…」

女の子…ってほどの年でもなかったな。２０代前半くらい…の、女性がどうにか立ち上がった直後、

「大人しくしろっ!少女だからといって容赦はせぬぞ!」

大盾を持って押し潰そうとしてくる巨漢の騎士。その足下に矢を放ってスピードを緩めさせ、すかさず背後に回る。非力な俺だけど、スピードだけならおっさんより速いんだ。本気で動いたら、視界が悪そうな兜を被った騎士は俺の姿を見失う。キョロキョロと周りを見回しているうちに、背中から全力で――蹴り上げる!

「やぁっ!」

「」

ぐちっ、と嫌なかんしょくが爪先に伝わる。…サァッと頭から血の気が引いた。い、今の感触は…たぶん…

無言で、身動き1つせず、前のめりに倒れる騎士。…な、治した方がいいのか?い、いや。さっき自分でも言ったじゃん。片方くらい潰れても、みたいな…

「強い、のね…えげつないけど」

「し、師匠がアレだったもので…」

苦笑いしつつ、女性がどこかへ剣を杖に歩いていくのを確認。…うーん、避難所みたいなのがあるといいんだくど…

と、その前に一応チェックしとかなきゃ。出血とかあったら流石に応急処置くらいはしないと…。倒れた騎士に恐る恐る近付こうとした、直後。ぞわりと背筋に嫌な予感。直感に従ってしゃがみこみ、横薙ぎに振るわれた剣を避ける

「リーダーから離れろ!」

「追い討ちなんかしな…うなっ!?」

さっぱり話聞いてねぇっ!?一息に放たれる三連撃。袈裟懸け斬りからの逆袈裟斬りへの連携。後ろに跳んで避けるも、背後には壁…にやり、と笑いながら突きを放つ騎士。…両刃の長剣で突き…?と疑問に思いながら、魔力障壁で剣を受け止め、驚愕に硬直する騎士の股間に膝を叩き込む

「こっぱ…っ！？」

意味不明な苦鳴をこぼしながら、ゆっくりと倒れる騎士。…なんか、おかしいな

いくらなんでも騎士団が好戦的過ぎる。騎士団って確かこの世界の警察みたいな役目なんだろ？その騎士がやりたい放題エロイカの住人を襲うのにも、エロイカの住人がなんの躊躇いもなく警察相手に喧嘩売り買いしてるのにも違和感がある

…一応、一応、な

1人の騎士にじっと視線を集中させる。最近めっきり使うところがなかったが、『分析者』の称号によりステータスチェック。名前、レベル、称号、スキルとステータスが現れ――あれ？

状態異常：なし

…明らかにおかしいのに、状態異常なし？

それに違和感を覚えながらも、異常がないならどうしようもない。どこか心に引っ掛かるモノを感じるが、今はとにかくおっさんを探さなきゃ

ついさっき思い出した「パーティーメンバー探索用アイテム」――前に邪神の作ったダンジョンで、おっさんのことを探すのに使ったアイテム――を使う。正直黒岩と一緒にいたときに思い出せなかったのか不思議だったが、味気ないくらいあっさりとおっさんの居場所が分かった

…けど、詳しい位置が分からない。どうもおっさんも結構動き回っているみたいだし、何よりこう人が大量に入り乱れていると、おっさんの場所が分かっても近づき様がない

近くにいるのに間違いはないのに…と歯噛みしながら、何かこっちに向かって矢を撃ってる冒険者接近。…女の子か。金的は使えないから…

「――詠唱破棄！雷掌！」

「えっ…キャアッ！？」

紫電を纏った掌打で女の子のお腹を打つ。幸い鎧は俺と似たタイプの軽装だったので、雷撃はその威力を余すことなく女の子に伝える。ビグンッ！と身体を跳ねさせ、ぐったりと倒れる女の子

…やっぱりおかしいよな？冒険者同士で戦ったり、騎士がやりたい放題住人を襲ったり…

「ゲームとか漫画なら、相手が洗脳されてたり、戦わないといけない理由があるもんなんだけど…なっ！」

「ぐっ！？」

背後から接近してきた騎士の股間を裏蹴りで蹴り上げ…防がれた！？踵に感じたのは、蹴り潰し慣れ始めた男性の股間の感触ではなく、硬い金属の感触。ギンッ！とブーツの先端と踵を補強する金属とぶつかり合い、くぐもった鈍い音を響かせる

失敗したっ！？直ぐ様追撃に出ようと身体を反転させようとするが、

足首を掴まれてしまう。ぐっ、と騎士の指先が足にめり込んだ。なんか…やばそっ！？

「うなっ！？、ぎゃうっ！？」

身体を襲う浮遊感。一瞬遅れて背中に走る衝撃。がはっ…と口から酸素が逃げ出していく。足を捕まれ、地面に投げ飛ばされた、と気付くのにかかった時間は1秒弱。だが、その隙は余りにも致命的

ぐぎんっ！と身体の中に響く嫌な音。激痛に涙が溢れそうになるのを堪えながら、逆足で足を掴む手を蹴りつける

「くっ…！？」

聞こえた声には、僅かな動揺。足にめり込んでいた指が離れ、それでも尚ヅクン、ヅクンと痛む足に顔をしかめる

「手こずらせやがって…。はしゃぎすぎたな、お嬢ちゃん…」

「くっ…」

しくじった…。折れてはいない。これは…関節を外された？おっさんの得意技だから、分かりやすい。そして――脱臼は、回復魔法じゃ治せない。関節をはめた後に使えば痛みを取ることが可能だけど――俺は、関節のはめかたなんか分からない。ツゥー…と、痛みからか、脂汗とも冷や汗ともつかない汗が頬を伝う

「だが…これで終わりだ！」

剣を振り上げる騎士。その姿が、妙にゆっくりに見える

片足で背後に向かって飛びながら、矢を生成した――けど、どこに撃つ？

足？腕？頭？胴体？…どこに撃てば攻撃を止められる？――どこに撃てば殺さずに彼を止められる？

刹那の思考。ほんの少しの時間で、さまざまな考えが頭を巡る

手足に撃つ？なんで？相手は殺す気なのに。でも人殺しダメ。なんで？人殺しは犯罪で――

でも

死にたくない

だから――

予想外に、あっさりと結論は出た。俺みたいなヘタレが、ここまであっさりと殺人という選択肢を選べることに少しだけ違和感を感じつつ――

矢を、放つ

同時に、声が、響いた

「そいつに手ぇ出すなぁあああああああああああっ！！！」

絶叫。

いつもは穏やかな、人を安心させる声。それがこんなにも怒りに溢れた声に変わるのに、驚いた

そして、トスッ、ドズッ、と

あっさりと、俺の矢は――騎士の額に、突き刺さり

見慣れた鋭い爪を備えた腕は、鎧ごと騎士の身体を貫いた

時が止まったような錯覚。酷くあっさりと命を奪ってしまったが故に、全く実感が無い。この世界に来てからずっと身近にいた死が、すぐ隣でゲラゲラと俺を嘲笑っているような気すらする

ずるり、と騎士の身体が崩れ落ちる。埃と共に血の飛沫が舞い散り、ぴちゃっと頬が生暖かい血で濡れる

ぽたり、ぽたりと、未だ突きを放ったままの体勢で固まる腕。その先を、辿る。見つけた、目が、あった

返り血に鎧を汚した、おっさんと

矢を放ったまま体勢で固まる、俺の視線が――混じり合う

「「――あ」」

声が、重なる。それに、呆然としていた視界が、ゆらゆらと揺れながら像を結ぶ

おっさんもまた、血に染まった右腕を見つめながら…呆然と、声を漏らした

「「ち、ちが…っ」」

期せずして、声が重なった

殺した。俺が、殺した

殺させた。俺が、おっさんに…殺させた

おっさんが、表情を歪める。いつもの飄々とした笑みでもなく、苦々しい表情でもなく――泣き出す寸前の、子供のような顔に

（――ぁ）

殺人への動揺が、違う感情に押し流される。嫌悪感も、混乱も、その余りにも強い感情に塗り潰されて、泡沫のごとく消え去る

自分のことなんか、どうでもいいから

今は、この人を――

「…くっ！！」

耐えかねたように、おっさんが背中を向ける。待って、駄目。今はダメ。行っちゃダメ

今は――休まなきゃ、ダメ

慰めなくちゃ。この人を。

この人を――支えなくちゃ

伸ばした手が、ギリギリでおっさんの服の端を掴む。掴んだ。ひき止めた――

なのに…その手を振り払うように、おっさんは駆け出す

俺が――おっさんが――2人で、殺した騎士の血が、その跡を追うように点々と続く

追いかけ、なくちゃ…

じゃないと…

おっさんが…オオジさんが…

「いなくなっちゃう…」

そんな確信にも似た想像に突き動かされ、ズキズキと痛む足を引き摺り、歩き出した

いつの間にか雨が、降り始める

ポツポツと髪を濡らす雨が――俺の心境を、物語っていた

29、転機（後書き）

最近書く量が増えすぎて、携帯投稿の人春的に困ります
１００００ｋバイト…５０００文字以内に毎回収めるの、地味に面倒です。削りすぎて大事な描写削っちゃったり…
すいません愚痴ですね

エロイカ襲撃編
レティ＆大路ｖｅｒはもうちょいで終わりです。あと2話くらいですかね？

アレクｖｅｒや弾ｖｅｒを書くかは未定

次回はついに殺人を犯した大路さんかぁー…

またシリアスになりそうでヤ

だらだらイチャイチャすればいいのに

今回のテンプレ

↓初・殺人

↓落ち込んで、雨

どうでもいいけど、「2人初めての共同作業」が殺人かぁ…

30、――触れた（前書き）

ほんとは前書きに

ガナルにエロイカに飛ばされたダン！

その前に立ち塞がるのは七色アフロの大男！

「なにぃっ！？第二の怪人だとぉ！？」

「あン？いま忙しいンダ。後に…」

「良いだろう！相手になろうっ！――変・神！」

「聞いてネェな…」

的な変身ヒーローｖｓギャグ補正ウォーリアー書こうとも思ったんですが、シリアスな空気が吹っ飛ぶんでやめました

30、――触れた

違う、と

違うんだ、と

否定したかった

けれど腕に染み込んだ血の臭いが否定を否定する

剣を振り上げた騎士。接近した。蹴り飛ばすつもりだった。剣が振り下ろされた先にいるだろう人間を、助けたかった

けれどその刃の先にいたのが見慣れた金色の髪を持つ、可愛らしい少女だと気付いて――視界が、真っ黒く染まったのだ

殺せ、と

戦え、と

頭の中で声がした

気が付けば、騎士の背中に渾身の力を込めた爪が振るわれていた

硬い金属の鎧と爪が激突。ぺきりと爪が砕け剥がれ血が吹き出す。それでも硬い爪は僅かながら金属の鎧を貫き、勢いを止めることの無かった指先は、冷たい金属に肉を剥がしながら、骨となって鎧に、その内の鎖帷子にめり込んでいく。流石に骨となった指先は鎖帷子を貫くことはなく、けれど鎖帷子ごと柔らかい筋肉の中に潜り込み、

ドクリドクリと脈動する心臓を掴み、グチャリと握りつぶした

思考の空白。自分の行動が信じられない。何故、何故、何故、何故？

何故、殺した？

何故、殺せた？

ソレはお前と同じ人間だろう？

自分への問い掛けに心臓が止まる。未だに暖かい騎士の身体から腕を引き抜けば、自分のものか騎士のものか分からない血が、ダラダラと流れる

反射的にそれを舐め取ろうとした自分に気が付き――自分自身が、ぐらりと崩れるような感覚

「「――あ」」

悲鳴をあげかけ、ギリギリで飲み込む。そうだ、あいつは…

あいつは、目を見開いて固まっていた

その表情は、俺のモノとそっくりで

見下ろせば、騎士の死体の頭部に突き刺さる矢

――こいつに、殺人を犯させてしまった

――こいつの目の前で人を殺してしまった

――こいつに…レティーシアに気付かれる

――俺が――殺人を――楽しんでいる事が

かろうじて保っていた自我がガラガラと崩れ落ちる

「「ち、ちがっ…」」

声が重なる。けれどその先は言葉にならない。ガクガクと震え、崩れ落ちそうになる膝を叱咤して言葉を絞り出す

――違う、違うんだ…っ！殺すつもりなんか無かった。耐えていた。みんな、この騎士以外は殺さなかった。この騎士が悪いんだ。こいつが、この騎士が――

お前を、襲おうとするから

だから俺は、こいつを殺したんだ

だから俺は――悪くない

そもそも、お前の矢で死んでいたのかもしれない

そんな――

そんな浅ましい事を一瞬でも考える自分に、吐き気を催す

訳が分からない。なんで、なんで。そんな言葉が頭を回る。殺すつもりなんか無かったんだ。本当なんだ。信じてほしい。頭を流れる

のは言い訳の言葉ばかりで、呆然としながらこちらを見つめるレティーシアへのフォローなんか、掠りもしない

あいつだって、同じ心境なはずなのに

初めて人を殺したはずなのに

だから、年上の、大人の俺がフォローしなきゃならないのに

頭を巡るのは違う言葉ばかり

初めて人を殺したんだろう？――なら俺の気持ちを理解してくれ

言葉が出ないくらい辛いだろう？――俺も同じだ。だからそんな目で見ないでくれ

フォローをして欲しいんだろう？――俺もだ。だから早くフォローしてくれ

浅ましい、底の浅い自分本意な言葉の数々がズルズルと緩慢に頭を動かす

――不味い

このままこいつと一緒にいたら、不味い

このままいたら――駄目になる

全部全部こいつのせいにして、自分のことしか考えない、最低な人間になっちまう。こいつを泣かせることしか出来ないような、クズ

になっちまう

――だったら、別れなきゃ

一刻も早く別れなきゃ

こいつが、無邪気で、子供っぽくて、可愛らしい…レティーシアが、
俺なんかに汚されない内に

俺みたいなクズのようになる前に

人殺しの味なんか覚えないように

こいつの敵を――皆殺しにして

こいつの前から、消えてしまおう

「――くぅっ！！」

人殺しの獣らしく、先に、先に、どこまでも早く殺してしまおう。
それを最後に、レティーシアから離れよう

俺のせいだ。俺のせいなんだ

レティーシアが人殺しなんかしたのは、俺のせいだ

俺が――もっと早く人殺しの覚悟をしていれば

俺がもっと早くレティーシアから離れていれば

グチャグチャになった思考。支離滅裂な展開。なんでそんな結論になるのか分からない。でも、無理だ――俺は、人殺しは、レティーシアの側にはいられない

背中を向ける。ほんの僅かな未練。いいのか？と。守るんじゃなかったのか？と頭の中に響く声

けれどそれも

「…っ」

僅かに感じる抵抗。服の裾を掴む小さな手。この手が、汚れた、汚してしまった。俺のせいじゃない。本当に？

どうせ俺は、遅かれ早かれ人殺しになるのだったなら

もう、ほんの少しだけ早く覚悟を決めていれば――レティーシアは…

手を、振り払う。駄目だ。駄目だ。何が駄目なのか分からないくらい駄目だ。全てが駄目だ

駄目過ぎて――殺したくなる

駆け出す。まだ、戦いは続く。雨が降りだす。ポツポツと、ポツポツと、血を洗い流せとばかりに雨が降る

走る走る雨の中。一歩でも遠くレティーシアより離れろ。お前がいるから全てが駄目だ。頭の声はどこまでもクリアに俺を責め立てる。受け入れよう。全て事実だ。否定のしようもない

1人も2人も100人も変わらない。殺せ、殺せ、血を浴びろ。肉を食らい女を犯せ!獣らしく!自由に殺せ!

「グゥルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ!!!!!」

どこかで獣が鳴いている。騎士の群れに飛び込んだ。背中の槍を引き抜けば、ドロリと右手の血で滑る。お構い無しに振り回す。頭に当たれば花が咲く。グチャリと血飛沫が雨に混じる

とにかく殺す、無造作に殺す。口の中に手を突き込む。喉笛に食らい付き腸を引きずり出す。獣が、獣が鳴いている。頭の奥で鳴いている。視界はずっと白黒で、舞い散る血潮は黒かった。生臭くて鉄錆びくさい。肉の臭い、死の臭い、笑みが漏れる。雄叫びが漏れる

…なんで殺してるんだ?なんで殺さなきゃいけないんだ?分からない。分からないけど、楽しい。人を殺すことは、こんなにも楽しいのか?

ぼんやりとした意識は正常には回らず、脳裏に響く声は殺害を、虐殺を肯定する。いいのか?いいとも。ダメだろう?そんなことはない。愉快そうにケラケラと笑う声

「HEY!プシーキャット!終わリダっ!HERO!終ワリだろっ!?なんでアイツは止まらネェッ!?」

声に、振り向く。死体が、雨で跳ねた泥が、ぐちゃりと音を鳴らす。モノクロの世界に、死の臭い

「な、なんだぁっ!?木人、変態、変な力場ときて今度は獣人か!

サービス精神旺盛だな！」

声、声？目の前には男が2人。見覚えはある。だが、それがどうした？ああ、こいつらは強そうだ。強い奴を殺したい。戦うのは強い奴のほうがいい。こんなにも楽しいのだから、やめる必要なんか――

槍を、構える。半ばからグニャリと折れ、血に汚れた槍に、表情を歪める男たち

「…どういうコトだ？力場の効果は無くなっタンじゃネェのか？」

「う、うーむ、どうやら素で悪堕ちしたようだな。よし、ならば良いだろう！この正義の味方！【ゴッドライダー　ラー】が愛の拳で目を覚ましてやろ」

「――大路さん！」

暖かい、小さな身体は――何の迷いもなく、血塗れの俺の腕の中に飛び込んできた

――違う。おかしい。だって、こいつは…人殺しなんか嫌いで、臆病で、優しくて、よく笑って…だから【綺麗】なんだ

それを汚した俺なんかが、近くにいたら――もっと、汚しちまう、から…

「…おいていかないで！」

どすり、と。

胸の中心に、言葉が突き刺さる

「嫌、なんだよぉ！大路さんが…大路さんが側にいないと、嫌、なんだよぉ…っ！」

ぼろぼろと、雨粒とも涙とも言えない水滴で可愛らしい顔をグシャグシャにしながら、ギュッと胸に収まる暖かさに

先刻まであんなにも楽しく感じていた殺人が――恐ろしいモノだと言う認識が、返ってくる。戻ってくる。視界に色が、戻ってくる

――でも、だから、どうして

頭の中を巡る言葉はそんなモノばかりで。胸の中にいる小さな女の子を、どうすればいいのか分からない

俺は…駄目だから

駄目だから、こいつの側にいてやれない

「ごめん…。俺は、…俺、もう駄目なんだよ…。お前の側になんか、いられないんだよ…」

「――なんでっ!?俺が…俺が…いてほしいんだよぉ…っ!!なにが、だめなんだよ…っ!?」

ぐすぐすと鼻を鳴らす。けど…その頭を撫でて、慰めることも出来ない

血で、汚してしまう

俺が…汚してしまう

結局のところ、俺は、戦うのにも、人殺しにも然程嫌悪感なんか感じなかった。楽しかった。殺人を楽しめるような人間だったんだ

そんな俺が――こいつの側になんかいられない

「…俺は、…人を殺したから…」

ぽつり、と漏れた言葉。その言葉に…レティーシアの顔が、怒りに染まる

「――俺だって殺した!自分が生きたいから!自分の命の方が大事だから…っ!他人なんか殺す!それに…っ!」

レティーシアの手が、俺の襟首を掴む。ぐいっ、と引き寄せられ、鼻と鼻がくっつきそうな位置で、視界がレティーシアの顔だけに占用される

「俺…っ！！俺、大路さんのためなら、何人だって殺す！だから…だから…っ！人を殺したから、なんて理由で…おいてかないで…っ！」

怒りが、悲しみに変わる。ボロボロと溢れる涙が、雨に混じって溶ける。くしゃくしゃに歪んだ顔なのに――それでも、綺麗だな、なんて…思った

「好きだよ…大路さん…好きなんだ…。だから…行かないで…捨てないで…どんな大路さんでもいい。人殺しでも、悪役でも、外道でも…どんな大路さんでも…俺、大丈夫だから…捨てないで…っ！」

「っ…ぁ…」

雨が、雨が、降ってる

雨が、頬を伝う。喉の奥が、鼻の奥が、痛い

「…ぉ、れ…殺す、つもり…無い…！まも、りたかった…っ！！なのに…なんで…ごめん…っ！殺させて…ごめん…っ！！」

声が、声にならない。顔を伏せる。見せられない、こんな顔

そう思っていたら、抱き締められた。柔らかい、薄い胸の感触が、胸当て越しに頬に伝わる

「すまん…すまん…っ！ぉ、れが…おれが、弱かったから…っ！！」

「ごめんね…っ、ごめんねおおじさん…ごめんね…ありがとう…ご

めんね…たよりっぱなしでごめんね…まもってくれてありがとう…」

レティーシアの腕に、力がこもる。僅かに離された頭を、固定する両手

レティーシアは…僅かに、微笑んだ

「おおじ、さんが…もう、殺しなんてしなくていいように…」

その泣き笑いの表情が、近付いてくる

「おれが、守るから…おれが、支えるから…だから…」

――触れた

＞ｉ２６６６７―３２５４＜

「おれのこと…これからも、ずっと守って…？側に、いさせてください…！」

僅かに、１秒にも満たない時間触れた唇は

水と、血と――悲しい味がした

30、――触れた（後書き）

アレク「…青春ダゼ」

ダン「…っ、くっ…は、破廉恥だ…っ！接吻など…！」

フーリム「だん、だーん？ちゅー？ちゅー？する？する？したい？ちゅー！」

みたいな光景が後ろで展開されてるのは秘密

お知らせ！

挿し絵まとめに吉岡　眞吾さまより頂いた
・アルファ・スティグマ
別名キチロリのイラスト追加！
アルたん可愛いよアルたん！
これはアルたんメイン回を書かざるをえない…

投稿板に
わたさまより頂いた
・猫耳猫尻尾アレクサンドロ
を追加！
腹筋注意。キャラクターたちもバイオハザードしてます

今回のテンプレ
がないです
テンプレっちゃテンプレですが、どっちかってーとレティーシアの暴走
エロイカにいる人、今フィールド魔法で馬鹿になってますからねー
ちなみにおっさんの急激な凶獣化もそのせい
おっさんの暴走中にダンがフィールド破壊しましたが
で、次回。
A、今話の時間帯でアレクとダンがどうやってフィールド魔法を破壊したのかー
っていうのの説明な、アレク&ダン回
と
B、その後の戦後処理&レティーシアと大路の今後
どちらがいいですかね?
レティーシア&大路でもダンとアレクの活躍は描写しますが、さら

っと流します。誰かの口から語らせる形で

早いとこレティと大路イチャイチャさせろよぉおぉおってならＢですね

なんか無駄にシリアスで困ってる人春でしたー

３０、同時刻、エロイカ西（前書き）

Ａルートですよー

ギャグ補正ウォーリアＶＳ変身ヒーローです

久々にガチのカオスです

やりたい放題です

30、同時刻、エロイカ西

「お、お、お、お、お、お、おおおおおおおおっっ！？」

ガナルのカードの効果により、エロイカの上空に投げ出された弾。しばらく空中でじたばたしていたものの、このまま落下すると赤い花を咲かせることになりかねない

キッ！と逆八の字を描く弾の眉。空中で右手を腰に当て、左手を右肩側に真っ直ぐ伸ばす――キュイン、と音がして、その腰に黄金のベルトが浮き出てくる

「変・神！」

キィンッ！て金属同士をぶつけたような甲高い音。落下する弾の後方に展開される、人形の太陽のような紋章。落下の勢いのままに、弾はその紋章に吸い込まれていく！

「説明しよう！
変身ヒーロー！一文字　弾はエジプト神話における太陽神：ラーの力を借りることにより【ゴッドライダー　ラー】に変身することが出来るのだ！とうっ！」

紋章を通過することで光に包まれる弾の鍛え上げた肉体は黒のボディ・スーツに包まれる！

更に後方に過ぎ去ったはずの太陽の紋章は、その左胸に！

太陽の熱き炎を体現するような真紅のボディ・アーマー！両肩から

伸びる雄山羊のような逞しい角！

手足を覆う装甲は太陽の眩しさを体現したかの如き黄金！

その頭部は猛る黄金の隼の如き流麗なデザイン！

――その姿は、【ライダー】というより【戦隊ヒーロー】に近かった！

しかも悪役に近かった！

そのまま直下で落下した弾――いや、ラーは建物を押し潰して着地！もうもうと土埃を巻き上げながら、それでもビシィッ！と指先までキッチリと伸ばしてポーズを取る！

「太陽の化身！ゴッドライダー：ラー！天の導きにただいま参上っ！どうせ太陽ならＢＬＡＢＫ　ＳＵＮのほうが良かったなんて思ってないぜ！」

「…あほー。だん、あほー…」

呆れ気味にふよふよと降りてきた、少女のような妖精…フーリムがぺしぺしとヘルメットを叩くが、ラーに気にした様子はない

「くっ、移動系の怪人だったか…。仕方ねぇ、フーリム、「妖精の輪／ガリトラップ」でさっきの場所に――」

「ＨＥＹ、ＨＥＲＯ。お前も敵カイ？」

あん？と首を傾げながら振り向いたラー。その視線が声の主を捕ら

え――そして、ラーは迷わず戦闘体勢を整えた

＞ｉ２６６９４―３３６５＜

「樹木怪人の次は変態怪人かっ！いいだろう！相手になるさ！」

「やーな、よかーん。やーな、よかんー」

対して声をかけた、七色アフロにブーメランビキニの大男――アレクサンドロもまた、にたりと笑ってナイフを構える

「ＯＫＯＫ、何でも来いヤ…。何ダか楽しクナッてきたとこダ…」

ぽつぽつと、雨が降り始める。それに、ラーは内心で冷や汗を流す。彼の主なエネルギー源は太陽光だ。太陽光が無いと、エネルギー系の攻撃がないためガチガチの殴り合いになってしまうし、必殺技すら使えない

――が！！それはそれでよしっ！！

冷や汗を流しながらもヘルメットの中でにやりと笑うラー

対するアレクサンドロは、明らかにこの世界の存在として異質なボディ・スーツの男に警戒する。恐らく、自分と同じ転生主人公のはず。しかも見るからに「ヒーロー」だ。相手はまず「主人公補正」を持っているとみて間違いない

――そう、あの唯一自分に土を付けた「クイーン・オブ・ファルガ

ナ」のように

我知らず、ナイフを握る手に力がこもる

１０数年前。彼が当時はただの荒れ果てた土地でしか無かったエロイカに隠居するより以前。ギャグ補正とエロ主補正を持つアレクサンドロは自他共に認める「最強」だった

そもそもギャグ補正は扱いこそ難しいが、極めれば「ただふざけているだけで相手が爆発して死ぬ」という理不尽極まりないスキルなのだ。身体能力もズバ抜けて高く、人型の魔族すらもエロ主補正により性的な意味で返り討ちにすることが可能な彼に、正面から戦い、打ち勝てる者はいなかった

そう、あの女以外には

真っ正面から彼を切りかかり、弾き飛ばし、ぶっ飛ばそうと襲いかかるファルガナ

彼はひたすらにふざけ、おちょくり、はぐらかした

――だというのに

『あんた――つまんない』

その言葉は――『ギャグ』補正持ちには致命的だった

侮蔑の視線は彼の精神を打ちのめし、無敵の回復力は水に濡れたちり紙の如く儚く敗れ、超人的な身体能力は老衰寸前の老人の如く衰えた

そんな彼に、ファルガナは更なる言葉を繋げたのだ

『…ごめん、飽きた。…もう、帰るわね？』

――主人公補正持ちなンざ大ッ嫌ェだッ！！

思い出したらイライラしてきたアレクサンドロ。あーもーいいよ。とにかくいいよ。八つ当たりするよ！とばかりに全身の筋肉が盛り上がる

「む…。出来る…」

「あほ、あほー」

ぺしぺしと頭を叩いていたフーリムがふわふわと飛びながら離れたのと同時に――動くっ！！

ギィンッ！！

甲高い、衝突音

先程までと立ち位置を変え、お互いに背中を向けたまま制止する２人の男

ぴしっ…とボディー・アーマーに亀裂が走り

ぱんっ、とブーメランパンツが弾けとんだ

「「――やるなっ！！」」

振り返り、同時に距離を詰める。先に動いたのはラー

「ゴッドパンチ！」

びゅおんっ！と風切り音を鳴らしてアレクに迫る鋼鉄より硬い拳。
アレクは冷静にそれをアフロヘアで受け止める！

非常識なほどのアフロヘアはふわふわであり、その柔らかさをもって衝撃を受け止め、逆に弾き返す！

「ぐぅ…っ！？」

腕を弾かれ、体勢を崩すラー。その隙を逃さずアレクは飛び上がり腰を振る！

「中心脚っ！」

「ぐはぁっ！？」

第三の足で体を痛打され、数m地面を滑るラー。すぐさま体勢を立て直し、泥を弾き飛ばしながらラーは手を上に伸ばす！

「輝け！俺の太陽ぉおおおおおおおおっ！！」

掲げた手のひらの上に光る光球。じゅうじゅうと雨を蒸発させながら紅く強く輝き光る光球に、アレクサンドロの全身に震えが走る

「面白ェ！」

迷いなく七色のアフロに手を伸ばし、それをズルリと引き剥がす。
グッ！と両手で毛玉を握り締めれば、それは七色に光り輝く宝玉へと姿を変える！

お互いの必殺技――ラーのそれはエネルギー不足だが――を大きく振りかぶり、２人の男は同時に叫ぶ！

誇り高く！気高く！

己の『必殺技』の名を！

「太陽光聖玉／ホーリーサンシャインッ！！」

「虹色漢波動／レインボーナイスガイッ！！」

＞ｉ２６７０７―３３６５＜

放たれた光球と宝玉は、丁度２人の中間で炸裂、爆裂。轟音とともに衝撃波を放ち、周りで戦っていた騎士を、冒険者を、建物を吹っ飛ばす！

その粉塵を切り裂きながら、２人は接近！

「やるな！変態と思っていたが見直した！」

「テメェもな！」

ギィンッ！と拳をナイフで受け止めながら、スキンヘッドへと姿を変えたアレクはにたりと笑う

「だが――」

アレクの姿が、消える。急に支えがなくなり、たたら踏むラー。その背後に残像を残しながら現れるアレク

「アフロを外した俺は！１０倍早ェ！！」

「ぐぅ…っ！？」

尻を再び中心脚で殴打され、前方に転がるラー。――しかし、ヘルメットの下でラーは笑っていた

（圧倒的なピンチ…っ！劣勢…っ！！今こそ、今こそ、【アレ】を使うとき！）

バババッ！と立ち上がりながら、彼は呼ぶ！ＬＶ：４０になったことで新たに得た相棒の名を！

「来ぉおおおぉおおいッ！！ホルゥゥゥゥウウウウスッッ！！」

「なにィッ！？」

ぱちぃ…んっ！と響くフィンガースナップの音。同時に雨雲に覆われた空が割れ、太陽が、そして白き月が空に輝く！

そこから降りてくるは光り輝く巨大な隼！隼は一直線にラーへと向かい…！その体に潜り込む！

胸に輝いていた太陽は右の目に、そして白い三日月は左目に！新たに美しい鳥の翼を背負い、黄金と紅の鎧は黒く、紅く、白く染まる！

「チェンジ！ラー・ホルアクティ！」

バサッ！と機械的な翼を広げながら、ラーは…否！ラー・ホルアクティはびしっとアレクを指差す！

「貴様に勝ち目は、既に！無い！！」

「くっ…っ！」

確かに。その通りだ。アレクには分かる。さっきまでは全てにおいて上回っていた。ステータス、戦闘経験、技術。その全てにおいてアレクが圧倒的だった

だが、今は違う。少なくともステータスは――桁が違う！

「ちぃ…」

ずるっ、とハゲカツラを外す。同時にモサッと再び生えてくる七色のモヒカン（注：地毛ではありません）

「引かない、か…その粋や良し！正々堂々迎え撃つ！」

「俺ぁなァ…負けランねぇんだよぉーっ！！」

そして2人は再びぶつかり合う――ことは、無かった

「…いつまでつづくー？だーん、ねー、けっかいこわしてよー？だーん」

2人の間に作られた「妖精の輪／ガリトラップ」。妖精が旅人を道に迷わせるために使う転送魔法の一種な訳だが――

同時に反対側から突っ込んだせいか。それともフーリムの悪意か。あるいはアレクのギャグ補正故か

再び空中に放り出された2人が地面に落下してきたとき

うつ伏せで倒れた全裸のアレクの尻にラー・ホルアクティのヘルメット――の嘴部分が深く突き刺さってた

「アッー！！」

「ギャッー！？」

「あほー、あほー」

フーリムの冷たい突っ込みが響き、混乱したラー・ホルアクティが全身を輝かせながら、飛び上がる

「ホルス・サンシャインキィイィィイイイックッッッ！！！」

キィイイイン――ッ！っと輝いていた全身の光が、ラー・ホルアクティの右足に集まる。それは陽炎のように揺らめきながら、一点に集中し――アレクの背中に炸裂したっ！！

「ぐぅあああああああッッ！？」

アレクの背中を、地面を、フィールド魔法を砕きながら地面の奥深くに向かって突き進む。底まで光が届かない程の大穴を開けながら、ラー・ホルアクティの超必殺技は容赦なくアレクの身体を粉微塵に変えた！

あまりにも強すぎる超必殺技は、余波によって他のカード効果も含めて吹き飛ばし、「事件終了」の言葉をラー・ホルアクティに伝える。ヒーロー補正は事件の発生も弾に伝えるが、同時に終局も伝えてくれる

「とぅっ！」

翼をはためかせ穴から抜け出すラー・ホルアクティ。地面に足を付けると同時に変身は解け、雨に濡れて尚風に揺れるマフラーが勝利の証

「太陽が天に輝く限り！その光が人を照らす限り！俺の戦いは終わらない！」

ビシッ！とポーズを決めた弾の後ろで、ドーンッ！と爆発が起こる。演出なので何の問題もない

「だーん！かくいーっ！」

「よっ！Ｍｒ，ＨＥＲＯッ！！やるジャねェカっ！」

キャッホー！とはしゃぐフーリムと、いい笑顔で拍手するアレク（アフロ）の暖かい声援に、にかっ、と笑みを見せる弾

「いやぁ、どうもどう…も？アレ？…あれ？」

「ァン？どうした？」

「…え？あ？ぅーん…？…ま、まぁ良いか。とにかくこれで戦いは終わるはずだ！事件終了だからな！変な戦いを誘発する力場は破壊したぜ！偶然だが！」

と、その時

「グルゥオオオオオオオオオッッ！！！」

腹の底から響くような、巨大な獣の遠吠え

「――詳しい話しは後でする！今は！」

「オゥ！行くぜＨＥＲＯッ！！」

そして２人は同時に駆け出す

死闘を繰り広げた２人の間には、なんとも言えない――形容できない空気があった

それは、友情の芽生えか、それとも…

「だ、だーん…と、とられるぅ…？」

恐々と声を漏らすフーリムだった

３０、同時刻、エロイカ西（後書き）

感想板が荒ぶっている件について

一晩で２０以上もレスが付くとは…

あとみてみんで検索してみたら「テンプレ勇者１００人召喚」のイラストが６９枚ありました

…ふむ

これは俺、死ぬな（確信）

こんなに幸せでいいはずがない！

こんなの絶対おかしいよ！

お知らせ

投稿板の　七式さま　画

集合絵の位置を変更＋張り替えます

ついにほぼ全員集合ですよ！

タイトルロゴ入りですよ！

ありがとうございますっ！

今回のテンプレ

↓ヒーローＶＳ怪人

↓ギャグ

↓カオス

…なんでこいつら真面目に戦ってんのにカオスなんだ…？

31、それからの関係（前書き）

前書き書き忘れた！

クロイワくんが踏んだルート

レティと別行動

←

頭を止めれば全員止まる！

シャルロッテの元へ

←

発見！

「こんな戦いはやめさせてくださいロッテさん！絶対おかしいです！」

←

「うるさい！これは王命だ！ユート！例え弟子でも邪魔するなら…斬る！」

←

「…なら！弟子として力尽くでロッテさんを止める！こんなの絶対間違ってる！俺があんたを止めてやる！」

←

バトル！

←

クロイワＷＩＮ！

←

そしてカオス戦が終わり、結界破壊

←

「アレクサンドロ殿に、弁明をしにいかなければ…」

←

「なら、俺も手伝います。ロッテには、返しきれない恩があるし」

←

「…ふんっ、生意気だ。ユートのくせに…」

←

「…生意気、だぞ…」

シャルロッテルートが解禁されました

31、それからの関係

――この手だけは、離さない

戦いは終わり、俺、オオ…おっさん、ダンさん、アレクサンドロさん、そして生き残った冒険者はアレクサンドロの自宅…この街の最高級娼館に案内された

多くの冒険者は一階で治療を受けている。売り子の女の子や男性にも結構な数の怪我人が出たらしく、もしかしたら長い期間営業停止になるかもしれない、とアレクサンドロさんは言っていた

生き残った冒険者も売り子の方も総出の戦闘だったらしい。どうやら何の戦闘能力もないヒトも相当数亡くなったらしく、死亡者の確認をするアレクサンドロさんは沈痛な顔をしていた

どうやら何らかの魔法がかかった結界が働いていたらしく、それのせいであそこまで大きな戦いになってしまったらしい。俺やおっさん、ダンは不思議とその結界の効果があまり無かったから完全に正気を失わずに済んだようだが、中には見た目子供にしか見えない女の子が、大柄な騎士に小さなナイフで切りかかり、逆に斬殺される…みたいな光景もあったそうだ

戦いは体感時間では何日も続いていたような気すらするのに、実際はそこまででも無かったらしい。太陽はやや西に傾いているものの、まだ夕方とも言い切れない時間だ

とりあえずダンは動けない怪我人がいないか捜索、アレクサンドロさんは被害状況の確認、俺とおっさんは他の冒険者と同じように広いロビーで待たされている。怪我人の間をパタパタと女の子や少年が駆け回り、怪我の治療や応急手当てをしているようだ

――そんな中、おっさんは居心地悪そうに身動ぎしたり、チラチラと俺にアイコンタクトを送ってくる。その度に薄く微笑んで返してやれば、がっくりと項垂れる

ぺちゃりと尻尾を地面に付けて落ち込んでいるおっさん。そんな様子が可愛くて、口元に手を当ててくすくす笑う。昔…ネカマやってたころの演技も交えての、女の子アピール

…俺は男だけど、男だから、男として…おっさんが…オオジ　ヒカルさんが、好きだ

恋愛感情じゃない、なんて自分に言い聞かせてきたけど、この感情が恋愛感情じゃないなら、それこそ一生恋なんか出来ない

ずっと一緒にいたくて、死ぬまで相手を支えたくて、相手が泣くところなんか見たくない

ほら、恋愛感情だ。…と、思う。自信はないけど

男だった俺がおっさんに恋するなんて、変だ。変だし、もしおっさんに俺が男だった、と打ち明けて…それが原因で拒絶されるのが、

恐かった

だから何度も言い訳して、誤魔化してきた

けど――多分、

あの、泣いてる俺をおっさんが慰めてくれた時から…この恋は、始まってたんだと思う

だから、ギュッと握った手に力を込める。少し汗ばんだおっさんの左手に、右手ですがり付く。自然と浮かぶ笑みと、伝わる体温に胸がトクトクと鼓動する

「…離せよ」

「やだ。…また、振り払うかもしれないでしょ？」

うぐっ、と声を詰まらせるおっさん。その罰の悪そうな顔を下から見つめあげれば、その視線が俺の唇に集まってるのが分かる

「ふふっ、オオジさん、本当にモテなかったんだね～」

「あ？あぁ！？いきなり何言ってやがる！？」

狼狽して慌て出すおっさん。その拍子に右手を壁にぶつけ、「ぐっ！？」と痛そうに顔を歪める

「あー、もぅ。ほら手ぇ出して？隠してやれば、多分大丈夫だよ」

「…すまん、頼む」

耳すらぺちょりと寝せて申し訳なさそうに言うおっさん。その右手をマントで包んで隠しながら、回復魔法。緑の光が右手を包み込み、僅かな発光。それをマントと身体で隠しながら、その手をにぎにぎと握る。…一応言っておくが、俺だっていきなりのキスは恥ずかしかったのだ。少しくらい照れ隠しにいろいろさせてくれてもいいと思う

「い、いつまで触ってやがる！」

「あ、」

ぐぃっ、と頬を赤くして手を引っこ抜くおっさん。むぅ、と不機嫌アピールで唇を尖らせる。…いや、冗談抜きに恥ずかしいんだよ。「レティーシア」ごっこでもやってないとまともに顔も見れないくらい。ＶＲ時代の「可愛い女の子」演技がここで活きてくるとは…人生何が起こるか分かんないなぁ

「あ、いや、その…す、すまん…」

「いいよ、別に。おれもやり過ぎたと思うし」

あはは、と笑ってみせれば、おっさんは頬を赤くしてそっぽ向く。…少しだけ、沈黙

…嫌だな、沈黙。なんか…寂しい

「あのさ、あれってファーストキス？」

「ぶぅーっ！？」

汚っ!?血の赤が混じった唾液を吹くおっさん。口の中が痛い、みたいな感じはしなかったから多分、敵に…騎士に噛み付いたんだろうなぁ

「んなっ、わきゃねぇだろ!?２８だぞっ俺ぁ!学生のころにゃ普通に彼女が」

「俺は、」

おっさんの言葉を遮って笑う。にこっ、と小首を傾げながら、唇に手を添える。あの時を思い出せば、自然と頬が熱くなる

「初めてだったよ?」

「――――――」

レティーシアとしては、だけどねー。と内心で舌を出す。おっさんだって結構な年だし、一通り経験あるのは当然だ。…でもまぁ、んなことどうでもいいんだよね。ネカマ舐めんな。男を落とす手練手管は一通りチェックしてるんだよ。流石に俺も「俺」だったころは彼女いたような記憶もあるけど、レティーシアとしては初めてだし、嘘は言ってないもーん

絶句して頭を抱えるおっさんのすぐそばで座る。本当なら手を握るくらいはしてたいんだけど、おっさん正義感強いからなー。俺みたいな見た目幼い女の子にキスされたのは相当なショックだったんだろう。好きなだけ苦悩するといいさー

開き直った女（元男）舐めんなよー。絶対おっさんからキスさせて

やる。…いつか、な。いつか。今は無理。恥ずかしい。今されたら…

…うぁ

あー、熱くなった頬を手で扇いで冷ます。落ち着けー俺ー、落ち着けー俺ー。ああ、駄目だ。口元がにやける

「あ、あー、ガキ」

…む、

「…ん？返事しろよ」

…はぁ。こりゃ確かに結婚出来ないーっておっさんのお姉さんが言うのも分かるわ。まぁ、男としての視点から見れば「仕方ないなぁ」って笑って許せるけど、女の視点だと「なんでそんなことも分かんないの？」ってなっちゃうよ…

でも、このまま黙ってたらおっさんは一生気付かないだろうし…。俺から言うしかないんだろうなぁ

ため息混じりにジト目で睨めば、僅かにたじろぐおっさん。…あー、なんでおっさんってこんな弄りたくなるんだろ。下手したら素で俺の女の子演技より可愛いんじゃないか？…惚れた弱みかなぁ？

「…名前」

「あ、ぁん？」

首を傾げるおっさん。うわー、ないわー。その仕草はないなぁー。

ふりふり尻尾を揺らすのも反則だよなー

「名前で、呼んで。…好きな人から子供扱いは、結構傷付くよ」

「――――」

再び絶句したおっさん。酸欠の金魚みたいに口をパクパクと開閉し、俺を指差しながら目を白黒させる

…くっ、ふふっ…駄目だ。耐えらんない

「ふふっ…冗談だよ、ヒカルさん」

「じょ、冗談か。良かっ…あぁっ!?」

けらけらと笑いながら「んー?」と首を傾げる。ドンドン追い詰められて遠い目になって頭を抱えるヒカルさん。その横で体育座りしながら、俯いたヒカルさんの顔を覗き込む

…でも、名前で呼んでほしいなぁ、なんて思わないわけでもないわけで…

…っ、っっ、俺、俺、気持ち悪い!なにこのキャラ!背筋ぞくぞくする!でも毎回慌てるヒカルさん可愛いなオイ!俺、変態くせぇ!?ニヤけるな!

あー、だめだー。メロメロだ俺。ヒカルさんのこと考えるだけでちょっと幸せだ。困る…。早くまた旅に出たいなぁ。2人っきりだよ。流石にまだそういう覚悟決めれるほどじゃないけど、ヒカルさんと2人っきりで旅が出来るんだ。…ぅん、なんか、凄い幸せ

と、その時。店の入り口が開かれる。ダンさんが戻ってきたのか？と思って視線を向けたら、そこにいたのは…見たことない美人さんの身体を支える、ボロボロのクロイワだった

全身切り傷だらけだし、着ていた鎧もボロボロ。唯一綺麗なのは背中に背負った杖くらいで、腰に差していた長剣は鞘しか残ってない。何があったんだろう

隣でクロイワに支えられて歩いている美人さんは、首から下を隙なく覆う白銀の鎧に、藍色に金の糸で大きく薔薇と女の人の横顔が刺繍されたマントを付けている。腰には立派な剣、左手には籠手と一体型の小振りな盾を付けた、凛々しい女騎士って感じだ。ショートに切り揃えられた金の髪と、切れ長の青い瞳がその印象に拍車をかける

「おい、あれ…」「なんで騎士が…」「散々殺しまくりやがって…」とそこかしこから聞こえるくらいの声量で、女騎士を責めるように開始される陰口。女騎士は悲しそうに目を細め、鞘に入ったままの剣を杖代わりに、クロイワの身体から離れる

「…近衛、親衛隊…第3大隊副長…シャルロッテ・カーディナルです…。アレクサンドロ・フィナッツァ殿に、会わせて頂きたい…」

喋る度に傷が痛むのだろう。表情を歪めながら言葉を発する美人さん…シャルロッテさん？に、厳しい視線が突き刺さる

「…確認してきます。この場を動かないで頂きたい」

「…感謝します」

それでも1人の娼婦が応対し、階上にいるアレクサンドロさんを呼びに行く。シャルロッテさんはふらふらとした動作で、かろうじて壁に背を付けることで立っている

そんな中、クロイワは不安そうにシャルロッテさんに付き添っていたけど、俺の姿に気が付くと表情を輝かせ――ちょっ！？まずくねぇか！？

「レティーシアちゃん！頼む！力を貸してくれ！」

「――ああもうっ！」

慌てて立ち上がり、小走りで2人に近付いていく。そしてその勢いのまま、クロイワのボディに全力で拳を打ち込んだ

「ぐぅっ！？」

…っぅ～、残念ながら、痛い思いをしたのは俺だったが。どうやら、クロイワも魔力障壁を張っていたらしい。いきなり殴られて目を白黒させているクロイワの襟首を痛いの我慢して引っ掴み、無理矢理引き寄せて耳元で話す

「――回復魔法は秘密だ。この世界には回復魔法がないんだ。だから悪いけど、協力出来ない」

「な、なるほど…。ごめん、軽率だった」

真剣な表情で頷くクロイワに内心で安堵。…それでも治せ、とか言われたらどうしようもないし、「バラされたくなかったら治せ」と

か言われたら抵抗出来なかった。クロイワが善人で助かったな

「じゃあ、痛み止めの薬とか持ってないか…？その、今回の戦争の原因はほとんどロッテにあるからさ、肋骨砕けてんのに痛いの我慢してるんだ…。やった俺が言っていいのか分からないけど、痛みだけでも抑えてやりたいんだ」

「クロイワがやった、って…。お前も結界のせいで正気失ったのか？」

「…結界？いや、ロッテが明らかに正気じゃなかったから止めようとして…。でも言葉じゃ止まらなかったから…」

ちらり、と剣を失った鞘に視線を移すクロイワ。…力尽くで止めた、ってことか。シャルロッテさん、相当強そうなのに…。クロイワ、強くなったんだな

…痛み止め、か

確かリーデスさんから貰った生理痛の薬が鎮痛剤も兼ねてたよな？

「多分、これが効く」とインベントリから薬を取り出せば、クロイワは礼を言ってシャルロッテさんに駆け寄る

「ほら、これ飲んで」「い、いらない…！少しくらい私よりも強くなったからといって調子に乗るな…！」「いいから飲めよ…心配なんだよ…」「…弟子のくせに、生意気なんだ…。ユートのくせに…」

とかラブコメってる2人を放置して、ヒカルさんの所に戻る

どうやら一通り狼狽し終わったらしく、今は遠い目をしながらタバコを吹かしていた

このまま近寄って、その勢いのままに抱き付いたらどんな反応するんだろう

想像するだけでドキドキ高鳴る心臓と、熱くなる頬

…むぅ…

…恋って、楽しいかもしれない

31、それからの関係（後書き）

いやー、乙女化一気に進みすぎて笑った笑った

書いてて「おっさん頑張れー」言いたくなる件

ネカマの人って隙なく可愛いよね？

お知らせ！

時村さまより「３０、――触れた」内の１シーン貰いました！

とっけつ！とっけつ！

血が…甘いっ！？

檸檬紅茶さまより

「ケルドゥ・ガナル」キャライラストを頂きました！

ヤンデレヤンデレっ！

わざわざ色も着けて貰いましたぜ！

木人かわいいよ木人っ！

…さて

公式で認定します

「アレクさんの嫁」

わたさまより「３０、同時刻―エロイカ西」

のカオスバトルを二枚も書いて貰っちゃったよ！（爆）

腹筋がっ！腹筋がっ！

素で吹き出したわ！カレーヌードル食べてたから服が！服が！染みが！（爆）

今回のテンプレ

もはやテンプレ

↓へたれオヤヂ

作者も知らなかったんだけど、レティって微Sだったんですねー

32、再会と初対面（前書き）

お知らせ！

みてみん　七式　さまの部屋に「魔法陣グルグル」オマージュの「テンプレ勇者１００人召喚」の４コマがありますよ！

はまり役で笑った（笑）

今回も前後編です

32、再会と初対面

露骨に距離を取ろうとするヒカルさんの手を握って逃げようとするのを防ぎつつ、しばらく待っていたらさっきの娼婦が戻ってきて、シャルロッテさんを連れていく。クロイワもそれに付いていき、ひそひそと小さな罵りの声がロビーに響く

恐らくそれが聞こえていたんだろう。肩を落とすシャルロッテさんの背中をポンポン、と叩き、慰めながら階段を上っていく。うーん、男の子だな、クロイワ

「…俺達も行くか？」

「え？なんで？」

首を傾げる俺に、ヒカルさんは溜め息を吐く。てっきり手を繋いでるのが恥ずかしいから、真面目な話に混じってうやむやにする気なのかと思ったけど…どうも違うっぽい

「…気にならねぇのか？こんな戦いに巻き込まれてよ」

「え？うーん…あんまり？」

怪訝な顔をするヒカルさん。そんなおかしいこと言ったかな？だって、さ

「どうせ普通に生きてたってトラブルに遭遇するのは変わんないって。こんな世界だよ？」

「――なるほど、な」

確かになー。この世界に来てからトラブルしかねぇわと苦笑いするヒカルさん。俺もそれにくすくす笑う

「流石に目の前で人が死ぬのはキツかったけど、俺もヒカルさんもこうして生きてるしさ。それだけで十分だよ、俺は」

言いながら、頭をヒカルさんの肩に乗せる。ぴしっと硬直するヒカルさん。手を繋ぐのはもう慣れられちゃったみたいで残念だけど、こうして甘えられるのに弱いんだなー、なんて新しい発見もある。そのたびに胸の奥がふわふわして、口元がにやける

「――よしっ！やっぱ話聞きにいくか！」

「うなっ！？…もー」

急にヒカルさんが立ち上がったせいで、体重を預けていた支えがなくなり倒れかける。咄嗟に繋いでいた手をヒカルさんが引っ張ってくれたけど、急に引っ張られて腕が痛い

「すまん、大丈夫か？」

「んー？大丈夫大丈夫」

ひらひらと開いてる方の手を振る。…んー、それにしてもアレだなおっさんの方から強く握り返してくれるのが嬉しいとは思わなかった

「あはは…」と熱くなった頬を隠すように笑い、「なら、行こうか。

頭脳労働任せた！」とヒカルさんの手を引いて歩き出す

ヒカルさんは繋がれたままの手を恨めしげに見てたけど、「…仕方ねぇな、まぁ、任せとけ」と薄く笑った

…ようやく、笑った

それにほっと胸を撫で下ろしながら、階上に上が

――「わーっ！わーっ！お願い待って待って待って待ってぇー！！」

そんな声と共に、

ぐにゃり、と正面の空間が歪む。濃厚な…けれど身体に刻み込まれた魔力の波長に、自然と身体が硬直し、直立不動になる

「ごめんなさいごめんなさいなんていうかごめんなさい私の頭で良かったらいくらでも下げますからアレですここは1つ穏便な話をーっ！」

そんな声と共に出てきた影は、2つ

1人目は濃い青の修道服だろうか？アニメや漫画のシスターみたいな格好をした、10代半ばの女の子。ちなみに帽子は無くて、綺麗な緑色の髪をクルクルロール…ツインテールロール？にしている。顔立ちは登場と同時に土下座したから分からないけど、やたら可愛らしいアニメ声だ

「ナルクトール、ごめんなさい。ズレたわ」

そんな言葉をしれっとした顔で発する――リーデスさん。思わぬ再会にびっくりして固まっていたら、

「マジですか!?ヒデェ!?うわーんアレクサンドロさんどこーっ!?」

ガバッと顔を上げた女の子がわたわたと慌てだす。…うわ、顔立ちは凄く可愛らしいのに、顔色は青白いし、目元のクマが半端じゃない。そのせいか、キツめのつり上がった目が相手を睨んでいるような三拍眼になってしまっている。綺麗で大きな黒い瞳が、見る見る内に潤んでいく

「あ、ああ…い、胃が痛い…っ!つまりアレですねコンチクショー!私らがてめぇから喧嘩売ってきたと思ってらっしゃる方に精神的動揺を与えられないまま初対面か!胃が!胃が!こんなことなら伸一を連れてくるのでした!見た目のダメージはデカ…ダメですアレクサンドロさんに勝てる見た目じゃありません!助けてリーデス!こう、アレクサンドロさんが思わず菩薩の笑みを浮かべてくれそうな魔法を!」

「無理よ。魔力切れしてるもの。転送魔法は魔力消費大きいのよ。あと素直に説明してらっしゃい」

「はにゃーっ!死ねってかリーデスのドドドSさんめ!胃薬用意して待ってなさいバァーカ!シャルロッテのアホーッ!」

そのままドタバタと足音高く走り出す女の子。俺達はそんな彼女をぽかーんと見つめることしか出来ない。…何事?

「久しぶりね」

「あ、はい。久しぶりです…」

ペコリ、と頭を下げる。リーデスさんはじぃ～っと俺の頭から爪先までをじっくりと眺め、ふっと小さく笑った

「良かったわ。まだ処女ね」

第2声がそれか

突っ込みたい衝動を必死で堪える。ちらっと隣を見てみれば、おっさんもぷるぷる震えて我慢してた

「…あー、ヒカルさんが照れるんでそういうセリフはなし、の方向で」

「誰が照れるか！」とか言いながら繋いでいた手を無理矢理切り離すヒカルさんに苦笑い。リーデスさんはぴくり、と眉を動かし、楽しそうに「――ふぅん」と笑った

「結構よ。意外と早く異種族姦通が見れそうで大いに結構」

「かんつ…？んなぁ！？ねーよ！ねーわっ！俺がこんなガキに手ぇ出すかっ！」

…むぅ、手強いなぁ。この理性の固さが好きになった主な要因なのに、今度はそれがネックになるとは…。流石に俺から押し倒す勇気はねーよ。初めては痛いって言うし

若干不機嫌になった俺を面白そうに眺めて、リーデスさんは「着い

てらっしゃい」と俺たちを手招きする

その背中を追って階段を上る。よく考えたら階段の途中でいきなり出現したのか…危なかったな。下手したら大怪我じゃすまなかった

階段を上りきり、廊下を歩く。大きなお店なので廊下も長い。アレクサンドロさんはどこにいるんだろう、と首を傾げながら歩いていたら、リーデスさんが背中を向けたまま言葉を発する

「この間の依頼…エルフの森の調査だけど、取り消すわ」

「え？いきなりどうしたんですか？」

前を歩くリーデスさんの空気が、妙に固い。結界のある魔女の屋敷の中じゃないからなのか、他の要因があるのか分からないけど…話の流れ的に、楽しい話じゃなさそうだな

「――『魔王』との決戦が近いわ。つまり…研究してる時間が無いのよ」

「「っ」」

【あの】リーデスさんが研究を後回しにする…。その重要さに、身体が固まる。リーデスさんもそんな俺達の反応に満足したように頷き、

「さっきの娘――名前はナルクトール。ルク、と呼んであげなさい。あの娘もあたしと同じ転生者よ。その中でも結構使い勝手のいい、「千里眼」と「完全記憶」能力の持ち主よ。ファルガナ大陸内ならあの娘に見えないものはない。その才能を見込まれて、ファルガナ

にこの国の宰相を任されてるんだけど…」

と、そこで1つ区切り、

「このエロイカでの騒動。その全てが魔族の『仕込み』だったそうよ」

「嘘、だろ…？」

ヒカルさんが信じられない、と言わんばかりの表情で問い掛けるが、リーデスさんは無情にも「全て真実よ。目撃者がいるもの」と切り捨てる

…無言で、ヒカルさんの手を握る。…弱々しい、力のこもらない掌。キュゥッと握る手に力を込めても、握り返しすらしない

…多分だけど、「まさか、自分が殺人を犯すはめになったのが魔族のせいだったなんて…」とか、「だが、そんな言い訳をしたところで俺がこの手で人を殺したのには変わりない…」とか考えても仕方のないことで苦悩してるんだろう。…ヒカルさんは、優しいから

…俺はもう、迷わない

自分が生き残って、ヒカルさんも生き残って、また一緒に旅をする。そのためなら…人間だって殺せる。この世界のルールに適応してでも、俺はヒカルさんを守りたい

ヒカルさんが殺せないなら、俺が殺せばいいんだ

「あの娘もあの娘なりに頑張って、魔族が爆弾を仕掛け始めてすぐ

あたしに連絡取ってきたのだけれど、結局鎮圧に動けたのはこんな時間…。ふふっ、まさかナルクトールの千里眼を超えるほどの知識面チートなのかしら…。ファルガナは「アカシックレコード」と言っていたけれど…。ファルガナ大陸内も見通せる？…ほしい、欲しいわ。アカシックレコード…全ての知の宝庫…っ！この世の審理…っ！！」

なんだか危ない光を目の奥で輝かせるリーデスさんに内心で引きながら、「話、ズレてますよ？」と言えば、はっとしたように正気に戻るリーデスさん。僅かに頬を染め、恥ずかしそうにこほん、と咳払いし

「今、ファルガナは大陸中の転生者と主人公を探しているわ。ナルクトールの目からは逃げられないからね、あなたたちが異端…「主人公」であることは既にバレてるわ」

「…そう、ですか」

…参ったな。そういう方向のスキルもあったのか…。しかも相手には権力もある。宰相っていうくらいだし、かなり偉いんだろう。そうは見えなかったけど。幼いし、可愛いし。権力で横暴な命令出されたら、従わないといけないのかなぁ…

とか悩んでいたら、

「まぁあたしがバラしたんだけど」

「「リーデス」さぁんっ！？」

あんた一体何してくれちゃってるんだ！？距離を詰めて掴みかかり

そうになる衝動を必死で抑えながら怒鳴れば、「えー」と不満げな声を出すリーデスさん

「遅かれ早かれバレるなら、先にバラしてアドバンテージ稼いだ方がいいでしょう。前に貴女、視線を感じた、的なこと言ってたでしょう?アレ、「回復魔法」なんてレアなスキル見つけたナルクトールがしばらくストーキングしていたそうよ」

「え〝…」

絶句してしまう俺に、リーデスさんは口元だけで薄く笑い、

「安心なさい、ナルクトールにはあたしから交渉しておいたから、あの娘がエルフちゃんにちょっかいかけることは無いわ。今回の『魔王』を倒すための戦いだけよ。契約の精霊にも縛られてるから大丈夫」

「リーデスさん…」

じんわりと胸の内に広がっていく温かい感情。うわっ…な、なんだろ…なんかちょっと泣きそ

「それにエルフちゃんの協力と引き換えに現在も生存しているエルフの里を教えてもらえたしね」

「おーいっ!?感動返してくださいよ!」

売られてた!恩を着せるみたいな言い方しつつ普通に俺達のこと売り飛ばしてた!

「知らないわよ。それにれっきとした契約よ契約。エルフちゃんの情報を与える代わりにエルフちゃんに余計なちょっかいをかけない。あたしからエルフちゃんの協力を要請する代わりにエルフの情報を渡す。ほら、あたしは損しないけどフィフティ・フィフティ」

「悪意がある！リーデスさんの台詞に悪意がある！」

「別に出ていったことを根に持っているわけではないわ」

相変わらず無駄に正直ですねぇ！内心で怒鳴り付けたい衝動を必死に堪えながら頭を抱える。ヒカルさんも「俺ぁこの人にだけは一生勝てる気がしねぇ…」と凹んでいる。うん、全くの同意だ

「ここね。ナルクトールの魔力を感じるわ」

と、そんなことをしている内に部屋に付いたらしい。ノックをしてから無造作にドアを開くリーデスさん。…返事、聞かないんだ。もうこの人の相手は本当に疲れる…と思っていたら

「――じゃあ、何か？」

背筋が凍るような、憤怒の炎に足がすくんだ

「――俺のガキども散々殺して、それでも協力しろっつーのか」

声の主は――初対面の陽気な雰囲気なんか欠片もない、怒髪天を突くアレクサンドロさんだった

32、再会と初対面（後書き）

甘ったるいだけじゃダメらしいぜ！

でも今のレティなら関係なしにおっさん…いやさヒカルさんにらぶーしそうだ…

流石に空気は読んでくれる。と思う（笑）

そしてナルクトールちゃん17歳。ミニマム普乳スレンダー

NAISEIチートの人。

脳筋のファルガナの手綱を取り、脳筋の騎士団を纏めあげ、無能な上司に代わり国の行政を一手に引き受ける苦労人

でもファルガナ（サイヤ人）恐いから文句も言えない娘。恐がり

次回はもっと苦労していただく（キリッ）

今回のテンプレ

↓NAISEIチート主人公

↓千里眼！

↓一度見たら忘れない（キリッ

閑話　ナルクトール（前書き）

胃薬が大量にプレゼントされております（笑）

あとお菓子も貰ったよー

ルク「胃が痛くて食べれない…」

素で→な娘

お知らせ！

タケブさんが

「ゴッドライダー：ラー」をデザインしてくださいました！

投稿板に乗っけておきますっ！

閑話　ナルクトール

私の名前はナルクトール。名字は無い。転生者です

前世では内政系のＳＳが好きだったことを除けば、普通の女子高生だった私。気が付いたら赤ちゃんで、気が付いたら5、６歳くらいまで成長してて、あっという間に１０歳になって、人買いに売られましたとさ

…うん、おかしいよね！？おかしいよねぇ！？そりゃ、ナルクトールは尋常じゃないくらいの美少女だよ？お母さん（だった人）も大喜びで私と引き換えに大金を貰ったさ！ナルクちゃんめっちゃ美少女だったからね！

――で、ロリコンな悪い大臣に買われてああもう椿の花が落ちる～もういや死のうって感じになってる時に、女王さま…ファルガナさまに助けて貰った訳ですが

ファルガナさま的には私を助けるつもりなんか更々なくて、そのデブった悪徳大臣が横領とか脱税したからリンチっただけだったらしい。だというのに私ってば勘違いして「こりゃ天の助けに違いねぇ！」とばかりにファルガナさまに頼ったさ！泣きついたさ！

…それが私の人生の急転直下の始まりでした、まる

私の「千里眼」と「完全記憶」の能力を知ったファルガナさまは、私を査察官に任命。犯罪行為やってる貴族、官僚のリストを作ってドンドン提出させたわけよ

…そしたら出るわ出るわ。夏場の羽虫のごとく汚職の証拠がごろんごろん。その度にファルガナさまは私刑執行っとばかりに大暴れ。お陰で行政を行ってた官僚の首が9割入れ代わった

…当然んなことしてたら行政は回んなくなる。で、それでどーすんですかファルガナさまーっ!!と私が責任を感じながら叫んだのが5年前。私が12歳の時

「そ、じゃ、あんたがやりなさい」

…え〝

「やり方は見てたなら「覚えてる」でしょ?頑張ってね~。あ、あんた明日から宰相だから」

…ぅえええええええええっっ!?

もはや頭の中がフィーバー状態!ちくしょう脳筋め!脳筋め!強いからって調子に乗るなよ!なんて目の前じゃ言えませ~ん。サイヤ人だよ?気功砲で月を破壊しちゃうような奴らと殴り合える身体能力だよ?逆らえる訳がない!私ってば貧弱もやしっ娘夢は知的クールさんのお嫁さんだよ!?無理無理無理無理です!

そこから私の不眠不休年中寝不足生活が始まるとは誰も思わなスター!いや多分誰かは予想してたんだろうけども!同僚の(かろうじて)脳筋じゃない官僚は私のこと同情の目で見てたしな!

とにかく私は前世で読んだSSを必死こいて思い出しながら安定した税収を得るために各地の領主に領地経営の手腕を仕込んだり、その一方でまたあの悲劇(哀)を起こさないよう悪徳官僚を事前処理

したり、ファルガナさまに嫌われないよう必死こいてお仕事したさ！1日30分睡眠とか普通だったさ！知ってるか？その気になれば1日が30時間になるんだぜ？作業密度的な意味で！

その甲斐もあってそれなりの権力得たし、ここ最近は1日に2時間も寝れるようになった。やったねルクちゃん！仕事が減ったよ！

――でもこれはねぇだろぉおおおおおおおおっ！！

部屋に入った瞬間、空気が凍ってた。それに泣きそうになりながら「失礼させていただきます」と頭を下げ、アレクサンドロの正面ソファーに座る。ちなみに顔を真っ青にしたシャルロッテが隣、そのシャルロッテを挟んで不機嫌そうな地味少年。5人は座れるソファーだから余裕だね★

「お初にお目にかかります。私はナルクト」

「能書きはいらネェ。――なんでこンナ事をしたのか、きっちり説明しテクれや」

こぇえええんだよぉおおおおおおおっ！！なにこれ！？ルクちゃんなんか悪いことしたっ！？めっちゃ睨んでるんですけど！？

いやしたけどね悪いこと！でもあれ私にも予想外だったんだもん！ゴッドバルド隊長はどこに行ったよ！？本来コレあいつの仕事！逃げてますね★エルフの森内でモンスターに食べられてますね★ガッデム！責任なすりつけることすら出来ない！

「そ、それは…」

「待ちなさいシャルロッテ。貴女は喋る必要はないわ。…忘れたの？私は全て「見て」いたわ」

見たくなかったけどね♪

意識して声の抑揚を殺し、半眼でじっとシャルロッテを見つめる。神秘的な美少女顔＋ドギツイ三拍眼で睨まれると雰囲気出るみたいだよ♪知らんけどな！

「…はい、申し訳ありません」

目を伏せ、目に見えて落ち込むシャルロッテ。その隣でシャルロッテを支えてた男の子がむっとしたように眉を寄せ――頼むから余計なこと言うなよ！マジで！フラグとかダチョウ的なノリはいらないから！

そしてアレクサンドロに視線を向け直す。…笑うな私！頼むから笑うな私！ひくひく引き吊りそうになる頬筋に私は今魂をかける！下手すりゃ冗談抜きに首が飛ぶんだよぉおおお！物理的に！

でも頼むから足を組むな！にやって笑うな！ハートマーク型の眼鏡に変えるな！アフロヘアズレてる！

おぅふ…な、なんか違うもの見て気を紛らわせて――いや現実を見ろ私！あといつまでも黙るな頑張れ！もっと熱くなれよ！

「――今回の事件、ですが。…原因は、魔族にあります」

ぴくり、とアレクサンドロの眉が動く。恐い！超恐い！でも顔には出さない！

「これを」

と渡すカードは、どうにか原型を止めているレアな召喚符。頑張ったんだよ…！この1枚手に入れるためだけにファルガナさまは単身魔界に乗り込んだといっても過言ではないんだよ…

「…これは？」

「魔族の使う「召喚符」というカードです。カードに書かれたモンスターを意のままに操り、世界を上書きし、魔法を使い、一瞬で罠を仕掛ける。…これを作り出すことが可能な魔族…『魔王』の側に侍る四天王の「木人」が、今回の『事故』の引き金となりました」

ザ・責任転嫁★

完全に脳筋のシャルロッテが暴走したせい、ってのも大きいのよー本来は。シャルロッテってなんかに夢中になると周りが見えなくなるし…まぁそれは騎士団皆なんだけど…

そもそも今回の遠征も、ファルガナさまが言葉足らずだったせいでちゃんと通じて無かったみたいけど…。いやもとい、ファルガナさまが本当の目的を勘違いしてたのかな？とにかく、真の目的はアレクサンドロの徴兵でも、魔界四天王の捜索でもない

――魔族と人間の姦通を防ぐ

それが裏に隠された本当の目的だ

確かに上に上げた2つも大事な目的だ。でもそれ以上に重要視すべ

きは、魔族が娼婦をしていることにより、魔族と人間の間に子供が生まれる可能性があること

確かにこの街に住んでいる魔族は穏やかな性格をしている。人間と共存も上手く行っているとは思う。けど、人間と魔族のハーフは「不安定」だ。些細なきっかけで悪の属性に堕ちて人間を襲うとも分からない。もしこの街で産まれたハーフが人間に対して牙を向けたとする。イコールでそれは、魔族と人間のハーフを祖先とする獣人の排斥に繋がりかねない。最初は小さな火種かもしれないが、もしかしたら、万が一それが燃え上がった場合を考えると…人間ＶＳ獣人＆魔族ハーフの内乱…恐っ！

だから一旦隔離して、アレクサンドロさんにもそのむねを話すようにってゴッドバルドに頼んでおいたのに！頼んでおいたのに！

なんでアイツ初日に全部シャルロッテ任せでエロいこと楽しんでんだよーっ！！

シャルロッテ結構アホの子なのにー！

シャルロッテがアレクサンドロに机バーンされた辺りで飛んでくるんだった！ファルガナさまと伸一が悪い！あいつらが！あいつらが問題起こすからーっ！

なぁんて考えても薄ら笑いを崩さない私！だって知的キャラだからね！

「…で？それがなんだって？」

…あ、れ。空気悪くね？口調違くね？冷や汗がコスプレ服の内側を

流れまくりじゃー！胃が！胃がブロークンファンタズムしる！でも顔には出さない！うっすら微笑んでＧＯ！

「――魔族がどうこう手ぇ出した、みてぇなこと言われてもよ…俺のガキどもがてめぇらの下っ端に殺されまくったことには変わりねぇんだよ…」

「――」

あ、これ無理だ

無理だ無理無理無理無理だいだだだだだ。やばいやばいやばいやばい怒らせた圧倒的に強い人がマジギレ状態じゃじゃじゃしゃ…

うん、謝って帰ろう。あ、でも魔族の姦通についてだけ言っておかなきゃ。戦争とかマジで勘弁！やめてやめて

「――確かに、仰る通りです。大変申し訳ありませんでした。せめてもの償いとしてこの街の復興にかかる費用は王国に持たせて頂きたいのですが、よろしいでしょうか」

「…ほぉ、金で片付けようってか。ずいぶんな言い草だな」

――どないせーちゅうねん！無理だー！これ無理だー！無理無理無理ゲー★これ夢だよ！ベッドの中で寝てるんだよ。…あれ？最後にベッドで寝たのいつだっけ？

「…そうですね。不躾でした。申し訳ありません…。出直させて頂きます。…それと、これは今回の件とは関係のない件なのですが」

「――んで、だよ」

「ァん？」

あば？

お、あ、え、ちょ、止めて止めて止めて止めてとめてほんとお願いたんまたんまたんまあばばばばばばばばばば

「んでそんな自分は関係ないみたいな顔してられるんだよ！？悪いのは魔族だって分かってるんだぞ！？仇を討ちたいとか思わないのかっ！？あんた強いんだろっ！？なんで戦おうとしねぇんだよっ！？」

バッカお前名前も知らない少年あんた何言っちゃってるんですかやめてくださいよマジでアハハ冗談キツいぜ相手村長だぜ私情殺して村の復興するに決まってんじゃんヤァーーーッッッ！！？？胃が痛

い！超痛い！死ぬよ！胃が痛くてショック死るよ！

「――じゃあ、何か？」

胃が…胃が…死ぬ…！そ、それでも笑顔を…笑顔わ崩すな…！キリキリ痛いけどダメ…ダメ…。死んじゃう…恐い…！おしっこ漏れるぅ…！恐いぃ…！

「――俺のガキども散々殺して、それでも協力しろっつーのか」

ちびった

冗談でもなんでもなく身体が表情がカチンコチン。え、なに。アレだけ頑張って来たのに今日死ぬんだ私。…まぁそれもアリ？あの世には仕事がないのよ～？わぁ、素敵！

「…何の騒ぎかしら？」

「っ！？リーデス！？」

天の助け来た！

…あ、うしろの女の子がレティーシアちゃんか！…後で胃に回復魔法かけてもらうんだ★幸せになりたい…っ！切実に…っ！

「そうじゃねぇよ！悔しくないのかっ！？この街に住んでた奴はアンタの子供みたいなもんだったんだろっ！？悔しくないのかって聞いてんだよ！」

「――ガキが分かったような口叩くんじゃねぇ！大体、直接斬り殺したのはそこのアマじゃねぇかっ！！じゃあなにか！？テメェはそ

の女を俺が今から斬り殺すのを止めねぇんだなっ！？あぁっ！？」

「そうじゃねぇ！魔族が原因なんだぞ！？人間同士で憎みあってどうするんだよっ！？お前も男なら魔族を――ガッ！？」

＞ｉ２６８９９―３３６５＜

ギャー！！やめてやめてもう私限界だから！固まってるから！胃が死ぬ！全体的に死ぬ！

アレクサンドロに殴り飛ばされたジミー少年（駄熱血）が壁にぶつかって痛みに呻いているなか、アレクサンドロは怒りに身を震わせながらしばし私を見つめ――

「――今度そのガキとテメェらの顔を見たら、容赦出来る自信がねぇ」

と言い放つ

「肝に、命じます」

というより、胃に刻まれました

胃が刻まれました

――嗚呼

仕事が、増えそうな予感…

閑話　ナルクトール（後書き）

思考カオスだ、ナルクトール

でも絶世の美少女。設定が活かされない…

なんかクロイワくんもパーになってる気がしてきた

主人公補正って本人にも効果あるのかな…？

今回のテンプレ

↓ＳＥＫＫＹＯ

33、Ｍｒ・ヒーロー（前書き）

「バカ。本当にバカ。呆れてしまうほどにバカ。ねぇ、ナルクトール。アナタも脳筋なんじゃないの？
普通、家族を殺されて気が昂ってる相手に正面から「あいつの策略のせいで私の部下が貴方の家族を殺しましたが私達は悪くありません」なんて言う？言っちゃったのよねぇ？
しかも相手は戦闘直後で気が昂っていたのよ？
ふふっ、本当にバカ。笑ってしまうわね、おバカさん。アナタはあたしの転送魔法なんかに頼らず、あえて冷却期間をおいて、アレクサンドロが冷静な判断が出来るようになってから、神妙な顔で「謝罪」メインで交渉しなきゃいけなかったのよ。ふふっ、本当にバカ」

「うにゃーっ！？だってだってごめんなさいは早くしたほうがいいと思ったんだもーん！それにそれはアレクサンドロが原因を言えって言ったからー！！」

「前から言っておいたはずよ？「内政系ＳＳ」を教科書に行政したら駄目だって。あんなのご都合主義満載なんだから」

「た、確かにそうですけど…。上手く行ってるのもあるもん！あるもん！私の５年間を真っ正面から全否定しないでくださいよ！」

「ならなんで宰相のアナタがわざわざ謝罪や交渉に出向いてるのよ。普通、専用の交渉人を用意しておくものよ」

「…ＳＳの主人公は交渉も商業も行政も担当してたから…。…私、それしか知りませんし、真似出来ませんもん…」

「…はんっ」

「鼻で笑われたーっ!?しょうがないじゃん!しょうがないじゃん!!」

「何度でも言わせて貰うわ。アナタ、その「人真似」で急場を凌ぐのやめなさい。――今回みたいに、アナタの知らないシチュエーションに陥った時…アナタはただの小娘でしかないんだから」

「…無理、です!だって私はこれしか出来ないし分からないんですよ!ずっとこれでやってきたんです!これしか出来ないんです!私は一般人でしかないんです!」

「それでも、よ。…ファルガナの側から離れた方がいいんじゃない?アナタ…このままじゃ破滅するわよ」

「…それこそ無理です!ファルガナさまの下で私がどれだけ恨みを買ったと思ってるんですか!?役に立たなきゃ駄目なんですよー!やれること全部やらなきゃ駄目なんですよー!!この世界凌辱ゲーなんですよ!?ファルガナさまに捨てられたらナルクトールちゃん監禁凌辱調教アへ顔ダブルピースですよっ!?死ぬより嫌ですよ!」

「重いことはテンション下げて話しなさい。アナタは本当に残念よね…。悲壮感がないのよ」

「…テンション下げると眠く…くー…」

「寝ないで」

「痛い!?ビンタ!?酷い!やっぱこの世界にはおにちくさんしか

いないんだ！」

33、Mr・ヒーロー

キャーキャーギャーギャー騒いでるリーデスさんとルクを尻目に、そっと溜め息を吐く

ここは騎士団の野営地。冒険者には無料でエロイカの宿が解放されてたんだけど、リーデスさんに出来るだけ側にいろ、と言われたから俺もヒカルさんも着いてきた

――あの後はまぁ、散々だった。完全に石化してぼんやりしていたルクを放置して、リーデスさんが「とにかく騎士団は二度と手を出しません」的なやり取りをして、速やかにクロイワとシャルロッテさん、ルクを回収して野営地に移動した

なんで俺達が…、って思わないわけでもなかったけど、クロイワは知り合いだし、シャルロッテさんは怪我人。放置するのもアレだし、仕方なく運ぶことになった。とは言っても、俺はルクに肩を貸すくらいだったから大した労力じゃなかったけど…

怪我人を集めた天幕にクロイワを放り込んだ後、ヒカルさんはそそくさと「街の中に怪我人がいねぇか探してくる！」とか言って駆け出しちゃったから、手持ちぶさただ。昨日はササダ、今日は騎士団。何だかトラブル続きで疲れた…。昨日も早めに寝たのに、今日はもう眠くて仕方ない

欠伸を噛み殺しながら騒いでる2人に近付いてく。野営地は結構バタバタ動き回ってる人たちもいるけど、こう言っちゃなんだが…関係ないからどうでもいい。手伝おうとも思わないのは何でかなー？邪魔なもん見る目でチラチラ視線向けられてるけど、無視

「…リーデスさーん」

「ん？なにかしら？」

泣きながらぐるぐるパンチを繰り出すルクの額を杖の先で押さえながら振り返るリーデスさん。「あぅー！！バーカバーカ！リーデスのバーカ！熟女っ！熟女ーっ！」とか叫ぶルク。…なんだろ、凄い可愛いんだけど…かわいそうな娘なんだなぁ…

「っと、なんかもう眠くて…。どこで寝ればいいですか？」

「あぁ…。あたしの天幕にエルフちゃんの分も用意させておくわ。眠いなら寝ててもいいわ」

はーい、と返事し、一番作りがしっかりした天幕に向かう。リーデスさんは国的にも重要人物らしい。ルクと同じ天幕だ。そこに俺も入れるんだから…ラッキー？

天幕に入り、ふぅああ…、と誰にも見られてないから大あくび。中は木製の骨組みを布で区切っただけの粗末な作りだったけど、野宿よりは全然良い。適当な部屋…部屋って言っていいのか？に入り、毛布と布の袋に枯れ草を詰めただけの布団に潜り込む。…あー、着替え…水浴び…まぁいいや

…こうして横になると、色々考えてしまう

今日、初めて人を殺した

――うん、殺した

…じっと手を見つめる。人を殺した手を。じっと

よく、漫画とかでは人を殺した主人公が、手を汚す血を幻視する、というシチュエーションがある

――のに、

武器が弓だったからか、あるいは俺も命の危機だったからか

酷く、現実感が希薄だ

殺したい、とは思えない

でも、殺せないとは思えない

「――ははっ」

なら、それでいいじゃないか

ヒカルさんを守るし、ヒカルさんに守ってもらいたい。ヒカルさんの敵を殺せる、ヒカルさんが殺すなと言うなら殺さない

ああ、俺、もう駄目だな

ヒカルさんがいなきゃ、生きていけない

「――寄生虫みてぇだ」

そんな自分に笑いが漏れて

眠気に負けて、目を閉じる

逃げるように、逃げたように、眠気は俺を導いた

ｓｉｄｅ、大路

荒れ果てた街の中を、歩く。ただそれだけのことが、ぎこちなく動く手足には酷く億劫だ

心と身体が重ならない。頭の中では、相方に対する感情は変わらない。相方は頼れる相棒で、守らなきゃいけない存在で、家族みたいなものだ

そこには性欲や恋愛感情は一切ない。あいつはガキで、俺は大人。守るのは当然で、矢面に立つのは俺の筈だ

だが、身体は違う

相方の身体が触れる度に熱を持ち、ふわりと香る甘い香りにはごく

りと生唾を飲み下し、中坊の頃に戻ったかのように、敏感に異性を意識する

――殺人を楽しんだ時と同じように、いつしか俺は身体の反応に引き摺られるままに相方を抱き、その身体に溺れるのだろうか

血を、肉を食らえ。争いを楽しめ。そんな声は、未だに頭の奥にこびりついている。化け物になってしまったという実感に、身体が震える

――泣き言を言っている時間など、既に残っていないのに

相方が、変わった

俺のせいだ

俺が――相方の目の前で、人を殺した。アレが、明確なスイッチになった

殺人を犯し、動揺し、暴れる俺を抑えるために――変わざるを得なかった

…溜め息を吐ぐっ!?

スパァーン!と後頭部に走る衝撃に息を詰まらせ、「げほっ!ごほっ!」と咳き込みながら振り返る

「やぁ!確か大路といったな!俺の名は一文字!一文字　弾だ!男が俯いて歩くな!胸を張って歩け!」

にかっ、と裏表のない笑みを浮かべる、いつか見た暑苦しい男。その頭の上に手のひらサイズの全裸の女の子が寝そべり、「だーん、ねむーいー、つかーれーたー」とペシペシ額を叩いている

「っっ…だからっていきなり頭叩くんじゃねぇ…」

「いやすまんすまん。鎧を着ていたからな、背中じゃ意味がないと思ってな」

カッカッカッ、と腰に手を当てて豪快に笑う一文字に調子を奪われ、はぁ…と溜め息を吐くだけに終わる

だが、一文字はそれが気に入らなかったらしい。むっと眉を潜めると

「どうした大路。悩みがあるようだな？どうだ、俺に話してみろ」

「会って数時間だぞ、俺ら…」

「だが、共に戦場を駆けた。なら戦友だ」

…はっ、と笑いが漏れる。ニコニコと笑う一文字に毒気を抜かれる

「ったく、暇人め」

「まぁな！説明しよう！ヒーロースキル：ヒーローセンスは助けを求める一般人を探し出すことが出来るのだ！ヒーローセンスに反応がない以上、既にこの街の中に瓦礫で閉じ込められた生存者や怪我人はいない！時間はたっぷりあるぞ！いくらでも悩みをぶちまけろ！」

「便利だな…」

などと話しながら、近くの砲撃で潰された店に入る。中にはいくつか椅子があった。それに腰掛ければ、一文字も対面に座る。その組んだ足の上に女の子…妖精が横になり、一文字は猫のように一文字の膝上で丸くなる妖精を優しい手付きで撫でる

＞ｉ２６９４９―３２５４＜

「随分、なついてるな」

「まぁな！最初は大変だったがな！ああ、詳しいエピソードは秘密だ。フーリムのプライベートだからな。あらすじだけなら教えてやってもいいが？」

「なら、頼む」

煙草を取り出し、火を…着けない。妖精が嫌がりそうだからな。取り出した煙草をしまう俺に、一文字は嬉しそうに笑った

「まぁ、とある街で見せ物にされてたコイツを俺が誘拐しただけだ」

「…」

少しだけ、驚いた

こんなヒーローを体現したような男が、犯罪を犯したことに

「驚いたか？」

「ああ。…少し、な」

「だろうな。俺も、悩んだ末に盗んだ。最低の行為だがな。もしかしたらやむを得ずフーリムを見せ物にするしか出来ない事情があったのかもしれない」

だが、と一文字は、優しく妖精…フーリムの髪を弄りながら、笑った

…黙って聞く。出会ったシチュエーションも、お互いの立場も、何もかもが違う

…けれど…2人の関係は、少し前の俺と相棒のようで

少しだけ、その姿が眩しく映る

「だが――「助けて」と言われて、手を伸ばさない…そんな男には、なりたくない。俺は、ヒーローだから」

…言い切る一文字の笑顔は、清々しく。その笑顔を見上げ、嬉しそうに笑う妖精との間には、確かな信頼があった

「…お前は…凄いな…」

気が付けば、ぽつり、ぽつりと口が動く

「…俺は違うんだ。弱い。大人だから…アイツを助けてやらなきゃと思った。だから色々言い訳して…自分にも、アイツにも嘘吐いてた」

「…」

「初めて人を殺した…。その時、気付いちまったんだ。…殺すのが、楽しかったんだ。人間相手にも、モンスター相手にも…戦ってる時は、すげぇ楽しかったんだ…。アイツは、俺が殺人を楽しめるような人間だなんて思っちゃいないんだ。だから俺は、アイツの側にいるのが辛い…アイツの信頼が恐い…アイツの…想いが、痛いんだ…」

こんな俺に、好きだなんて言ってくれるアイツが、恐い。アイツの想いが、辛い

「…ふむ」

「…けど、離れらんねぇんだ…。アイツの側を離れたら、俺はもう生きていけねぇ…！俺にはもうアイツの事を守ることしか出来ねぇ…！それしか「俺」が「俺」でいられる方法がねぇんだ！なのに、その守ることすら出来なかった！こんな、こんな俺を好きだって言うんだ！アイツは！そんなアイツに、俺は、俺は…っ！！」

「…なぁ」

ふと、

胸の内の激情のままに吐き出ていた言葉が、止められる

一文字は、じっと俺を見つめていた

「…それ、あの娘に話したか？」

「ぁ…？」

言葉が、止まる。思考も止まる

「あの娘とちゃんと話してるか？気持ちを確かめあってるか？一方的な思い込みでドツボにハマってないか？…お前らの事情は俺には分からん。だがな、意外とそういう気持ちの問題は、話し合いで解決することもあるぞ」

「…言え、ない…！こんな…こんな、俺の弱い部分を…アイツに見せられない…っ！アイツに嫌われたら…俺は、獣になっちまう…！」

言葉が、すらすらと口から流れ出る。自覚していなかった内心も、ドロドロに腐った弱音も、ポロポロと

一文字は、罰の悪そうに笑い、すまん、と頭を下げた

「多分、ヒーローセンスのせいだ。お前が言いたくもなかっただろうことを言わせちまってごめん。…代わりに、俺も言いたくない事を話す」

ぽりぽりと頭を掻くと、あー…と小さく唸る一文字。嫌そうに、悲しそうに…一文字は、話し出す

「――ヒーロー補正が事件を起こすんだ」

意味が分からなくて、硬直する俺に、一文字は悔しそうに…あるいは苦しそうに、言葉を紡ぐ

「世界が平和なら、ヒーローなんか必要ない。だから俺が生きている限り、事件は起こり続ける。そして死人が出るか怪我人が出るかしないと、ヒーローエコー…助けを呼ぶ声は、聞こえない。俺が原

因なのに、俺が能天気に遊んでいる間に死人や怪我人が出るんだ。
…もっと早く気付ければ、周りに配慮して戦えば。そんな風に考えたことも何度もある。――けど、ダメなんだ。事件が未然に防がれると…ヒーローの出番がなくなる。俺は、俺のせいで死んでしまった人に頭を下げることしか出来ない。敵役になってしまった奴等を、殺すことしか出来ない。けれど、俺は、俺がヒーローになることを楽しんでいるんだ」

だから、と言葉を繋げる一文字

「戦う。最後まで。
それが、俺のルールだ。ヒーローとして、1人でも多くの人間を救う。そして殺されて、あの世で何度でも殺されてやる。馬鹿なりに考えて、コレしか無かった。手の届く範囲のヒトを、取り零しなく救い出す。それが俺の誓いだ」

だから、と前置きして一文字は笑った

「頭空っぽにして話し合ってみればいい。お前は頭いいみたいだし、単純でも難解でもいいから答え出せ。…告白してきた女の子に、「お前といると辛い」なんて言うのは…正義じゃねぇぜ」

にかっと笑う一文字

てめぇに何が分かる、

とも

ああ、ありがとう。その通りだ

とも言えそうな空気だ

だけど…俺は、あえてこう言った

「…お前、かっこよすぎるぜ」

野営地に戻る。日は沈み、食事の用意が始まる頃。帰ってすぐ魔女の命令で相棒を呼んでくるように言われた俺が見つけたのは、毛布を巻き込んで猫のように丸まり、クークーと小さく寝息を立てる相棒だった

あどけない寝顔。起きているときよりずっと幼いそれには――「女」を僅かに感じさせる、妖艶な微笑み

…話し合え、か

…何を話せばいいんだろうか

コイツをそういう対象に見れない…訳じゃない。身体は反応するのだから

なら、なんて言って断る？

…なんで、断る？

俺は、コイツの側にいれないから？

でもそれは話し合えと言われたし…

頭を抱えて悩む俺を前に

「…ヒカルさん…？」

寝惚け眼の相棒が、目を開いた

33、Ｍｒ・ヒーロー（後書き）

また前後編ですね

会話文多いですね

悩める人を救うのもヒーローの役目ですよね

てもヒーローにはヒーローの悩みもあるんだよ、みたいな

そしてナルクトールは頭良いポジションにいるパンピー。猿真似しかしてないから突発的な事態に弱い

実はそれを危惧してたリーデスさん

あと前話で最初からアレクさんが荒れてたのは、シャルロッテが「男連れ」で現れたから

しかもその「男」は自分に敵意全開

ＯＫＯＫ、謝りに来たんじゃねーんだな？喧嘩売りに来たんだな？状態

今回のテンプレ

↓ヒーローの条件

あとお知らせ！

エイフライさまにネコミミエイトたんとレティ、

檸檬紅茶さまにナルクトールを貰いました！

投稿板と専用板に貼っておきまーす

３４、想い、届けて（前書き）

「ＨＥＹ、ＨＥＲＯ。行くのカイ？」

「む？」

振り返ればそこに、変態怪人――ではなく、アレクサンドロ

俺は、にやりと笑って返す

「当然だ！お腹の調子は動いてる間に治ったし！さっき破廉恥な格好の女子からお弁当貰ってお腹一杯！ならば！助けを求める人のために戦うのがヒーローの役目よ！」

「む～」

ぺしぺしと額を叩いてくるフーリム。な、なんだ？なんでこんなにも不機嫌なのだ！？さっき破廉恥女子からお弁当貰った辺りからずっと不機嫌だぞっ！？

アレクサンドロは「そオかい…」と小さく呟き

「…ここに残らネェか？」

「悪いがヒーローとして男相手に恋愛ごとをする予定はない！」

「そぉジャネェよ。…うちのガキどもを結構助けテクれたみてェだしな…。お前が望ムナら、一生養っテヤる。…誰か１人くれェナら、嫁にやるゼ？」

…ふむ、悩むまでもないな

「だが断る！
ヒーローとして大きな組織に取り込まれる訳にはいかん！それにヒーローに恋愛事は死亡フラグだ！」

びしぃ！と手のひらを向けながらポージングすると、アレクサンドロはその答えが分かっていたように笑った

「…ハッ、そうカイ」

そのまま、アフロに手を入れ、ずるりとリュックを取り出す。明らかに頭よりデカイが、突っ込まん！ヒーローたるものこれくらい楽に流せねばならん！

「金と旅支度だ。せめてものお礼ダゼ」

「おぉ！助かる！ヤブ蚊と一晩に及ぶ激闘を繰り広げずに済むな！」

「そこカヨ」

リュックを受け取れば、アレクサンドロは妙に寂しげに笑った

「…気張れ、ヒーロー。期待してるぜ、兄弟／ブラザー」

…ふっ、と、俺は小さく笑う

「期待に応えるのがヒーローだ！…何を心配しているのか知らんが…」

びしぃっ！と素晴らしく真っ直ぐに空を指差す。今は月が現れ、太陽の沈む丁度合間だが…そんなこと！このシチュエーションには関係ない！

「困ったら！太陽に向けて俺の名を呼べ！太陽が空に輝く限り！一文字！弾は現れる！」

とぅっ！と後ろに飛ぶ。同時にフーリムが「妖精の輪」を作る

「さらばだ！また会おう兄弟！」

「あバよブラザー！またな！」

っぅ～！これだ！これが男同士の別れだ！

憧れのシチュエーション？を達成出来たことに内心歓喜しながら、アレクサンドロとサムズアップ！良い上腕筋だ！実にキレてる！

そして「妖精の輪」に飛び込み――俺は、湖の真上に放り出された

「…だーん、うわきー、ばーかばーか」

「がぼぼぼぼぼ…っ！」

お、俺は、俺は…気合いで泳ぐ！

３４、想い、届けて

「飯の時間らしい。…あと、話がある。飯食ったら、ちょっと時間くれ」

そんな言葉と共に背を向けるヒカルさんに、違和感。なんだろう、とは思ったもののヒカルさんは後で良いって言ってたし…気にしても仕方ない、か

リーデスさんと一緒に食事を騎士団が用意してくれた食事を取る。…俺の分も用意してくれたんだ。ということに少し複雑な想いを胸に、決して豪勢とはいえない…けど、多分精一杯用意したんだろう食事を貰い、ヒカルさんを探すことにする。ヒカルさんは、食事を取らずにどこかに行ってしまったから、何か持っていってあげなきゃ貰った夕食のパンに何のか分からない肉を挟み、それを軽く布で包む。「…獣人くんのぶん？」とリーデスさんに聞かれたので頷けば、リーデスさんは薄く笑った

「…よく考えなさい。多分…獣人くんは、覚悟決めてるわよ？」

――「…はい」

覚悟、か…

…多分、昼間のこと…だよな

ヒカルさんが人を殺して、

俺が告白して

そして…これから、どうするか

ありがとうございます、と頭を下げ、布で包んだ即席ハンバーガーを片手に探す。アイテムで探そうかとも思ったけど、なんとなくこっちにいそう…というのが、感覚で理解出来た

「ヒカルさん」

野営地を抜け、森の中に。モンスターの襲撃を避けるためか、焚き火に魔物避けの香を投げ込みながら、ヒカルさんはタバコを燻らせていた

「――おう、待ってた」

薄く口元に笑みを浮かべるヒカルさん。…昼間とは、違う。俺が寝てた数時間で、ヒカルさんは考えを整理出来たらしい。…これじゃ、くっついても動揺させられないな…と僅かな喪失感。そんなことを考える自分への諦め

「隣、いい？」

「おう。…吸ってていいか？」

「うん」と頷きながら、横に腰を下ろす。魔物避けの独特の臭いとタバコの臭いが混じる。パチパチと薪が爆ぜて、夜の闇をうっすらと照らす

「――話しておきたいことが、あってな」

「うん」

「お前も…俺に言いたいこと、あるだろ」

「…うん」

頷く。何を話せばいいのか分からないけど、言わなきゃいけないことは沢山ある。言っていいことも悪いこともあるけど、な

「…何から話せばいいのかわかんねぇな」

「そうだね…。じゃあ、どうせだから俺から」

一番気になること。今の俺にとって、一番重要なこと

「俺は、あなたと一緒にいてもいいの？」

ヒカルさんは、無言だった

黙ったままくわえていたタバコを、焚き火の中に投げ込んだ

「――駄目、だ」

ぴしり、と胸の内にヒビが入る

「俺ぁ…気付いちまった。俺は、お前みたいな綺麗な人間の側にいちゃいけねぇんだ。お前が止めてくれなかったら、俺ぁ正気を無くしたまま戦い続けただろうよ。お前が俺と一緒にいたら、いつかお前も俺に殺される」

ヒビの入った心が、溢れそうになる涙が、ヒカルさんの言葉を拒絶する

「ヒカルさんに、なら…殺されてもいい」

「…あんまり、俺に寄り掛かるんじゃねぇ。…俺ぁ、お前が思ってるより強くもなけりゃ、善人でもねぇ。…お前を殺したら、それこそ立ち直れなくなる」

新しいタバコに火を着けるヒカルさん。…その目は、俺を見ない

ああ、

気付いてしまった

限界だったんだ

「お前を守ることすらも出来ねぇくらい弱いくせに、大人の仮面被って善人の真似事して正論ばっか吐いて…お前を騙してる。本当の俺はお前を犯して、人を殺して、やりたい放題に暴れて、馬鹿みたいなことばっかりやりてぇガキなんだ。最低で、最悪なガキくせぇ化け物なんだ」

――俺が、ヒカルさんを追い詰めた

もっと、自分のことばっかりじゃなくヒカルさんの事が考えられていたら

無条件にヒカルさんに重荷ばかりを預けたりしなければ

ヒカルさんが…ここまで傷付くことはなかった

「…ヒカル、さん」

「なんだ？…逃げたいか？別にいいぞ」

「…謝っても、いいですか？」

「…ぁ？」

虚を突かれたヒカルさんが、眉根にシワを寄せる

「全部…全部、謝ってもいいですか？
ヒカルさんにばかり責任を押し付けてごめんなさい
ヒカルさんを追い詰めてしまってごめんなさい
ヒカルさんが好きなことを言い訳に使ってごめんなさい
――ヒカルさんに、恋してしまってごめん、なさい」

頭を下げる。謝罪に、涙はいらない。あるのはただの罪悪感と――
自分への、嫌悪感

ずっと自覚していた

ヒカルさんに、依存しているって

それに気付いていたのに、肝心の部分は見えないように蓋をして、
自分を誤魔化していた。自分を騙して、ヒカルさんのせいにしていた

醜悪で醜い自分の心が白日に晒されて――こんな自分を知られたら

ヒカルさんに嫌われる。そんな事ばかりを考える自分に、吐き気ばかりが溢れ出る

「…違うんだ…ヒカルさんが思ってるほど、俺、綺麗な存在じゃない…。なにも考えてないんだ…考えなかったんだ…ただ、ヒカルさんに頼って、押し付けて…。ヒカルさんの苦労も、苦悩も、悲しみにも気付けないような…自分が楽に、幸せになることしか考えない…最低野郎なんだ…」

地面に頭を擦り付ける。最低だ。最悪だ。依存なんて軽いもんじゃない。俺は…俺は、本当に…寄生虫だ。ヒカルさんに寄生してた、害虫だ

涙すら出てこない。ただ、悔しくて、怒りだけが沸いてくる。お前は…お前は、好きだ、と言った人の害にしかならないんだ、と自分自身を殴り飛ばしたくなる

「――よせ、止めてくれ…。違う。俺も、お前が思ってるほど高潔な人間なんかじゃねぇ…。お前を助けることで、「人の助けになれる大路　光」を守りたかっただけなんだよ…。お前じゃなくても良かった…誰でも良かった…ただ、お前がたまたま俺の前で苦しんでただけなんだ。だから、お前を助けた、それだけなんだ。お前に好きになってもらう資格なんかねぇ、自己中心的なクソッタレな化け物なんだよ…」

「それは、違うよ…！だって、だって助けてくれたのはヒカルさんだけだったから…！ヒカルさんが助けてくれなきゃ、俺はもう生きてなんか無かった！ヒカルさんが支えてくれたから俺は生きてられるんだ…！なのに、ヒカルさんが支えてくれるのに甘えて、俺は俺自身も、責任も何もかも貴方に押し付けてたんだ…！」

「だからなんだってんだよ…っ！お前は俺の心を救ってくれたさ！お前がいなきゃ、俺は今何をやっていたかすら分からねぇ！とっくに殺しと戦いに酔った本物の化け物になってたかもなぁ！お前が寄り掛かってくれたから！お前が信じてくれたから俺はかろうじて人間だったんだ！」

「ヒカルさんは今だって人間だろっ！？化け物が人を殺したとか悩むのかよ！？ヒカルさんは人間だよ！人を殺しても俺は「ヒカルさんのために殺す」としか考えられなかった！全然悩みすらしなかった！全部全部ヒカルさんのせいにして、責任押し付けて追い詰めて！挙げ句の果てにはヒカルさんになら殺されてもいいだぞっ！？こんな糞野郎と比べたら、全然真っ当な人間だよ！」

「――例えお前が自分をどう思ってたって、俺は…あ、」

ピタリ、と

いつの間にか立ち上がって怒鳴りあっていたヒカルさんの動きが、止まる

ヒカルさんの急停止に、俺も止まれば、ヒカルさんはぽかん…とした表情で…自分の口元を押さえて、呆然としていた

「――は、はは…。マジかよ…。何で気付かねぇんだよ…。本物の馬鹿じゃねぇか、俺は…。善人の仮面も筋金入りだろ…。こんな、こんな簡単なことかよ…。嘘だろ…信じらんねぇ…」

そして、呆れたように笑い――ヒカルさんは僅かに、笑った

そして、その手を…そっと、俺に向けて伸ばす

「――例えお前が自分のことをどう思っていようと…。俺は――お前が、好きらしい」

無意識に――伸ばされた手に手を乗せていた

ぐいっと引っ張られ俺はそのまま――ヒカルさんの胸の中に、飛び込んでいく

「…え」

嘘だ。嘘に、決まってる

都合のいい妄想だ。俺が、ヒカルさんを好きだから…ヒカルさんが応えてくれるそんなテンプレートな…最高の夢想

「今、気付いたんだがよ。アレだわな。「人殺し」を心底楽しんでやがったんだぜ?俺は…。「人殺し」に、今更嫌悪感は覚えねぇ。罪悪感はあるけどな。…ただ俺は、また昼間みたいに暴走したくねぇ…。」

ぎゅっと抱き締める腕の力に震える心臓。さっきまでアレだけ絶望に凍っていた身体が、急速に熱を持つ

「…うん」

声が、頭の上から聞こえる。現実感の無い、幸せな夢

「――お前を傷付けたくなかったんだ」

「嘘」

嘘のほうが、良い。だって、俺みたいな人間が…ヒカルさんに、好きになって貰えるわけがない。好きになってもらって良いわけがない

「嘘じゃねぇみてぇなんだ。頭ん中空っぽにして、言いたいこと吐き出すとよ…。お前と一緒にいたい。って答えしか残らねぇんだ。だが、俺は、危険だ。だからお前と一緒にいられない。俺が、正気じゃなくなったら…一番危なねぇのは、一番近くにいるお前だから。…お前に、死んでほしくねぇから…お前が…好きだって気付きたくなかったから…なんやかんや理由付けして、引き離す。それだけなんだ。…だから」

ヒカルさんの心臓の音が、酷く近い。声が、匂いが…すぐ側にある。こんな俺の隣に…いてくれてる

「…俺の惚れた女、そこまで貶すんじゃねぇよ」

「…ぁ」

息が、詰まる。声が、出ない

ごめんなさいって、ごめんなさいって言ったのに。謝ったのに。反省しなくちゃいけないのに

ますます、この人が好きになる

嬉しくて、嬉しすぎて、けれどまだこの人に頼って寄り掛かって負担ばかりをかける自分がいて、何も言えない

「ぅ、ぅぅ〜…」

「…すまん。ごめんな。化け物がお前を好きになってすまん」

頭を撫でる手が、酷く遠い。温かさが、遠い

俺は、この人に報いることが出来ない

だからその手を掴んで、胸に引き寄せる

「――強く、なります」

「…」

黙ってじっと俺を見つめるヒカルさん

これは誓い。自分自身に、そしてヒカルさんに誓う、ルール。たった1つの不文律

「依存、してました…ヒカルさんの優しさに、依存してた。――けど、強くなる

ヒカルさんが暴走しても止められるくらい強く

ヒカルさんの事を本当の意味で支えられるくらい賢く（つよく）

ヒカルさんの…隣に立てるくらい、強靭い、人間になります

だから――ずっと、一緒にいて」

そっと…ヒカルさんの手に口付けをする。誓いの証に。ヒカルさんに、大好きな男の人に、誓う。強くなるって

＞ｉ２７０８６―３４７８＜

「――強く、なれるなら…

殺人衝動なんかに負けないくらい強く

どんな敵からもお前を守れるくらい強く

――二度と道を間違えないように済むくらい、強い人間になれるなら…

俺は、お前を守りたい。…ずっと、一緒にいて…守らせて、ほしい」

ちゅっ…と、額に熱い唇が触れる。嬉しさ以上に、頼もしさが胸に渦巻く

嗚呼、駄目だったんだ。全部、間違えてた

ヒカルさんの事が好きなら、その後ろにいるだけじゃ駄目なんだ

その隣に立って、同じ目線で行動しなきゃ駄目だったんだ

そんなことに気付くのに、どれだけ遠回りしたんだろう。出会ったときに始まった恋。けれど、そのスタートラインを間違えた

「…ありがとう、好きでいるの、許してくれて」

ヒカルさんの顔を覗き込む。優しそうな笑みを浮かべるヒカルさん。
――ああ、二度とヒカルさんにあんな顔をさせないよう、やっぱり
強くならなくちゃ

「…おぅ。お前も、俺を好きになってくれてありがとう」

両想いだって、気付いた

気付いたけど、まだこの想いは結ばれない

だって俺は、まだ弱いから

ヒカルさんの隣には、まだ立てないから

でも、いつの日か

必ず、貴方を――愛することを、誓います

３４、想い、届けて（後書き）

これで第一部、完、ですね

レティヤンデレ矯正イベント＋ヒカルさんヘタレ矯正イベント

精神的には２人ともダンジョン脱出時から変わってませんでしたからね

お互いに成長することを誓い会う…うん、テンプレ

今回のテンプレ

↓成長の誓い

↓ライバル

↓愛の誓い

お知らせ！

わたさまから

アレクさんにぶん殴られる黒岩くんと
フーリムさんのイラストを貰いました！

…そろそろわたさまの板も独立ですね

土日に纏めてやるにゃー

閑話　アルファ・スティグマ（前書き）

お知らせ！
絵師さまが新たに加わりました！

お名前は須和光輝さま！
…何故にあの人を書いたしｗｗｗ
挿し絵まとめへどうぞ（爆）

閑話　アルファ・スティグマ

「助け

ポロッと首が落ちる

「あ、

ばくっと頭が割れる

「やめ

ぐちゃと頭を踏み潰す

よかったね、よかったね？もう苛められないよ。もう酷いことされないよ

ずるずる、ずるずる。大きな斧を引き摺って歩く。ぱぱがくれた斧。

ぱぱが使ってた斧。

わたしのお腹を潰した斧。
わたしの手足を砕いた斧。
わたしのままを殺した斧。
わたしがぱぱを殺した斧。
ずるずるずるずるずる。

血と土の匂い。

暑い。熱くて、暑い。初めて肌で感じる太陽の光。あの金髪のきれいな女の人がくれた太陽。お礼をしなきゃ。殺してあげなきゃ

生きていると辛いことしかない。苛められるだけの人生は嫌。でも、わたしはぱぱの玩具だから、苛められなきゃいけないの

ままは人間でした

ぱぱは魔族でした

ぱぱはままにわたしを生ませました

わたしは生まれてすぐ、お腹を壊されました

わたしには前世の記憶があります

白い白い部屋。白い人。動かない身体。ピコンピコンと規則正しい音。たまに来るお母さん。一度も見たことのないお父さん。色々教えてくれた看護婦さん

それだけ

7年でした。わたしが生きていられたのは

そしてこの世界に生まれてから8年です

わたしは知りました

生きることって、地獄でしかないんです

病気に耐えて生きるのも
苛められるのに耐えるのも
辛い辛い、地獄でしかないんです
だから、皆助けてあげなきゃ
わたしには、神様から貰った力があるから
わたし自身はなにも出来ないし
神様は祈ったってなにもしてくれません
だったら、神様から力を貰ったわたしが頑張らなきゃならないんです
プルプル可愛いスライムを殺しました
わたしの唯一のお友達でした
わたしは殺し方を覚えました
ゴブリンさん殺しました
いつも苛められてる可哀想な人でした
わたしは少し強くなりました
グレムリンさん殺しました

恐がりで、いつもぱぱに怯えてる人でした
わたしは機械に強くなりました
ゴーレムさんを殺しました
一言も喋らない人でした
わたしは重い武器を持てるようになりました
吸血鬼のおにーちゃん殺しました
わたしの頭を撫でてくれた人でした
わたしは不死になりました
魔法使いのおねーちゃんを殺しました
わたしと同じ玩具の人でした
わたしは魔法を覚えました
ぱぱのお友達を殺しました
わたしの上に乗って痛くて恥ずかしい事をする人でした
わたしは強くなりました
ぱぱを殺しました

転生者、という人でした

わたしは、凄く強くなりました

わたしは気付きました

殺した時、笑うのが苛められてる人なんです

殺した時、恐い目をするのが苛める人なんです

なら、簡単です

みんなみんな殺します

全員まとめて殺します

苛められてる人は、もう苛められないから幸せです

苛める人は恐いから殺します

苛める人は恐いです。恐いです。恐いです。いやです。

恐いです。助けてくれる人はいません。助けてくれる人はいません。

苛められてる人か苛める人しかいません

だから、助けを求めても無駄です

「いま、たすけてあげるね」

「あ、いやぁ…いやぁ…っ!?」

ぐちゃ、と潰しました

魔法を覚えました。知らない魔法です。魔族の使う魔法じゃありません。えっちな魔法でもありません

「くそぉ！逃げろ！逃げろ！なんだよちくしょう！化け物め！」

「ばけ、もの…？」

化け物ってなんですか？

化け物って苛める人ですか？

化け物って苛められてる人ですか？

「ばけものは、恐いですか…？」

斧を、投げます。大きな斧がぐーるぐるぐる。ぶちゃあーぐちゃー。

「キャアアアっ！！アッシュっ！アッシュぅ！」

悲鳴をあげる女の子。大丈夫。もう恐くないよ。もう苛められないよ。大丈夫だよ

「だいじょうぶ、いま、ころしてあげる」

泣いてる人は、苛められてる人。だから早く殺してあげるんだ

びゅちっ！お空に飛んだ真っ赤なお肉。ダンボール、足りるかなぁ？

大切なのは真心です。ダンボール、ダンボール。おててを合わせて、
地面に当てる。銃を作る。撃った。ばらららー

ダンボール、に、お肉を詰めるのが好き。ぐちゅぐちゅする。ぬちゃぬちゃしたきいろの脂肪。白くてあかい筋繊維。骨は嫌い。固いから。刺さるし、恐いから

ダンボール、にいっぱい詰める。お肉とお肉とお肉と血。いっぱいいっぱいまんたんになるまで

じんわりダンボール、赤くなる。この瞬間、好きです。茶色に赤くて黒くて生臭い汁が、じんわり中からしみてきます

知ってるよ、知ってるますよ?

わたし、おりこうさんですから

看護婦さん、褒めてくれましたから

病院で飼ってたうさぎさん

死んだらダンボールにつめて、焼却炉に捨てるんだ

焼却炉に捨てられると幸せになれるんだ

だって看護婦さんが言ってたもの

「うさぎさんは、すっごく遠いけど、幸せな所に行ったのよ」

って

わたしは神様の代わりしなきゃいけないけど、わたしがおくってあげるんだ

殺して、潰して、ダンボール。焼却炉がないの。足りないの。ダンボール、足りないの

焼却炉を探さなきゃ

苛められてる子を助けなきゃ

いじめっこを殺すんだ

「…ぁ」

いじめっこ

銃を使ういじめっこ

ダンボール、入れてない

でも、ここどこ?

熱くて暑い太陽が、ギラギラ光ってる

太陽も、いじめっこ?炎は熱くて、痛いから、嫌い。熱した鉄は、痛いみたいです。それで体をぐちゃぐちゃされるとみんな、いじめられてる人はぎゃあああってなります

いじめっこ？ですね

殺さなければなりません

太陽をころすにはどうしたらいいですか？

「き、貴様…っ！？ここがどこだ知っていての狼藉か！？それ以上の無法、この「千剣」のルーンウェイズが許さぬ！我が剣おそろしくびゃっ」

剣、恐いから

潰すよ

剣、持ってる人。みんないじめっこだから

ふと、周りを囲む家を見る。見つめる。恐いね、いっぱいいるね。いじめっこが、わたしを囲んでる

でも、こわがってる

剣を持ってる人がころされて、皆こわがってる

…なんだ、苛められてる人だったんだ

じゃあ、殺すよ

斧で、ぱぱの斧で、殺すよ

ダンボールが、足りません

ころころざくざくころころぶしゅぶしゅぐちゅぐちゅぐちゃ
ころころころころころころゴウゴウボウボウ

燃えちゃえ

焼却炉の代わり

わんわんわん！

こわがりな子犬が鳴いてます

かわいそう。そっと手を伸ばす。ぷるぷる震えながら、おもらしする子犬

ぺきって軽く、首を折った

よかったね、幸せだね

子犬のあったかい身体に顔をうずめる。気持ちいい。ぴくんぴくんふるえる身体。だらだら溢れた涎が、ほっぺと包帯を汚す

いけない…包帯を汚すと、ぱぱが怒る。もう、いじめられたくないのに…

子犬さんをダンボールに詰める。もえろもえろー歌いながら火を着けるの

幸せ、幸せ

みんな幸せ

わたしももうすぐ幸せになれるかな？

だれかわたしを殺してくれないかな

こわいいじめっこを殺して

いじめられてる人も殺して

最後にわたしを殺してもらわなきゃ

いっぱいいっぱい頑張ったら、誰かがわたしをころしてくれる

だって言ってたもの

ままが言ってたもの

神様はずっとわたしたちを見ていてくれてるって

神様、見ているんですよね？

だったらはやく、ご褒美ください

あとどれくらい殺したらご褒美くれますか？

あとどれくらい殺したらころしてくれますか？

はやく、わたしをころしてください

わたし、わたしのこところせないみたいなんです
あたまをつぶしても、首を切り落としても、どんなに辛くても死ね
ないんです
前世で助けてなんて願ってましたけど
前世で助けてくれなかったんだし
殺すくらい、してくれても言ってたものいじゃないですか
「――ぁ」
ポタポタ。雨、降ってきた
…きもちいい
雨は、好きです
だって雨は、血を洗い流してくれるから
思う存分、殺せます
うん、
みんな、殺してあげるから…そんなに、逃げないで
ころころころ、でんぐり返しで追ったら速いかも。やっぱおそいや。
斧を投ーげーるーっ

めいちゅう。なんだかたのしくなってまいりました

にげたいなら、にげてもかまいません

でも、かわいそう

にげても辛いことしかありません

だから、あとでおはなししたいと思います

足をきっちゃえば、にげられません

つかまえて、足をぷちってして、悲鳴。ぽいってしたら、他の人

だってみんなにげちゃうから、まず捕まえないと

全員の足をぷちってしてから、お話。…あれ？最初のぷちってした人が、死んじゃってました

そっか、やっぱりみんな殺されたかったんだ

「あんしんしていーよ…。みんな、しっかりころしてあげる」

ずるずる、ずりずり。斧が、光る

「――――さ・せ・る・か・ぁあああああああああああああっ！！！！」

大きな声。怒鳴り声

恐い。苛める人は、殺さなきゃ

斧を、振る。声のした方ビギンッ！と音がして、弾かれた

「まさか新しい旅が始まってすぐ！こんな強大なイベントに遭遇するとは思わなかったぜ！フーリム！怪我人を「妖精の輪／ガリトラップ」で安全な場所へ！」

「あぃ！」

…虫？…虫、は好き。かわいい。わたしを、苛めない。ふわふわ、ふわふわ。苛められることも、苛めることもない、かわいい子たち

「行くぜ！変・神！」

ぴかっと光るおとこの人。ほうたいの上から、眩しさがピカーッ

「――…」

ころします。アハハころしますアハハころします

――私を助けてくれなかった「ヒーロー」を、殺せます

ありがとう、神様

これはご褒美ですね

何度もねがいました

助けてって

何度も夢想したわたしを助けてくれる人は、おうじさまだったり、
可愛い女のこだったり、スーパーまんだったりしました

でも、あらわれませんでした

それが、いまさらになって現れました

正義のミカタです。カッコいいの、カッコいいよね、カッコいいの
に、わたしを助けてくれなかった

「――あぁ」

あなたが、憎い

わたしは、斧を振り上げた

閑話　アルファ・スティグマ（後書き）

せっかくだから焦らしプレイしよーぜー！

メイン2人のラブイベント焦らして出すよ！

そして待ちに待ってたアルたん回

登場回数たった二話にして固定ファンまで付いてるぅわょぅぃ〝よっょぃなアルファたんですよ！

ちなみに前後編じゃないです

これで終わりです

次回更新の閑話は魔族側か現人間側の話☆

今回のテンプレ

↓ぅわょぅぃ〝よつょい

閑話　魔界四天王（前書き）

魔界四天王勢揃い！

お知らせ

時村さまから
ヒーロー&トラーさん
のイラストを頂きました！

そしてわた　さまの板独立！

いやー…感無量

閑話　魔界四天王

「――む」

嫌そうに顔をしかめたガナルが見つけたのは、狭い廊下の真ん中でごろん、とうつ伏せに寝転んだ少女だった

「…邪、魔だ」

「みぎゃっ！？」

なんの迷いもなくその頭を踏み越えると、当然少女は悲鳴を上げる。五月蝿そうに顔をしかめたガナルの足をぐわしと掴み、少女は赤くなった鼻を押さえながら顔を上げる

「こぉんな美少女を一切の躊躇なく踏み越えるか普通っ！？」

――少女の言う通り、彼女の容姿はとても整っていた

白磁のような染み1つないすべすべした肌に、床に寝転んで尚さらさらと艶やかに流れる美しいストレートの細い黒髪、怒りに細められた目はぱっちりとした吊り気味のブルーアイ。唇も鼻も小さく、華奢な手足と小柄な体躯のせいで、精巧に作られた最高級のビスクドールのようにも見える

服装は彼女が自分の趣味で作った藍色の浴衣。ぷくーっと頬を膨らませて、ぱたぱたと足を不機嫌そうに揺らす度に細い足が見え隠れする

――が、そんな少女…バーティナを前に、ガナルは「気持ち悪い」と言わんばかりに表情を歪め

「…お前、は…男…だろう」

と、言い放った

対してバーティナはその言葉を聞いた途端に飛び起き、一切の迷いなく全力のコークスクリューをガナルの左胸に叩き込む。木人とはいえ内臓の位置は変わらない。心臓の上を打たれ、「ぐふっ…」と息を詰まらせたガナルがたまらず身体を折れば、上体の下がった頭部に綺麗に弧を描くかかと落としが叩き込まれた

――ぐしゃっ！と致命的な音と共にガナルが床に叩き付けられる。この間、実に1秒弱

無様に床に倒れ込んだガナルを見下ろしながら、バーティナは毅然と胸を張る

「男でなく男の娘！そこ間違えんな！ティナちゃんの可愛さの前には性別なんか些細な問題なの！」

「前、世も…男の、くせに…っ！ガッ！？」

「野暮なこと言わないっ！」

思いっきり頭を踏まれてガナルの顔に井桁が浮かぶ。基本的に彼はレームシルク以外はどうでもいいのだが、ここまで理不尽に虐げられて怒りを抱かない訳がない

「…ドロー。手札を5枚捨て、紅蓮王ザザンを特殊召か」

台詞の途中でバッ！と距離を取るバーティナ。長い黒髪がさらりと揺れ、その背後にゆらゆらと揺れる影が立ち上がる

ニヤニヤと笑いながら、バーティナはガナルを嘲る

「おんやぁ～？怒っちゃったかなん？絶対に敵わない恋に身を焦がすガナルんはてっきりドMさんだと思ってたから、ティナちゃんにも相手してほしいのかと思って★」

「…ザザンを特殊召喚！効果発動！先攻強制戦闘！ザザンで直接攻撃！」

「キヒッ、根暗が怒ったー！？」

ガナルの宣言と共に実体化する、巨大な真紅の剣を担ぐ鮮血色の鎧を纏った戦士。ギラリと鎧の奥でその瞳が輝き、雄叫びと共にバーティナに向けて剣を振るう！

「――けど…甘い！『クワイエットファントム』！」

ぶわり、と

バーティナの姿がぶれる。足下から影が立ち上がり、２ｍを超えるドロドロに溶けた人間のような漆黒の影は、ザザンの攻撃を受け止め、逆の手でその腹を貫く！

「…ちっ、…僕のターン、ドロー！伏せカードを…」

「やらせない！ウラァ！」

鈴の音のような愛らしい声で、乱暴な言葉。バーティナの意志の下に身体を動かす漆黒の影――『幽波紋』は、ぽっかりと空洞のように開いた目と口からゴポゴポと液体を垂らしながら、肉の溶けたような腕をガナルに向けて振るう！

「…チッ、チッ、チッ、…くそ、が…死ぬ…死ね…」

舌打ちと共に悪態を付きながら後ろに跳び、拳をかわすガナル。グシャッ！と石畳を豆腐のように砕く拳を前に、いきなり手札を全て捨てたことを後悔しながらカードをドロー。再び舌打ちしながら、連ドロー

「ちょっ…もぉ！本気でティナちゃんのこと犯る気になってないぃ！？もぉ～！」

「…キ、サマが…言うな…」

「だって女の子はワガママなんだもん★」

「…男の、娘じゃ…ないのか…？」

「ワガママなんだもん★」

コイツ、ウザすぎる。表情を思いっきり歪めてカードをセットし――

「…むっ…」

ようとした瞬間、壁を〝ぬるり〟と貫通して伸びた手が、カードを

握りつぶした

「…リオナアハト、か…？」

「…」

腕に続いて身体が壁から出てくる。３m近い長身の、鋼の鎧に身を包んだ騎士。バーティナの『幽波紋』と比べても、騎士の方が大きいのは異様としか言いようがない

『喧嘩、いけない』

騎士の腹部に浮き出てくる文字。リオナアハトと出会って数年の付き合いだが、未だに声を聞いたことがない。それはともかくこいつもウザい。と渋面を作りながらガナルは手を振り払う。それを見て、ニヒヒ、と笑うバーティナ

「弱い、弱いなぁガナルんはぁ～。カードが無いとなんも出来ないんだからぁ。そんなんだからいつまで経ってもレムたんに告白出来な」

「私がどうかしたのか？」

ピシッ、と固まる空気。巨大な騎士――リオナアハトの影から出てきたレームシルクの姿に、笑顔のまま硬直するバーティナと、渋面のまま凍り付くガナル。わたわたと慌てるリオナアハト

「バーティナ、リオナアハト。リトさまが貴様らを呼んでいる。あと、ケルドゥ。前回の作戦遂行はご苦労だった。…本来はリトさまの役目だが、リトさまは忙しいらしくてな、私からの伝言ですまない」

僅かに口元に笑みを浮かべて言うレームシルクに、ガナルの髪の葉に、水が滴る。顔が赤く染まるような分かりやすい反応ではないが、これはこれで分かりやすい

「…い、いや。…も、もったいない…ありがと…ち、ちがう…。…と、当然、の…役目、だ…」

視線をずらし、恥ずかしそうにぼそぼそと呟くガナル。そんなガナルの様子にレームシルクは不思議そうに首を傾げる

「どうした？謙遜するな。私には出来ぬ役目だ。羨ましいぞ。貴様はリトさまに一番頼りにされているからな」

「…」

さっきまでの緊張した様子はどこへやら。本気で髪を嫉妬の炎で燃え上がらせるレームシルクに、ガナルの胸に苦いものが広がる。それが顔に出てしまったのだろう、レームシルクは「むぅ」と眉根を寄せると、

「…負けないからな！」

と一方的にガナルに宣言すると、スタスタと肩を怒らせて歩き去ってしまう。ガナルの恋心はズタズタである

「…れーむ…しるく…」

悲しげに呟かれたその言葉に、リオナアハトが無言で顔に手を当てる。洪水のような涙が鎧の隙間から溢れだし、鋼鉄に覆われた身体

を濡らす

「…ぇ、と。なんかごめんね…？ちょっとした冗談のつもりだったの…」

申し訳なさそうに頭を下げるバーティナ。傍若無人なバーティナに謝られるくらい哀れな様だったのか。とさらに落ち込むガナル

「…帰って、寝る…」

「添い寝してあげよっか？」

「…い、らん！」

『子守り歌を歌おう』

「いら、ん！」

涙を流せない木人の身ながら、泣きたい気分でとぼとぼと自室に向かうガナルの背中に向けて2人で手を振りながら、バーティナとリオナアハトは顔を見合わせる

リトマス王がいつもいる王座の間（笑）を目指して歩きながら、バーティナは唇に指を当て、可愛らしく小首を傾げる

「うーん、ちょっとした発破かけのつもりだったのになぁ」

『無駄な戦闘、ダメ』

「だってガナルんムカつくんだもん。うじうじヤンデレちゃってさ

ぁ。男ならアハトんも「レームシルクー！お前が好きだー！お前が欲しいー！」くらい言わなきゃダメよ？」

『それでフラれたら、自殺するな』

「うわぁ…確かに。現実ってヤーね。やっぱ二次元が最強よね！ティナちゃんみたいにかわいい子が女の子のはずがないわ！」

『いやその理屈はおかしい』

「突っ込みキャラとかやめてよ死ね。デブのくせに。デブのくせに。飛べない豚はただの豚なんだから」

『お前は俺を怒らせた』

ゴゴゴゴゴ…と縦にも横にも大きい鎧を着たリオナアハトが凄まじいオーラを発する。王道バトル漫画な念能力の持ち主であるリオナアハトの本気の怒りに「ご、ごめんなさい」と素直に頭を下げるバーティナ。傍若無人だが、根はヘタレなのだ。幽波紋もそこそこバトル向きなのだが…

「とりまリトちゃんとこ行こー。多分、そろそろそわそわし始める頃だし。あの子基本的に中身子供だもんねー」

『厨二病だけどな』

「笑えないレベルの、ねぇ。ティナちゃんが言っていい台詞違うけど」

『ワロスｗｗｗ』

「あんたのキャラが本っ気で掴めない…っ！！もう１０年来の付き合いなのに…！」

『プギャーｍ９（＾ｏ＾）』

「ぶん殴るわよ！？」

『我々の業界ではご褒美です』

当然のことを聞くな、とばかりに胸を張るリオナアハトに、「キモい…っ！チキン肌が…！」と自身の身体を掻き抱くバーティナ。リオナアハトは身体をガチャガチャと揺らしながら、『ゲラゲラゲラ』と腹に笑い声（？）を浮かべる。戦闘能力的にバーティナはリオナアハトに敵わないので、悔しそうに唇を噛む

ちなみにどうでもいい話だが、直接的な戦闘能力ではレームシルク＞リオナアハト＞バーティナ＞＞＞＞超えられない壁＞＞＞ガナル＞＞リトマス王

なのは秘密である。といっても、手札次第、あるいは準備次第では超えられない壁はあっさりひっくり返るのだが

「ぅぅ、やっぱあんただけは苦手だわ…。あんた以外はリトちゃん含めて可愛いのに…」

『自分、結構鍛えてますから』

「黙れメタボ」

『メタボじゃありません』

『例えメタボだったとしても』

『それはメタボと言う名の』

『力士です』

「一辺に喋りなさいよ！あと力士舐めんな！あの肉の下全部筋肉なんだからねっ！？触ると脂肪の下カッチカチなんだから！」

『バーティナの怒りポイントが分からない件について』

「あの…いい加減部屋に入ったら如何でございますか？」

扉を軽く開き、困り顔で顔だけ出して声をかけるリトマス王。仲が良いのは結構だが、この2人は仲が良すぎて話が中々終わらないのだ

「あっ、ごめーん。で、リトちゃんなーに？」

『遂にバーティナを掘るか。胸熱だな』

「ねぇよ。それはねぇよ。でございます。とりあえず、どうぞお入りください」

扉を開き、2人を招きいれる。その際に、『それは、ということはリバはあり。まさかのティナ×リト。全然アリだな』とか表示してたリオナアハトは全力で無視。常識人ではあるのに、発言が残念なのがリオナアハトなのだから

「男の娘に掘られる方いいなんて…リトちゃんマニアック♪おっしゃベッド行くぞコラァ！」

「行きませんよ！？真面目な話でございます！」

全力で後退りするリトマスにけらけら笑うバーティナ

「こほん、では真面目な話でございます！」

ぱんぱん、と手を叩き、空気を入れ換えるリトマス王。空気が引き締まったからか、馬鹿2人も纏う雰囲気を変える

「――ファルガナ女王及び、転生者である騎士団長3名…いえ、相手に何人の転生者が付いていようと、確実に殲滅出来る作戦が完成致しました」

「へぇ…」

『ほぅ…』

態度にも表情にも余裕と自信を溢れさせたリトマス王の言葉に、2人は感心したように息を吐く

「そのためにも、重要なコマが必要です。お2人にはそのコマを手に入れて頂きたいのでございます」

「おっけ。可愛くて可憐でカッコいいティナちゃんにお任せ！」

『ナルシスト乙』

「お前後で地下室」

あっという間にカオスである。それに困ったように笑いながら、リトマス王はそれでもにたり、と邪悪に笑った

「では――ファルガナ女王の義娘…。『王神の巫女』ティエリアを誘拐してきていただきたい。『クワイエットファントム』と、『空気嫁／ハードダイバー』の使い手であるあなた方には…簡単な仕事でございますね？」

分かりきった問いに、2体の魔族はにたり、と笑った

「『当然』」

閑話　魔界四天王（後書き）

意外と魔族達は仲良いです。ただしガナルを除く

辛い現実に必死に抗ってきた人たちだから、自然と連帯感。ただしガナルを除く

そしてレームシルクはガナルに嫉妬。ガナルはカード次第では何でも出来る万能タイプだからレームシルクより頼りにされてる件

ガナルェ…

バーティナ
＜チート：幽波紋／スタンド『クワイエットファントム』
言わずと知れた奇妙な冒険。詳しい力は本編で

リオナアハト
＜チート：念能力（変化系）
言わずと知れた富樫ェ…
詳しい能力は本編で。１つは今話で既に出た『空気嫁／ハードダイバー』。
自身の身体を変化させて無機物内を移動可能。壁から出てきたのもコレ
空気を読めなくてギャグが滑ってもコレがあればすぐ離脱出来るよ！（爆）

今回のテンプレ

↓男の娘

↓お前には負けないからな！

↓実はあなたのことが好きなのに…！

↓悪役は闇で動く

魔界四天王の男は全員ジャ○プ系なチートな件

リトマスは四天王違うしね

閑話　ファルガナの城（前書き）

お知らせ

七式さまよりイラスト頂きました！
投稿板に貼っておくんだぜ！

…なんか、なんかいっぱい繋がったイラストあるのに…！

携帯しかない人春には見れない！

閑話　ファルガナの城

聳え立つ、白亜の城。

魔法反射作用を持つ特殊な素材を用いて作られた、巨大な城。その最上階に作られた、女王の自室。豪奢な家具と超一流の装飾が施された内装

シーツだけでも村民の1年分の稼ぎに匹敵するベッドの上で、光の国・ファルガナの女王――クイーン・オブ・ファルガナは、素晴らしい肢体を隠そうともせず、ほとんど下着同然の格好でニヤニヤと笑っていた

「離してっ！離してよぉ！なんで!?なんであたしがこんな目に合わなきゃいけないのよ！」

そう叫び声をあげるのは、まだ年若い少女である。少し肥満気味で、ニキビが残る顔立ちと、吊り気味の血走った目、真っ赤な顔で怒鳴り散らす度に唾の飛沫が飛ぶ。だというのに艶やかな髪だけと肌が、妙なアンバランス。豪華なドレスも肉に押されて膨れ上がっている

少女の名前は、ケイニー・フレッツェル

男性からの「愛」を集めるギアス、というチートを持つ転生者だ

「ぅぅ、ごめんでござる…ごめんでござる…。ファルガナさまには逆らえないんでござる…」

身長は１６０ｃｍ弱。頭頂部から足の先まで目元以外は一切肌が露

出していない。声からして性別は少女。だぼっとした黒衣のせいで分かりにくいが、胸も腰も尻も幼い幼児体型。頭からは、頭巾を破って狐と思われるぴんっとたった黄金の三角耳と、腰元から生えるふわふわした先端だけ白い尻尾。獣人…しかも、恐らく「狐」の獣人なのだろう。頭巾の隙間から覗く目は細められていて分かりにくいが、涙で輝く碧色。一切の容赦なくケイニーを床に組み伏せているものの、どうやらその胸の内は罪悪感で一杯らしい

背中に背負った二本の刀の先端が、わりとごりごりケイニーの体に刺さってるのに気付いてない辺りなんとも言えないが

「…あー、嬢ちゃん。あんま無茶苦茶やったらあかんぜよ。娘っ子にゃ優しゅうしたらなあかんべ」

「うっさい黙れ、あんたは目と鼻と口閉じて隅っこで大人しくしてなさい」

一言の元に切り捨てられ、落ち込みながら部屋の隅に向かう小柄な男性

髭でほとんどの顔が隠れている、日焼けした肌と一切の脂肪を切り落としたような筋肉質な肉体を、タンクトップとニッカポッカのような衣装で包んでいる。「如何にも」なテンプレートな格好をした彼は、「ドワーフ」族の青年。

名は、ショーゼン。近衛騎士団の第1大隊の隊長でもある、国属の鍛冶師である

「ショーゼンどのぉ～、変わってくだされぇ～心が痛いでござるぅ～」

「ダメよ。そいつの半径２ｍ以内はもう「ギアス」の効果範囲だもの。ショーゼンを魅了されたら面倒だもの」

しれっと答えるファルガナに、「そんなぁ～」と情けない声を漏らす狐少女。服装だけ見れば暗殺者のようだが、この少女のイメージにはどうにも重ならない

「嫌ならやめなさいよ！あたしを誰だと思ってるの！？公爵子女よ！？あんたみたいな平民がこんなことしていい立場じゃないんだから！」

「るいずでござるか？」

「意味分かんないわよ！離せって言ってんでしょ！？」

「…ファルガナさま？」

ちらり、と狐少女が目線だけでファルガナに問い掛ける。ファルガナは、にたり、と笑った

「もっとキツく」

「ギッ…！？」

無言でより強く床に押し付ける狐少女――ディー。悲鳴を上げたくても上げられないケイニーが表情を歪め、ボロボロと涙を溢す

「だ、か、ら～。あんたのチートで黒坊主…リトマスをぶっ殺すの手伝えって言ってる訳よ。アンタのチート能力なら簡単でしょ？」

「…ぁ、ぅ、や…ぁ…！」

なんでわざわざ危険な戦場に出なければいけないのか。そんな非難を込めた目でファルガナを睨み、痛みに耐えて声を絞り出すケイニーの姿に、イヤァー！と悲鳴を上げるディー

「外道でござる！外道でござる！なんでこんな上司の下に付いてしまったでござるか！？ごめんでござるぅー！」

「ディー、ウザい。で、ケイニー・フレッツェル。答えはＹＥＳ、か是非やらせてください、よ。そ、れ、と、も…」

すぅ…と白く、細い指先がケイニーの眼前に差し出される

ニィィ…ッと唇をつり上げ、ほの暗い笑みを浮かべるファルガナ。痛みからか、それとも恐怖からか。ケイニーの表情があっという間に真っ青に染まる

「小豚ちゃんらしく厳しぃいし、つ、け、されたいのかなぁん？…私様の足、舐めるぅ？」

「ひっ…」

ケイニーの頬をくにくにと足の指で揉みしだくファルガナ。その気になればそのまま肉を引き千切ることも可能な剛脚に、カタカタと身体を震わせるケイニー

「うんって言うでござる！今なら間に合うでござる！さぁ！さぁ！ここで言わないと良い子に見せられない絵面になってしまうでござ

るよ！？」

そんなディーの言葉に説得されたのか、それとも圧倒的な恐怖に屈したのか。「…ぁ、ぅ…は、ぃ…」と小さな声と共に頷くケイニー。ファルガナは「チッ…」と舌打ちし、ディーとショーゼンはほっと溜め息を吐く

「…ミリルゥトゥ。どーせいるんでしょ、こいつ好きに弄くり回していいからチートを自由自在に使えるように訓練しときなさい」

ファルガナのそんな言葉と共に

パカッ、と。床が開き、ディーとケイニーの身体を飲み込んだ

「…ぇ？」「ちょーっ！？てぃや！」

呆然とするケイニーの背中を踏み台にジャンプし、どうにか穴の縁に手をかけるディー。ほっとしたのも束の間、「きゃあああああああっ！？」とケイニーの悲鳴。思わず「南無…」と片手で底無しの闇に消えていくケイニーの姿を拝むディー

『クキヒリハハハハハ！残念無念また来週！愛しい愛しいディィィィを捕まえられなかったのは残念だが中々の！な・か・な・か！な肉々しい素材ではないかフルフヒヒャハハハハハ！面白い！面白いぞファルガナよ！これだから貴様の部下はやめられぬ！エルフ族より追い出されて幾月幾星霜！我が研究止まることを知らず！目下のライバルは魔女の頂点！クケラコケラクケラコケラ！上がれ悲鳴上げろ苦鳴上げろ怨み辛みにまみれしドス黒い負の声を！キヒヒヒャアアアアっ！！貴様の犠牲で我が研究は！我、が、研究は！更なる高みへ一歩進むぜらんなぁあああああうぇいいいっ！』

『いやぁあああああっ！！やめてぇえええええええええっ！助けぷつっ

……穴の奥、底の見えない闇の先から響いた声に、そして不自然に途切れた声に訪れる沈黙。ファルガナは平気な顔で、「相変わらずやかましいやつねぇ…」と顔をしかめていたが

ギギギ、と嫌な音を立てながら徐々に閉まる床に開いた穴。ディーはのろのろと床の上に上がると、無言で土下座した

「すまぬ…！すまぬ…！ケイニー・フレッツェルどの…！何にも出来ぬ拙者を許してくだされ…！」

「馬鹿野郎ディー！おめさのせいだけじゃねぇ…おいもなんも出来んかった…！おめさが、おめさだけが背負う罪じゃねぇだ…！！」

「ショーゼンどの…！」

ひしっ！と抱き合う騎士団長2人を、ウザったそうに見てからファルガナは枕元に手を伸ばし、そこに置いてあったハンドベルを鳴らす

からん、ころん。と涼やかな音。遠くからドアを荒々しく開閉する音。ドタバタと騒がしく階段を駆け上がる音に、ファルガナは満足そうに口元を緩める

こんこん、とノックの音。「入りなさい」とファルガナが声をかければ、「――ありがとうございます」と野太い声で返答があり、扉が開く

「――何のご用ですか」

冷たい声。無精髭に、白いモノが混じる髪
黒のロングコートを纏った彼が一歩、安全靴と迷彩色のズボンに包まれた足を踏み出す度に、ガシャガシャと音が鳴る

「ハァイ伸一。今日の試練よん」

パチッ、とウィンクしながら言うファルガナに、伸一は不快そうに顔を歪めた
その反抗的な態度に、ニヤァ…と嫌な笑みを浮かべるファルガナ

「地下のミリルゥトゥの実験室から、転生者の救出ね」

「…ミリルゥトゥ？」

眉をピクリと動かし、疑問の声を漏らす伸一。その反応にファルガナは「あら？」と首を傾げ、

「会ったこと…ああ、ないわね。地下室にも入ったこと無かったものねぇ。この城の地下にダンジョン作っちゃったマッドサイエンティストよー？リーデスと違ってマジキチだけどね。何人か駄目にしてるから早く助けに行かなきゃ…。んふふ♪」

楽しそうに笑うファルガナに、「うぅ、ごめんでござるぅー！ケイニー殿安らかにー！」「娘っ子の犠牲は無駄にしねぇだ…っ！」と既に諦めている騎士団長2人。その姿に伸一は不快そうに顔を歪めた

「あいつの実験室にたどり着くためにはとんでもない数の防衛兵器

倒さなきゃいけないケド…行ける？別にいいわよ、最悪チート能力さえ無事ならケイニーが人型じゃなくても構わないもの」

平然と人でなしな発言をするファルガナ。伸一は思わずハチェットに伸びそうになる手を強い意思で押さえる。まだ、ファルガナはおろかあの小さな女の子にすら敵わない。もっと、もっと強くならなければ…と唇を噛む伸一

「…やるわ。強くなれるなら、何でも」

その返答に満足そうに頷きながら、ファルガナは砂時計型の魔法具を投げ渡す。それを受けとり、「これは？」と首を傾げる伸一

「制限時間よん、大体…転生者の検査が終わって改造に入るまで多分2時間くらい？ほら、こうしてる間にも時間は減ってー―」

ファルガナの言葉に、脇目も振らず駆け出す伸一。「若いわねー」とその背中を見送り、ファルガナはニタニタと笑う

「…あのー、ファルガナさまぁ。伸一どのに鬼畜過ぎると思うのでござるが…。昨日もAランク任務こなしてきた訳でござるし、今日くらいは休ませたらどうでござるか？毎日あれじゃ倒れるでござるよ」

「もっと優しくしてもいいと思うばい。伸一の頑張りは目を見張るモノがあるべ。やっぱ恋人を喪った男は強いべ…。まぁ、それでも限界あんべ？」

おずおずと手を上げて発言する騎士団長たちに、露骨に「えー…」と表情を歪める

「だってぶっちゃけ、ケイニー・フレッツェルより星　伸一の方が期待値は高いもの」

「「ぇー…」」

何なのこの女。そう言わんばかりの2人の反応に、ファルガナは「なによ」と頬を膨らませる

「ケイニー・フレッツェルは女相手には無力なのよ?だったら全局面に対応出来るよう、伸一を鍛え上げるわよ。主人公補正あるからか分かんないけど、アレの成長速度は早いもの。あんな小豚ちゃんよりよっぽど役に立つわ。どうせなら餌になってもらいましょ。伸一は馬鹿だから他人の為ならどんどん強くなるし」

「理屈は分かるでござるが…」

「外道だべ。ガチガチの外道だべ」

騎士団長たちからの非難を平然と受け流し、ファルガナはヘラヘラと軽薄な、けれど艶然とした笑みを浮かべる

「役に立たない子が悪いのよ」

硬直する2人に、ファルガナは冷えた瞳で問い掛ける

「あなたたちは、役に立つわよね?」

…2人は、無言でこくりと頷いた

閑話　ファルガナの城（後書き）

徹底的な実力主義な人間側。ただしチェック項目が「武力」の比重多めなのでかなーり理不尽

…でも本当は中世って財力、家柄がメインなんですよねぇ…

やはり脳筋か…

ディー（愛称）
＜狐獣人
＜＜チート：秘密
服装はＮＩＮＪＡ。あるいは暗殺者な娘。だけど騎士団基本的にナルクトールとタッグ。ナルクトールの見た情報の確認、あるいは裏付け担当
胃がいたい娘２号

ショーゼン
＜ドワーフ
＜＜チート：秘密
ドワーフ。ちびマッチョ。カッチカチやぞ！
気は優しくて力持ち。でもファルガナとバトって負けてからは素直な部下
でも毎日頭が痛い

ケイニー
＜人間。公爵家次女
＜＜チート：愛されギアス
キャラが薄い。嫌な娘
実家には２３人の恋人がいる！勿論みんなイケメンだ！

ミリルゥトゥ
＜エルフ（？）
＜＜チート：（？）
こいつも転生者
それ以外は謎

★ちゃん出た！

詰め込み過ぎましたね、ごめんなさい

でも閑話でまだ出してない転生者、トリップ主出したかったんだ…

次回、閲覧注意挟んでから本編再開です

閲覧注意2（前書き）

本編にはほとんど関わりがありません

お知らせ！

携帯から見ているせいで前回追加分の七式さまの素敵イラストを見れなかった貴方！

みてみんの七式さまの部屋にＧＯ！分割していただいたお陰で見れるようになりました！

そして
危険　危険　危険
　腹筋崩壊注意
投稿板に
わたさまの腹筋崩壊イラスト追加。

そして
危険　危険　危険
鼻から愛が溢れます
時村さまより頂いた「バーティナ」のイラストを専用板に追加。

閲覧注意2

「うるちー、ロキさまー」

「うるち言うなですわ！わたくしはウルティア！ガスガスって呼びますわよ！？」

「それはやーん…。ルガスタが頑張って主人公リスト作りましたよー」

――マジで？お疲れ。見せて見せて

「あーい。うー、うるちつめて。炬燵入るぅー」

「あ、こら！もー…わたくしたちは運営としてもっと気を張らないといけませんのよ？」

「あいあい、カメラ回ってからね、うん。ロキさまー、ミカン食べます？ルガスタが剥いちゃいますよー」

――んにゃいらね。…うんうん、中々分かりやすいじゃん

――――――――――――――――――――

トリップ主人公17人

・レティーシア
＜回復魔法
＜＜エルフ。ＬＯＶＥ↓大路　光

・大路　光
＜獣化
＜虎獣人。ＬＯＶＥ↓レティーシア

・黒岩　優人
＜主人公補正
＜＜人間。ハーレム持ち。女子４人。レティーシアにフラグ（？）

・神城　セイギ
＜隠蔽
＜＜人間。裸族

・渡辺　準一
＜ネクロマンサー
＜＜人間。笹田チーム生き残り

・星　伸一
＜テンションバトラー
＜＜人間。オカマ

・一文字　弾

＜ヒーローチェンジ
＜＜改造人間。妖精の加護

内、人魔大戦以前の死亡者まとめ

×阿部孝治
＜ウェポンマイスター

×笹田　次郎
＜他心支配

×荒木　正也
＜アンサートーカー

×新妻　謹二
＜魔物使い

×茂木　裕也
＜絶対遵守のギアス

×土居　義弘
×伊東　誠
×金沢　友一
×加川　皐月
×吉野　美空
＜マイナーチェンジ：モンスター

転生主人公１８人

内、ファルガナ大陸内生存中

・クイーン・オブ・ファルガナ
＜『最強』
＜＜人間（？）。偉い。強い。女王。星　伸一の師匠

・リーデス・ヴァルトハイヘルン・オズ・パラケルスス
＜学習能力向上５００％
＜＜人間。魔女の頂点

・アルファ・スティグマ
＜スキルコピー
＜＜人魔ハーフ。迷子。精神障害

・ユージロー・マノメ
＜なし
＜＜デススライム。でかい。ＬＯＶＥ→ラグナエイト（無意識）

・ラグナエイト
＜狂気の感染
＜＜『魔神の髪』ミーラグリーズ。触手系美少女。原作キャラ。ＬＯＶＥ↓ユージロー・マノメ

・フェティッサ・ゲイオルル
＜資金源（商売成功率２００％向上）
＜＜人間。奴隷商人。子だくさん

・グウルル（仮名）
＜神竜転生
＜＜ドラゴン。でかい。強い。原作キャラ

・ケイニー・フレッツェル
＜愛されギアス
＜＜人間。逆ハーレム持ち。少年～男性２０人弱

・アレクサンドロ
＜ギャグ補正
＜＜人間（？）。変態。エロス

・ディー（ｄｅｃｓｅｍ０１９２）
＜――
＜＜獣人。胃腸が弱い

・ミリルゥトゥ
＜――
＜＜エルフ。キチガイ

・ナルクトール
＜千里眼。完全記憶
＜＜人間。そこそこ偉い。胃に穴。寝不足

・ショーゼン・フライディル
＜――
＜＜ドワーフ。鍛冶師。頭が痛い

魔界リトマス、生存中。

・キング・オブ・リトマス
＜アカシックレコードの接続権限
＜＜ウルタール（上級魔族）。賢い。強い。王様

・レームシルク・ルビーアイ
＜炎を統べる程度の能力
＜＜ルビーアイ（下級魔族）。人間嫌い。隻眼。ＬＯＶＥ↓リトマ

ス王

・ケルドゥ・ガナル
＜召喚符（遊戯王）制作
＜＜木人。ＬＯＶＥ↓レームシルク。照れ屋

・バーティナ・ツェルン
＜幽波紋
＜＜ビクシブファミリア（上級魔族）。愉快犯

・リオナアハト
＜念能力：変化系
『空気嫁／ハードダイバー』
『ｗｋｔｋ／イーノック』
『爆発しろ／モゲロ』
＜＜『魔神の口』テラーグリーズ。強い。でかい。硬い。ヤバい

――――――――――――――――――――

――うん、いいんじゃね？。分かりやすいわ。【魔王】除いて１８人。やっぱ転生者は立場がしっかりしてるから死ににくいな…。合計２５人なー

「褒められたー、嬉しくはないけど喜んどくー。わーい」

「…あなたって娘は…。申し訳ありません、ロキさま…わたくし以外のここの女神はみんな子供ですの」

――あれ？お前がそれ言っちゃう？あんま変わりねーよ？ペッタペタじゃん

「失礼なっ！？わたくしはこの娘たちみたいなお子さまと違いますわ！」

「やーん、頬っぺたつねっちゃやんやん」

――まぁいいけどな。ところでアルファ・スティグマっていつの間にファルガナ大陸に入ったん？

「ファルガナ女王にぶん投げられた時に偶然、界境の近くに落ちちゃいましてぇー…。ファルガナ女王／恐い大人からとりあえず逃げるために反対方向に行ったら、上手い具合にファルガナ大陸に来ちゃって…」

「適当に逃げ回りながら虐殺を繰り返してますわね。でも、ついさっき一文字弾さまと戦闘に入りましたわ」

――へぇー…。…なぁ、介入とか…

「駄目ですよー。運営は公平に、です。安価は絶対ですー」

「まぁたゴッドちゃんねるですの？まったく、ピコピコばっかりやってると目が悪くなりますわよ？」

――ピコピコて

「ゴちゃんバカにすんなー。うるちは基本的におばんですのでー」

「おば…？なんですの？」

――んにゃんにゃ、んなことよか神城どこ行ったよ

「馬目雄二郎さまの本体が存在するダンジョンであり、同時に伝説の武器が眠っている、と言われるダンジョンに向かってるのは最後に確認しましたけど…」

「それ以降確認出来てないので、死んでるかも？」

――うわー…ないわー。マジないわー。出番ねーとか引くわー

「わたくしたちに言われましても…。公平に運営してますのよ？」

「黒岩たんとかリトマス王が明らかに優遇されてるのに、レームシルク、レティーシア、ナルクトール、アルファたんとかみたいな美少女たちはガチの貞操ピンチに何度も合ってる辺り公平じゃないけどね」

「リアルラックが足らないんですわ」

――黒岩って言りゃあハーレムどうなってんの？

「・精霊樹ユルエル、個別ルート、
・女騎士シャルロッテ、攻略開始、
・巫女姫ティエリア、フラグ開通、
・魔法拳士カミナ、フラグセット、
かなー？
あとレティーシアにはフラグのみー。ＮＴＲになんのかな、これ。

レティーシア大路たんに持ってかれちゃったよ」

「たった半年で４人…。は、破廉恥ですわぁ！」

「刺されて死ねよ。ハーレム持ちとか死ね。ケイニーも黒岩も死ね。滅びろ。〇〇〇モゲロ。〇〇〇腐れ」

――お前らの旦那は？

「「あれは二股だからセーフ」ですわ」

――さよけ

「あ、魔界側から2名、王都に潜入。残る3名もグウルル（仮）の住処である「王竜の祠」を目指してファルガナ大陸入りしたようですわね。太陽にはしゃいでますわねぇ。かわいい…。ケルドゥ・ガナルさまものびのび光合成なさって…微笑ましいですわ」

――へぇ、「王竜の祠」、か…。んー、楽しいことになってきたな。ファルガナを正攻法で頭使って倒すにゃあ、あそこのギミック使うっきゃねぇからな…

「あー、ネタバレー。ロキさまのトンチンカン。顔面ウルト〇マン」

――神聞きわりぃなオイ…

「それよりわたくしは休憩終わりですわ。調整終わったらルガスタさっさとお料理に戻らなきゃ駄目ですわよ？」

「うぃー。それよりるか子とのんのが泣いてたよー。「「お料理間

に合わなーい！おねーちゃんへるぷー！」」って」

「そういうことは早めに教えなさい！」

――んー、俺も暇だし宴会場行くわ

「宴会場じゃなくてモニター室…。実質変わりないケドー」

――ほーほっほっほっほっ！ほーほっほっほっほっほっ！どうよ混沌っ！どーよ混沌！？これでもう私のことを顔だけの神（笑）なんて言えませんね！ほーほっほっほっほっ！石化してあげましょうか！ほーほっほっほっほっ！

――…おいおい何を言ってるんだい？これから、これからだよメデューサ。男性カミングアウトに初エッチ、そして恋心を自覚したが故の醜い嫉妬…あぁ、あの娘はどんな顔をしてくれるのかな…？大

路はそんな醜い感情を表す、ニューハーフな恋人にどんな顔をするのかな…？ああ、楽しみだ。…でも飲み過ぎだよー？それ、僕じゃないよー？ぐぅぐぅ寝てる僕の上司だよー？

――笹田が…我の笹田が…

――げ、元気出せよインドラ…。仕方ねぇって、もやしだったしよぉ

――そ、そうよインドラ。それにあんな鬼畜に感情移入しなくてもいいのよ？あたしら友達だし…うん、多分友達だし…

――ヴァーユさん、本音本音。…まぁこう言っては何ですが…ご贔屓の主人公が生き残ってるアグニさまが慰めても…

――駄目だよナミちゃん。こういうときは何も見なかったことにしてあげるんだ

――…そうね！ナギくん…！私、間違ってた！

――…い・ちゃ・い・ちゃするなぁあああああああッ！！

――インドラが放電したーっ！？雷神！雷神！抑えろ！

――え？あ、無理無理。俺下級神だヴォア

――雷神が…ピチュッた！？

――あーもー皆死ね！死ね！死ねー！

――…っ、やるじゃねぇかインドラ！受けて立つぜぇ！

――アグニぃ!?…あ、もういいや好きにやれよ

――仕方ないのう、わしが直々に止めて…

――ゼウス来んな

――来んな

――来んな来んな

――お前の主人公キメェんだよ

――…オリュンポスの戦士たちよっ!!無礼者たちに裁きの光を!

――やだ

――いや無理無理

――ちょっと今回は付いていけないわぁ…。軽い遊びであそこまでガチでやるとか…

――弟よ、我もアレはない。我が与えた「直死の魔眼」のほうが真っ当だ

――…冥界の王だからって「死」関係の能力与えちゃう厨二な兄さん乙

――よーしゼウスお前屋上。兄さん久々に張り切っちゃうぞー。っつか貴様にだけは言われたくないわこのチーレムスキーが!

――男の夢じゃろーが！殴り会うか！？

――やらいでか！

――…男って、本当バカ。…ツマミ、足らないわよー

「はいはーい！ただいま！」

――あれ？アマテラスとかアフロディーテちゃんは？あの娘たちにお酌してもらいたいなぁ～なんて…

――姉上は貴様の不躾な視線を恐れて部屋に戻った。そして…私の素晴らしき姉上に手を出す気か、エロス…？

――…いや、あの娘絶対お前に怯えてたよね？あれ？お前なにしたんだっけ？乱暴としか言われてねーよな？

――…姉上の部屋でこう…肌着をクンカクンカスーハー…と

――俺、お前と友達になれるわ。お前どの主人公？

――ファルガナだ。貴様は？

――アレクサンドロ。おもしれぇよ

「ソーマの追加です！」

――サンキュー。あと、ツマミ追加。おすすめで

――同じくツマミ追加。女体盛りで

「そういうサービスありませんし他神の妻ですわ！他社の部下の妻に手を出さないでくださいまし！わたくしの妹にまで乱暴しないでくださいまし！」

――…残念だ

――残念なイケメンにも程があるな、スサノオ

「旦那ー！ツマミ追加ー！」

「…（こくっ）」

「運営はともかく何で私らが酒会の面倒まで…」

「下っ端の辛いところであるな！さぁフルカノ！我が自慢の料理を運び行くが良い！」

「っさいなー、あの脳筋女王アンタに似ちゃったんだね、かわいそ」

「地味に傷付いたのである！」

「あ、その…もう！フルカノ！パパを苛めたら駄目ですわ！慰めるのわたくしなんですのよ！？」

――…おーし、お前ら。運営のロキ様から発表がある

――へ…？

――あんまお前らダラダラしてんの見ててもつまらんだろうしよ

――ちょっと弄くって【魔王】目覚めさせるわ

「「「…ぇ？」」」

「…（仕事、増える予感）」

「ふむ…。もう少し楽出きると思ってたのであるが…」

「…ぇ、ぇ？なに？またロキさまがなんかやったの？おとさんおとさん、何があったの？」

閲覧注意2（後書き）

カオスはおさえめ

いい大人のダラッとした飲み会ってこんなん

っていうのは冗談で、あんまりネタが沸かなかった

そろそろ「ながし」とか「犬っ娘」更新しなきゃ…

３５、人魔大戦―はじまり（前書き）

お知らせ！

須和光輝さまよりイラスト頂きましたＹＯ！
魔が差せ魔が差せどんどん魔が差せ！

３４、想い、届けて

と挿し絵まとめに乗っけておきます

35、人魔大戦―はじまり

「うそぉおーんっ！？ちょあああああお前ら何やってんダーッ！？」

な悲鳴に無理矢理意識を覚醒させられ、のろのろと身体を起こす。

…ぅぁ、ねむ

「…るっせぇ…なんだってんだ…？」

「…はよー」

隣で寝てたヒカルさんに挨拶。くぁあ…と欠伸をしながら、「おー、おはよう」と返してくるヒカルさん

『アレ』から3日間。俺たちは、リーデスさん、クロイワ、ルクや騎士団と共に王都へと向かっていた

…2人で強くなる、と誓いあったからって急に関係が変わる訳じゃない。特に俺が鍛えなきゃいけないのはメンタルだし、どうやって鍛えていけばいいの分からないからなぁ…。色々リーデスさんに教えて貰ってるけど、魔法理論とかサバイバル知識がメインだし…

…ゆっくりやってくしかないか、と思いながらノビをすれば、妙に優しい目で俺を見つめるヒカルさんの視線に気付く

「なに？涎跡残ってる？」

「んにゃ？…髪下ろしてると余計幼く見えんなって思ってな」

「…む」

からかわれてるってのは分かるんだけど、不機嫌になるのは隠せない。子供扱いしないって約束したのに

非難の視線を向ければ、「わりぃわりぃ」と苦笑いするヒカルさん。その手には…櫛？

「顔洗ってこい。髪、結ってやるよ」

「出来るの？」

俺、最初苦労したんだけど。バランス変になると痛いんだぞ。不審げに問えば、おっさんはリボンで纏められ髪を弾き、苦笑しながら言う

「自分の髪やってんの知ってるだろ？」

「…それもそうか」

テントの端に置かれた水桶から水を掬い、顔を洗う。…乾いた布で水を拭い、違う布を濡らして、ヒカルさんの側へ

「ヒカルさん」

「ぁ？なん…ぐっ」

振り返ったヒカルさんの顔を布で拭う。「何すんだてめぇ」と視線で語るヒカルさんに微笑みかけ、ごしごし顔を拭う。よし、綺麗

「…てめぇで出来るわ」

不満げに言うヒカルさんにニコニコと笑みを向ける

「俺がやりたかったの」

言いながら寝袋の上に胡座をかいたヒカルさんの前に座り込み、肩越しに振り返る。やれやれ、と言わんばかりの表情をしていたヒカルさんだったけど、「仕方ねぇなぁ…」と微笑する

「さ！早くやってよ。三つ編みがいいなー」

「あぁん？いつものじゃ駄目なのかよ…めんどくせぇな…」

するり、と指が髪に絡む。櫛が通され、さらさらと髪が流れていく。めんどくせぇとか言いつつも、しっかりリクエストに応えてくれる辺り、ヒカルさんっていいお父さんになりそうだよなぁ…

んー、…なんかむず痒い…けど、気持ちいい

自然と頬が…ってか顔全体が緩む…。なんだか気恥ずかしくなってきたし。少し後ろに体重をかけながら、ヒカルさんの手に任せる。…いいよな、これくらいは

「…ご機嫌だな」

「んー？いやぁ、なんか気持ちよくって。ヒカルさんのも明日やってあげようか？」

「いらね。っつか不気味」

「不気味て。…ヒカルさんをポニテにしようと思っただけなのにぃー」

「いらんわ。…しかしアレだな、こんだけ綺麗な髪だと触ってる方も気持ちいいわ」

「えー？もしかして触りたかっただけ？よく頭撫でるし」

「ありゃ別だ別。部長…俺の前いた世界の上司がな、俺が新人のころ頭撫でて褒めやがんだよ。それが妙に嬉しくてな…。褒めるときは撫でるようにしてんだ」

「いい上司だねー。…部長さんって女の人？」

「男だよ。俺よりちっちぇーメタボ腹のおっさん。…いっちょまえに嫉妬すんな。まだそういう関係じゃねーだろ」

…まだ、かー。くすくす、と2人で笑い合う。キュッ、キュッ、と緩やかに髪が編み込まれていく。…ふーん、三つ編みは1本派かー。俺は2つ編み派だったんだよね

「おし、終わり」

「ありがとー。尻尾お揃い？」

「アホか」

軽く頭を小突かれる。太い三つ編みに編まれた髪が、首筋を滑ってこそばゆい。鏡を見たら…おぉ、なんか文学少女っぽい

鎧を装着。背中に弓、腰に銃。ブーツにも足を通して、と。ヒカルさんにも鎧を着せて、準備完了！

「…さて、クルクルんとこ行くか」

「ルクだってば。今日は何で叫んだんだろうねー」

毎日毎日必ず1回は雄叫び上げるもんなぁー。昨日は…「フレッツェル公爵次女になんつーもん使う気だミリルゥトゥー！がんばれがんばれ伸一まじがんばれもっと熱くなれよーっ！！」だったっけ？お前が熱くなるなよ、って話だよね。…っつか、シンイチ…？ぅー…ん…？聞いたことある名前…っつうか、日本人の名前だよなぁ…。シンイチ、シンイチ…。…駄目だ、高校生名探偵が出てくる

小さなテントから出て、ルクのテントを探す。エロイカの街には数日滞在してたからそれなりのテントを張っていたそうだが、基本的には冒険者と同じ、小さなテントをいくつも使うらしい。その方が片付け楽だし、当たり前っちゃ当たり前だけど…。ああ、勿論、俺とヒカルさんは騎士団のじゃなく、自分たちのテント、食糧で随行している。…ある意味これも「強く」なる一歩だしな。自立は大事だよ、自立は

「あ、ここかもしれ」「この非常時にイッチャイチャしてんじゃねぇーっ！ぜぇーんぶ見えてんだぞ見せつけてんですねっ！？このＨＥＮＴＡＩバカップルー！荷物纏めて黒岩呼んでくるんだお願い呼んできてハリーハリー！リーデスどこーっ！？」

――それっぽいテント見つけた瞬間、髪ぐっちゃぐちゃ、着替えも中途半端なせいで白くて華奢な肩が丸出しなルクが飛び出してきた

その勢いのままに「りーですりーです助けてりーですぅーっ!?」と泣きながら駆け出していくルク。その背中をぽかん…と見送り、ヒカルさんを見上げる

「…どうする?」

「とりあえず、言われた通りにしとくか。黒岩にゃ俺から言っておく。お前は荷物とテント頼む」

うん、分かった。と頷き、自分たちのテントに戻る。クロイワはシャルロッテさんのテントと同じテントのはずだし、そこまで時間はかからないだろう

テントを固定しているワイヤーを外して、地面に刺した支柱も抜く。後は適当にまとめてインベントリに投げ込めばいい。本当はもっとちゃんとしたやり方あるんだろうけど、インベントリから取り出せばちゃんとした状態になってるんだし…別にいいよね。楽できる事は楽しても悪くはない。そのぶん他の事やる時間確保出来るわけだし

数分でテントや荷物を片付け、ぱんぱんっと手を叩いて土埃を落とす。そうこうする間に、ルクが一直線に…俺かな?俺にダッシュで駆け寄ってくる。寝起きのはずなのにクルクルロールした髪と、平均より僅かに大きいらしい胸が、ふるふると揺れる…

…ヒカルさんおっぱい星人なんだよなぁ。と思うとイラッと来るけど、…その、まぁ、あれだ。案外ロリに目覚めたのかもな。俺の事…アレだって言ってたし

「ぜぇ…はぁ…ひゅー…ひゅー…、れ、ティ…り、です…はなし…

ぜひー…」

「ああもう、落ち着いてからでいいから。はい、深呼吸ー、吸ってー、吐いてー」

「ぜひぃー…こひゅぅー…ぜひぃー…こひゅぅー…」

駄目だこりゃ

せっかくの美少女も、汗だくで白目むきかけながらぜぇぜぇいって舌を出してたら台無しだ。どんだけ体力ないんだよ。…ああ、目の下のクマが昨日より酷く…、夜は寝ればいいのに。そう言ったら、「寝てる間の監視が出来ないですよ…」とか言われたけど

「…げほ…おえ…大変な、ことに…なりました…。りぃですの…転送魔法で、つよい、ひと…だけ超特急で、帰る…帰る、ます。王都に…帰らなきゃ、駄目…だ…！仕事が大量に残っとるあの王都に帰らなきゃ、いけないのよ…！お願い頑張ってナルクトール…！ってか私の胃壁…！」

…追い詰められてんなぁ、と思いつつ回復魔法。どうせルクにはバレてるし、一応リーデスさんから頼まれてるしな、出来るだけルクには協力してやってくれって。流石に物影に隠れての治療になっちゃうけど、「ぁあ…生き返る…」と至福の表情を浮かべるナルクトールだが、直ぐに回復魔法特有の緑色の光は消えてしまう

理由は簡単、ＨＰが減ってないのだ。確かにルクは胃痛に悩まされてるんだろうけど、ＨＰが減ってないんじゃ回復のしようもない。だから、一瞬だけ微々たるもんの回復はするが、すぐに効果が無くなってしまうのだ。というか、胃痛抱えてることが「基本／デフォ

ルト」って解釈されてるんだろうなぁ

「あぁ…薄幸の美少女はとことん薄幸イベントに叩き込むのですか…。ああ、この世界はおにちくさんにも程があると思うわけですよ…」

「ぇっと…頑張れ？」

「ここで応援するとかレティまでおにちくさん！？いっそ楽にしてほし…駄目だファルガナさまなら墓の下から私を引きずり出してこき使いそうだ！」

どんな人間なんだよ、ファルガナって

色々聞いてるけど、あんまりお近づきになりたくないタイプの人間っぽいなぁ…。出来るだけリーデスさんから離れず、なんかの折で合うようなことがあってもすぐ逃げることにしよう

「――ってのほほんちゃんしている場合ではありませんでした！バカップル時空に巻き込まれてた！？んなこたぁいい！とにかく王都から大変なモノが盗まれてしまいました状態だよ！」

「はぁ？」

…基本的にルクは寝不足で頭回ってねーから言うこと変なんだよなぁ…。常にハイテンションで叫ぶからたまに何言ってんのかたまに聞き取れないことあるし

「だーかーらー！」

と、ルクが溜めを作った瞬間、背後から近付いてくる気配。振り返れば、眠そうに瞼をこするクロイワとヒカルさん

「おーい、呼んできたぜー」
「何だよ、こんな朝っぱらから…」

あ、おはよー。と手を振れば、おはよー、と軽く返してくる。そんな俺たちのリアクションに憤慨しながら叫ぶナルクトール

「ティエリアさまが魔族な方々に誘拐されちゃったんですよーっ！！しかもファルガナさまも他の子たちも気付いてねぇーっ！今すぐ王都に戻らなにゃーっ！？」

「それ、本当かっ！？」

…ティエリアって誰？と俺とヒカルさんが首を傾げるも、クロイワは、寝惚け眼から一気に緊張感に溢れた表情になってルクに掴みかかる

…ポッ、とルクの顔が紅くなった

「お、男の子にこんなに近寄ったの初めて…。な、ナルクトールちゃんは非攻略キャラなんだから勘違いしないでよね！」

「んなこと聞いてねーよ！ティエリアは無事なのかっ！？くそっ、アイツにはカミナが付いてるから大丈夫だと思ってたのに…っ！！」

「んなこと…って…私、かわいいよねぇ…？顔はかわいいはずなのになぁ…あれ、なんか泣けてきた…」

…なんか置いてけぼりだなぁ。よく分からないけど、ティエリアっていう人が危ないってことかな?で、そのティエリアさんはクロイワの知り合い、と

…口ぶりから察するに偉い人なんだろうなぁ。…この世界がゲーム世界ってことを考えると、「お姫様救出イベント」ってことかな?

「ナルクトール、獣人くん、エルフちゃん、精霊杖の子」

リーデスさんが杖を片手に歩いてくる。…なんつーか、俺もおっさんもイマイチ状況についていけてないから暢気だよなー

「転送魔法の魔法陣の準備はしておくから、早く準備しておきなさい。騎士団も纏めて一気に王都に向かうわよ。だからシャルロッテに話を――」

「分かった!すぐに準備してくる!」

言葉の途中で駆け出すクロイワ。「…最後まで聞きなさいよ」と不機嫌そうに呟くリーデスさんに苦笑い

「…本当はあの子は置いていきたいんだけどね…。あの子がいると並列思考が鈍るのよ…。だからと言って戦力を遊ばせるのは危険、ね。…多分、ファルガナが荒れてるでしょうしね…」

「…なんか、大変そうですね」

憂鬱そうに頬に手を当てるリーデスさんにそう言えば、リーデスさんは僅かに目を細め、軽い笑みを浮かべる

「それでも、馬鹿な子の方が可愛いのよ。…貴女も、その中の1人よ？」

…くしゃり、としわだらけの手が頭を撫でる

…うっかりお母さんとか呼びそうになった

35、人魔大戦―はじまり（後書き）

既に人魔大戦始まりかけてんのになんでこいつらこんなほのぼの？

いやいいけどさ…。ある意味こいつららしいけどさ…

魔王目覚めはもうちょい先です

というか、第二部全部通して「魔王の目覚め」話です

そしてついにテンプレ関係ない件

予兆はあったな、うん

36、王都（前書き）

戦争始まるよー

いきなり言われて危機感持てる人はきっと真性のグラップラー

36、王都

王都。

ただ「王都」と呼ばれる街には、名前がない。誰しも「王都」としか呼ばないので、個として区別するための名前が必要無かったらしい

詳しい事は知らないが、「女王」ファルガナの住まう街として有名だった都市に、貴族や大商人がその恩恵に預かろうと移住し続けた結果、物凄い大都市になり、政治の、そして経済の中心になった…ってことらしい

1つ1つの屋敷が大きいのに、それが幾つもある。その中でも一際巨大な白いお城とよく管理された庭園。それを囲むようにギルドや商店、民家が乱立している

だというのにファンタジーのお約束みたいなスラムや乞食の姿は無く、どこまでも大きくて綺麗な街並み、というのが俺達の抱いた印象だった

――俺達はリーデスさんの転移魔法でこの城にワープしてきたものの、ティエリアさんともファルガナさんとも面識がない以上、動くに動けない。とりあえずナルクトール、リーデスさんがファルガナさんと状況確認とかこれからの行動とかを話し合う、と言うことなので、客室に通されていた

「…おい、いい加減落ち着いたらどうだ?」

さっきからウロウロと部屋の中を歩き回っていたクロイワにヒカル

さんが声をかける。心なしか、クロイワの首に抱き付くようにふよふよ浮いてる精霊…ユルエルさんも、落ち着きないクロイワの態度にうんざり顔だ

「これが落ち着いてられるかよ…！知り合いが誘拐されたんだぜ？ちくしょう…ファルガナさんは何ですぐに動かないんだよ…！」

「…まぁ、そう言うなよ。よく分かんないけど、国がらみの問題なんでしょ？俺たちみたいな一般人には分かんない問題があるんだよ」

「だからってここでただペラペラ話し合っても意味ないだろ！？こうしてる間にもティエリアは…！」

…そんなこと俺に言われても…。でも、ティエリアさんはわざわざ王城から誘拐されていったらしいし…こう言っちゃなんだけど、わざわざ「人質」を失うような真似はしないだろうし、あんまり手荒な真似はされない…んじゃないかなぁ？多分だけど

「…ヒカルさん、こういう時の対処って？」

「…これ、秘密な？犯人から連絡を待ち、逆探知。人質は殺されたモノと仮定して強行だ。…映画やドラマと違って、人命最優先ってわけにゃいかねぇのよ」

「ティエリアに死ねっていうのか！？」

「誰もんなこたぁ言ってねぇだろ…」

呆れ口調で言うヒカルさんに、チッ、と舌打ちしてまたうろうろしだすクロイワ。「…まるで誘拐の被害者家族だな…」とかヒカルさ

んが呟くが、正しくその通りなんじゃないかなぁ？

と、その時。バンッ！と扉を蹴破って入ってくる女の子。その姿を目撃した瞬間、クロイワははっとしたように女の子に駆け寄る。…黒髪ショートカットの美少女だ。女の子は涙目で部屋を見渡し、クロイワを見つけた途端、駆け寄って抱き付いた

「ユート！ごめん！あたし…あたし…！まもれなかった…！あの娘も、約束も…！」

「っ…カミナ…。ごめん、俺の方こそ…カミナとティエリアのピンチに、側にいれなくて…」

「ユートは何も悪くない！全部、全部ボクの力不足で…」

…おいてけぼりセカンドー。抱き合って慰めあう2人にげんなり。お前さっきこんなことしてる場合じゃないって言ってたくせにぃ…。女の子とイチャイチャするのはいいのかよー

「…言うなよ」

「うぇ！？な、何がっ！？」

ぼそっと釘を刺されて慌てる俺。そんな俺をじと目で睨みながら、ヒカルさんは溜め息を吐く

「ああいうカップルは下手に突っ込むとめんどいぞ。ほっとけ」

「か、カップルじゃないよ！ぼ、ボクたちそんな関係じゃ…」

「ああ、ただの同僚だよ。…いや、戦友、かな？」

「…」

照れ臭そうに頬をかくクロイワに、女の子は嬉しそうな顔から一変、不機嫌そうな顔でクロイワを睨む。クロイワの頭上で、ころころと笑うユルエルさん

…罪作りな男だなぁ、クロイワ

「初めまして、S級相当冒険者の方ですよね？ボクは「守護者／ガーディアン」のカミナ・グレイプニルです。王神の巫女、ティエリアさまの専属護衛です。今回はボクの失態のせいでご足労かけて申し訳ありません！」

「は、はぃ…？」「あ、あぁ…」

なにそれ？的な心境ではあるものの、とりあえず頷いておく。ガーディアンかぁ、何だか久々にファンタジーだなぁって感じ。魔法とかもファンタジーなんだけど、何だか慣れてきちゃってたもんなぁ

「ティエリアは、このファルガナ大陸の創造神…「王神：ファルガナ」の言葉を聞くことが出来るスキルを持つ、この世界唯一の巫女なんだ。巫女は王神からこれから先の未来に起こるだろう災害や疫病の発生を聞き、事前に対処することを可能にするパイプ役みたいなもんでさ。ファルガナさん…この国の女王は、ティエリアを護るために自分の手元に置いてるし、専属の護衛も付けてる。で、その護衛が、この娘。名前はカミナ。二年前の大陸中の強者を集めて開かれた「大光神武術大会」の優勝者で、事実上この大陸で二番目に殴りあいの強い娘だ。ちょっと縁があって、俺も稽古をつけて貰っ

てる」

殴りあいの強い娘とか説明されてちょっと凹んだ様子のカミナ…ちゃん、かな？見た目は高校生くらいだけど、もっと若いかもしれない

自己紹介されて黙ってるわけにもいかない。俺もヒカルさんも立ち上がり、カミナ…カミナでいっか。カミナに自己紹介

「説明ありがと。俺はレティーシア。冒険者歴は半年。ＬＶは３２です。Ｓ級なんかじゃないです」

「俺は大路だ。そこのと同じく。ＬＶは３６だ」

俺達の自己紹介…特にＬＶの件を聞くと、きょとん…と目を丸くしつつ、首を傾げるカミナ

「…え？あれ？…強いと思ったんだけどなぁ？鈍ったかな？」

…むぅ。あんまりいい気分しないなぁ。そりゃあ、確かにまだあんまりＬＶは上がってないけど

「ああ、俺と同じ体質なんだ。ＬＶよりもスキルが強いってヤツ。だから、この２人も期待していい」

「そっか…、ユートと同じなら安心だね！」

途端にニパッと晴れやかな笑みを浮かべるカミナ。…なんか悔しい。もっとＬＶ上げようかな…。って、そういやＬＶあげてもステータス振りしてないんだよな…。エロイカの町にはギルド無かったし

「それで…どういう状況でどんな風に誘拐された、とかは分かったのか？」

「あ、うん。それはナルクトールさまが見てましたから…。ボクは会議室のドアにへばりついて盗み聞きしただけだから本当かどうか分からないけど、いきなりティエリアさまが寝ていた寝室の中に、大きな鎧の騎士とユカタンとかいう聞いたことない衣装の女の子が現れて、ティエリアさまを担ぎ上げてあっという間に壁の中に消えていったらしいの。しかも、城内には警備の者がたくさんいたし、すぐ隣はボクの部屋、大きな音や侵入者の気配に気付かない訳がないのに、結果を見れば気配や違和感に敏感なファルガナさますら気付かないまま誘拐されちゃって…」

悲しそうに目を伏せるカミナ。…でも、なんだろう？

何か、引っ掛かる…。転移魔法とか使った、ってならいきなり現れてもおかしくないだろうし、寝ているところを襲われたならティエリアさんが抵抗出来なかったってのも分かる。なら何が――あ、

「…なんでクルクルは誘拐犯が魔族だって断定出来たんだ？」

「そう、だよね。鎧の騎士に女の子でしょ？転移魔法を使った、とか、そういう魔法使いだった、とか、あるいはティエリアさんの友人だった、とか…」

「それは無いわ」

そんな言葉と共に開かれる扉。しかめっ面で立っていたのは、リーデスさん。その手には、1枚の羊皮紙

「魔族に拐われた、とナルクトールが理解できた理由は単純。これを読み上げただけよ」

渡される羊皮紙。そこに書かれた言葉は

――1対1の決闘を求める

――王竜の祠にて待つ

――キング・オブ・リトマス

――人質の安全は保証する。正々堂々たる王の振る舞いを願う

と、書かれていた

「先に人質なんて取っておいて、正々堂々も糞もないわ…ねっと！」

「ぐぁっ！？」

羊皮紙を見た瞬間、駆け出そうとしたクロイワの足に杖を引っ掻けて転ばせるリーデスさん。鼻から床に突っ込んだクロイワの上に無造作に座り込み、

「落ち着きなさい。あなた1人で飛び出して何が出来るの？今、ファルガナが部隊を編成しているわ。人数が揃ってから一気に殴り込むわよ」

「うぅ…だ、だからってこんな…！」

リーデスさんのお尻の下で鼻を押さえて呻くクロイワ。やれやれ、とこっそり溜め息を吐く

「そんなっ!?ティエリアさまがどうなってもいいのですか!?相手は1対1を望んでいるんですよ!?」

「だからこそ、よ。人質の安全が保証されてるなら一気に叩いた方がいいわ。最悪ティエリアが殺されたとしても、次代の巫女候補は既に引き継ぎが出来る段階だから大丈夫よ。…こう言っては何だけど、ティエリアはこの子に会ってから色ボケしていたもの。昔のティエリアなら寝るときに結界くらい張っていたでしょう?自業自得。フォローはしたくても出来ないわ」

「「なっ…!?」」

リーデスさんの言葉に絶句するクロイワ、カミナ。クロイワは何か言おうとしたが、口を開いた瞬間に口に杖を突っ込まれる

「ファルガナの養女に…巫女になった時点であの娘に自由はないのよ。命すらも国に、この世界に捧げなければならないの。…貴方のせいよ、黒岩　優人。貴方がティエリアに恋を教えたせいで、あの娘はこうして自分の首を絞めてるの」

「…」

押し黙るクロイワ。そして、オロオロと落ち着きなく視線を泳がせるカミナ

…何か、何も言えないな。正直、流されすぎてるなぁ、俺達。せめて状況把握だけはキチンとしておかないとあっという間にピンチになりそうだ

「…ヒカルさん」

「…そうだな。なぁ、魔女さんよ。わりぃが状況が掴めねぇ。説明してもらっていいか？」

「…ええ、構わないわ」

クロイワの背中から立ち上がり、手招きするリーデスさん。クロイワは身体こそ起こすものの、うなだれたまま動かない。それに、一層オロオロしながらクロイワに寄り添うカミナ

…他人の心配出来るほど、俺にも余裕はないか。全く状況が掴めてない訳だし。多分戦闘に出されるんだろうけど…。うーん、準備不足だな

リーデスさんの背中を追い、クロイワとカミナを残して部屋を出る。リーデスさんは消音結界を張ると、廊下の真ん中で振り返る

「…あなたたち、出来ればあの子…黒岩くんを押さえておいて。一応釘刺したからしばらくはもつと思うけど、テンション上がったら多分、突っ込むわ。「主人公補正」持ちを1人も欠けさせたくない現状、あの子がいなくなると不味いわ」

「ちょ、ちょっとタンマです。正直、何が何やら…。俺達、何すれば良いんですか？状況もなんとなくにしか分かってなくて…」

そこに更にクロイワを押さえろとか言われても分かんないっつうか…

リーデスさんはそれもそうね、と頷き、少し顎に指先を当てて考え込む

しばらくして顔を上げると、そこにはうっすらと嫌な笑みを浮かべたリーデスさん

「…まずはファルガナに会いましょう。ファルガナの口から直接聞いた方が、単純で分かりやすいわ」

と、再び手招きしながら歩き出す

「ま、安心なさい。あなた達はあたしのって説明してあるから、無用なちょっかいの心配はしなくていいわ」

…そう言われると、逆に不安になるんですが

…こっそりと、溜め息を吐くおっさんと俺を、くすくすと笑うリーデスさん

36、王都（後書き）

新キャラ多すぎ

っつうか一度に動かすキャラが多すぎてヒカルさんもレティーシアも空気。

あまあまさせたいなぁ

でも戦場のラブロマンスとか好き

今回のテンプレ

↓〇〇なら大丈夫だよね！

37、ファルガナ女王（前書き）

お知らせ

須和光輝さまから★ちゃんのイラスト頂きました！

★ちゃん…なんで、なんであんたオカマやのん…？

とホロリとさせるイラストです（笑）

37、ファルガナ女王

そのままリーデスさんに案内され、やたらと大きな城の中を歩く。なんとかと煙は高いところが好きなのか、ファルガナ女王さまとやらは城の最上階に自室を持っているらしい

話に聞くだけだと性格悪いみたいだしなぁ。それに中世の為政者ってマイナスイメージしかないんだよなぁ…。偏見だって分かってはいるんだけど…

「とりあえず黙っておきなさい。下手に喋ると取り込まれかねないわよ」

「はぁ…」

どんな化け物だよ

…っつうか不味いよなぁ。なんだかんだでリーデスさんに頼りっぱなしだよ…。こんなんじゃ強くなるなんて夢のまた夢だよなぁ…。かといって権力者相手に下手な態度取るのも…。あれ?ナルクトールが俺のことエルフって知ってたのはともかく、ファルガナ女王は俺がエルフって知ってるのか?…あれ?もしかしてピンチ?…いやいやリーデスさんがいれば…でもリーデスさんに頼るのは…!

などと苦悩している内に、部屋の前に着く。扉の作りを見ただけで他の扉とは一線を隔しているのが分かる。扉自体に妙に豪華なレリーフが彫られているのだ。まさしく「最高権力者」の自室、というか…

「…なんで自室なんだ？こういうときゃ謁見の間みてぇの使うもんじゃねぇの？」

「面倒なのよ。それに、女王でないあの娘と接しておくのはコネクション的にお得よ？」

言いながら扉をノックしようとリーデスさんが腕を上げた瞬間、扉が開く。リーデスさんは呆れ顔で、そのまま室内に。俺達もそれを追う

リーデスさんは室内に入ると、部屋のベッドの上に腰掛け、ぼんやりと天井を見つめる美女へと憎まれ口を叩く

「このあたしをパシらせるとはいい度胸ね。それと、準備は終わったの？またナルクトールやディーに押し付けたんじゃないでしょうね」

その言葉に、今はじめて気が付いたかのようにこちらに視線を向けた金髪の美女は気だるげに笑った

「勝手にやったんでしょ、リーデスもあの娘たちも。やりたいならやらせりゃいーじゃない。あの娘たちも頑張るわよねぇ…。で、そっちのがお姫様とそのナイトくんかしら？」

チラッ、と視線だけ向けてくる美女。あわてて頭を下げる

「あっ、ぇっと…レティーシアです。よろしくお願いします」

「大路です。よろしくお願いいたします」

「へぇ…。トリップ主って聞いてたから、優人みたいにタメ口きいてくると思ってたわ。感心感心」

頭を下げたまま視線だけ美女に向けると、美女はにやっと笑い――

「ねぇ、2人ともリーデスじゃなくて私様のにならない？素直に聞いてくれたら手荒な真似せずに済みそうなんけどにゃあん？」

すぅ…と鞘に収まったままの長剣で、俺の顎を持ち上げる。…なにこの状況？思考が追い付かなくてじっと美女を見つめていたら、「チッ」と小さく舌打ちする美女

「冗談よ、冗談。だからリーデス、こんなところで魔法使うのやめて。ナイトくんも殺気漏れてるわよ」

すぅ…と剣が外される。同時に、ヒカルさんが俺と美女の間に割って入る

リーデスさんはリーデスさんで、ふんっ、と鼻を鳴らし、杖でポンポン、と自分の肩を叩きながら非難の視線で美女を睨む

「残念ね。この娘の回復魔法から発想を得た低燃費かつ高威力な呪いが「最強」に効果あるか試してみたかったのだけど」

「え、このちみっこい娘が例の回復魔法の使い手なの？」

目を丸くしながら、流れるような動きでするりとヒカルさんを避けて近寄ってきて、俺の頬に手を当てる美女。ヒカルさんが驚愕しながらどうにも出来ずに顔をしかめ、美女は綺麗過ぎて人間味の薄い貌に、うっすらと笑みが浮かべる

「へぇ…欲しいなぁ。欲しいにゃ～ん？リーデスぅ、ナルクトールと交換しない？今ならディーもおまけに付けちゃうわよ？」

「ツンデレも大概にしなさい。これ以上無理させたくないならちゃんと休みをあげなさい」

「そんなんじゃないわよ。ただ、あの娘たちより役に立ちそうだから欲しいだけ」

俺から離れながらそっぽ向く美女。…もう、何が何やら。下手な発言するのも恐いけど、このまま流されるのも余計に不味いような気もするし…

「…あんたが女王なんですよね？出来れば状況の説明をしてほしいのですが。クルクル…もとい、ナルクトールさんに連れてこられたっというだけで、どんな非常事態なのかも理解出来ていないのですが」

うわっ、またヒカルさんに持ってかれた…。もっと早く、自分から動けるようにしないと駄目だな。それはともかく、ヒカルさんの言葉に同意するようにこくこくと頷けば、美女は「んー？」と首を傾げた

「リーデスからも聞いてないの？…ったく面倒くさいわねぇ」

ポリポリと頬を掻き、ベッドの上に無造作に放置された地図を引き寄せる。…どうやらこの街を中心にした、それほど大きくない詳細地図のようだ

「ティエリアに付いては聞いてるわね？」

こくり、と頷く俺達に美女はよし、と頷く

「じゃあ、私様…クイーン・オブ・ファルガナについては？」

首を振る俺達に、若干不機嫌になってリーデスさんを睨む美女――ファルガナ女王。リーデスさんは素知らぬ顔でベッドに腰掛け、当然のようにワインを開ける。…え、いいの？それ？

「ちょっと、勝手に開けないでよ」

「別にいいでしょ？魔力切れなのよあたし。飲み食いして少しでも回復させなきゃ」

「…高いのに。…いいけどね！別に！ディーに新しいの買ってこさせるから！」

頬を膨らませるファルガナ女王。けらけらと笑うリーデスさん。…母娘っぽい関係なんだろうか。結構年離れてるように見えるけど…

「こほんっ、私様は８００年程女王やってる「最強系傍若無人転生オリ主」よ。生まれてから私様の価値観により「悪」たる者をとことんぶっ飛ばしてきた結果、いつの間にか女王になってた、ってだけだけどね。でもって」

へ？８０…？なんかの冗談？目を丸くする俺達。リーデスさんは呆れ顔でファルガナ女王を見て、

「ファルガナ、説明下手すぎ」

どすっ、とリーデスさんの言葉の槍がファルガナ女王に突き刺さる。
ファルガナ女王はきっ！とリーデスさんを睨み付けると

「だったらあんたがやりなさいよ！私様は剣を振るのが仕事よ！チュートリアルはあんたみたいな説明キャラがやるものでしょう！？」

「仕方ない娘ね…。少しくらい勉強なさい。いつか困るわよ」

リーデスさんがワインを片手に移動してきて、まだぶつぶつ言ってるファルガナさんの頭をぽんぽん、と叩く

「1番強くて1番偉い。お馬鹿だけど正義感強くて、周りから担ぎ上げられたら嫌とは言えないお人好しが、なんだかんだで女王として祭り上げられた。これで十分よ」

「全然違うわ！私様の美しくかつ可憐で素晴らしい偉業をなんか妙にほんわか纏めるな！」

「偉業に「美しい」やら「可憐」やら付けちゃうアホの娘でもあるわ」

「あんた馬鹿にしてるの！？ぶっ飛ばすわよ！？」

「お腹ピーになりたくなかったら黙ってなさい」

なにそれこわい

さすがにファルガナ女王もお腹ピーになるのは嫌だったのか、ぅ～とか唸りながら押し黙る

「そして、ティエリアを誘拐したキング・オブ・リトマス。数年前にいきなり現れて、魔界の魔族、あるいは知性あるモンスターを統一し、ファルガナ大陸の掌握を狙う『魔王』よ」

「「魔王!?」」

「なに驚いているのよ。あたしたち「主人公」の最終目標でしょう？」

「え、あ、いや…その、確かにその通りではあるんですけど…」

なんつうか、いきなり過ぎて…ＬＶなんかまだ３０代だぞ?普通、こういうのってゲームとかでも充分に育ってから…いや、俺やおっさんが「主人公」だけど、主人公ではない、って考えればアリなのか?リーデスさんとかメチャクチャ強いし…

「まぁ、魔王討伐は諦めて後方にいなさい。基本的にエルフちゃんはと獣人くんは後方で怪我人の手当てとナルクトールの護衛をしていてくれれば充分だから」

「「…はい」」

仕方ない、よな。一応無難にＬＶ上げしてきたつもりだったけど…巡り合わせが悪かったのか、単純に俺達の選択が間違ってたのか。後者じゃないといいんだけど

「ちょっとぉ…勝手に決めないでよね。あくまで総大将は私様なんだから」

「はいはい。分かった分かった。それじゃあ、王竜の祠についてね」

と、リーデスさんが指差したのは、地図。正確には、地図上の上部。王都から…この地図の対比でえーっと…５ｋｍ程離れた位置にかかれた、山の真ん中

「『魔神』と呼ばれるモンスター…『グリーズ』に対抗出来る唯一のモンスター、『神竜』の眠るダンジョンと言われているわ。…正直、このモンスターや『魔神：グリーズ』は『ファイナルクエスト？―淫獄大陸、魔神復活―』で追加された設定という話だから、あたしも詳しくないのよ。『？』をプレイしたことのある転生者は既に亡くなってるしね」

「はぁ…。私様はちょっと聞いたことあるわよ。このダンジョンの中では武器攻撃が一切無効化されるって話。なんでも『神竜』は心の強い者にしか従わないらしくて、ダンジョンの中には精神に作用する１０の試練が用意されてるとか。魔法も使えなくなるそうよ。もっとも、『魔神』とやらは私様が生まれて８００年以上、一度も見たことないし、そのせいか『神竜』とやらも一番最近の目撃例で１５００年前みたいね。もしかしたら神竜はもういないかもしれないわ。とっくに代替わりしているでしょうしね」

ファルガナ女王がリーデスさんの説明に補足を入れる。…ようやくすると、そのダンジョンの中では出来ても殴りあいだけってことか？

「…なら俺は入れないです。基本的に貧弱なので」

「…俺は入れるっすけど、止めとくっす。…あんま精神強いとは思えないんで」

自嘲気味に笑うヒカルさん。…そっと、その手を握る。大丈夫、これから、これからだもん。俺も、ヒカルさんも

「……はぁ。やんなるわね、マジで。あー、誰でもいいからぶっ飛ばしたい」

ファルガナ女王はいきなり不機嫌になって、ギロっと俺達を睨む。な、なんだ?なんか失礼なこと言ったか?

「安心しなさい。エルフちゃんと獣人くんにダンジョン内に入れ、なんて言わないもの。…続けるわよ?

と、ここまで把握してもらったら分かったと思うけど、結構あたしたちに条件が厳しいのよ。

だからこそ、あたしたちが立てた作戦は簡単よ。

敵の数が5人、ということはナルクトールが見て確認しているの。

だから、キング・オブ・リトマス以外の魔界四天王をディー、ショーゼン、あたし、そしてあの精霊杖の子と、もう1人の主人公で足止めするわ。

その隙に最も足の速いファルガナが単機でダンジョン内奥深くにいるキング・オブ・リトマスからティエリアを奪い返す

ティエリアを救出し、合流した後は、ファルガナ以外はあたしの転送魔法で撤退、ファルガナが5人相手に無双する。基本的にファルガナ頼りの作戦だけど、これが一番成功率高いわ

けど、万が一に備えて相手の行動の把握、及び奇襲に備えるために、

ナルクトールを後方に配置して監視させる予定なのよ。通信用の魔法具の効果範囲は５００m程しかないから、ナルクトールの護衛をあなたたちに頼みたい。いいかしら？」

「…はい。分かりました」

「ああ。問題ない」

ようするに俺とヒカルさんの仕事は非戦闘員のお守りだ。ある意味ホッとしたような、残念のような…

「…まぁ、私様１人でもいいんだけどね。邪魔な子がいると全力出せないし…。優人と伸一には私様が説明してくるから、リーデスは寝て魔力回復させておきなさい。作戦開始は５時間後だけど、出発まで３時間切ってるわよ」

「分かってるわよ」

むっとしたようにリーデスさんはファルガナ女王を睨むと、ワインを片手に立ち上がる。慌ててそれを追う俺達

「ばいばーい」と手を振るファルガナ女王に頭を下げてから、部屋から出る。少し前を歩いていたリーデスさんが、振り返って言う

「ね？あの娘かわいいでしょ？」

「…あ、はは」

「…ノーコメント、だな」

なんとも言えない俺達だった

37、ファルガナ女王（後書き）

ちょっと諸事情で更新遅れ気味です

申し訳ない

今回のテンプレ

↓なんやかんやで1対1が前提のバトル

次回！遂に再会デスヨ！

38、再会（前書き）

お知らせ

わたさんが「また」やってくれたよ！（爆）

投稿板２

に乗っけておきます

何気におねーさん初イラストｗｗｗ

38、再会

リーデスさんと別れて、割り当てられた部屋に向かう。何で1部屋しか貸して貰えなかったのかちょっと不思議がりながら廊下を歩いていると、どこか見覚えのある背中を見つけた

黒く、長いコートに白髪の混じった髪は彼――彼女？のイメージには重ならないけど、頼りがいのある広い背中と、僅かに香る火薬の匂い――ヒカルさんと顔を見合わせ、なんでこんなところに？と疑問を覚えつつ近付く

「あんたのせいよ！あんたが！あんたがもっと早く助けに来ないから！」

「これでも精一杯頑張ったんだけどね…。誉めろ、とは言わないけれど、お礼の1つくらいあってもいいんじゃない？」

「うるさい！男の…オカマのくせに生意気なのよ！あんたに分かるの！？いきなり変な薬飲まされて注射されてこんな一気に痩せて！恐いのよ馬鹿！オカマならフォローくらいしなさいよ！バカじゃないの馬鹿！」

「はいはい、分かったから着替えましょうね…」

「何よその態度！触んないでよ！あんたなんかが触っていい身体じゃないんだから！公爵家次女よ！？偉いんだから！」

どうやら女の子と言い争いしているせいで、俺達には気付いていないみたいだ。…にしても、あの女の子随分変な格好してるな？

なんていうか…凄い豪華なドレスなんだけど、サイズが全然合ってないんだ。ブカブカのドレスを無理矢理肩に引っ掻けて着てるから、歩く度に脱げそうになって慌てて押さえている。さらっさらの綺麗な青い髪と、ニキビ…じゃないな、ソバカスの残る顔立ち。華美なドレスには合ってないけど、素朴で可愛らしい顔立ちの可愛らしい女の子だ。肌も髪も凄い綺麗。もっとも、怒りにつり上がる目元や、全く余裕のないズカズカとした歩き方がその魅力を殺してしまっている

ともあれ、声をかけてみるか。足音を意識的に鳴らして近寄るも、振り返る様子は無い。それをちょっと歯痒く思いながら、恐る恐る声をかける

「ホシちゃん？」

「え…？」

くるり、と振り向く大柄な男性。ぽかん…と半開きになっていた口元に、呆けたような目に、徐々に驚きの色が広がる

「レティちゃん！？ヒカルくんも！」

「やっぱホシちゃんか！久しぶりー！」

お互いの手を取って再会を喜び合う。自然と溢れる満面の笑みをホシちゃんに向ければ、ホシちゃんの口にも控えめな笑みが浮かぶ

「よぅ、久しぶりだな」

ヒカルさんも僅かに笑みを浮かべながら手を上げる。ホシちゃんの笑みが、実に嬉しそうなものへと変わる

「相変わらずイケメンと美少女ねぇ。目の保養だわー。懐かしいわねぇ」

…見た目は変わったのに、変わってないなぁと苦笑いする俺達。ホシちゃんも楽しそうに「変わってるけど変わってないわねー」と笑う

「半年近く会ってなかったかしら？なんだかちょっと綺麗になったんじゃない？」

「え、あ、そ、そんなことないって！ホシちゃんはなんか変わったなー…。なんか渋くなった？」

髭も手入れされてないし、髪の毛もボサボサだし…。なんか、いつも「女の子」してたホシちゃんらしくないというか…

…言ってから、しまった。と思う。変わった、と言った途端、楽しそうに笑っていたホシちゃんの笑顔に暗い影が差す。瞳の奥には…深い、悲しみ？一瞬だけ、笑うホシちゃんの表情に泣き顔が混じったような違和感

「――そう、かしら？…うん、そうかもしれないわね…。変わっちゃった…かもしれないわ」

それでも…遠い目で、悲しそうに笑うホシちゃん。――なんとなく、察した。いつもホシちゃんの隣にいたアベがいなくて、ホシちゃんが変わってて…。確証はないけど、多分、「そういう」ことなんだろう

「…ホシちゃん、大丈夫？」

そう聞けば、ホシちゃんは少しだけ驚いた顔で、優しく笑う。大きな手のひらが、頭に乗せられた

「…女の子の成長は早いわねー。別れたときは子供…というより男の子みたいだったのに、他人を気遣えるレディになってるなんて星ちゃんびっくり」

「…茶化さないでよ」

むくれながら不機嫌な声を作る。…ホシちゃんもヒカルさんと似たタイプだからなぁ…抱え込まないといいんだけど…

「…ちょっとオカマ！私を無視してそんな小娘に構うなんて良い度胸ね！」

後ろでポカーンと目を丸くして俺達のやり取りを見ていた女の子が金切り声を上げ――ん？

…なんだ？これ。女の子の近くにいると…なんか、イライラする？僅かに香る甘いような…それでいてこっちの神経を逆撫でするような奇妙な臭い。女の子の近くにいるだけで、なんだか胸がムカムカする

首を傾げる俺の様子に気付いたのか、ホシちゃんは困ったように頬をかきながら、

「この娘はケイニー。２m以内に近寄っちゃ駄目よ、この娘も転生

者で、チートは嗅覚から干渉する催淫、催眠効果よ。男性はこの娘に恋愛感情を、女性はこの娘に嫉妬心や劣等感を感じるようになってるそうよ」

マスク一枚付けるだけでほとんど効かなくなるし、精神力次第でわりと抵抗出来るけど――と繋げるホシちゃんを放置して、俺はヒカルさんと女の子…ケイニーの間に入り、無理矢理距離を作る

「ヒカルさんは離れて！危ない！」

「いくらなんでもお前失礼過ぎんだろ…」

頭を抱えるヒカルさん。か、考えるより早く体ってか口が動いてたんだから仕方ないじゃん！いやだってアレじゃん！？嗅覚から干渉してくるとか防ぎようないじゃん！洗脳じゃないからディスペルが効くかも分からないし！

手のひら返したような俺の態度に、女の子は「うっ…」と目に涙を溜めて唸ると、ぷるぷる震えながらじとっとした目で俺を睨む。…な、なんかすげぇ罪悪感！罪悪感が凄いことに！

「い、いいわよ…別に…、私公爵令嬢だもの…。ひ、人の男になんか興味ないもの…奪ったりしないわよ…！勝手に寄ってくるのよ…！そ、そりゃ最初は調子に乗ってたけど…ひ、人の旦那さんに色目使ったことなんかないもん！好きで太った訳でもモテたりした訳じゃないもん！ストレスよ！ストレス太りよ！？なんか文句あるの！？」

「な、ないです…。あの、ごめんね？だから泣かないでくれよ、な？」

必死で頭を下げる。…正直胸の内にはイライラッとした感情がないことはないんだけど、泣いてる女の子を相手に怒りをぶつけるってのも変な話だし…

「な、泣いてないわよ！触らないでよ！近寄るんじゃないわよ！私のパパ偉いんだからね！ドタコンだけど！実の娘に性的な視線向けてるけど！それが原因で家庭崩壊したけど！」

「はいはい、分かったから顔拭きましょうねー」

「こ、子供扱いしな…むぎっ…やめっ！変態オカマ！オカマオカマオカマっ！！触んな顔面凶器！」

どこからともなく取り出した手拭いで丁寧に顔を拭かれるケイニー。その姿になんとなくほんわかしつつ、沸いた疑問をそのままぶつける

「ホシちゃんには効かないんだね」

「身体は男でも心は女よ。女の子相手に恋愛感情なんか抱かないわ」

キリッとした表情で胸を張るホシちゃん。俺とヒカルさんは苦笑い。…あんまり気落ちした様子が無いのは良いこと…なのかな？空元気って可能性もあるけど…。うーん、しばらく一緒にいたほうがいいのかな？

「お前なぁ…。いや、元気そうで安心したわ。相変わらずオカマなとこは残念だが」

「骨の髄までオカマよ！ヒカルくんもオカマってみる？1度堕ちる

とあっという間よん？」

「はっはっはっ。断固断る」

朗らかに会話するヒカルさんとホシちゃん。反対に、ケイニーはなんだか落ち込んだっぽい。見るからに肩を落として、沈んだ空気を醸し出す

「…助けに来てくれた時は、あんなにカッコよかったのに…。なんでオカマなのよぉ…」

…聞かなかったことにしとくか。幸いホシちゃんはヒカルさんとの会話に夢中で聞こえなかったみたいだし

「ぇっと…俺、レティーシア。同い年くらいだし、仲良くしてくれ。レティって呼んでくれると嬉しい」

言いながら右手を差し出す。ケイニーは信じらんないモノを見るような目で俺を見て――キッ！と俺を睨んだ

「だ、騙されないんだから！針でも隠し持ってるんでしょ！？それともパパの権力目当て！？そ、それとも苛めるの！？誰がお前なんかと友達になるかバーカっ！ってやるんでしょ！？その手はもう飽き飽きよ！女なんか信じないんだから！」

と言い捨て、ドレスがずり落ちるのも構わず走り去ってしまう。…呆然とその背中を見送る俺。…あ、転んだ。泣いた…。睨まれた。また走り出した…

「…めんどくさい子だけど、出来るだけ構ってあげて？レティちゃ

んはあんまりあの子に嫌悪感抱いてないみたいだし…」

「あー…。うん。分かった。ホシちゃんも大変だね…」

掴まれる事の無かった右手で空気をにぎにぎ。なんだろ…なんか、凄い恥ずかしい。とりあえずヒカルさんの手を握っておく

「…あら」

「え、なに？」

「どうかしたのか？」

驚いたように目を見開くホシちゃん。その視線の先には…しっかりと繋がれた俺達の手？…驚きに見開かれていた目が、徐々に優しい色を帯びる

「…アナタたちは、離しちゃ駄目よ？」

――なんとも言えない、実感のこもった言葉。それが、胸に突き刺さる。ホシちゃんに対して少しだけ申し訳無いような、ありがたいような…そんな複雑な感情。だからかなんとも言えず、ただ頷くだけに止める

「…おい」

ヒカルさんが、眉間にシワを寄せてホシちゃんに呼び掛ける。ホシちゃんが首を傾げる中、ヒカルさんは照れ臭いのか、そっぽを向いてぼそぼそと喋る

「今回の…なんとか姫？の救出終わったら、飲みに行くぞ。そのシケた面、ちったぁマシにしてやる」

「やだ…口説かれてる…」

「ちげぇよアホ！」

ぽっと頬を染めるホシちゃんに、ヒカルさんが顔を真っ赤にして怒鳴る。…ちょっと羨ましい。なんて思った自分が悔しい。ヒカルさん、あんま俺に酒飲ませてくんないんだよなぁ…

なんとなく話題に混ざれないのが悔しくて、ケイニーが走り去っていった方向を苦笑気味に見ながら、ホシちゃんに言う

「にしてもホシちゃんも大変だねぇ？ケイニー、気難しいみたいだし…。面倒見るの大変でしょ？」

茶化すような笑みを浮かべながら言った言葉。――けれどホシちゃんは…

「…大丈夫よ。あたしはここまでだもの。…あの子にだけ構ってたりしたら――強くなんか、なれない」

――暗い、炎を宿した瞳に、背筋が総毛立つ。変わってない、なんてことは無かった

…変わり、過ぎだ

「ホシちゃ」「伸一どのお！なんでケイニーどのを放っておくでござ…あれ？取り込み中でござるか？」

天井からぶら下がる狐耳の生えた黒装束の女の子に出鼻を挫かれ押し黙る。黒装束…っていうか忍者コスプレ？の女の子は逆立ち状態のまま、妙な空気の流れる場に首を傾げつつも、

「おぉ！こちらは冒険者の方でござるな？拙者はディー！よろしくでござる！それはそうと伸一どの！ケイニーどののフォロー頼むでござる！拙者はミリルゥトゥを地下から引っ張り出さねばならぬ故に！しからばごめん！」

そう言うなり、しゅぽっ！と奇妙な効果音を残して消え去る忍者さん…ディーさん

「…はぁ。じゃ、そういうことだから。また後で会いましょ？」

パチン、とウィンクして去っていくホシちゃん。その表情は、さっきの暗い焔が嘘だったみたいに明るくて――だからこそ、余計に痛々しかった

「…大丈夫、かな？」

「…分からん。出来る限り、やってやれることやるしかねぇ、な」

ゆっくりと廊下の向こうに消えていく、ホシちゃんの背中

…遠くなる頼りがいのある背中が、酷く脆そうに見えた

38、再会（後書き）

ケイニー・フレッツェル

ｗｔ　８７ｋｇ↓４３ｋｇ

ミリルゥトゥが（怪しい薬で）一晩でやってくれました！（爆）

というわけで「愛されギアス」の俺的解釈

視覚から相手の脳神経にアクセスし、一度だけどんな命令で書き込むことができるのが「絶対遵守」

嗅覚から相手の脳神経にアクセスして、相手の脳に「この異性はとても魅力的だ」と刻み込むのが「愛されギアス」

他のギアスは知らん

マオのギアスは聴覚の「受信型」、マリアンヌは視覚「送信型」とかならまだ分かる

…「速さ」とか「力」とか「未来線を読む」とか分からん。無理

とりあえずこの作品の「ギアス」はこんなもんで

でも異性に魅力的に移るってことは＝同性からは…ってことでケイニーは同性からはハブられてたり

今回のテンプレ

↓復讐者

39、王竜の祠へ（前書き）

【魔王誕生！】主人公レースについて語るスレ　７　【運営詐欺】

１：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：２７　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

■現在開催中の主人公レースについて語るスレです

■前スレ

【厨二乙】主人公レースについて語るスレ【死にすぎ（笑）】

【マリアージュたんが】主人公レースについて語るスレ　２　【改名した件】

【アレクさん！】主人公レースについて語るスレ　３【らめぇえええええ！】

【イチャイチャカップル】主人公レースについて語るスレ　４　【爆発しろ】

【ゼウ主さんが】主人公レースについて語るスレ　５【アレクってらっしゃる】

【みんなの頭が】主人公レースについて語るスレ　６【ナルクってる】

■次スレは＜９８０がお願いします

■関連スレ

【あんな可愛い娘が】男の娘たんを愛でるスレ【女の子のわけがない】

【真剣討論】ゼウス→魔女さまの交換ってどうよ?８【オリュンポスオワタ】

【特撮ヒーロー】ヒーロー魔改造計画ラボ　３　【秘密結社】

【不器用過ぎて】ツンデレ女王【生きるのが辛い】

【その目】このスレはぼっちさまに監視されています４【誰の目】

【砂糖過多】恋人たちを生暖かく見守るスレ【だがそれがいい】

【鬼畜ロリ】ちびっこを愛でるスレ　２【救済ルート】

【マッチョ祭り】筋肉サイコー！【マッスルエクササイズ】

【備考】

・名前出しは厳禁
・特定の神様をディスるの禁止
・運営と混沌に手出し禁止
・イチャイチャカップルには触れないこと。石化注意
・死んだ主人公は話題に上げないこと。ぼっち雷神にピチュられます

魔女さまは俺のママ

２：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：２８　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

＜１乙
イチャイチャカップルを一時間スネークする権利をやろう

あと魔女さま？俺に膝枕してるよ

３：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：２８　ＩＤ：ｃｈ４１７ｔｐ８２

＜１乙
アフロさんにファックされる権利をやろう

あと魔女さま？俺のためにご飯作ってるよ

４：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：２８　ＩＤ：ｇａ１６ｃｔｍ０３２

＜１乙
オカマさんを恋人にする権利をやろう

あと魔女さま？俺に肩たたきされてるよ

５：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：２９　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

＜２－４
罰ゲームじゃねぇか

魔女さま人気過ぎワロタ
お前ら自分の種族思い出せｗｗｗ

６：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：２９　ＩＤ：ｎｅｅｔ３６５ｔｑｅ

＜１乙
ゼウ主を踏み潰す権利をくれてやる

あと魔女さまはハゲ竜の嫁

７：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：２９　ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４

＜１乙
メダパニさんに膝枕する権利をやろう

＜６
お前の勝ちだ

８：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３０　ＩＤ：ｇａｅｌ４１３ｑｘ

＜１乙
鬼畜ローリーちゃんに殺される権利をやろう

＜６

ＩＤがニート
でもお前良い奴

９：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３０　ＩＤ：Ｃｕｔｙ１４３Ｇｑ

お前ら魔女さまに食い付きすぎだろｗｗｗ

＜１乙
不器用女王に踏まれる権利をやろう

１０：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３０　ＩＤ：ｇａ１６ｃｔｍ０３２

＜９
むしろ踏みたい

１１：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３０　ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４

＜１０
通報

１２：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３０　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

＜１０
通報

１３：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３０　ＩＤ：ａ１Ａｅ７４ｇｆ

＜１０
通報

１４：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３０　ＩＤ：Ｂｇｂ４６ｔｗｘ

＜１０
同士。あの偉そうな態度と傲慢な性格へし折って鳴かせたい
肉付きいいし抱いたら気持ち良さそうだよな

あと魔女さまに踏まれたい

１５：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３１　ＩＤ：ｅｂｖ５ｋＧｔｙ

＜１４
随分とアレクってらっしゃる

でも一番床上手なのは商人さん！

１６：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３１　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

＜１５
調教済みの鬼畜ローリーと比べるのか…？

あと肉付きの話題で女ゼウ主さんが話題が出てない件

１７：ＨＥＲＯ：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３１
　ＩＤ：ｈｅＨｅｒｏ１４ｘ

＜１５
頑張ってくれそうなのはイチャイチャカップル♀
経験豊富なのは商人さん
長く使えそうなのは鬼畜ローリー

でも一番気持ちいいのは触手さん

＜１６
女ゼウ主さんは別枠

１８：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３１　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

＜１４－１７
別スレでやれ。

っつかコテハンｗｗｗ
せめてそこはアフロさんを押せ。お前のだろ

ところでメダパニさんが今日もナルクってらっしゃるようで

１９：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３２　ＩＤ：ＧＡａｔｇ７ｇｑｕｊ４

＜１８
フラグ立ったな

２０：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３２　ＩＤ：ｔｏｇ６Ｇｇ４ｐｔ

＜１９
何フラグ？
新婚さんとかイチャカプみたいな？
相手誰よ

２１：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３３　ＩＤ：ＧＡａｔｇ７ｇｑｕｊ４

＜２０
死亡フラグ

２２：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３３　ＩＤ：Ｃｕｔｙ１４３Ｇｑ

！？

２３：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３３　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

！？

２４：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

x／xxx／xx　（月）　００：３４　ＩＤ：ｃｈ４１７ｔｐ８２
！？

２５：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
x／xxx／xx　（月）　００：３４　ＩＤ：ｎｅｅｔ３６５ｔ
ｑｅ

＜２１
ｋｗｓｋ

２６：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
x／xxx／xx　（月）　００：３４　ＩＤ：ＧＡａｔｇ７ｇｑ
ｕｊ４

＜１８
こいつ死神

２７：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
x／xxx／xx　（月）　００：３４　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

＜２６
ちょｗｗｗバラすなしｗｗｗ
あと俺見てるからって死亡率あがるわけじゃねーしｗｗｗ

２８：ＨＥＲＯ：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３４
　ＩＤ：ｈｅＨｅｒｏ１４ｘ

＜２７

あーあ…

２９：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３４　ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４

＜２７

あーぁ…

３０：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３５　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

＜２７

あーぁ…

３１：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３５　ＩＤ：ａ１Ａｅ７４ｇｆ

＜２７

あーぁ…

３２：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３５　ＩＤ：Ｂｇｂ４６ｔｗｘ

＜２７

あーぁ…

３３：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３５　ＩＤ：ｅｂｖ５ｋＧｔｙ

＜２７

あーぁ…
よくも俺のメダパニさんを…

３４：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３６　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

＜２７
あーぁ…

３５：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３６　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

な、なんだよぅ…

３６：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３７　ＩＤ：ｒｖＩＮ４１ｅｋ９３

＜１６
女ゼウ主さん痩せたよ

＜２６－３４
＜１と＜３５が同じ人
このスレで話題に出てる人みんなオワタ

３７：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３８　ＩＤ：ｎｅｅｔ３６５ｔｑｅ

いやぁあああああああ

３８：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３８　ＩＤ：ＧＡａｔｇ７ｇｑｕｊ４

らめぇえええええええ

３９：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３８　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

いぐぅぅぅぅうううう

４０：ＨＥＲＯ：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３９　ＩＤ：ｈｅＨｅｒｏ１４ｘ

＜３９
＜３９
＜３９
（・ω・、）

４１：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ
ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３９　ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４
＜３９

あーぁ…

４２：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３９　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

＜３９

あーぁ…

４３：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３９　ＩＤ：ａ１Ａｅ７４ｇｆ

＜３９

あーぁ…

４４：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：３９　ＩＤ：Ｂｇｂ４６ｔｗｘ

＜３９

ぬるぽ

４５：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ

ｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：４０　ＩＤ：ｅｂｖ５ｋＧｔｙ

＜３９

あーぁ…

＜４４

ガッ！

４６：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：４０　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

＜３９
お前はよくやった

＜４４
ガッ！

４７：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：４０　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

＜４４
ガッ！

…（・ω・、）

39、王竜の祠へ

数時間後――初めて乗る馬車にお尻を痛くしながら、俺達は「王竜の祠」を目指していた

馬車は三台。先頭の、一番豪華できらびやかで大きな馬車にファルガナ女王、その御者としてショーゼンさんというドワーフ族の騎士団長

二台目にナルクトール、リーデスさん、ケイニー、御者のホシちゃん

三台目に俺、ヒカルさん、クロイワ、そして御者のディーさん

そして――俺達の馬車にくくりつけた、大きなシンプルな十字架

中身がなんなのかは聞いていないが、ろくなもんじゃないのは分かる。でも、一介の冒険者でしかない俺には「機密」故に話せない、らしい

それを言うのならばこの救出作戦そのものが機密なのだが…まぁ、多めの報酬には口止め料も入っていることを省みると、仕方ないかもしれない。国の重要人物が誘拐された――しかも城に侵入されて、だ――なんていうのは醜聞にしかならないし、揉み消すつもりなんだろう

実力者揃いの騎士団長の中でも、「主人公」のみを選出してつれてきたのには、そういう側面もあるらしい。巫女やら神やらを心から信じるこの世界の人と違い、「主人公」の多くは無神論者で、伝説やら宗教やらを余り重要視しない性格の者がほとんどだ。日本人の

多くはそうだったし、その価値観を生きた者が今更敬遠な教徒になれ、というのは無理があるし、仕方ないのかもしれないが

宗教は人を盲目にする。どんな人格者でも、実力者でも、冷静ではいられない

だからこそのこの布陣な訳だが…うーん…

「「「…」」」

…気まずい

思い詰めたように俯いてひたすら馬車の床を睨むクロイワに、どうにも調子が崩れる。ディーさんはクロイワと顔見知りだったらしく、最初の方こそ積極的に話し掛けていたものの、クロイワが素っ気ない返事しかしないからか、既に黙ったままひたすら馬車を走らせている

そんなクロイワの対面に座りながら、ポリポリと頬を掻く。他の馬車も楽しそうな雰囲気では無かったが、この馬車は輪をかけて酷い。…誘拐されたティエリアさんはクロイワの知り合いらしいし、色々思うことはあるんだろうけど…。こいつ、大丈夫かなぁ？こう言うときこそ落ち着いて、冷静に行動しないと大変な事になるような…ってあれ？デジャヴ？…前にもこんなんあったような…？けどその時は冷静になれって怒られる側だったような…

「あ、あのー…あと３０分もすれば王竜の祠に着くでござるよー…？」

恐る恐る、といった様子で声をかけてくるディーさん。それに「あ

りがとうございます」と返しながら、弓をチェック。…ん、大丈夫そうだな。森の中だし、あんまり心配はしてなかったけど、ちゃんと氷矢は作れる。ミストラルにも弾丸生成し、久しぶりに魔法以外の戦闘準備も整える。昔は戦闘前に必ずやっていたのに、最近は魔法があるから、と油断していた。常に戦えるようにしとかないとな。うん

王竜の祠の入り口は、深い森の中心にある。そしてこの森の中では戦闘が行えない。だからか野性の草食動物が多く、肉食動物やモンスターは存在しない。生態系おかしくなるんじゃないかとも思ったが、肉食動物の代わりに「最強生物」がいるお陰か、ちゃんと循環しているらしい。というか、攻撃不可の制約なのだが…「王竜」は対象外らしい。つまりこの森の中では王竜は一方的に敵対者に攻撃出来る、と…。どんな鬼畜ゲーだよ

ヒカルさんも槍の握りを確かめ、気に入らなかったのか布を巻き直す。一度インベントリに入れてしまうと、武器の歪みや微妙な曲がり、凹みや傷などが直る代わりに、ずっと使っているが故に握りが手に馴染んできたのもリセットされてしまう。それでも消耗品の武器を、手入れの仕方も定かではない俺たちがずっと使える、というのはメリットの方が大きいんだけど…

やっぱり城にいる間に馴染ませておいた方が良かったかなぁ？心配になってヒカルさんを見つめれば、「大丈夫だよ、なんとかなる。…ぶっちゃけ素手のが強ぇしな」と笑うヒカルさん。「…そうだね」と俺も笑う

クロイワはエロイカの街で愛用の剣を失ってしまったらしく、今回はシャルロッテさんからの借り物らしい。…シャルロッテさん、国属の騎士団の装備を勝手に貸していいのかなぁ？とは思うが、ファ

ルガナ女王が何も言わない辺り良いんだろう。見るからに切れ味の良さそうな良質の長剣を腰に差し、背中には身長くらいある古樹の杖。マントのようにも見える、丈の長いフード付きのコートも相まって動きにくくないのかなぁ？と思ってしまう。あと魔法使いなのか剣士なのかはっきりしてほしい

コートの中に仕込んだ大量の杭をジャラジャラと鳴らし、背中にユルエルさんを張り付かせたまま無言でガントレットを装着するクロイワ。…ちなみに、このガントレットはカミナからの贈り物だ。カミナの愛用品らしく、ファルガナ女王に同行を禁じられたカミナが「思いだけでも連れていって」とクロイワに託した、殴打用のゴツいガントレット

…武道家なのか剣士なのか魔法使いなのか…。魔法戦士、が1番近いのかな？

クロイワは拳闘術、剣術、魔法をそれぞれカミナ、シャルロッテさん、ユルエルさんに師事しており、その腕前は師匠に追い付く程だとか。全部ディーさんから聞いた話だが、総合戦闘能力ではこのパーティー内でも上位に入るそうだ

…半年でそんな急成長、か…。なんつうか、俺もこの世界の人と比べればＬＶが上がる速度が尋常じゃないみたいだけど、クロイワはもう異常だな

魔法使いとしてのレベルも、火力こそ俺が勝ってるけど、連射力に術式の練り込み、バリエーションでクロイワが圧倒的に上。とはリーデスさんの談。…凹むなぁ。魔法が得意なエルフ族なんだがなぁ、一応…。まぁ、俺が水、風、その派生で氷と雷しか使えないのに、クロイワは確認されている属性全てに適性がある辺りでバリエーシ

ョンじゃ絶対に敵わないのは分かってたけどさ…

っと、クロイワの話はどうでもいい。無けりゃ無いで工夫と発想でカバーすればいい、ってリーデスさんも言ってたし。嫉妬しても意味無いしな

準備を整えてから、ディーさんに「もう大丈夫です」と伝える。ディーさんは「了解でござるー」と告げると、前を走る馬車に手信号を送る。俺には分からなかったけど、馬車から出たリーデスさんのと思われる手から手信号が返ってき――

「皆止まれぇ！！」

『っ！？』

ショーゼンさんの怒声。一斉に御者が馬の速度を落とさせ、馬車にもブレーキをかける

慣性で吹っ飛びそうになる身体を必死で御して、どうにか馬車の外に弾き出されるのを堪える。バギャンッ！！と破砕音が響き、身体が揺れる

「嘘っ！？なんで車輪が外れ…」

ディーさんの声。御者台に座っていたディーさんはあっという間に吹っ飛ばされ、ぐらり、と馬車全体が揺れる――横転するっ！？

「ヒカルさん！クロイワ！」

「応！」「…っ、」

ヒカルさんが馬車の床板をぶち抜き、空いた穴に身体を収める。続いてクロイワも脱出、最後にヒカルさんも飛び出し、ゴロゴロと地面を転がって衝撃を殺す

「――敵襲か！？」

左手に杖。右手に剣を握ったクロイワが構えを取る。ユルエルさんの姿は消えていて、杖の先から光輝く魔力の剣が伸び…ってあれ「光」の上級魔法か？あんなんも使えるのか…

周りを見渡せば、同じように横転した馬車と、そこから飛び出した他の人達。――やばっ！ケイニーとルクがやばそうだ！

「ヒカルさん！ケイニーとルクの護衛！」

「ああ！黒岩、警戒は任せた！」

クロイワが頷いたのを確認して、地面に踞ったまま動かないルクとケイニーに駆け寄る。――一応、使っておくか

「スキル：索敵…成功？」

意識下のマップに複数のマーカーが表れる…けど、そのマーカーはヒカルさん、リーデスさん以外は中立の黄色。…一緒に戦ってんのに仲間とは思われてなかったのか…少しショックだ。数は…っ！？

「――みんな！地面の下！」

弓を構え、矢を生成。そして放――てない！？腕自体が凍り付いた

ような奇妙な感覚。驚愕しながら矢の放つ方向を変えれば、あっさりと発射される矢…。予想以上に面倒だなこの森っ！？

「あらあら、ティナちゃんたちがいるってどうやって気付いたのかしら？」

「――っ！？」

真後ろから聞こえた、鈴の音のような涼やかな少女の声。焦りながら振り返れば…ニコニコと笑う美少女の姿

「うーん、あなたの情報はなかったなぁ。…でもとっても可愛いし…」

ニコニコと笑いながら、少女は右手に奇妙なカードを持ち

「可愛い女の子担当はティナちゃんってことで」

それを、左手に付けた奇妙な板にカードをセットする少女。ぞくりと悪寒がするものの、攻撃することも出来ないし、魔法を詠唱するための時間もない

「フィールド魔法！水晶庭園を発動！たっぷり可愛がってあ・げ・るっ♪」

そして――世界が塗り替えられた

森の木々の隙間から見えていた空は宵闇へと代わり、うっすらと虹色のオーロラが膜のように空との間に掛かっている

若草の生えていた森道は地面から生えてきた鋭い水晶に覆い隠され、地面そのものも水晶へと代わる。そして、相変わらずニコニコと笑う美少女の背中には、氷で出来た城のような、水晶の城

「さぁて…魔界四天王、「バーティナ」専用フィールド魔法、水晶庭園へようこそ？アナタたちの心が水晶に捕われないことを祈ってあげるっ」

美しいフィールドと、それを背景に腕を美しい少女。いっそ幻想的と言ってもいい美しい光景なのに、背中に走るのは悪寒と恐怖。―こいつ、この場所…両方ヤバい！

ちらり、と後ろを見てみる。…やはり俯いたまま動かないナルクトール、ケイニー…そして無言で背中の日本刀に手をかけながら、美少女を睨むディーさん。…さっきまでいたヒカルさんも、クロイワたちも…いつの間にか、消えている

分断されたことにも、圧倒的に相手が有利な現状にあるのにも…戦慄を、隠せない

…ヒカルさん、無事だといいんだけど…

ごくり、と生唾を飲み下しながら、弓を構えた

39、王竜の祠へ（後書き）

お待たせして申し訳ない

リアルの忙しさと思った以上にゴｃｈの掲示板作るのが大変だったんだ…

＜＜フィールド魔法「水晶庭園」

ガナルんが頑張って作ったバーティナ強化用のフィールド魔法。詳しい効果は次回以降

王竜の祠周りで攻撃が出来ないなら使えるように世界を書き換えちまえ！的な

実は固有結界に近いのは秘密。どっちかっつーと「黄金劇場」よりだけど

お知らせ！

ＡＫＩＸさまにレティーシアを描いて頂きました！

挿し絵まとめに張っておきます！

そしてテンプレ募集についてなのですが、もう物語も佳境に入り、あとはＥＤに向けて走るだけの所まで来たので、締め切らせていただきます

皆様、たくさんのご協力ありがとうございました！

…人春の力量じゃ扱えないテンプレ多いなぁ！（泣）

今回のテンプレ

↓仲間との分断！襲いかかる敵！

↓最強のくせになんも出来ない主人公

40、バーティナ（前書き）

「――こいつぁ、困っただなぁ」

「…ああ、全くだぜ」

ほとんど会話したこともないちびっこいおっさんと隣り合わせに立ちながら、地面から泳ぐように飛び出してきた縦にも横にもデカい鎧野郎を睨む

『おっさん担当リオナアハト。お前ら纏めてりっおりおにしてやんよ』

びしっ、と人差し指を俺達の間に向ける鎧野郎

…言葉の意味は分からねぇが、現状、物凄く俺達が不利なのは分かる

周囲には大量の歯車やプレス機、ベルトコンベアー。ブシューッ、と機械的な音と共に吐き出される蒸気に、靴の下に感じる分厚い金属の感触。何らかの「素材」に乗ってベルトコンベアーを流される俺達の前には、ガシャガシャと鎧を鳴らして笑う巨大鎧

『魔界四天王「リオナアハト」専用フィールド魔法。「絶叫工場」。遊園地みたいなものだ。ゆっくりしていってね！』

「いりゃあ…。流石にそりゃあ信じらんねぇべ…」

プルプル首と手を振りながら否定する髭親父…ショーゼンは、ゲートボールで使うハンマーを金属製にしたみたいな細っこい武器を片

手に、ちらりと後ろを見る

後ろには…でっかい、純白の十字架。何が入ってるのかは分からねぇが、野生の勘が「触れるな」と告げている

…さて、どうしたもんか。槍の切っ先を地面に向け、持ち手を頭より高い位置で構え、その影に身体を押し込んだ防御の構えを取りながら思考する

…おっさん担当、で四天王か。となれば相手は最低４人…。目の前のデカい鎧の他の四天王か、その右腕～的な立場の奴が他の人間…相棒たちの相手をしているはず

…だとしたら、不味い。人間側のパーティー内で、見ただけで分かる近接戦闘タイプは俺、ショーゼン、女王の３人

オカマは銃使ってたし、狐女は筋肉の付き方が剣士っぽくなかった。黒岩は両方いけるのかもしんねぇが、両方中途半端かもしれねぇ

相棒は近接戦闘能力が素人に毛が生えた程度しかない。殴られることや攻撃されることへは多少の耐性を付けさせられたが、それでも心許ない

…運良く近接戦闘タイプとチームが組めても、相棒はアレでアホだ。上手く連携が取れるかも分からん。いや、そう簡単にゃくたばらねぇと信じてはいるが

…早いとこ鎧野郎をぶっ飛ばして相棒と合流せにゃ…不味いな

『安心するといい。殺しはしない。俺は、だがな。他のは知らん。

レームシルクやバーティナはヤル気だったし』

ガチャン、と金属音を響かせながら、大股開きで腰を落とし、両手を地面に付ける鎧野郎。…相撲、か？

『前言実行リオナアハト。本日はＲＩＫＩＳＨＩで勝負する。推して参る。「ｗｋｔｋ／イーノック」！』

ちっ、考えてる暇ぁねぇか！？

「ショーゼン！行けるな！？」

「大丈夫だぁ。問題ない」

…嫌に自信満々だな、オイ

ｓｉｄｅ――

「…成る程。あたしの相手は紅石眼のお嬢さん、というわけね」

馬車から飛び出した際に擦りむいた傷に顔をしかめながら、リーデスは目の前でじっと自分を睨むルビーアイの少女を見つめる

ルビーアイ…。魔族として下級であり、死して尚ルビーのように輝く深紅の眼球で有名な魔族。炎との親和性が高いことを除けば身体能力や魔力も人間とそれほど変わりは無く、愛玩用、あるいは飼育用にも「人気」のある魔族

一時期その眼球をくりぬいて装飾品に加工するのが流行り、乱獲され絶滅したとされていたが…まだ生き残りがいたのか。とリーデスは冷たく思考する。この目で見るのは初めてだが、ルビーアイの生態は研究され尽くしている。あまり、興味は沸かない

「ああ。貴様が主人公補正持ちを除けば最も厄介だと考えた。だから初手から全力だ」

轟轟と

炎が、焔が、熱が踊る。

ひたすらに焔に満ちた世界。在るもの全てを焼き尽くす青い焔。ボゴボゴと溶けた地面が溶岩となって沸き立ち、空すらも燃えて焼けて深紅に輝く。空気が焦げるオゾンの匂い。呼吸の度に焼ける肺。黒煙すらもない、ひたすら紅く蒼い焔と熱に包まれた世界

ぽたり、と暑さのあまりリーデスの頬から汗が伝う。ああ、魔女らしくない。「魔女の頂点」たる自分が、発汗現象すら操れないとは、と薄ら笑いを浮かべながら不快に思うリーデス

「魔界四天王レームシルク専用フィールド魔法『東方恋獄記』。…地力で勝てるか不安だったのでな。こちらの得意フィールドに引きずり込ませて貰った」

「御託は要らないわ。四天王相手は一対一…。これも一種の「お約束」でしょ？早くかかってきなさい。面倒見なきゃいけない子がたくさんいるのよ」

悠然と杖を片手に、ゆっくりと手招きするリーデス。レームシルクは炎と化した手足を振るい、無表情にリーデスを睨む

「…人間ごときが、調子に乗るなよ」

「人間ではなく、魔女よ。かかってきなさい下級魔族。優しく教育してあげるわ」

レームシルクが、腕を振るう。同時に宙に浮かぶ、一枚の札

「炎符！「ジェラスィックファイア」！」

宣言と共に溶岩の地面から生えたマグマの蛇が、浮遊魔法で宙に浮かぶリーデスへと襲いかかる！

「…厄介、ね」

ぼそりと呟かれたリーデスの呟きは、襲いかかる炎の蛇に飲み込まれた

40、バーティナ

「クワイエットファントム！」

「「――っ！」」

…バーティナだったか？バーティナの宣言と共に立ち上がる巨大な影。ぼんやりとしか目に映らないソレは、２m近い巨人。…いや、人とは言えない。ぽっかり空いた目の穴、口の穴。ドロドロと腐肉のように蕩け落ちる肉――液体が、ボタボタと水晶の地面に落ちる

「ったく何処の早すぎた巨神兵でござるかっ！？」

絶叫しながら前に出るディーさ…ディー。パキン、と音がして鞘が割れ、普通に抜くのは不可能だろう大太刀が背中から抜かれる。…速い。あっという間に目前まで迫っていた巨人に肉薄し、その胴体を上下に一刀両断する

「忍法！天上天下！」

振り切った刀を最上段に構えての残心。――けれど、バーティナはそんなディーの姿にくすくすと小さな笑みを漏らす

「ざぁんねんっ。ティナちゃんの『クワイエットファントム』はその程度じゃやられないんだなぁ…」

その言葉に従うように、上下に分かたれ、ぐちょりと地に落ちた巨人は軟体生物のように一ヶ所に集うと、再び人の形を取り戻す

「スタンド――それは隣に立つ者！
スタンド、それは運命に立ち向かう者！
スタンド――それはティナちゃんの分身！
…残念ながらティナちゃんたちと同じ「主人公」には見えちゃうのがネックだけどね」

ぺろっと可愛らしく舌を出して「困った困った～♪」と笑うバーティナ。――けど意味が分からん！スタンドってなんだよっ！？

俺には混乱しかなかったものの、ディーには違かったらしい。スタンドという言葉を聞いた途端、僅かに見えている目元が苦々しく歪む「ジャンプ系でござるか…。厄介な…」と小さく声が聞こえた

「キヒッ。ちなみにティナちゃんはSな方だったりするのよん。特に可愛い女の子の泣き顔にはきゅんきゅんしたりします」

…背中に巨人を従えたまま、ニコニコと微笑みつつ俺達を順繰りに見回すバーティナ

その瞳が、酷薄に歪む。ニタリ…っと三日月のように口元が裂け、凶悪な笑みが顔面に張り付く

「ちなみに趣味は…可愛い女の子の中身をくりぬいてお人形にすることだったりするんだ・よ・ねん…♪」

――ぞわり、と全身が総毛立つ。ディーも例外ではない。ガチャ、と音を鳴らしながら、数歩後退りする

…負けられない。こんなところで死ぬわけにはいかないんだ。ニコニコと妖しく笑うバーティナを目前に、魔力を練り上げ、小声で呪

文を詠唱する

「――スタンドは無敵って訳じゃないでござるよ！」

声と共に巨人…ではなくバーティナに接近するディー。――なら、俺は足止め！

「ウル・ガスタ・ル・ティアっ！氷檻：範囲大！」

「――お？」

空気中の水分が凝縮。四角い箱を作り上げ、巨人を檻に閉じ込める。きょとん、と己の背後に出現した氷の檻に呆けた表情をするバーティナ。その目前へと迫ったディーが大太刀を振り抜き――

ぱしゃんっ、と

水音を立てながら

バーティナに触れた「大太刀」が、液体となって撒き散らされた

「なぁーーーっっ！？」

驚愕を隠せないディー。鼻先数ｃｍの位置で、クスクスと笑うバーティナ。つんっ、と軽くバーティナがディーの鼻先を突つけば、慌ててバックステップで距離を取るディー。その手には、柄だけになった大太刀の持ち手

「んー、金髪の娘はともかく、にゃんこちゃんは「スタンド」がどういうものか知ってたはずなんだけどにゃぁん？」

ケラケラとお腹を押さえて笑うバーティナ。…不味い、な。武器を失ったディーは戦えないはず…。その上で見るからにパワータイプのアレの相手しなきゃならないのか…

ディーを庇うようにバーティナとの間に入る。背中に動揺した視線を感じたので、「後ろの2人を頼みます」と言い置き、いつでも駆け出せるように重心を前に倒す

「キヒヒッ、金髪の娘が相手かぁ。頑張るにゃあ。頑張る娘は大好きだにゃあ♪頑張りついでに教えてあげるー。クワイエットファントムの特殊能力は「状態変化」。スタンド本体に触れた物質を液体、個体、気体のどれかに変化出来るのー。…だ、か、らぁ、この子を女の子の体の中に入れてぜぇんぶ気体化すれば…いーかんじに着ぐるみ状態になるんだ♪わたを詰めるだけで素敵にお人形になるのよ？」

「……とんでもない鬼畜な能力だな」

「でしょー？変に傷付く前にやめておいたら？生きたまま可愛がるのも嫌いじゃないわよ？」

パチン、とウィンク。…見た目だけなら可愛い女の子だけど、中身は立派な魔族だ。えげつない

「残念だけど…好きな人がいるから断る！」

怒鳴りながら一直線に走り寄る。「キヒヒヒっ♪恋する乙女って素敵～」と笑いながら巨人を差し向けるバーティナ。ずるり、と移動してきた足の無い液体の巨人が拳を振り上げる。目前に迫った拳を

「風盾っ！」で防御。斜めにズレた巨大な拳が頭の上を通過するのに肝を冷やしながら、右手に氷の矢を生成

「氷槍！」

目の前に作り出した氷の槍を足場に、強引に方向転換。仁王立ちする巨人の身体に突っ込む前に右に飛び、体勢を崩しながらもバーティナに矢を放――

「駄目！避けるでござる！」

――っ！？声に驚いて明後日の方向に飛ぶ矢。どうにか確認したバーティナの表情は…にんまりとした、悪戯の成功した子供のような笑み。それに戦慄しながら、全力で魔力障壁を張る

ビチャアッ！！と粘性の液体をぶちまけたような音がすぐ左から。ビダビダビダ！と大雨の中でビニールの傘を差したような音。驚いて視線を向ければ、コールタールのような黒い液体がべっとりと障壁にへばりついている

「よく気付いたねぇ？」

ニコニコと笑うバーティナと、肘から先を失った巨人の姿。地面を殴り付けて身体を撒き散らした…ってことか…？

「ちなみに減った質量は水晶を吸収して再生出来るから、逃げようとしても無〜理よっ？頑張って逃げてね〜」

無邪気な笑みを浮かべるバーティナを前に、液体の巨人はドロドロと身体を溶かしながら、悠然と俺達の前に立つ

…ちょっとばかり、辛い戦いになりそうだなぁ…

引き吊った苦笑いと共に流れる冷や汗が、水晶の床にポタリと落ちた

ｓｉｄｅ：ケルドゥ・ガナル

クイーン・オブ・ファルガナ。

星　伸一。

黒岩　優人。

この３人の共通点は、「スキル：主人公補正」の持ち主であること

そしてレームシルクの主であるキング・オブ・リトマスの持つチート…「アカシックレコードの接続権限」。詳しく未来が見えるようになるのは約１時間前が限界だが、最大で１年先まで未来を文章として確認することができる能力だ

とはいってもそれこそ１ヶ月先でようやく「何か災害が起こる」や、「敵襲がある」ということが分かる程度で、戦闘のように目まぐる

しく事態が変化するような「イベント」は数分前に描写されるようになるのがやっと、という程度の「あまり役に立たない能力」だ

だが、それでも「最善、あるいは最良の選択肢」を選び続けられる、というメリットは大きい。事実、リトマスのもとに集った魔族軍兵士は彼がタイミング良く、「最良の言葉」をその兵士にかけてきたからこそ、着いてきたようなものだ

ギャルゲのようなもんだ。決してアイツの魅力ではない。だがそれによってレームシルクが救われたのは事実であり…っ！何故わしが先にレームシルクと出会えなかったのか…っ！？

…話が逸れた、か

「アカシックレコード」は人望を集めることに適した能力ではある。なんせ人を落とすための攻略本のようなモノなのだ。同時に常にあらゆる攻撃に対策が練れる、というのを省みれば、戦闘にも使えないことはない

…しかし、その最大の弱点。それこそが「主人公補正」

主人公補正の持ち主は、アカシックレコードに記された運命を覆す能力を持っている

それ故に、「主人公補正」の持ち主が強い意思を持って何か行動を起こした時、あっさりと運命が変わってしまう

…本来の「運命」であれば、騎士団副隊長シャルロッテ・カーディナルの暴挙により、エロイカの街は壊滅状態に陥るはずだったのだ。しかし結果を見れば、十分復興は可能な範囲。エロイカの街の転生

者も、女王に敵意を持ってはいても、戦意は抱いていない
…運命が変わった。僅かな変化だが、この変化が対局にどう影響するのかが分からない
だからこそ…リトマスは焦っている。こんな博打のような戦いを挑む程に

「ようこそいらっしゃってくださいました、クイーン・オブ・ファルガナ。そしてお付きの方たち。どうか我の用意した「ゲーム」を心の底から楽しんで行って頂きたい気持ちにございます」

ぺこり…と頭を下げるリトマス。その目前に立つファルガナ、星伸一、黒岩優人の三名

「ゲーム、ねぇ…。私様としては今すぐあんたをぶち殺して帰りたい気分でいっぱいなんだけど？」

ゆっくりと長剣を抜くファルガナ。それに追従するようにそれぞれの武器を構える2人

「残念ながらこの森で我を傷付けることは出来ないわけでございますが…。チャレンジするだけなら構いませんが？」

「…そのようね」

剣を変化させることも、銃の引き金を引くことも、魔法を放つことも出来ない。それを理解し、ゆっくりと距離を詰めるファルガナ。恐らく、だが。…王竜の祠周辺で攻撃を放つことが出来ないなら、この森から離れたところまでぶん投げてしまえばいい。そんな思考

をしたのだろう。ノコノコ自分の前に顔を出した間抜けを内心で嘲笑いながら努めて優しくリトマスの襟首を掴み――

にたり、とリトマスの口が弧を描いた

「ＧＡＭＥ　ＳＴＡＲＴ『比翼連理』」

「なっ！？」

リトマスの姿が、ドロリと溶ける。…彼等が見ていたのは、「モノマネ魔術師」。というモンスター。対象の姿、思考を、行動をコピーして真似るモンスター。のっぺりした顔の無い黒い人型の人形に、灰色のローブを着せたような、そんな人形

そんな人形とファルガナの間に架かる、呪いの繋がり。本人たちにしか見えない、黒い鎖

「ファルガナさんっ！？」

「くっ…何が起こってるの…！？」

背中合わせに立ち、周囲を警戒する黒岩優人。星伸一。…その２人の間にも、「比翼連理」の呪いが課せられる

「ク、ハーハッハッハッ！こんなにもあっさりと罠に掛かって頂けるとは！さっすが脳筋でございますね！こうも上手くいくと申し訳ない気分でございますよ！」

ガサリ、と茂みの中から現れるリトマス。果たして一国の王として正しい姿なのかは分からないが、まんまと呪いを課せられた主人公

補正の持ち主たちはリトマスの姿に苦々しい顔をする

「ルールを説明いたしましょう。比翼連理の呪いとは縛鎖の呪い！その鎖の届く範囲以上に相手と離れれば、互いの魂が互いの魂を喰らい会う！真に信頼しあうもので無ければ得られぬ絆を試される呪い！」

「「なっ…！？」」

「…ふぅん」

驚愕に目を見開く男2人。対称的にファルガナは冷めた目でモノマネ魔術師を見やる。…当然といえば当然だ。初対面…どころか自意識すらないモンスターと信頼などと言われても、不可能だろう

リトマスはニヤニヤと笑いながら、杖を振るう。転送魔法によって呼び出された小さな小屋。それを指差しながら、

「それを解く方法はただ1つ！我とのゲームに勝利すること！攻撃することも、逃げることも封じられたあなた方にこの勝負を降りる理由がございますか？」

と、挑戦的に笑う

…邪魔を入る余地をなくし、厄介な呪いで逃げる道を封じ、苦手分野…直接戦闘による決着を避け、天敵たる主人公補正持ちのみを的確に排除する。それがリトマスの出した作戦

…果たして、成功するだろうか

穴は、まだ多い。アカシックレコードに頼り、作戦立案もアカシックレコードに記されるままに従ってきたが故の、経験の無さ

ファルガナが逃げてしまえば、あるいは他の四天王が突破されてしまえば。この作戦は破綻する

愚かな若い王に僅かに落胆を覚えながら、樹木と一体化したままわしはそれを見つめる

「――いいわ。挑まれて逃げるわけには行かないもの」

…乗った、か

…やはり、人間は愚かだ

40、バーティナ（後書き）

＜バーティナ
＜スタンド：クワイエットファントム

個体↓液体↓気体
あるいは
気体↓液体↓個体
の変化を自由に操れる。
ただしスタンド自体は液体に近く、スタンドに攻撃されてもスタンド使いにダメージがフィードバックされない代わりに、スタンドによる攻撃も敵に大きなダメージは与えられない
↓でも床を砕くくらいは結構余裕。ただしかなり飛び散ります

不定形型
破壊力ｰＢ　スピードｰＣ　射程距離ｰＤ
持続力ｰＣ　精密機動性ｰＥ　成長性ｰＣ

実は個体を直接気体にすることは出来ない。その逆も。また、肉を液体化することは可能だが、それを治療に使うことは出来ない。ただの肉ブロックになる

「スタンド」を名乗ってはいるものの、本来の「スタンド」とは違い「スタンド使い」以外にも見えるし、「スタンド」以外でも触れることが可能ななんちゃってスタンド

液体だし常に体積が減っているが、何故か水晶を吸収することで体積を回復出来る。これ以外で体積を増やすには、本体の体力や精気、

その他諸々が大量に必要となる。

リオナアハト
＜「ｗｋｔｋ／イーノック」
…ＲＩＫＩＳＨＩになる。じゃありません

「円」の範囲内の対象の思考を変化。
相手に「油断」や「慢心」に近い感情を植え付ける

制約：ｗｋｔｋ／イーノック　の使用後、使用者は使った時間×５倍の時間強制的に「絶」になる

ｗｋｔｋ／イーノックの使用中に他の念能力を使用した場合、使用者は今後一切念能力の使用が不可能になる

呪い：比翼連理
本編内で語った通り
発動条件は「比翼」となる者に触れること
その後、２ｍ以上離れたら強制心中

解除法は呪いをかけた者が解く
あるいは
比翼の２人が肉体的、精神的な繋がりを持つ
の２つ。

クロイワアッー！フラグ…なわきゃあない

本編内で説明すべきなんだろうけど、一人称だとむっかしいなぁ…

複数主人公の辛いところだ…

ちなみにガナルが何してるかっていうと、一気に三枚も発動されたフィールド魔法が効果を打ち消し合わないように細かい調整をしてたり

お疲れ様ッス！

今回のテンプレ

↓最強キャラは罠に弱い

↓ちゅうにびょん

お知らせ！

時村さまのリーデスさん絵に色が付いたよ！

４１、ＶＳ魔界四天王（前書き）

一気に三話更新

これがやりたかったが故の５日間でござる…！

41、VS魔界四天王

「ディーさん！2人連れて出来るだけ遠くに逃げて！」

非力な俺じゃあルクとケイニー2人を連れて逃げるなんて無理だ。魔法を使えばどうにかなるかもしれないが、それだとディーがヤバい。…それに、目の前で女の子が殺されるなんて御免だ。しかも相手は変態だ。死んだあとに人形にされるとか死ぬより辛いわ！

内心では逃げ出したい気持ちでいっぱいだけど、弦を引いて氷の矢を生成。状態変化どうこうって能力なら多分効かないんだろうけど…！

「喰らえ！」

一息に3矢を纏めて放つ。どれも狙いは中途半端にバーティナを狙う程度だけど、バーティナは予想通り巨人を盾にする。パシャパシャ！と軽い音と共に巨人に突き刺さる矢は、一瞬でその形を崩し、水へと変わる

「インベントリ：ナイフ×4！」

片手でポーチから引き抜いたナイフを一纏めのまま勢いに任せて投げ付ける。当然投げナイフの技術なんかない俺が投げたナイフは不規則に飛び、その内2本が巨人に掠める…当たった瞬間は普通に飛んだのに、地面に落ちると同時にパシャリと水分を撒き散らす

――なんとなく、分かった。金属なら、一瞬だけは形が残る！

「終わった？なら次はティナちゃんのターン！」

バーティナの声と共にビチャビチャと水音を立てながら駆け寄ってくる巨人

けど、スピードなら俺が圧倒的に速い。なら、飛沫にだけ注意してれば…！

拳が振り上げられると同時に脇を駆け抜け、巨人の身体そのものを盾にするように影に隠れる。一瞬遅れて地面にぶつかる巨人の右腕。バシャン！とその黒っぽい身体が撒き散らされるも、俺の身体には届かない。その隙にバーティナに向かって走り寄りながら、呪文詠唱！

「『鋼の巨兵よ！この身に！エンチャント：ＳＴＲ』！」

久々に使う「ガナスタ」の強化魔法。攻撃力ではなく、一時的な腕力強化。代わりにＩＮＴが一定時間低下するが、今は対した問題じゃない…と、思う。多分！

「インベントリ：ギガアックス！」

それなりに近付いた所で一旦立ち止まり、ポーチに手を突っ込む。目当てはＣランク武器、平常時であれば持ち上げられないだろう１ｍ越えの斧槍。…ギチッ…っと筋肉が軋む音が体内に響き、脳内に「装備できません」という警告メッセージが乱舞する。――微妙に力が足りてない上に、ピーピー五月蝿い！歯を食いしばって気力で耐える！

勢いに任せてポーチから引き抜けば、「どうやったらそんなちっちゃいのの中にそんな武器入るのよ…」とバーティナの呆れたような声。それを無視して、斧の柄をしっかりと掴み、腰に固定したまま「ぐるり」と身体を回転。ハンマー投げのように勢いを付け、精一杯の狙いを付けてバーティナに向けて投げ付ける！微妙に狙いは外れたけど、ぐるぐる回転する斧槍はすぐ近くを通るだけでも恐いはず！その隙に――

「そう来るか！でもざぁんねんっ♪クワイエットファントム！」

一瞬だけ驚いたように目を見開いたバーティナ。けれど彼女が楽しそうに巨人の名を呼べば、巨人はでろりと溶けて――水晶の内側に溶け込んだ

「なっ！？」

そして直後に、投げつけた斧を水晶の地面から伸びた腕が殴り飛ばす。あっさりと方向を変えた斧槍は、水晶を削りながら地面に突き刺さった

「水晶の中だけなら、クワイエットファントムは一瞬で移動出来るのよ。でもって…まだティナちゃんのバトルフェイズは始まってすらいないぜ！」

楽しそうな声と共にフィンガースナップ。…が、音は鳴らない。それにちょっと恥ずかしそうにバーティナが顔を剃らすと同時に、巨人の姿が消え――「がぼっ！？」

身体が、沈み込む。バシャンッ！と甲高い水音。ゴボゴボと空気の泡が上へと登り、喉に、目に、鼻に液体が流れ込む。苦しさに弓を

落としてしまったが、さすがにそれを回収する余裕はない。必死で手足をじたばたと動かしながら、どうにか体勢を整える

地面――床の水晶が、液体になった！？耐え難い息苦しさに苦しみながら、それでも地面：地上に向けて泳ぐ。溺れた時は、少しだけ空気を吐いて空気の向かう方向に泳ぐ。いつだったかテレビで見た対処法が、役に立つなんて…

幸いにして液体の透明度は高いし、さらさらした液体が動きを阻害することもない。落ち着いて行動すれば、どうにか対処は出来る――もう少しで出られる、と手を伸ばした瞬間

にぃいい…と、俺の「真上」に立ったバーティナが、笑うのが、見えた

がつん、と伸ばした手がガラスにぶつかったかのように弾かれた

「ごぼっ…！？」

透明なアクリル板のような硬質な感触に驚愕。くすくすと笑うバーティナの目には、嗜虐的な色

俺を液体にした水晶の中に閉じ込めて、表面だけ個体にした――そう気付くまで、あまり時間はかからない

「お」「ば」「か」「ちゃ」「ん」

ゆっくりと唇を動かし、ケラケラと笑うバーティナ。何度壁を叩いても身体は反動で水底へと沈むだけで、魔法を唱えようにも意識が集中出来ない

このまま俺が溺死するのを楽しむつもりなのだろうか。ニコニコと邪気のない、けれど悪意に満ちた笑み。俺の真上にしゃがみこみ、じっくりと俺の苦しむさまを観察しているバーティナ

――打つ手、なし。だった

肺の中の空気はとっくに空っぽで、既に口から溢れる空気は残っていない。相当酷い顔をしているんだろう。顔を赤く染めたバーティナが、うっとりとした目で俺を嘲笑う。…俺が苦しんでいるのを楽しまれている。悦しまれている。不快で、不愉快なのに、何もできない

何もできない…

はずだった

俺が、「ガナスタ」のキャラクターで無ければ

「ガナスタ」のキャラクターである「レティーシア」だからこそ…、俺は、「コレ」を持っているのだから

無音で、無反動で。凄まじい威力を持つ、コレを

ホルスターから抜いたソレで狙いを付ける。バーティナの表情が、怪訝そうなソレに変わる。そりゃあ、そうだろう。一見した所でコレは…ミストラルはただの改造銃にしか見えない。そして銃は…水中では、使えない

でも、コレは、違う

魔力を弾丸として放つミストラルは、場所を選ばない。巨大なオークの身体すら簡単に撃ち抜く弾丸を、華奢なバーティナの左胸に照準を付けて――放つ。引き金を、引いた。白い魔弾は、液体を切り裂いて飛翔し――

バキィィインと水中にすら届く高音。穴の空いた水晶の蓋が、徐々にひび割れる。上に立っていたバーティナの重さも手伝ったのか、あっさりと砕け散った

全力で、欠片が顔に刺さるのも構わず身体を水面に押し上げる。出来るだけ飲まないように気を付けたものの、それでも気管に、食道に入り込んだソレが呼吸を妨げる。それにすぐさま呼吸をしようとしたのを後悔しながらも、顔に触れる空気の感触に、全身が歓喜するのを感じた

そして俺と入れ違いに――驚愕の表情で、己の左胸に開いた拳大の穴を見ながら、水面に落ちていくバーティナ

「…う、そ…なん、で…じゅう…なん、て…」

ごぽっ、と口から黒っぽい血が溢れる。それは巨人の身体のような色で――ドボンッ！とバーティナが水面に落ち、透明だった水晶の液体は急速にどす黒く色を変える。…それに触れたくなくて、動くのも億劫な手足で気力を振り絞り、水面に這い上がる

「ゼェー…ハァー…ゼェー…ハァー…げぼっ…ゴポッ…オェエエエ…」

ほんの短い時間呼吸を止めていただけのはずなのに、身体の芯から

疲労が溜まったような虚脱感。安心したら一気にせり上がってきた吐き気に、胃の中身と飲んだばかりの透明な液体水晶をダラダラて口から溢す

胃の中身が空っぽになるまで吐いた後、生理現象でボロボロ溢れ落ちる涙を拭い、口の中の酸っぱさを我慢しながら、腐った血のような臭いを発する水面を睨む。…ぷかぷかと浮かぶ黒髪が、水面に散らばってふわふわとたゆたっている…

死んでる。間違いなく

…駄目押しのように右手に構えたミストラルをバーティナの頭に向け、引き金を引く。パンッ！と頭が弾け、脳味噌が、頭蓋骨の欠片が、髪の毛の生えた肉片が弾けた

…殺した。殺せた…。勝った…。勝てた…。生きてる…。生き延びた…っ！！

じわじわと沸き上がってくる歓喜に、ぶるりと震える身体。相手が油断していたから、俺をなぶるつもりだったから。単純に運が良かったから。…色々理由はあるだろうけど、それでも勝てた…！

「おめでとー」

――すぐ背中からかけられた声に、背筋が凍る。…可愛らしい、声。少年のような、少女のような不思議な声

「じゃ、第2ラウンドいこっか？」

ぽんっ、と優しく肩を叩かれた。――悲鳴を上げたくなる気持ちを

押さえて、肩越しにミストラルの銃口を向け、メチャクチャに引き金を引く！後ろを見たくない。振り向きたくない…。そんな気持ちで放たれた魔弾。ぐちゅり、と、ぐちゃり、と。あるいはもっと酷い音。背中にかかる粘性の高い腐った肉の香り。収まった筈の吐き気に襲われながら、服を貫いて肌にピチャピチャと触れる血肉の感触に恐怖する

「無駄だよぉ？それ、ティナちゃん本体じゃないもーん」

――声が聞こえたのは、真下から

水晶に映る――ぐちゃぐちゃに潰れ、鼻から上を失い、どろどろと肉を溢すバーティナと

その隣でバーティナの身体を支える――バーティナ、そっくりの…色違い

髪は白く、肌は黒く、目は赤く、唇は青い。ニヤニヤと笑う嗜虐的な色はそのままに、バーティナの色だけをひっくり返した少女が…もはやタンパク質の塊としか言えないような姿のバーティナを、抱き締めている

そしてその少女はバーティナを左手で抱きながら…俺の頭に、尖った水晶を振り下ろそうとしていた

「――っっっ！」

それに気が付き前に飛ぶ。ヒュッ、と風切り音。意を決して振り向けば――「うぐ…っ！？」

水晶に反射して映り込んでいた肉塊と同じような姿の、バーティナ…だった者。ソレが、水晶を片手にぼんやりと立っていた

「さぁて、金髪ちゃんは攻撃が効かない相手にどうやって勝つのかしら？」

クスクスと笑うバーティナの笑い声が――妙に、頭に響く

「くっ…！」

既に穴だらけの「アレ」を狙ったところで効果は無さそうだ。ならば――さっきのバーティナの鏡写しのような少女。あの娘を狙うのが定石！

「勿論クワイエットファントムも忘れちゃ駄目よー」

「えっ、なっ…あぐっ！？」

右からの、急な衝撃に常時展開型の障壁が一瞬で砕け散る。水の拳が右半身を強打し、服が液状になって剥がれかける。――いた、い…っ！右腕が砕けた…かもしれない。せめてもの救いは、液体化したのは服だけで、身体は無事だったことだろうか。右手に持っていたミストラルも無事だし、運が良い。痛む右腕に顔をしかめながら、口の中で小さく回復呪文を唱える。どうやって喋ってるのかも不明なバーティナが、ゲラゲラと笑った

床から伸びた巨人。その後ろで、穴だらけの足でふらふらと歩み寄ってくるバーティナ…

「氷弓　ウズメ」は水の中に落としてしまったし、体力的にも精神

的にもボロボロだ。肩口から袖から殆どを溶かされ、ずり落ちてくる服を左手で押さえながら、必死で戦術を組み立てる。考えろ！出来ることを、やれることを全部…！

「…」

…右手は、動く。動くようになってきた。なら、何が出来る？何をやれる？

……出来るかどうかは分からない。通じるかどうかも分からない。それでも、やる。やって…ヒカルさんに、もう一度会うんだ！

「負けない…っ！」

「うんうん♪…その自信、いつまで持つかなぁ？」

ぐちゃぐちゃに潰れた肉の塊が、それでもけらけらと笑った

４１、ＶＳ魔界四天王（後書き）

今回のテンプレ

↓倒したぜ！「残念偽物です」なん…だと…！？

41、VS魔界四天王（前書き）

「ゲームのルールは簡単です。一切の細工のないこのトランプで、好きなルールで我とゲームをしていただきます」

小さな丸いテーブルと、それを囲む4脚の椅子。テーブルの真ん中に置かれたカードの束を手で示しながら、目を細めてニコニコと笑うリトマス。不機嫌そうに顔をしかめながらも、ファルガナは迷うことなくカードを手に取る

「…細工はないみたいね」

「ええ、ございませんとも。カードにも一切の細工はございませんし、我もこのゲーム内では一切のトリック、あるいはイカサマは使いません。あなた方もイカサマをしてはいけませんよ？公平なゲームだからこそ面白い。イカサマは罰ゲームの対象となります」

「…罰ゲーム？」

訝しげに少年にしか見えないリトマスを睨む優人。伸一はこっそりとコートの内で銃口をその額に向けるが、やはり引き金を引くことは出来ない

「ええ、罰ゲームです。ゲームと言ったでしょう？このゲームに勝てばアナタ達は無傷でティエリアさまを取り返すことが可能でございますし、ファルガナさまは目障りな我を殺害できる…。代わりにあなた方が我に負けた場合…我はアナタ達から「どんなものでも1つだけ」、アナタ達から奪うことが可能です。…スキルだろうがアイテムだろうが…例え、命だろうとも…で、ございます。勿論、ア

ナタ方が勝利した場合もそれは変わりません。我のスキル、アイテム、チート能力…命、あらゆるものが自由に出来ることでございましょう」

ただし、とリトマスは言葉を繋げた

「この椅子に座り、ゲームを始めたが最後…。誰か1人が敗者となるまで…命を落とすまで、ゲームを降りることは出来ません」

…無言。無言ながらも、僅かに動揺の色を浮かべる優人、伸一。…この4人の内、誰か1人は確実に死ぬ…。その事実に、戦慄を隠せない

「けれど、ゲームに参加しなければ「比翼連理」の呪いは解けません。お隣の人物と未来永劫、人生を共にする覚悟がおありならあるいはこのゲームを降りて頂いても構わない所存にございます」

「…分かりきった事を聞くのね。そういう回りくどいの大っ嫌い」

侮蔑の視線と共にリトマスの対面に座るファルガナ。優人と伸一は顔を見合わせる。…お互いに知らない仲では無いが、仲が良いとはお世辞にも言えない仲だ。頷き合うと、空いている席に座る

「…全員のご参加、心より感謝いたします。…それでは、ゲームは何に致しますか？」

ファルガナはその問いにしばらく考え込むと、伸一と優人に視線を向ける

「…得意なゲームは？」

「トランプで出来るゲームなら一通り。それより女王陛下はルールを覚えていらっしゃるのですか？」

「…休み時間に友達とポーカーとかＢＪやるくらい。あとは大貧民とかババ抜きとか」

２人の言葉にファルガナは思考する。…自分は知略が必要なゲームは苦手だ。だから出来れば「幸運極大補正」の活きる運要素の高いゲームがいい

なにより大貧民やババ抜きといった「敗者が１人しかいない」ゲームは不味い。４人中３人が味方の中、たった１人を狙い打ちで「負け」させなければいけない。しかも、味方を殺さないように

主人公補正の持ち主は有益だ。主人公補正とは不可能を可能にするスキル。己１人で出来ることは限られる。だが、主人公補正の持ち主が３人もいるのならば、更なる発展が、救いがこの国にもたらされるかもしれない

…最悪自分１人が生き残ればどうとでもなるが。「奇跡」の使用権は３つもあるのだ。やりようはいくらでもある。少なくとも自分は「奇跡」を私利私欲に使うつもりは無いのだから

となれば…

「ポーカーよ。親はあんた。…精々私様に良いカードを配りなさい」

自信満々に、当然のように胸を張って応えるファルガナ

「――これは、これは」

その姿を

リトマスは、ニコリ…と、せせら笑った

アカシックレコードに記された通りではないか、と…

（この勝負…勝たせて頂きます）

内心で嘲笑を浮かべながらカードを手に取れば、ファルガナの背後に突っ立っていたモノマネ魔術師が灰となって崩れ落ちる。伸一と優人の間に繋がっていた呪いの鎖もまた、粉々になって弾けた

それを満足気に見ながら、リトマスはカードを手に取る。シュッ、シュッとどこかぎこちない手付きでカードをシャッフルする

「…それぞれに５０枚のチップを配ります。このチップが無くなったものが敗者です。奪ったチップを誰かに譲渡する、あるいは「何か」と交換するのはルール上問題ありません。尚、手札に自信が無い場合はドロップしても構いません。ドロップした場合、ドロップした方の掛け金が次のゲームに持ち越されます」

――それでは、カードを配らせて頂きます

41、VS魔界四天王

プレス機、ドリル、成型機…通常の１００倍程の大きさのある様々な加工機材と、１０m四方の正方形の金属ブロックが流れるベルトコンベア。それだけがこの世界にある全てだった

ガシャンッ――ガシャンッ――幾度となく響くプレス音に肝を冷やしながら、金属ブロックから飛び降り、プレス機の壁を駆け上がる。鋼鉄の壁だろうが本気で爪を立てれば、カリリ…と小さな音と共に引っ掛かる。手足の具足や籠手は既に棄てた。槍も使っている余裕なんかない。無我夢中で駆け上がり、制御版の蓋を無理矢理引き剥がし、中にある配線を引き千切れば、鎧野郎とショーゼンの乗る金属ブロックをプレスしようとしていた巨大なプレス機が止まる

「ショーゼン！止まったぞ！」

「あんがと…っさんっ！！」

声と共に鎧野郎に振るわれる戦槌。見た目は小さなハンマーでしかなかったソレは、鎧野郎の身体を掠め――ズカァンッ！と凄まじい音を立てて足下の素材を凹ませる。けれど、その一撃を掠めたはずの鎧野郎には一切のダメージが無く、なんの動揺も見せずに掌打をショーゼンの腹に叩き込む

「ぐっ…ぐぅ…」

最初の方こそ大したダメージはないようで、平然としながら猛攻を仕掛けていたショーゼンだが、何度も何度も鋼鉄の掌打を食らえば流石に顔をしかめ、数歩後退る。リオナアハトは腹に『ゲラゲラゲ

ラ』と笑い声らしき文字列を浮かべ、俺達を揶揄するようにチョイチョイ、と手招きする

『無駄だぜ…。もはや見切った。オサレバトル式で言うなら俺の勝利は確定的に明らか』

「おんめぇ…あんまおいんこと舐めんでねぇぞ…」

怒りに顔を真っ赤に染めながらハンマーを構え直すショーゼン。だが、腹部を庇っているせいか、どうにもその構えはぎこちない

『言いたいことは色々あるが、男は背中で語るぜ』

くるっと背中を見せる鎧野郎。…その背中には、『プギャーｍ９（＾ｏ＾）ｗｗｗ』と意味わからん文字列。――どこまでもイラッとさせる野郎だなぁおい！

「しっかしなんでだぁ…？間違いなく、当たっちょるべぇ…。なんでダメージいかねぇだ…？」

荒くなった息を整えながら、ハンマーの先で地面スレスレを削るように揺らすショーゼン。配電盤からジャンプし、空中で体勢を整えてその隣に着地。鎧野郎は油断も慢心もなく、ただそこにぼんやりと立ち、俺達の攻撃に合わせてカウンターを決めるだけ――こっちはプレス機止めたりドリルぶっ壊したり溶鉱炉に落とされないようベルトコンベアを逆走したりしながら、必死でどうにか鎧野郎と戦っているってのに…相手には、余裕がある

それはそうだろう。この世界は鎧野郎の「場」だ。恐らくだが、プレス機も、ドリルもモノともしない能力があるからこそ、ここの場

を相手にプレッシャーを与えるためだけに「攻性」に特化しているのかもしれない。とは言っても、その殺傷力は本物。プレッシャーだけでなく物理的な死の恐怖を伴っているわけだが

『っつうか鎧な人相手にハンマーとか鬼畜じゃね？ぐちゃってなるよ、中身』

「それが狙いだべ！」

再びハンマーを振り上げながら突進するショーゼンに内心で舌打ち。なんで何度も無茶な突進するんだっ！？

後ろを振り向けば、３０ｍ弱先には真っ赤に焼けた――なんだ、アレ？成型機…か？…言ってる場合じゃねぇ！？

『ＲＨＫＩＳＨＩのＨＡＲＩＴＥからはビームが出ますよ』

「出てねぇべ！」

『（・ω・、）そりゃ出ねぇよ…』

一瞬動きが鈍るものの、鎧野郎は冷静に大振りの攻撃を避け、掌打や蹴りでもってショーゼンの身体を打つ。その度に、ショーゼンは身体を折り、小さく呻きながら後退る。――学べ！いい加減！

「ショーゼン！変われ！」

「嫌だべ！こいつだけはぶっ飛ばす！ムカつくべ！」

あの馬鹿…完全に頭に血が登ってやがる…っ！！

だが、ショーゼンじゃあ高い位置にある配電盤を破壊しることは出来ない。俺が行くしかない…か…

「…虎の人！なんかこいつやる気だべ！」

「虎の人言うなッ！？」

今まさに壁を駆け上ろうとした瞬間にかけられた声に振り返る。鎧野郎の腹に示された文字は――あ？

『今週のービックリどっきりメカー』

…懐かしいなオイ！？俺がガキの時のアニメ…じゃねぇ！？アニメのフレーズ知ってるっとことは、こいつ――「主人公」ってことじゃねぇか！？

「ショーゼン逃げろ！なんかすげぇの持ってるはずだ！」

「んなこたぁ分かってんべ！」

俺が知ってるだけでも「主人公」は「なんか気持ち悪いけど馬鹿みたいに強いガキ」やまったく攻撃が効かねぇ「不死身の大男」、一応相棒も「回復魔法」なんてありえねぇ能力を持ってやがる。見た目は不死身の大男に近い鎧野郎が、どんな能力持っていてもおかしくは――

「…ヒカルさん」

「なっ！？」

背中から掛かる、相棒の声。驚愕しながら振り返れば――そこには

『釣りですた』

と顔に書かれた、デッサン人形のようなメタリックな奇妙な人型。
反射的に沸き上がる怒りに任せて金属人形に爪を叩き込む！

グシャッ！と音が重なる。隣を見れば、ショーゼンもまた怒りに顔を赤くしながらハンマーで似たような人形をぶち壊した所だった

「ヒカルさん」「ヒカルさん」「ヒカルさん」「ヒカルさん」「ヒカルさん」「「「「「ひかひかひさかるかひさかるかひかさるひかるさ」」」」」

次々足下の素材から沸いてくるデッサン人形。ぞわりと背筋が泡立ち、気色の悪さに怖気立つ。何よりソレが相棒の声で話していることに、気持ち悪さと怒りが沸く

「気持ちわりぃんだよ！」

怒鳴り付けながら薙ぎ払うような上段回し蹴り。筋肉馬鹿――カリオラに仕込まれた「竜尾脚」とかいう技を、俺が再現した蹴り。名前を付けるなら…いやいやいや名前付ける必要はねぇんだって。相棒も「お願いだから！恥ずかしいから必殺技の名前叫ぶのやめて！」って言ってたし

次々現れる人形をとにかくぶっ潰し――ってしまった！成型機止めてねぇ！

人形を潰すのは一旦やめ、壁際に駆け寄る。人形がガチャガチャとした動きで近寄ってくるが、その動きは鈍い、放っておいても問題はない

――そう考えながら壁に手をかけた瞬間。足下の素材から伸びたメタリックな手が、俺の足を掴み――

ドンッ！と身体の内側に響く衝撃。足首から広がる激痛と熱に悲鳴を上げそうになるのをなんとか噛み殺し、ゴロゴロ転がってその場から離れる

『いつから錯覚していた…？俺が「ｗｋｔｋ／イーノック」を使いっぱなしだと…？』

「づ、ぐ…！？」

腹の文字を強調するように、腰に手を当てて目前に立つ鎧野郎。足首を見れば、丁度手の形に焼け焦げた肉と、僅かに見える焦げ付いた白っぽい骨。ぷらぷらと千切れかけた肉が揺れ、鼻には肉の焦げた臭いが届く。一歩動こうとするだけで、頭が痺れるような激痛が脳天を貫く。――相棒にすぐ治して貰っていたせいか、久しく感じていなかった激痛に、脂汗がだらだらと流れる

声を出すだけでもヅキヅキと痛む足首に苦しみながら、じっと鎧野郎を睨み付ける

「て、めぇ…何を、しやがった…！？」

『記憶にございません』

しれっと腹に文字を浮かべる鎧野郎が憎たらしい。だが、動きを封じられ、成型機も止められず、ショーゼンは周りに出現する人形の危険性に気付いたのか、必死になってそれの破壊にかかりきっている。このままでは、そう遠くない内に成型機に挟まれてお陀仏だ

ならば――目の前の鎧野郎を殺して、無理矢理この「絶叫工場」とやらを終わらせる。この手の技は、使った本人が死んだら終わるのが定石の筈だ

深く息を吸い、そのせいで痛む足首に顔をしかめながら――両手を地面に付ける。『土下座とかマジやめて。悪いことしてる気分になるから困る』と表示する鎧野郎

「…スキル：獣化」

――その身体に、一足飛びで飛び掛かる。人間の姿ならともかく、完全に獣化するば身体の大きさはほとんで変わらない。さらに４つ足の獣形態なら、右足…右後ろ足一本使えないことも、大きな問題にはなりえない

完全に鎧野郎の巨大な身体を組み伏せる。先程から何度か拳や蹴りが腹を襲っているが、獣の柔軟な筋肉が無理な体勢で放たれた大した威力のない痛撃を緩和する

「ルガァッ！！」

鎧野郎の両肩を押さえながら、牙で兜と胴鎧の隙間――首を抉る。ビチュ、と口のなかに生暖かい汁が広がり、牙が柔らかい肉を裂く。不味い――不味いのに、舌は勝手に血肉を喉奥に運び、身体はそれを咽下する

鎧野郎の抵抗が激しくなる。より一層硬い金属に包まれた拳が、脚が、身体を打つ。それでもひたすらに牙で首を抉る。徐々に攻撃が弱くなるのを感じながら、牙の先端に感じる固い骨を…ゴリリ、と削る。ビクンッ！と鎧野郎の身体が跳ねた

…一思いに力を込め、ゴギンッ、と首骨を砕く。ぐったりした鎧野郎の首裏を噛みながらショーゼンに向き直る…。呆然としていた

「…終わった…ゾ…」

言葉に、鎧野郎の身体がどさりと落ちる。…言い様の無い罪悪感に、胸の内がずしりと重く――

「いや、死んだフリですけどね？」

ゴチュッ、と体内に響く水っぽい音と衝撃。「…カハッ」と口から血を吹きながら、空中を舞う。受け身を取ることもできずに金属壁に叩きつけられ、足首と全身の痛みに意識が飛びそうになった

「オーキドーキ。そっちがガチなら俺もガチでやるべきだお。うっわ声出して喋るとか超久々。ワロス。テラワロス」「おいおいなに言っちゃってんの僕？ここは圧倒的強者みたいにゆっくり正体を表すべきだろ常識考えて」「だからあたし達は駄目なのよ。せっかくイケメンがいるんだからリトきゅんとか連れてくればいいのに」「腐女子オッスオッス」「巣に帰れ」「だーまーれっ！あたしたちは腐女子じゃなーいっ！」

鎧野郎から聞こえる複数人の声。男もいれば女もいる。ガチャガチャて紫色の血を首からだらだらと垂らしながら、鎧野郎は全身の鎧

を脱ぎ捨てていく

――それは、一言でいうば醜悪な化け物だった

紫色の肥満の巨漢のような身体。だというのに手足は棒切れのように細く、指は二本しかない。

そして――その全身を「口」が覆っていた

牙を剥き出しにした唸る小さな口が全身に、本来両目があるべき位置には牙のない、普通の人間の少女のような可愛らしい口。だというのに口があるべき位置にはなにもなく、鳩尾から股間にまで縦に伸びる、びっしりと小さな牙が生えた口が一際目立つ。中でうごうごと蠢く舌はぱっと見ただけでも三枚。肩や脚、腰や脇、頭部や背中にも人間の前歯を大きくしたような二枚の歯だけがそれぞれ上下に生えた口が無数にある

べろん、と両目から舌が伸びる。どうやらその両目と、腹の口が喋っているらしい

「「「魔神の口。テラーグリーズ。好きな食べ物は人間の恐怖でっす！」」」

――茶目っ気溢れる自己紹介をする化け物に、意識が遠退く気すらした

４１、ＶＳ魔界四天王（後書き）

今回のテンプレ

↓倒したぜ！「俺の本気はここからだ…」なん…だと…！？

↓俺の鎧は身を守るためのものではなく、力を抑えるための拘束具だ…！

４１、ＶＳ魔界四天王（前書き）

なんだ、コレは…

手の内にある５枚のカード。スペードの４、ダイヤの４、ハートの４。スペードのＪ、ダイヤの１０

手札だけ見れば、初手からスリーカード。悪くない。悪くない手札だ。だというのに――

「私様はチェンジなしよ」

「あたしは…２枚チェンジ」

「では、我は三枚チェンジ。クロイワさまは？」

…にっこりと微笑みかけてくる「魔王」。その笑みを憎々しく思いながら、ダイヤの１０とスペードのＪを場に置く

「…２枚、チェンジ」

引いたカード。…ダイヤの２とハートの２。…フルハウスだ。これ

に勝てる手札は、あまり無い

「チップを上乗せさせていただきます。５枚」

「なら受けるわ」

「…あたしも」

場に出される、６×３人分のチップ。…俺も、既に２０枚まで減ったチップの中から５枚、場に出す

「…俺も」

残りのチップは１５枚。でも、手札はフルハウス。

――その、筈なのに！

「私様はハートのロイヤルストレートフラッシュ…で、良かったんだったかしら？」

「我はクラブで９からＫまでのストレートフラッシュでございます」

「…あたしは３のフォー・オブ・アカインド。ジョーカー込みでね」

「…っ！」

申し訳なさそうにこっちを見てくる星の視線に、動揺を隠せない

場に出された２４枚のチップが、ファルガナさん１２枚、リトマスが８枚。星が４枚で分配される

…リトマスが1人勝ちすることは、ない。必ず1位はファルガナさんだ

けれど…チップが減っていくのは、俺と星の2人だけ。俺が、残り15枚。星が、残り21枚。ファルガナさんが増えて92枚。リトマスが72枚。――ファルガナさんは単純に「運」がいいんだと分かる。だが、リトマスがほとんど損失を出さないのはおかしい。だというのに、イカサマが見破れない！

奴が負けそうな手札のときは、奴はそうそうにリザインしてしまう。まるでこちらの手札が理解出来ているかのように、確実に、的確にゲームを進めていくリトマスの姿に、背筋が凍る

――このゲームで負けたら、死ぬ。このまま俺がビリになったら…確実に死ぬ

嫌だ…！死にたくない…っ！死にたくないっ！！こんなところで死ぬのなんてごめんだ…！なのに、なのに…体は椅子から離れず、ゲームをやめることは出来ない。また、手元に5枚のカードが配られる

ゲームは進んでいく…

命が、チップが、ゲームの度に減っていく。じんわりと視界が涙で滲み始め、身体がカタカタと震える。冷静にゲームを進めることが、出来なくなる

死にたくない。死にたくない。死ぬのは恐い。こんなゲームで、たかがゲームで死にたくない…！頭を占める思考はそれだけで、ティエリアのことすら思い出せない。カチカチと音が、頭の奥で鳴る。

何かと思えば、歯と歯がぶつかりあう音だった

「黒岩さま？カードを公開してくださいませ」

「っ！？」

びくりと身体が震える。――ファルガナさん、ストレート。リトマス、フラッシュ。星、スリーカード。俺――あ

「…の、ノー、ペア…」

リトマスが1つ頷き、チップを奪っていく。分配されたチップが、ファルガナさんの元へ

…手元に残ったチップは――2、枚。もし、次に誰かが掛け金を増やせば――その時点で、俺の死が確定する

――僅かな希望とともにファルガナさんや星にすがれば、ファルガナさんは苦虫を噛み潰したような表情で、星は申し訳なさそうに…俺の視線から、顔を逸らす

「…っ、…くっ…」

ボロッ…と大粒の涙が、溢れた。嫌だ。死にたくない。死にたくないのに…っ！逃げられない。確実に目の前に迫った絶望に、ボロボロ涙が溢れる

「…あー、黒岩さま。良かったらチップをお分けいたしましょうか…？」

――――――え？

バッと３つの視線がリトマスに突き刺さる。リトマスは困ったように頬をかきながら、罰の悪そうな笑みで俺にチップの山を指す

「我のチップ、８３枚中３３枚。貴方の持つナニカと引き換えに交換いたしましょう。…我としましても、ファルガナさまとの決着が付く前に「ゲーム」が終わってしまうと困るのでございます」

――頭が、回らない。けど、目の前に置かれた３３枚のチップ／命が、深く心に刻まれる

しかし――その光景を遮るように、長剣の切っ先が差し出される。驚いて体を引けば、感情の浮かばない目で俺を見るファルガナさん

「黒岩。罠よ、断りなさい」

「なっ…！？…こ、このまま死ねっていうんですか！？」

――その問いに、

「覚悟はしてたでしょ。受け入れて。潔く散りなさい」

――簡潔に、じっとガラス玉みたいな目で俺を見ながら言うファルガナさん

罠って、なんだよ…。そんな、死ねって言われて死ぬ覚悟なんかしてない…！大体なんで俺なんだ！？俺がなんか悪いことでもしたのかっ！？

死にたくない。

俺は――死にたくない

「――リトマス！交換してくれ！」

その宣言に、目を見開くファルガナさん。星もまた、驚いたように席を立つ

「っのバカ…っ！」

ファルガナさんが剣を振り上げる。けれどそれがリトマスの頭部を真っ二つにすることはない。リトマスの髪の毛に触れるか触れないかの位置で、ぴたりと止まる刃

「承りました」

『にたり』、と笑うリトマス。チップが、目の前に移動してきた。

――代わり、に。引き換えに

凄く、大事なモノが――胸の内、から「ずるり」と抜け出ていく感触。致命的な喪失感。取り返せない失敗をしたかのような、絶望

そして――「魔王」は、うっすらと笑った

「スキル：主人公補正…確かに頂戴いたしました。更に――「ゲーム」中に対戦者を傷付けようとした罰ゲームです。ファルガナさまの「スキル：主人公補正」も没収し、このゲームの商品とさせていただきます」

――ああ、

俺は、ほんの少し死ぬのを先延ばしにしただけらしい

41、VS魔界四天王

「愛欲！アンリミテッドデザイア！」

溶岩がどろどろに蕩けた大地から手を伸ばし、無数の燐炎が四方から水の膜で包まれたリーデスに向かう。リーデスは迫る溶岩の鞭に顔をしかめると、冷静に焔を無視して溶岩のみを避ける。火の粉は水の膜で消火されるも、焼けついた空気の熱が、確実にリーデスの体力を奪っていく

空を飛んではいるものの、動けば動くほどに熱風で汗が吹き出し、多少回復していたとはいえ、転送魔法のせいで残り3割りを切っていた残存魔力は体力の補填に減っていく

その上――

「そこだ！」

「ちっ…！」

炎に紛れるように、唐突に現れるレームシルクの姿に舌打ち。リーデスは急停止し、水の防御壁の内側に魔力の障壁を生む。直後に水の防御壁を突き破るレームシルクの拳。――あまり近接戦の心得がないリーデスに、唐突に距離を詰めてくるレームシルクの瞬間移動は脅威だった

「燃え散れ！」

業っ！と燃え上がる深蒼の焔。蒸気が視界を塞ぎ、分厚い水の膜は

水滴すら残さず蒸発しきる。それだけに飽き足らず、竜種のブレスすら鼻歌混じりに防ぐことが可能な魔力障壁にすらビキリ、とヒビが入る

「漠氷ｚｓｋｅｏ煉ｈｊｅｕｔｕｓ硬！」

苦し紛れの大呪文。都市1つを凍らせることが可能な絶対零度の氷撃が周囲に広がる。溶岩が一瞬でひび割れた岩に変わり、燃え上がる山々が氷山へと変わる――が、レームシルクは止まらない

「効かん！独占「モノポリーブレイズ」！」

――氷が、燃え上がる。空間が焔に満たされる。紅く熱く蒼く赤く厚く朱く高く水のように空気のように世界が燃え上がる。水が急激な温度変化に化学変化でもしたのだろうか。水素が焔を破裂させ、酸素がそれに燃料を次ぎ足す

「燃えろ燃えろ金華の焔！私の胸の焔よりも熱く紅く真っ赤に燃えろ！焼けて焦げて塵となれ「魔女の頂点／ウィッチクラフト」ぉおぉおおおおっ！！」

――空間を満たす圧倒的なまでの熱量。焔の津波にしかみえないそれは、距離が離れていて尚リーデスの髪を、肌を、服を焦がす。どんなに硬い魔力障壁でも、熱までは防げない。水の膜は蒸発する。ボダボダと落ちる汗に「優雅じゃないわね…」と顔をしかめながら、リーデスは汗で曇ったモノクルを投げ捨てた

「残念ながらお断りよ。――まったく、こんな所で終わる予定じゃなかったんだけどね…。流石に勝てそうに無いわ」

焔の津波を前に、ゆったりとした動作で帽子を外し、中に固定されていた緑色の液体の入った小瓶を取り出すリーデス。彼女はなんの躊躇いもなくコルクの栓を抜き、それを飲み干した

「時ｒｅｓｔｌａｉｔ間ｔｒｉｐ空ｈｅｋａｔ…」

くるくると杖を回しながらの呪文詠唱。カシャリと小さな音を立て、杖が中程から割れ、長さが増す。上下に分かたれた杖を繋ぐのは、手のひらサイズの砂時計。杖から引き抜かれた瞬間、砂時計の中から金色の砂がサラサラと溢れ落ち始める

「もう遅い！私達の夢のために灰となれ！」

世界そのものを焼き尽くすような炎が、リーデスの小さな身体を飲み込む。肉の焦げた臭いが、そしてあっという間に燃え尽き骨へと変わり、灰となった光景が、焔を通してレームシルクの意識に伝わる

１０秒、２０秒。焔が踊る。灰すらも焼き尽くし、完全にリーデスという魔女の肉体を燃やし尽くし、そこでようやく、レームシルクは焔を消した

…先程までリーデスがいた場所には、何も残っていない。文字通り影も残さず、この世界からリーデス・ヴァルトハイヘルン・オズ・パラケルススという女は消え去った

「勝った…っ！クイーン・オブ・ファルガナのブレインを潰した…っ！！リトさま…っ！レームシルクは勝ちました…っ！」

天を仰ぎ、うっすらと口元に笑みさえ浮かべて喜ぶレームシルク。その感情に呼応するように手足は火炎となって燃え上がり、ゆらゆ

らと髪は蒼い炎となって揺らめく。空っぽの右目からは煌々と紅蓮の焔が燃え上がる

一頻り喜びの焔を燃やしながら感動に打ち震える。しかし、はっとしたようにキョロキョロと周りを見渡し、誰もいないのを確認。当然こんな世界にレームシルク以外の人物がいるわけもなく、ほっと胸を撫で下ろす

「リトさまはクールな女の子が好きだからな、うん」

テンション上がりすぎた…。恥ずかしい…と紅くなった頬を隠しながら、手足や髪を炎から肉体へと戻すレームシルク。そしてその視線を彼方に飛ばす

「さて…次は…リオナアハトの加勢、か」

リオナアハトは最も凶悪な種族でありながら、優しすぎる。人の「恐怖」を糧として生きるテラーグリーズ。だが、リオナアハトは久しく人間に拷問をしていない…。幸いレームシルクが無理矢理引っ張り出し、レームシルクが拷問した人間の恐怖を食らい生きてはいるものの、本来の力には全く届いていない

…ついでにリオナアハトと交戦している人間を拷問して恐怖を食わせるか、と思い至り、レームシルクは「東方恋獄記」のカード効果を終わらせ――

『あら、酷いわね。レディを放っておいて帰るつもりかしら?』

「――――っっ!?」

背後から掛けられた「声」に、身を凍らせた

振り向きながら左手を炎化して巨大化。溶岩よりも熱く燃え上がる焔の拳が、背後にぼんやりと佇むその影を打ち据え――ない

ぴたり、と。まるで焔そのものが凍りついたように、直進する拳が止まる。炎の揺らめきすらそのままに、左肩から先が「ぴたり」と自由を亡くした事に驚愕するレームシルク

『せっかちな子ね…。安心しなさい。時間なら無限にあるわ。ゆっくりと語らう事も、気の済むまで拳を交えることも、優しいく身体に「授業」を叩き込むことも。いくらでも可能よ』

カッチ、コッチ、カッチ、コッチ。その人影が喋る度に、副音声のように時計の針が進む音。カッチコッチと針が鳴く

『さ、後半戦よ。講師が変わったから、よぉく聞きなさい』

人影は――その真紅の髪をぱさりと掻き上げ、挑戦的に名乗りあげる

『あたしの名はリーデス。リーデス・ウィッチクラフト・オズ・カトプレパス。時と空間の精霊よ』

人から『精霊』へと成り上がった魔女は、妖艶に笑う

背中に届く程の髪は深紅。肌は白く、顔立ちや体型にはそこまで変化はない――が、年の頃は２０代半ば。ぷっくりとした瑞々しい赤い唇にはうっすらとした笑みが浮かび、その両の瞳は分針が、時針が、秒針が、文字盤が浮かぶ時計。カチ、コチ、カチ、コチと規則正しく音を刻む。服装も地味だったローブとは異なり、胸元がぱっ

くりと開いた、露出過多なドレスに腰までの長さのマント。手にした杖はネジくれた砂時計に、無理矢理幾つもの懐中時計を捩じ込んだような奇妙な杖。サラサラと落ちる砂は黄金色に輝き、ただ空中に浮いているというだけなのに、その身体から立ち上る魔力は、レームシルクの身を凍らせる

「ば、馬鹿な…。人から精霊になったのはまだいい、前例がいないこともない…！」

ギリリ…っ！とレームシルクは歯を食い縛る。そうでもしなければ、圧倒的なまでの強者の威圧感に、心が折れてしまいそうな程のプレッシャー

「だが！その力はなんだ！中級精霊どころの話ではない！その力は、まるで――」

『「神」のよう、かしら？』

うっすらと笑い、腕を組むリーデス。先読みされたことを苦々しく思いながらも、こくりと頷くレームシルク

リーデスはニヤニヤと、まるで出来の悪い生徒を見るかのような困った表情で、鋭い目で自分を睨むレームシルクを見つめる

『あたしは「時と空間の精霊」。そして精霊は、長い時間を生きれば生きるほどに強くなる…。ここまで言えば、分かるかしら？』

「分からん！」

言い切りながら、左手を強引に引き戻す。『あら、もう時間切れ？

意外と魔法に耐性あるのね…』と興味深そうにレームシルクを見つめるリーデス。その周りを囲むように、火柱が立ち上がる。逃げ場を封じ、一気に燃やし尽くす。そんなつもりで、レームシルクは気炎を吐いた

「だが、どうでもいい！生き返ったなら殺し直すま」

でよ、と言うつもりが、腹部に走った衝撃に身体を折るレームシルク。痛みに腹を押さえながら、火柱の真ん中で、ニヤニヤと微笑みながら自分を見つめるリーデスの姿に、「何か」をされたのを確信。全身を焔へと変え、四方からリーデスに襲いかかる！

『分からない事は手を上げて質問なさい』

――だと、いうのに

そんな暢気な声と共に放たれた暴風が、焔を、そして熱を全て弾き飛ばした

『答えは簡単よ。時間の精霊という身ならばこそ、人間の身では不可能なタイムスリップが可能なのよ。それでウン千年前まで遡って地道に力を蓄えてた、ってわけ。…人間の「あたし」が存在している時間上では、精霊の「あたし」は表舞台に顔を出せないからね。全く、退屈だしガンギルやカリオラにも会えないし、最悪だったわ』

ふぁさり、と髪をかき上げるリーデス。魔法の腕は、人間であったころとそこまで変わりは無いのだろう、だが、精霊となったことで尋常ではないほどに増えた魔力キャパシティが、そして呪文すら唱えずに放たれる大呪文が――人間であったころにすら、レームシルクの猛攻を防ぎきったリーデスの実力に、拍車をかける

「ふっ…ふざけるなっ！こんな、こんな…っ！追い詰めた所で覚醒っ！？馬鹿な！そんな、そんな「主人公補正」のような――」

『あら、心外ね』

レームシルクの言葉に、リーデスの眉間にシワが寄る。プレッシャーを増したリーデスに、「…くぅ…！」と小さくレームシルクが唸った

『貴女と一緒よ、レームシルク』

ぴたり、と杖の先端が、レームシルクに向けられる。どんな攻撃が！？と身構えるレームシルクに苦笑しながらリーデスは言葉を吐いた

『あたしにも、命を賭けて愛する男がいるのよ』

「……はぁ？」

思わず、といった様子で間抜けな声を上げるレームシルク。その姿にくすくすと静かに笑い

『最もあたしは、貴女と違って――死んでも一緒にいてやるって決めてるのだけどね』

――愛する人／リトマス　のためならば、喜んで命を差し出すレームシルク

――愛する人／ガンギル　のためならば、死の苦痛すら受け入れる

リーデス

似ているようで、正反対。あるいは…似ているからこそ、似ていない

リトマスの理想のためならば死ねるレームシルクと、ガンギルと一緒にいるためならば、業火に焼かれる苦しみを味わってまで無理矢理精霊化するリーデス

その違いは、ただのベクトルの違い

『出来れば貴女の面倒も見てあげたかったのだけど…悪いわね、もう時間がないわ』

リーデスの纏う空気が変わる。どこか和やかな空気から、刃のような戦意に溢れる空気に

「わ、私とて…私とて負けられん！人間に浚われ！なぶられていた私を救ってくださったリトさまのために！私の命も身体も全てはあの人のために捧げると決めたのだ！」

業ッ！、と吹き出す焔。だが、その威力は最初見ていた時よりも小さい。レームシルクの感情によって威力をあげるその技は、揺れる感情に呼応するように、不規則に揺らめく

『行くわよ』

ゆらり、とリーデスの姿が揺らめき――

「愛想！「ワガミスベテハカノヒトノタメニ」っ！！」

最後の爆炎が、花開いた

41、VS魔界四天王（後書き）

今回のテンプレ

↓「主人公」は策略に弱い

↓年寄り魔女さんは若返る

＜バーティナ（ピクシブファミリア）
鏡の中に住む悪魔。現実世界に存在するのは悪魔本体の「影」でしかなく、これをいくら壊しても倒せない
鏡を破壊するか、餌で釣り出して本体を引きずる出すのが大変

＜水晶庭園
クワイエットファントムの補給
クワイエットファントムの移動
クワイエットファントムの能力強化

そして「ピクシブファミリア」の逃げ道である「鏡の中の世界」を作り出せる一石四鳥なフィールド魔法

リオナアハト
＜「モゲロ／爆発しろ」
金属を爆弾に変化させる

誓約：爆弾になった金属に有機物が触れた場合、例え能力者本人の身体でも爆発する

＜魔神の口。テラーグリーズ

８種存在する魔神系モンスターの一体
人間の恐怖を糧とするため、人間の拷問を好む。また、醜悪な外見は人に恐怖を与えるため

他のテラーグリーズは分からないが、リオナアハトの内には３つの人格を内包している模様。これは転生前が多重人格者だったがための変化と思われる

ちなみにどの口で食べてももお肉美味しいです

恐怖以外にも色々食べます

また、物理ダメージ無効。傷付くのは外見だけ。その外見も食べれば治りますもぐもぐ

他にも能力ある模様

＜絶叫工場／テラーファクトリー

総金属製の工場
そこら中を爆弾に変えることも可能で、尚且つ無機物の中になら「空気嫁／ハードダイバー」で潜って、潰れたり刻まれたりを無効化できるリオナアハトだからこそのフィールド

＜東方恋獄記
背景が火炎地獄
でもレームシルクには焔は友達！

ちなみにリーデスさんが飲んだ薬は「感覚強化」
死の感触をより鋭敏に感じることで「真理」に辿り着いたとか
その分文字通り地獄の苦しみだったと思われ
ほんとはナイフかなんかで一思いにさくっと死ぬ予定だった模様

42、魔界四天王（前書き）

お久しぶりです

溜め撃ちなんかすんなバーローって話ですよなすいません

42、魔界四天王

――とにかくまずは距離を取る！近接戦闘じゃ話にならないし、もう一度殴られたらいくら回復してもヤバい！っつうか回復出来るかもわからない！

「ありゃ、鬼ごっこ？どっこまで逃げられるかな～？」

ふらふらと長さの違う足でゆっくりと追ってくるバーティナに、背中を向けて走りながらメチャクチャにミストラルの引き金を引く。無数に放たれる魔力弾がバーティナの肉体を、そしてその周りの水晶を破壊していく。――だが、それも表面のみ。分厚い水晶の大地は削ることが出来ても破壊することは出来ない。仮にバーティナの本体が、さっき見えたバーティナの色違いの少女だったとしても…まずは水晶の中から引きずり出さなきゃ、俺には打つ手がない

水晶の中にいて、攻撃が通らない敵――漫画やゲームなら、そう少なくはない能力だ。ゲームなら特別な手順を踏めば引きずり出せるし、無意味に鏡から出てきて攻撃してきたりする。漫画だったら主人公の天才的な閃きで対策が取れる、「ありふれた」能力――

なのに、それと相対するのがこんなに辛いとは思わなかった！

「クワイエットファントム！」

「っ…インベントリ・神終乃大太刀！」

まだＳＴＲブーストは効果が持続している。辛うじてインベントリ

から引きずり出した幅広の日本刀の影に身体を滑り込ませる。数少ないSランク武器。破壊耐性のあるこれなら防げるかもしれない…っ！！そんな考えでの行動

俺の身長より大きな太刀の切っ先を水晶に突き立てる。一応の用心に一歩後ろに下がった直後、地面から伸びた拳が大太刀に命中。一瞬の均衡。そしてパシャリと溶ける大太刀――高いし、レアだし、優秀な武器なんだぞ！？俺には使えないが！

「インベントリ！梓弓！鉄の矢！」

和弓のようにしか見えないシンプルな弓と、鏃が鉄で作られている矢。慣れ親しんだ動作で矢をつがえ、走りながら――バーティナの足下に撃ち込む！

「だぁから「そっち」にいる金髪ちゃんの攻撃は届かないんだってばぁ」

呆れたようなバーティナの声。――それと同時に、ぞわりと背中が泡立つ。悪寒に背中を押されるように前方に飛べば、さっきまで俺が立っていた水晶が、軽い水音と共に波打った。…ほんの少しでも遅れていたら、また水晶の中に閉じ込められていたかもしれないとぞっとする

「へぇ…じゃあこんなのはどうかな？」

グチャグチャで、かろうじて人型であることしか分からない姿へと変貌したバーティナの背後に現れる液体の巨人。その周りの水晶は一瞬で液体化し、ゆらゆらと煙が――気体の水晶か！？吸い込んだらどうなるか、想像すらできない！不幸中の幸いで、気体の水晶は

白っぽいモヤのように目に映る、だったら距離さえ離れてれば――

そんな俺の甘い考えを嘲笑うように、楽しそうなバーティナの声が響く

「勿論それだけじゃないわよ？――食らいなさい！」

掛け声と共に巨人がメチャクチャに腕を振るう。ビチャビチャとその身体が撒き散らされ、気体水晶の白っぽい空気に紛れてドロドロした黒い飛沫が迫る！

「っ！？ガスタ・ル・ルルガスタ！暴風障壁！」

とっさに自分を中心に竜巻を起こす風の障壁を展開。効果時間はほんの数秒だけど、数秒稼げれば――

「インベントリ：ビーグガード！」

小柄な俺くらいならあっさり覆い隠せるサイズの巨大な大楯を、歯をくいしばってインベントリから引きずり出す。…腕力強化していても、これを持って走るのは無理！気を抜いたら倒してしまいそうになる大楯を支えながら、その影に隠れる

暴風障壁が消え去り、構えた楯の表面にビチャビチャと液体がぶちまけられる。白い煙のような気体水晶も共に流れてきたので、出来るだけ呼吸を止めながら、楯が液体化する前に逃げ――

「っ！？」

ピピピピッ、と全身、至るところから走る小さな痛み。それに気を

取られながらもどうにか逃げ出し、身体を見下ろし――絶句する

「針――いや、棘…！？いつの間に！？」

透明な水晶で出来た、細い、けれど鋭い１ｃｍくらいの小さな棘。
皮膚に突き刺さったそれは血を吸い、赤い棘となって小さな痛さと痒さを伝える

「さっきの気体水晶の中にちょろっと、ね？…気を付けてねー？」

「くっ…っ！？」

――このままじゃ、回復魔法が使いにくい

棘が刺さりっぱなしになっていたら、回復魔法じゃ傷が塞がらない。よしんば塞げても、それだと体内に棘が残りかねない。かといって刺さった棘を抜く時間もない。棘が伝える小さな痛さと痒みに集中が途切れがちになってしまう

「こっの…っ！インベントリ！銀の矢！」

取り出した矢を弓につがえ――どこに撃てばいいっ！？――くそっ！結局つがえた矢を片手に、もう一度走る

「あははっ！可愛い胸が丸見えよ～？」

「なっ…！？」

羞恥を煽るような言葉に頬が熱くなる。――落ち着け俺！男だったときはそれくらいなんともなかっただろっ！？矢を手放してでも服

を押さえようとした手を意志の力で押さえ――ああもう！どうすりゃいいのかさっぱり思い付かない！

悔しい…そんな感情が顔に出てしまったのだろうか。バーティナのくすくすという笑い声。後ろにいるはずのバーティナの声が、そこら中にある水晶全てから聞こえてくるような錯覚

「ニヒッ…今、諦めたかけたでしょ？ニヒヒヒ…♪ねぇ、貴女さえよければ、命だけは助けてあげ――」

唐突に

唐突に、世界が変わる。グルグルと身体を無理矢理回され、引き延ばされるような違和感。

「…ぅぐ…っ！？」

沸き上がる吐き気に口元を押さえ、蹲れば――頬を擽る若草と、土の匂い。…森の、中？疑問が沸くと同時に、バーティナの驚愕の声

「う、嘘でしょ！？なんでフィールド魔法が…！？あぐっ！？」

どさっ、と重いものが落ちる音。吐き気を堪えて視線を向ければ、バーティナの色違いの少女が、お尻を押さえて痛そうな顔をしている

「しまっ…！？か、鏡っ！？鏡は…っ！？」

狼狽しながらキョロキョロと周りを見渡すバーティナ。その目前に立つ、黒い影

「無駄でござる」

「…なっ！？」

武器を失い、ルクとケイニーと共に逃げ出した筈のディーさんが――覆面を外して、バーティナの前に仁王立ちする。金色のショートカットの髪が風に揺れ――その周りに浮かぶ、数冊の本がクルクルと回る

…いや、アレを本と言っていいのだろうか？

肌をピリピリと突き刺す膨大な魔力と存在感。質量すら感じる圧倒的なまでのプレッシャーに、身体が重くなったような気すらする

「あ、あの？大丈夫でした？」

「…え？」

背中からかけられた声に振り返れば、涙目のルク。…何故ここに？まだ戦いは終わってないのに。危険なのに。注意するより早く、ルクに抱き締められた。柔らかくて暖かいルクの身体に、緊張感が緩みかける

「ごめんね…。ごめんなさい。貴女みたいなちっちゃい女の子に戦わせて…。ずっと「見て」た…。ごめん、ごめんね。見てることしか出来なくてごめんね…」

ギュウウ…と力一杯抱き締めてくるルクの腕が、少しだけ痛い。…そして、少しだけ複雑。ちっちゃいって、女の子って…

「でも大丈夫。貴女の稼いでくれた時間のお陰で、もう勝てるから」

そんなルクの言葉を証明するように

ディーさんの周りをクルクルと回っていた本が、一斉に止まる。そしてそれは――風に溶けるように、塵となって消えた

「拙者に与えられたチートは１０万３０００冊の魔導図書館。リーデス殿すら扱えない、ほとんどが「神」が悪ふざけで作ったような「僕の考えたさいきょうまほう」みたいな呪文ばかりが載ったふざけた魔導書でござる故、封印し続けていたのござるが…。本来ならば世界そのものを破壊してしまう大魔法。フィールド魔法程度ならば、破壊することも容易かったようでござるな」

「くっ…！？」

ディーさんの冷静な様子に動揺しながら、バーティナはバックステップで距離を取る。同時に、にやりと笑った

「たかが防御を封じたくらいでいい気にならないでよね！クワイエットふぁ…」

ぴたり、とバーティナが止まる。ディーさんは特に何かしたようには見えない。けれど、バーティナは目を見開き――何かに耐えかねたように、かくん、と膝を折った

「あ、や…な、なに、こぇえ…か、からだ…あつ…ふぅああ…」

いきなり自分の身体を腕で抱き締めるようにしながら、びくんっ！びくんっ！と身体を震わせるバーティナ。黒い肌を涙が伝い、半開

きになった口からは青い舌がチロチロと蠢き、だらだらと涎を溢す

「ふむ、さっすがナルクトール殿の「見立て」はばっちりでござるなぁ」

「それしか取り柄ないですもん…」

拗ねたように俺を抱き締めながら呟くルク。ディーさんはケラケラと笑い――パチン、と指を鳴らした

「――もう、いいの？」

同時に、いきなり姿を表す――汗だくのケイニー。何故かは分からないが、バスケットボールみたいな赤い球体を両手で抱え、うんざりした顔をしながらバーティナのすぐ隣に立っている

「あっ…ひぁあ…やぁ…だ、め…こぇ…やめぇ…」

びくびくと痙攣しながら涙目でケイニーを見上げるバーティナ。ケイニーはそれに嫌そうな顔をしながら、「本当に男だったのね…」と呟き、赤い球体をバーティナの身体に乗せた

「い――――あああああっ！あつっ！？あつぃいいい…」

「そこまで熱くないわよ…」

絶叫するバーティナに呆れたように顔を背けるケイニー。そのまま嫌そうにしながらも、バーティナの上に乗せた赤い球体の上に座る。再び絶叫するバーティナ

「いったい、何が…？」

あんなに強かったバーティナが、なんかよく分かんない悶え方して
て、ケイニーは汗だくで、ディーさんは「…魔法を使ってしまった
…。忍者失格でござる…」とか落ち込んでいる。急激な逆転に、思
考が追い付いてこない

「えっとですね。簡単に言えば、水晶全部壊してバーティナさんを
引きずり出して、ケイニーさんのチートでトドメっ！って訳です。
ケイニーさんって普通にしてても男性を虜にするフェロモン出して
るんですよ。
それをうちのマッドサイエンティストが強化しまして…発汗時の匂
いで男性を強制的に重度の性的興奮状態に出来るんです
まぁ、流石にあのレベルの興奮状態にするにはそれこそ汗を飲ませ
るとかしなきゃダメなんですが…
ああ、勿論本人の意思である程度コントロールできるみたいですよ？
ディーの魔法で姿を隠して、あの無駄に熱い魔法石でだらだら汗か
いたケイニーさんが、バーティナさんに抱き着いた。結果としてバ
ーティナさんは一気に性感が高まって…あと１０分もあればアヘ顔
披露ですかね？」

「…えっ、と」

…意味が解らない。分からないが、分からないけど…

「…バーティナって、男？で、俺達の勝ち…ってことか？」

「両方イエスですね」

――っ、

とんでもない強者と戦って生き残れた事に安堵する。全身を虚脱感が襲い、へなへなと力が抜けかけ――しかし、沸き上がった怒りに立ち上がる

「え、ちょ？レティーシアさ…」

後ろから聞こえてくるルクの呼び掛けを無視して、身悶えるバーティナとつまらなそうな顔でその上に座るケイニーを見下ろす。ケイニーが何故か、びくびくと身を震わせる

――それを、尻目に

思いっきり

バーティナの股間を踏みつけた

「――――――きぉ…」

妙な声と共に、びくりと靴裏で跳ねる感触。――気持ち悪い。ぐりぐりとソレを踏みつければ、白目を向いて身体を跳ねさせるバーティナ

「人の乳見てんじゃねぇよ」

言い捨て、ぐりぐりと足を動かす。びくんっびくんっと身体を跳ねさせるバーティナ

元男？股関攻撃は反則？

知るか

今は女だ。

ぶくぶくと泡を吹いて気絶したバーティナに、ミストラルを向け――

「「たんまたんまたんまたんま（でござるぅ）ーっ！？」」

「離せ！殺す！」

「情報聞き出す予定なんでござる！殺したら駄目でござ…え？」

ギャーギャーと騒ぐディーさんてルクに羽交い締めにされながら、

それでもミストラルを構えた時

そのメッセージは、頭に響いた

４２、魔界四天王（後書き）

ちなみにルクさんがテンション低いのは寝起き（気絶から覚醒）直後だから

ふと思ったけど男の娘アへ顔ダブルピースとか誰得？５（ピー）にしか見えネェヨ

お知らせ！

挿し絵まとめ

に

黄昏さん作

レティーシア&光さん立ち絵

３４、想い、届けてのワンシーン

を追加しました！

更に

吉岡　眞吾さん作

クイーン・オブ・ファルガナ

マノメ・ユージロー

ラグナエイト・ピンナップ

も追加しました！

42、魔界四天王

「グ、ルルルル…」

まだ、だ。まだ動ける。ガクガクと震える四肢に渇を入れ、三本の足で立つ。戦意に呼応するように無意識に発した唸り声。――いっそ「狂化」を使えば…いや、相棒もいないし、なによりショーゼンを巻き込みかねない。朦朧とする意識を必死で繋ぎ止めながら、ダラダラと口から溢れ落ちる唾液と血液に歯噛みする

「立ちましたお？これには驚きを隠せない俺がいる件」「凄い根性だな…。よし、ここはアレだよ。ムツゴロウ的な愛情表現で僕たちを理解ってもらおう」「――イケメンだったあのでかい猫ちゃんをカプカプペロペロしていい…ってことかしら？」「「腐女子自重しろ」」「なんであたしたちはあたしを苛めるときだけ仲良いのよー！？」

キャイキャイとはしゃぐ鎧野郎…改め、化け物。ぐらぐら揺れながら、ヨダレを垂らしてゆっくりと近寄ってくる

「フーッ…フーッ…！」

無意識に出る荒い息。右足が、そして拳を受けた腹部が熱い。熱いのに、寒くて、暑い。…どうにかしないと、出血が多すぎて…不味いことになる

「とりあえずいいこいいこしてあげるんだぼっ」

「虎の人ォ！」

細い手を伸ばしてきた化け物。その巨体を横から飛び込んできたショーゼンがハンマーで殴り飛ばす。化け物の巨体は金属ブロックから弾き飛ばされ、そしてプレス機でぐちゃりと潰された

「ぼ、僕ー！？油断し過ぎー！」「ざまぁ」「…ほんと僕達って性格悪いね」

…だというのに、プレス機が上がればそんな気の抜ける声。それに脱力しそうになるのを必死で堪え、「大丈夫だかっ！？」と俺の顔を覗き込むショーゼンに頷く

「とりあえずこれ飲むべ！ミリルトルが作った痛み止めと増血剤だぁ！自分で応急措置できっか？」

「…っく、…ダイじょオぶ…ダ…。スキル：人…化…」

心配そうに見下ろしてくるショーゼンに頷き、人型に戻る。邪魔になった鎧のパーツを捨て、布切れになったインナーで右足をキツく縛り、止血する。受け取った小瓶に詰まったメタリックブルーの液体…ちょっと戸惑いながらも、一気に飲み下す

「でぇじょぶだ。味と見た目はともかく、効果は信頼出来るべ」

「…ッブッ、グブッ…がっ…ウォエエ…」

えづきながらもどうにか飲み下す。…やたら金属の匂いがする濁った沼の水を、テキーラで割ってレモンを１０個ぐらい投入したような味の、スライムみたいに粘性の高い液体がデロドロと喉を犯して

いく。…吐きたいのに、吐けない。勝手に胃の中まで流れ込んできて、呼吸するたびに洗ってない学校のプールみたいな臭いが腹から昇ってくる。――別の意味で死ぬわ！

だが、そんな薬でも本当に効果は確からしい。すぐに脳天を痺れさせるような痛みが、ズキズキと響く程度のソレへと変わる。まだ動けば痛いが、先程と比べれば話にもならない

「やだ…。卑猥…」「っつか誰得だお」「そろそろ真面目にやらない？僕、いい加減怒られそうな気がしてきた」

つい先刻まで吹っ飛ばされ、ベルトコンベアをゴロゴロと転がっていた化け物が、いつの間にか間近…ほんの５ｍ弱手前に現れる。無言でハンマーの細い柄を構え直すショーゼンに続くように、俺も体勢を低くして拳を構える

「うぷぷ、そんな武器で一体何が出来るのか教えて欲しいもんですお」

「あん…？って、なんだぁこりゃあ！？」

ショーゼンの驚愕の声が響く。――俺も気付かなかったが――ハンマーの先端、鉄塊の部分が、ごっそりと削り取られたように消失していた

ごりごりと、化け物から音が響く。それは、まるで硬い金属を噛み砕いているかのような――それで俺達は何が起こったのかを悟り、そしてもし素手で奴に攻撃したら――そう考え、ぞっとした

「うはっ、キタコレ。悔しそうな顔でメシウマだお。ねぇ今どんな

気持ち？ねぇねぇどんな気持ち？」「おい、やめろよ…」「うわぁ…。あたしたちの性格悪すぎ…」

げらげらと笑うように身体を震わせる化け物。醜い肉が揺れ、だらだらと緑色の唾液がこぼれる

「――今は引くべ！」

「あ、おいっ！？」

ショーゼンに手を引かれ、金属ブロックから飛び下りる。着地のさいにズキンと痛む右足に顔をしかめ、再びスキルで獣化して駆け出した

「おいは殴る蹴るしか出来ねんだ。チートは「武器作成」。どんな武器でも作れんだけど、作った武器は自分じゃ使えねって制約があんだわ。だからぶっちゃけなんも出来ね」

「…おれもダ。殴る蹴るしか出来ねェ」

隣を走るショーゼンの言葉に悔しさが滲む。…詰んだ、か？いや、まだだ。どうにかして相棒と合流出来れば――あるいは奴に触れず、このフィールドに頼らず、あの化け物を倒せれば――理性が無理だ、と語る。それを全力で無視しながら、ちらりと振り返れば、化け物は金属ブロックの上で止まっている。少しでも逃げて、時間を稼がなければ

「そうかぁ…。んなら、ミリルトルに任せるしかねぇだな」

「…あ？」

ぽつりと呟かれたショーゼンの言葉に首を傾げた

その台詞は、まるで俺達以外にも「人」があの場にいたみたいな――――？

side：――――

「クケラコケラギリシャヒャヒャヒャヒャヒャ！素晴らしい素晴らしいぃぃぃいぞファァルガナアァアアアア！！やはり貴様に付いたのは正解だった！いやむしろここは我輩の先見にこそ称賛の言葉を送るべきだろうっつーか送れぇえやぁああっ！！よもやよもや生きた！動く！思考する！テェェラァアアグルゥゥィィィィィィズがぁ！！我輩の思考がボケ始める前に我輩の前に現れてくれるとはなんったる幸運！さすがの主人公補正だファァァルガナアァアアアアアア！！愛しのディイイイイがいないのは残念だが許しぃてやろう！！流石主人公補正だっ！！いずれファルガナ貴様も解剖するっぴょーんっ！」

笑い声。笑い声。笑い声。狂喜を、狂気を感じる笑い声と共に「がばり」と置物のように微動だにしなかった「白い十字架」が立ち上がる

「…っつうかなんだお。まるでラスボスみたいだお。超こえぇお」
「どっちが悪役だかわからない台詞だね」「こんなんいいから猫ちゃん達を追わない？逃げられちゃうよ？」

ガタガタと揺れていた十字架が、ピタリと止まる。そして…中でロックを外したのだろうか。きぃい…と金具が軋む音を響かせながら、十字架が割れた

「フヒヒャハハハハハ！喝采せよ刮目せよ感動せよ！幼き者の夢物語！悪夢に満ちた桃源郷！楽しいか愉しいかこの腐敗した箱庭は！？我が名はミリルゥゥゥゥウイトゥウウウウ！！この箱庭に落ちし驚異的な狂気の強者なキョウキョキャキャキョーキャヒャハハハハハッッ！！噛んだ！キリフャハハハハげほっごはぁっ！？」

げぼっごぼっと本格的に咳き込み始めた――長身の女

老婆のような嗄れ声とは裏腹に、見た目だけならただの綺麗な女性という印象を受ける。最も、その美しさもドピンクのウェーブのかかったポニーテールと、咳き込みながらも口元に浮かべた皮肉げな笑みが台無しにしてしまっているが。赤いフレームの眼鏡をかけていて、体型はスレンダー。髪の色によく似たピンクのシャツと、地面に引き摺るほど裾の長い白衣――といってもいいのだろうか？ピンク色の白衣と、一転して地味な黒いパンツルック。この世界の技術レベルは中世ヨーロッパレベルだというのに、女――ミリルゥトゥの周りだけが、現代に戻ったかのようだ

「ヒヒヒ！解剖してやろう解体してやろう可愛がってやろう！餌は何がいい人か牛か豚か鳥か竜かぁ！？今なら三食昼寝付きで徹夜実験の厚待遇で捕獲キャンペーン中でございますぅううういひゃはーっ！！！」

「「「…」」」

余りにもテンションの高いミリルゥトゥの姿に、少し引き気味にガチガチと歯を鳴らすリオナアハト。…重傷は負わせても殺さないつもりだったが、そんなことは言ってられそうに無い。…狂気を感じる。そして狂気とは伝染する。この女を生かしておくことは、未来における「自分の幸せ」の妨げになりそうな予感がする

リオナアハトがリトマスに協力しているのは、一重に幸せになりたいからだ

人の恐怖を食らわなければ生存することすら出来ない身で何を、と言われるかもしれないが、リオナアハトはこの身体に転生してまだ１０年程度しか経っていない。価値観は人のそれに近い。故に――人並みの幸せを求め、それを与えてくれそうなリトマスに協力する

対して目の前のミリルゥトゥはどうだろうか

こいつは――『駄目』だ。幸福も不幸も求めていない。何を考えているのか分からない。そして何を考えているのか分からない人間が、一番恐い

「…ちょろっとばかし」「本気で」「貴女のこと、」「「「食うよ（お）」」」

細い足をたわませ、一気に跳ぶ。ニヤニヤと目を見開いて笑うミリルゥトゥの真上まで飛び、巨体を持って押し潰しながら刻み食う！例え魔力障壁だろうがなんだろうが「テラーグリーズ」の牙は何度だってそれに食らい付き、削り取る

「おんもしろい！なればこそ我輩のチートの一端を披露しようではないかイッツァショウタイム！」

そう言い捨て再び十字架に潜り込むミリルゥトゥ。――金属製の「ソレ」に潜り込む愚かさを内心で笑いながら、リオナアハトはその十字架に『空気嫁』をもって潜り込み――

ギュイイイインッ！！

――等と、時代や設定を完全に無視したメタリックな轟音に、「弾き飛ばされた」

「「「え、あ…はぁっ！？」」」

――見た目はまだ普通レベルの肥満の大男のようにしか見えないリオナアハトだが、その実体重は５００ｋｇを楽に超える。そんな自分が弾き飛ばされた――しかも触れずに――ことに驚愕しながらゴロゴロと転がるリオナアハト。元来機動性がない彼の丸っこい身体は、ゴロゴロと転がっていき、細い腕を砕いてようやく止まる

その光景に薄い笑みを浮かべながら――まったく世界観に会わない「エレキギター」をストラップで肩からかけ、「アンプ」を片手に

十字架の中より現れるミリルゥトゥ

「こぉれぞぉ！！ナルクトールより聞いた我が同胞エルフ族が持っている「インベントリ」のコピー商品「入るんですよクロスくん１３轟っ！」とぉ！我輩の黒歴史大爆笑で作った憧れ敬う西博士を参考に作った「音使いギー太さん改！」音と言う空気の深度を増幅し特定の効果を発揮する音波兵器ぃ！当然普通に曲も引けますぅ！２つ合わせてお値段たったの２９８万２９８０ゲイルゥウウウウウ！奥さん如何かな我輩の究極的チート能力「天才」のパゥワーは！パゥワーはっ！？」

――台詞はアホ極まりないが、リオナアハトは戦慄した

「音」だ。「音」を武器に変えた、と言ったのだ。奴は

「なんという厨二病…。さすがの俺も戦慄を隠せない件」「マッドサイエンティストで音使い…。糸とかも使うかもね」「許さない、絶対にだ」

セリフは馬鹿みたいだが、これでも彼は真剣だ

物理攻撃は彼の身体にダメージを与えない。だが、音による衝撃波等というものを食らったら、「どうなるのか分からない」

未知は恐怖だ。目の前でふらふらしながら「ぐぅううやはり難点は重量か…っ！！何を隠そうギー太さんは４ｋｇもあるのだ…！フォークより重いものを持てない我輩を含めた全人類には早すぎた兵器…っ！？」とか言ってるミリルゥトゥは、底が知れない

故に、「恐い」

「恐い」、から――

「別に倒せとか言われてないお」「だね、じゃあ逃げよっか」「確実に勝てる猫ちゃん追うとか…追わないよね、ごめんね…」

――「逃げる」

どうせ自分の役目は時間稼ぎ。リトマスがファルガナを殺すまでの時間を稼げればいい。この世界に捕らえておけば、ファルガナの救援には行けない

…ならば、放っておいても問題はない

そう結論付けて、ずぷり、と地面に沈み込むリオナアハト

「キヒフヒャハハ！我輩に恐れをなしたか！逃げるついでにこのストラップを外していったりしないかっ！？実は我輩チートの代償に超虚弱体質で――」

そんなマッド女の声を無視して、踵を返そうとした直前

そのメッセージは、脳裏に響いた

42、魔界四天王（後書き）

＜ミリルゥトゥ
チート：『天才』
１６９歳。↓エルフ年齢で２１歳

あらゆることを理解し、突飛な発想によって突拍子もないものを作るマッドサイエンティスト

反面肉体的には虚弱体質で、１０歳児にすら負ける貧弱さを誇る

同性愛者ではないが、何故かディーのことをお気に入り。

里を追い出されたエルフ族。正体を隠すために両耳を切り落としている

神の力を調べるために、「主人公」の死体を解剖しつくす悪癖がある。こいつの実験で死んだ主人公も少なくない

＜ショーゼン
チート：武器作成
２７歳

素材さえ作りたい武器の「格」に合っていれば、あらゆる武器を作り出せる
ただし作り手は使い手にはなれない

武器、と銘打ってあるが、その実防具や日用品、生活雑貨まで作れる

ディーの使っていた刀や、ファルガナの鎧もショーゼンの作品。他にも大量の武器や防具を作ったが、ファルガナの「最強の剣」には見劣りする。泣いた

材料さえあれば「約束された勝利の剣」だろうが「勝利すべき栄光の剣」だろうが作れるが、如何せん材料がない。泣いた

拳すらも鍛え上げれば武器、という考えから感謝の正拳１万本を日課とする。時間の概念を超えた音速拳！

性格は非常に穏やかで、片田舎に住む普通の青年。ファルガナにスカウトされて城入り。絶対に言わないし照れ屋だから言えないが、ナルクトールが好き

＜ディー

チート：１０万３０００冊の魔導図書館

２４歳

神が面白半分に綴った魔導書を収納した「王の財宝」に近い

ただし、どんな魔導書でも使えるのは一回だけ。使用後は塵に返る

効果は尋常じゃないが、その分派手。かつ馬鹿威力なため使いどころがない

性格はアホの娘。口調や格好、言動も全て「忍者」を夢見るがための演技

異世界で忍者やってみたい。という夢見がちなお子様が、実際に異世界に来て「偶然」生き残って上手いこと世渡りしてきたらこんなことに

こういうとことん現実が見えていない辺りが、リアリストのミリルウトゥに好かれてしまった要因かもしれない

42、魔王覚醒

状況は、いっそ笑い出したいほどに一方的だった

「主人公補正」を失った黒岩とファルガナ。特にファルガナは「運」だけで勝っていたが故に、リトマスに対抗する手段はなく

唯一主人公補正を保持している星は、もとよりこういう知略によって戦いを回すのは苦手。感情の高ぶりを戦闘力に変えることが出来ても、冷静さが必要なゲームにおいては何の意味もなさない

そして黒岩は――そのメンタルが、既にボロボロだった

「主人公補正」は人を堕落させる。例えどんなに高潔な人間でも、一度楽を覚えてしまえば、そうそう元のレベルには戻せない

例え主人公補正を手に入れた直後は、常に思考を回し、最善を尽くそうとしていた黒岩でも――「何をやっても上手くいく」という風に甘やかされ続ければ、次第に思考は鈍麻し、流され、感情だけで動くようになる

何故なら――例え感情だけで行動しても、「上手くいく」のだから

しかし、その主人公補正を奪われ、死の恐怖を前にした今――黒岩は、恐怖に支配されていた

「黒岩さま。カードのチェンジはどうなさいますか？」

にこりとリトマスは黒岩に問い掛ける。黒岩はびくりと身体を震わせ、「許してくれ…。もう、いやだ…！死にたくない…！」と呟く。
――しかし、リトマスは困った顔で笑った

「では、チェンジなしでございますね」

「ま、待て！…変える…！二枚、二枚チェンジだ…！」

置かれる二枚のカード。リトマスは頷き、カードを配る。…黒岩の表情が、泣きそうに歪んだ

「降りる！」

「承りました。では、黒岩さまは掛け金４枚をお支払ください」

「っ、く…うぅ…」

ポロポロと、黒岩の目から涙がこぼれ落ちる。涙と鼻水で顔をぐちゃぐちゃにしながら、カードを投げ捨てる。…中身は、ブタ。リトマスの表情が、酷薄に変わる

「…残り、８枚でございますか」

黒岩の残りは１４枚。ファルガナが２８枚。星が7枚。…そしてリトマスが、８３枚。リトマスはファルガナを狙い打ちしているようだが、それでも僅かな時間で圧倒的なアドバンテージを稼いでいた

「では、次のゲームは３０枚の掛け金でいきましょうか」

「なっ！？」

驚きの声を上げる黒岩。対して、他の2人は予想していたのだろう。苦々しくはあるが、そこまでの驚きはない

「…ようやく、「主人公補正」一掃作戦って訳?ずいぶん時間かけたのねぇ」

「ええ、勿論。この為だけにたくさんのものを犠牲にして参りました」

笑みを浮かべながらリトマスは30枚のチップを置く。…1人が置いた以上、他の者も置かなければならない。残り少ない全員のチップが、場に出された

何度かドロップしたが故に、キャリーオーバーされているチップは48枚。もし万が一、2位にでもなれれば――それが分配される。命が、繋がる

しかしそれは、リトマス以外の人間は皆変わらない。――既にこの4人の内2人が死ぬことは、決定付けられた未来。仮にリトマスが三位、あるいは最下位になったとして…確実に、1人は死ぬ

苦い顔で配られるカードに目を落とすファルガナと、星。黒岩もまた、顔を土気色にしながらカードを手に取り――「あっ!?」

パサッ、と軽い音をたて4枚のカードが落ちる。まるで図ったかのように表になったカードは、クラブとハートのJ、クラブの7、ダイヤのQ。慌ててかき集めたが、既にそれは確認されてしまった

土気色の顔色を、更に悪くしながら黒岩はカードを揃える。――普

通の少年でしかなかった彼に、このプレッシャーは酷すぎる。むしろ、つい半年前まで一般人だった星が、平然と命をベットにしたゲームを続けている事の方が驚きだ

ファルガナは手札を見下ろす。主人公補正…圧倒的な強運を失った今、カードはバラバラ…だが、可能性はある

（ハートの3、5、Aに、クラブの8とスペードの2…。「強運」があるなら迷わずストレートフラッシュを狙うべきだけど…。あるいはクラブの8を捨てストレートを狙うべき？ハートのフラッシュも揃う可能性はある…。いえ、そもそも私様は今、勝っていいの？勝つべきなの？）

――主人公補正を失った今、「クイーン・オブ・ファルガナ」は既に死んだも同然。一度奪ったものを返すほど、リトマスは甘くないはず。ならば自分がここで犠牲になることで、他の2人の「主人公補正」持ちに賭けるべきではないのか？何よりチップは今、４８枚ストックされている。もし黒岩が2位に入れば、リトマスが奪った「主人公補正」を取り返せるはず。黒岩の「主人公補正」は「クイーン・オブ・ファルガナ」の主人公補正と比べると見劣りするが、星　伸一のソレと比べれば強力…

…それに自分が死ぬことで、「黒岩　優人」が主人公として完成する可能性がある

この世界は、「お約束」のイベントがいくつも用意されている。そ

れを、長い人生を生きたファルガナは悟っていた

偶然村に立ち寄れば、丁度村娘がモンスターの生け贄に捧げられる所だったり、国が傾きそうな大事件が、「なぁなぁ」の処置で流されたり、等と。上げていけばキリが無いほどの「お約束」

――ならば、『魔王』を倒す勇者がミスをして、そのミスが原因で実力者が死ぬのも――お約束なのではないだろうか？

「…ふぅ」

考えていても、仕方がない

自分は既に髪の毛一本、爪の先まで個人ではなく、「クイーン・オブ・ファルガナ」として行動しなければならないのだ。例えここで自分が「死」ぬ運命だったとして、それで『魔王』が討てると言うなら、甘んじてその運命を受け入れよう

大きく息を吸い、吐く。死に対する恐怖はある。あるが…どうせ長い人生だったのだ。ここら辺で負けても仕方がない

（もっとも…）

「クイーン・オブ・ファルガナ」は、どんな逆境であろうとも最後の最後まで諦めたりなどしないのだが

「４枚チェンジよ」

「ほぉ…」

面白そうに笑うリトマス。そして場に出されたカードを楽しげに眺め、山札から4枚のカードを渡す。それを確認すらせずに、そのまま場に伏せるファルガナ

「…どういうおつもりでございましょう?」

にっこり笑顔で聞いてくるリトマスに、ファルガナははんっ、と鼻で笑った

「どうせ最後のゲームよ。確認してもしなくてもこれで決まるなら、後は私様は私様の「運命」を信じるわ」

「…」

凛として胸を張って答えるファルガナ

リトマスはその返答に、一瞬の苦い顔。すぐさま取り繕ったが、それがバレていないかヒヤヒヤとした

――クイーン・オブ・ファルガナは、まだスキル：主人公補正の恩恵を受けている可能性がある

こんなセリフは、彼の確認したアカシックレコードには記述されていなかった。明確に「運命」が変わっている。唯一まだ相手側にあ

る主人公補正の持ち主…星　伸一が運命を変えた可能性もあるが、さっきから一言として喋らない星が何かやったとは考えにくい

――さすが【魔王】。しかしなれど、その心意気やよし

自分の命を天秤に乗せて尚、余裕をもって行動出来る…その王の器が羨ましく、そして妬ましい

（…我は、王様の器じゃない）

今までやってきたことは、全てアカシックレコードの言う通り。言いなりになって、自分の口調や行動、全てで「キング・オブ・リトマス」を演じる自分とは違う、磨きあげた人の上に立つ者特有のカリスマに、内心で歯噛みする

それでも、勝つ。魔族を迫害する人間の頂点に立ち、何百年も生きる化け物――こいつが【魔王】でなければ、誰が魔王だというのか

…幸せになるために、幸せにするために。一切の容赦を無しにして、「主人公補正」の持ち主を全て亡き者にする

…手札は9のフォーカード。黒岩の持っていた「主人公補正」で出せる役としては、最高クラス

負けるわけには、いかない

だが…素直に思う

「素敵ですね」

「…皮肉かしら？」

「いいえ…称賛にございます」

素直に、心からの

ファルガナは不愉快そうに顔を歪め、ふんっ、と鼻を鳴らした

「子供に誉められても、ね。ほら、伸一、黒岩。進めなさい」

「はい」「…は、い」

伸一は冷静にカードを見つめ、暫くの黙考

――を、しているフリ

ここで死にたくないのは事実

だが、同時に死んでも仕方ないと考えている自分もいる

ここで死ねば…あの水色髪の女の子に復讐しなくて済む

何を、すればいいのか分からないのだ

だからとりあえず憎いような気がするあの娘に、大事な人を奪われた復讐をすることにした。復讐するために力を付けようと思ったら、ファルガナさんが手助けしてくれると言った。だから力を借りた

――自分の感情が、ドンドン擦りきれていってるのが分かる。なんのために生きているのかも分からなくってただただ惰性で復讐を遂げようとしている

――元は、あの娘に不用意に手を出したこちらが悪いと分かっているのに。実力者に喧嘩を吹っ掛けて負けて、逆恨みしているのだと変わらないと気付いているのに

それに気付かないふりして、復讐心に燃えてるふりして、前の自分と変わってないふりして――

いい加減、疲れた

だから、負けてもいい

そんな情けない感情のままにカードを交換する。――揃った役は、奇しくもツーペア…Kと、J。道化の王様と、道化の騎士

まるで自分と孝治くんのようだ…。と、久々に「心」のままに笑いが漏れた。不思議そうな顔をした3人の…いや、2人の視線が突き刺さるが、何を返すのも億劫だった

死にたくない。そんな言葉がぐるぐると巡る

喉は乾き、視界は滲む。生唾すら出ない緊張感。がくがくと震える手足と、定まらない視点

自分が今何を見ているのかすらしっかりと理解できない。手札、手札は…自分の手札すら頭に入ってこない

とにかく揃える。カードをそろえる。J以外の全てのカードを捨てて、奪い取るようにリトマスからカードを受けとる――駄目だ！勝てない。勝てない！こんな手札じゃ、絶対に勝てない！

この時点で絶望した。死ぬのだ。俺は、ここで死ぬのだ。ボロボロと涙が溢れ落ち、手札が場に落ちた。――皮肉にも、全て表で

Jのワンペア。絶望的な手札だ。余りにも絶望的過ぎて、逆に笑えてきた。顔を伏せたままくつくつと笑う黒岩に、リトマスは変わらぬ薄ら笑いで顔を向けた

「おやおや、順番は守って頂けませんと…。まぁ、よろしいでしょう。我の札はフォーカードでございます」

――終わった。確実に、この中から2人死ぬ。リトマスが最下位だったのなら、死ぬのは1人で良かったのに…。そんなことを考えながら、虚ろな目で表にされた伸一のカードに見つめる

…ツーペア。

死んだ。確実に、死んだ。たかがゲームで死んだ。それが笑えて、悲しくて、死にたくないくらい死にたい

「さぁ、貴女の番でございますよファルガナさま！さぁ疾く早くその手札を見せていただきましょう！」

自分の手札を確認すらしなかったファルガナ

彼女は目を瞑りながら――場に置かれた5枚のカードを、表返す

――スペードのA

「ねぇ」

ぽつりと呟かれた言葉。ファルガナは、カードではなく…じっと、リトマスを見つめる

――スペードの4

「あまり仮定の話は好きじゃないのだけど…」

――スペードの3

リトマスの表情が僅かに変わる。焦燥と動揺。まさか、いや。そんなはずは――あり得ない。そんな思考が、彼の脳裏をぐるぐる回る

「もし、これで貴方に勝ったら」

――スペードの、5

「私様。最高にかっこよくない？」

――スペードの――――

――インフォメーション

魔王が覚醒いたします。

魔王が覚醒いたします。

主人公の皆さんは、魔王の傍より離れてください

魔王の勝利条件は

「主人公」の皆殺しです

生存中の「主人公」の皆さんは、「魔王」を討伐してください

42、魔王覚醒（後書き）

…実は一回、レティーシアも光さんも死んじゃって慌てて書き直したのは秘密よ？

43、王竜（前書き）

…何故誰も突っ込まない！

前回【王竜の森】は攻撃不可なのにバーティナのアレが踏み潰せた件

↓性行は可
アブノーマルプレイでも可

エロゲ世界設定デスヨ。
たまに作者も忘れかけるけどエロゲ世界設定デスヨ。

ともあれ、更新遅れ気味で申し訳ない

43、王竜

―――

―――――

―――――

「…ぇっ！？あぁっ！？何事！？」

アナウンスを聞いた直後に、いきなりぷつりと途切れた意識。それを無理矢理取り戻し、身体を起こす

慌てて立ち上がり、周りを見渡す。…石板を埋め込んだような壁と天井。床、部屋を対角線に遮るように端と端に登りと下りの階段があり、それ以外には人が複数いる。部屋の真ん中辺りで倒れたファルガナ女王に、動かないホシちゃん、クロイワ。俺の周りにルク、ケイニー、ディーさん。壁際にショーゼンさんと、目を回しているらしい見知らぬ美女、そしてその足下に、右足首から先が真っ赤に染まったヒカルさん。…ヒカルさんっ！？

青い顔で壁に寄り掛かっているヒカルさん。顔色は悪く、一目で状態が良くないのが分かる。遠目に見ても小さくはない血溜まりがその足下に――って、冷静に言ってる場合じゃねぇ！

「ヒカルさん！」

慌てて駆け寄れば、顔を真っ青にしながらも視線を俺に向け、ほっとしたように溜め息を吐くヒカルさん。その口が、ゆっくりと開か

れる

「よぉ…元気…じゃなさそうだな…。ああ…くそ、顔、傷だらけじゃねえか…。服も…」

「喋らないで！この出血量はヤバい！【無常の癒しを！キュアヒール！】」

俺の頬に手を伸ばしてくるヒカルさんの手を振り払って、足に回復魔法をかける。…酷いな。肉が抉れて、骨が焦げてる。回復魔法の限界は分からないけど、外傷だったら治るはず…いや治ってくれ…！祈りながら緑色の光を翳せば、骨の周りをピンク色の肉が覆っていく。その光景が気持ち悪いのか、嫌そうにしながら視線を逸らすヒカルさん。…その先には、意識を取り戻したらしいショーゼンさん。何故かショーゼンさんは、回復魔法ではなく、俺をじっと見つめている。…なんだ？

やがて、何故か羨ましそうにヒカルさんを見つめながら、ショーゼンさんがぽつりと呟く

「恋人だか？」

「うなっ！？」

たった一言で顔が熱くなる。咄嗟に否定したくなったけど、それを堪えて回復魔法に集中――しようとしてたのに

「ん…まぁ、そんなもんだ」

苦笑気味に放たれたヒカルさんの言葉と、ぽんっと頭に置かれた大

きな手のひらの感触に急激に恥ずかしくなる。反射的に、怒鳴り返していた

「大怪我してるときに暢気な会話してんじゃねー！」

ああもう！顔が熱い！恥ずかしさから必要以上に大きな声になってしまった。するとショーゼンは目を丸くして

「…めんけぇな」

「やらんぞ」

＞ｉ３０５０５｜３３３８＜

「どんな会話だよっ！っつうかホラ！治った！多分だけど！ちょっと動かしてよ！」

なんなんだこいつら！？なんなんだこいつら！？なんかちょっと見ない間になんでこんな仲良くなってんだよ！？

ヒカルさんはまた苦笑いしながら、どうにか見た目は治ったように見える足を動かす

「…ちっと動かす度に痛むが、大丈夫だな。サンキュー」

「ん…。他に怪我は？」

随分顔色のよくなったヒカルさんの様子にほっとしながら問い掛ければ――ショーゼンの隣で仁王立ちした美女が、妙に嗄れ大た声で怒鳴る

「素晴らしい！そぉれぇが回復魔法！この世界には存在し得ぬチィイイイトッ！！まさしくチートっ！まさしくいんちきぃ！古の秘薬を使おうともあの大ケガをあっさり直すことなど不可能！ちょっと我輩に解剖されてくれぇえええええっ！」

「ひぃっ！？」

懐からメスを取り出しながら迫ってきた美女にたたら踏む。咄嗟にミストラルを抜き、その銃口を向ければ美女はぴたりと停止した

「まままままぁ待ててててそんな銃なんか人に向けるものではなぁいと我輩は思うのである！暴発したら？あるいはうっかり引き金を引いてしまったら！我輩の叡知溢れる頭がスッポーンしてしまうわけであり…」

だらだら汗を掻きながらじりじり距離を取る美女。…なんだかそれに拍子抜けしながらも、銃口を下げる。美女も、ほっとしたように息を吐いた

「んだ、ここは…？」

ショーゼンさんのそんな疑問の声に応えるように

『無理矢理この場に呼び出してしまったことに、謝罪する』

――そんな、威厳溢れる声が脳裏に響き

最早何度目になるかも分からない、空間転移特有の「ぐにょり」と足下が歪む感覚と共に

――巨大な龍の目前へと、その場にいた全員が放り出された

蛇のような手足のない細長い、薄水色の身体。その身体に純白の天使の羽が8枚4対生えている。頭部からは東洋の龍のような二本の角が生えていて、けれど真紅の目以外は存在しない、のっぺりとした外見。鱗に模様でも入っているのか、背中には頭部から尾の先まで金色のラインが何本も走っている

『人の「主人公」と魔族の「主人公」。計らずも我と故郷を同じくする同胞よ。我が名はない。されど、同胞と同じ起源を持つ「主人公」の一体。王竜である』

腹の奥にずしり、と響く重い声。自分達とはそもそも立っている位置が違う。そんなプレッシャーに誰もが口を紡ぐ中、ファルガナ女王は平然と立ち上がった

「成る程、ね。まさかあんたみたいな格上にまで主人公がいるとは思っていなかったわ」

『我もまた、そなたのような我を越える力を持つ人と合間見えるとは想像すらしていなかった』

――「あんなもの」と平然と会話できるファルガナ女王の規格外さが、肌で分かる。けれど本人…人?…彼女たちはまるで俺達が目に入っていないかのような態度で、言葉を重ねた

「わざわざ人間である私様たちを呼び寄せる――何か、理由があるんでしょ?疾く話しなさい。まだ、リトマス王との決着がついていないのよ」

『それについては、心配はない』

まるでファルガナ女王の言葉を読んでいたように、龍は僅かに身体を震わせる。――するとどうだろう。龍の巨大な身体に隠れて見えなかった5人が、姿を現す

見るからに魔族、といった外見の少年。真紅の髪を持つ角の生えた美少女、鎧姿の巨人に、文字通りの植物人間…そして、人間と変わらない色に戻ったバーティナ

「――我々は、王竜さまの力添えを得て魔界を再生することに決まりました」

…どこか悔しそうに、苦渋に満ちた表情でそう語る少年。少年を囲む魔族たちも、どこか悔しそうだ。真紅の髪の美少女なんか、見た目ボロボロに傷付いてるのにファルガナ女王を睨み付けている

『リトマスは、そなたに敗北した。我の介入によりあのゲームは終了されていないが、命を奪う呪いは解けている。そして、リトマスではどんな手段を練ろうともファルガナ、そなたには勝てぬ。故に、荒廃した魔界を建て直すことにさせた。無謀な挑戦を繰り返させるよりも、その方が有益である』

「…そう」

ファルガナ女王はしばし瞑目し――瞬く間に抜いた剣を、龍に向けて投げ付けた!?

『…何をする』

念力か何かを持っているのだろうか。龍の鼻先で停止するファルガナ女王の長剣。ファルガナ女王は、不機嫌そうに鼻を鳴らすと、綺麗な金髪をかき上げながら胸を張る

「上から目線が気に入らないわ。人の戦争を横取りしないでくれない？リトマス、詳しい話は後よ。なんならそこのトカゲの話が終わってからもう一度最初からゲームするわよ」

その言葉に、少年――リトマスくんは、僅かに目を見開き…「…勝てない、訳です」と小さく呟き、目を伏せる。その隣でおろおろとする美少女と、なんか拍手しはじめる鎧の巨人

『そなたがそれを望むのならば、我が口出しをすべきではあるまい。それよりも、同胞たち「主人公」に伝えなければならないことがある』

龍はどこか呆れたような口調で話しながら、ゆったりと尻尾を動かす。するとどういう訳か――脳裏に浮かぶのは、赤い髪の美女。眼球が時計のようになっている…？

『【魔王】が目覚めたのはそなたたちも知っているだろう。そして、あのアナウンスはこの者が現れるとほぼ同時に流れた。つまり、この者こそが【魔王】――』

…この美女が、魔王？何故だかピンと来ないと言うか、釈然としないというか…不思議とそれを受け入れられない自分がいる。それに首を傾げながら龍の言葉の続きを聞き――

「いいや、違うぜ」

鮮血が咲いた

グチャリ、と水っぽい音と共に王竜の頭部が握り潰される。赤い血が狭い部屋に撒き散らされ、濃密な血の香りに頭がくらくらする

それを行ったのは

43、王竜（後書き）

流れるようにイチャつくレティヒカにビビった

↓王竜さん

チート：最強種転生

中身はわりとビビりだし、力を扱う練習こそしてたけど引きこもりだったから実は初プレイ

だから全く最強種としての力を使いこなせてない。

今回、ディーによる『かみさまのかんがえたさいきょうまほう』で死亡

ＢＡＤ　ＥＮＤ　↓『怠惰の果てに』

今回のテンプレ

↓ラスボスは「主人公」の身内

↓ラスボスはなんか偉そう

↓ラスボスはなんか調子に乗る

↓最強キャラは必ず裏切られる

↓裏切りキャラはなんか凄く強くなる（実力を隠している）

４４、【魔王】（前書き）

待たせたのにこんだけしか更新しなくてごめんなさい

人春は駄目人間だ…

44、【魔王】

「展開が…っ！！」

引き金が引かれるほんの少しの時間。またたきを一度するかしないか程度の時間でホシちゃんの首を引っ掴み、ぐいっと横にずらすフアルガナ女王。銃声と共に放たれた鉛の弾丸はホシちゃんの頬を浅く抉り、床に突き刺さる

「急すぎるのよっ！！」

爪先までピンッと伸びた綺麗な弧を描く右回し蹴り。。それを上体を逸らして避け、そのままの体勢でマシンガンから弾をばら蒔く――アベ。またも引き金を引く僅かな時間でファルガナ女王はホシちゃんを投げ捨て、その弾幕の範囲から逃れる

「援護しなきゃ…！」

「待つべ！ファルガナさまが本気で戦ってる時に余計なちょっかいかけっと厄介者扱いされるべ！」

ミストラルの銃口を向けた直後にショーゼンが銃身を掴み、無理矢理下げる。俺達がもたついている間に、アベとスイッチしたディーさんがアベと位置を入れ換え、魔導書が輝く。ファルガナ女王が表情を歪めてその場から飛び退――かない。両手で顔を防御しながらその場でぐっと腰を落とす。――何故？と俺が疑問に思う中、この部屋全体が凍り付くような冷気がディーさんの手から噴射される。ファルガナ女王の足下からから氷が張り、綺麗な金髪も凍り付く―

―けど、その背後で呆然としていたホシちゃんと、クロイワは無事だった

「はっ！使えない仲間持つと大変だな！」

その隙にマシンガンのマガジンを交換したアベが再び弾幕を張る。無数の弾丸を素手で弾き飛ばしながら、ファルガナ女王が叫ぶ

「伸一！優人連れて逃げなさい！」

言いながら、再び凍りついた地面を砕くような威力で跳んだファルガナ女王が、アベに襲い掛かる

「たんまたんまっ！まだアンタを殺すわけにはいかな…うわっと！？」

アベの悲鳴が上がるが、ファルガナ女王はそれを一切無視して俺の目には見えない程の拳撃をアベに叩き込む。――しかし、それはまるで見えない壁に阻まれるかのようにアベの目前数ｃｍで止まる

「レームシルクさま！ガナルさま！バーティナさま！リオナアハトさま！ファルガナさまを援護いたします！」

「はいっ！」「…ふん」「はぁ～い。っても今のティナちゃんが役に立てるか不安なんだけど…」『諒解』

それぞれの性格の垣間見える返事をしながら駆け出そうとした魔族たち――しかし、その目前に立ち塞がる、ディーさん

「いや、申し訳ないでござる。魔族チームはみんなそこそこ人気で

ござる故に、まだ殺せぬのでござるよ。【魔王】チームは主人公を殺すとき、人気がない者から順番に殺さなきゃいけないのでござる」

困ったように笑いながら、細い目を更に細くして笑うディーさん。その能天気な笑みに何かを刺激されたのか、愛らしい容姿に青筋を浮かべながらディーさんに飛び掛かる赤髪の美少女

「訳の分からないことをゴチャゴチャと…っ！もういい！燃え散れぇっ！！」

轟！と炎を吹き出しながらディーさんに突き刺さる拳――轟轟と燃え上がる拳は肉を焼くように、小さな音を響かせながら鎧の巨人の身体を貫いたっ！？

「なっ…！？」

「リオナアハトさま！？」

腹部に大穴を開けながら鎧の巨人は膝を付く。だが、手は大丈夫だ、ということを証明するように振られている

そしてそれを小馬鹿にするように、大袈裟に溜め息を吐きながら口を開くディーさん

「やめておいたほうがいいでござるよ？今、この場において「ルール」はメチャクチャになっているでござる」

…意味の分からない言葉に全員が動きを止める。ファルガナ女王すらも眉間にシワを寄せてディーさんを睨む中、その隙に距離を離したアベが汗を拭いながら笑う

「【魔王】のチートの1つだ。例えばディーが攻撃されたらディーが傷付く、それがこの世界の当たり前のルールだ。――だが、【魔王】とその仲間になった者はそんなルールに縛られたりしねぇ。【魔王】ってのはこの世界に新しい「ルール」を刻み込めるんだ。【魔王】の仲間を傷付けようとしても、加害者の仲間が傷付いたり――」

アベが腰から手斧を抜く。攻撃か？とそれに気付いた者が身構える中――アベはその斧で、床覆う氷に歪な円と、その中に子供が描いたような適当な星形を描く

「死んだ「主人公」を蘇らせたりな！」

バアアア…と、神聖さすら感じる光の奔流。眩しさに目を瞑りかけ、気力で光の中心を睨む――現れたのは――巨大な龍

つい先程、頭部を破壊されて死んだはずの王竜が――低い唸り声を上げながら、敵意もあらわに俺達に立ち塞がる。ごろりと転がる自身の死体にも目をくれず、ただただその視線の先には俺達がファルガナ女王が…映り込む

ガクガクと足が震え、腰が抜けかける。もし、さっきアベが言っていたことが本当なら――あの龍に攻撃しようとしても傷付くのは味方だけで、俺達は一方的に攻撃されることになる。もしそうなら――俺達に勝ち目は無い

――俺は、その時、諦めかけた。終わった、と思った。こんな奴に勝てるわけがない、と思った。

けど…本物の「主人公」は…こんなことじゃ「諦め」たりなんかしないらしい

「――嘘、ね」

「…」

ファルガナ女王は断定するようにアベを睨み付けながら、腕を広げる。分厚い氷の層に閉じ込められていたファルガナ女王の長剣が、氷を砕いてその手に収まる。――長剣は、ファルガナ女王の小さな呟きと共にその姿を黄金の単槍へと変えた

「それが本当なら、わざわざ私様が殴ってる時に防御する必要無いものね。見たところせっかく復活した王竜も頭パッパラパーみたいだし」

グルルル…と唸り、ダラダラとヨダレを溢す王竜を皮肉げに眺めるファルガナ女王

「そうでございますね。大方その身代わり戦法が使えるのは【魔王】以外の部下だけなのではないでしょうか？恐らく…必然的に部下が少なくなる【魔王】が、使える部下を失わないようにするための補正…ということでしょう。「主人公」とこの世界の人間、魔族では実力に差がありますから」

杖を構え、本を片手にディーさんと対峙しながらチラリとアベに視線を向ける魔族の少年

「チッ…。さすが「主人公」筆頭2人か。下手な小細工は効きませんってか？」

舌打ちしながら渋面を作るアベと、「あ、あはは…。知性派と武闘派がなんか仲良くなってるんでござるが…。もしかしなくても拙者、貧乏クジでござる…」と冷や汗を垂らすディーさん

「…けど、それが分かった所でどうしようもねぇもんってあるよなぁ…？」

「私様には無いわ」

「ちょっと黙ってくださいませんか？」

胸を張るファルガナ女王と突っ込む少年。…なんだか、嫌な予感がする。動くに動けなかったヒカルさんの手を握り、ショーゼンに手招き。近寄ってきた2人を連れて、ルク、ケイニーと合流する。ヒカルさんも獣化して、動かないクロイワを背中に乗せ、未だに呆然とアベを見つめるホシちゃんを引っ張ってきた

「…ヒカルさんはケイニーから離れろ」

「いや、でもお前…」

「いいから離れる！ケイニーの面倒は俺が見るから！」

「あ、あんたみたいなちんちくりんに面倒みられたくない…っ！」

小声で言い争いながらもとにかく一触即発の空気を醸し出すファルガナ女王たちから離れる

「つまり――こういうことだ！暴れろ王竜！この部屋ぶっ壊せ！」

――そう来たか！アベの声と共に雄叫びを上げ、羽からビームみたいなのを出しながら暴れ始める龍――明らかに俺達は邪魔になる！

判断は一瞬。その場にいた全員は同じ結論に達したのか、皆一斉に階段を目指して走り出す

「上！ここは地下です！上に逃げます！」

ショーゼンに担ぎ上げられたルクが叫ぶ。ケイニーを背負い、その柔らかい身体になんだか無性にイラッとしながらも階段を駆けあがる。すぐに背後にドガァン！とかズガァン！とか爆発音が聞こえるが、俺とかヒカルさん、戦闘タイプじゃない女子2人じゃ役に立ちそうにない。とにかく逃げる！

「あ、あたしの匂いで【魔王】をパーにするとかぁ～！？」

「た、多分、無理っです！ルール無っ用の！チート能力者ですっから！？私も！【魔王】っが全然見えまっひぇん！？」

俺におんぶされたケイニーと、俵担ぎにされたルクの報告。ちなみにおんぶじゃないのは、ショーゼンさんがおんぶすると身長差のせいでルクが色々キツいのだ。俵担ぎは俵担ぎでお腹が痛いみたいだけど

「こ、ここっ！地下7階っです！早く地上に出ないと！？ビームが貫通してくるかもっ！？」

マジで！？クソーッ！洒落にならねぇよ！戦い1つ1つの規模が全然違う！一応味方っぽい雰囲気だったけど、あの魔族の人達は大丈

夫なのか？…心配ではあるけど、そこまで手が回りそうに無い！知り合いだけで手一杯だ！

妙に長い階段を登りきり、１つ上の階へ。どういう構造になっているのか分からないが、どうやら上の階への被害はないらしい。これだったら無事脱出も出来そうだ

「こ、この王竜の祠は！階段みたいにフロアが斜めに設置されてって！深層まで１２階あって！？それぞれのフロアに王竜の試練がぁ！」

「その龍が死んでんのに試練もなにもあるか！いいからルクは喋んな！舌噛むだろ！」

「女の子にその言い種はねぇべ！」

「俺も女だっつーのっ！」

言い争いながらどんどん走るが…キツい！元から俺はそこまで体力あるわけじゃないし、ケイニーよりも小柄だ。だからといってケイニーを自分で走らせたら汗かいてこの場にいる男を皆パーにしちゃうし、ルクはケイニー以上に貧弱…ってあれ！？なんか変な美女はどこにいった！？

「ヤバイ！１人置いてきたかも！」

「でぇじょぶだ！ミリルトルは殺しても死なんべ！多分ディー関係でまた怪しいことしてんに決まってんべ！」

なら良いけど…！！ああもう！足が震える！だらだらと溢れた汗が

目に入りかけるが、両手を使わないとケイニーを落としてしまいそうだから気力で目を開く

とにかくここから出れば休める！そこまでの辛抱！がむしゃらに足を動かし、ひたすら階段を、フロアを駆け上がり――３つほどフロアを通り抜けた直後、階段を登ろうとした直後に声をかけられる

「アナタたち、こっちよ」

――っ！？聞き覚えのある声に全員が驚愕と共に足を止める

…果たして、そこで佇んでいるのはいつもの魔女姿のリーデスさん。どこか不機嫌そうだが、それでも普通に生きてる…！？

「転送魔法で上に送るわ。そこに並びなさい」

「そ、それより【魔王】が下で女王陛下と交戦中です！魔力は温存してその加勢に――」

ルクの言葉にリーデスさんははぁ…と小さく溜め息を吐き、杖を構え――？

「インベントリ！レイピア！」

俺が取り出したレイピアが地面に突き刺さるのと、

「【緋ｇｅｒｙ雷↓ｇｔｐｊ雨ｉａａｇ雲】」

いつか食らったリーデスさんの魔法が弾けるのは、全く同じタイミングだった

４４、【魔王】（後書き）

ちなみにリーデスさんは精霊になるさいに一回死んでるのでぼっちり蘇生枠

【魔王】のチート

↓ルール無用

「攻撃不可」の王竜の森でも好き放題攻撃出来たり、逆に攻撃されたり

↓「主人公」再生

死んだ「主人公」を蘇らせ、自由に操れる

ただしその「主人公」は限定された単純な命令しか聞かなかったり、稀に暴走したり

↓「チート」再生

死んだ主人公の能力の一部を使える

↓【魔王】補正

「主人公」にしか倒されなかったり、普通なら瞬殺されるＶＳファルガナとかやっても意外と生き残れたりする補正

デメリットとして、【魔王】は主人公を弱い（神様に期待されてない奴）から順に倒さなきゃ主人公を全滅させられない、という様式美を重視する面もある。

詳しく説明すると長くなるので割愛

結構読まれてましたね、【魔王】の能力

…もっと突飛な能力の方が良かったかなぁ？

今回のテンプレ

↓「主人公」の敵になる師匠キャラ

４５、ＶＳ魔王（前書き）

久しぶりっすね

泣きたくなるくらい久しぶりっすね

自分のムラにイラッてするくらい久しぶりですね

本当に申し訳ない

45、VS魔王

6枚の翼から熱線を吐きながら暴れる王竜に苦労しながら、リトマスはアカシックレコードの記された本を捲る――しかし、そこに記されているものは「何もない」

「やはり、でございますか…」

白紙と化したアカシックレコード。それが意味するのは自分のチートがほとんど意味を成さなくなったこと…。魔王を目前にした直後から起こったこの現象が起こった理由は、魔王の話を聞いて察した

「ルール」がむちゃくちゃにされている――それは、リアルタイムでアカシックレコードを書き換えられ続けているということ。こと魔王との戦闘において、自分以上に何も出来ない主人公もいないだろう――そう察したリトマスは歯痒い思いで杖を構える

――王竜の相手は流石に出来なくても、【魔王】は普通の人間のように見える。なら、自分でも倒せる可能性はある――ならば、敵の動向を探り、隙を突く。冷静に、確実に…

「【グングニール】ッ！！」

ドパンッ！と水風船が破裂するような怪音が響く。ファルガナの手から放たれた【必中】の力を持つ北欧神話の主神が持つ黄金の短槍は、空気の壁を突き破り、「魔王の部下には攻撃が当たらない」というルールすらも突き破り、王竜の身体に風穴を開けた

「グギャアアアアッ！！」

王竜の苦鳴が響き渡り、鮮血が舞い散る。身体に風穴を開けた王竜が、血走った目でファルガナを見下ろす

「…一応私様の切り札の１つだったんだけどね…」

舌打ち混じりのファルガナの声に、魔王の嘲笑が響く

「ははははっ！そいつぁいくらなんでも王竜を舐めすぎだぜ！どんなに強くても人間でしかねぇあんたが一撃で王竜を倒せたりしたらゲームバランスがムチャクチャだしな！」

「…ゲーム、ねぇ」

手元に戻ってきた短槍を長剣に戻し、腰を落として魔王を睨み付けるファルガナ。対して魔王はにやにやとした嫌な笑みを浮かべながら、荒い息を吐く王竜の身体に手を当てる

「…とはいえ、だ。正直言ってクイーン・オブ・ファルガナ。あんたの実力は脅威だ。驚異的だ。人間としてはトップクラスだ。そこにいるキング・オブ・リトマスの『人気』は、実力じゃない。本当は弱い主人公が、知恵と仲間だけを頼りに強すぎる敵に立ち向かう…。そんなシチュエーションがウケて人気が出た「主人公」だ。リトマスとあんたじゃ訳が違う。レベルが違う」

「…くっ」

真実を突かれて唇を噛むリトマス。はったりと虚勢で作り上げた「キング・オブ・リトマス」の本当の姿を見透かされていることにも、

それを得意げに話す姿にも心がささくれ立つ。――そんなリトマスの内心を察したかのように、文字通り怒りの炎を燃え上がらせるレームシルク

「リト様を――馬鹿にするなぁあああああああああっっ！！」

全身から真紅の炎を吹き出しながら宙を飛ぶレームシルク。彼女が通った空間を焦がしながら魔王に接近――するも、直前でディーの魔導書が輝き、氷の壁が立ちふさがる

「それがどうした！私の焔は水すら燃やす！」

獰猛な肉食獣の笑みを浮かべながらレームシルクは氷の壁に手を打ち付け――炎と化した腕が凍りついたのに驚愕。歪な氷柱と化した手に炎化した身体が「肉」の身体に変えられていくのを恐れ、おののきながら距離を離す

「っぅ…っ！？い、一体…！？」

キッ！と真紅の単眼で氷の壁を作り出した獣人を睨み付ける。獣人は輝き続ける魔導書を片手で掴み、困ったように頬を掻きながら…レームシルクに、微笑みかけた

「…なんか色々ごめんでござるが…。『エターナルフォースブリザード』」

ボゥッ…と静かに燃え上がる魔導書。同時に放たれた氷撃は一瞬でフロアの全てを凍り付かせながらレームシルクに迫り――

「流石にそれは洒落になってないかも！クワイエットファントム！」

直前でレームシルクを庇うように立ち上がった液体の巨人を凍り付かせ、砕け散らせた

「液体のクワイエットファントムをいくら砕いても無駄だよ！ってわけで次はティナちゃんの」

得意げに叫びながらディーを指差そうとしたバーティナの動きが、ぴたりと止まる

「え…ぁ…ぐぷっ…」

黒髪に白い肌を持つバーティナは、バーティナ本人ではない。彼女…いや、彼だろうか。バーティナ本体の「影」にすぎない。いくら破壊されようと、なんど殺されようと複製出来る――のだが、バーティナは本体に異常を感じる

「『エターナルフォースブリザード』…相手は死ぬ」

ぐしゃり、とバーティナの影が倒れ伏す。うつ伏せに倒れた影の体から、赤黒い血が溢れ出す。――半ば以上仲間の死を確信しながら、リオナアハトは唐突に魔王の背後に現れ、鋼の拳を振り上げた

『獣人には攻撃出来なくとも魔王にだったら問題ない』

氷は有機物だ。リオナアハトの『空気嫁』では透過する事はできない。だが、フロアを作っている石材は無機物――なんの問題もなく、すり抜けられる

『潰れろ』

「嫌だね」

後ろを見すらせずにしゃがんで拳をかわした魔王。パンッ！と小さな、けれど妙に響く手と手を打ち合わせる音。魔王の手がリオナアハトの鎧に触れ――青白い光と共に、バチバチと甲高い音が鳴る

「物理無効のテラーグリーズ相手にするなら――」

魔王の、笑いを堪えているかのような抑えめの震えた声。その声に応えるように、光が、音が、小さくなっていく

「やっぱ属性攻撃だろ」

鋼の鎧が、姿を変える。一目見れば「ソレ」だとわかる――テンプレートのダイナマイト。それらを全身に巻き付けた醜悪な巨人が、醜い身体を揺らしながら全身の口を開き――

「「「…しまっ！？」」」

轟音が、爆発音が響く。無数の牙によって爆発させられたダイナマイトがリオナアハトの身体を肉片に変える。上半身を失ったリオナアハトの下半身が、焦げた肉の匂いを発しながらふらふらと歩き――ぐしゃり、と崩れ落ちた

「人気順で言うとお前は7位…。まだ殺せねぇが、死ぬ寸前までなら大丈夫って訳だ」

ぽんぽんっ、と手に付いた埃を払いながら、なんでもないことのように言う魔王。――勝てない敵じゃない。勝てない敵じゃないのに

――勝てない。その事実に戦慄するリトマス

それとほぼ同時に、巨大な王竜が崩れ落ちる鈍くも水っぽい音が響く。魔王は「5分も保たないのか…。マジチート過ぎんだろ」と呆れたように言いながら、王竜の首を切り飛ばし、その骸の上に仁王立ちするファルガナを見つめる

ファルガナは全身を王竜の血で真っ赤に染めた、悪鬼の如き姿で、無表情に左手で握った長剣と、右手に握った長槍に視線を落とす

「良い槍ね、木人」

「…装備、魔法…『竜殺しの大槍』…竜族相手にダメージ値二倍…気に入ったの、なら…くれてやる…」

「あら、貢ぎ物？良い心掛けよ。ちょっぴりアナタを気に入ったわ」

くすくすと小さく笑うファルガナと、その言葉に迷惑そうに顔をしかめるガナル。出会って間もないのに仲良さげな雰囲気を醸し出す2人に、表情を歪める魔王

「…出来ればレームシルクも殺しときたかったんだかな…。やっぱリーデスはこっちに使っとくべきだったか…？」

ぶつぶつと呟かれる言葉にぴくり、と眉を顰めるファルガナ。友人の名前が出たこと…しかも、その友人を「別な事に使っている」らしいことが伺える台詞に、僅かな怒りが湧く

しかし、それを問いただすより早く魔王が踵を返す。向かった先は――オリジナルの王竜の死体。首を失った死体に駆け寄る魔王の背

中に、追うか否か一瞬だけの逡巡

「バーティナ殺せただけでも良しとするか。ディー！引くぜ！」

「い、いきなり言われても！？初対面で命令されても困るでござるぅ～！」

パンッ！と再び拍手の音。魔王の手が王竜の身体に触れると同時、幾度目かも分からない青白い光とバチバチと響く放電音

「ここで逃がしてたまりますか…っ！！」

リトマスが杖を振り、雷の槍を作り出し、放つ。それは無防備な背中を晒す魔王に向かって突き進む、――獣人、ディーが強力な魔法を使うには宙に舞う本を手に取らねばならないのだろうこと、そしてそのディーは突然走り出した魔王の後を追うために、走り出した直後。…ならば、魔王を守るための魔法は咄嗟には使えないはず――そんな推測から放たれた雷の槍は、一直線に魔王に向かって突き進み――

くるり、と魔王が振り向いて、笑った

「お前ら、死ぬなよ？」

そう言い残し、唐突に魔王の姿が消え去る。呆然とその光景を見ていたリトマス。よくよく見れば、ディーの、そして転がっていた王竜の死体…オリジナルも、コピーも消えている

しかし、残っているものもある

魔王が、錬金術スキルで王竜の身体から作り出したのだろう、それ
笑えるほどに巨大だった王竜と比べれば小さい。けれど普通の人間
と比べれば、その大きさも、破壊力も、殺傷力も桁外れに大きい

――世界観に合っていないにも程があるそれは、現代日本で「ミサ
イル」と呼ばれる兵器で

そのミサイルに向けて、自分の放った雷の槍が突き刺さるシーンが
――リトマスの目には、まるで、スローモーションのように見えた

雷の槍は正常に、当然のごとくミサイルに突き刺さり…内側にみっ
ちりと詰められた火薬に火を付け

狭いフロアの中に、焔が、爆発が荒れ狂った

４５、ＶＳ魔王（後書き）

密閉空間で焼夷ミサイルとか本当にアホ過ぎる

今回のテンプレ

↓即死攻撃

↓弱い子から死んでいく

↓えたーなりふぉーすぶりざーど

ミサイルの爆発ですからね。当然色んなとこに影響与えます

45、VS「魔女の頂点」

「っ…くぅ…！？」

雷撃の余波で痺れる身体に鞭を打って数歩下がり、ケイニーを背中から落とす。「きゃあっ！？な、なにするのよ！？」と抗議の声が上がるが、構っている余裕はない

「なにすんですかリーデス！？あ、誤解戦闘ルート！？ちゃんとルクちゃんたちは本物ですー！？」

「知ってるわよ」

ルクの叫びを聞いてなお、魔女はぽんぽんと杖で肩を叩きながら、不機嫌そうに俺たちを見据える

「あたしが魔王の手下になった、ってだけよ。変に期待させちゃって悪いけど、あたし死んじゃったのよね。死んだ「主人公」が魔王に召喚された場合、魔王の命令には逆らえないのよ」

「なっ…！？」

静かに広がる衝撃。全員が息を飲む中、リーデスさん…だった魔女は、軽い調子で言う

「だからケイニー・フレッツェルを殺させてくれないかしら？召喚された復活主人公は1人でも生存している「主人公」を殺せば召喚されなくなるのよ。あたしとしては本体に後は任せて大人しく死ん

でたいの。同じ人格を持つあたしとアタシが対面したら、ろくなことにならないでしょうからね」

「っ…！？」

言葉の意味はわからないが、それでもその場の全員が戦慄する。誰もがその可能性を考え、けれどそんな馬鹿な、と否定する中、恐る恐る、といった様子でルクは問う

「そ、その台詞はまるで…、ケイニーさんを差し出せば、見逃してやる…と言っているように聞こえますが…」

その質問に…魔女は、呆れたように溜め息を吐き、言い捨てた

「理解が遅いわね…。そう言っているのよ」

「ひぃっ！？」

ひゅっ、と風切り音。魔女の杖の先端が、俺の背後のケイニーに向けられる。まだ距離は離れているのに、ケイニーは短く悲鳴をあげた。…俺も、あげたい。あの魔女はリーデスさんなんだ。だったら俺ごとケイニーを殺すことも、この場にいる全員を殺すことも出来るはず

「選びなさい。１を犠牲に他が助かるか、全滅か。一応忠告してあげるわ。この場にいる「主人公」の中で、まだ殺してはいけない「主人公」はいないわ。【魔王】が「まだ」殺しちゃいけない主人公は期待値ＴＯＰ１０まで。あなた達は残念ながら圏外よ。…最初の雷撃で全滅していてくれたら、こんな面倒なことしなくてすんだのにね」

ちらり、と魔女の視線が俺を射抜く。つぅ…と背中を冷や汗が伝い、脂汗が吹き出た

…本気だ。この世界でもトップクラスの実力者であるリーデスさん本人と同じ実力のある敵が、訓練でもなんでもなく、本気で俺の命を狙ってる…そんな目眩がしそうな現実に、いっそ気絶してしまいたいくらいのプレッシャーが全身にのし掛かる

…だからって、ケイニーを犠牲になんか出来ない。ちらりと隣に視線を向ければ、ヒカルさんも真剣な表情で視線を返してくる

すぅ…と息を吸い、大きく吐き――魔力を練り上げ、ミストラルに弾丸生成。じっと魔女を睨みつつ、じりじりと間合いを詰める

「俺達がこいつをどうにかする。お前らは逃げろ」

ヒカルさんの声に戸惑ったような気配。しかし、「婆とは何度も訓練で戦ってる！お前らよりは俺達の方がマシだ！」というヒカルさんの声を聞き、顔を見合わせ――階段へと走り出す5人。ショーゼンさんがクロイワを担ぎ、ルクは自分の足で、そしてケイニーは正気に返ったらしいホシちゃんが背負う形で走り去っていく

…それを黙ったまま見送る魔女の姿に、嫌な予感がむくむくと膨れ上がる。今すぐ逃げ出したいような気持ちで油断なく魔女の動向を伺うが、魔女は動かない

「…わざわざ待ってくれたのか。優しいなぁオイ」

皮肉げな笑みを浮かべて口を開くヒカルさん。対して魔女は、それ

らを一切気にせず肩をすくめる

「言ったでしょ。1人主人公を殺せればそれでいいのよ」

…で、その「主人公」が2人もいるから追う必要もない…ってことか？くそっ、完全に舐められてる…。当然といえば当然だが

俺達の手の内はほとんどリーデスさん…目の前の敵となった魔女には知られているんだ。それどころか、魔女に教わったものの方が多い。そして3ヶ月以上訓練しても、俺達はリーデスさんに触れるどころか、5分保たせるのが精一杯だった。全力で戦って、半分以上遊びながら戦っていたリーデスさんに文字通り弄ばれるほどの実力差…。俺達に勝ち目は、ない。それこそ奇跡でも起きない限りは生き残ることすら難しいだろう

けど…

「一応俺たちも「主人公」、だよ。…1回や2回、奇跡くらい起こせないとね」

「奇跡を起こす、ねぇ…。ったく、ハードルたけぇなぁ…。やるしかねぇけどよ」

逆に、俺達はリーデスさん…じゃなくて、魔女の攻撃パターンを知ってる。わざとリーデスさんがパターンを作っていてくれたのかもしれないけど、あの王竜の様子を見ると復活した主人公は頭が悪くなるみたいだし…。この魔女はどこまで頭悪くなってるのかは分からないけど、上手くいなして逃げられれば…

ごくり、と生唾を飲み込む。ピリピリとした空気に肌が粟立ち、ぞ

くぞくと背中に嫌な汗が流れる

「…そ、なら良いけど…」

魔女は呆れのため息を吐き――じろり、とゴミを見るような目で俺達を睨み付け…

「っ！？」

空気がぴしりと凍る。これは――初めてリーデスさんに襲われた時に使われた、擬似時間停止！？前と同じように動きを止めたヒカルさんと、そのヒカルさんに向けて杖の先を向ける魔女――まずい！

「させるかっ！インベントリ：ナイフ！」

右手にナイフを持ち、左手なミストラルを持ったまま、練り上げた魔力全部使って魔力障壁を展開。擬似時間停止は、魔法に対する耐性が低い生物の時間の流れを極限まで遅くする魔法。例えば俺みたいなエルフや、魔法に慣れ親しみ、耐性を付けた魔法使いでなければほとんど時間が止められたのと変わらない。だから、魔法耐性がほとんどないヒカルさんにとっては時間が止められているのと同意だ。無防備になってるヒカルさんを守る手段は多くない。とにかくまずは接近して杖を破壊する。どんなに強くても人間の魔法使いである魔女なら、杖さえ壊せば魔法は使えない！あまり攻撃されると不味い、なら一気に決める！

小柄な身体を駆使して雷の矢をかいくぐり、足の速さを活かして走り寄り、逆手に握ったナイフを杖に向けて振り――

「…と、考えるのは当然よね？」

「えっ…!?がっ!?」

がつん!と顎を真下から突き上げる衝撃。一瞬視界が真っ白に染まり、かくん、と膝から力が抜ける。…殴られた、と察するまでそう時間はかからない。だというのに、ふらりと揺れる視界と身体は反応しない

「魔法使いが接近戦は出来ないって固定観念は捨てなさい。あなただって多少は心得あるでしょう?」

――如何にも魔女って格好したあんたが!訓練のときはひたすら魔法しか使ってこなかったあんたが言うな!

そう叫びたい気分で、けれどそんな余裕もなく、転がるようにして距離を取る――が、その逃げた先を塞ぐようにして空間が爆発する。無詠唱だというのに、俺が詠唱して放つよりよほど強力な魔法。肌が爆ぜ、空気が焦げ、目が霞む――く、そ…!治したばかりの身体がどんどん傷つき、身体の内側で致命的なダメージが積み重なるのが分かる。痛みが大きすぎて逆に笑えてくるのが気持ち悪い

せめてヒカルさんが動ければ2対1で大分違うのに…っ!

「諦めなさい。エルフちゃんじゃ何回挑戦したところであたしには勝てないわ。…それこそ、奇跡でも起きない限りね」

「…っ、うるっ…」

血を吐きながら腕を振り、苦し紛れにミストラルを構える。――照準を魔女の胴体に向け――わずかな戸惑い。リーデスさんと同じ顔。

同じ声。同じ仕草をする魔女を殺せる弾丸を放つ。恩を返すと決めたのに、その恩を仇で返すかのような…その躊躇を無理矢理押さえ込み、引き金を――引く

「っさい！！その声で喋るなぁ！」

放たれた弾丸。床に寝そべりながら、震える手で放たれた魔力弾は空気を切り裂き、魔女の腹…ではなく、その手に持つ杖を破壊しようと迫り――

「だから、無駄だと言って」

それより早く、魔女が魔力障壁を展開しようと片手を上げ――

ズズンッ！と足下が揺れた

「「なっ…！？」」

タイミングが良すぎる地震のような揺れ。地面に倒れていた俺はともかく、気怠げに立っていた魔女はほんの一瞬、バランスを崩す。すぐさま立て直したものの、集中を乱されたせいで障壁を張るのが間に合わず

ミストラルから放たれた弾丸は、僅かに立ち位置を変えた魔女の左わき腹を削り取るように突き進み、壁をえぐってようやく止まった

「り、リーデスさん！？」

慌てて、ぼだだだ！とおびただしい量の赤い血で足下に血だまりを作る魔女のそばに駆け寄る。魔女は内臓も傷つけたのか、口から血

の雫を垂らしながら…薄く笑った

「…まさか、本当に奇跡が起こるとは…ね…」

奇跡…本当に奇跡だ。地震だかなんだか分からないが、アレが無ければ問題なく魔女はミストラルの弾丸を防げていただろう。そしてその反撃で俺は死んでいたかもしれない

「でも、まだまだね。致命傷だけど…これじゃ、死ねない」

そう言うと魔女は手を伸ばし――ミストラルの銃口を、額にくっつけた

「ちょっ!?なにを…!?」

「どうせ致命傷だもの。死んでも代わりない…。一応命令に従ってるし、何の問題もないわ。…いい?復活主人公は何度でも召喚出来るわ。何度も私と戦う覚悟を決めなさい」

慌てる俺を無視して…引き金を押す魔女。何の問題もなく発射された魔力弾が、その頭部をえぐり取る

ぶちゃあっ!と出来の悪いB級映画のようにまき散らされる血と骨の欠片。白っぽくもピンクの脳髄。…現実感のない光景に吐き気がこみ上げる

…くそ、えぐいな…。リーデスさんと何度も戦わなきゃいけないとか、精神的にも肉体的にもキツすぎる…。フラつく身体でどうにか立とうとして…ぐらり、と身体が傾いた

どさっ！と身体が床に倒れる音が、妙に遠い。…これは、まず…い？あれ…ぐるぐると渦巻く視界の端に、慌てたように周りを見渡すヒカルさんの姿

「…っ！？なっ！？おい！大丈夫かっ！？」

…魔女が死んで擬似時間停止が解けたんだろう。こちらに駆けてくるヒカルさんの動きは早い。あっという間に近付いてきて、軽々と俺を抱き上げる

「…ごめ…あとよろし、く…」

力強い腕の中で、妙に安心しながら俺は…そのまま眠ることにした

45、VS「魔女の頂点」（後書き）

言うまでもなく地震（笑）はミサイルの爆発ですとも

今回のテンプレ

↓偶然の勝利！

この辺りで2部終了？

あとは最終章、魔王討伐です

…ちょっと多めに閑話を挟みますよ

お知らせ

烈火　さんが入室しました

烈火＞お前ら起きてる？

烈火＞お知らせの時間ですよ

烈火＞運営会議の時間ですよ

流水　さんが入室しました

疾風　さんが入室しました

大地　さんが入室しました

王神　さんが入室しました

根暗　さんが入室しました

疾風＞呼んだ？

王神＞おいお前

大地＞名前変えろと何度も言ってんのに…

流水＞根ｗｗｗ暗ｗｗｗお前らｗｗｗ夫暗杉ｗｗｗプギャーｍ９（

＾ｏ＾）

烈火＞流水はほんとネット人格怖いな…

烈火＞ともかく、魔王目覚めたよ

疾風＞処理大変になるね…

王神＞ゲームバランスは？

大地＞基から魔王有利みたい

流水＞っつうかｗｗｗ主人公勝てないｗｗｗワロスｗｗｗマジキチ展開ｗｗｗマジワロリアンｗｗｗ

烈火＞…流水ェ…

疾風＞主人公チームが全員手を組んで、チームワーク抜群じゃないと勝てないレベルにしろって

大地＞え、だれがそんなん決めたん？

疾風＞運営さまー

烈火＞運営ェ…

流水＞目覚めた魔王ヘッポコｗｗｗ運営ざまぁｗｗｗ

運営　さんが入室しました

運営＞お前らこんなとこでなにしてんの？

流水＞

烈火＞運営さんこんにちわ！

疾風＞運営さん今日もイケメンっすね！

大地＞運営さん素敵！抱いて！

王神＞運営さまが後光で見えない！

根暗＞こんにちわ

運営＞根暗空気嫁

流水＞運営さま、今日はどうなされたんですか？

運営＞流水、ここちゃんとログたどれるからな？

流水＞正直すいまぇんでした…

運営＞後で公開ストリップな。ж王者жさんの前で

流水＞レイープフラグｋｔｋｒ

流水＞…え、本気ですか？

流水＞土下座するんでやめてくださいませんか？

運営＞考えとく

運営＞ゲームバランスだけど

運営＞むしろこれくらいでちょうど良いわ

運営＞意外と残ってる主人公に根性ねぇわ

運営＞最悪ツンデレ女王とショタ魔族がいれば十分

疾風＞でも人気ＴＯＰ１０には見せ場作るんですよね？

烈火＞人気ＴＯＰ１０って誰だっけ？

王神＞ゴちゃんのスレに運営さまがまとめ貼ってたよ

大地＞他の主人公たちは？

運営＞放置でぉｋ。一応魔王は雑魚から殺すテンプレで動くけど

運営＞死んでも死ななくてもどうでもいい

運営＞あ、でもマイナースレで人気あるのは積極的に殺して

烈火＞となると…？

王神＞アフロさんと男の娘さんと

根暗＞商人さんとヒーローさん

流水＞イチャイチャカップル♂♀も一部で人気ですが…

大地＞じゃあこの6人は早めに殺す流れ？

烈火＞魔女さんが死んだのは痛いなぁ…

運営＞たんま。

運営＞メダパニ、イチャイチャ♀、商人は殺すな

王神＞何故ですか？

運営＞恋人が死ぬお約束やってない

疾風＞じゃあ、イチャイチャ♂を殺す流れですか？

流水＞あれ？メダパニさんって処女ですよね？

大地＞…あ、あれですか？職人さんがメダパニさんラブだから…

運営＞そうそう。職人とメダパニで好きな女かばって死ぬお約束やりたくて

王神＞恋愛の神大喜びですね

流水＞あいつら基本スイーツ（）でメンヘラだからなｗｗｗ

運営＞流水

流水＞ごめんなしぁ…

運営＞反省たんねぇ

流水＞真面目にやります。やらせてください

大地＞結局イチャイチャ♂は殺す流れで？

運営＞面倒だから男主人公みんな殺すわ

王神＞…わー

運営＞なんだよ

王神＞素敵な考えですね！

【魔王誕生！】主人公レースについて語るスレ　７　【運営詐欺】

１：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（月）　００：２７　ＩＤ：ｇｅｌｐ２４１ｑｍ

■現在開催中の主人公レースについて語るスレです

■前スレ

【厨二乙】主人公レースについて語るスレ【死にすぎ（笑）】

【マリアージュたんが】主人公レースについて語るスレ　２　【改名した件】

【アレクさん！】主人公レースについて語るスレ　３【らめぇえええええ！】

【イチャイチャカップル】主人公レースについて語るスレ　４　【爆発しろ】

【ゼウ主さんが】主人公レースについて語るスレ　５【アレクってらっしゃる】

【みんなの頭が】主人公レースについて語るスレ　６【ナルクってる】

■次スレは＜９８０がお願いします

■関連スレ

【あんな可愛い娘が】男の娘たんを愛でるスレ【女の子のわけがない】

【真剣討論】ゼウス→魔女さまの交換ってどうよ?8【オリュンポスオワタ】

【特撮ヒーロー】ヒーロー魔改造計画ラボ　3　【秘密結社】

【不器用過ぎて】ツンデレ女王【生きるのが辛い】

【その目】このスレはぼっちさまに監視されています4【誰の目】

【砂糖過多】恋人たちを生暖かく見守るスレ【だがそれがいい】

【鬼畜ロリ】ちびっこを愛でるスレ　2【救済ルート】

【マッチョ祭り】筋肉サイコー!【マッスルエクササイズ】

【備考】

・名前出しは厳禁
・特定の神様をディスるの禁止
・運営と混沌に手出し禁止
・イチャイチャカップルには触れないこと。石化注意
・死んだ主人公は話題に上げないこと。ぼっち雷神にピチュられます

魔女さまは俺のママ

〈略〉

２９６：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：３７　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０
７ｉ

運営お前ちょっと恋

２９７：運営：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：３７
ＩＤ：ＸＸＸＸＸＸＸ

呼んだ？

２９８：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：３８　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０
７ｉ

早いな。いい心掛けだ

２９９：運営：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：３８
ＩＤ：ＸＸＸＸＸＸＸ

親父に呼ばれたから頑張った

３００：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：３９　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

なにをいってやがる貴様のゆうなムスコなどもったおぼえはなう

３０１：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：３９　ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４

オｗｗｗーｗｗｗディｗｗｗン
動揺ｗｗｗしすぎｗｗｗタイプミスｗｗｗ

３０２：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：３９　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

いや違うから。俺オーディンじゃねぇから、あんな強くてカッコいい神じゃねぇしｗｗｗいやまじでｗｗｗ

３０３：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ

ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４０　ＩＤ：Ｃｕｔｙ１４３
Ｇｑ

＜３０２
うわぁ…

３０４：ж王者たる絶対神ж：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）
１４：４０　ＩＤ：Ｇｏｄｅｇｂ２１ｈｎ

痛々しすぎて見てられんな

３０５：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４１　ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４

今日のお前が言うなスレはここですか？

３０６：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４１　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

＜３０４
ゼウスさんｗｗｗなにやってんすかｗｗｗ

３０７：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４１　ＩＤ：ａ１Ａｅ７４ｇｆ

オリュンポス涙目

３０８：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４１　ＩＤ：Ｂｇｂ４６ｔｗｘ

ギリシャ＼（＾ｏ＾）／

３０９：運営：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４２
ＩＤ：ＸＸＸＸＸＸＸ

それより何の用？
王者（）さんが痛々しいのはいつものことじゃん

３１０：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４２　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０７ｉ

それもそうか
あのさ、主人公レースの人気順ってどんな感じ？

３１１：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４２　ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４

いいこと聞くな
さすが全知（）の魔眼持ちｗｗｗ

３１２：運営：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４２
ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４

あれ？
発表してなかったっけ？
まあいいや。こんな感じ

1
ファルガナ
リトマス

3
アルファ・スティグマ

4
ユージロ・マノメ

5
ミリルゥトゥ

6
ラグナエイト

7
リオナアハト△

8
ケルドゥ・ガナル

9
神城正義

10
黒岩勇人

11
レームシルク

12
星伸一

13
バーティナ×

14
一文字弾

15
ショーゼン

16
ディー

17
大路光、レティーシア

19
ナルクトール

20
渡辺準一

21
アレクサンドロ

２２
ケイニー

２３
フェティッサ

２４
王竜×

３１３：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４３　ＩＤ：ａｅ０ｌｏ４０
７ｉ

ありがとう。参考になった
＜３１１
特定した
今、アイニイキマス

３１４：ж王者たる絶対神ж：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）
１４：４４　ＩＤ：Ｇｏｄｅｇｂ２１ｈｎ

＜３０５－３０９
同じく特定した
お前ら裁きに行く

３１５：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４４　ＩＤ：ｑｄｎ８０１３４

大人気ｗｗｗなさ杉ｗｗｗ

主神２柱ｗｗｗカルシウム足りねぇｗｗｗ

３１６：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４５　ＩＤ：ａ１Ａｅ７４ｇｆ

…なんか外で雷ごろごろ鳴ってんだけど
早くね？早すぎね？

３１７：以下名無しに代わりましてＧＯＤがお送りします：ｘｘｘ
ｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）　１４：４５　ＩＤ：Ｂｇｂ４６ｔｗｘ

おれたち／（＾ｏ＾）＼

閑話　GR　ラー　最終話！

「殺して」

「朝飯食べたらな」

「あおいのもたべて？たべて？あまーいのよ？」

「…殺して」

「すまん。これから荷物運びのバイトだ」

「ひーろーもおかねがひつようです！」

「……殺して」

「むむっ！？モンスターの気配…！？フーリム！青いのは任せた！」

「がってんしょうちー！」

「……殺してよぉ」

「あ？悪い。風強くて聞こえん」

「だ、だーん！とば、とばされるぅー！！」

「……殺してくる」

「変っ…神っ！そのでっかい斧は置いていってもらおうか！！」

「ゆーごはんまでにおわらせてねー」

「…殺す」

「何度やっても俺には勝てんぞ…？だがその意気やよし！胸を貸そう青いの！」

「むりむちゃむぼー？あってる？あってる？」

「いいかげんに殺して！！」

「うわぁびっくりしたぁ！？…お前、そんなでっかい声出せたのか…」

「…あまいのたべる？むかむかなおるよ？なおるよ？」

とある田舎町、両手で数えられる程度にしか家がないので、集落といったほうがいいかもしれない。そんな特産品も名産品もない田舎の村の片隅で、アルファ・スティグマと呼ばれる少女はふてくされていた

ズキズキと痛む頭を擦りながら、何度やっても勝てない「ヒーロー」の気配を観察する

あの日、初めて出会った日。アルファ・スティグマは一文字　弾に敗れた。完膚なきまでに負けた

そもそもアルファ・スティグマの持つチート能力は「略奪」。殺した敵のスキルをランダムで1つだけコピーするか、敵ステータスの何%かを自分のステータスに還元出来る能力だ

彼女は一流の魔法使い並みの魔導の知識と、人魔ハーフの域を遥かに超えた魔力量、幾数百の人間の腕力脚力体力、武器を扱う知恵に、父親でもあった「主人公」のチート能力…「英雄殺し」の力に加え、吸血鬼の再生能力に獣モンスターの嗅覚に超音波による空間把握に石化の魔眼なんていうモノまで持っている

しかし――だからこそ、あのヒーローには勝てない

敵が強ければ強いほどに己を奮い立たせ、力強く成長していくヒーロー。彼の持つ「太陽」の力には不老不死に等しい吸血鬼の再生能力も役に立たない。むしろ、彼の前で身体を「再生」しようものならあっという間に灰になってしまいだろう

つまり、アルファ・スティグマはヒーロー・一文字　弾には、何らかの奇跡でも起こらない限り勝てないのだ

――そしてそれは、正しくアルファ・スティグマにとっての「救い」だった

確実に負ける。１００回戦っても１００回負ける。確実な敗北は、確実な死を意味する…はずだ。アルファにとっての敗北は、死を意味する

ようやく死ねるのだ

絶対に勝てない相手を前に、がんばってがんばって負けて、死ねるのだ

仕方ないと許して貰えるくらい圧倒的に負けて死ぬのだ

――それなら、誰にも怒られない

嗚呼、それはなんて素晴らしいことなんだろう

そんな心持ちで、弾が繰り出す必殺の一撃を受ける「はず」だったのだ

「…なのに」

一文字　弾は…「ヒーロー」は、アルファ・スティグマを救わなかった

殺さず、気絶だけさせて、そして彼女の手綱を握るように、ずっとアルファ・スティグマと共にある

ただ、優しく。慈しむような目で、しかし突き放して、面倒だけは甲斐甲斐しく見ながら、矛盾しながら一文字　弾はアルファ・スティグマの死の懇願を跳ね退ける

それが…溜まらなく、苛ただしい

「…わたしなんかにかまってるひまがあるなら…」

わたしを早く殺して、みんなを殺してあげたらいいのに

わたしより強い「ヒーロー」なんだから、わたしよりもっともっと
たくさん殺して、みんな救ってあげたらいいのに

そんなことを考えながら、農作業を豪快に手伝うヒーローを見つめ
るアルファ

彼女の目は見えていない

石化の魔眼になってしまった両眼に映るのは石だけだ。「石」にな
ってしまっては殺せない。「石」は壊すことしか出来ないからだ。
だからそんなもんはいらない、と自ら抉りだした。しかし、蝙蝠の
ようなモンスターを倒して得たスキルは、全ての風景を立体的に彼
女の脳裏に刻み込む

「うぉおおおおおおおおぉあああああ！！！耕せぇえええええ！！ぁ土よ木よ草よ地球よぉおおおおお！！もっと俺に力を分けてくれぇえええっ！！」

「ダァン！！っるせぇぞぉ！！だぁって仕事しろぃ！！」

「押忍！！申し訳ありやせんっしたぁ！！」

…馬鹿みたいな叫びを上げながら、ザクザクと鈍器を土に向けて振
り下ろすヒーロー。殺すなら、その隣のおじさんの頭に振り下ろさ

なきゃ…とか思いつつも、アルファは無言で自分の頬に薬草を刷り込む「虫さん」に問い掛ける

「…あれは、なにをしてるの？」

「う？」

見えなくても分かる。きょとん、としながら首を傾げる虫…否、妖精のフーリム。つい先ほど、また弾に殺されるための戦いを挑み、けれど思いっきり負けたせいで傷だらけのアルファの傷の手当てをしていたフーリムは、「あれって…あれ？」

フーリムが指差すのはなんかハイテンションで「ヒャッハー！」言いながら鍬を土に突き刺し続ける弾。無言で頷くアルファに、フーリムはしばし空中に目をさまよわせるように黙考する

本来、妖精族とはテレパシーのようなもので会話する。見せ物小屋に売られて数ヶ月、弾に出会ってまだ6ヶ月弱のフーリムは、圧倒的に語彙が少ない。最近はアルファの世話をするためによく話しているが、それでもまだ幼児のような話し方しか出来ない

だからこそしばらく悩み込み…そして、ぽんっ、と手を打った

「ぇと、うえかえ？のじきだから、つち？すな？をちょーきょー、して、かいはつするのよ？そうするとやさいがおいしくはえる…のかな？」

「…そう、なんだ。土も大変…。わたしもされたからわかる、かも…？痛いし、辛いよね、はずかしいよね」

「つちもいきてるんだってー」

「…ヒーローもパパのお友達とどうるいなんだね」

「ドール…ぃ？にんぎょうさん？わたし、かわいいおにんぎょうさんみたいって言われたことあるよー！」

「…うん、かわいい。人形みたい。ぺきって首とか、足とか折れそう…指先だけでも…ぷちってつぶせそう…」

すぅ…っと伸ばされたアルファの手が、フーリムの頭を挟む。…この虫さんはかわいい虫さん。だから早めにころしてあげなきゃ…と薄く笑いながら、アルファは力を込め――

「待たせた！」

「っ！？」

突然の大声にびくりと身体を跳ねさせるアルファ。その拍子に指が開き、笑顔のフーリムが弾の顔に抱きついた

「だん！てあておわった！」

「おー、しまんすまん。ちっとばかしやりすぎちまったからなぁ。青いのもちゃんとお礼言ったか？」

にかっ！と暑苦しい笑みを浮かべながらフーリムの頭を指先で撫でる弾。アルファはしばし沈黙し、

「おれいを言ってほしかったら、わたしを殺ぴっ！？」

がつん！と言葉の途中で弾の拳がアルファの脳天に落ちる。変神していない弾の拳では大したダメージにもならないが、それでも舌を噛んで痛みに悶える

「屁理屈こねないでお礼をしろ！ありがとうございます！朝昼夜の挨拶！ごめんなさい！これが素直に言えない奴はろくな大人になれんぞ！」

…どうせ身体は成長しないのに…。と理不尽な説教に不満を抱えながらアルファは弾を見上げ…眉根を寄せて距離を取る

「ん？なんだ？」

首を傾げる弾に、嫌そうな顔で、アルファは言う

「…くさい」

……ひゅぅ…と冷たい風が2人の間を通り抜ける。なにこの空気？とフーリムが首を傾げた、直後

「ぬはぁっ！！」

「だーんっ！？」

吐血する弾。「これが、これが全国のお父さんの苦悩か…！？」と五体倒置でぶるぶる悲しみの涙を流す弾。慌ててフーリムがその頬をぺちぺち叩くが、弾はびくびくと痙攣するばかり

「…ばかみたい」

「誰が熱血ヒーロー馬鹿だ!?照れるだろ!」

「ほめられてないよー」

ぽつりと呟かれたアルファの言葉と、それに過剰なリアクションを取る弾。呆れたようなフーリムの声

…早く死にたい。そして楽になりたい。その思いは未だにアルファの中にある

辛くて悲しくて痛くて恥ずかしくては苦しい人生の中で、「死」だけが彼女の願いに、支えになっているのは間違いない

…けれど、けれど、である

この、馬鹿みたいな顔で馬鹿みたいに強いヒーローや、小さくても優しくて強いフーリムとの会話が楽しいと思うのもまた、事実なのだ

ほんのわずかにだが、この馬鹿をもっと見ていたい、と思う気持ちもあるのだ

なんせこの「ヒーロー」は真っ直ぐだ

馬鹿だから笑って、馬鹿だから楽しんで、馬鹿みたいに素直に――人生を楽しんでいる

…「人生が楽しい」、というのは…アルファにとって理解できない言葉だ

人生とは苦しくても悲しくても辛くても、死ぬまでそれに耐え続けるしかない苦行だったはずなのに

「ヒーロー」と出会ってからの自分が、頻繁に困惑するのは、彼と「虫さん」が優しくて、彼が叱ってくれて、「虫さん」が慰めてくれて

今まで殺してきた人たちと同じような「一般人」が優しくて

…「楽しい」のが、「辛い」

だから殺してほしい。死んだ人間は天国に行けるんだ。だから死んで、天国で今まで殺してきた人たちに聞きたいのだ

「あなたたちの人生は、どんなものでしたか？」

と

わたしと同じような境遇の人たちは喜んでくれるはず。だけど、この村の人たちみたいに「人生を楽しんでいる」人たちは、どんな風に思ったのだろうか

分からない。わからないからこそ、聞きたい。でも、聞くためには死ななきゃいけない。…だというのに、ヒーローはわたしを殺してくれない

もどかしい

だからわたしは、今日も彼に言う

「ねぇ、ヒーロー。わたしを…」

「助けてくれぇえええええええええええええ！！！」

響き渡った悲鳴に、ばっと弾は振り返る。…こうなってしまっては仕方がない、とアルファは小さく嘆息する

「フーリム！青いのは任せた！」

「まかされた！」

だっ！と走り出す弾。アルファはその背中を見送り――少しだけ、何かが引っ掛かる

それは、昨日脳裏に響いた「アナウンス」のせいだろうか

曰く、『魔王』が覚醒した、と

…助けを求めるふりをして、罠に嵌める。果たしてそれは、何度使

い回された「ヒーロー」を倒す常套手段だろうか

まして弾には助けを求める人を感じとる力がある。普通に「悲鳴」を聞いてから助けに向かう、というのは、彼に敗北してから数日間、一度も無かった

「…やな予感」

「んー？あおいのもいくの？だめよ？あぶないのはだめよ？」

ぺしぺし頭を叩いてくるフーリム。心配されてることがむず痒くて、でも嬉しくて、やっぱりわたしが虫さんを殺してあげるべき？と首を傾げながらアルファは弾の後を追う。身体能力に優れたアルファは、あっという間に弾の背中を見つけた

「た、たすけてくれ！お願いだ！頼む！無理なら墓場に！ここから一番近い墓場に連れて行ってくれ！」

「お、落ち着け！わかった！わかったから！何があったのか話してくれ！」

…小太りの中年男性に抱きつかれ、どうにか錯乱している男を宥めようとする弾。困ったように周りを見回した弾の視線が、アルファを捉える

「な、なんだ来ちまったのか！？くそっ、おい！頼むから落ち着いてくれ！じゃないと何もできない！」

弾の大声に冷静さを取り戻したのか、「す、すまない…」と弾から離れる男性。…黒いローブと骨で出来たような杖を持った、妖しい男

…いつでも魔法を使えるように身構えながら、アルファは話の成り行きを待つ

男は袖で汗を拭い、落ち着くように2、3度深呼吸して

「命を狙われ」

パンッ！と

男の頭が弾け飛んだ

「「…っ！」」

弾の背中を守るように、土から大斧を作り出して構えるアルファ

そして――魔王は笑う

「命を狙われてるから、助けてくれってよ、なぁヒーロー？」

さらば　弾！　永遠に！

硝煙を上げるハンドガンを片手に、気配もなく突如として現れた『魔王』

ただ一目見ただけで「主人公」は理解する。こいつが、こいつこそが倒すべき『魔王』だと。自分の敵だと。打ち倒すべきだと

彼は…魔王は、目前の弾とアルファに親しげな笑みを向けながら、ハンドガンを投げ捨てる

「今の男は「ネクロマンサー」。死体を操る能力者でな、しばらくはとある主人公の部下として大人しく働いてたんだが、一週間くれぇ前にその主人公が殺されちまってな、食い扶持を稼ぐために3つの村をアンデッドに襲わせて滅ぼしてる」

「…だから、何だ？」

変神はしないまま、じっと目を逸らさずに見た目はコスプレした普通の少年と変わらない『魔王』を睨む弾

少年は異様な服装をしていた。上から下まで真っ黒に纏めた顔だけ露出した全身甲冑に、黒いマントを止める巨大な肩当て。正しくファンタジーな物語の『魔王』と言わんばかりの禍々しい鎧を着けているのに、その両腰には無骨な拳銃。よくよく身体を見回せば、そこかしこに銃口が、銃を隠すための不自然な膨らみが見て取れる

魔王は弾の素っ気ない返事に気を害した様子もなく、けらけらと軽

く笑う。人を馬鹿にしたかのような、嫌な笑みで

「いや、さ。…お前的に、「ヒーロー」的に、そいつって助ける価値はあったのか？」

――弾の背後に隠れるように対峙したアルファが、僅かに身を強ばらせる

…それは、まるで自分に言われているようで。ずっと考えていて、考えないようにして、目を逸らし続けた事実が突き付けられたようで

本当はわかっているのだ。アルファだって子供じゃない。まだ前世から数えても２０歳にも届かない年齢だが、それでも「色んな事」を知っている。知らされている。「死」が救いになるのは本当に一部の人間だという真実くらいは理解している。命乞いは、「死にたくない」人がすることくらいは理解している。でも、それでも、「これから先に辛い目にあうよりは、ここで死んだほうがいいはず」。そんな勝手な決めつけと、八つ当たりで殺し続けた

そうやって恨みを買えば、いつしか自分も殺して貰えるから

だからこそ、アルファは静かに、しかし固唾を飲んで弾の返答を待つ

もし、もしも彼が――彼の返事次第によっては、彼に出会ってからの時間が、確かに「楽しい」と感じていた日常が…全て虚構に、一方的な擦りよりになってしまいそうで…恐かったから

「その男は殺人者だ。とある主人公の下で働いていた時も含めりゃ、７つの村を滅ぼしてるし、殺した人間は二桁じゃ効かない。そんな人間を助ける必要があんのか？お前は、そんなやつのために怒って

いいのか？なぁ、ヒーロー？」

魔王はヒーローに向けて問いかける。弾はじっと魔王を見つめながら沈黙し、アルファはズキズキと痛む胸を押さえて後退る

「お前はヒーローだ。『正義の味方』だ。そして俺が殺したのは『悪人』だ。俺は自分のことを『正義の味方』だなんて思っちゃいねぇけど、『悪人』を殺した善意の協力者だ。お前にそうやって敵意を向けられる筋合いはねぇ…と、思わねえか？」

弾は、しばし沈黙し、瞑目し…やがて目を開き、

しっかりと、小さく、けれど確かに、頷いた

「…一理ある」

…パキッ、と確かに何かが壊れる音を聞いた

そっとアルファは弾の背中から離れる。急速に冷える太陽の暖かさ。肌を刺すような陽気な寒気に、全身の皮を剥いでしまいたいくらいの気持ちになりながら、アルファはくつくつと小さく笑い

ああ、死にたい。

殺してほしい。

と強く願う

そんなアルファの心情を無視して、問い掛けに頷いた弾に、口角を上げる魔王。「ははは、思ったより物分かりがいいじゃねぇか」と

魔王は軽く笑い

「それじゃあ、さようならだ。追ってくんなよー」

と片手を振りながら、くるりと踵を返し、

弾の額に向けて、発砲した

ダウンッ！と大口径の弾丸が吐き出される音が数秒遅れて響く。ゆっくりと自分の上に倒れてきた弾の身体を咄嗟に支えながら、静かに問い掛けるアルファ

「なんで…？いま、さよならって…」

…ヒーローが死んだ。殺されてしまった。…これでは、わたしは殺してもらえない。ヒーロー自身がどうでもいいけれど、これでは自分が死ねないじゃないか

そんなことを考えながら困惑するアルファに魔王は、首だけで振り返ってにかっ、と笑う。嘲るように、侮蔑を込めて

「あの世にバイバイ、一文字弾。また会おうぜ、追ってくんなよアルファ・スティグマ。ってな？あれ？名前呼ばなかったっけ？」

にやにやと笑う魔王。――アルファの中で怒りが燃え上がる。このヒトは、魔王は、嫌な奴だ。生きてると「かわいそうなヒト」を増やす、嫌な奴だ、わたしを死なせてくれないヒトだ。と

そんな奴は…殺すべきだ、と

力の抜けた弾の身体を地面に寝かせ、ぱんっ、と手を合わせる。そのまま両手を地面に付ければ、使い慣れた大斧そっくりの歪な石塊が出来上がる。魔王は、「…俺から奪った錬金術のスキル、か…」と、ここに来て初めて笑顔を消した

「…とめる人は、いないよ。虫さん、はなれてて」

大斧が唸りを上げて振り回される。言われるより早くアルファの頭から離れたフーリムは、一言すら発する間が惜しいとばかりに飛び、倒れた弾の遺体にすがりつく。…ぽろぽろ零れる涙が、光り輝きながら空気に溶けていく光景。場違いながらも、キレイだな、とアルファは素直に思った

「おいおい、やめてくれよ。お前はまだ殺せねぇんだ。…やる気なら、手足ぶった切るだけじゃすまねぇぜ」

笑顔を消した魔王。…その体から立ち上る敵意。憎悪、怨み…そんな負の感情を向けられることに、少しだけ戸惑う

…わたしが、こんな目で見られる理由なんてあっただろうか?、と

「…ころすよ」

「ははは、やってみろよ」

返答と共に迫る弾丸。それを斧で叩き落とし、アルファは地面が割れる程の勢いで地を蹴る

弾丸のように飛び出した小さな身体と巨大な斧が回転しながら魔王に迫る。魔王は「はえぇな…」と小さく毒吐き、　左手を前に出す。

バキィィイン！と甲高い音。オレンジ色の六角形の盾に阻まれる大斧

「しょうへき…っ！？」

しかも、なんて硬い…！！今まで出会ってきた魔法使いの中で最硬の障壁。しかしそれならそれでやりようはある。アルファは空中で身体を捻ると、そのまま頭を降って長い髪を魔法によって硬化し、鞭のように魔王に叩きつける！

「無駄だぜ？」

「…っ」

しかしそれも、魔王の展開したオレンジの膜に阻まれる。前方からの突進も、真上、そして背中まで届く鞭打も完全に防御した魔王。

――その油断しきった姿に、思わずアルファの表情が綻んだ

「死んじゃえ…っ！」

完璧なタイミング。何十何千何万と繰り返した致死の呼吸、人を殺害するために特化したアルファの脳裏に生じる、必殺の手応え

土が隆起する。土中の石を槍と化して放つ無詠唱の魔法は、狙い違わず魔王の左胸に向かい

同時にアルファはごぽりと口の中に広がる血の味に驚愕した

「ははははっ、その程度で殺せると思ったか？」

にこやかに笑う魔王。石の槍は彼の鎧を食い破り、衣服を裂き、け

れど皮膚表面で砕け散り、その欠片がボロボロと零れ落ちる

「ぁっ、ひ、ぎ…ぁ…あぁあっ！！！」

ぐちゅぐちゅと

アルファの腹を貫いた豪直がかき回される

びくんびくんと跳ねるアルファの身体。串刺しにされ、宙に浮かべられては自慢の剛腕も役には立たない。魔王が面白がってそれを動かす度に、華奢なアルファの身体は涎と涙を流しながらびくんびくんと跳ねる

「祝福された銀の剣…。ヴァンパイアの治癒能力だったか？致命的だよなぁ？」

くつくつと笑う魔王。ぐちゅぐちゅと銀の剣が押し込まれ、左右に振られ、アルファの内側を削る。「…あっ、あっ、あ、ぁあああ…」激痛と初めて感じる「聖なる力」とやらにアルファは悲鳴を上げることすら出来ない。ただ、不思議と力の入らなくなってしまった手足をだらりと下げ、ただ魔王の遊びに身を任せる

「本当なら白木の杭でも使ってやりてぇところだが…まだ殺せないんでな」

だから、なぶる

その宣言と共に

アルファの右腕が、左腕が、切り落とされた

「――――」

大きく口を開け、不規則に呼吸を繰り返すアルファ。魔王はそんなアルファの身体を持ち上げ、じっと見つめる

「…お前も可哀想な奴だったよ」

と呟き、投げ捨てる。ゴロゴロと転がったアルファの身体が、倒れた弾の身体にぶつかる

「殺してほしいんだろ?…安心しな、お前の殺害許可が出たら一番最初に殺してやる。…お前に殺された復讐も含めてな」

「…ぁ」

――その言葉で、ようやく

アルファは、目の前に立つ魔王が、自分がかつて殺した人間なのだと気付いた

そして幸いな事に、こちらが聞かなくても相手は自分がずっとずっと聞きたかったことにも答えてくれた

――わたしが殺してきた人は、みんなわたしを殺したいほど憎んでいるんだ、と

痛くて苦しくて死にたくて死にたくて死にたくて死にたくて死にたくて死にたくて死にたくて死にたくて仕方ない苦しみの中で、アルファは、この世界に来て初めて笑った

「ああ、死にたい」

見る者を魅力するような綺麗な笑顔。血に濡れて笑うアルファに、魔王は頷いた

「殺してやるさ。いずれ」

わずかな笑みさえ浮かべて応えてくれる魔王に、アルファは――恋をした

「ほんとに？なら、ならなら、ならえへへあはははははははははお礼しなきゃ！お礼お礼お礼お礼お礼お礼お礼してあげる殺してあげる腕をもいで頭を潰して足を裂いて股を割って腹を穿って殺してあげる！殺して殺して殺して殺してくれるなら殺してあげる殺してあげる殺してください殺してあげるっ！！殺せ殺せ殺せ殺せ！！」

じたばたと暴れる。失った両腕を振るう。力の入らない両足が跳ねる。鮮血がまき散らされ、目を隠していたベルトがズレる

そして、その狂乱こそが――――アルファ・スティグマの「見せ場」だった

「殺害許可が降りた。死んどけ」

哀れな者を見る目で、同情すらも瞳に秘めて、魔王は生み出した白木の杭で、アルファ・スティグマの心臓を貫いた

貫く、はずだった

鮮血は舞った。５ｃｍ程の太さもある杭が皮膚を食い破り、肉を割り開き、骨すらも削り、そこで止まる

静かに広がる驚愕。アルファの、そして魔王の驚愕

「――悪人でも、殺人者でも、例えお前のような『魔王』でも」

アルファを抱き寄せ、額から血を流し、右腕から杭を生やしながらも、彼は立ち上がる

「助けを求められたなら、手を差し伸べる」

怒りに、そして誇りを宿した瞳が、ギラギラと、太陽のように輝く

「ましてそれが、泣いてる子供なら…命がけで救ってみせるさ」

しっかりとアルファを抱き上げ、彼女を守った弾が、静かに宣言した

「…死亡判定、出てたんだがな」

立ち上がり、自分を睨み付ける弾の姿に魔王は不満げに唇を尖らせる

弾はその呟きを肯定するかのように頷き、自分の胸を指差す

「ああ、間違いなく死んださ。俺の神にも会ってきた。だが――」

すぅ…と弾が片手を広げる。そこには、小さな、手のひらサイズの少女が横たわっている。

「…フーリムが、呼び戻してくれた。命を賭けて、な」

ギラギラと灼熱を宿す瞳。彼の中で太陽が燃えている。触れているだけで火傷してしまいそうなほどの熱量に、しかしアルファは身を預けていた

「先程の話の続きをしようか。お前の言いたいことは分かる。理解できるし一理ある。だがな、そんなことは関係ないんだ」

ギュッ、と弾はアルファの華奢な身体を抱き締める。自分を見上げてくるアルファに軽く微笑みながら、弾は静かに言葉を繋ぐ

「助ける。そう思ったならば、必ず助ける。例え悪人だろうと、例え人殺しだろうと助ける。そして償わせる。殺しなんかしない。殺したら、死んでしまったら、そこで終わりだからだ。死は救いにな

んかならん。死は終わりだ。苦しみの終わり、痛苦の終わり。結構だ、確かにそれによって楽になるかもしれん」

しかし、と弾は静かにベルトを腰に巻く。ヒーロー補正の効果か、不思議と攻撃するつもりになれない自分に苦笑いしながら、魔王は弾の言葉の続きを待つ

「それは逃げだ。人間とは、困難に立ち向かわなくてはならない。もしかしたらこれから先、生きていても辛いかもしれない。苦しいかもしれない。だが、生きろ。生きて、足掻いて、貫け。そうすれば、人生は輝く。泥に塗れて掴み取った幸せは、きっとお前の糧になる。いいか、アルファ」

そっとアルファの身体を地面に下ろす。そしてその失った両腕を悲しそうに見ながら、フーリムを彼女の服の内側に入れる。浅く、小さく、けれど確かに呼吸するフーリムに、ほっと息を吐き――そんな自分に驚愕するアルファ

アルファの瞳を、直視したモノ全てを石へと変える魔眼をのぞき込みながら、弾は笑う。静かに微笑み、そっと彼女の頭を撫でる

「幸せになれ。そして、困ったときは俺を呼べ。お前の前に立ちふさがる困難も、痛苦も、俺が全て叩き壊す。だから――今は、逃げろ。そして幸せになれ。絶対に。今まで殺してきた人間の、１０倍の数の人間を幸せにして、お前自身も幸せになれ。…で、だ」

向き直る。弾は静かに2人の話を聞いていた魔王に目で礼を言い、静かに、しかし力強くポーズを取る

「お前が殺してきた罪は、俺が貰う。地獄でお前の分まで苦しんで

やる。だから、…俺の代わりに、ヒーローになれ」

――変・神っ!!

現れるのは悪役のようなヒーロー。眩い太陽のような神々しさと光。暖かさ。それに呆然としながら、アルファは慌てて肘から先を失った腕で目隠しを押し上げる

「な、なん、なんで…!?なんで!?なんでなんでなんでなんで!?なんでそんな…そんな、ずるい!ずるい!反則!なにそれ!なんっ、なんで!?わかんない!いみわかんな」

混乱して滅茶苦茶に言葉を発するアルファ

「いいからお前は行け!そして幸せになれ!フーリムのことも幸せにしなかったらお兄さん許さんからな!お前には、生きる義務がある!」

弾の怒鳴り声にびくりと身を震わせ、戸惑ったように周りを見回すアルファ。しかし、服の中で弱々しく身じろぎするフーリムを見て、アルファの表情が変わる

「――いみわかんない!ヒーローなんか、だいきらい!」

言い捨て、切り落とされた両手から鮮血を撒きながら背を向け、駆

け出す

その背中を見送りながら――弾は、笑った

「存外優しいな、魔王」

「……」

無言で、溜め息を吐きながら肩を竦める魔王

「…これでも現代日本で育った一般人だ。…最後の願いくれぇ叶えてやるさ」

「ははははっ！…む？よく見たら前に会ったことのある顔だな？来世で友達になれるように祈っているぜ！」

暑苦しい言葉に、魔王の頬に苦笑が浮かぶ

「…変な奴」

「まぁ、そう言うな。さて…」

すぅ…と空気が重苦しくのし掛かる。変神直後から第二形態…もとい、ラー・ホルアクティ。その全身から吹き出る熱風に、草木がチリチリと悲鳴を上げる

「闘るか」

…ヘルメットを被っていてもわかる、暑苦しい微笑み。それに吊られるように魔王も笑い

同時にＲＰＧ－７を叩き込む

「ははっ！本気だな！」

笑いながらミサイルに真っ正面から突撃して爆炎を上げる弾。しかし爆発の衝撃も爆炎も全く苦にせず魔王に接近。炎を吹き上げる拳を叩きこむ！

「無駄だ！」

しかしそれは先程の巻き戻しのようにオレンジ色の障壁に阻まれる。一瞬動きを止めた弾に、畳み掛けるように鉛玉をバラ撒こうとして――弾が、吠える

「燃・え・ろおおおおおおおおっっ！！」

「なっ…にぃっ！？」

ほんの僅かに、指先が障壁に沈み込む。そこを切っ掛けに、弾は大地を蹴り、障壁ごと魔王を空へと投げ捨てる！

「空中ならば避けられん！時間が無いので全力でいくぞ！最大最高最強奥義！」

弾の足下に浮かぶ太陽の紋章。轟々と集まる熱量が、その右足に集まる。灼熱し発熱し白く熱く燃え上がる右足。高まる熱に獰猛な笑みを浮かべながら、弾は飛び上がる！

「真・ホルス・サンシャイン・キィイイイイイックッ！」

そしてその勢いのままに、魔王に向けて最強の蹴りを叩き込む！

「「――――――っ！！」」

閃光。爆発。吹き荒れる熱風。轟々と燃え落ちる火の粉。一瞬遅れて着地した弾。――その姿が、人間のそれに戻る

轟々と未だ燃え上がる空の爆発を見つめ、弾は落胆したように溜め息を吐く

「すまんな、お前は俺じゃどうにも出来んみたいだ」

「いや、お前のお陰でちょっとすっきりした。ありがとよ」

爆炎が、解ける。唐突な突風が煙も、炎も、熱も奪い去り、平然と立っている魔王の姿に、弾は困ったように頬を掻いた

「…せめて後3分あればなぁ…」

ぽつりと呟く

フーリムの魔法で繋ぎ止められた命。しかし、それはただの時間稼ぎにしかならない。この世界に回復魔法はないのだ。あるのは、時間を巻き戻す魔法だけ

それは妖精族の膨大な魔力や、高位の魔力増幅剤である妖精の涙を使っても、ほんの5分程度巻き戻すのがやっとの魔法

だから、5分後には、弾は再び額を撃ち抜かれて死ぬ

それでも、だとしても

「すまない。俺は、全部助けたかったんだ」

「少しだけ救われた。感謝する」

魔王は言い捨て、背中を向ける。トドメを刺さない魔王に、首を傾げる弾

「どうした？」

その問いかけに、魔王は視線すら向けずに手を振った。そして、ぽつりと呟きのように言葉を残す

「まだ９０秒くらいあるぜ」

「それはどういう…」

弾の言葉を遮るように、煙を残して消え去る魔王。ほんの1分弱で何をしろと。困惑する弾。…の、耳に、軽快な足音が届く

「ヒーロー！せつめいしてもら…あれ？」

残像が残りそうなスピードで駆けて戻ってきたアルファの姿に、弾は驚き、そして魔王を憎々しく思う。…余計なことをしてくれた、とため息を吐きたい気分だ

「ま、まおうは？」

きょときょとと目隠しをしたまま周りを見渡すアルファ。その幼い仕草に苦笑しながら、弾は首に巻いたマフラーをアルファの首にかける

「…ヒーロー？」

先程から、いやずっと、最初から、ヒーロー…弾の考えてることが、行動の理由が理解できなくて首を傾げるアルファに弾は微笑む

「手、痛いか？」

「え？…だい、じょうぶ、なれてる。生やせる。血、すえば、はやせる」

半ばから切断された両腕。不思議とあまり痛みはないようだが、それでもその出血量は馬鹿にならない。そっと弾は襟元を開く

「なら、吸って構わん。いや、いっそ全部吸っちまえ」

「え？あ、う、ん。分かった」

言いながらアルファは口の中で牙を伸ばす。そして首筋を剥き出しにした弾にゆっくりと近付き――牙を、突き刺した

「っ」

わずかに声を漏らすアルファ

――熱い。マグマのような熱が、牙を、そして身体を起こす。切断された断面から肉が盛り上がっていく。余りの熱に身体が、腹の奥が疼く。自然と口内に涎が溜まり、ごくりごくりと血と唾液を飲み

干していく

「そのままでいい、聞いてくれ」

弾はアルファの長い髪を撫でながら、独り言のように呟く。明らかに、自分の血に酔っているアルファを、致死量を超えてなお血を吸い続けるだろうアルファを抱き締める

「フーリムを幸せにしてやってくれ。お前も幸せになってくれ。お前が助けたいと思った人間を助けてやってくれ。そして…そうだな、友達をたくさん作れ。好きな人を作れ。恋人を作って結婚して、子供作って…子供に囲まれて、死ぬんだ。お前は、誰かに殺されるんじゃなく、そういう死に方をするんだ」

弾の顔から血の気が失せていく。段々と美しいろになっていく目。意識を怪しくしながらも、弾は笑う

「約束してくれ。アルファ。お前は、幸せになると」

アルファが顔を上げる。口元を血と涎で汚しながら、アルファは無垢な表情で問い掛けた

「…幸せになったら、あなたは嬉しいですか？」

「…ああ、お前を殺してやりたくなるくらい嬉しいよ」

にかっ、と晴れやかな笑みを浮かべる弾に、アルファはくすりと小さく笑った

「…そう、分かった」

アルファは、ほんの微かな微笑みを浮かべながら
弾の左胸を、再生したばかりの右腕で貫いた

「…か、はっ…」

血を吐く弾の頭を抱き締め、アルファは愛おしそうにその身体を抱き締める

「あなたが嫌い。ヒーローが嫌い。大っ嫌い。わたしなんかに優しくするから、大嫌い。大嫌いだから――幸せになんかなってあげない。わたしは、戦うよ、ずっとずっと戦うよ。あなたの分まで戦って、そして誰かに殺されて死んでやる」

いっそ優しく、労るように弾の身体を抱き締めるアルファ。そんな彼女の行動に苦笑いしながら、弾は血を吐く

「…でも、あなたには一度命を拾われてるから、虫さんは幸せにしてあげる。あなたは優しくしてくれたから、わたしが助けたいと思った人は助けてあげる。あなたが、あなたが…あなたの代わりに、戦ってあげる。…だから、あなたはゆっくり休んで。わたしの代わりなんか、しなくていいから」

「…なん、だ、わかってたのか？俺がもう死んでるって」

問いかける弾に、アルファは頷く

「虫さんが教えてくれた。あと、２０秒ないくらいだよね？」

「…そう、だな。出来れば、しっかりお前を救ってやりたかった」

「あなたなんかに救われたくない。…もういいから、死んで。わたしのことなんか、気にしないで」

「…先に向こうで待ってるぜ？こっち来たら、今度はもっと甘やかしてやるから…覚悟しとけ」

「いいから死んで。早く死んで。すぐ死んで。…早く、死んでよ」

ぶつぶつと縋るように言うアルファに、弾は苦笑した

「泣くな、青いの。…子供に泣かれたら…死んでも、死にきれな…」

…最後まで言い切ることなく、弾の目から光が消える。暖かい身体から、力が抜ける。重い身体に押しつぶされそうになりながら、アルファは呟く

「…やっと、死んだ。も、う…こらえ、きれな…ぅっ…くっ…」

ポロポロと涙をこぼしながら、アルファは腰にベルトを巻いた

「あなたの代わり…頑張るから」

「略奪」された変神ベルトが、少女の腰で黄金の輝きを放つ

受け継がれる太陽の決意！（後書き）

お久しぶりですごめんなさい
最近忙しくて更新滞っておりました。ちくしょう課長ちくしょう

これで主人公は、

1
ファルガナ
リトマス

3
アルファ・スティグマ

4
ユージロ・マノメ

5
ミリルゥトゥ

6
ラグナエイト

7
リオナアハト

8
ケルドゥ・ガナル

9
神城正義

10
黒岩勇人

11
レームシルク

12
星伸一

13
バーティナ→死亡

14
一文字弾→死亡

15
ショーゼン

16
ディー

17
大路光、レティーシア

19
ナルクトール

２０
渡辺準一（ネクロマンサー）→死亡

２１
アレクサンドロ

２２
ケイニー

２３
フェティッサ

になりました

今年中の完結を目指しますとも

お知らせ
忘れてた！
４３、王竜。内に
七式さまからイチャラブイベントのイラストをいただきました！
大分前に頂いたのに申し訳ない…

閑話　エロイカの街（前書き）

お久しぶりです

大分時間が開いて申し訳ないです

今年中に終わらせる予定なのにぃー！

閑話　エロイカの街

現在、フェティッサ・ゲイオルルと呼ばれるスタトルの女奴隷商人が、元は奴隷であった事実を知る者は少なくない

若くて、そこそこの器量と文字の読み書きを出来る奴隷としては格安で、愛玩兼雑用用の奴隷として各所で売買されてきた彼女の運命が変わったのは、現スタトル商業ギルド長、アイザック・ゲイオルルに買われた時だった

彼女は愛玩用の奴隷でもあったが、当時若く、ギルド内で成り上がるという夢を追いかけていたアイザックには、女など必要ない。むしろ奴隷との間にもし子供が出来てしまったら面倒くさい。などの理由で、フェティッサには掃除や身の回りの世話ばかりをさせていた

しかしてフェティッサ、ちょいとばかり他の奴隷とは価値観が違う。それは日本人気質とでも言えばいいのか、はたまた彼女の性格だったのか

アイザックが適当に本棚に押し込んだ帳簿や伝票、各種書類を見て「こいつは汚い。ならば片付けなきゃ」と思い、アイザックが留守の間に資料や帳簿の整理をする。他の奴隷はご主人様の大事な書類に手を出して、なにか失敗したら、などと考えてやらない…いやさ、出来ない行動でもありました

部屋に戻ったアイザックは、年代ごとに並べられた資料に帳簿、見た目にも分かりやすく、調べ物もしやすいように整理された本棚に、驚愕し、すぐさま「それ」を行った奴隷を呼びつけた

自分なんかやってもうたんやろか…と不安がるフェティッサに、アイザックは告げる

「気がついたら、毎回こういう風に片付けろ」と

アイザック、片付けられない男だった

それからアイザックはフェティッサを常に側に置き、部屋の片付けに資料の整理を命じる。フェティッサはフェティッサでそれらを生真面目にこなしていき、次第にアイザックはアポイントメントやスケジュールの管理までフェティッサに任せていく

そうした内に、少しずつアイザックはいつも一生懸命役目を果たそうとするフェティッサの健気さに惹かれていき――2人が出会って5年もしたころに、彼女を強制的に伴侶にした

フェティッサも満更でもなく、奥さんになったのだから、と夫、アイザックの仕事をより一層力を入れてサポートし、自分も奴隷時代の経験を活かして奴隷商を始める

故にアイザックは語るのだ

「もしもフェティッサに出会わなければ、私はギルド長の椅子に座れなかっただろう。彼女は私の女神だ」

と

今でも仲むつまじい商人夫婦は、ほんの少しの噛み合わせの良さと、運でもって成り上がったのだった

まぁ、だからといってそれは大した問題ではないし、注目すべきところでもない

重要なのはフェティッサ・ゲイオルルという奴隷商人は、商品でしかないはずの奴隷に親身になって接する、極めて珍しい商人であり、だからこそ、己の経営する娼館で働く娼婦や娼倅を我が子のように愛するアレクサンドロの信頼を勝ち得ている、という話である

「信頼してっカラ金貸してクレ」

「一昨日来くされダボハゼが」

ニカッ！と暑苦しい笑顔のアレクに、ニコッ！と爽やかな笑顔で返すフェティッサ

一瞬の沈黙。

「イーじゃネェかよぉー！どっかの馬鹿騎士が暴走したセイデ復興作業の金がネェんだよオオオオオオオ！！」

ニュルルン！と全身を軟体動物のように使って　フェティッサに絡み付くアレクと、タコの如き動きで全身余すところなく体を撫で回すアレクに巨大な井桁を浮かべるフェティッサ

「どやかましわー！！」

ズパーンッ！と対アレクサンドロ用決戦兵器、巨大ハリセンが素晴らしい音を鳴らす。体にまとわりついていたはずのアレクが、自分

からハリセンを食らいにいった音である

ギャグ補正のデメリット…突っ込みをかわせない法則によって、アレクは顔面を平面にしながら首を傾げる

「っつってもヨォ、助ける気ガあるからココニいんだろ?ヨォ!つんでれ!」

「生憎とウチのデレは旦那にしか出ぇへんわ」

「OH、ベッドん中ではでれでっ!?」

スパパパーン!と再び唸る巨大ハリセン。ギャグ漫画なように大きなタンコブをアフロの上に作り、そこから黒い煙を上げるアレクを奇っ怪な生物を見る目で見ながら、フェティッサは窓の外に視線を向ける

丁度太陽が真上に差し掛かるくらいの時間。トンテンカントンとリズムを打つかのように響く金槌や木槌の音

エロイカの街は先の騎士団との争いで壊れた店の修復や、怪我人の手当て、死人の葬儀で忙しなく動き回っていた

当然娼館等は全面休業。家畜や作物の世話をしなければならない者以外は、総出で復旧に当たっている。しかしそれは、収入がないのに支出ばかりが増えていく、ということだ

騎士団との戦いで使われた爆弾や大砲で吹っ飛んだ店の瓦礫を片付ければ新たな死体が顔を出し、その葬儀が終わればまた死体が出てくる。簡易葬儀で纏めて埋葬する、という話も出たそうだが、街ぐ

るみで1家族といっても過言ではないエロイカの住人は、死んだとはいえ…いや、むしろ死んでしまったからこそ、その遺体を蔑ろにすることを嫌った

お陰で遅々として作業は進まず、家族の死体が次々出てくる状況にエロイカの住人のモチベーションも下がり、ピンク色の雰囲気とはいえ活気に溢れていたエロイカの面影はなくなっていた

…確かにこんな状況じゃあ、お金借りたくなるのも仕方がないか、とフェティッサは内心で溜め息を吐く。にやにや笑っているアレクの顔も、よくよく見れば空元気の強がりだと察してしまうのが余計に苦しい。なんやかんやでギブアンドテイクでビジネスライクな関係だったが、知人には違いないのだ

それに――数日前に頭に響いたアナウンスが、フェティッサの頭を悩ませる

「主人公」の皆殺しを狙う魔王の覚醒。生活に必死で忘れていたとはいえ、自分もまた「主人公」なのだ

いつ、どこで、誰が自分の命を狙っているのか分からない現状に、少なからず不安がある。正直に言うのならば、最強と名高い女王さまとか、王神の巫女とか、いかにも王道な「主人公」っぽい立ち位置の人が魔王を倒してくれるまで、引きこもって旦那とイチャイチャしたい、というのが本音なのだ。王国の騎士団と揉めた相手に金を貸すなんて面倒事を抱え込みたくない。だが、同時にそれはエロイカの特産品――エロい衣装や各種興奮剤に催淫剤勃起不全解消薬や潤滑液に香水といった結構な収益を稼いでる商品が入荷出来なくなることを意味している。商人として、女王の怒りを買ったモノを相手に商売するか、全国な点在するエロ貴族様とのコネクションを

大事にするかでフェティッサは悩み…

（…ま、なるようになるやろ）

あっさりと結論を出す。女王は何を考えているのか分からない行動を起こすことが多々ある。優秀だと噂された貴族の息子を血祭りに上げたり、ほんの少しクーデターを計画しただけで降格されたり（これはまぁ当然だが）、人畜無害と言われた一介の村人を王宮の騎士団長に召し使えたりなど、行動が突拍子もなき、思考が読めないのだ。そんな人間の行動をあれこれ邪推してもしょうがない。となかく、それならそれで利益を出して出費を抑えたらいいのだ

「おーけー、ええやろ。お金くらいなら貸したる。なんなら人員も少しでええなら送ろか」

「マジか。助カルゼ」

破顔するアレクに「ただし、」と条件を突き付ける

「利子として、アレクサンドロ、あんたがスタトルに着て、うちでやっとる娼館に性技を仕込んでほしい。ぶっちゃけ、スタトルにエロイカっちゅーブランド付きの高級娼館を作ってほしいわけやね」

破顔していた顔が一転、渋い物に変わる

「ああ、勘違いしなさんな。あんたの築いてきた性欲街エロイカの名前をそんまま寄越せ、言うてるわけやない。エロイカの主、アレクサンドロとうちらのゲイオルル商業ギルドの共同経営にしたいねん。場所、建物、娼婦、物資はうちが用意するから、技とテクニックとネームバリューを提供してんかって言ってるんよ。取り分はそ

っち7のうちら3でええよ。税金もうちらが払おう」

「随分破格の待遇ジャねぇか。なんかワルイことでも考エてんのカ？」

どこか探るような視線で自分を見つめるアレクサンドロに、コロコロとフェティッサは笑う

「こぉーんな辺境のエロイカまで来るより、王都にほど近いスタトルのが貴族さま方も来やすいやんか。そうすると貴族さまの宿代に護衛の宿代に滞在費食費更にお酒にスタトルでみっけた掘り出し物。それらがぜーんぶうちらの利益になるわけやねぇ。最初の方はまぁ赤字やろけど、エロイカの性技が娼婦たちに染み込んで、そこそこ有名になってくると…っちゅう訳やねん。うちらは明朗会計真実剛健。共同経営者候補には嘘吐かへんよ？」

嘘は吐かない。隠しごとはするが

この方法なら娼婦たちの教師として合法的にアレクサンドロをスタトルに招くことができる。一介の冒険者を雇って護衛にするより、かの女王相手に善戦したと噂のアレクサンドロを対魔王用の壁にしたほうが生存率が高いに決まっている。最も、それをするためには魔王とやらが討伐されるまでアレクサンドロに引っ付いて、無力な商人として「守ってもらう」必要があるが。ようするに貞操の危機

「ふゥム……まぁワルくはネェナ。俺がスタトルにイル間のエロイカの管理はどうシテクレんだ？」

「んー、うちの商会から信用出来るもんを送ろか。とりあえず旦那に面通しせなあかんから一回スタトルには来てもらわなあかんけど、

それ終わったらこっち落ち着くまで戻って復興に勤めてもらってかまへんよ。お金持ち逃げされたら困るさかい、しばらくうちがあんたの側にいることになるケド」

「構わネェ。…だがフェティッサ、別に（性的な意味で）食ってしまっても構わんのだろう？」

「構うわボケェ。うちは旦那一筋や」

ズパーンッ！と再び唸るハリセン。吹っ飛ぶアレクサンドロ。そしてコンコン、と鳴る扉

「どうぞー？」

フェティッサの声に扉ががちゃりと開き、小さな女の子にしか見えない成人女性が顔を出す

「アレク、昼食の用意できたよ？そしてゲイオルル夫人、大したおもてなしにもなりませんが、良ければ如何ですか？」

笑顔で言う彼女にフェティッサも笑顔で応えようとして、

ぐちゃっと潰れた

エロイカの街はそう大きな街でもない。総人口２１８人。森と山に挟まれた谷のような立地になっているため、そこまで広くはない

そんな街を、巨大な銀色のコケシに割り箸で両腕を作ったような、シンプルな人型のナニカが下敷きにしていた

頭の上半分が雲で隠れているせいで全貌が見えない鬼戒神を指を鳴らして消し去る。同時に魔導書は燃え散り、二度と銀色の鬼戒神は召還出来なくなった

「うーむ…あれが鬼戒神でござるか。なんか途中でデザイン面倒になって適当に作ったような形でござったなぁ…」

巨大な銀の巨人が光の粒子になって消えていくのを遠くから眺めながら、魔王の部下は肩を竦める。本が燃えて出来た煤や塵を手を叩いて振り払うと、背後に控えていた三人の「再生主人公」に向き直った

「それじゃお主たちはしっかり死んだかどうかを確認してくるでござる。標的はアレクサンドロ・フィナッツァのみでござるから、一般人に手を出したらだめでござるよ？あとアレクサンドロが死んでるのを確認したら速やかに死体を残さないように自殺すること。じゃあ任せたでござるー」

軽い調子で魔王の部下…ディーが指示を出せば、一斉に動き出す三人の再生主人公。それを満足そうに眺めながら、それでもディーはため息を吐いた

「あー…。どうせなら早く殺してほしいでござるなー…」

ハハハ、と疲れたような笑いは妙に曇り始めた空に飲まれて消えた

閑話　英雄の最後（前書き）

もうちょっとだけ続くんじゃ

閑話　英雄の最後

「あああああああっ！！！…っ！？あ、え…ぇあっ！？」

ぐちゃぐちゃに潰れた瞬間を彼女は覚えていた。ずん、っと音がした瞬間。天井がメキメキと崩れ、床が抜け、身体が浮き、そんな自分を優しく包み込むかのように降ってきた瓦礫が全身に突き刺さり、そして胸が、腹が、体全部が、少しずつ潰されていく過程を、彼女はスローモーションでしっかりと記憶していた

「ぇ…ぁ…ぇ…い、きとる…？」

けれど正気に返ってみれば、服こそ埃や瓦礫のせいで汚れている。だが、ほんの少し手を伸ばせばあっさりと瓦礫の中から這い出せたし、体も潰れてなんかいない。けれど腹から押し出された小水が濡らしたズボンの生暖かさが、先刻のリアルが嘘なんかじゃないと自分に現実を伝える

「な、なんで、うち…生きてるん…？」

ぺたぺたと頬に触れながら、誰も返答してくれないだろう問い掛けを発する。間抜けな声は、当たり前のように空しく響く――ことは、なかった

「ギャグ補正だよ」

ぽつり、と呟かれるように放たれた言葉。聞き慣れない声にフェティッサは目を見張り、恐る恐る視線を巡らせる

「ギャグ漫画の中じゃ死人はでない。一つの攻撃をアレクサンドロと一緒に食らったところで、アレクサンドロが死なないんだから、同じ攻撃を食らったそいつが死ぬのはおかしい。だから死ななくなる。…死ぬほどの苦痛を食らっても、死なない。悪い夢見ちゃったねー。怖かった？」

ニコニコと微笑を浮かべる、「普通」の少年。着ているものも容姿もこれといった特徴はないのに、ただ目の前にいるだけでゾクゾクと背筋に悪寒が走る

「だから死なない。何人巻き込まれたか分からないけど、今の時点では死んでない」

にぃいいい…と少年の唇がつり上がる。そして、瓦礫のような中から顔を出したばかりのフェティッサに向けて、少年は言った

「だから、助けてほしければ抵抗するな」

瞬間。背筋が凍り付いた

「…ぁ、ぅ…」

目の前の少年から吹き出た殺気？オーラ？雰囲気？とにかく人間の本能を直接抉るような黒い感情に、フェティッサの手足が凍る。再び失禁してしまいそうな恐怖に、ガチガチと勝手に鳴る歯に、こちらの怯えに気付いて尚楽しそうに笑う少年の狂気に、フェティッサはガクガクと壊れた人形のように首を盾に振る

「うーん、いい子いい子」

少年が、上手く芸をこなした飼い犬を褒めるかのような手付きで優しくフェティッサの頭を撫でる。しかしフェティッサは、その手が今にも自分の頭を柔らかいゼリーかなにかのように握り潰すんじゃないだろうか、などと悪い方に悪い方に想像の翼を広げ、恐怖心を募らせていく

あるいはそれは、元奴隷だったフェティッサが、生き残るために生み出した処世術だったのかもしれない。圧倒的な強者に弱者が見逃してもらうには、媚びへつらうか従属するしかないのだ。戦いの素人であるフェティッサにすら感じ取れるほどに、天と地ほどに実力に差がある2人だ。これもまた、当然の流れかもしれない

「さて、そろそろ諦めて出てきたらどうだい？アレクサンドロ」

フェティッサの首を掴んで瓦礫から引きずり出しながら、少年は瓦礫の山と化したエロイカの街そのものに問い掛ける。そこかしこから響く住人たちの苦痛の嘆きが、呻きが、まるで地獄のような雰囲気を放つ

「全く、エロイカに住んでる奴らはとんだ災難だよな。アレクサンドロ、お前が主人公だったから、この町は潰されたんだ。お前みたいなのがいたから、この町の住人は苦しんでるんだぜ？」

…少年の言葉への返答はない。ただ、首を絞められてえづくフェティッサの苦悶の嘆きが空しく響き、少年は不愉快そうに顔を歪めた

「ああ、そう。だんまりか…。いいよ、なら…出てこざるを得ないようにしてやろう」

少年は言い捨てると、フェティッサの身体を投げ捨てる。木材や金

属片の大量に転がる瓦礫の上に投げ捨てられ、大量の生傷を作りながら、その上をゴロゴロと転がるフェティッサ。もはやぴくりともしない彼女は、既に抵抗する気力もない。この大惨事を起こしたのがこの目の前の少年なら、一介の商人にしか過ぎない自分に抵抗する手段はない。ただただ心を閉ざして、嵐が過ぎ去るのを待つ。そうしていれば、きっと相手が飽きると信じて

けれど少年はむしろ愉悦の笑みを浮かべながら、倒れたフェティッサを踏みつける。びくん！と予想以上の加重にフェティッサの身体が跳ね、口からは声にならない悲鳴が漏れる

「今すぐ出てこないとこの女を殺す。それでも出て来ないならあの男を殺し、まだ出てこないならその子供を殺し、尚出て来れないならどの人間を殺そうか」

少年の言葉に霞がかってきた頭を巡らせ、視線だけで少年が指差した先を見つめる。その先には大量の人間がゴミ山のように積み重ねられ、薄汚れた肌色の作られている。今なお2人の巨漢が瓦礫の山から人を掘り起こし、その山をより大きく作り上げる

三人。少年と、2人の巨漢。たったそれだけで、アレクサンドロの作り上げた街を潰したというのか。事の重大さを察したフェティッサはどうにか逃げ出す隙を伺いながら、必死で浅い呼吸を繰り返す。そうでもしなければ気を失ってしまいそうな恐怖に犯されながら、それでもフェティッサは泣きながら耐える

そうして――果たして、アレクサンドロは現れた

「ヒャッハー！お前の穴も掘ッテやろウカ！！」

まるでギャグ漫画のように、瓦礫の中から勢いよく飛び出したアレクサンドロが、両手のナイフを振るう。足下までは警戒していなかったらしい巨漢の1人が喉を切り裂かれて絶命し、巨大な岩を切り出したような斧剣を構えたもう1人の巨漢が、アレクサンドロの飛び出てきた瓦礫の穴に引きずり込まれるように消え、アレクサンドロは変なポージングをしながら瓦礫の上に立つ

「――――HEY、よくもヤッ」

「喋んな」

アレクサンドロの言葉を封じるように

一瞬でフェティッサの上から移動した少年が、アレクサンドロの喉に尖った瓦礫の破片を叩き込む

「――――」

絶句するアレクサンドロ。しかし、彼はその程度では死なないし、大したダメージにもならない。少年の攻撃を冷静に――――

「ふざけた能力だよなぁ、ホント」

冷静に――――

「不死身系チートの2人が、お前が登場しただけで悪い冗談みたいに戦闘不能だよ」

冷静、に――――

「けどさぁ、俺の能力もふざけてると思わねえ？」

冷、静、に――――

ぼどぼどぼど、と、全身を細切れにされたアレクサンドロが、肉片に姿を変えて瓦礫の上に降り注ぐ

「文字通りの『光速移動』。普通の人間のときはこの能力が原因で死んじまったが、魔王の部下はルール無視。大気摩擦で燃え尽きる、なんてだせぇ死に方はもうしねぇ」

へらへらと少年は道化染みた笑みを浮かべながら、確かに血と肉になるまで解体したはずのアレクサンドロが、何事も無かったかのようにフェティッサの尻を揉んでる光景に呆れた溜め息を漏らす

「な、なにやっとんねん！？」

「ぺろっ…こいツァ…尿だ！」

「なっ！！も、漏らしてへんわ！漏らしてなんかないわ！」

アレクサンドロの奇行で、硬直していた身体が嘘のように動くことに内心で驚愕しつつ、フェティッサはアレクサンドロからも、そして少年からも距離を取る

少年はじとっとした目でアレクサンドロを睨み、あ～ぁ、と小さくため息を吐く

「ほんっとふざけてるぜ。まともに戦ってる俺が馬鹿みたいじゃん？ないわー、この流れはないわー…。なぁアレクサンドロ？」

少年は肩をすくめ、山と積まれたエロイカの住人のすぐそばに立ち

「自殺してくれよ。おふざけなしで」

と、言い放った

「オイオイ、冗談ニモならナ――」

「断ったら、こいつらを殺す」

肩をすくめて拒否しようとしたアレクサンドロの声に被せるように

少年は、うっすらと笑う

「１０秒に一人殺す。心臓を貫いて殺す。ギャグもおふざけも一切なしで、自分の喉を、その右手のナイフで、お前が死ぬまで、抉れ。お前がなにかやるより俺がこいつらを皆殺しにする方が早いぞ」

少年は当然のように、当たり前のように、一切の躊躇もなく、人の山から、まだ幼さの残る少女を引きずり出す。

「ぁ…ぅ…っ？」

気絶していて尚、乱暴に扱われた少女が僅かに身じろぎする。その胸にピンッ、と伸ばした右手を突きつけながら、少年は口を開いた

「１０」

「…オイ」

絞り出すかのような、アレクサンドロの声。その頬を汗が一粒伝い、
先刻の間抜けな空気を吹き飛ばすかのような少年の雰囲気に、息を
呑むことしかできないフェティッサ

「9」

「…オイ、待て。せめて話をしろ」

「8」

「そいつは関係ネェだろ?お前は俺の敵。それでいいんじゃねぇの
か?」

「7」

「正々堂々勝負も出来ねぇってか?とんだ腰抜けだなぁ?」

「6」

「……待て。おい。聞け」

「5」

そこまで少年が数えた瞬間

アレクサンドロの姿が消え

同時に少年の右腕が、少女の胸を貫き、

アレクサンドロの身体が、傷だらけになってフェティッサの後ろに落ちた

「あーぁ、反抗なんかしようとするから殺しちまったじゃんか」

少年は当然のことのように、鬱陶しそうに顔を歪めながら、毒を吐く

「ぇ、ぁ…ちょ、ちょぉ待ちぃよ…？」

かたかたと震える身体を無理矢理動かして、フェティッサは背中のアレクサンドロに顔を向けた

「…っ！！…！？…っ！」

全身を自身の血に染めたアレクサンドロが、メガネすら失ったアレクサンドロが、驚愕の表情で、折れ曲がった手足を投げ出して倒れていた

「戦闘特化タイプの主人公に、ギャグ要員が勝てるわけねぇーじゃん」

もはや呆れ混じりの少年の言葉に反応する力すら残されていないアレクサンドロ。あの一瞬でどんな攻防があったのかは分からないが、その言葉でアレクサンドロの絶望を感じ取るフェティッサ

「さて…次はこの子にしようか」

少年が次にその手を向けたのは、子供。煤や埃に汚れた、まだあどけない幼児。胸に拳大の穴を開けた少女が、ゴミのように捨てられる

「さて、１０秒だ。君は助けてもらえるかな？」

その言葉が原因だったのか、否か

「ぁ…ぅ？」

幼児が、目を開ける。自分に手刀を向ける少年の姿に困惑したように首を傾げ、視線を巡らせ――そして

アレクサンドロの姿を見つけ、顔を輝かせた

「アレク…？」

無垢な幼児の微笑に、アレクサンドロが僅かに呆ける。自分を、アレクサンドロという男を信じて疑わない視線に、胸の奥に炎が宿る

「９」

けれど、無慈悲にカウントを進める少年に、アレクサンドロは勝利するどころか、抗うことすら出来ない

「なぁ、１つダケ聞かせテクれ…。俺が死ネバ、他の奴には手を出サナイんだよナ？」

「ああ。これでも無作為に殺人するような悪人じゃない。あと６秒」

どの口が言うんだ。と自信満々の表情で頷く少年に苦い思いを感じながら…アレクサンドロは、フェティッサに笑いかけた

「フェティッサ、巻き込んでスマネェ。エロイカはお前二やる。俺

のガキ共を任セタぜ」

「ちょ、ちょお待ちぃ！！早まったらあか…」

笑いながら――自分の首を、切り飛ばした

一瞬の早業。高く高く舞い上がった首が、どすっと地面に落ちてから、切断面から赤黒いドロドロした血の泡が沸き上がる。ごろりと転がった首は、薄い笑みを浮かべていた

「…アレ、ク？」

微笑を浮かべた首は、不思議と幼児を見つめているかのようだった

「主人公：アレクサンドロ死亡…かな？。一応魔王さまに確認しねぇと…。念のため首持ってくか」

少年はそれっきり、幼児には興味をなくしたように解放し、アレクサンドロの首を持ってその場を去る

残されたフェティッサは、そして幼児は、ただただ呆然とその光景を眺めていた

閑話　英雄の最後（後書き）

これにてひとまず閑話はおしまいです

…あれ？２人しか殺ってない？

しかも男だけ？

…作者の意図が透けて見える！！

46、主人公たちのその後

――【魔王】覚醒から1週間。

生き残った俺達「主人公」は全員ファルガナ女王の城に招かれていた

「…はい、これで完治ですね」

すぅ…と消えていく緑色の光。重度の火傷を負って爛れていた肌は綺麗な白い肌に戻り、欠けていた丸い爪も、火膨れで膨れていた細い指も綺麗に元通りになっていた

「これ言うのも何度目か分からないけど…。便利ね、回復魔法」

関心したように、しかし表情を変えずに言うファルガナ女王。それに苦笑いしつつ、席を立つ

「それでは、次はリトマスさんの治療があるので…」

言いながら頭を下げ、部屋を出ようとした直後に手を掴まれる。ベッドに全裸で寝たまま、じとっとした目で俺を見上げるファルガナ女王

「…ねぇ、今からでも遅くないから私様の配下にならない？貴女ならドM奴隷にしてあげてもかまわないわよ？」

「え、遠慮しておきます…」

使いつぶされる予感しかしねぇ…っ！いや、ファルガナ女王が言動や行動と違ってわりと良い人なのは分かってるんだけど、それでも無理！

「そう、残念ね」

ぱっと手を離し、そのまま目を閉じるファルガナ女王。…流石のファルガナ女王も、至近距離でのミサイルの爆発には参ったらしい

あの後俺は気を失ってしまっていたから話を聞いただけだが、ヒカルさん達は【魔王】の妨害等も無く無事脱出。そこにいた謎の精霊（素性は現在ルクが調査中。１週間経った今でも手がかりは一切なし）の助力を得て、半強制的にファルガナ女王の城へ送られたそうだ

その後、ヒカルさんたちが戸惑いつつもルクの遠視調査が終わるのを待っていたら、少し遅れて例の謎の精霊によって、全身火傷に重度の酸欠状態になったファルガナ女王と魔族の少年…リトマスさん。他にも肉片にしか見えないリオナアハトさん、無傷ながらも妙に消耗したレームシルクさん、左腕を焼失してしまったガナルさんたちが転送られてきたそうだ。…バーティナは亡くなったらしい。死体も焼かれて残らなかったそうだ。…散々なぶってくれた相手とはいえ、悲しそうに語るリトマスさんの表情を見ていたら、少しだけ胸が痛んだ

怪我人や消耗していた者が多かったため、俺は無理矢理起こされ、怪我をした者全員に回復魔法をかけさせられた。回復魔法をかけたことでＨＰ全回復した…つまり、命に関わる傷は治ったものの、『レティーシア』の回復魔法だと火傷などの跡の残る傷は何度も掛け直さなければきれいに治らないのだ

――ちなみにその理由は、元のゲームでは、キャラクターの外見には大して傷が付かない…つまり外見まで修復する必要がないせいだ、と推測される――別にどうでもいいか。何度もかければ古傷だって消えるし

ファルガナ女王はこの国の象徴だ。そのファルガナ女王に火傷みたいな醜い傷を残す訳にはいかない…表向きはそんな理由で、俺達は2週間、身体を休めているところ

偽リーデスさんこと魔女にやられた傷はほぼ完治している。残念ながら【氷弓　ウズメ】はバーティナとの戦いの中で失ってしまったが、五体満足で生きていられるだけでも十分過ぎる

…とはいえ、城を包む空気は重い

色々なモノを失って、色々なモノが変わって、なにも得るものがなかったからだ

例えば…救出目標だった、ティエリアさん。綺麗な白髪に、銀色の目、真っ白い肌に、小柄なのに豊満な身体のお嬢さん。クロイワのことが好き…らしい、綺麗な女の子

無事ティエリアさん…王神の巫女とやらを助け出すのには成功した。リトマスさんたちは紳士的な対応をしたようで、ティエリアさんには傷1つなく無事生還。ずっと眠らされていたそうで、誘拐された、という自覚すら無かった

それでもティエリアさんは自分が誘拐されて、色んな人が動かなくていけなくなったのを申し訳なく思ったらしく、全員に謝って回った

その中でもティエリアさんが特に気にしていたのが…想い人なのだろう、クロイワだった

外傷はない。精々馬車から投げ出された時の擦過傷くらいで、回復魔法を使う必要すらなかった

だが…心が、折れてしまったらしい

彼は、与えられた部屋から一歩も出てきてない

彼に想いを寄せているだろう少女達の声すら無視して、食事すら取らずにぼんやりと天井を見つめているそうだ。

何度も声をかけているティエリアさんやカミナさん…彼の武器でもある、杖のユルエルさんすらも締め出して、1人で部屋に閉じこもってしまっている

誰も、何も出来ない。励ますことも、何も。ファルガナ女王すらもクロイワについては何も言わない。何も聞かない

そしてホシちゃん

…ホシちゃんもほとんど怪我がなかったのをいいことに、魔王が覚醒した日の夜には消えてしまった

一応ルクがその足取りを追っているようだけど、ふらふらと明確な目的もなく1人で色んな村や街へ足を伸ばしているらしい

目的が分からないだけに、咎めるわけにもいかない。犯罪行為もしていないし、最低限の体調管理はしているみたいだし。ファルガナ

女王はホシちゃんの目的を察しているみたいだけど、何も言わずに出て行った、という話を聞くと遠い目で「…そう。放っておきなさい」と呟くだけで終わらせたみたいだ

それから――

「レティ…シア、通り過ぎる…つもり、か」

「えっ？あ、えっ！？す、すいません！」

慌てて振り向けば、何の感情も伺えない目で俺を見つめるガナルさんと目が合う。扉から半身出し、呆れたように溜め息を吐く

「早く…してくれ…。やかましい…」

「やかましいとはなんだ！」

かこんっ！と軽い音。ガナルさんの頭でバウンドしたアルミ（に似た金属）製のカップがふかふかの絨毯の上を転がる。ガナルさんは頭を押さえ、うんざり顔で俺に言う

「部屋、を…変えてくれ…」

「…ファルガナ女王に言ってください」

「チッ」

舌打ちし、扉を開いて部屋から出てくる。パタパタと中身のない左袖が揺れ、焦げて炭みたいになった表皮が歩くたびにポロポロと落ちる。俺の回復魔法じゃ、木人の傷は癒せない。ことガナルさんに

限っては、自力で回復してもらうしかない

痛々しい外見を気にした様子もなく、乱暴に壁によりかかり、部屋を…部屋の中の人物を憎々しげな目で睨み付けるガナルさん

…魔族は魔族で人間関係複雑なんだよな…。なんで端から見ている俺ですら気付けるのに、なんでレームシルクさんは嫉妬丸出しのガナルさんに気付かないんだろう

内心で疑問を抱えながらぼんやり見ていたら、なかなか中に入ってこない俺に痺れを切らしたらしいレームシルクさんが扉を破壊するような勢いで蹴り開ける

「何をしている!?早くリトさまを治療してくれ!」

「…チッ!チッ!」

「もうほとんど治ってるので心配ないのでございますが…」

レームシルクさんの叫びに重なるように、ガナルさんの舌打ち。そしてリトマスさんの困り声が聞こえる

「あ、すいません。いまやります」

苦笑いしながら、3つのベッドと机、そしてクローゼットしかない部屋に入る。一応彼らは捕虜扱いなため、客室にいれることは出来なかった。この城には「主人公」の件とは一切関係ない重鎮もいるのだ。彼らは魔族を恐れるし、嫌悪する。だから、外側から鍵がかけられる部屋にまとめて閉じ込められている。可哀想だとは思うが…本人たちは不満と思っていないようだし、ただでさえファルガナ

女王の怪我で重鎮たちは大きく動揺してるんだ。これ以上重鎮達を精神的に追い詰める訳にもいかない

俺が部屋に入ると、レームシルクさんは敵意混じりの雰囲気を俺にぶつけながら、

「いけませんリトさま！小さな傷が致命傷の原因となる可能性もあるのです！増して火傷は治りかけでも免疫力を低下させるので変な感染症にかかりかねないと本に書いてありました！万全を期した治療が必要なのです！」

とベッドの上で半身起こしたリトマスさんを涙目で見つめる。リトマスさんはチラチラとガナルさんの様子を伺いながら、膝の上に乗せた肉塊を撫で…大きなため息を吐いた

「…レティーシアさま。申し訳ありませんが…」

「あ、はい。大丈夫ですよ。もう慣れましたし」

苦笑いしながら手を振れば、嫉妬の炎で燃え上がる視線が突き刺さる。なんだか本当に熱が篭もっているような気がする辺りが恐ろしい

「それじゃあ、治療しますね。服を脱いでください」

「はい」

全裸にシーツで寝てるファルガナ女王と違って、リトマスさんは病院で着る簡単な入院着みたいな服を身に付けてる。流石に火傷の治療はＨＰじゃ判断出来ないし、目視でやるしかない

あらわになった少年特有の華奢で薄い胸板。そしてその身体を縦横無尽に焼いた火傷の傷跡。背後からさっきとは違う意味で熱い視線を感じるが、無視して回復魔法をかける

「【無常の癒やしを。キュアヒール】」

緑色の光がリトマスさんの身体を包み、「ん…」と小さく声を漏らすリトマスさん。背中に感じる視線に湿っぽい物を感じるが、無視

「リオナアハトさんの様子はいかがですか?」

HPは既に全快している。それでも皮膚の火傷を治すために無理矢理回復魔法をかけ続けるのだから、当然時間はかかる。その間は、益体もない雑談をするのだが…お陰で城にいる「主人公」全員と顔見知りになってしまった

問い掛ければリトマスさんの膝の上で、リトマスさんに魔力を分けてもらっていた肉の塊の表面にぴりっ…と亀裂が入り、牙がびっしりと並ぶ口が現れる

「とりま動ける程度にはなったお。でもてっとり早く回復するには人間食べた方が早いお」

「…うーん、しかし我々は今ファルガナ女王に保護されている身でございますからねぇ…」

…人間を食べる、か…。本当に魔族なんだなぁ…と実感する。あ、そういえば…

「犯罪者ならいいんじゃないですか?称号：盗賊持ちはギルド的に

も討伐対象になってますし…。一応、ファルガナ女王に聞いてみましょうか？」

「レティたん結婚してくれ。お前の優しさに全俺が号泣」

「いえ、好きな人がいるので嫌です」

「二秒でフラれてほぼ俺が号泣。ざまぁ。なんだと腐女子。お前らもう喋るな」

なんだか中身で大変なことになってるらしいリオナアハトさんがうごうごと蠢く。サッカーボールサイズの口のある肉塊の表面がぼこぼこと波打ち、やがて止まる

気持ち悪い光景だけど、見慣れてしまえばどうってことない。そのまましばらく談笑して、完全に火傷の痕が消えたのを確認…しようとして

「後は私がやる。…「人間」側の亜人が、リトさまに馴れ馴れしくするな」

と鬼のような目で睨むレームシルクさんに追い出される。…レームシルクさんにも色々事情はあるんだろうけど、それでもイラつくのは仕方ない。…そりゃ、俺の意志じゃなく、流れで仕方なくとはいえ、好きな人の命の恩人に向ける言葉と感情じゃないと思う

「…すま、んな」

「あ、いえ。ガナルさんのせいじゃありませんし」

…どうやらレームシルクさんに苛ついていたのがバレてるらしい。
ガナルさんは俺になんか全く興味ないだろうに、「レームシルクさんのために」、俺に頭を下げる

「…レー、ムシルクは…恐がり、だから…どう対応して、いいのか…。分からん、のだ…」

「はぁ…」

生返事していると、ガナルさんはゆっくり壁から背を離す。そして…じとっとした嫉妬混じりの視線を、俺に向けた

「アレで…レームシルク、は…お前、を、好いている…。もっ、と…構って、やってくれ…」

「…考えておきます」

…嫉妬の感情を押さえてでも、レームシルクさんのために、か…。
ガナルさんもよく分からん人だなぁ…

頭を下げ、部屋を後にする

…ヒカルさんの部屋に向かう途中で、ついつい窓の外に視線を向ける

広がる青空と、綺麗な街並み。そして遠くに広がる地平線

…【魔王】は…アベは、今、どこで何をしているんだろう

46、主人公たちのその後（後書き）

レティーシアが出て行った後の女王の私室

ふぅー…と小さな溜め息が、静かな部屋に妙に大きく響く

シーツを蹴飛ばすように起き上がり、大胆に裸のまま全身を眺めるファルガナ。酷い火傷でただれていた肌はすっかり潤いを取り戻し、すべすべとした感触と、ほどよい弾力が手に返ってくる。長い髪が少し焦げてしまったのがいただけないが、それは後でナルクトールにでも切らせよう、とファルガナは1人納得すると、再びベッドに横たわった

傷はすっかり治ったが、魔王相手では力押しで勝てないのが分かった以上、頭を使って戦わなきゃいけない。まずはナルクトールの調査報告書に目を通そうと手を伸ばし…

と、ベッドに横たわったまま、チラリと部屋の隅を睨んだ

「…高みの見物とはいい度胸ね」

その言葉に応えるように、何もいなかったはずの角から、するりと細い足が伸びる。露出度の高いドレスから伸びる美脚に、ファルガナの表情が引きつった

「高みの見物とは随分な言いようね。一応言わせて貰うけれど…どうかしたの？凄い顔よ？」

脈絡もなく現れた精霊魔女…リーデスだったが、凄く苦みばしった顔のファルガナに気付き、首を傾げる。大胆に開かれた胸元が揺れ、こぼれ落ちかねないじゃない。とファルガナは益々不機嫌になった

「…いくらなんでも盛りすぎじゃない？大体２０真ん中かそこらの姿でしょ？ちょっと露出度激しすぎて逆に悲しいわよ」

じぃいい…と並みの人間ならそれだけで失神してしまいそうな視線から胸元をガードしつつ、リーデスは勝者の笑みを浮かべながらファルガナの横たわるベッドに座る

「はいはい、筋肉質なせいで露出度高い服が似合わないこと気にしてるのは分かるけれど、今は真面目な話しましょうねー」

「子供扱いしないで。私様のほうが年上よ」

「ところがどっこい。あたしは時間と空間の精霊。動いてる時間だけなら既に１万年オーバー。もっと子供扱いしてあげまちゅかー？」

「ぶった斬るわよ？」

恐い恐い、と本当に剣に手を伸ばすファルガナから数歩離れ、ふわふわと空中に腰掛けるリーデス。自分の脅しをさっぱり意識していないリーデスに不満げに鼻を鳴らすと、長剣をベッドに放り捨てて立ち上がる

「あら、もう起きれるの？初敗北でもうちょっとふて寝するかと思っていたのだけど」

「そんな暇ないんでしょ？私様は…オブラートに包んで言うとアレ

じゃない。身体動かしながらの方が覚えやすいわ」

「馬鹿の悲しい宿命ね」

「ぶち殺すわよ!?」

全裸のまま憤るファルガナと、体感時間だと随分久しぶりな掛け合いにけらけらと楽しそうに笑うリーデス。そんなリーデスの態度に「性格違うんじゃない？調子狂うわね…」と困惑したように呟きながら、下着を手早く身に付けていく

「話を戻すわよ？あたしだって高みの見物をしたくてしているわけじゃないわ。馬鹿でも分かるように言うのなら…。あたしは【魔王】関係において一切手を出せないのよ」

「…理由は？」

些かの動揺も見せずに問うてくるファルガナ。鍛え上げられているのに女性らしいボディラインを崩していないその肢体に見とれそうになりつつも、リーデスは続ける

「過去、現在、未来。色々干渉しようとしてみたし、せめて情報を持ち帰ろうとしたけれど…「神」が邪魔をするのよ。あたしは既に「主人公」ではない。だから、【魔王】と「主人公」の戦いには一切干渉出来ないようにね。だから申し訳ないけれど、アナタの味方をする事は出来ないわ」

「……成る程ね」

既にリーデスの立ち位置は「脇役」なのだ。しかし、脇役だという

のに強すぎる。「主人公」より強い、主人公から「脇役」にまで身を落とした者が存在する物語…その行き着く先は、「主人公」の出番がその「強すぎる脇役」に食われた末の、主人公交代

「神」が何を望んでいるのか知らないが、「主人公」と【魔王】の戦いを望む「神」たちにとって、それは望むものじゃないのだろう。だからこそ、一切の干渉を禁じた…物語から弾き出した

恐らくリーデスが魔王や、その部下と戦うことはこの先無いのだろう。それどころか、自分たち「主人公」に関われるのかどうかも怪しい

「…貴重な戦力がガンガン減っていくわね…」

ナルクトールから上がっている報告だけでも、アレクサンドロに正義の味方、いつか戦った虐殺少女に、虎の子のリーデス

事実上、【魔王】と戦えるのは自分。そして紛いなりにもリーデスを倒したあの女魔族…レームシルクだけ、か。あとの「主人公」は平均よりは遥かに強くても、「主人公」同士の戦いではイマイチ役に立たなそうだ。サポート職が多いのもその印象に拍車をかける

…せめて主人公補正を持っているユートとシンイチが戦力になるならば、と思ってしまうのは自分の悪い癖か

なまじ自分…クイーン・オブ・ファルガナと同じスキルを、主人公補正を持っているから、彼ら二人には無条件に期待をし過ぎてしまう。トリップ系主人公だとかそんなことは関係なく、自分と同程度にはやれるはず、と重荷を背負わせてしまう

お陰でユートは引きこもり、シンイチは自暴自棄で家出…どうしようもない

「…全く持ってままならないわね。いっそ隕石でも落ちてきて魔王に直撃しないかしら」

思わずため息も漏れてしまう。なまじ最強を自負していただけに、そんな益体もないことを言ってしまう自分に嫌気がさす思いだった

――そこで、ファルガナはリーデスが珍しく驚いた表情で自分を見ていることに気がつく。ほとんど表情は変わっていないが、それでも長い付き合いのファルガナや、彼女の身内ならば分かるくらい、明確に表情を変えたリーデスに驚いた

「な、なによ？」

少し動揺しながら問い掛けるファルガナと、珍しく薄ら笑いではなく、苦みばしった顔で眉根を寄せるリーデス

「…惜しいところ突くわね」

はぁ？と首を傾げるファルガナに、リーデスは告げる

「隕石を食らうのは、あなたの方よ」

「…は？」

「今日から１５日後、魔王の攻撃により、王城に隕石が落ちるわ。王都は壊滅。生き残るのはアナタと、クロイワ・ユート。そして魔族のリオナアハト。レームシルクの三人だけよ」

「……え、正気？」

っというか、手出し出来ないんじゃなかったの？と言わんばかりの表情のファルガナに、リーデスは肩をすくめる

「アナタと同じ名前のあたしの上司…的な立場になった男が、「このままだと魔王が圧倒的過ぎて盛り上がりにかけるから」と言って教えろ、と言ってたのよ」

…それはそれは、親切なことで

ファルガナは頭痛すら感じてきた頭を押さえながら、最早猶予が二週間しかないことに愚痴を漏らした

46、主人公たちのその後

王宮の中でも特別に作られた一室。全面ガラス張りで、床には足の踏み場も無いほどに書類や食事のゴミが転がる汚い部屋…その中心で正座しながら目を閉じるナルクトールを見つけ、少し迷ってからショーゼンは歩み寄った

「…【魔王】は見つけただか？」

ナルクトールは疲れたように溜め息を吐くと、無言で首を振る。不眠不休、魔王覚醒直後に1日休みを取ったことを除けば、僅かな休憩を挟むだけでずっと大陸中を見回していたナルクトールの表情には、深い疲労の色が刻まれている

「いい加減寝たほうがいーべ」

「いぇ…レティーシアさんに魔法で強化したり僅かなれど回復してもらっているので、まだ大丈夫です…。二日前に三時間ほど仮眠を取りましたし…」

それは大丈夫とは言わねぇべ。と内心で嘆息しながらショーゼンは持ってきた果物のすり下ろしのはちみつシロップ添えをナルクトールに渡す。疲れてるときには甘いものだ。けれど睡眠不足で食欲が減退しているナルクトールには、普通の食べ物は厳しいはず、との気遣いだった

「あ、ありがとうございます」

ナルクトールは弱々しい笑顔でお礼を言い、皿を受け取る。…が、口に運ぼうとはしない。少し時間が必要か、とショーゼンは判断し、ナルクトールのすぐ横に腰掛ける

「どんな調子なんだべ？」

「…難しいことを聞きますね…」

苦笑いのナルクトール。彼女は皿を膝の上に置くと、一枚の書類を手に取る。中には殴り書きのような解読しづらい文字で、かろうじてなんらかの報告らしいものが書かれていることが伺える

「…ぇと、最近各地で暴れ回っていた怪力幼女覚えてますか？近々討伐隊作らなきゃなーって相談してた」

「ん？あ、ああ。覚えてるべ。女王さまが留守の内に流れてきたって噂だったあれだべ？」

「あの娘と、最後にその女の子と接触した「暫定主人公」…コスプレ野郎が死にました。多分」

…あぁ、と僅かに気分が重くなるショーゼン

暫定主人公とは、その名の通り「主人公」だと思われる者だ。この世界にはない特殊な能力や武器を使ったり、他のモンスター、あるいは同種の生物とは一線を隔す身体能力や特異性を宿す者だ

基本的に「見る」ことは出来ても音声を拾えないナルクトールが、運良くその特殊な能力を使用している時に遭遇しない限りは発見出来ないため、あまり発見は出来ていない

その数少ない「暫定主人公」の内、２人。ありえない…いや、こう言っては何だが、「漫画やアニメの能力」を使う２人。

正義の味方と、虐殺を行う悪の怪人

そんな立ち位置の２人が、同時に消えたらしい

「最後にあの２人を確認したときに２人が戦い始めたところで、アレだけ派手に殺し回っていた殺人幼女と、色んな所で問題っぽいおこるとどこからともなく現れた正義の味方が同時にいなくなる…。相討ちになってしまったんですかねー」

「…対魔王戦じゃあ、期待してた戦力だったんだべ？大丈夫なんだか？」

「んぅ…私は戦いのことは分からないのでなんとも。ただ、戦闘系チートが２人もいなくなるってのはかなりヤバいと思います。魔王かなり強かったですし。なぁんであんな強いくせに女王さま迎えに行った時に死んだりすんだよー！！」

うにゃーっ！と頭を抱えるナルクトールに、そういえば「魔王」の少年とナルクトールに面識があったことを思い出す。といっても雇用者と被雇用者の関係で、当時「暫定主人公」の疑いがあったアベ・コウジとホシ・シンイチを試すつもりであったそうだが

「あとエロイカの街が潰れました」

「…はぁ！？」

あっさり言われたとんでもない事実に目を丸くするショーゼンと、そのリアクションの大きさにケラケラと笑うナルクトール

「あー、ショーゼンさんのえっちぃー。どうせあれでしょう？エロい街がなくなってエロいことできないなんてうそだどんどこどーん！みたいな！」

「んっだらこと言ってねぇべ！おまほんと寝たほうがいいべや！」

もー、男の人なんだから照れなくてもいいのにー、とケラケラ笑うナルクトールと、内心で（好きでもねぇ女抱いて何が楽しいんだべ…。っちゅうかオラ、まったく男って意識されてねんだな…）と落ち込むショーゼン

「どんなことがあったらそうなんべや？」

「空からでっかいロボットが落ちてきて街がどかーんってなりました。ほら数日前に地震あったじゃないですか。アレが原因です。事後しか見れなかったのでよく分かりませんが、恐らく色欲のアレクサンドロが主人公だったんでしょう。魔王は戦えるタイプの主人公から狙っている、と考えるのが有力かと」

…ナルクトールはそこまで気にしていないようだが、ショーゼンは背筋に氷を差し込まれたような気分だ

魔王は街1つ潰せるような能力を持っている。女王の身内で、女王も含めてそんな事が出来るのは「魔女の頂点」と女王本人だけだ。その魔女の頂点が殺られ、女王は一度魔王に負けている。…魔族の王も協力してくれる流れのようだが、どこまでアテになるのか分かったもんじゃない

…これは、自分も何か保険を作っておかなければ不味いかもしれない

ナルクトールは「街どころか山の1つ2つ吹っ飛ばすくらい女王さまも出来ますし、そんな恐い顔することですか?」と言わんばかりのあっけらかんとした顔をしているが、それはある意味女王への信頼…盲信、畏怖から来るものだ。自分はナルクトールよりはあの女王を見ている自信がある。…正直に言うならば、あの女王はそこまで信用出来ない

何故なら基本的に、根本的に、女王は物事を深く考えられないのだ

脳味噌まで筋肉なのだ

困ったときは腕力で力押しなのだ

こと戦闘に置いては類い希なる洞察力と直感を働かせるが、魔王が知略に優れているのならば…そもそも「戦いにすらならない」状態に追い込まれた時。彼女の堂々たる歩みは止められてしまうかもしれない

周りの人間が全員彼女より非力だったからこそそれで押し通ってこれたが、魔王が同程度の実力を持っていると仮定するならば…

チラリ、と「それにしても頭が回りませんねぇ。公務も全部止まってますし。こんなときリーデスがいたら加速魔法かけてくれるから仕事終わらせられたのに…リーデスが死んでしまったのが痛すぎま…あ、ちょっと待ってくださいなんか泣けてきた。あーもー情緒不安定ーカリオラさんになんて説明すればいいですー?落ち着け私。なんか難しいこと考えるんですよー。そうですよ!ファンタジーな

んだから身近な人が死ぬくらい普通…ふぇぇえんリーデスぅ…ぅえええん…」とかぶつぶつ言いながら泣き出したナルクトールに視線を向ける

そっと首にかけてた手拭いをナルクトールに渡し、静かに決意する

（ナルクトールだけは死んでも守るべ。好きな女くれぇ守らにゃ、ドワーフ失格だべな）

それにナルクトールはこの国に必要な人間だ。「主人公」だから、なんて理由で騎士団長の座に座っている自分なんかとは違い、国の公務を一手に引き受ける才女だ。しかもしっかりと睡眠を取ればこの世界でも指折りの美少女だ。事実、国の重鎮は自分の子供を使ってナルクトールを籠絡しようとしているのを彼は知っている

自分なんかとは釣り合わない。だから、彼女が気楽に接することができる異性の友人として、側にいれればそれでいい

ずびずびと手拭いで鼻水をかむナルクトールに苦笑いしつつ、とりあえず風呂の準備と寝床の準備をしよう、と決めたショーゼンだった

【魔王】についての調査、及び被害報告書

調査報告

まず第一に、【魔王】及びその部下は「千里眼」の能力を無効化している確証が取れたことを進言いたします

【魔王】及びその部下を中心に、目視で約５０ｍほどの範囲の空間に黒い霧がかかったように「千里眼」では見えない空間が発生しているモノと思われ、理由としてはその空間が人間の歩く速さと同等程度の速度で移動することが確認されているからです

また、この黒い霧状の空間は前回【魔王】との遭遇時に自分の目の前に広がっていた空間と酷似しており、【魔王】と自分が接触した場合、自分は失明状態に陥ります

現状この視認出来ない空間は、数えられただけで２７。大陸中に点在しており、目的は不明。そのため、見えない空間を探って【魔王】を発見することは困難です

方法としては見えない空間を片っ端から潰していくローラー作戦が有効ですが、協力者（レティーシア。前回報告書、暫定主人公調査まとめ。Ｂ２１の中段に記載）の証言によると、【魔王】の部下に復活回数の制限はないらしく、有効かどうかは怪しい

相手が行動起こすまでに万全の準備を整え、相手の動きにあわせて即反撃出来る大勢を作るのが望ましい

被害報告書

時系列順

アンノウンネーム「虐殺少女」による被害。前回報告書（被害報告　暫定主人公版まとめ。Ｐ４参照）に追加

・ウノク村　死亡者推定４０人
・フォーリッド街　死亡者推定１５０～２００人
・アリアスの村　死亡者推定９０人
・カリタロ集落　死傷者　２０～

カリタロ集落にてアンノウンネーム「正義の味方」（後述）との戦闘開始を確認後、消息不明。虐殺も停止。目的不明

暫定主人公でもあり、対【魔王】戦の戦力候補だったが、現在完全に消息を断つ

尚、虐殺少女は正義の味方と相討ちになった可能性が高い。生死不明（死体未発見）

アンノウンネーム「正義の味方」による被害

いずれも村や街の設備の破壊。だが、人命救助が目的だったと思わ

れるために割愛

前述の虐殺少女とカリタロ集落で相討ちになったものと思われる。虐殺少女と同じく暫定主人公だったため、【魔王】戦での戦力低下は否めない。生死不明（死体未発見）

【魔王】、あるいはその部下によるものと思われる被害

・エロイカの街、崩壊
死傷者数不明。完全崩壊。暫定主人公・アレクサンドロを狙った物と思われる。
方法は不明。だが、エロイカの街を中心にクレーター状に半径２０ｋｍの地面のくぼみを確認。
アレクサンドロは死亡（死体発見→斬首死体。及び葬儀を確認）

・ブエルスラッサ魔法学院の宝物庫に盗人が入る
犯人不明。原作イベントの可能性あり、原作イベント「魔神の最後」にて使用された「神殺しの牙」が盗まれる。詳細不明

・王都より西に３００ｋｍの位置に、魔王、あるいはその部下の物と思われる黒い霧（前述）が滞留。
目的不明ながらも要注意。ディーによる調査を進げ…

そこまで書いてから、はっとするナルクトール。泣いたせいで顔がぐちゃぐちゃになってしまい、お風呂（王都にはヴァンフォーレと同じく水道や下水道がある。最も、この世界でそれを作れるのはヴァンフォーレの職人だけだが）に入って、仮眠をとり、ようやく頭が正常に回ってきたところだ

そして…頭が正常に回っているからこそ、分かってしまう

彼女は、もうこちら側じゃないのだと

「…友達だと思ってたんですがねぇ…」

人間不信になってしまいます…と呟き、「主人公」を裏切ったござる口調の少女の姿を思い出して、またちょっと泣いた

４６、主人公たちのその後（後書き）

47、『死亡フラグ』（前書き）

キリのいいところまで書こうとした結果がコレだよ！！

それはともかく、ここにアレクさんの葬儀場を作ります

遺影はわたさん画ですとも。アレクさんの嫁さんですとも

＞ｉ３３１４９―３３６５＜

安らかに眠れ…エロイカの『英雄』よ…

47、『死亡フラグ』

「15日後、王都は落ちるわ。逃げる準備するなり私様と一緒に最後まで戦うなり、覚悟だけは決めておきなさい」

生き残りの「主人公」を集めてそう言った女王は疲れた顔でそう言った。彼女はそのままナルクトールに住人の避難や奴隷の解放などの指示をしているが、それをまともに聞いている者はあまりいないだろう。かく言う俺もその1人だ

「え、じょーおーへーか？まじですか？本気で言ってます？マジレスで王都滅んじゃったりしますの？」

なんか動揺のあまり口調が面白おかしいことになってるナルクトールが問えば、女王は駄目な子供を見る目でナルクトールを見つめた

「『時間』の聖霊お墨付きの未来予知よ。王城を中心に半径5Kmが焦土になるらしいから、まぁ生き残れるのはほんの僅かでしょうね」

「…それは、【魔王】の攻撃が原因なのでございましょうか？」

リトマスの言葉に億劫そうに頷く女王。女王は再び口を開こうとして――女王に背中を向けようとしたナルクトールの襟を掴んで引き寄せた

「どこに行くつもりよ」

「どこも糞もありますかー！！逃げますよ逃げますさ逃げるっきゃないでしょの三段活用！実家に帰ってそこそこの顔面の旦那さまと農業とかしてまったり過ごすのですー！！」

女王の胸の中でじたばた暴れるナルクトール。けれどそんなナルクトールを女王は困った子供を見るような目で見ながら、きっぱりと言い切った

「駄目よ。あんたは駄目」

「なぜにＷｈｙ!?嫌です嫌ですもういやんいやんなんです私非戦闘員だしもうこの辺で隠居させてください靴の裏舐めてでも隠居してやるですからー！！」

じたじたと一層激しく暴れるナルクトール。…その気持ちは、痛いくらいによく分かる

俺はそれなりの戦闘力を持ってる。けど、他の主人公…まして【魔王】になったアベの力は文字通り桁が違う。だというのに対抗する力の一切ないナルクトールやケイニーは、逃げることしかできない。逃げられるのかも怪しいくらいだ。なんの力もない彼女たちが、強大な力を持つ敵との戦いに感じる恐怖は、きっと俺とは比べものにならないんだろう

けれど――女王は、当然のことのように、あっさりとその言葉を口にした

「だって、近くにいないと守れないじゃない」

「…うぇ？」

ぴたっ、とナルクトールの動きが止まる。呆然としながら女王を見上げるナルクトールに、女王は当然のように

「あんた弱いんだから私様の側から離れたら駄目よ。これでもあんたのことは買ってるんだから、勝手に死なれたら困るわ」

「……ぃ」

ぽかん、としていたナルクトールがぷるぷると震え出す。次の瞬間には、彼女は滂沱の涙を流しながら女王に抱きついていた

「一生付いていきます女王陛下ー！！！」

「嫌よ鬱陶しい」

「ツンデレですね！ああ！なんかいま凄く晴れやかな気分です！私お姫様みたいじゃないですか！守ってくださいね！たまのお肌に傷が付いたりしたら責任とってくださいね！」

「嫌よ面倒くさい。ショーゼンにでも押しつけるわよ」

「ツンデレありがとうございます！」

きゃいきゃいとはしゃぐナルクトールを邪魔っ気に見ながら、女王は真面目な表情で俺達主人公を見つめる

「…どっちにしろ、二週間よ。戦うにしろ、逃げるにしろ、この二週間…ほんの少しの差はあるだろうけど、二週間が私様たち主人公に残された最後の猶予よ。…悔いの残らないようにしておきなさい」

…ごくり、と自然に喉が鳴る。逃げても、【魔王】は主人公を追ってくる。戦うにしても、実力の差が有りすぎる。…状況に流されて、成り行きでここにいるけど…俺たちは、どうするべきなんだろう

ちらり、と横目で黙って腕を組むヒカルさんの顔を盗み見る。…眉間に皺を寄せた、難しい顔。考え込んでる…多分、俺と同じことを

「それからあんたたち。私様が出来る最後の助言を与えるわ」

「へっ？」

女王の言葉に全員が小首を傾げる。この場で他に言わなきゃならないこと…っていうと、なんだ？

女王は一度溜めを作り、大真面目な顔で、口を開いた

「好きな異性がいるなら、押し倒して孕ませるなり孕むなりしときなさい」

「貴様は何を下劣な事を言ってるかーっ！！！」

一瞬で燃え上がるレームシルク。熱風が吹き荒れ、チリチリと髪を焼く。女王は冷静にリトマスさんの首根っこ掴んで引き寄せ、肉壁としてその背中に隠れる

「あつ！？あっつー！？れ、レームシルクさま！暑っ、いや熱いのでございます！いやむしろ痛いのでございますが！！」

「ああ！すいませんリトさま！くっ…この下劣淫乱不潔売女が…っ！リトさまを傷付けた罪は万死に値す…傷付けたのは私か？なら私は死ぬべき…？貴様を殺して私も死ぬ！」

キーッ！とヒートアップするレームシルクと「落ち着…け…」とそんなレームシルクをうんざり顔で羽交い締めにするガナルさん。そんな仲むつまじい魔族たちの様子を呆れ気味に見ながら、女王は言う

「一応言っておくけど、真面目な話よ。想い人に告白出来なかった、想い人と交際し始めたばっかりで肉体関係に至っていない、戦いが終わってから想い人に告白する覚悟、なんてのは立派な『死亡フラグ』よ。私様はそれで死んだ人間を何度も見てきてるわ」

…えー、いやいや。そんなの映画とかフィクションの世界の中だけ…って、そういやこの世界は物語の世界なんだっけ。じゃあり得る…のか？

「出来れば種だけ仕込んで妊娠してるかどうかは知らない方がいいわね。死にかけてる時に「あいつの腹にはお前の子供がいるんだー」って声かけてもらえたら立派な生存フラグになるから。いっそのこと想い人とかじゃなくてもいいから男共はそこら辺の奴隷妊娠させてきなさい」

なんかとんでもねーこと言ってる女王にわりと素で引いていたら、つんつん、と肩を突つかれた。隣を見てみれば、眉を八の字にしたヒカルさん

「…『死亡フラグ』ってなんだ？」

…サブカルに詳しくなさそうだもんなぁ、ヒカルさん。まぁ、知らなくても仕方ないのかな？

「え、と…戦争映画で、『俺、この戦争が終わったら結婚するんだ』とかって言ったりする兵士とか、雪山のサスペンスドラマで、『殺人犯がいるかもしれない奴らと一緒になんかいられるか！俺は自分の部屋に引きこもるぞ！』って1人になる次の犠牲者が建てる、視聴者から見れば「あーこいつ死ぬなー」ってのが分かる、お決まりの展開…かな、分かり易く言うなら」

「…なるほどな。なんとなくわかったわ」

しっかしそんなもん本当にあるんかね…と頭をがしがし掻くヒカルさん

…いや、孕むって…妊娠って…っつーことはそういうことする訳で…

あー、だめだ。考えないようにしよう。…今まで考えなかった訳じゃあないけど、それでもその…まだ勇気が足らない

周りを見渡してみれば、顔を真っ赤にしてひたすら「馬鹿じゃないの」と呟き続けるケイニー。半笑いでじゃれあう女王とナルクトールを見つめるショーゼンさんと、口元に手を当てながらガナルさんとレームシルクに視線を向けるリトマス。そんなリトマスをチラチラと見つめながら頬を染めるレームシルク。リトマスに嫉妬の視線を送るガナルさん

…そして、無理矢理連れてこられたせいで酷く不機嫌そうな、やつれ痩せこけたクロイワ

そんな彼を遠巻きに見つめている女の子が数人。ティエリアさんにカミナさん、シャルロットさんに、彼の杖に憑いてるユルエルさん。話が終わったのを察したのか、一言も話さずに部屋を出て行こうとするクロイワを心配そうに見つめている

「…あいつは放っておけ。何があったのかはイマイチわかんねぇが…。男にだって、1人になりたいときはあるもんだ」

ぽんっと俺の頭に手を起きながら、去っていくクロイワの背中を見つめるヒカルさん。ぞろぞろと女の子がクロイワの背中を追っていくけど、クロイワは彼女たちに申し訳なさそうに頭を下げるだけ。女の子たちが泣きそうに顔を歪めれば、クロイワも泣きそうな顔をする

…結局何も言葉を交わさずに別れたクロイワたちを見送り、俺は思うああなりたくは、ないな。って

女の子たちは明らかにクロイワに恋愛感情を持っている。けど、クロイワはそうでもない。好きな人に想いが届かないってのは、凄く辛い。…自然に女の子視点で見てるのに気付いて、俺は苦笑した

「ねぇ、ヒカルさん」

「うん？」

首を傾げるヒカルさん。俺をしっかりと見つめてくれている。…まだ、しっかり「恋人」になったわけじゃないけど、ヒカルさんも俺のことを大事にしてくれてる

「まだ、発情期じゃないよね？」

「あ？ああ、大体三日後くらいから発情期に入る計算だな。若干影響を受け始めてるが、問題はねぇ。なんかあんのか？」

ううん、と首を振った

さっきは勇気がない、なんて言ったし、そこに嘘はないけど…

「じゃあさ、ヒカルさん」

その手を取って、笑顔で言う。ちらりと外を見てみれば、いい天気だ。雲一つない青空と、いい感じの陽気に心は決まった

「デートしようよ。悔いが残らないように、さ」

嘘はない。男とそういうことするなんて、想像も出来ない

でも、それ以上にヒカルさんが好きだから

あなたと出来ることは、全部やっておきたい

…逃げてもいずれ殺されるかもしれない。女王がアベを倒してくれるかもしれない。倒せないかもしれない。一緒に戦っても死ぬかもしれない。戦わなくても殺されるかもしれない。

なら、悔いが残らないように

「どうせヒカルさんは女王さまに付いてくんでしょ？なら、俺も付いてくからさ。それまでの時間は俺に頂戴」

ヒカルさんは目を見開いて、困った顔をして、溜め息吐いて、苦笑しながら言う

「逃げてもいいんだぞ？俺ぁこんな性格だからよ、他に任せて逃げる、なんざ出来ねぇが、お前は…」

「やだよ。逃げたって逃げた先にヒカルさんがいないんじゃ意味ないしね」

あっけらかんと言ってみたけど、これがなかなか恥ずかしい。熱を持った頬を隠すようにヒカルさんに背中を向けて歩き出す

手を引いたまま、歩き出す

「…ありがとな」

「ううん。それよりも、これから二週間…は無理か。発情期あるし。とりあえず3日は俺に付き合ってもらうからね」

くっ、と押し殺したような笑い声。次いで、手の中の重みが消える

ヒカルさんが、隣を歩く

「男が女に手ぇ引かれるなんざ、格好つかねぇんでな」

茶目っ気溢れたウィンクをするヒカルさん。思わず、笑いが漏れた

「似合ってない」

「放っとけ」

「バカップルだべ…」

手を繋いで部屋から出て行ったレティーシアとオオジを見送り、ショーゼンは深いため息を吐く。部屋の中には既にあまり人は残っていない

けれど、だからこそぽつん、と寂しげに立っているケイニーが目立つ

…どうせ自分はナルクトールに想いを伝えることなんか出来ない。そんな勇気も、理由もない。なら…

「公爵令嬢さま」

「っ!?な、なによっ!?あ、汗かいてないわよ!?あんたになんかモーションかけてないからね!?」

びくりと身体をすくませ、ビクビクしながら警戒心を顕わにするケイニーに内心で苦笑いしながら、ショーゼンは言う

「自分はホシ・シンイチにこの件を伝えに向かいますが…よろしければご一緒にいかがですか?」

「…は?…はぁっ!?なに言ってんのよバカじゃないの!あたしはあんなオカマになんか…オカマになんか…」

一瞬でヒートアップするも、徐々に鎮火していくケイニー。若い娘は素直だなぁ、と気付けば２０代半ばの自分の年齢を少し寂しく思いながら待っていれば、ケイニーは口の中でぼそぼそと呟いた

「…あのキチガイエルフから助けてもらったお礼、まだしてないのよ…。だから、あたしも連れてきなさいよ…」

頬を染めて涙目で言うケイニーに、やっぱり自分は他人の応援のほうが性にあってるなぁ、とショーゼンは笑った

47、『死亡フラグ』（後書き）

まだまだ続きますよ！

48、『死亡フラグ』折り　魔族ｖｅｒ

孕ませろ、とはまた無茶なことを言う。表面上は全く表情を変えずに、ガナルはリトマスの火傷を治療するレームシルクを見つめる

――レームシルクとの出会いは、酷くありふれた物だった

モンスターや魔族、魔法や現象をカード化し、使役できる、というチートを得たガナルは、率直に言うと調子に乗っていた

自分はこんな素晴らしい力がある。だから、何をしてもいい。基本的に太陽光と水さえあれば充分、という考えの無欲な木人にはあるまじき傲慢な考えを胸に、彼は魔界で暴虐を繰り返した

性欲というものとは無縁な木人の体故に、そのベクトルは暴力に向けられ、数多の敵をほふり、カード化して自分の手駒に加えていった

そんなときだったのだ。ガナルを仲間に引き込めと、それが出来ないなら殺せ。とリトマスに命令されたレームシルクが彼の前に立ちふさがったのは

いつものように蹂躙する筈だった軍勢は瞬く間に焼き尽くされ

まるで道端の塵かゴミでも見るかのような目で自分を見つめるレームシルクの深紅の瞳が、全てを燃やし尽くす紅蓮の炎が強く強く焼き付いたのだ

あるいはそれは吊り橋効果だったのかもしれない。死を目前にした

恐怖を恋心と勘違いしてしまっているのかもしれない

それでも、ガナルの胸にはレームシルクの紅く、熱く、強い意志を秘めた瞳が焼き付いた

…だから、協力する

レームシルクにならば、すべてを捧げられる。

命も力も何もかもを。

見返りなどはいらない。

恋心かどうかなど定かではない。だが、愛おしい。一途にリトマスに恋い焦がれ、嫉妬に身を焦がすレームシルクが愛おしい。愛している

けれど、だからこそ伝えられない

己の胸の内を伝えてしまえば、レームシルクは己を拒絶する。レームシルクに捧げた全てまでもが拒絶されてしまう。ならば、何も伝えず、彼女に全てを捧げよう

彼女がリトマスに身も心も委ねているならば、彼女と同じように、己もまたリトマスに全てを委ねよう

この想い報われねども、己はそれで十分過ぎる

「あー、レームシルクさま。申し訳ありませんが部屋から杖を持ってきては頂けませんでしょうか？」

「はい、分かりました。只今お持ちします」

頭を下げてから火の粉を散らすレームシルク。その姿に苦笑しながら「ここは燃えやすい物も多いですし、能力は使わない方がよろしいかと…」と注意すれば、白い頬に朱を浮かべながら頭を下げ、駆け出すレームシルク

…そんな彼女を老人が孫を見守るような目で見送りながら、リトマスはちらりとガナルに視線を向けた

「告白はしないのでございますか？」

「…貴、様に言われ…る筋合いは、ない…」

ふんっ、とそっぽ向くガナルと、やれやれ、と言わんばかりに肩を竦めるリトマス。その態度に苛つきが募るものの、レームシルクが主君と仰ぐリトマスを傷つける訳にもいかず、顔を背ける

…が、

「よし、我と一緒に遊びに行きましょう」

「……は？」

「……何故、こんなことに…」

「ははは、まぁ我々は魔族でございますからね。城下町に繰り出す訳にもいかないでしょう。まぁこれはこれで味があってよいのではないでしょうか？」

けらけらと笑いながら酒瓶を傾けるリトマス。無理矢理渡された杯を仏頂面で支えながら、ガナルは眼下の町並みを見つめた

2人がいるのは文字通り空中。王都を一望出来る空の上、リトマスが作った不可視の足場に座り込み、呑気に酒瓶と一緒に席を並べている。恐らく城ではレームシルクがリトマスを探して走り回っているだろうに、のほほんとした顔でリトマスは「活気があって良い街でございますねぇ」とか呟いている

「…知るか」

素っ気ない返事を返しながら琥珀色の酒を喉に流し込む。人間の酒ではなかなか酔えない魔族の2人には、こっそりパチくってきたファルガナ女王秘蔵の名酒もジュースのようなものだ

「まぁそう言わずに聞いてくれても良いでしょう？我、これでも中身２９なのでございますよ。身体は１３歳でございますが。何が言いたいかっていうとこの若さで魔族王とか素晴らしい功績だとは思いませんか？」

「…知…るか。死、ね。興味が…ない…」

「これは手厳しい」

何が楽しいのか

けらけらと、ひたすらに明るく、楽しそうに笑うリトマスに、ほんの少しの違和感

「それではガナルさまも楽しめるレームシルクさまの話でも致しましょうか。実はあの娘、人間の貴族の玩具だったのでございますよ」

「…初耳、だな」

こうしてリトマスから聞かなかったら、自分では間違いなく一生聞けなかったであろうレームシルクの過去。それをあっさりと話すリトマスに腹立ちつつも、どうせ自分の想いが届くことはないのだから、少しくらい彼女の知られたくない部分を知ってもいいのではないか…等と自分勝手な考えで、少しだけリトマスの無駄話に付き合うことにしたガナル

「レームシルクさまの一族…ルビーアイは特に秀でた力や才能はないのに、見目麗しい種族でございますからね。力のある冒険者であれば容易に捕獲できるのですよ。運悪く１人一族からはぐれてしまったレームシルクさまは、冒険者に捕まり、哀れ悪趣味な貴族の捕

らわれの身に。毎日毎日拷問拷問。目を抉られ燃え盛る鉄の棒を押し当てられ、竜の腹に詰め込まれ。ああ、ルビーアイは火に耐性を持つ種族でして。それを面白がった貴族が「どこまでの火なら生きているのか」をチキンレースしていたのでございますよ。レームシルクさまが死んだら負け、というようなルールを課して。レームシルクさまは転生時に能力の暴走を危惧されたせいで１０歳まで能力を封印されていたそうで。抵抗する事もできずに毎日なぶられました、とさ」

「…チッ！」

胸糞悪くなる話をわざわざしにきたのか？とリトマスを睨めば、リトマスは大袈裟な動きで肩を竦め、まるで物語の語り部のように身振り手振りを交えて語る

「ところがある日転機が訪れます。なんと彼女を傷付けた人間を皆殺しにして、満を持して登場した魔族の小さな王様は、レームシルクさまよりも小さな身体で、それでも言うのです。「あなた様を助けに参りました」、と。果たしてレームシルクさまの目にはどんな風に移ったことでしょう。救世主？あるいは物語の王子様？いえいえ、そんなものではございません。何故ならその仮初めの王様はすべてを知っていたのですから」

「……む？」

雲行きが妖しくなってきた、とガナルの表情に不機嫌そうな色が宿る。それに気付いてないのか…いや、気付いていて尚それを無視して、リトマスは語る

「彼は彼の物語の全てが記された本を持っていたのです。だから、

レームシルクさまがどんなに追いつめられていても、助けを求めていても、悲しみと痛苦に絶望していても、自分の出番を呑気にぬくぬく待っていたのですよ。その気になればもっと早く助けられたというのに、レームシルクさまという駒を手に入れるために、じっとレームシルクさまが苦しむ様を眺めて――」

気がつけば

ガナルは、リトマスを殴り飛ばしていた

不可視の足場から飛び出したリトマスが落下しかけ、慌てて呪文を唱えて戻ってくる。そして、青く染まった頬を抑えて苦笑した

「…意外と熱いのでございますね」

「黙れ…っ！！知るか…っ！知るかっ！貴様の事情など知ったことか…貴様には、レームシルクを幸せにする義務がある…っ！罪悪感を感じるのは勝手だ…！だがな…貴様がレームシルクを『そう』したのなら最後まで責任を…」

怒りのままに、激情を叩きつけるように声を張り上げるガナル。普段ぎこちない口調でしか喋れない彼が、吐き出した血を吐くような叫びは…リトマスの困ったような笑みに吸い込まれて消えた

「…はい、そうでございます。ですから、『最後』まで面倒を見させて頂きたいのでございますよ」

「…な、に？」

リトマスが背中から取り出した一冊の本。彼の物語が記されたそれ

をパラパラと捲り――最後のページが、開かれた

…いや、待て。最後？ガナルの頭に浮かんだ疑問。それを肯定するかのように、リトマスは少しだけ頷いた

「我の物語は【魔王】との戦いで終わりなのでございます。だからこそ、残されるかもしれないレームシルクさまをお任せしたいのです」

チリチリと、向かい合う2人のすぐ近くで、小さな炎が燃える

語り合う男性2人。ライバル視していた青年と、愛すべき、愛しい主人

盗み聞きするつもりはなかった。ただ、この身は焔。そこに酸素があるならば、肉の身体を形作らなくてもそこに在る

しかし…今はそんな身体が忌々しい

いっそ、いっそ消え去ってしまいたい。このまま火の粉になって空に溶けてしまいたい

いつだったか、リトさまは言った

「我はレームシルクさまの想いに応えることはできません。例え何があろうとも」

悲しかったし、そのときも死んでしまいたいと思った

だって、例えリトさまが私を利用するつもりで助けたのだとしても、駒としてしか見てくれなくても、ただ「そういう物語」だから私を助けてくれたのだとしても

助けてくれたのはリトさまだけだったから

私には、リトさましかいなかったから

だから、良かった。例え報われなくても、あの方の隣にいれるなら。リトさまの役に立てるなら、リトさまに誉めてもらえるなら、それだけで十分だった

それにリトさまは何があっても無理、とは言っていたが、リトさまはこれから大人になる。私だって大人になる。だったら、いずれチ

ャンスがあるんじゃないか、なんて希望を持っていた

なのに…

なのに……

リトさまがいなくなってしまうのだとしたら、私はいったいなんのために生きているんだ

ケルドゥが私に好意を持っていると、初めて知った

殺し合いをした仲で、そんな感情をもたれるなんて想像すらしていなかった

正直に言えば、うれしい。誰かに好かれているというだけで、嬉しいと思うのは事実だ。孤独で弱い下級の魔族は酷く惚れっぽい。弱い魔族の本能が、他者にたすけを求めるのだ

けれど…彼は、リトさまじゃない

例え打算があったとしても、リトさまは私が辛いときに助けに来てくれた。その後もずっと慰めてくれた。命令をこなせたら褒めてくれたし、私が拷問の恐怖に魘されるようなことがあれば、そっと小さく華奢な身体で抱き締めてくれた

私は、リトさまがいい

リトさまじゃなければ、嫌だ

だから…私は、私は…私は、なにをしたらいいんだ…!?

苦悩に身を焦がすレームシルクの体が鱗焔のように瞬いた

４８、『死亡フラグ』折り　魔族ｖｅｒ（後書き）

三角関係で一辺が落ちるってのも恋愛漫画のテンプレ…ですよね？

４８、『死亡フラグ』折り　虎とエルフｖｅｒ（前書き）

48、『死亡フラグ』折り　虎とエルフｖｅｒ

映画かゲームの世界みたいだ、というのが、王都の城下町に降りた俺たちの感想だった

煉瓦作りの家屋や商店。道の端には露店や行商人が広げた商品が並び、道行く人々が着ているは麻の服か絹のドレス。糞尿の臭いはしないし、食料品店の中に害虫がいることもない。けれどヴァンフォーレみたいに魔法が使われた水道やコンロ代わりの魔法の道具などはないらしく、水瓶を運んでいる男性や、今まさにことことと湯気を立てる鍋が、土で盛られた竈に乗せられている

都合のいいファンタジー、とでも言えばいいのか。中途半端に近代化された街の様子に、そして笑顔の街の住人たちの様子に、妙に心が浮き足立つ

「な、なんかテンションあがるね！」

「はしゃぐなアホ。ほれ、ちゃんと耳隠せよ…」

思わず駆け出そうとして、ヒカルさんに窘められる。自制しながらバンダナを締め直し、ヒカルさんと手をつないで露店を見て回る。俺はこの世界の服やアクセサリーは装備出来ないから、文字通り見て回るだけだけど

なんだかんだで俺もしっかり女の子になってしまったのだろうか。こうやって冷やかし混じりにお店を覗いていくのが楽しくて仕方がない。ヒカルさんはどこかつまらなそうな、ぼんやりとした表情を

しているが、その手を引いて露店に並べられた装飾品の数々に視線を落とす

「いらっしゃい。恋人かい？」と笑顔で聞いてくる人の良さそうな中年の店主に、「そんな感じです」と笑顔で返しつつ、リボンや指輪、ネックレスにバングル、ピアスにイヤリングに首輪と多種多様な種類のある装飾品を眺める

「これなんかヒカルさんに似合うんじゃない？」

「あん？…ってリボンかよ。いいよ、これ一本ありゃあな」

「えー。見てこれ虎柄だよ虎柄。髪の毛の色にも合うしいいと思うんだけどなぁ…」

とはいえ、普通の布のリボンよりは色々副次効果のあるミスリルリボンのほうがいいに決まってるよね。となると…槍もって戦うし、時々でっかい虎になるヒカルさんじゃ指輪は勿論ネックレスも厳しいだろ？となると…

「じゃあこれ！首輪！」

「お前は俺をどこに持ってく気だ！」

突っ込みと共に額を小突かれる。いたた…と額を撫でながら、不機嫌になったのをアピールするように唇を尖らせた

「前もつけてたのに…。そういやあの時お揃いだったよねー。もっかいヒカルさんとお揃いしたいなー」

「嫌じゃアホ。行くぞ」

「え？どこに？」

「昼飯まだで腹減ってんだよ」

弱り顔のヒカルさん。でも、多分嘘だろう。さっきからにやにやしながら露店の店主がヒカルさんを見てたから、多分居たたまれなくなって逃げたくなったんだ。それを証明するかのように、尻尾がすっかり元気をなくしてぷらぷらと揺れている

「ヒカルさんってかわいいね」

「…ケンカ売ってんなら買うぞ」

仏頂面のヒカルさんに手を引かれて歩く。苦笑いする露店の店主に手を振りながらずるずると引きずられるけど、くすくすと漏れる笑いは隠せない。それがしゃくに障ったのか、それとも拗ねちゃったのか。大股で歩くヒカルさんに、転びそうになりながら連れてこられた先は…ホットドック？に似た商品を並べた露店

「こいつぁなんだ？」

とヒカルさんが問えば、まだ年若い青年は爽やかな笑顔で応じてくれる

「食べたことありませんか？これぞ王都名物クインドック！豚の腸に肉を詰めて、カバルの実を煮て作ったソースに漬けて煮込んだものを、白パンに挟んだものだよ。口の中でパリッ！と腸が破れた瞬間、中の肉汁がじゅわっと広がる、抜群に美味くて手軽に食べれる

人気商品！女王の命令で作られたもんでね、クインドッグといえば庶民のお供さ！」

カバルの実は確かトマトによく似た味のする果物だから…まんまホットドックじゃん。多分ファルガナ女王が食べたくなって作らせたんだろうなぁ。…あのファルガナ女王がホットドック食べたさに我が儘言ってるとこを想像して、少し笑った

「じゃあそれ２つ…って、豚だとお前が食えねぇか。」

「ん？いーよ？肉だけヒカルさんが食べてくれれば。ちょっと気になるし」

久しぶりにケチャップ味食べたい。この世界だと塩や胡椒はわりと簡単に手に入るけど、そういうのはあんまりないし。一番食べたいのは醤油味だけど、ないものねだりしても仕方がない

「そうか？じゃあ片方ソースたっぷりでチーズトッピング。もう片方はスタンダードで頼む」

「あいよー。飲み物とフルーツ付きで９４ゲイルになるがどうする？」

「…じゃあ、頼む」

なんかハンバーガー屋みたいだ。ヒカルさんもそう思ったのか、妙にもやっとした顔をしていた

気さくな青年から袋に入ったクインドッグとやらを受け取り、木の実に直接木製のストローを刺して、中身の果汁を吸う、というヤシ

の実を連想させる飲み物を片手に、歩き出す。青年が予想以上にいい人で、座って食べるならこの先に噴水広場がある、と教えてくれたのだ

お互いに食べ物を持っているから手は繋がず、けれど離れないように寄り添って歩く。出会った当初はもっと離れていた筈なのに、気がつけば腕と肩が触れ合わんばかりの距離が普通になっていることに、少しだけ笑みが漏れた

「「おおー」」

歩き続けて一分もしない内に、噴水広場に着く。大きなプールの真ん中に、剣を掲げた長髪の女性の銅像。その背中には今にも崩れ落ちそうな竜の銅像があり、水は横たわる竜の口から吹き出ていた

近付いて見れば、何か説明らしいものが書いてある。曰わく――ファルガナ女王陛下。水竜を打ち倒す

…流石過ぎる。至る所で見つけるファルガナ女王の名前に、ヒカルさんと顔を見合わせて笑った

ほど広い広場にたくさん設置された数人が座れるサイズのベンチに座り、ホットドックの袋を開ける。ヒカルさんに肉だけ食べてもらってから、パンにケチャップとチーズをぶちまけたようなそれにかぶりつく。パンはパサパサしているけど、ピザっぽくて美味しい。ジュースも甘酸っぱい…ようなちょっぴり苦いような不思議な味だけど、なんだか癖になる

「美味しいね、これ。でもちょっと高めだったよね。白パンって高いのかな？」

「さぁなぁ？…ってこら、動くな。ほっぺにケチャップついてんぞ」

「ケチャップじゃないけどねってうわっ、ちょ、自分で取れるよ！」

自然な動作で俺の頬を指先で拭うヒカルさん。ヒカルさんは気にしなくても、俺は恥ずかしい。「なぁーに照れてんだよ」と悪戯っ子みたいな顔で指先を舐めるヒカルさん。確信犯かちくしょう

「…ヒカルさんがほっぺに付けてみろ。舐めとってやる」

反撃の言葉責め。なんやかんや言ってヒカルさんは照れ屋だし不器用だ。そんなところが可愛いんだが、人前でほっぺにちゅー（仮）宣言されたら顔を真っ赤にして慌てるはず

そんな思惑で吐いた言葉は、しかし呆れと諦めを含んだ視線で切り捨てられた

「…やめとけ」

…カチンッ、と何かがしゃくに触る。さっきまで穏やかな気持ちだったのに、途端に心がムカムカとささくれ出す。それに少しだけ戸惑いながら、ヒカルさんをじっと睨む

「…冗談だと思ってる？やるよ？俺は」

「いいから落ち着け、冷めるぞ」

…なんか、面白くない

ほとんど意地だけで食べかけだったホットドックをベンチに置くと、ヒカルさんの膝の上に登る。周囲にそこそこの数がいた通行人やベンチに座っていた町人の視線が突き刺さるが、無視

椅子に座ったヒカルさんの足を跨ぐように、向かい合って膝の上に上る…所謂対面座位と言われる体勢で、両手でヒカルさんの頬つかむ

「するよ」

「やめとけ」

何を今更。大方本当にやられるとは思ってなかったんだろう。仏頂面のヒカルさんの顔に唇を近付けて――

唇が触れるより早く。引き寄せられた

後頭部に置かれた手が、優しく髪を撫でる。ヒカルさんの肩口に顔を埋めるように、がっしりと腰と頭を固定される

ほわっ、と胸の中に広がる暖かい気持ちと、少し冷たい手の感触。冷たい鎧の奥から感じるヒカルさんの匂いに、一気に頬に血が集まる

「ちょっ!?卑怯だー!舐めさせろー!」

じたばたと手足をよじって暴れるが、腰を掴む力強い腕が、そして意志に反して力の入らない身体が、まるで本心を語っているようで

「はいはい、落ち着け落ち着け」

ぽんぽんっ、と子供をあやすように頭を叩かれて、暴れる気力すら

奪われてしまう

「う～…なんだよもお…恥ずかしいなぁ…」

「馬鹿野郎。一番恥ずかしいのは俺だ。見ろあの微笑ましいモノを見るかのような視線を」

…振り向きたくない。けど、この体勢を手放すのもまた嫌で、額をヒカルさんの首に押し付けて顔を隠した

「…あんま無理すんな」

さらさらと俺の髪を撫でながら、優しい声で言うヒカルさん。その内容に、少しだけ虚を突かれた

「無理なんか…」

「してんだろ？無理矢理テンション上げて…あー、その、なんだ。デ…ート楽しんでみたり、女王さんと最後まで戦う、なんて即決したり…あとは、その、なんだ…」

見てなくても分かる。困った顔で、眉を八の字にして、恥ずかしそうに

「…俺のガキ産む気だろ、お前」

「……うん」

素直に言うか言うまいか悩んだ長い沈黙の後に、力無く頷く。ヒカルさんに嘘を吐いても仕方がない

死亡フラグ、折らなきゃだし

ヒカルさんの子供なら、大丈夫だし

恐いけど、本当は嫌だけど、『大丈夫』

そんな俺の思いを察したかのように、優しく、努めて優しく、ヒカルさんは俺の頭を撫でた

「んなもんいらん。俺はな、好きな女に無理させてまでそんなことしたいとなんか思わねぇ。だから、んなことしようとなんかしなくていい」

――――――

「ぉ、おう…？俺は好きな女に…」

そこまで聞けば

そこまで聞ければ

充分過ぎた

ぎゅぅ…とヒカルさんの頭を抱き締める。ヒカルさんから驚いたような気配が伝わってくるけど、それすら愛おしい

「二回目…」

「あ…？」

「二回目。ヒカルさんが、俺のこと好きって言ってくれたの。ううん、言い直させたから三回目…かな？」

『好き』…たったそれだけの言葉で、充分過ぎた。さっきまでの恐かったのとか、もやもやしてたりしたのが、全部どっかに飛んでったような気すらする

「…なんかもーキュンってした。ヒカルさんのせいだ。ヒカルさんが悪い。急にそういうこと言うとかさー。ズルいよヒカルさんは。キュンキュンしちゃったじゃん。ああ、もう…俺、…ああ、だめだ…」

はぁ…と熱っぽい吐息が口から漏れた。驚いてる…と言うより、豹変した俺の様子に若干引いてるヒカルさんの様子に、どこか暗い愉

悦が胸の奥から湧き出てくる

「ねぇ…ヒカルさん」

「な、なんだよ？」

動揺してきょどきょどと視線を逸らすヒカルさんに、くすりと笑う。

ああ、かわいい。愛おしい

こんなに大好きなんだから、何の問題もない…はず

「やっぱり俺、ヒカルさんの子供産みたいよ」

「――――はっ？」

48、『死亡フラグ』折り　虎とエルフｖｅｒ（後書き）

この先は省略されますた

…なんて言うと思ったか？

いや、テンプレ的に考えると翌日の朝、正気に戻ったレティの朝ちゅん。隣でおおじちゃんがすやすやってのなんですけどね？

ごめんね！人春エロい人なんだっ

以下、Ｒ－１５。注意。

良い子は人春みたいにならないでねっ☆

―――――――――――――――

呆然としていたヒカルさんが正気に戻るより早く、その手を引いて
王都の高級宿屋に泊まり込む

代金を先払いして部屋に案内された辺りで、ようやくヒカルさんが
正気に戻った

「お、おま！落ち着け！なっ！？お前いまちょっと正気じゃねぇんだよ！」

後退りするヒカルさん。尻尾が数倍くらいに膨らんでいて本気で恐がっているみたいだ。そんな様子が、なんだかすごく愛らしい

ああ、やっぱり俺、中身は男なんだ。男の部分も残ってるんだ

抱かれたい、じゃなくて、ヒカルさんを…抱きたい

「ヒカルさん…」

涙でぼやける視界。はぁ…はぁ…と荒く息を吐きながら、少しだけ近付く

「ぅっ…」

呻きながら数歩下がるヒカルさん。その姿にもどかしい想いを抱えながら、マントを外す。鎧を脱ぐ。ベルトや上着も脱いでいく

「俺じゃ…いや?俺じゃ、興奮しない?」

わざと男心を擽るような言い回し。涙の浮かんだ瞳でヒカルさんをじっと見上げるまた呻きながら下がるヒカルさん

「い、いやじゃない。嫌じゃあねぇが、その、なんだ。どうせするならムードってもんがあるだろ?それにたしかお前初めてだし…初めては思い出に残るような…っ!?」

じりじり下がっていたヒカルさんが、その背後にあった椅子にぶつかって止まる。一瞬動きを止めた隙に接近して――思いっきり、抱き付いた

「うぉ…っ!?」

衝撃で倒れ込むヒカルさん。鎧とぶつかって多少痛い思いもしたけれど――戦果は充分

「…ぁ」

さぁ…っとヒカルさんの顔が真っ青に染まった

「…つーかまーえたっ」

にっこりと。ヒカルさんのお腹に跨がりながら、にっこりと笑う。
対面座位に続いて騎乗位…というとちょっと下品だけど、面白いくらいに動揺するヒカルさん

「ま、待て！落ち着うぁっ！？」

ぺろっ、と

鎧で隠れていないヒカルさんの首もとを舐めた。びくんっ！と可愛らしく身体を跳ねさせるヒカルさんに、ぞくぞくっと背筋に何かが這い上がる。腹の奥が一気に熱くなったような気すらする

「…ヒカルさん、かわいい」

「ばっ！ってめ調子に…ぅあああっ！？」

ヒカルさんが一瞬本気で怒った顔をしていたので、慌てて耳に舌を這わせる。もふもふした外側とは違い、意外にひんやりとした、ざらざらの耳の穴に舌を差し込みながら右手でヒカルさんの鎧を外していく

「ぅぁ…こっ…の、調子に、のっあ…ふざけっ…っ！！」

ちゅっ…くちゅ…ちゅるるる…

水っぽい音と低温のあえぎ声。なんとも言えぬ淫靡な雰囲気に酔って、そのまま舐め続ける。ちょっとしょっぱいような、獣の匂い。ヒカルさんの汗の匂いに身体がじわじわと熱くなる。大して動いてもいないのに、じんわりと汗が噴き出て――「んぁっ！？」

ぴりっと電気が走る。耳から口を外し、喉奥から出たのは喘ぎ声。思わず両手を付いて離れようとしたのに、さっきまで俺を押しのけようとしていたヒカルさんの手が、今度はそれを邪魔する

「…はっ、お前も結構弱いんじゃねぇか」

小馬鹿にしたような声に、ぞくぞくっと背筋に走る悪寒のようなその感覚は止まらない。この時の俺は知らなかったけど、それは確かに『快感』だった

「あっ、ひっ…ぁっ…あ、ぁ～…」

ざらざらとした舌の感触が、胸元から喉まで上がってくる。ただそれだけで胸の先が突っ張ったように痛み、腰がびくびくと浮き沈みする。喉から漏れる悲鳴混じりの嬌声に、自分でも驚くくらいだった

熱にゆだったような頭をふりふり、荒い息を抑えて恐る恐る下を見てみれば――

「…お前がその気なら、遠慮しねぇぞ」

『スイッチ』が入った――『獣』の目

きゅんっ…と胸と、下付首で鼓動が高鳴る。俺が硬直している間に、ヒカルさんは俺を抱き上げてベッドに向かう

ぽふっ…と普通の宿よりは幾分柔らかく、清潔なベッドの感触が背中に伝わる。仰向けでベッドに寝かせられたら、途端に恥ずかしくなってきた。思わず半分脱げてた服を正して、盛大に露出していた胸元を隠す

「…人がせっかく我慢してやってんのにテメェってやつは…」

咎めるような目で俺を見ながら、鎧に、インナー、ズボンを脱いでいくヒカルさん。鍛え上げられた肉体美に、ごくりと喉が鳴った。男の身体に興奮している自分に、軽い驚きと、僅かな喜び…悦びが生まれる

「…加減はするが…覚悟はしろよ」

「ん…うん…」

のしかかってくるヒカルさんに、こくりと頷く。ヒカルさんは少しだけ笑って、脱ぎかけだった服に手を――あっ！

「さ、最初挿入したらすぐ抜いてね？血だけは採取しなきゃだから」

「…ちゃっかりしてんのな」

若干萎えたわ。と苦笑いするヒカルさんに、あはは…と誤魔化し笑いを浮かべた

――――――――――――――――――――――――――――――――

…え、いや、最後まではちょっと…

ノクタには絶対に行かないでって感想板で言われましたし

しかし腐っぽいですね。せめてレティの一人称が女の子だったら攻め女子だったのに…

寸止めですよ寸止め。お約束ですテンプレです。朝ちゅんですよこの先は

閑話　魔王とモンスター（前書き）

ちょっとグロいです。またＲ－１５指定です

久しぶりに大人気のあの娘が登場します

閑話　魔王とモンスター

かちんっ　かちんっ　かちんっ　かちんっ

小さな甲高い金属音。意味もなく手の中でリヴォルヴァー型のハンドガンを弄びながら、魔王は目を閉じて空を見上げる

背後には１００人以上の「主人公」が付き従い、その中には獣人のディーもいる

がさっ…と森全体がざわめく。僅かに主人公たちに動揺が広がるが、魔王はようやく来たか、と息を吐いた

ずる…ずる…ずる…と、湿った重いモノが引きずられるような音。ガサガサと茂みが蠢き、夜の闇の奥にぼんやりと白いナニカが写り込む

「おはようお前ら元気ですか。元気じゃなさそうな感じですねすいません顔色悪いがそんな表情で大丈夫か?あたしの相手にゃちと元気が足らない感じですよな。腰砕けてアヘ顔晒して美味しく頂かれますか?」

現れたのは、少女。外見だけなら１０歳前後のその少女の内に秘められた凶悪さに、主人公たちは微かにおののいた

ミーラグリーズ、ラグナエイト。魔神の髪と呼ばれるモンスターは、ゆらゆらと頭を揺らしながら、ずるずると音を立てて魔王に歩み寄る

「はじめましてなこんにちわ。どうでもいいが立ち位置逆ですねサーセン。どう考えてもあたしのがラスボスっぽいですものよ。いっそラスボス代わりませんか？アッヘアへにしてやんよ」

ぴくりとも口元を動かさずに語るラグナエイトの様子に、魔王の唇がつり上がった

「――全力で叩け」

その言葉に答えるように

巨漢の主人公が大きな斧を振り上げ、巨大な鎚が振り下ろされ、無数の槍や剣、矢や銃弾が一斉に少女の身体に突き刺さり

ぐぶぢゅるるっ！！と酷く嫌悪感を誘う音と共に、ラグナエイトの身体が潰され、体液や肉片を撒き散らして巨大鎚の下敷きになった

「…？」

呆気なく潰れたラグナエイト。その余りの手応えの無さに主人公たちは首を傾げ――

「…？…っ！？」

気がついた時には、既に手遅れだった

巨大鎚の下、緑色にも紫色にも見えるラグナエイトの体液と共に、はみ出た白い肉片――いや、触手が、複数の主人公の足に絡みつく

主人公たちの身体が呆気なく宙に持ち上げられる。まるで七輪で焼

いた餅が膨れ上がるかのように、巨大鎚を持ち上げてラグナエイトの身体が膨れ上がる

「だーいにけーいたーい」

うぞるるるる…っと生理的な嫌悪感を覚えさせる音と共に、巨大な触手をスカートのようにも見える下半身から複数伸ばすラグナエイト。見た目だけだったら美しい少女の唇が、緩やかに弧を描き――――

ぎょるん、と

閉じられていた瞼が、『裂けた』

右の瞼と左の瞼が繋がり、そこから覗くのは彼女の三分の二を占領する巨大な単眼。狂ったようにせわしなくぐるぐると周囲を観察するかのように動き回る巨大な眼球が、小さな少女の頭に無理やり押し込められたようなその光景、触手に捕らわれた主人公たちの口から悲鳴が漏れかけ――僅かに開かれたその隙間に、すかさず子供の拳ほどの太さの触手がねじ込まれた

「逃がさないし逃げないし逃げられないですよなあなたの運命。人生の終着駅はここで来世は幸せ死ぬときも幸せ。頭がふっとーしちゃうよぉな快楽と悦楽と享楽の内に緩やかに美味しくいただきいただきいただきます」

ぺろり、と僅かに開かれた唇から触手の先端が覗く。壮絶な笑みを浮かべながら、ラグナエイトは十数人の主人公を一遍に絡め取った

「――――っ！！」

声にならない悲鳴を上げる主人公たちに、実に楽しそうな様子で触手を操るラグナエイト。触手全体から吹き出た粘液でその全身はてらてらと輝き、先に捕獲された主人公たちから漏れる声に、悲鳴以外のモノが混じり始める

「腐女子の方々大興奮ですかそうですか!!あたしもテンションあがって参りました感じですよな!マッチョゴリマッチョ細マッチョもやしインテリショタ眼鏡触手総攻め淫乱アスホールガン突きねろねろ美味しいですっ!!」

けたけたと無数の口で笑いながら、一歩も動くことなく次々主人公たちを絡め取っていくラグナエイト。魔法で援護しようとするものもいるが、テラテラと輝く粘液があらゆる魔法の邪魔をし、剣で触手を断ち切っても数秒で回復してしまう。チートのお陰で強大な力を得たものの、それを使いこなせていないまま死んだ主人公たちは次々ラグナエイトに捕獲されていく

その様子を眺めながら、静かに魔王は頷いた

予想通りで、予定通りだと

今、ラグナエイトを、そしてマノメ・ユージローを殺すわけにはいかない。しかし、とある事情によりこの二体が『邪魔』なのだ

ならば、どうする?

簡単だ。どこか別の場所に移せばいい。出きることなら、ラグナエイトとユージロー自身の意志で移ってもらうことが望ましい

だからこそ、捨て駒として大量に用意した主人公たちがほとんどロ

クな抵抗も出来ずに補食されていく光景を腕を組んで見つめながら、魔王は静かに時を待つ

「ディー」

「了解でござる」

静かな呼びかけ。ディーの背後の空間が撓み、そこから飛び出てくる魔導書。唯一「使いどころ」を指定されたソレを片手に、静かに魔王とその側近は『彼』の登場を待つ

「いくらなんでも多すぎませんか逃げません？こんなに多いとお残ししちゃう系のごめんなさい。食堂のおばちゃん大激怒。お前ら代わりに怒られてもらえますのな？あたし人から怒られるのが世界で一番大嫌いな触手系お姫様なんでわがまま放題パケほーだい」

主人公たちの嬌声に混じる意味のないラグナエイトの呟き。必死で抵抗する主人公たちの数が三分の二程になったころ、忙しなく動いていたラグナエイトの瞳がぴたりと止まった

「…もう、お腹いっぱいで食べられませんな」

ぞわり、と総毛立つ主人公。雰囲気が違う。空気が違う。目前の化け物から薫る狂おしいまでの狂気に恐れ戦慄する主人公たちの前で

「だから、ダーリンご飯の時間だっちゃ」

『色気皆無やなー』

森全体がざわめく。四方から響いた男とも女ともつかない不思議な

声音に、きょろきょろと周りを見回す主人公たち。の、目の前で

「エイトたん三分クッキングー。ぱーぱらぱぱ、ぱーぱらぱぱ。略。本日の材料はにんげーん。にんげーん。にんげーん。にんげーん。股裂いて腕もいで動けなくして尻から触手突っ込んで口から出したらだーりんのお腹にどっかんどっかん叩き込む。おいちいよ」

『いやそれ料理ちゃうやん』

間の抜けた会話。けれど、そこに秘められた狂気と殺意は本物で

ラグナエイトに捕らわれていた主人公たちが、一斉に激痛に襲われた

ある者両足を触手に持たれ、宣言通りに股から首まで身体を裂かれ

ある者は両腕を文字通り胴体から引っこ抜かれ

ある者は語ることすらおぞましい狂体を晒しながら、

いつの間にか彼らを囲んでいた、黄色いスライムの津波に投げ込まれた

「勘違いしないように言っておくけどこれは触手系美少女なりの優しさなんだからね。生きたまま酸に落とされるとかそれなんて拷問。激痛でショック死の方が全然マシマシですよな。つんでれさーびすとは上手いこと言ったもんですよな」

『どこがツンデレやねんて。ほんまおまはんと話しとると疲れるわー。肩凝ってしゃあな…肩　が　な　い　！　？』

「うちのだーりんアホでサーセン」

酷く緊張感に欠けた会話が、苦痛に満ちた悲鳴と絶叫をＢＧＭに繰り広げられる。３ｍ近い高さがある巨大な黄色い酸の壁は、逃げ出しかけていた主人公たちを包囲して徐々にその内に飲み込んでいく

たった二体しかモンスターのいない、難易度ＳＳＳランクのダンジョン――『絶望の沼』

黒い木々は既に酸によって焼けただれた死んだ植物で。その広大な敷地の真ん中にある巨大な湖の全てを満たす強酸性の巨大スライム…ユージローが統べる、ファルガナ女王ですら放置せざるを得ないダンジョン

そこに、魔王は悠然と佇んでいた

１００人以上いた主人公たちがあっという間に駆逐されていく。全員にあまり本気を出すなとは伝えたが、これでは本気で戦わせてもこのモンスター二匹に対抗出来たかどうかは怪しいな、と魔王は予想外に使えなかった大半の主人公に落胆を隠せない

まぁ、所詮強大なチート能力を持ちながらも序盤で死んでしまったようなやつらばかりだ。戦力外でも仕方がない、と頭を振り、魔王は残り１０数人まで減った主人公どもを下がらせる

「ようやく出て来てくれたか、ユージロー・マノメ」

『…誰やおまはん。俺と初対面やよな？』

ぴたり、と徐々に包囲網を狭めていたユージローの動きが止まる。

ラグナエイトも主人公たちをなぶるのを止め、会話に参加するためか、性的な責めも止めた

「自己紹介が必要か？なら、改めて。俺は【魔王】だ。「人外転生成り上がり系主人公」ユージロー・マノメ。「人外転生チートインフレ淫獣系主人公」ラグナエイト。お前らを殺しに来た」

「新手のギャグですね分かります。今時そんなテンプレなセリフ吐く魔王がいるかと小一時間説教タイム。俺のラスボスがこんなにテンプレな訳がない。毎週木曜２５時３０分から」

『始まらへんて』

「緊張感ねぇなぁ…」

どこまでも会話の腰を折るラグナエイトに苦笑い。魔王はぽりぽりと頬を掻く

「とはいえ、もうわかってんだろ？俺がラスボスで、俺を殺せたらお前らの勝

ぐぢゅぶっ！！

ち…っていきなりだなオイ」

苦笑いする魔王。その身体をドーム状に覆うオレンジ色の障壁が、ディーと魔王の身体を降り注ぐ黄色い粘液の雨から守った

『よぉ分からんけどお前を倒さなあかんのはよぉ分かったわ。さーてどこまで耐えれるか楽しみやなぁ』

粘液…ユージローの強酸の身体が、完全に魔王の張った障壁を飲み込む。例えこの障壁を溶かせなくとも、障壁の中の空気が尽きれば魔王は酸欠で死ぬし、障壁を張る魔力が無くなればあっという間に骨まで溶かすユージローの身体が降り注ぐ。例え破られてもユージローの本体はこの場にはいない。何度だってやり直せる。内心でほくそ笑みながら、ユージロは卑怯で姑息に魔王に勝利するつもりだった

ユージロー・マノメの最大の誤算は――物語が既にそういう姑息な手段が通用する段階を過ぎてしまっていたことか

「――掌握完了。『モンスターマスター』→登録：デススライム」

ディーの手の中の神が綴った魔導書が輝いた、その瞬間

ユージロー・マノメの意識は、その本に乗っ取られた

殺してはいない。だからルールには問題ない。だが――ユージロー・マノメがこのレースで勝利することは、永遠になくなった

「…だーりん？」

背後の黄色い粘液から、人間味が薄れた。それを察したラグナエイトが、大きな単眼に困惑の色を乗せて問い、けれどただの操り人形と化したユージローは何も語らない

「ラグナエイト、逃げないのか？逃げないなら――」

ガジョン、と重い金属音。ラグナエイトが魔王とその隣に立つ獣人から目を離したのは一瞬。瞬く間程度の内に

凡そ素人が「ガトリング」と言われて真っ先に思い付く回転式キャノン砲――Ｍ６１　バルカンを、両手で構える魔王

「魔王になって何が一番楽しいかって聞かれたら――」

貫通力に優れた弾丸が、毎分６０００発も吐き出されるその巨大な鉄の塊に、ラグナエイトが内心で恐れを抱く。例え潰されても、切られても、そう簡単には自分は死なない。だが――身体の奥に巧妙に隠した弱点を「突」かれたら――

「こんなもんを片手でぶっ放せることだよな」

砲身が、爆音と銃声を絶叫した

「さぁて、準備はいいか？ディー」

「大丈夫でござるよ。それにしても、これはまたお約束でござるなぁ」

「当たり前だろ？さぁ、出来たぜ。後は生き残ってる主人公を招待してやらなきゃなぁ…

――――――『絶望の沼』に建てた、この『魔王城』に」

巨大な漆黒の城にて、魔王は待つ

物語の終わりを、今か今かと

閑話　魔王とモンスター（後書き）

…あ、れ？

最強無敵なラグナエイトさんが…？

いやでもエイトたんなら…っ！エイトたんなら…っ！

49、夜が開けて（前書き）

また虎とエルフな話に戻ります

みんなが大変なことになってるときに何をイチャイチャほのぼのしてんですかね、この2人は

49、夜が開けて

朝、目が覚めて

手を伸ばさなくても触れ合える位置に、ヒカルさんの顔があった

狭いテント暮らしの時から日常的に見ていたヒカルさんの寝顔が、肌を重ねた後だと少し違って見える

具体的に言うと、小憎たらしく見える

「…死ぬほど痛かったぞー」

エロゲの世界だからそういう仕様もエロゲ風味になってるのかと期待したのに、そんなことは全く無かった。むしろ超生々しかった。そして今もズキズキとお腹…っというより股関節が痛い。びっくりするくらい痛い。昨日は疲れ果て、半ば失神するように眠りに落ちたが、未だに中にモノが挟まっているような異物感が凄く気持ち悪い

八つ当たりにすやすやと眠るヒカルさんの頬肉を引っ張る。「んぐぁ…」と嫌そうに身を捩りながらもぞもぞと枕に顔を押し付けるヒカルさん。なんだこの可愛いおっさん

いつまでもこうしていても仕方がない。いがらっぽい喉を潤すために、そして汗やら色んな汁で汚れた身体を拭うために、ベッドから降りる。さすがに裸は恥ずかしいので、シーツを一枚だけ身体に巻きつけて

「っと…あたた…」

ズキズキと痛む股関節に顔をしかめながら、部屋の隅に置かれた水瓶から桶で水を掬い、備え付けの布を濡らして身体を拭――く？

「うぁ…」

…肌が白いから、赤い噛み跡が…キスマークが、目立つ。なんだか急に恥ずかしくなって、強く布で擦る。多分見えない位置にはもっとあるんだろうなぁ、と想像するだけで頬が燃えるように熱くなった

「…前半は、きもちよかった…かな…？」

意外と敏感というか、なんというか。っというかヒカルさんが敏感だった。少し舐めただけでびくんびくん反応してしまうのは、お互い様だった。うん、恥ずかしくない

「…んぁ？レティ…？」

「っ！？」

回想に耽っていた真っ最中だったので、私はとても驚きました

思わず独白すらおかしくなるような心持ちで恐る恐る振り返れば、きょとっ…とした目で周りを見渡すヒカルさん。…その目が、俺の姿を唱える

途端に、ヒカルさんが柔らかい微笑みを浮かべた

どくんっ！と急激に激しく脈打つ心臓。余りにも力が抜けた微笑み

に、そしてその視線に込められた想いに、背骨の奥がキューっと絞られるような――――

「おはよう、レティ」

な、

「名前で呼ぶなーっ！！」

水をたっぷりと吸った布が、ヒカルさんの顔面に直撃した

まだ日が昇って間もない時間。人目を避けるように宿屋を後にした俺達は、ファルガナ女王の城に戻る。「デートの続きはいいのか？」とヒカルさんは聞いてきたけど、よく考えたらこの世界の娯楽はかなり少ないのだ。お酒を飲むか女性を抱くか、あるいはお裁縫や料理、上流階級でもチェスに酷似したらボードゲーム。あとは各地の名産品チェックとか。よっぽどじゃないけど、のんびりだらだらするなら女王のお城の方がいい

っというわけで帰ってる途中な訳なんだけど…

「だからごめんってばー。照れちゃったんだよー。アレだよアレ、ツンデレ的な」

「ツンデレが何かは知らんが、別に怒っちゃいねーよ」

口をへの字にして明後日の方向を向くヒカルさん。どうやら朝の一件が相当トサカに来たっぽい。全く俺と目を合わせようとしない

「う、嘘だー。なんか難しい顔してるし。なんか眉間に皺寄ってるし…」

「地顔だ。放っておけ。それよか今日はどうすんだ?」

言われて、少し悩んでから応える

「切り札の準備…かな?」

「切り札?」

首を傾げるヒカルさんに軽く頷き、小さな小瓶に入れられた赤い液体を振ってみせる

「多分だけど、これがあれば作れると思うんだよね」

リーデスさんが買い取る的なことを言っていたけど、そのリーデスさんが逝ってしまった以上大した使い道が思い付かない。女王に頼めば売却ルートくらい教えてもらえるかもしれないけど、今はお金より戦力になるものの方がいいだろう

「へぇ…。なに作るんだ?」

「矢、かな。弓術ラストスキル…俺の必殺技には指定された矢が必要なんだ。でもそれが一度に一本しか持てなくて、使ったら街に買いに戻るか材料からその場で調合しないと使えないアイテムでさ。運悪く買い足し忘れた上に材料も無かったから、使えないなーって思ってたんだ」

でも、確かアレを作るのに必要なのはAランク以上の精霊石と、モンスター素材。モンスター素材は余ってるし、ただ持っているだけでもじんわりと魔力が溢れ出してくるコレなら代用出来る…はず？さすがに量を考えると一本くらいしか作れないだろうけど

「よくわかんネェが…。ともあれ、自分の血ぃ見てにやにやすんのはなんか恐いな。なんつーんだったか…あれ、メンヘラ？」

「ぅなぁっ！？ちげーしっ！にやにやなんかしてねぇし！」

腕を伸ばしてヒカルさんの頬を殴る。力がほとんどこもってない拳にヒカルさんはにやりと唇を釣り上げて笑う

「メンヘラのほうは否定しねぇのか？」

「…なんかヒカルさんめんどくせー。一回ヤッたからって調子のんなー。ヘタレのくせにー、据え膳食えなかったくせにー」

「うっせうっせ。ロリコンとか言われたくなかったんだよ」

ロリじゃねぇーしっ！十六歳設定だし！などとお互いに笑みを浮かべながらじゃれ合ってたら、いつの間にか城に着いていた。門番の人に2人で会釈すると、彼らは呆気に取られた顔をしながらもすぐ

に通してくれた。女王の命令で「主人公」はほぼ顔パスで出入り出来るのだ

「…っつうかさー、それはないだろー。ロリコン云々言うとかさー。今更それはないだろー。しかもばっちりぶち抜いてくれたくせにさー」

抗議するようにぐりぐりとヒカルさんの首もとに額を押し付ける。呆れを含んだ視線が頭に突き刺さるが、無視した

「人聞きの悪いことを…まぁ、失言だったな。わりぃ、レティ。機嫌直せ」

軽く笑いながらヒカルさんは――って、うん？

「…うっわ…朝からなんつーもん見せてくれるんですか…」

凄く「嫌なもん見たわー」と言わんばかりに表情を歪めたナルクトールと目があった

「あ、おはよう、ルク」

「おはようじゃねぇですよバカップル。朝からお姫様だっこってバカですか？若干羨ましいと思ってるルクちゃんはバカですよねー」

据わった目で睨みつけてくるナルクトールにちょっと気圧とされる。誤魔化すように「アハハ…」と笑いながら、話題を変える

「そ、それよりなんでこんな時間に？また徹夜したの？」

「いーえいえ。昨日は9時にベッドに入ってすっかり快眠ですよ。女王陛下が私を守ってくれると仰ってましたし、こうなりゃ腹くくって戦いに備えて体調整えますよ。逃げても死にますし」

へらっと自然な笑みを浮かべるナルクトール。「私この戦いが終わったら田舎に隠居するのですー。なので残ってる仕事は後任者にお任せです。引き継ぎだけはしますケド」っと軽いノリで応えるナルクトールが、少しだけ羨ましい

「戦いが終わったら、かぁ…。考えたこともなかったなぁ」

「おや、そうなのですか？出来るだけ考えておいたほうが良いですよ。多分ですが、【魔王】を倒したら主人公補正とか妙なラッキー展開とかなくなると思いますし。堅実な人生がお勧めです。城勤めとか」

「…補正が、なくなる？どういうことだ？」

ヒカルさんの問いに、ナルクトールはやれやれ、そんなことも知らなかったのか…と言わんばかりに肩をすくめ、少し楽しそうに話し始める

「この物語の正規エンディングは【魔王】を倒して「主人公」は幸せに暮らしました、のはずです。能力がなくなることはないでしょうが、物語が終わった以上「主人公」の出番はなくなります。主人公もくそもない状態で「主人公補正」なんてものがあるわけないでしょう？つまりはそういう事です」

得意気に語った後で、もっとも、これに気付いたのは私ではなく女王陛下なので間違ってても私に文句言わないでくださいね？と唇を

押さえるナルクトール

でも、そっか…。もうすぐ終わりなんだ

バッドエンドか正規エンドになるかは分からないけど、もうすぐ終わりなのかと考えると少し感慨深いものがある

「…ってか人と話してるときくらい姫だっこやめません？なんか私がいたたまれないです。なんか悔しくってハンカチきーっ！ってやっちゃいそうです。縦ロール的に！」

今にもハンカチを噛みそうな様子のナルクトールに苦笑い。「私なんて男の子方にそんなことされたことないのにぃ…っ！！」と嫉妬の視線を向けてくる…が、ええっと…

「えっと…どうしても降りなきゃだめ？」

「…いえまぁ、イチャイチャしたい気分は分かりますが、騎士団の男性は男所帯ですし、あんまり城内の風紀…というか規律を乱されると困ります。女王陛下もカップル嫌いですし」

…あー、そっか。そういうのもあるのかぁ…

「それなら仕方ないな、下ろすぞ」

「うん…」

名残惜しいけど、ゆっくりとふかふかした絨毯に下ろされる。ズキズキ痛む股関節が痛くて歩きづらい。だからわざわざ抱っこしてもらってたわけだし。回復魔法使ったら膜まで再生しちゃうかもだし

…耐えるしかないよなぁ…

ひょこひょことペンギンみたいにぎこちなく歩こうとする俺にナルクトールが怪訝そうに首を傾げる

「どうかしたんですか？なにか怪我でも？」

「あー、えっと、その、怪我っていうか…まぁ、気にしないで。多分二日三日で治るから」

「回復魔法使わないのですか？いつ魔王の居場所が判明するか分かりませんし、猶予はもう二週間です。出来るだけいつでも戦えるようにしていてもらわないと…」

「あ、うん…ごめん。でもそのぉ…出来ればつっこまないでください。お願いだから…」

不思議そうな顔をするナルクトールに苦笑する。…分からないんだ…。確かこの世界だと１５歳くらいで結婚するのが普通で、ナルクトールは１７かそこらだったはずなんだけど…そっか、分からないのか…。まぁ、あの女王さまと一緒にいたんだから、そういう機会がなくても仕方がないのかな？

「構いませんけど、大路さんは確かもうすぐ発情期でしたよね？抑制薬か女性の方、良ければこちらで手配しておくですよ？一発ヤれば収まると聞いてますし」

「…女の子がんなこと気にすんな。こっちでどうにかすっから放っておいてくれ…」

顔を抑えて恥ずかしそうに言うヒカルさんに、「そちらでどうにかしてくれるならこっちも楽でいいんですが…」と納得いっていない顔ながらも頷くナルクトール

「ああそうそう、ショーゼンさんとケイニーさまが少々出掛けてます。もし彼に武器や防具の制作をしていただきたい場合は、予約伝票のほうを作っておいたのでそれにサイズや種類等明記して提出してください。私でもショーゼンさんが帰ってから直接渡しても構いませんので」

それじゃあ私お風呂行ってきますー。と手を振りながら去っていくナルクトールの背中を見送り、ぽつりと呟く

「…ルクって、もしかして友達もあんまりいない…？」

「言ってやるな」

こつん、と頭を叩かれた

４９、夜が開けて（後書き）

テンプレ朝ちゅんからのイチャイチャ

はいはい虎エルフ虎エルフ

閑話　魔王と彼と（前書き）

前話の数日後です

隕石襲来より１０日前

閑話　魔王と彼と

ホシ・シンイチは別に、自分のことを悲劇の主人公だとか恋人に先立たれた悲劇のヒロインだなんて思ってはいない

アベ・コウジが死んだのは彼を止められなかった自分のせいだし、それがきっかけで自分は彼の復讐を誓ったが、そんなのはこの世界では良くあることだ

この世界の命の価値は笑いが出てきそうな程に軽い。モンスターに、隣人に、通り魔に、いつ殺されてもおかしくない。そして復讐を誓う者など珍しくもない

だから彼は、己のことを特別だと思ったことはない

だが、今このときばかりは…自分が『特別』であることに期待していた

果たして、彼は特別だった

王都を抜け、近くの村へ。そこに二、三日滞在してから、他の村へそんな生活を二週間以上続けた頃、彼は現れた

「おっす。久しぶりだな」

まるでしばらく出会っていなかった友人と、街中で偶然再会したかのような気安さで、唐突に彼はシンイチの前に現れた

シンイチはクスッと小さく笑うと、伸びたヒゲをぼりぼりと撫でる

「やだわコウジくん、乙女のシークレットゾーンを覗かないでちょうだいよ」

「誰が乙女か」

憮然とした顔で突っ込みを入れるアベの様子に、涙が出そうになるのを堪えるシンイチ

「信じてたわ。あたしが1人になったら、必ず接触してくるって」

そのためだけに、何も言わずに城を出た。自分の知っているアベ・コウジという人間ならば、必ず自分に接触してくると信じて。まるで引き裂かれた恋人達が、必ず再会出きると信じている幼子のように、儚い望みに賭けた

「自惚れんじゃねーよアホオカマ。たまたまだたまたま」

嫌そうにおぇーっと喉を押さえて舌を出すアベ。だが、彼がどんなに否定しようとも再び彼らが再会できた、という事実は変わらない。だから、シンイチは久方ぶりに笑った。嬉しそうに、華やかな笑みを浮かべた

そんなシンイチに「ったく調子狂うぜ…」と呟き、アベはがりがりと頭皮を削る。内心でやはりこいつは早めに始末しておくべきだった、と後悔しながら

「たまたま、お前を殺しに来ただけだ」

銃口をシンイチの額に向け――同時に額に押し付けられた、グロック１９に目を見開いた

「抜き打ちはあたしの方が早いみたいね」

パァンッ！と強化プラスチック製の銃身が軽い音と共に鉛玉を吐き出す。それを間一髪上体を倒して避けるアベ

「くっ…！？」

後ろに倒れ込みながら手の中に生んだショットガンの引き金を引く。吐き出された無数の小さな鉛の散弾は、けれどシンイチの身体を捕らえない。銃口から弾が発射されるより早く、左の拳打が長い銃身を捕らえ、明後日の方向に弾き飛ばす

「――ッフ」

小さな息を吐く音。一息で今まさに倒れ込まんとするアベに接近、その身体を押し倒すように、内股に足を突っ込みながら肘で顎を捉えて地面に倒れ込む。「ぐっふっ…っ！？」喉に突き刺さる１００ｋｇ近いシンイチのエルボードロップに、一時的な酸欠症状を起こすアベ

「終わりよ」

そのこめかみに押し付けられたグロック１９から、鉛玉が吐き出されぼふんっ！と気の抜ける音と共に、アベの身体が煙となって弾けた

ごりり、と身を起こしかけたシンイチの頭に押し付けられる硬い感触。香る硝煙の香りに、そして視界に僅かに移るブーツを吐いた華奢な足に顔をしかめた

「影分身だ」

「そんな気がしてたわ」

ぱぱぁん！！と重なった銃声。再びぼふんっ！と煙となって消えるアベと、肩口の風穴から血を流すシンイチ。頭上に銃口を押し付けられた状態からそれだけで済んだのなら御の字だろう

だが…

「あら、やだ…これって逆ハーレム…？」

つーっ、と冷たい汗がシンイチの背を下りる

自分に向けられた銃口の数…およそ１００。奇しくもそれはつい先日、魔王がラグナエイトに対して行った戦術ともいえない戦法…。物量作戦の改良案だった。大半の「主人公」が役に立たないと知った魔王が行ったのは、全員【魔王】の軍団。勿論影分身によって作られたそれは、オリジナルより戦闘力が低い…というより、オリジナルのように他の主人公の能力をとっかえひっかえ使うことは出来ない。だからこそ障壁を張ったり他の主人公を使ったりといった戦術は使えない。だが、それは『銃』という誰でも使える殺傷力の高い兵器を同時に使うことでカバー出来る

無数の銃口を向けられ、ハンドガンを捨て「さぁ、どうするか…」と乾いた唇を舐めながら打開策を頭の中で組み立てる…が、さすが

にシンイチにはこの絶望的な状況を打破できるような実力はない

だが、そんなことは理由にならない

自分が倒さなければならないのだ

自分が彼を止められなかったせいで彼は死に、たまたま自分があの時主人公補正を持っていたから彼は【魔王】に選ばれた

ならば、自分は命を賭してでもその責任を果たさなければならない

【魔王】としてではなく、人として彼に死を運ぶ。それが、今の自分の役目だった

だから、こんなところで負けるわけにはいかない。幸いにして自分が着ているのはショーゼン謹製の防刃防弾コート。頭さえ守れば致命傷にはならない…はず。ならばこの場にいるのかどうかも分からない本体をどうにかして見つけ、その頭に鉛玉をぶち込めば…勝機はある。雀の涙ほどの、僅かな勝機だが

ぺろりと火薬の味のする唇を舐め、裏地に大量に縫い付けた重火器を手にする。大量の手榴弾にライフル、ショットガン。彼が死ぬ直前で、たまたま作っていた彼の遺品。残りの弾丸数は心許ないが、人間を殺すには一発あればいい。ならば、全て使い切ってでも刺し違える

消えた彼の影分身が残したショットガンを拾い上げ、シンイチはにやりと男くさい笑みを浮かべた

「さぁて、ピロートークはここまでにして、最期まであたしと楽し

んでちょうだい！！」

「「「「やなこった！！」」」」

シンイチの声に重なって応えるアベの返答。同時に銃声が――響かなかった

ドンッ！！っと空気を突き破るような凄まじい衝撃と轟音。音に、衝撃に全員が動きを止め、大量にいたアベの数人が殴り飛ばされ、煙となって消えた「後」の光景を目にする

「…だぁから耳塞いどけって言ったべぇ。オラァ悪くねぇど」

「～～っ！っ！バカバカバカバカバカバカ馬鹿じゃないの！？バカバカ化け物バカバカバカバカバーカッ！！」

そんな気の抜けるやりとりに、アベの表情が曇る。シンイチもまた、驚きに目を見開いた

「ショーゼン！？」

「おぅ、オラだぁ。多勢に無勢だべぇ力貸すべ」

腰を落として右腕を前に突き出した体勢のショーゼンが、にかっと男臭い笑みを浮かべる。それに彼の隣で顔を青くするケイニー

「は、はぁっ？！またアレやるの！？馬鹿じゃないのアンタ！ちょっと待ってよ離れ…離れたら撃たれちゃうかもしれないじゃないバカ！ちゃんと盾になりなさいよヒゲ！ヒゲチビ！」

「ドワーフだからしゃあねんんですだべよ…。だめだぁやっぱオラァ敬語使えねぇ」

弱ったように眉根を寄せるショーゼン。思わぬ援軍に窮地を救われたことに、そして1対1でアベと決着を付ける、という目論見が崩れたことに複雑そうな顔をするシンイチと、つまらなそうに肩を竦めるアベたち

「不粋だな、ショーゼン。主人公の晴れ舞台だぜ？例え死に戦でも黙って見守るのが脇役の勤めじゃねーの？」

「生憎だけんども、オラァ頭わりぃからよ、主人公とか脇役とか言われてもピンと来ねんだわ。だけんども、同じ釜のメシぃ食ったホシが死ぬとこは見たくねぇだ」

ケイニーを背中に隠すと、しっかりと腰を落として右腕を折り畳む。彼の最大の武器は『拳』。彼の能力は『あらゆる武器を作れる』ということ。だからこそ己の四肢を武器として鍛え上げた彼の拳は音よりも早く、空気を引き裂いて衝撃波を放つ。普通に放てば腕の肉が弾け飛ぶだろうその技は、神の与えた能力によって道理を踏み潰す

「チッ…」

アベは口の中で小さく舌打ちする

オリジナルはこの場にはいない。だが、影分身たる彼の思考はオリジナルのものと変わらない。だからこそ自分はこの場にいるのだ

ホシ・シンイチはアベ・コウジにとって特別な存在だ。恋人、なんてものじゃない。断じて違うと彼は否定する。だが、ホシ・シンイ

チという男は、『相棒』なのだ

共に戦場を駆け、共に笑いあい、共に杯を交わした。親や兄弟よりもずっと身近で、この世界でホシ以外に大切な人物、という存在はアベ・コウジにはいない

だからこそ、殺す。ホシ・シンイチの存在は【魔王】にとって弱点以外の何者でもない。幸いにしてホシ・シンイチは楽に殺せる程度の実力しかない。ならば早期に殺して、一刻も早く弱点を消すべき…だった

しかし、殺せない

【魔王】になった時点でホシ・シンイチを殺すことに躊躇いはない。しかし殺せない。運が、僅かに影響するアベのメンタルが、そして何より主人公補正が、ホシへの死の運命を覆す

やはり、主人公を殺せるのはクライマックスだけか…と冷静に判断したアベは、銃口をショーゼン…ではなく、その後ろのケイニーに向けた

「ひっ!?」

びくっ!と大袈裟に身体を跳ねさせるケイニーと、その盾になるように間に入るショーゼン。ショーゼンの音速拳は動きながらは使えない。しっかりと腰を落として溜めを作らなければ放てない技に、警戒なぞいらない

しかし――この場で、銃火器のみを用いてショーゼンを、そして予想よりも遥かに強かったシンイチを倒すのは難しいだろう。無理で

はないが、
ならば――
数十人の分身たちが、一斉に銃口を自分のこめかみに突きつける。
自分の行動の意味が分からないのか、僅かに目を泳がせる主人公たち
――その心にダメージを与える。特に、ホシ・シンイチの心に
「ファルガナに、そして生き残ってる主人公たちに伝えな。こちらの準備は整った。『絶望の沼』に来い。この魔王が全身全霊を持って歓迎する」
「絶望の…沼…？」
冒険者の中では絶対に足を踏み入れてはいけない場所と有名なダンジョンでも、公爵令嬢として悠々自適な生活をしていたケイニーにはピンと来ないのだろう。首を傾げるケイニー
反対に、戦闘を生業にしている2人の表情が固まった。あのデス・スライムが住む難易度ＳＳＳ級ダンジョンに…わざわざ【魔王】が主人公を招く。その意味が分からないほど愚かではない
「さぁ、ラスボス用のダンジョンに来い。嬉しいことに人生にゃセーブ機能もコンテニューもねぇ、精一杯楽しもうぜ」
にやりと笑いながら――脳髄をぶちまける魔王たち。本来影分身たる彼等は頭を吹き飛ばした瞬間煙となって消えるはずなのに、その血肉は生々しく、すぐ側に立っていたシンイチの身体に降り注ぐ

「――――っ…」

表情を歪めるシンイチと、その体にこびり付く血肉。それが煙のように消えていく光景が、まるで悪夢か趣味の悪いゲームのようだ。とケイニーは思った

シンイチは酷く顔色の悪い、表情が欠落した無表情でショーゼンを見やる

「ショーゼン、アナタは今の情報を女王に伝えて頂戴」

「…シンイチはどうするだ？」

静かな問いかけに、シンイチは笑った

「あたしは、先に行くわ」

酷く悲しい笑み。死を覚悟し、諦めを滲ませたその笑顔に――ケイニーは耐えられなかった

「ま、待ちなさいよ！」

ケイニーの大声に、視線が集中する。半分男性不信…というより人間不信になりかけているケイニーは、がくがくと笑う膝を必死で取り繕いながら、涙目でシンイチを指差す

「あ、あああああんたはっ！！あたしのこと守るって言ったでしょ！だ、だめなんだから！一度言ったら、約束守んなきゃだめなんだから！」

幼子のワガママと変わらないその叫びに、シンイチは呆気に取られ…そして、小さく笑った

「…生きて帰れたら、ね」

にべもない言葉に、ケイニーの両目から涙が零れる。それを隠すように背中を向けて走り出すケイニーと、その背を見送る2人

「じゃあね、ショーゼン。後は任せるわ。ケイニーのこともよろしくね」

「ひでぇ男だべ」

憮然としてシンイチを睨むショーゼンに、シンイチは軽く笑った

閑話　魔王と彼と（後書き）

ケイニーの初恋が実らないのもテンプレート。可哀想だけど星ちゃんオカマなのよね

ショーゼンが優しくしたらたぶんころっと行きます、ケイニー。ショーゼンぶきっちょさんだからまず無いですが

ってか平凡な容姿の女の子が男三人に囲まれるのもテンプレのはずなのになぁ…なんで人春が書くとオカマとラスボスと他に好きな人がいる男で逆ハーレムになるのん？

50、進撃（前書き）

【ヒーロおおおおおお！】ヒーロー魔改造計画ラボ　死　【全俺が号泣】

1：GODサイエンティスト：xxxxxx／xxxx／xx　（水）13：41　ID：ten107Xfc

■現在開催中の主人公レースについて語るスレから派生した、ヒーローについて語るスレだお☆

■本スレ

【魔王誕生！】主人公レースについて語るスレ　7【運営詐欺】

■次スレは＜980がお願いします

■関連スレ

【あの可愛い娘は】男の娘たんを愛でるスレ　弐【わしが育てた】

【ゼウス様が】ゼウス→魔女さまの交換ってどうよ？17【アレクるってらっしゃる】

【不器用過ぎて】ツンデレ女王【生きるのが辛い】

【中には誰も】このスレはぼっちさまに監視されています？【いませんしおすし】

【全俺が】恋人たちを生暖かく見守るスレ３【糖尿病】

【やったねロリータ！】ちびっこを愛でるスレ　５【おさわり禁止！】

【マッスルスラッシャー！】筋肉サイコー！３【マッスル死者蘇生！】

【備考】
・名前出しは厳禁
・特定の神様をディスるの禁止
・運営と混沌に手出し禁止

規約とネチケットをしっかり守って書き込みしないと魔改造しちゃうんだからね☆

２：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４２　ＩＤ：ｈｂ１０８ｑＲｓ

＜＜１乙
一気に１０００まで行ったなぁ…
確かにヒーローの死に様は見事だったが

３：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）

13：42　ID：uek2hoq0

＜＜1乙
てっきり拳王みたいに立ち往生するかと思ってたヨ

4：GODサイエンティスト：xxxxx／xxx　（水）
13：42　ID：ten107Xfc

＜＜3
様を付けろ

5：GODサイエンティスト：xxxxx／xxx　（水）
13：43　ID：uek2hoq0

＜＜4
（。Д。）
…儂、神様…

6：GODサイエンティスト：xxxxx／xxx　（水）
13：43　ID：ue4LOr36

＜＜5
神でも付けるべき。最近の神はゆとりばっかだしな。彼のような男気を取り戻せ

それはともかくヒーローさんだよ。死んじゃったよ。あとスレタイがまんま過ぎてちょっとワロタｗｗｗタイムリーｗｗｗ

7：GODサイエンティスト：xxxxx／xxx／xx　（水）

１３：４４　ＩＤ：俺だよ俺

お前らこんなとこにいる場合か

本スレに来い：祭りだ！ついに来たぜ最終章！

８：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ　（水）
１３：４５　ＩＤ：ｕｅｋ２ｈｏｑ０

＜＜８
ＩＤｗｗｗ誰だお前ｗｗｗとりあえず雷神だろｗｗｗ

９：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４５　ＩＤ：俺だよ俺

メギンギョルドな人です
いかなくていいの？皆行ったぞ

１０：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４５　ＩＤ：ｕｅｋ２ｈｏｑ０

え？マジで？

１１：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４６　ＩＤ：ｕｅｋ２ｈｏｑ０

マジで誰もいないん？

１２：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４６　ＩＤ：ｕｅｋ２ｈｏｑ０

えー、さるさん恐いわぁ…
でもいいや。ヒーロリさんの魔改造やっちゃうよ。勝手に。俺色に染めるぜ

１３：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４７　ＩＤ：Ｂ５ｇｐｆｋ８１

ヒーロリさんの魔改造と聞いて

１４：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４７　ＩＤ：ｑｅｂ４５Ｕｑｆ

ヒーロリさんの魔改造と聞いて

１５：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４７　ＩＤ：ｈｅＮ６ｖｉｌ

ヒーロリさんの魔改造と聞いて

１６：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４８　ＩＤ：ｋ２ｈａ１２０ｙｏ

俺のヒーローの娘の話だと聞いて

１７：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘｘｘ／ｘｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４８　ＩＤ：

＜？＞―＜？＞
△

■■■

１８：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘｘ／ｘｘ　（水）
１３：４９　ＩＤ：ｕｅｋ２ｈｏｑ０

お前ら大好きだ！

でも＜＜１７にぼっち様が降臨したから散れ！逃げるぞ！

50、進撃

ショーゼンが帰還し、女王に入手した情報を伝えた

【魔王】は『絶望の沼』で「主人公」を待っている

そこからの行動は余りにも早かった

女王は出来る限りの物資を集め、生き残った「主人公」全員と共に馬車で絶望の沼を目指す

「…あんの馬鹿オカマ…っ！！」

ファルガナは、表情を怒りに染めながら、先走ったホシへの感情を無理やり抑え込む

貴重な戦力…いや、貴重な「主人公補正」の持ち主が捨て札になってしまうかもしれない…いや、すでになっているかもしれないと考えると、余りにも痛い。もしホシが死んでしまえば、残る「主人公補正」持ちの主人公は自分とチーレム慢心主人公のユートだけ。いくら他の主人公の援護があるとはいえ、状況的には楽観視出来ない

「早まんじゃないわよ、あのバカ…」

漏れ出る殺気が馬車を引く馬を怯えさせ、馬は自分で引く馬車から逃げるように、限界以上の速度で走る

「主人公共、よく聞きなさい。ついにこのファンタジーな悪夢も最終章よ」

馬車に揺られながら、広間に集めた主人公たちに呼びかけるファルガナ女王の姿を思い出す

「ショーゼンが持ち帰った情報によると、ここ、わかる？絶望の沼ってとこに魔王がいます。倒しに行きます。おやつは３００ゲイル以内。武器防具持参。死亡フラグは折ったかしら？くそったれな神様にお祈りは？死んでも大丈夫なように仕事の引き継ぎはおーけー？」

余りに適当なファルガナ女王の口調に苦笑いし、ちらりと周りを見渡した

なんだかやたら空気が重い魔族のレームシルクとガナルさん。リトマスさんは変わらず口元だけでニコニコと笑い、その手で抱えられたバスケットボールサイズの肉の塊…リオナアハトさんは「なにこ

の空気恐いです。なんかピリピリしてんだけども。スゴいラブ臭と殺気が渦巻いてるのよぅ…」と三つの口で落ち着きなくしゃべり続けていた

次、ファルガナ女王…は、露骨に俺たちを見ながら、あるいは何事か考えながら舌打ちしていた。廊下ですれ違った時に「ロリコンは死ね」とかヒカルさんに言ってたから、もしかしたらその辺が気に入らなかったのかもしれない。あのヒカルさんが凄く落ち込んでるのには、思わず苦笑いだった。慰めんの大変だった

その次は、ショーゼンさんとナルクトール、そしてケイニー…は、あんまり変わりない。ナルクトールはのほほんと「後ろで隠れてますからショーゼンさん守ってくださいねー」と笑い、ショーゼンさんは「おぉ！任せるべぇ！後ろに別嬪さん2人も抱えちゃあ頑張らんわけにいかんべな！」と笑顔で応え、ケイニーが「なに安請け合いしてんのよバーカッ！雑魚のくせにヒゲのくせにチビのくせに！調子のんなバーカッ！」とショーゼンさんを罵倒していた

…で、多分ファルガナ女王の投げやりな態度の原因その2

クロイワだけど…女の子に囲まれていた。彼自身は困った顔しているけど、満更でもなさそうな顔。騎士で金髪美人なシャルロッテさんに、光の巫女でおっとり美人なティエリアさん、ティエリアさんの護衛で武道家のカミナさんに、クロイワの杖の精霊のユルエルさん。彼女たちがクロイワを支えるように立ち、クロイワは「俺はもう迷わないぜ！」と言わんばかりのキリリとした表情だったくらいだなんでも引きこもってうじうじしていたクロイワに業を煮やした彼に想いを寄せる女の子たちが、彼を無理やり部屋から引っ張り出して説得したらしい。どんな説得をしたらあんなに落ち込んでいたク

ロイワがあそこまで復活出来たのか分からないけれど…正直あんまり聞きたくない

何でだろう?なんかよくわかんないけど、女の子に囲まれているクロイワを見るとムカムカしたのだ。嫉妬とかそういうんじゃなく、なんていうか…「この女の敵め…」っていうベクトルの怒りで。なんでもクロイワはあの娘たちの誰かと特定の交際をしているわけじゃないらしく、無意味に女の子を侍らせてる男を見ると「死ね」って思ったし、そんな男について行く女の子を見ると「うっわ救えねぇ…」と思ってしまうのだ

まぁ、それはともかく。クロイワが戦力になるかどうかは別として、女の子たちは置いていかないと危険だ。「主人公」でない者が【魔王】と戦えるわけがない。仮に戦えてもどんなことがおこるか分からないのだから

だから「勝ってこい、馬鹿弟子」「ユート様に王神の祝福を…」「帰ってこなかったら絶対に許さないんだからね!」『安心しや、朕が旦那様を守りんす』とか言われてるクロイワを見ると頭痛がしてきた。というかこの【魔王】対策会議に「主人公」以外を連れてくんなよって注意したいくらいだった。まぁ、無理矢理女の子が付いて来たみたいだったし、クロイワの意志じゃなかったのかもしれないけど

イマイチ緊張感が足りないと思ったんだろう。こほんっ、と女王の咳払い。どこか緩みかけて…緩みまくっていた空気を引き締めるように、殺意すら滲ませて女王は俺たちを睥睨する

自然引き締まる空気と緊張する体。大丈夫。やれるだけのことはやったし、やるべきことは理解している。なら、いまさら恐がる事は

ない。そう思っていた

「平穏な日常はもう終わりよ。…【魔王】を討つわ」

回想は終わり。ぼんやりと見つめていた外の景色が、だんだんと色を取り戻す

女王の計らいでヒカルさんと2人だけ…御者すらいない馬車の中で、どうにか作り上げた黄金色に輝く、赤い結晶体の鏃を持つ「矢」を手の中で弄ぶ。結局一本しか作れなかったけれど、これは絶対に役に立つ

じっと手にとって矢を見つめていたら、ぽふっと頭に軽い感触。くしゃくしゃと髪をかき混ぜられる感触に顔を上げれば、心配そうに俺を見下ろすヒカルさん

「…大丈夫か？」

「うん、もちろん」

頭に置かれた手を両手で掴み、頬にずらす。少し冷たい手の感触を頬に感じながら、俺はすりすりとその手に頬摺りした

「ヒカルさんがいるんだ。大丈夫に決まってる」

「無駄に可愛いこと言うんじゃねーよ」

頬を赤くしながら軽く俺の頬を抓るヒカルさん。「あたた…」と声を漏らしながらも、俺たちの頬には笑顔が浮かぶ

「生きて帰るぞ。絶対に」

真剣な表情で決意するヒカルさんに、頬が熱を持つ。…そういう台詞は死亡フラグだっていうのに。ほんと仕方ない人だなぁ

俺がちゃーんとフォローしてあげなきゃ、どうなるか分かったもんじゃないよ

「もっちろん。で、幸せな家庭でも築こうか？」

からかい混じりに微笑んだら、ヒカルさんは顔を真っ赤にして、そっぽを向いてしまったけど

小さく、けれど確かにヒカルさんは「…そうだな」と頷いた

ぴりっ、と首筋に電気が走る

「あおいの、どしたー？」

今の感覚は、知っている。近い。大まかな方向しか分からないが、それでも「彼」が残したヒーローセンスは適当に走るだけで自分を

現場に運んでくれる

「…呼んでる」

ずるっ…と斧を肉の塊になったモンスターや再生された「主人公」から引き抜く。彼等は【魔王】が無作為に呼び出した適当な主人公たち。尋問した話によれば、【魔王城】の中に配置するモンスターを捕獲するための存在らしい

つくづく魔王は自分たちを馬鹿にしている。それでは噂に聞いたＲＰＧのダンジョンのようではないか

だからこそヒーローセンスに命じられるままに再生された「主人公」を狩ってきた。「主人公」が狙うモンスターも狩ってきた

そしたら…よく、こんな目をされるようになった

「たすけて…くれた、の？」

まだ子供――といっても今の自分と比べれば一つ二つ年上だが――の男の子。たまたま主人公に発見されたから、捕獲したモンスターの餌にされるところだった少年

そんな少年が、キラキラした瞳で自分を見つめていた

なんだかむず痒くて、でも嫌じゃなくて、恥ずかしいのにどこか高揚感があって

だから私は叫ぶ。「彼」のように

「説明しよう！わたちは――」

まだ、たまに噛むけれど

「あーもぉー…どないしたらええねん…」

『呼ばれてる』のは分かる。けど、『呼ばれてる』からって自分なんかが行ってどうなると言うのか

「無理無理無理。ウチにはお金しかありませーんよって…あーでも行かなかったらなんかあるんかなぁ？」

でもでもエロイカの生き残りをどうするかも考えなあかんし、魔王なんかと戦お思ても何の役にも立てへんのは分かってる

せやったら大人しゅう邪魔にならんとこで丸まってんのがええ大人の仕事のはずやんなぁ？

「…まぁどうしてもっちゅー収集かかったら、っちゅうことで」

『大人』は問題の先送りが得意やねんて

「　　、

　　が

　った。だ

から。

「　　　　　　？」

「　　…　　　　ったのは

　　は、　　　　だ

「　　　　。　　、

」　　　　！　　！」

　　った

50、進撃（後書き）

お久しぶりです

クライマックスに向けて走り出すんじゃ

51、合流（前書き）

「おぉ、待っておったぞオカマックス。来るのが遅すぎて我輩のハートが寂しんボーイ・ミーツ・セガールであーる。っつうかちょっと我輩の上に乗ってるこれを持ち上げたりしてみんかね力試しとかそんな感じで」

――他の主人公より一足早く【魔王城】が居を構える『絶望の沼』に訪れた伸一が見つけたのは、白い大きな肉の塊に潰されてじたばたと暴れるミリルゥトゥだった

「なにやってんのよもう…」

流石に放置する訳にもいかず、肉塊をどける伸一。不思議と穴だらけになった肉体はボロボロと崩れ、あっさりとミリルゥトゥを解放した

「うーむ、死体になっても魔法無効化は健在であるか…。本体部分は損傷が激しいからともかく、触手もとい触腕ならば再利用出来そうであるな。オカマックス、集めろ。我輩の身体はもはや限界である。見よ！この生まれたての小鹿の如くか細く震える内股を！」

立とうとして顔を真っ赤にしてふんばりつつもぷるぷる震えるだけで一向に立つ気配のないミリルゥトゥに辟易しながら、「生憎と、遊んでる暇はないのよ」と切り捨てる

ミリルゥトゥは「我輩の上目遣いではやはーり主人公は落とせぬのであーるな。まぁ攻略キャラじゃないと確認できて嬉しくもあるの

であるが。ともあれ」とぶつぶつ呟きながら、白衣の中から取り出した黒い球体を投げつける

それを受け取り、ソフトボール大のつるつるした金属製のソレに首を傾げる伸一

「これは？」

「科学者のロマン！自爆用ボムであーる！！」

「てい」

「うぼぁ」

軽く投げ返せば綺麗に鳩尾に吸い込まれる自爆用ボム。悶絶しながら胃液を吐きながら涙を流しながらあうあうと言葉にならない声で抗議するミリルゥトゥに軽く謝りつつ、伸一はじとっとした視線を向ける

「一体何のつもりよ。これから乙女の最終決戦に向かうお友達に渡す餞別じゃないわよ、これ」

「…野太い声で気持ち悪いセリフを吐くなでおぼろろろ…」

「あんたが吐くな」

自分でやっといてなんだが、背中をすりすりと撫でる。しばらく血の混じった胃液を口から垂らしてから、けほっ、けほっ、と妙に可愛い咳を吐きつつ伸一を睨むミリルゥトゥ

「こう言っては何だが、お前1人で【魔王】に勝てるはずがないのであーる。だから死を覚悟したときになんかこう…奥の手的な？半径５Ｋｍが焦土になる感じの自爆特攻は浪漫だろう。クヒヒャ」

久々に狂ったような笑い浮かべるミリルゥトゥ。最近彼女的に燃える展開が無かっただけに、命を賭して自爆特攻なんていう王道展開にわくわくとその平たい胸を踊らせる。対して伸一はつまらなそうな顔

「自爆…ねぇ…」

コリコリと堅い感触を返す爆弾を手の中で弄びつつ、溜め息と共にポケットにねじ込む。「使い方は簡単。それ持った人間が死ねば大爆発であーる」とニコニコと趣味の悪い事を言うミリルゥトゥを少し睨む

「まぁ、いいわ。精々あたしを捨て駒に戦力分析でも何でもするといいわ」

「勿論そのつもりであーる」

ある意味信頼出来るミリルゥトゥの言葉に笑う。確かに自分だけじゃ魔王は倒せないかもしれない。だが、自分が斥候役になれば、少しでも次に来てくれるだろうファルガナ達の役に立つ

「じゃあ、行くわ」

「うむ。魔王城は道なりに進むといいのである。道中は魔物はいないはずだが、十分に警戒することを推奨しよう」

何気に親切なミリルゥトゥに苦笑いしながら、伸一は右手にマシンガンを、左手にハチェットを構えて歩き出した

51、合流

「ここが…絶望の沼…」

誰ともなく発した言葉が、生ぬるい風に呑まれて消える

黒く、焼け焦げたような外皮を持つ妙な細い木々ばかりが並ぶ、なんとも不気味な謎の森にしか見えない。だというのにぽっかりと開いた道が、まるでここに入ろうとする者を呑み込まんとする魔物の誘惑のようにも見える

「しばらく見ない内に随分不気味な雰囲気になったわね。…で？いつまで隠れてるつもりかしら？」

じろり、と女王が細い木を睨みつける。おおよそ人が隠れられほどの幅もない木を睨む女王に皆が首を傾げる中、ふわり、と、その木の上空から降りてくる影

呆気に取られる俺達に構わず、見慣れないピンク色の白衣の、ピンク髪の美女は全身に白いタコのような触腕を巻き付けながら、奇妙な白くて大きい十字架に乗った彼女は狂ったように笑う

「クヒヒャハハハ、さすがであーるなファルガナァ…。我が輩の『

完全迷彩』と書いてパーフェクトマタニティと読んじゃったりする珠玉の中二発明品と改良に改良を重ね単独飛行能力を得た『入るんですよクロスくん１８轟スーパー』の合わせ技すら貴様の直感の前には無力と見たァ…。キヒヒャハハハ！魔王はともかくディイイイイイは気付かなかったのになぁあああああっ！！流石の主人公ってことかぁあ！？羨ましいぞ解剖させろぉ！！」

「っるさいわね相変わらず…。黙らないとデコピンするわよ」

「……まぁ貴様がお願いですから口を閉じてくださいと失禁しながら懇願するなら閉じない訳でもないがなぁ…。なんだファルガナぁ…。寄るな、触るな、近寄るなァ…」

じりじり距離を詰める女王と、後ずさりしようとして身体に巻き付いてる触手を踏んで転ぶ…確か、ミリルゥトゥ

それをため息を吐きながら見下ろし、女王は端的に問う

「なんのためにどこで何やってたの」

疑問符すら付けない確認のための言葉に、ミリルゥトゥは拗ねたように唇を尖らせながら答える

「…我輩とてディーのことが気になったのだ。我輩なりにこのピュアかつプリティな恋心は正真正銘本物だとアッピィルしてきたつもりだったのであるがなぁ…、やはり凡俗には我輩のスペリオルな思考回路は理解出来ないと見える。我輩かなぴーっ！というわけで我輩ってばピュアかつイノセントな恋心のために、魔王は別にどうでもいいので放置しつつディーをストーキングしていたりしましたァ！そしたら色々分かったし主人公の死体がそこそこ手に入ったから

色々作っておったのだ。契約違反はしておらんぞ。我輩が作りたいときに作りたいモノを作る代わりに貴様等の要求通りのモノを作るという契約で」

「はいはいわかったわかった。理屈はいいから「何が」分かったのか話しなさい」

放っておいたら永遠にしゃべり続けそうだったミリルゥトゥだったが、女王にたしなめられるとプクーッと頬を膨らませる

「こぉれだから脳筋は嫌いであーるっ！科学者の本文とは愚者に知を授けることであ…こほん、えー、分かったことであるか…」

無言でビシュッ！ビシュッ！っと風切り音が響くほどのデコピン…の素振りを始める女王に、顔を青くしたミリルゥトゥは顎に手を当てて考え込む

「…とりあえず、再生された主人公は自分の意志は持っているようである。しかし、自分の意志で魔王に協力するようなスタンスを取っている…いや、取らされている可能性が高い。とはいえ魔物型やこの間の王龍のようなモンスターは、理性が吹っ飛ぶようであるな。まぁモンスターは本能のままに戦った方が強い部分もある故なのかもしれぬのであるが。

そしてディーは魔王よりも強い…というには語弊があるか。魔王の行う攻撃よりも破壊力の高い攻撃をもっているが、使いたがらないようであるな。ディーが戦場に出たのは一度だけであるが、敵と相対しようとはしていない。近接戦を避ける傾向にあるということか？恐らく余りにも威力が高いために自分を巻き込む可能性があるからだろう

あと確認しただけで１１８種類の主人公を自由に手駒に出来るようであり、【魔王城】は５階層のダンジョン構造。その中を『四天王』を除いた１１５種類の主人公が警備警戒しているようだ

ちなみに『四天王』とは【魔王】の手駒の中でも特に優秀な主人公三名及びディーを含めた４人で構成されており、それぞれ実力が低い順に１階層から４階層まで門番をしている。【魔王】自身は５階層の玉座の間で待っているようである。一応オカマックスはこいつら全員を倒したが、恐らく入れ替えがあるだろうな

あと２日前にオカマックスが来て魔王城に突撃かましてったのである。で死んだ。確実に死んだのを確認したのである」

流れるように紡がれる情報の数々。まるで攻略本や設定資料集でも読み上げるかのような気軽さで吐かれる情報の数々に、ナルクトールが「あ、あれ…？私用なしです…？」と頬をひきつらせ、リトマスが「…アカシックレコードより余程役に立ちますねぇ…」と遠い目をした

途端にふて腐れていたミリルゥトゥの顔にキラキラした笑顔が浮かぶ。彼女は勢いよく立ち上がると、ノートパソコンのような機材と、丸い球体にレンズとプロペラを付けたような、奇妙な機械を取り出した

「そぉーであろうそぉーであろう！！情報こそ神！情報こそが唯一絶対無二の宝具！引きこもりの我輩がディーへの愛を押さえることが出来なかったがゆーえーにィ開発した本日ご紹介する商品はこっちらぁぁぁあんっ！！名付けて観察用機械『その目誰の目俺の目鷹の目』！！太陽光を吸収して魔力に変換後バッテリーに貯蓄する

永久期間の録画装置からこっちの受信機にリアルタイム受信録画可能！シャイな貴方のために録画装置は光学迷彩搭載の完全消音タイプ！これさえあれば気になるあの娘のいけない秘密に弱みに痴態をばっちりゲット！なんと今注文していただければ同じモノがもう一つ！これだけついてお値段驚き４６４９万ゲェーイルゥ！！これだけあればもうなにも怖くない！マミるかぁ魔王！！」

一切の口を挟む隙すら許さず言い切ったミリルゥトゥ。あまりの勢いとテンションについて行くことはおろか理解することも出来なかった皆。唯一、それなりに長いつきあいで慣れているファルガナは溜め息を吐きながら右手を「やったった！」と言わんばかりの満足げな顔をしているミリルゥトゥの額に向け

「やかましいわ」

「ヘヴン状態っ！」

指を弾いた。パコォン！とおよそデコピンで鳴るとは思えない音。まるで銃で撃たれたかのように体全体を傾げ、ゆっくりと倒れるミリルゥトゥ

「ま、あんたがディーのストーカーだったお陰でその情報が手に入ったんだし…まあいいわ」

ぱんぱんっ、と手を叩きながら倒れ伏して「我輩の耐久力は団子虫程度…。いまので我輩のすんばらしくブリリアントスーパーな灰色の脳細胞が億は死んだのであーるぅ…」とかすんすん泣いてるミリルゥトゥの背中を具足を付けたままの足でがしゃん、と踏みつける女王

「ぐぇ?!や、やめ…このままでは我輩がど根性エルフかっこ耳なしかっことじ左矢印超美人まる。的なことになってしま…も、モツが出るであーばばばばば」

仰向けのままじたばたと暴れるミリルゥトゥ。…仲良いのかなぁ?なんとなく口を挟むタイミングが無くって黙ってたけれど、流石に見かねたクロイワが口を挟む

「ファルガナさん、あんま遊んでる暇はないんじゃないですか?」

クロイワに注意されたのが気に入らなかったのか、女王は眉間に皺を寄せながらミリルゥトゥの上から足をどける。慌てて起き上がったミリルゥトゥが肩で息をしながらクロイワの背中に隠れ、涙目でぶつぶつと恨み言を呟いてるけど、全員スルーした

「…そうね。じゃあ、リトマス。あんたが指揮を取りなさい」

「…我でございますか?」

ぱちくり、と目を瞬かせるリトマスに深く頷く女王

「お世辞にも私様は人を使うのが上手いとは言えないもの。そういう細々しいことは下っ端の仕事よ。がんばんなさい」

「貴様…その大言ばかり嘯く穴を使い物にならなくしてやろうか…」

ゆらゆらと熱気と共に怒気を放つレームシルクを「まぁまぁ」と宥めすかし、リトマスは女王に問う

「それは貴女様も我の指示に従う…と考えてよろしいですか?」

「ええ。かまわないわ」

何でもないことのようにあっさりと首を縦に振るファルガナに、くくくっ、と軽く喉の奥で笑うリトマス。彼は女王に恭しく礼をし、俺達に向き直る

「そういうわけで暫定的な指揮官をさせていただくリトマスでございます。簡単ながら作戦を立てさせて頂きますので、よろしければ皆さんが出来ること、出来ないことを教えてください」

主人公たちから軽く自身の能力の説明を受けたリトマスは、少し考えてから地面に杖で陣形を書いていく

「正直に言えば足手まといが多すぎる、というのが現状でございますね」

その言葉に無言で視線を逸らすケイニーとナルクトール。俺も逸らしそうになったけど、どうにか堪える

「置いていく、という選択肢は取れないのでございますか？」

「却下よ。置いていくってことは戦闘能力がないってことなのよ？戦闘系の主人公が全員魔王退治に向かう、なんてでっかい隙、大人数の手駒を持つ魔王が見逃すとは思えないわ。私様はこれ以上このくだらない戦いで人死を出すなんてごめんよ」

「…成る程。では、死に物狂いで付いて来てください。よろしいですか？ケイニーさま、ナルクトールさま」

にこり、と有無を言わせない笑顔で問い掛けるリトマスに、こくこくと青い顔で頷く2人。俺も他人事じゃないだけに、ごくりと生唾を飲む

「基本的に実際に戦うのはファルガナ女王とレームシルクさま、そしてクロイワさまに我の4人で行きましょう。それ以外のメンバーで非戦闘員を守る構成で行きましょう。どうせファルガナさまがヤられるような敵が出てきたら我らでは太刀打ち出来ないはずですし」

けろっとした表情で言うけど、冗談じゃない。本当に洒落にもならない事態だろ、それ。俺のほかにも少なからずそう思ってる人がいたのか、リトマスは俺達の表情を見て、誤魔化すようにハハハ、と笑う

「怪我をしたらすぐにレティーシアさまに回復して貰うようにいたしましょう。特にファルガナさまは小さなかすり傷でも回復してください。レームシルクさまはそのフォロー。クロイワさま好きに動いてください。主人公補正持ちはアホな行動を取ろうとプラスに転ぶはずですので」

「…なんかあんた俺のこと馬鹿にしてないか？」

「さあ？どうでございましょう」

じと目で睨むクロイワと笑顔で受け流す

「とにかく、これで行きましょう。頼りにしていますよ、レームシルクさま。ファルガナさま」

「…はい。この身に代えても魔王を討ちます」

どこか心ここにあらずというか…なんだか妙に考え込んでいる様子のレームシルクが頷き、ファルガナはそれを笑い飛ばす

「この私様がいるんだから何一つ心配はいらないわ。さぁ、采配は任したわよ。あんたがやりなさい」

その言葉を受け、リトマスは笑う

そして、一同の顔を見回し、真剣な表情で叫ぶ

「――――全軍進撃！魔王を討つ！！」

『――――応っ！！』

最後の戦いが、幕を開けた

51、合流（後書き）

ちなみに前書きの星ちゃんストーリーは本隊（ファルガナチーム）の話より二日前デスヨ？

52、絶望の沼→歓迎（前書き）

「はぁー…っ…はぁー…っ…」

荒い息を吐きながら、足を引きずるようにして歩く伸一

――『絶望の沼』にはモンスターはいなかった。だが、一歩『魔王城』の中に足を踏み入れたが最後。複数の再生主人公や高レベルのモンスターに襲われ、既に伸一は満身創痍だった

それでも、伸一は『門』に手をかける。敵として現れた主人公から奪った長刀を杖代わりに、霞む視界を気力で保ちながら彼は進む

「こんなところで…死ねないのよ…」

やらなきゃならないことが、あるから

『彼』を止めなきゃいけないから

『門』を押し開く。途端に溢れる殺気に、伸一はのろのろと戦闘態勢に移行する。ゆっくりと構えられた長刀の先端が、ふらふらと頼りなく揺れる

「ようこそ主人公。私は真・魔王四天王の1人、『ビーストマスター』のアーザル。一階層の門番にしてこの魔王城の全モンスターの統括者」

現れたのは褐色の肌に黒髪、銀色に輝く瞳を持つ、露出度の高い衣装――というのもおこがましい、胸元と腰に獣の革を巻きつけただけの女。そしてその隣に立つ巨大龍――王竜と、部屋の壁にほとんど同化した巨大な黄色いスライム

「私が与えられたチートは手懐けたモンスター、亜人の能力の強化。この力を持っていたが故に、私は人間の集落に住めず、迫害によって命を落とした。故に私は、人間が嫌いだ。よって私は人間は殺す。だから問おう」

女――アーザルは傍らに佇む王竜の長い胴体を撫でながら、何の感情も持たない視線で伸一を見つめ、

「お前は人間なのか」

簡潔な問い。わざわざ問うまでもないその問いに、人間嫌いを自称しているのにどこか人間くさいアーザルに苦笑いし、伸一は嘘を吐くまでもなく、頷いた

「ええ、あたしは人間よ、」

「そうか、ならば死ね」

52、絶望の沼→歓迎

走る、走る、走る。獣の匂いと息遣い、焼け焦げたタンパク質の異臭に濃厚な血の香りが混ざって鼻が馬鹿になる。敵が放つ苦痛の息遣いが、叫びが、耳にこびり付く。まだ人間の姿形をした敵と戦ったわけでもないのに、ガンガンと頭の中で警鐘がなる

絶望の沼に入ってもうどれくらい経っただろうか。それすらも分からない。とにかく手と足と、そして口を動かす

「レティーシアさま！ファルガナさまを回復と強化！」

「はいっ！！『無常の癒やしを！キュアヒール！鋼の巨人よ！エンチャント：ＡＴＫっ！！』」

「クロイワさま先行しすぎです！下がって！ファルガナさま炎でかいのお願いします！レームシルクさまは火が返ってこないように制御！ミリルゥトゥさまはふらふらしない！」

「すまん！分かった！」「行くわよ…っ！『レーヴァティン！』」「馬鹿力が…あわせろ！」「だ、だが貴重なモンスターの死体が…！」

――最初ミリルゥトゥの話では『絶望の沼』内には主人公はいない、と言われていた

確かに主人公はいなかったが、その代わりと言わんばかりに極度の興奮状態に陥った大量のモンスターが絶望の沼の中を闊歩していた

のだ

そのほとんどは俺とヒカルさんだけでも倒せるような大したことはないモンスターばかりだったが、　こちらのパーティーの中には普通の女の子に過ぎないナルクトールとケイニーがいる。少し隙を見せただけでそれが彼女たちの致命傷になりかねない。そんな危惧感から、出会うモンスター全てを討伐せざるを得ない状況に陥ってしまった

「くそっ、流石に数が多い…我もでかいの撃ちます！リオナアハトさま！肉壁を！」

「りょーかい。でも言い方ってもんがあんでね？」

文字通り人一人隠れるサイズの肉の壁――表面で大小様々な牙を備えた口がガチガチ言ってるが――となってモンスターとリトマスの間に入るリオナアハト。その表面に突進してきたサイのようなモンスターががりがりと食い尽くされ、リトマスが唱えた風の刃が森の木々とモンスターを上下に分断していく

「うーむ、これは予想外であるな。ついぞ二日前に我輩がオカマックスがこの森に入ったときはモンスターなんかいなかったのであーるが…？あ、ちなみにこの触手は森の中で拾った戦利品であーる。魔法とか吸収するようなので多分これで防具作れば最上級の品が作れるはずである。あと肌触り気持ちいいのダ！」

「んなこと言ってる場合ですかーい！いや凄い突っ込みたかったですけど！なんでセルフ触手プレイしてんのか気になってましたけど！三時の方向…いやもう四方八方からクアレトエイプの群れ、目測４０及び様々なモンスターの混合軍が進軍！魔王城らしき建造物ま

であと距離１０００！」

「……夢よこれ。だってこんなあはは…いやもう…勝てる訳ないじゃない…結局戦いなんて数なんだから…」

獣化したヒカルさんに跨がった平均以下の戦闘力しかない２人と、ふわふわと現実感のない動きで宙に浮かぶでっかい十字架に乗ったミリルゥトゥは放置して、弓に矢をつがえて撃ちまくる。回復魔法をこれからたくさん使わないといけないかもしれないし、魔法はあまり使えない。魔力を弾にして放つミストラルも使用を控えた方がいいだろう。そんな考えから使っていた弓と矢だけど、久しく使っていなかったせいか既にぷるぷると二の腕が震える。弓がこんなに重いなんて、今まで思ったことはなかったのに

「聞きましたか!?ショーゼンさまにガナルさま！ヒカルさま及びお嬢さん方を全力で護衛！一気に魔王城へつっこみます！」

言うや否や走り出すリトマス。疲れた身体に鞭打って足を動かし、必死でヒカルさんの毛皮にしがみつく２人に視線を向ける――と、ひょいっと擬音が付きそうな形で、ショーゼンさんの肩に担がれた

「大丈夫だか?まだオラたちは余裕あんべ、あんま飛ばしすぎんでねーど」

「…あり、がとう…ございます…」

やっぱり、体力がないのは俺の弱点だな…。そのままショーゼンさんの肩に担がれる形で１０００…一キロ近い距離を駆け抜ける

「見ィえたぁ！！あの悪趣味かつ美的センス皆無な真っ黒いサクラ

ダファミリアが魔王城であーる！」

――確かに、見えた

まだまだ距離があるというのに、空を突かんばかりの巨大な塔が何本もある禍々しい城が、不気味な細い木々の隙間から見える。いや、むしろあの巨大な建物が何故ここまで近づかなければ見えなかったのかが不思議なくらいだ

「なるほど――入り口見つけたわ。ぶち抜くわよ！『ミョルニール』っ！」

体力ない俺はともかく、他の主人公たちは鍛え方が違う。既に何百っていう数のモンスターを葬むりながら全く勢いを衰えさせることなく、女王は長剣を柄の短い鎚に変化させ――豪華な作りの扉をぶち抜き、俺達はその中に飛び込んで――

瞬、間

じゃこん、と音を立てて。無数の銃口が俺達を狙い

ひゅっ――と息を呑む音。銃を構えた１００人以上の同じ顔がにやりと笑い――

業っ！と焔が室内にいた全てを薙ぎ払った

「馬鹿め。私が助けなければ全員死んでいたぞ」

右手の肘から先を焔に変えたレームシルクが、傲岸不遜に胸を張る。罰の悪そうな顔をする女王。部屋の全て…そこにいた男たちは勿論、

絨毯や絵画などもまとめて焼き払ったレームシルクは、右手を直ぐに元の形に戻した

「あ…モンスターが引いてく…」

言われて扉の役目を果たさなくなった穴から外をみれば、涎をだらだらとこぼし、血走った目でこっちを見つめる１０００は超えそうなモンスターの群れが、じっと口惜しそうにこっちを見つめている

「どうやら魔王城には近付けないみたいね。…なら少し休憩できるかしら？」

ちらり、と女王はヒカルさんの上でへばっている女の子2人を見る。意外と動物に乗っているだけで疲れるモノだ。まして鞍や手綱もない虎に、結構な時間乗っていたのだから、疲れても仕方ない

「…いえ、進みましょう」

しかし、リトマスは首を振る。目で「説明しろ」と語る女王に、リトマスは神妙な顔で地面を蹴る

「先ほどの銃を構えていた男たち――その全員が、【魔王】でございました。もし、この城にいるのが先程と同じ偽物なら…」

『その心配はないぜ』

ばっ！と全員が一斉に振り向き、各々戦闘態勢を取る

全力で警戒する俺達をあざ笑うように、そいつは現れた

ぴちょん、ぴちょん、と上階から落ちてくる水滴。黒いコールタールのようなそれは床に沈殿し、集まり、一つの形を取る

『ここにいるのは正真正銘本物の【魔王】阿部孝治だ。全身全霊全力でお前ら主人公をぶっ潰す気満々のな』

色こそ違うけど、その姿を俺は知っていた

「…ユージロー？」

『お？知り合い？へぇ…ちょっと意外だわ』

ぷるぷると震えながら言葉を発する黒いユージロー。だけどぞくぞくと背筋に走るこの感覚は…

「【魔王】、随分思い切ったイメチェンね？似合ってるわよ、雑魚っぽくて」

そう、【魔王】のそれだった

『ハハハ、そう言うなよ。こっちはお約束を守るのに大変なんだ。お前らちっと来るの早いんだもん。あと1日遅れてくれりゃスタトル侵攻作戦の準備も整ったってのに』

「ならナイスタイミングでございましたね。あなたの邪魔を出来たなら万々歳でございます」

『ああ、気にすんな気にすんな。どうせお前ら殺したら明日やれるしな。っつうか、他の主人公集めてこなかったのか？』

黙り込む女王。他の主人公…ということは、未だに【魔王】の手に掛かってない主人公がいるってことか…。…そういや、あの変身ヒーローみたいな人はまだ生きてるのかな?生きてるならピンチの時とか助けてくれそうだけど…

『おいおい、主人公はちゃんと仲間集めて来いよな。じゃないと…』

びちゃっ、と一際大きい音。黒い粘液が塊で落ちてきたらしい。何事かと全員がそれに注目すれば――

『独りで先走った、伸一みたいになっちまうぜ?』

黒い粘液が流れ落ちた中から現れた、どこか見覚えのある右手『だけ』――俺達の知り合いの、『誰か』の手首――に思考が停止する

「上よっ!!」

声に吊られて首を跳ね上げる。無駄に高い天井一杯に広がる、波打つ粘液――恐らくそれは、ユージローと同種の、強酸性のスライム。それが、ゆっくりと俺たちに向かって降って――

「跳びなさい!」

反射的に両足に力を込め、思い切り前に跳ぶ。ごろごろと石造りの床を転がり後ろを見てみれば、入ってきた扉が黒い粘液によって塞がれていた

『さぁ、後戻りは出来ねぇぜ』

ビシビシ…と小さく音を立てて凍りつく黒い壁。小さくファルガナ

女王の舌打ちが聞こえた

『ああ、それと安心しろよ。すぐに皆殺しに――いや、皆仲良くあの世に送ってやるから、寂しくなんかないぜ？』

けらけらと愉快そうに笑う魔王。…こいつがユージローと同じなら、どっかに核があるはず…

『早いとこ四天王抜いて俺んとこまで来てくれよ。もう退屈でさあ』

「あら、そうなの？なら喜びなさい。冥土の土産に飛びきり楽しく愉快に惨殺してあげるわ」

言いながら長剣を黄金の槍に変え、無造作に投げる女王。緩やかに放物線を描いて飛んだ黄金の槍は、しかし急激な方向転換と加速を繰り返し、黒い粘液の中に飛び込んだ

『ありゃ、ユージロー・マノメ死亡ってか？見せ場すらなく他の主人公に殺されるとか哀れだなあオイ』

途端に魔王だったスライムが、でろりと溶ける。床にひたすらに広がる黒い粘液と、天井に刺さる黄金の槍。その穂先には、どこかで見たことのあるピンク色の球体が刺さっていた

けれど背後で扉だった吹き抜けを塞ぐ氷のような壁は溶けることはなく、壁でもぶち破らなきゃ魔王城から逃げることは難しそうだ

「…ちっ、面倒な…」

「だが、行くしかないでしょう」

２人の王の言葉に俺たち主人公は頷き、目前の扉に向かって足を踏み出した

今の彼女は、とても小さい

どんなに手足を伸ばしても親指の爪の上からはみ出ないくらい小さい。元のサイズが１０ｍ近いサイズだけに、この縮小化は彼女にとっても凄く『痛い』

せっかく大きくなっても、またこんなサイズにされるかもしれない。と考えると復讐なんてものはやめた方がいい。あんな馬鹿げた力を持つ【魔王】には関わらない方がいい

だが…だからといって、許せるものではない

とても痛かったし、とても悲しいし、とても…憎い

大事なヒトも奪われた

住んでた家も奪われた

だから復讐する

主人公？魔王？知ったことではない。ただ憎いから舐り殺す。体中の水分を抜き取って殺す

そのためには、大きくならないといけない

元の身体は肉片になってしまったし、美味しそうな女に奪われてしまった。どうせ使えなかったし、まあそれは構わない

はて、それならばどうやって大きくなろう

そんな風に悩んでいた時に

彼女の目の前に、大量の溢れんばかりの死体が転がっていた

焼け焦げていたり、上下で真っ二つだったりするけれど

ニンゲンのアレより美味しくはなさそうだけれども

食べられないことはない

小さな白い蜘蛛のような彼女は、無数の触腕でモンスターの体液をすすり始めた

52、絶望の沼→歓迎（後書き）

なんで星ちゃんは絶望の沼でモンスターに襲われなかったのかって？

様式美

嘘です。詳しくは次回

53、真・四天王（前書き）

結果だけを言うのならば、伸一はアーザルとの戦いに勝利した

しかしその代償も大きく、伸一は右肘から先を失った

そして、まるでアーザルが倒されるのは予定調和だ。と言わんばかりにアーザルのコントロールを離れたモンスターたちが暴走しだした。魔王城の中だけに飽きたらず、絶望の沼にまで繰り出して暴れるモンスターたちに、内心で舌打ちする伸一。これだけのモンスターが無作為に暴れているとなれば、自分のあとで来るであろうファルガナたちに余計な負担がかかりかねない

しかし、暴れるモンスターのすべてを殺害するほどの人外染みた戦力などもっていない伸一は、後ろ髪を引かれながら歩を進める。二階層でも次々襲ってくる再生主人公と戦うことを極力避けながら、ひたすら『門』を探す。足の感覚がなくなり、出血で意識がぼんやりとしているのも、今はプラス要素だ。余計なことに気を取られなくて済んだ

「よく来たね、主人公。僕は四天王の――」

ニ階層はあらゆる自然現象を操る四天王だった。右目の光と引き替えに、その口腔にバレルをねじ込んだ

「やぁ、来たね、主人公。嬉しいことに」

３階層の四天王の能力は覚えていない。身体が勝手に動き、葬っていた。気が付けば全身が重い。ふと背中をみれば、たくさんの矢が、剣が、斧が、槍が突き刺さっているのに、ほとんど血が出てこなかった

４階層――だれもいなかった

好都合とばかりに最後のもんを突破した。次に襲ってくる敵は…と身構えた伸一

そんな彼を出迎えたのは、王座に悠然と座った【魔王】と、その傍らに佇む獣人の少女――ディーの姿だった

53、真・四天王

【魔王城】の1階層…様々なモンスターだけじゃなく、再生されたんだろう人間…「主人公」が混じる敵の群れに、長剣を片手に風のような速さで切り込んでいくファルガナ女王と、焔を伸縮自在の刃のように操りながら駆け抜けるレームシルク。うち漏らした敵も地味にクロイワとリトマスさんが刈るから、後方にいる俺達に被害はない

けれど――

首が舞う。腕が舞う。悲鳴が、苦鳴が、絶叫が響き、肉の焦げる臭いと音が、濃厚な血の臭い狭い空間を支配する。そんな空間に、非戦闘員の2人があてられてしまった

「いっそ開き直った方が楽なのですがねぇ」

からからと笑うリトマスを無言で睨む。顔色を悪くしたナルクトールの背中をさすっていたら、背中側からびちゃびちゃと水音が響く

「大丈夫だべ。オラ達が守るだよ。どうしてもキツかったら目ぇも耳も塞いどけ」

涙を流しながらえづくケイニーの背中をさするショーゼンと、申し訳程度に警戒して槍を構えるヒカルさん。…不味い、かな？

「ショーゼンさん、代わります。ケイニーは…」

「ああ、んだな。じゃあ任せるべ」

言ってショーゼンさんが離れたと同時に、ごろりと首が転がってくる。濁った瞳がケイニーを見つめ、ケイニーは顔を真っ青にして口元を抑える

「大丈夫。だから、落ち着いて。なんなら、本当に目ぇつぶっていいよ？ヒカルさんに乗ってもらえば大丈夫だから」

そう声をかければ、力無く首を振るケイニー。どうにか自分の足で立ち上がると、ふらふらと力無く歩き出す

「あた、し…こうしゃ…くれーじょう…だもの…。へいみ、うぷっ…んが、平然としてんのに…情けないとこ、みせらんない…」

「…うん。ありがとう」

ハンカチを取り出し、、ケイニーの吐瀉物の付いた口元を拭く。抵抗する気力もないのか、ケイニーはされるがままだ

「遅いわよ！ちゃんとついてきなさい！」

ファルガナ女王の怒声に全員が頷き、ゆっくりと駆け出す。１０人は横に並んで歩けそうな石造りの通路に引かれた真紅の絨毯、豪奢な飾りこそあれ、レンガを重ねたような壁が連なる魔王城は、どこかこの世界に来て初めて歩いたダンジョン…神の作った練習場を思い出させた

「レームシルクさま、フォローに回って！黒岩さまを回復！」

「あ、はい！」

言われて後衛から飛び出し、左腕から血を流すクロイワに回復魔法をかける。痛みに顔を歪めていたクロイワの表情が、途端に和らいだ

「くそっ、切りがないな…。中には光速移動なんてバカ能力持ってる奴までいるし、本当にファルガナさん頼りだぜ…」

ちくしょう…と小さく呻くクロイワ。流石に敵の数が多すぎて辟易しているらしい。目に見えて疲弊してるし、休ませた方がいいんじゃないかな…

「…お前とリトマスのお陰で後ろまでは来てないよ。ありがとう。疲れてるみたいだけど、援護は必要？武器の換えはいる？」

見れば、クロイワの持ってる両刃の片手剣…シャルロットさんに譲り受けたという騎士剣は、敵の血糊や刃こぼれで既にぼろぼろで、少し曲がってしまっている。クロイワもそれには気付いていたのか、顔を歪める

「援護は大丈夫だけど、剣がな…。換えがあるなら、くれ」

「うん。これでいける？インベントリ：スペルブレード」

取り出したレア度Ａの片刃片手剣。少し振って具合を確かめ、「…シャルロットのよりいいかもな」と軽く笑うクロイワ

「クロイワさま！いつまで遊んでいるんですか！」

リトマスの怒声にクロイワは身を竦め、「じゃあ行ってくる！」と

駆け出す。その背中に強化魔法をかけながら、リトマスの隣に立つ

「インベントリ：ＭＰポーション・赤。リトマス、魔力回復薬。使えるか分からないけど飲んでみて」

「…ええ、ありがたく。しかしこのままではジリ貧でございますね…」

女王とレームシルクが大体の敵は虐殺しているが、遅々として進まない歩みに削られる集中力。リトマスの表情に苦いモノが混じりはじめ――

ぴたり、と敵陣の真ん中でファルガナ女王が歩みを止めた

「何をしている貴様！気でも触れたか！」

レームシルクがファルガナ女王を咎めながら、１人で群がる敵を切り崩す。そんな中ファルガナ女王は、全身を返り血で真っ赤に染めながら――ぽつり、と呟いた

「飽きた」

――――――――思わず、敵、味方。人間の形をした者たちは、知性を持つ者は全員動きを止めた

「最後のダンジョンだから、お約束だから、敵の総攻撃とか、面倒くさそうなダンジョン攻略とか甘んじて受け入れてた…というか、受け入れるつもりだったけれど――――もう嫌」

どこか拗ねたような、子供っぽい口調。何事かと警戒する敵を一切

無視して、ファルガナ女王はじろりとナルクトールを睨む

「ナルクトール。魔王はどっち？大体でいいわ」

ファルガナ女王の底冷えする冷たい声。ナルクトールはただでさえ悪い顔色を土気色にして、「み、見えないでしゅううぅ…」とぷるぷる首を振る

しかし、その傍らで嬉々として死体を十字架の中に詰め込んでいたミリルゥトゥは、「たぶんあの辺であると思われ？まぁこのダンジョン内は空間が歪んでいるので確証はないが」と天井の一角を指差した

「そう、なら――」

ファルガナ女王の視線が、「そこ」に突き刺さる。まさか――と頭からサーッと血を下げる俺達。そしてファルガナ女王の意図に気付いた敵が「ソレ」をさせまいと殺到し――

「自分の身は自分で守りなさい！『ミョルニール』ッ！！」

長剣から巨大鎚に変化させた武器を、思いっきりぶん投げた

目にも留まらぬスピードで、衝撃波すら発生させながら飛ぶ巨大鎚。それは敵の軍勢を豆腐のように破壊し、天井を破壊し、その瓦礫を大量に降らしながら破砕音を響かせる

「ヒカルぅ！守るべぇ！」

「おう！！」

ヒカルさんに首根っこ掴まれて引き寄せられる。凄まじい音と共に天井が崩れ、右往左往。瓦礫を避ける度にずしんずしんと衝撃が走り、リアルな命の危険――しかも味方の暴挙が原因の――に血が下がる。当のファルガナ女王はといえばナルクトールとケイニーを片手にぴょんっぴょんっ、と降ってくる瓦礫を足場に上階に飛び上がる光景が視界の端に映る。あんた何考えてんだぁ！？

「ひ、ヒカ、ヒカルっさ！？こここれやばっ…」

「黙ってろ！舌ぁ噛むんじゃねぇぞ！！」

紙一重で瓦礫をかわしながら、　積み重なった瓦礫の上を駆け上がる。非戦闘員の2人はファルガナ女王が引き受けてくれたし、他はそれなりに出来る人ばっかりなので心配はしていない。小さくミリルゥトゥの悲鳴が聞こえた気がするが、殺しても死ななそうだから大丈夫だろう

「4階層までぶち抜いたから、早く昇ってきなさいっ！！」

「「…ッ！！」」

…色々言いたいことはあるけれど、一番てっとり早いのは事実だ。だから全員何とも言えない複雑な表情で唇を噛む。背中から再生主人公たちの声が聞こえたが、ガナルさんが投げたカードが透明な壁になり、ファルガナ女王が開けた巨大な穴を塞ぐ。――同時に俺を抱きかかえたヒカルさんの身体がふわりと浮く

「こいつは…」

ヒカルさんの鎧を太い足でがっしりと掴んだ、中型バイクくらいのサイズのでぶった鶏のような黄色い鳥。それが懸命に短い翼を動かし、降り注ぐ瓦礫の隙間を塗って上階を目指す

「……ラッキーバードを召喚した。飛べ、ば…早い…」

ガナルさんの言葉に視線を飛ばせば、ファルガナ女王以外のメンバー…レームシルク以外は全員が、黄色い鳥の足に捕まって瓦礫の隙間を縫って飛ぶ姿

「…少々危険な賭でしたが、成る程。これは楽でございますね。…マントが瓦礫に潰されてしまいましたが」

アハハ、と乾いた笑いを浮かべるリトマスの背中にマントはない。恐らくマントが瓦礫に挟まれて身動きが取れなくなり、慌てて外したんだろう。反対にクロイワは土埃で汚れているモノの、全くの無傷。ショーゼンさんは少し瓦礫で身体を打ったらしく、青あざを作っている。ファルガナ女王は…心配するだけ無駄かな

「ミリルゥトゥは…」

「ミリルトルならあの十字架に乗ってふわふわ上に行っただよ。心配いらね。それよりリオナアハトはどこだべ？」

「我が持っていますよ。噛まれたら困るので口を閉じていただいてるだけでございます」

「持ってるとか俺完全に荷物扱いな件。まぁ手荷物状態だから仕方ないね。あんたら口開くなって言われてるでしょー。うっかりリトちゃんの手ぇかじっちゃったらどうすんのよ」

杖を後ろ腰にくくりつけ、右手にリオナアハトを抱え、左手で鶏に捕まるリトマス。…ふと視線を下や周りに向ければ、1階層から4階層までを貫いた穴。そこに一本の管を通すように光のトンネルが出来ていて、そこに攻撃した主人公たちが反射された自分の攻撃で血反吐吐いてのたうち回る

「…これって」

「…罠カード。『聖・バリア　アクセラレータ』攻撃した者を無条件で殺害する。…ちっ！制限カードだからもう使えんぞ…」

苦々しげに吐き捨てるガナルさん。…こんな奥の手持ってたんだ。と驚いた。俺もヒカルさんも奥の手は用意しておいたけど、やっぱり皆同じ考えだったらしい

ともあれ、危機的状況だったにも関わらず、ずんぐりむっくりした鳥に運ばれる、というどこか緊張感の抜けるやり方ながらも1階から4階までのショートカットに成功した俺達

そんな俺たちを迎えたのは、更なる危機だった

「ようこそいらっしゃいました。全員揃ったみたいですし、自己紹介をさせて頂きましょう」

慇懃無礼に頭を下げる中年の男と、その周りに立つ複数の人影

「私は本来ならば1階層の門番。『ヒュプノマスター』。笹田次郎。そしてその部下、サーヴァント7体」

――眼鏡をかけた中年の男と、そいつを守るように立つ7人の「再生主人公」

「…2階層門番。『ファンタスティック』。リンフェース」

――学生服に酷似した黒い衣装を着た、体育座りでじっとファルガナ女王を睨む黒髪の少年

「…3階層。『ウィッチクラフト』リーデス…以下略」

――そっぽを向き、不機嫌なのを隠そうともせずに吐き捨てる魔女

「……4階層」

そして4人の中でも一線を隔すほどのプレッシャーを放つ、全身鎧の男

「…『ダークヒーロー』。アメン・ラー」

感情を見せない、腹の奥が底冷えするような重苦しい声に、ぞわりと肌が粟立った

「「「「我ら、【真・魔王四天王】。魔王様と戦いたくば、我々を超えて行け」」」」

53、真・四天王（後書き）

というわけで

Q、なんで星ちゃんモンスター襲われないん？

は

A、星ちゃんが独断専行しなかったらそもモンスターは魔王城の中にしか発生しない設定だったからよ♪

様式美なんです！！

くどくても同じネタの使い回しでもなんやかんやもっとスマートなやり方があっても様式美なんです！

54、開戦

ファルガナ女王の開けた大穴を挟んで対峙する俺たち主人公と『四天王』。一触即発の空気を破るように、眼鏡の中年は前に出る

「ははは、そこまで身構えないでください。私たちもこれがお仕事でしてねぇ。ちゃんと我々を倒せば何の問題もなく魔王様と戦えるようになっていますから、何の心配もいりませんよ？」

こちらの敵意を微塵も感じていないかのような朗らかな笑顔で言葉を紡ぐ中年。そんな彼の態度に苛立ちを感じたのか、ファルガナ女王の眉間に皺が寄った

「そう言われても安心できるものじゃないわね」

「そうでしょうねぇ。私が貴方方の立場だったらとてもではありませんが正気ではいられなかったでしょうしねぇ…。こう見えても小心者なんですよ、私。私が何故四天王に選ばれたのか未だに謎ですし」

はてさて？と薄ら笑いを浮かべながら首を傾げる中年。のらりくらりとした態度に、女王は小さく舌打ちした

「ああ、余りつまらない問答で時間を無駄にするのも貴女方にとっては由々しき問題でしょう？我々の進行も遅れてしまいますし…嗚呼、しかしこんな状況じゃあ戦おうにも不可能ですねぇ」

へらへらと笑う中年に不愉快そうに顔をしかめるリトマス。それに

気付いているのかいないのか中年は気さくに「リンフェース、お願いします」と少年に微笑みかける

少年はずっと睨みつけていた女王から視線を外すと、がじがじと爪を噛みながら中年を睨み付ける

「…なんだよそれ…なんでそこで僕なんだよ…。くそっ、意味わかんねぇ…お前のせいだ…。ちくしょう、なんだよ…なんでここで僕に話振るんだよ…なんで僕が注目されなきゃいけないんだよ…くそっ…」

「いいからやんなさい。あんたのチートが一番分かりやすいんだから」

ぶつぶつと恨みがましく中年を睨んでいた少年が、こつん、と魔女の杖で突つかれて、ようやく立ち上がる

「…分かったよ、やるよ。やればいいんだろ…。いつもそうだ…くそっ、皆で寄ってたかって僕を囲みやがって…。あの時もお前のせいで…くそっ…」

一歩前に出て、じっとりとした視線で女王を睨み続ける少年

…もしかして、ファルガナ女王の関係者なんだろうか?チラリと視線を向ければ、女王は首を傾げながら中空を見つめている。…仮に関係者だったとしても、女王がすぐには思い出せない程度の知人だったようだ

それはともかく、少年が割れた地面に手を翳し――

次の瞬間には、「分かりやすく」場面が変わっていた

闘技場、とでもいうのだろうか？白いつるつるした石で出来た半径１０ｍ程の円形のリングに、リングに登るための階段と通路。柵や囲いは無いが、円形のリングを囲むように深い堀がある

気が付けばリングに登るための細い通路に立たされていた事に驚愕する。それを行ったであろう少年は、先端がキラキラと輝くペンを片手に、じとっとした視線を俺たちに向ける

「…これ、チーム戦だから。人数は決めてないけど。リングに上がった者は相手を倒してもリングを降りることは出来ず、どちらかが全滅するまで終わらない。…あと、僕達『真・四天王』と戦った「主人公」は、【魔王】と戦えない…。これが【ルール】。ギブアップもないし抜け穴もないよ」

少年が陰気な声で告げた【ルール】。魔王側に有利なその条件に、静かに顔をしかめるリトマス

「面倒な…。つまりファルガナ女王を出して皆殺し、という訳にもいかないのでございますか…」

「それだけじゃねぇ。こっちの主力戦闘メンバーはアンタ、女王、黒岩の小僧に赤髪の嬢ちゃんだ。つまり、最悪奴らが全員自滅覚悟で主力を潰すつもりだったら…」

残りのメンバーだけじゃ、【魔王】は倒せない。…つまり、俺達は主力メンバーを温存しながら四天王を全員倒さなきゃいけないんだ…だとすると、戦えるのはショーゼンさんにガナルさん、次点でヒカルさんに俺。ミリルゥトゥにナルクトール、ケイニーは戦えないから…

「オラたちが頑張るしかねぇべな」

「…チッ！！」

顔を引き締めるショーゼンさんと、盛大に舌打ちしながらも戦闘準備を整えるガナルさん。…俺にも隠し玉があるから相性次第だけど1人くらいなら倒せるかも…

「では、我ら魔族チームが行きましょう」

『…は？』

あっけらかんと。空気を読まずに吐かれたリトマスの言葉に誰もが呆気にとられた

「ここまで来てしまえば指揮も糞もありません。ファルガナ女王は温存したい。ならばこそ、我らに露払いはお任せください。我にレームシルクさま、ガナルさまにリオナアハトさまでちょうど4対4でございますしね」

…とはいえ敵の内の1人は7人も手下がいるようですが、と笑うリトマス

女王はしばし目を閉じて考え込み――小さく、頷いた

「…そうね。任せるわ。ただし…」

「はい」

いつも通りの表情で、じっとリトマスを見つめる女王。リトマスは柔和な笑顔を浮かべたまま、どこか悟ったように頷いた

「死ぬんじゃないわよ」

「ええ、心得ております」

冗談めかした声で、片膝を付いて一礼。それを複雑そうな表情で見つめながら、しかし思い詰めたような真剣な表情で頷くレームシルク

「では、行きましょう。皆様」

リトマスの声に静かに頷くレームシルクとガナルさん。ガナルさんに抱えられたままのリオナアハトさんも、この時ばかりはガチガチと牙を鳴らすのをやめ、無数の口でにやりと笑う

そうして――4人の魔族と四天王が向かい合う。

四天王の後ろには赤いドレスのような衣装を着た…少女のような容姿の少年。

赤いコートに銀髪の浅黒い肌を持つ青年。
恐ろしいくらい整った容姿に2槍を構えた青年。
ローブを被った口元しか見えない女性。
そして紫の髪を持つ、不自然に目を閉じた美女に、
いつかのダンジョンで相対した半裸の巨人…ヘラクレス。
そして黒い肌に髑髏の仮面を被った男。
7人のサーヴァントと呼ばれた者たちがぼんやりと光を失った目で
控えている

「――おやおや、何をなさっていらっしゃるのですか?始まっていますよ?」

中年…ササダの嘲るような声を合図に――全員が一斉に動き出した

「――同調・開始」

赤コートが小さく口の中で何かを唱えるだけで地面に突き刺さる無数の剣。それをヘラクレスが掴み取り、力任せにレームシルクへ投げつける。同時に赤いドレスの男が異形の大剣を手にリトマスに向かって走り、紫髪の美女が鎖付きの杭をガナルさんに向けて放つ

そしてその後ろでローブの女がぶつぶつと呪文を唱え、二槍の騎士の槍はリトマスを狙う

そんな彼らを前に

リトマスは笑いながら、

「リオナアハトさま、GO」

ガナルさんに抱えられていたリオナアハトさんを、投げつけた
そしてレームシルクは無謀な突撃をかけるサーヴァントに呆れたように小さく肩を竦めながら…一枚の小さなカードを手に取った

「――独占・愛染カタストロフ」

炎が吹き出し、無数に投げつけられる剣を溶かし尽くす。それだけに収まらず、圧倒的な熱量は剣を作っていた赤コートを、そしてそれをひたすらに投げつけていた巨人を飲み込み――

「なっ!?」

炎に包まれ、焼死する巨人。しかしその身を焦がしながら、何でもないことのように剣を握り、レームシルクに接近。剛腕を振るう巨人に向けて、「チィッ…しぶとい!」と怒鳴りながら再び炎を向ける――が、今度はその髪の毛すら燃やせず、巨人は無反応でレームシルクとの距離を詰める

一方でリトマスが投げつけたリオナアハトさんは空中で巨大化。3m近い壁になり、槍兵の突き出した紅い槍をガリガリと削り食らう。槍兵は無言のまま左の黄槍で紅い槍を食らう口ごと周りの肉を削り取ると、バックステップで距離を取る。その身のこなしは驚くほど速く、正確だ

「いくら何でもいきなり過ぎる盾っぷりに全俺が落涙。ってかなんか傷が再生できないんだけどやばくない?「すてき!抱いて!」腐女子死ねっ!いまボケてる余裕とかねーからっ!」

言いながらもぐにゃりと身体を曲げ、槍兵に抉られた部分を食い尽

くすリオナアハト。そうするとどういうことか、再生できないと言ったはずの傷が綺麗さっぱり再生される

「…思い出しました。赤セイバーに、ｚｅｒｏランサーと5次のアーチャー、キャスター、ライダー、バーサーカー、そして真アサシンでございますか…。なんというか厨二乙、って感じでございますねぇ。しかも…」

ひとまず睨み合いに戻ったことで、杖を構えながらチラリと動かないで静観していた他の真・四天王に視線を向けるリトマス。言葉の意味はわからないが、どうやらリトマスは敵の…サーヴァントたちの知識があるらしい。いつの間にか握り込んでいた拳の力が、少しだけ緩む

「動くのはあなた様だけで他の四天王の方は動かないようでございますが…、もしかしていじめられているのでございますか？」

挑発じみたリトマスの問いかけに、しかしササダはうっすらと笑みで返す

「いえいえ。単純に真・四天王二人がかりでないと…ダークヒーローを止めておけない、というだけです」

「…なに？」

訝しむガナルを嘲笑うようにササダはただただ俯いたままぴくりとも動かないダークヒーローを指し示す

「あなた方の切り札がファルガナ女王陛下であるのと同じように、我々の切り札は彼…ダークヒーロー、アメン・ラーなのですよ。な

ので私はダークヒーローが全力で戦える状況を作らねばならないのです」

…その言葉を肯定するかのように、赤い弓兵と呼ばれた男は多種多様、日本刀に西洋剣、中華刀と様々な武器を作り出し、無造作に床に突き刺していく

「はったり…か…？」

ガナルさんは警戒しながらも、チラリとダークヒーローに視線を向けざるを得ない。最初の名乗り以降一言も発さず、ただただ仁王立ちしているダークヒーローの姿からはなにも感じない。だが、確かに奴の姿は、『嫌なもの』を連想させる

黒い全身スーツにやたらと刺々しい肩鎧と一体化した胸当て。肘から手首までを覆う流線型の籠手に、膝下までの長さのブーツ型の具足。頭は――鳥、だろうか。猛禽の顔を模した飾りで装飾されたフルフェイスメット

そして――腰に巻かれた、独特なデザインのベルト

…戦隊ヒーロー…あるいはライダー、か。1人であることを省みれば、ライダーの可能性が高い

つまり――ファルガナ女王と同じ、戦闘特化タイプのチート主人公の可能性があるんだ

どれくらい強いかは分からないけど、ライダーは基本的にキック力やらパンチ力が1トン以上あるのが普通だ。その秘められているだろうパワーへの予測が、リトマスたちに恐怖を与える

「行け貴様等！せめて時間を稼いでくるがいい！」

僅かに動きを鈍らせたリトマスたちとは正反対に、心底楽しそうに笑いながら、ササダは再び真っ正面から剣士、弓兵、美女、そしてヘラクレスと槍兵を走らせた

５４、開戦（後書き）

…いつも前書きとか後書きって何書いてましたっけ…？

55、決意（前書き）

…何故、俺はここにいる

…何故、俺は戦わねばならない

身体に渦巻く万能感。魔王に再生された主人公は、常にステータスがＭＡＸ…各自の『最強』の状態で再生される

しかしこの身は俺の意志では指一本動かず、ファンタスティックとウィッチクラフトの２人に拘束されている

目の前で数の暴力に脅かされる戦士たちがいる。手を貸したい。背中を合わせて戦い、魔王を、最後の敵を討つ。そんなシチュエーションに憧れる

ギチリ、と身体に食い込む不可視の拘束が力を増した。ファンタスティックの能力…『ギガロマニアックス』。彼が強くイメージした妄想を現実に変える力に捕らわれ、ウィッチクラフトの『時間魔法』によって自身の時間を止められた俺には、何も出来ない

…最も、例えこの四肢が自由に動いたとして――己に出来ることは、敵味方の区別なく力任せに暴れることに限られる

ヒュプノマスターの能力…『他心支配』。他人の思考を完全に奪い、己の手足のように扱うスキルによって奪われた肉体の所有権。ギリギリこうして思考するだけの力を残しているのは、『ヒーロー補正』のお陰だろう。これがなければ、ヒュプノマスターの手先となって

戦う騎士たちと同じように、ただただヒュプノマスターの操るだけの傀儡になっていたはずだ

…ヒーローが、聞いて呆れる。俺には、何も出来ない

弓兵が無造作に配置していく無数の剣群。狂戦士が無作為にそれを掴み、赤毛の少女に向けて振るう。少女はそれを鬱陶しそうに焼き払うモノの、炎を切り裂いて迫る剣士の刃に舌打ちしながら後退する。――余りにも凄まじい剣速に、床を軽々と砕く膂力に、少女の放つ炎がかき消されてしまう

魔術師が放つ光弾に異形の化け物がその身を穿たれ悲鳴を上げる。少年は化け物を魔術の雨から守るためにその盾となるが、槍兵の持つ紅き槍は少年の張った魔力の壁を軽々と切り裂きその身を狙う。間一髪化け物と体勢を入れ替え事なきを得るが、それの繰り返しで先に進まない

そして魔物使いの木人が相手取る騎乗兵が厄介だ。魔物使いが魔物を呼び出せば呼び出すほど、騎乗兵はそれを己の手勢へと加える。彼女の持つ鎖に捕らわれたモンスターが、次々木人の呼び出すモンスターを襲い、倒し、殺され、次のモンスターが捕まり、そして倒す。ひたすらにその繰り返し

…上手い。常に敵に対して相性のいい手駒をぶつけ、例え敵が仲間の援護をしようとしても、その度に暗殺者の能力――直接敵の心臓に攻撃する、という力の発現を敢えて見せつける。それに気付いた敵は仲間の援護よりも暗殺者の排除にかからねばならず、しかし相性の悪い敵に阻まれ、暗殺者にトドメを刺せない――戦いは膠着状態に陥っていた

…今は、まだ。

これは準備なのだ。弓兵がこのリング内の至る所に剣を配置し終わった時、俺が――そして魔王様が戦う準備が整う。そうすれば、天秤は傾き、恐らく――主人公たちは負ける

体の中で灼熱が渦巻いていく。熱く、悪に、漆黒に燃え上がる黒い太陽。魔王に荷担する堕ちたヒーロー。図らずも憧れたヒーローと同じ2つ名を持ちながら、しかしその立場は真逆。俺は『悪』を倒す『正義の味方』を葬らねばならない

…誰か。誰でも構わない

俺を――俺を、俺を――

55、決意

私の両手は貴方の剣。貴方の敵を貫きましょう
私の足は貴方の盾。貴方の不幸を防ぎましょう
私の背中は貴方の道。荒れ果てた道行きを整えましょう
私の耳は、目は、鼻は、口は、貴方のすべてを感じ取るためだけにあるのです
柔らかな声は私を癒やし、
その凛とした背は私を焦がし、
ふわりと香る貴方の香りは私を奮い立たせ
貴方が私の声に応えてくれるだけで、私は天にも昇る気持ちになる
――なのに
貴方を守ることすら出来はしない
貴方の声が聞こえない
貴方の体に触れられない
貴方に声が届かない

「リトさまぁ……」

かつてないほどに力ない声が口から漏れる。腕から放たれた炎は狂戦士を飲み込む――だが、一度既に私の炎で焼死した狂戦士はそれを意に介さず接近。私の胴体に向けて豪腕を振るう

――炎化すれば私に物理ダメージは与えられない。炎に腕を突っ込んでも敵が苦しむだけで、炎は変わらず燃え続ける――ただし、相手が常人ならば

「くっ…！」

一瞬だけの炎化。瞬く間に狂戦士の背後に発生し、狂戦士の体を盾に拳から発生する衝撃波――風圧から身を守る

余りにも強い風圧は炎を吹き消してしまう。狂戦士の拳には、炎化した私を散り散りにして鎮火させてしまえるだけの威力がある。だから私は、その攻撃をよけざるを得ない。そして――

「ぎゃっ！？」

赤き弓兵の放った、私は名も知らぬ宝具の剣――恐らくは、私のような肉体を持たぬモノを切り裂く力を持つ魔剣――が、私の脇腹をかすめた。肉の器からチリチリと漏れ出る鱗炎と、焼けた鉄を押し当てられたような痛みに悲鳴を上げる

「レームシルク！」

ケルドゥが珍しく焦ったような声を発しながら駆け寄って――来れ

ない。それよりも速く間に割り込む騎乗兵。彼女を乗せたケルドゥのモンスターが、召還者であるケルドゥに牙を剥く

それにいつものように舌打ちしながら更なる魔物を召喚するケルドゥ。しかし騎乗兵は新たに召喚された魔物の方が強いことに気付くや否や、鎖をその魔物に移し、モンスターを食い尽くす。元々は両方ケルドゥの魔物であるモンスターを倒されたことで、ケルドゥが苦痛の呻きを漏らしながら膝を付く

――突破口は、ある

しかしそれをやってしまえば――リトさまが、ケルドゥが、リオナアハトが…死んでしまう

元より私の能力は広域殲滅型だ。味方を巻き込まずに敵のみを倒す、などといった小技は苦手。だから私は全力を出せない

私には、何も出来ない

リトさまに命令されなければ、何も出来ない

だから私に命令してほしい。私に道を示してほしい。貴方の命令ならば、私は喜んでこの身を捧げる。死ねと言われれば今すぐにでも心臓を抉ろう

だが――リトさまは、命令をくれない

私にはリトさまが必要なのに――迫り来る狂戦士の一撃。思考に埋没していた私は、慌てて距離を取り――視界の端に、ガラスの心臓を異形の右手で握り潰さんとする暗殺者の姿が映った

何者不与

何物不要

己には何もいらない

ただ彼女の幸せがあればいい

しかし思ってしまうのだ

彼女の想い人が死ぬならば

彼女の支えが消えるのならば
その後釜に座っても、良いのではないだろうか。と
彼女は強く、苛烈で、激しく、赤々と燃える大炎で
脆く、弱く、非力な、蝋燭の灯火のように儚い
心の支えを失った彼女は瞬く間にその身を弱らせるだろう
ならばその彼女を支えることで、あるいは彼女の瞳に己が映ることを望んでもかまわないのではないだろうか
浅ましく、卑しく、卑劣で、下衆な考えだというのに、甘美なる誘惑として日々囁かれるその考えに、何度屈しそうになったことか
己の身を襲うライフポイントを削られた激痛が、その考えに拍車をかける
これだけ痛い思いをしたのだから、これだけ彼女を思っているのだから、これだけの理由があるのだから――己もまた、彼女との幸せを望んでもかまわないのだから。と
しかし、そんなことは許されない
もしも己の人生が物語ならば
もしも己の恋路が物語ならば

――己は、ただの当て馬で構わない

彼女が真に愛する者と幸せな結末を迎え、感動に涙し、しかし心底嬉しそうに笑いながら、憎き奴と口付けを交わす――そんな光景を忌々しく思いながら舌打ちする。そんな役割がこそ、この卑屈な己に相応しい

リトマスが、奴が死ぬならば。死ぬ運命だというならば。己がその運命を変えてみせよう。変えて魅せよう。

あの凡骨が、何よりも自分の、そしてレームシルクの幸せを望むように――

デッキからカードを引き抜く。何度モンスターを奪われただろう。何度命を削られただろう。生け贄が揃えられないのは、己にとって致命的だった。高火力のモンスターが召喚できないから、低レベルながらも強いモンスターは軒並み奪われるから。自分自身は大して強くない己だからこその苦戦

それでも、耐えていた甲斐はあった

待っていた。貴様を待っていた。今準備は整った。お膳立ては十分過ぎる

さぁ、クライマックスに相応しい。己の生き様を、死に様を目に焼き付けろ

――生け贄が召喚できないのならば――

「己は――」

最初から在る存在を、生け贄に捧げればいい――！！

充分過ぎる程に、幸せだった

我の二度目の人生には最初から台本が用意されていた。我に与えられた役割は、数多の魔族を救う『王』。平凡な一般人に過ぎない自分には、不相応な大役だ

それでも、演劇は既に始まっている。我はその役割を全うしたするとどうだろう。我を慕う者たちが増えていく。皆が我に好意を

向け、皆が我を頼り、皆が我に期待した

期待に応える方法は既に台本に描かれていた。それに従うだけで更に我は慕われた。うれしかった。楽しかった。ただの一般人に過ぎない我に、たくさんの民が我に笑顔を向けてくれる

――いつから、だったろうか

その笑顔を、虚構に感じてしまうようになったのは

本当なら一般人に過ぎない我を民たちが、腹心が慕うのは、台本通りに行動したからで

もしも我が、我の思うとおりに、台本を無視して行動していたら――我はただの魔族の一体でしかないまま、その1生涯を終えていたのかもしれない。そんなことを考えるようになってしまったのは

そんなネガティブな考えを振り払うように、台本通りに『王』の役割を演じ続けた。土地を肥やし、外敵を退け、民に豊かな暮らしをさせるためだけに戦った

しかし満たされない。期待が重い。『王』を演じなければ我は孤独に殺されてしまう。独りはいやだった。必死で『王』であればであるほどに、心がすり減っていく

だから我は――私は、今、とても嬉しい

満身創痍。全身に浅くない傷。幸いにして全ての攻撃は槍兵の紅い魔槍で受けたもの――治そうと思えば、治療できる

しかし、治療なんかいらない

最後の台本はこうだ

このまま戦い続け、全員が膠着状態からの劣勢に陥る。その際に暗殺者の手によって我の心臓は砕かれ、我は死ぬ間際、最後の力を振り絞って『敵』を倒し、そうして――想いは、全て仲間に託す。台本通りならば、最後まで仲間を思い、仲間を救うために奮闘した悲劇の王のまま、この役割を終えられる

レームシルクのことはガナルに任せた。心配はいらない。

今尚魔界の痩せた大地で貧しい生活を送る力無き民たちは、ファルガナ女王が保護してくれると言っていた

…もう、十分だろう？

我は、頑張っただろう？

さぁ、暗殺者よ。我が心臓を砕くといい。そうして我の、キング・オブ・リトマスの物語を終わらせろ。…そして、彼らを、この無知で無能な偽りの王から解放しろ

我に台本に逆らえる程の実力も、意志も、覚悟もない。だからこそ甘んじて受け入れよう。貴様の与える死を甘受しよう

我は「主人公」でありながら、「主人公」ではない。「主人公であるキング・リトマス」を演じる役者なのだから

視界の端に映るのは暗殺者。その宝具が硝子の心臓を作り上げる光

景が、やけにゆっくりと映る。それを理解していながら止めることはせず、ひたすらに己の内で魔力を高めていく

そして――暗殺者の右手が、硝子の心臓を握り潰す

――――ことは、無かった

「…え？」

リトマスの口から呆けたような声が漏れる。自分必殺する筈の暗殺者の右手は――背中に大量の剣を生やしたレームシルクのか細い手によって、しっかりと固定され――次の瞬間には、暗殺者の体ごと燃え尽きた

右手に小さな硝子の心臓を持ちながら、傷だらけで――レームシルクは、小さく呟いた

「良かった…まもれた…」

かくん、とレームシルクの膝が崩れ落ち――俯せに、愛おしそうに心臓を抱いて丸まるレームシルク。――その上に、巨人の影が重なる

巨人の腕が、振り上げられる。その手に握られた黄金の剣がレームシルクに振り下ろされ、彼女が死ぬ――そんな光景を幻視して、悲鳴を上げかけたリトマスの耳に――『彼』の声が届く

「己は――ケルドゥ・ガナルを、自分自身を生け贄に樹木龍デトゥスを召喚する」

――暴風が、吹き荒れた。

余りの強風に意識在る者は一斉に身を伏せ、意識を失ったレームシルクの細い身体が呆気なく吹き飛ばされる。だが、暴風の主は『尻尾』で優しくレームシルクの身体を捕まえると、静かにリトマスの隣に下ろす

――それは龍でありながら、巨大な樹だった

形は東洋の龍に近い。手も足もない細い蛇のような身体に獅子の鬣。けれどそれらを構成するのは木肌に葉茎。大木から職人が削りだしたような造形美

そんな龍が――ほんの一瞬の間に、自分が召喚された際の突風で動きを止めた騎乗兵を絞め殺し、鋭い牙でもって槍兵を食い殺す

そうして出来た隙にリオナアハトがローブの女と赤い剣士の男に噛みつき絡みつくのを確認してから、龍は大粒の翡翠のような瞳でじ

っとりとリトマスを睨み付けた

『――リトマス』

「…ガナルさま…なのですか…？」

信じられない――いや、信じたくない。そんな気持ちで、リトマスは目の前の龍に問い掛ける。答えはもう分かっているのに

案の定、龍はいつものごとく『チィッ…』と舌打ちしながら、その尾で弓兵を叩き潰し、そのまま尻尾で巨人を相手取る。相性の悪さえカバー出来れば、至極あっさりと戦況がひっくり返せるのは誰にだって分かっていた

だが、そんな少しだけ天秤が傾けば変わる戦いで追い詰められた――その理由は、酷く分かりやすい

『いつまで逃げる』

「……わ、我は…」

ただ、『王』が逃げていたから

あるいはリトマスが『台本』を無視していれば、最初から自分の死を覆そうと動いていれば――『こう』は、なっていなかったかもしれない。この結末は変わったかもしれない

しかし、それも後の祭り

『…己などでは、レームシルクの相手役は荷が重い』

「そんな…ことは…」

龍は見つめる。力無く首を振るリトマスを、ただじっと見下ろす

『貴様じゃなければ、駄目なんだ。…だから、頼む』

龍は一方的にそう言い捨て――『敵』に、残った敵を倒すために身体を滑らせる

残されたリトマスはただただ呆然とし――台本が…既にアカシックレコードが役に立たなくなったことを悟る

そして自分の傍らで血を流しながら気絶するレームシルクに気付くと…機械的にその手当てを始めた。魔力を送り込みながら大量に刺さった剣を抜き、自身の服を裂いて作った包帯で止血する

――そうして、笑った

もう止めるつもりだった

これで終わりのはずだった

――けれど

「託されてしまっては…仕方ありませんね…」

『親友』に。例え一方通行の友情だろうと、ずっと共に戦ってきた戦友に、惚れた女を任されてしまった

台本はもうない。『魔王』の出現と共に不確定になった未来に、自分の役割は書いていない。だが、それでも

友の想いに応えるためにも、我は――『私』は、王として生きよう

「…目が覚めましたよ。ガナルさま」

思えば、リトマスもまた死にたくはなかったのかもしれない

胸がとても軽やかで、清々しくすらある。長年かぶっていた王の仮面はすっかり顔に張り付いた。ならばこれもまた、私の素顔なのだろう。リトマスは憑き物が落ちたような顔で、『台本』を――未練たらしく腰に括り付けていた、役に立たないアカシックレコードに繋がる本を、投げ捨てた

「私は――これから生きようと思います」

力無く眠るレームシルクを片手で支えながら、リトマスは杖を振り上げる

「そのためにも…勝たせて頂きます」

爛々と輝く生気に満ちた瞳で、リトマスはうっすらと笑みを浮かべた

55、決意（後書き）

ちなみに炎化できるレムちゃんがなんでハリネズミになったかっていうと、暗殺者の腕を掴み取るために実体化していたからです

本家・メラメラの実のように自動炎化防御能力はなかったというオチ

ちなみにガナルさんは自分を生け贄にしちゃったからもう元の姿に戻れなかったり

あとなんでわざわざ樹木龍を待っていたかっていうと、相性の問題

生け贄になったあとでも「ケルドゥ・ガナル」の意識を保てそうなのがこいつくらいだっただけ。というか意識保てるか怪しかった件。

――さぁ！魔族チーム最大の見せ場は終わったぞう！

56、ヒーローズルール（前書き）

諸事情により感想返信が遅れております

ご容赦ください

56、ヒーローズルール

「ぐぁあああああっ！？」

――『本気』になった魔族たちに、瞬く間に蹂躙されたサーヴァントたち。12の命を持つ巨人はリトマスの放つ様々な魔法に命を奪われ、最後まで抵抗した剣士は必死の抵抗虚しくガナル…だった龍に丸呑みにされ、残る司令塔――ヒュプノマスターもまた、リオナアハトにその右腕を食いちぎられて悲鳴を上げた

ぼたぼだと赤黒い血を流す右腕を必死で抑えながら、顔面蒼白にしたヒュプノマスターは叫ぶ

「ま、ま、待ちなさい！我々にも段取りというものが――ぎゃあああっ！？」

しゃべる暇すら与えない。そんな雰囲気すら感じるリオナアハトの猛攻に、もんどり打って転がるヒュプノマスター。間一髪その牙の届かない範囲まで逃げ、残る真・四天王の後ろに隠れる

「も、も、も、もう十分でしょう！？私は充分に役目を果たしました！後は皆さんでお願いします！」

ダークヒーローの背後に隠れて怒鳴るヒュプノマスターの姿に呆れたように息を吐き、魔女はチラリとファンタスティックを見る

「…いいんじゃないですかぁ？僕に聞かれても知りませんって…」

やる気なさげに肩をすくめ、ぼそぼそと呟くように言葉を吐くファンタスティック。男二人の情けない様子に頭痛を堪えるように頭を抑える魔女

「…そうね。じゃあ、暴れなさい。『ダークヒーロー』」

――その言葉と共に、今まで黙して微動だにしなかったダークヒーローの身体がピクリと動く。そして、ゆっくりと周囲を確認するように首を回す

「ちっ…出来れば動かない間に殺しておきたかったのですが…」

『…後の祭りだ。油断するな。貴様が死ねばレームシルクが不幸になる』

心得ていますよ、と固い表情で苦笑し、ゆっくりと首を巡らせるダークヒーローを注意深く観察する

――ダークヒーローのバイザーで隠された瞳と、目が合い――

ドンッ！

と、鼓膜が破裂しかけるような轟音が鳴り響き――ダークヒーローの周りにいた三人の四天王の身体が、内側から弾け飛んだ

「――なっ！？」

仲間割れ！？混乱しかけるリトマス。しかし、ダークヒーローは全身を仲間の血で真っ赤に染めながら床を蹴る。再びの轟音と共に、太さ１ｍ近いガナルの身体が、削り取られる

『ぐぅ…！？敵味方関係なしかっ！？』

例え身体を半分に叩き斬られても、今のガナルの身体は樹。少々の欠損はカバー出来る。巨大をくねらせて動きを止めたダークヒーローの頭上に、尻尾を叩き付ける！

どごぉん！と凄まじい音。床を砕きダークヒーローの身体を地中に埋める衝撃に、勝利を確信するガナル。樹木龍は火を吹いたり飛んだりは出来ないが、その重量とパワー、生命力は普通のモンスターを凌駕する。その一撃をまともに受けたのだから、無傷でいられる訳がない――！！『やったか…？』と竜頭で笑うガナル

しかし――

『ば、馬鹿な…！？』

石で出来た床を砕き、巨大なクレーターを作りながらも――その中心で、平然と立つダークヒーロー。しかも、その右手はガナルの放った一撃を受け止めたことを示すかのように、高々と掲げられ――ガナルの尻尾を支えていた

『な、ならば…ぬぐっ！？』

がしり、と。ダークヒーローの腕がガナルの尾を掴む。めきめきと指が樹肌にめり込み――ぐいっ、と軽く引っ張られたかのような感触で――ガナルの２０ｍ近い巨体が、あっさりと宙を舞った

「……そんな理不尽な…」

思わず引きつった笑いを浮かべるリトマス。その目前でダークヒーローは――片手だけでガナルの巨体を浮かせ、そしてその勢いのままにリングを囲む不可視の壁に叩きつけた！

『ギッ…ガァ…ッ！？』

衝撃に、そして精神的なダメージに苦痛の声を漏らすガナル。しかしそれすら意に介さずに、ダークヒーローはキョロキョロと周りを見渡し――やがて、先程弓兵が無作為に作りまくった内の一本…床に突き刺さった刀を手に取ると、ぼそりと呟いた

「来い、ホルス」

その言葉に従うように――天が、割れた

避けた空間の内より飛んでくる漆黒の隼。隼はしばし舞うようにダークヒーローの周りを旋回し――ダークヒーローの掲げた刀に、止まる

変化は劇的。ドロリと溶けた隼の『黒』が、刀に染み込んでいく。刀は形を変え、姿を変える。広げた片翼のような黒い刃と、鳥を横から見たような唾、柄を持つ――燃え盛る大太刀へと

「…チャージアップ・ダーク・ホルスブレード」

ダークヒーローがベルトに手を当てる。目に見えない『何か』が剣へと収束する光景が、何故か分かる

「――ガナルさま！逃げなさい！私が相手だダークヒーロー！」

杖を構え、レームシルクの身体をリングの隅に横たえてから走る。
このままでガナルが死んでしまう。そんな焦燥感から後先考えずに
デタラメに魔法を放つ

――――ホルス、そしてアメン・ラー？

アメン神…長い時を経てエジプトの太陽神ラーと統合された大気の
神にして豊穣神。ならばその身体は文字通りアメン神の神風と考え
るのが道理――

ホルスとは？同じく長い時を経て太陽神ラーとか統合された天空と
太陽の神。その姿は隼の頭をした男性として――いや、もしあの剣
がホルス神ならば――

リトマスの魔法を全く意に介さず、文字通り風のような速さで駆け
るダークヒーロー。その姿をリトマスが捕らえる暇もなく

「ダーク・ホルススラッシュ」

漆黒の炎が、その身を四散させたガナルの身体を焼き尽くした

「ガナルさまぁあああああああああっ！！」

リトマスの慟哭の声が響く。あるいはその悲しみに満ちた絶叫に惹
かれたのか、今までリトマスを無視していたダークヒーローの顔が、
リトマスに向けられ――

「おいおい、俺たちのこと忘れてない？」

突如として爆発的に膨れ上がった肉の塊に、飲み込まれるダークヒ

ーロー

例え仲間を1人ヤられたとしても――相手が『ヒーロー』ならば、一度必殺技を使わせればしばらくのインターバルが必要になる――それを読んでいたリオナアハトの強襲に、なす術なく飲み込まれるダークヒーロー

ぽろりとその手から剣が落ち、サラサラと塵に返る。塵の中から飛び立つ黒い隼を尻目に、無数の口を持つ紫色の肉塊が、ダークヒーローを完全に飲み込み、その牙でもってスーツを削る

自分に物理ダメージは効果がない。如何に戦闘能力特化の主人公といえど、ファルガナのように様々な神器に変化するような武器もないヒーローならば――隙をつけば、倒せる。十分な確信と勝算を持ってリオナアハトはダークヒーローを喰らい尽くす

肉塊の中で暴れるダークヒーロー。その蹴りも拳打も肉に吸収され、効果を見せない。アメン・ラーの力は風の力を用いた加速。どんなに加速した攻撃を放っても肉塊はその衝撃を吸収してしまう

もしかしたら、このまま倒せるのではないか。リトマスが、リオナアハトがそんな予感を抱いた、その時

「…チェンジフォーム。ラー・フォルアクティ」

一度飛び立ったはずの隼が――踵を孵し、肉塊の中に入り込んだ

「マズっ…！？」

『炎』を放つ剣の核となった鳥がダークヒーローと重なる――その

意味を悟ったリオナアハトが慌ててダークヒーローから離れようとした瞬間――爆炎が、内側からリオナアハトの身体を焼き尽くした

【ギャアアアアアアアアアアアっ！！！】

無数の悲鳴が一斉に響く。爆炎はリオナアハトの身体を焼き尽くし、無数に突き刺さった剣をドロドロと溶かしながら、一片の欠片すら残さないとばかりにリングの中全てを焼き尽くす

「ぐっぅ…ぁあああああっ！！」

当然、リングの中にいたリトマスも炎の蹂躙を受ける。背後のレームシルクを守るためにも全力で防壁を張りながら、暴虐の炎をひたすらに耐える。膨大な熱量に限界以上の魔力を振り絞り、奥歯が砕けんばかりに歯を食いしばる

数分か、数秒か。実際には大した時間ではなかったのに、それでも一生分の気力を使い果たした――そんな脱力しきった顔で、荒い息を吐くリトマス

――焼け野原には、何も残っていない。リトマスとレームシルク以外は、全て焼かれ――ただただ黒い焼け焦げた跡を残すのみ

「リオナ、…アハト、さままで…」

意識が飛びそうになるのを必死でこらえながら、がくがくと震える膝を叱咤して、悠然と佇むダークヒーローと対峙するリトマス

回らない頭で必死に考える。ファルガナ女王を温存しながら、目の前の化け物を倒す手段を

……しかし、何も思い付かない。考えれば考えるほど思考は空回りし、ただただ同じところをぐるぐると回る

答えのない迷宮に陥ったリトマスを嘲るようにゆっくりと歩み寄るダークヒーロー

例え命懸けの特攻をしようが、自爆しようが目前に迫るダークヒーローを倒すことは出来ないだろう。自分より遥かに強かったはずのガナルやリオナアハトがあっさりと殺されてしまうほどの実力。よしんばレームシルクが無事で、一緒に戦えていたとしても――勝てるかどうかは分からない。

けれど、せっかく覚悟を決めたのに。王として生きると決めたのに――こんなところで終わりたくない

だから、生き残る手を考えろ。こいつに勝つ方法を考えろ――リトマスは霞み始めた視界に入る、ダークヒーローの姿に…思わず、笑ってしまった

「ああ…いっそ助けてくれる正義のヒーローでもいてくれれば…」

そんな夢物語のような、無い物ねだりなその言葉に

――応える影が、舞い降りた

「いるよ。ヒーローは、いる」

ふわり、と空から落ちてきた少女。重力に従って、その身を追いかけるように青い髪がベールの如く彼女の背中を覆う

「見知らぬ誰かが助けを求めるとき」

そうして立ち上がる、小さな影。まだ年若い、１０歳前後の幼い少女

「理不尽な力に、境遇に、涙する人がいるとき」

身に纏うは身体のラインがはっきりと出るボディ・スーツ。膝上まで覆う黄金色のブーツ。同色で近未来風の滑らかなグローブと、胸元を覆う真紅のボディ・アーマー

「手を差し伸べ、優しい言葉をかける人」

両耳の上から伸びる黄金色のレーダー・アンテナ。目元を覆う漆黒のバイザー。ぎしり、と音が鳴るほど握り締められた拳が、ダーク

ヒーローに向けられる

「それが、真のヒーローだ」

――風もないのにたなびく真紅のマフラーと、雲一つない青空のように輝く蒼髪

「だから止めるよ。――あなた（私のヒーロー）を。あなた（ヒーロー）じゃなくなっちゃった、今のあなたを」

びっ！とダークヒーローを指さしながら、彼女は告げる

「アナタの…私のヒーローの意志を継いだ――この、バステトαが」

――その光景を見ながら――リトマスは、意識を手放した

56、ヒーローズルール（後書き）

【ヒーロおおおおおお！】ヒーロー魔改造計画ラボ　死　【全俺が号泣】

９８５：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）４：４１　ＩＤ：ｔｅｎ１０７Ｘｆｃ

キターー（・∀・）ーーーー！！

９８６：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）４：４２　ＩＤ：ｈｂ１０８ｑＲｓ

キターー（・∀・）ーーーー！！

９８７：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（日）４：４２　ＩＤ：ｕｅｋ２ｈｏｑ０

キターー（・∀・）ーーーー！！
わっほいこれで勝つる！

９８８：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ　（

日）４：４２　ＩＤ：ｎ１７Ｘｃｕ４１

やったねヒーロリちゃん！ヒーロー増えるお！

９８９：ＧＯＤサイエンティスト：ｘｘｘｘｘ／ｘｘｘ／ｘｘ（日）４：４３　ＩＤ：ｕｅｋ２ｈｏｑ０

＜＜９８８

オイヤメロ

…ヒーロリちゃんだと洒落になんねぇだろうが…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1380t/

テンプレ勇者100人召喚

2011年12月26日01時37分発行